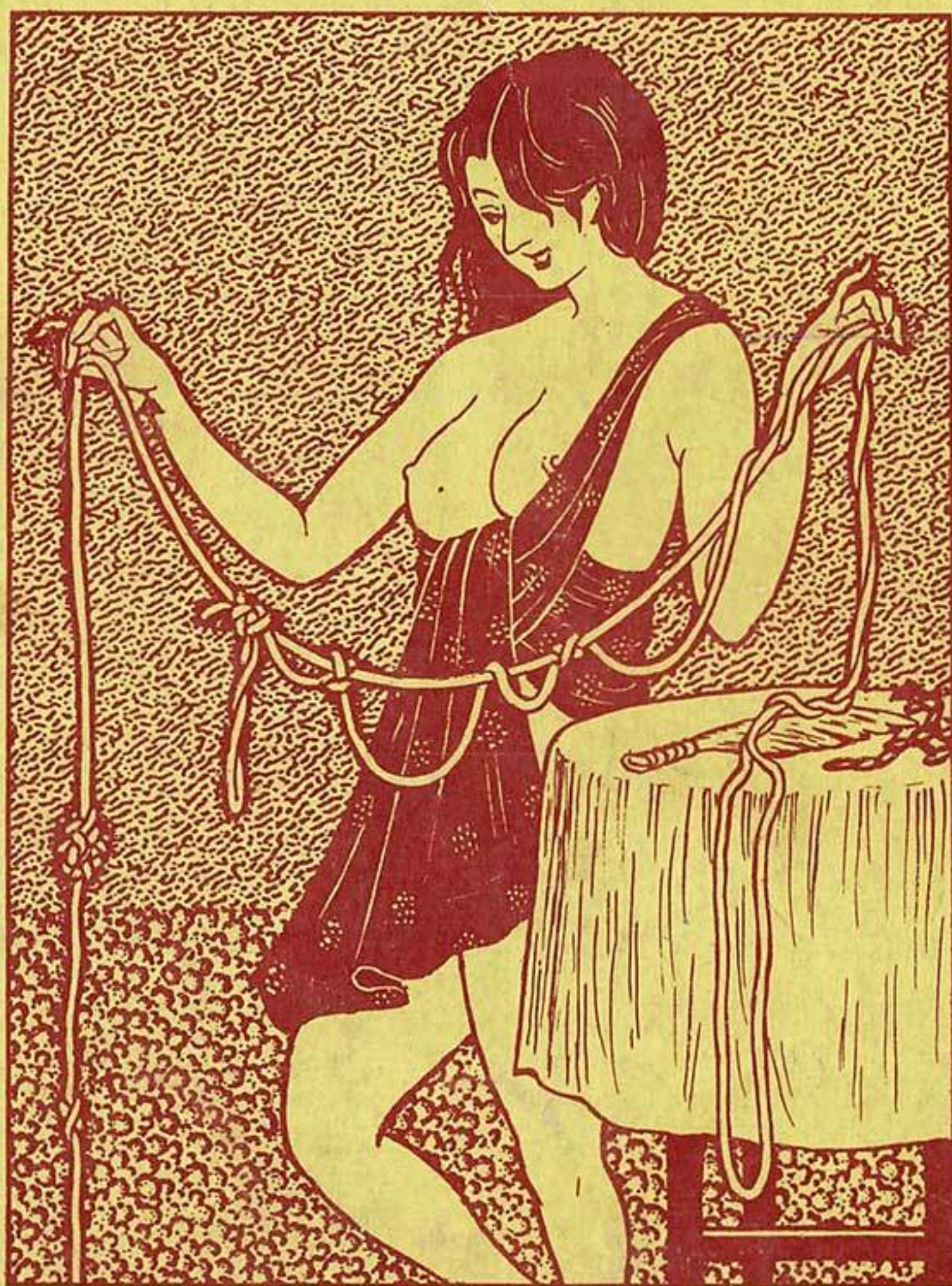


スラヴ譚奇

5月号



新しい風俗文献誌

1973・5

昭和四十八年 四月 二十日印刷 昭和四十七年 五月 一日発行 五月号 (第十七卷第五号) 毎月一回 一日発行 昭和三十一年四月 二十日第一種郵便物認可 昭和四十八年四月 二十日国政大綱特別編集第二〇号

極彩色のカラーで描く
五人のM女の美しき生態

可憐な近代の姿態の深田菊子。
愛情で人の心をとらぬ素直な子。
お艶な芸者福竜の松本たえ子。
妖艶な芸者福竜の松本たえ子。

五、大、鮮、ま、
人、型、明、ま、
の、ネ、に、の、
個、ガ、キ、生、
性、カ、ャ、々、
あ、ラ、ッ、し、
る、ー、い、肌、
M、に、し、色、
女、よ、ま、も、
た、つ、た、鮮、
ち、て、。、や、
の、極、自、か、
生、め、然、に、
態、て、の、プ、

リントの下に再現しました。彼女を
 厳しい緊縛と責めに喘ぐ彼女を
 どの吐息までも画面に盛り上げるほ
 どの肉迫的なカメラを縦横に駆使
 して、貴重な資料の作成に努めて
 貰いました。カメラは誌上の「カ

メラとペンのお馴染みの本鉄三氏です。白黒写真では物足りなく、是非この新作を発表する機会に貴方のコレクションの一端にお加え下さい。素晴し

い美しさの緊縛フットに必ずや御満足されることでしょう。

殊に福井桃子さんの臨月腹のカラー緊縛フットは珍稀な資料として必ずや稀少価値を発揮することと思ひます。カラープリントの士

さきはRサイズ(8cm×12cm)で、大型のコダックネガカラーからプリントしましたので鮮明度も発色も断然素晴らしいものです。五人のM女のいきいきとした責めのムードを、カラーにてお楽しみ下さい。

白肌と赤白斑ら紐

カラー三枚一組 一〇〇〇円
 深田 菊子 略号△ある▽
 思いきり両股をひらいて開陳す
 可憐で美しい女体も、縛られて
 こんなあどけない表情なのです。

カラー三枚一組 一〇〇〇円
 深田 菊子 略号△あり▽
 真白い肌をぐっとくびる斑ら紐
 の美しいコントラストは惨虐のな
 かに甘いムードを盛りあげる。

白肌と赤白斑ら紐

カラ一三枚一組 一〇〇〇円
福井桃子 略号△あや▽
各種の浣腸器を前にして大の字
に正面開股したマダムと後手高
手に縛られた。

う保
ナ子
マが
マ大
マ好
マし
しい
色な
彩縄
ので
中縛
のら
のれ
羞る
恥とい

カ
ラ
ー
三
枚
一
組

一
〇
〇
〇
円

略
号
△
あ
む
▽

笠
井
奈
保
子

す
ぐ
赤
面
す
る
恥
か
し
が
り
屋
の
奈
子

大
手札三枚一組
笠井奈保子
原色のな配色の中心に全裸の肌
腋毛もあらわに繰り展げられる
緊縛と羞恥のかもしだす饗宴。

カラ―三枚一組 一〇〇〇円
笠井奈保子 略号△あめ▽
縄にくびられた乳房の先のグミ
のような乳首もピンク色に染まり
全裸を晒して縛られた美麗な女体

カラー三枚組
 笠井奈保子
 噛まれた豆絞りの猿轡にうめ
 き思わず開股する女体の息づまる
 ような迫真的な色美しきシーン。

三松芸者福竜が全裸にひん剥かれて
れ、三種のM性を露呈してゆく。

カ
ラ
ー
三
枚
一
組
一
〇
〇
円

松
本
た
え
略
号
△
あ
い
▽

如
何
な
る
強
烈
な
責
め
に
も
耐
え
る

と
い
う
M
女
の
繊
細
な
裸
身
を
厳
重
に

縛
り
あ
げ
て
執
拗
に
い
た
ぶ
り
抜
く。

目覚福カ
 前に悟井ラ
 所には桃三
 それをて子校
 払いのい一
 のけばも絶
 けて躊出略
 縛踏産号
 する予△
 する定のあ
 だ。日がろ

福井 桃子 略号△あね▽
カラ―三枚―組 一〇〇〇円

カラ―三枚一組 一〇〇〇円
福井 桃子 略号△あれ▽
丸々と極めて美しい線を見せた
妊孕腹をツンと突き出させて非情
な縄は妊婦の裸身にからみつく。

手しいの出産福カラ
小いの間に井一
縛るに、際、三
りが更のの枚
が肌、の便一
を縄々々組
痛目た
めもる
つ、蛙
ける。腹
後、で
手、も
高、苦

カラ―二枚一組 八〇〇円
江口 淑子 略号△あお▽
強烈な海老責めと伸した後手を
逆に吊り上げた姿のなかに、あ
られもないM女の秘密があつた。

カラ―二枚一組 八〇〇円
江口・淑子 略号△あわ▽
厳しい縄目で裸身をさいなまれ
る苦痛も彼女にとつては、身のお
きどころない甘い喜悅であつた。

◎お申込みは前金にて、大阪市阿倍野郵便局私書箱第14号天星社へ略号記入の上、御注文下さい。送料当方負担にて急送いたします。

女性モデル求めます

本誌愛読の女性の方々へ

○本誌創刊以来二十数年、多くの女性愛読者の
数多くの告白の投稿やモデルの応募によって
献誌として、真摯な研究熱心な本誌読者の
方々の期待に応え、写真モデルとして活躍を
望まれる方には、どうか御遠慮なくお出まし
て御応募下さい。年齢、性別、国籍、遠近に
○本誌愛読の女性の方々は、お一人お一人、
に拘らず、お申し込み願ひ下さい。採用は、
拾万円、お申し込み願ひ下さい。採用は、
○本誌愛読の女性の方々は、お一人お一人、
に拘らず、お申し込み願ひ下さい。採用は、
は、お一人お一人、お申し込み願ひ下さい。採用は、
を、お一人お一人、お申し込み願ひ下さい。採用は、
提、お一人お一人、お申し込み願ひ下さい。採用は、
致、お一人お一人、お申し込み願ひ下さい。採用は、
幸、お一人お一人、お申し込み願ひ下さい。採用は、
○本誌愛読の女性の方々は、お一人お一人、
に拘らず、お申し込み願ひ下さい。採用は、
と、お一人お一人、お申し込み願ひ下さい。採用は、
表、お一人お一人、お申し込み願ひ下さい。採用は、
改、お一人お一人、お申し込み願ひ下さい。採用は、
介、お一人お一人、お申し込み願ひ下さい。採用は、
成、お一人お一人、お申し込み願ひ下さい。採用は、
個、お一人お一人、お申し込み願ひ下さい。採用は、
○本誌愛読の女性の方々は、お一人お一人、
に拘らず、お申し込み願ひ下さい。採用は、
重、お一人お一人、お申し込み願ひ下さい。採用は、
れ、お一人お一人、お申し込み願ひ下さい。採用は、
当、お一人お一人、お申し込み願ひ下さい。採用は、
。お一人お一人、お申し込み願ひ下さい。採用は、

大阪市住吉郵便局私書箱第41号
暁出版株式会社 編集部

◆本誌三百号突破記念◆

▽賞金△

入選作品	第一席	二十萬円	1篇
入選作品	第二席	十萬円	1篇
入選作品	第三席	五萬円	3篇
入選作品	第四席	三萬円	5篇
入選作品	第五席	二萬円	10篇
佳作優秀作品		一萬円	15篇
選外佳作作品		五千円	10篇

▽内容△

一、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ
奇譚、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ
そこ、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ
その、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ
の、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ
き、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ
よ、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ
一、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ
て、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ
咲、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ
い、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ
三、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ
実、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ
て、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ
一、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ
で、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ
す、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ
た、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ
し、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ
嗜、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ
崇、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ
色、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ
テ、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ
に、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ

百萬元懸賞原稿募集

▽規定△

一、形式は、小説、創作、読物などのフィク
ン、形式は、小説、創作、読物などのフィク
実、形式は、小説、創作、読物などのフィク
飲、形式は、小説、創作、読物などのフィク
れ、形式は、小説、創作、読物などのフィク
な、形式は、小説、創作、読物などのフィク
ッ、形式は、小説、創作、読物などのフィク
戻、形式は、小説、創作、読物などのフィク
れ、形式は、小説、創作、読物などのフィク
く、形式は、小説、創作、読物などのフィク
者、形式は、小説、創作、読物などのフィク
一、形式は、小説、創作、読物などのフィク
稿、形式は、小説、創作、読物などのフィク
三、形式は、小説、創作、読物などのフィク
入、形式は、小説、創作、読物などのフィク
掲、形式は、小説、創作、読物などのフィク
削、形式は、小説、創作、読物などのフィク
ま、形式は、小説、創作、読物などのフィク
故、形式は、小説、創作、読物などのフィク
一、形式は、小説、創作、読物などのフィク
と、形式は、小説、創作、読物などのフィク
下、形式は、小説、創作、読物などのフィク
住、形式は、小説、創作、読物などのフィク
応、形式は、小説、創作、読物などのフィク
性、形式は、小説、創作、読物などのフィク
と、形式は、小説、創作、読物などのフィク
箱、形式は、小説、創作、読物などのフィク
並、形式は、小説、創作、読物などのフィク

奇譚クラブ

昭和四十八年四月二十日印刷 昭和四十八年五月一日発行 五月号（第二十七巻第五号）毎月一回一日発行
昭和三十一年四月二十日 第三種郵便物認可 昭和四十二年四月二十一日 国鉄大局特別扱承認誌第二一〇号

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatukishuppan

Osaka Japan



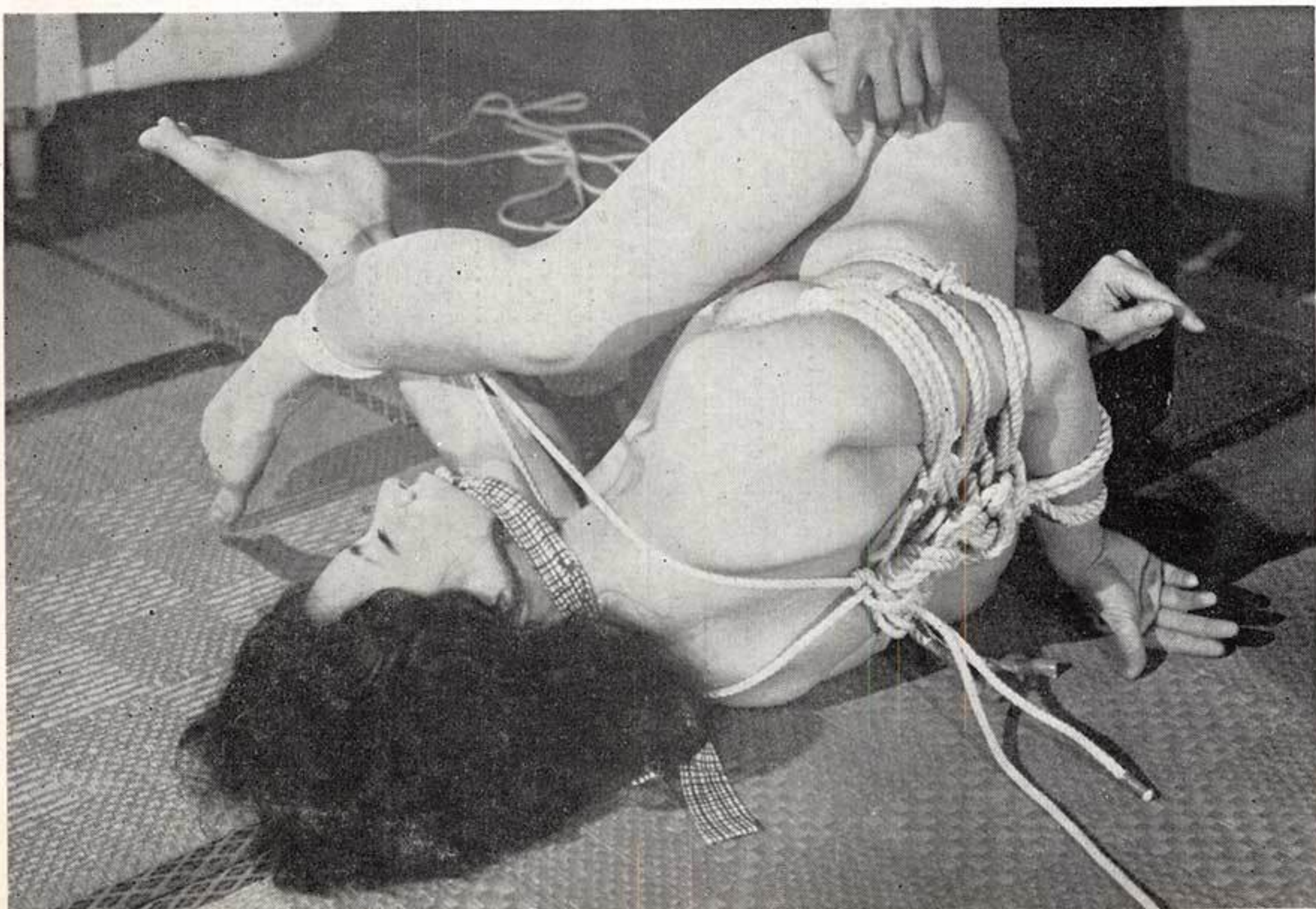
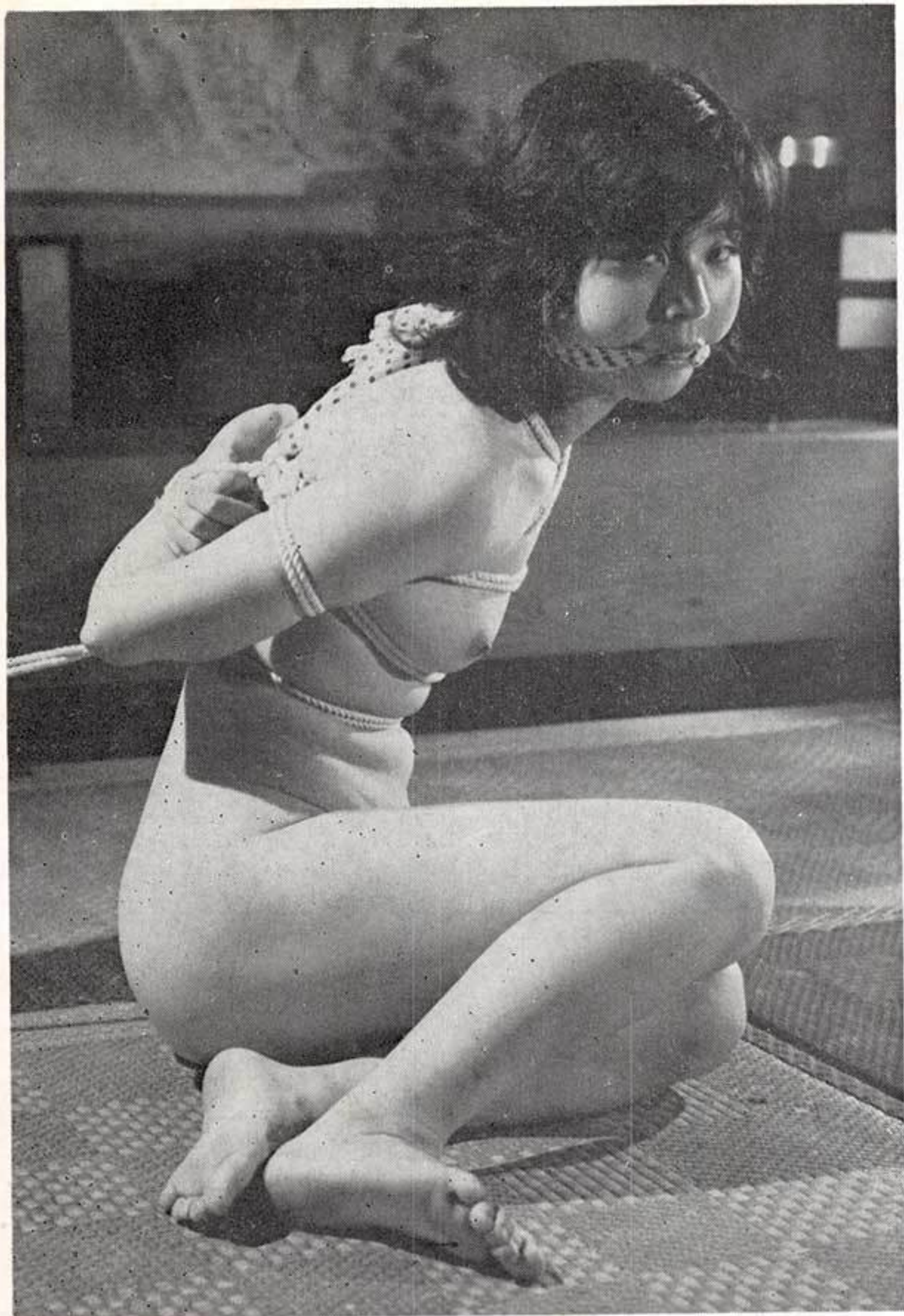
雑誌 2805-5

¥400

責めと緊縛の祭典

塚本鉄三・構成

縄に陶醉するひととき



△前田真知子▽

奇
譚
ク
ラ
ブ



五月号目次

△昭和四十八年△

△第二十七卷Ⅱ第五号Ⅱ通刊第三〇三号△

本

文

フォト「天女のような淑女」△三浦純子△	浜村喜美夫	(21)
マゾを忘れかねた恵子の便り		
『Mに耽溺した頃のこと』	中河 恵子	(22)
告白「白夜の詩」	瞳 耀太郎	(26)
M体験小説『亜矢様をめぐる不思議な夜』	沢井 和雄	(28)
体験告白「無料花電車ショー」	後藤 執生	(44)
連載小説「大噴火」△五十六回△	千葉 青鬼	(48)
城章夫氏の再デビュー「梨花は散った」	長田 二郎	(56)
連載・S大河小説『パロディ花と蛇』 ⁽¹⁷⁾	山光 純	(58)
プレイ記録余話「私のSM写真術」	ロマン派生	(68)
連載・時代S小説『紫蘭の門』 ⁽²¹⁾	風流極道軒	(74)
あるフェチ的マゾヒストの告白「悦鈴記」	梅越 泰三	(88)
連載・奴隷妻小説「命預けます」 ⁽⁸⁾	柴 利好	(94)
「カメラ」と「ペン」のルポルタージュ△西条紀代の巻△		
『浣腸』という名の飼育に耐えた紀代』塚本 鉄三		(104)
美容手伝い「うるわしき女性に」	野村多津男	(132)
M派交友録 ⁽³⁸⁾ 「グラマーな猛女」	鬼山 絢策	(138)
告白「マゾプレイの妄想と現実」	丸目 忠	(153)
海外情報「北欧のポルノより見たSM随想」	長谷田 亀治	(156)
S小説『残酷・スター誕生』△第一部・変身△	久留木 栄	(160)
スワッピングについてのSM的考察	若林 串良	(175)
女体緊縛美各論「憂愁の佳人・梨花悠紀子」	小雅田 勇	(178)

妊婦狂崇症の由来……………水木 宏二
 “中河恵子”を責める幻想……………秋野 美水
 △誌上通信▽早坂信治様へ
 SM夫婦を責めてみたい……………松本 並夫
 フォト「プレイの記録」……………早坂 信治
 サロン落穂抄(二)……………塚本 鉄三
 ゴムマニアの花嫁を求む……………ゴム衣着奴
 △誌上通信▽齊藤香根雄氏に答えて
 「花麻尼会」結成要領……………久保 房夫
 告白 不思議な縄の魅力……………下村セイヤ
 百合子のアナル調教記……………望月百合子

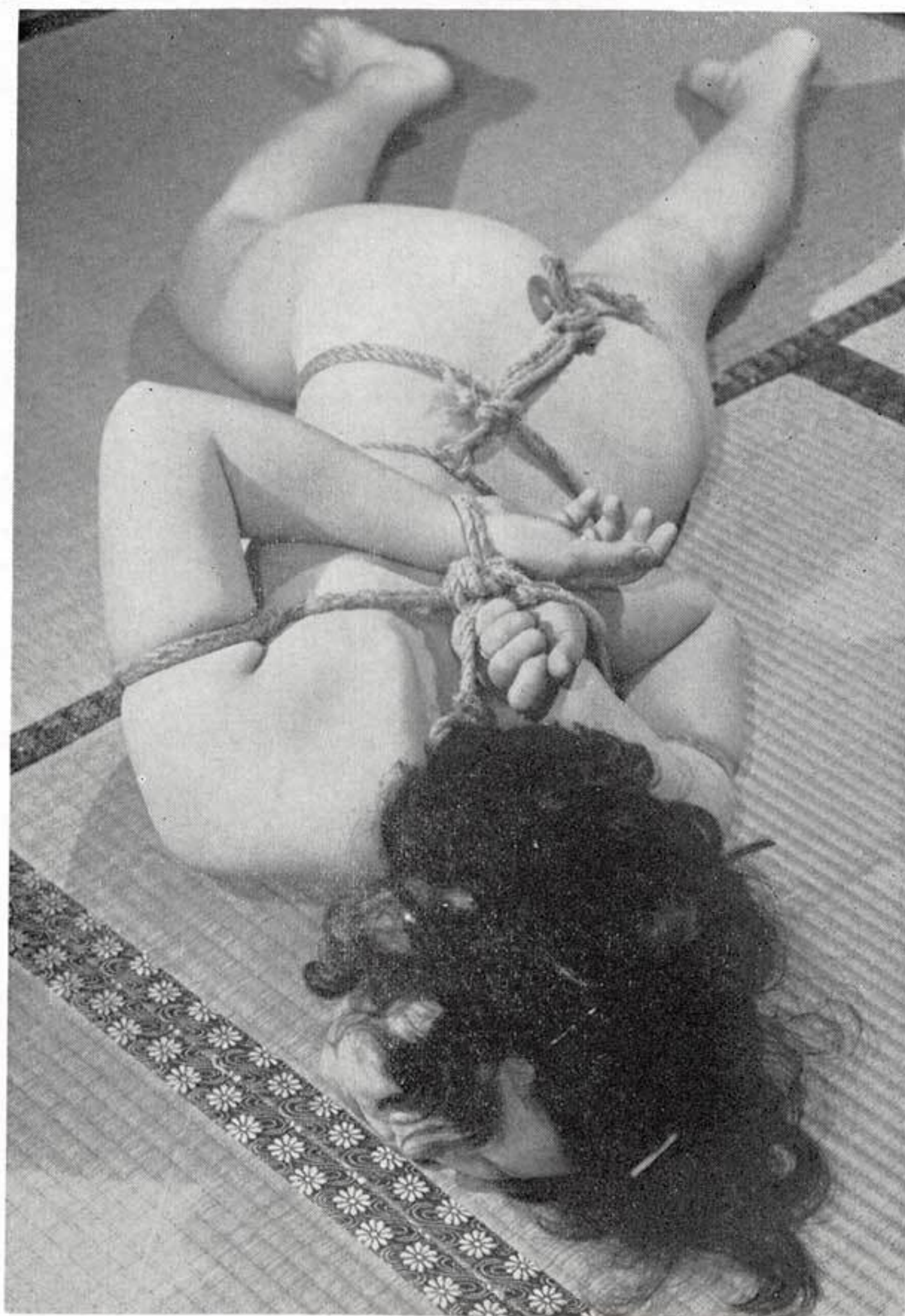
SMライター・塚本氏へ……………宮本 雅夫
 夫婦プレイ 歯がゆい思い……………田尻 長州
 悦虐のうた「縛られて」……………北川まりこ
 絹川文代の白い足の下に……………中野 清二
 藤野さんの「浣腸告白」に……………上条 直
 編集部だより……………編集部
 愛の昇華 私の浣腸結婚観……………竹迫 誠也
 イメージ画「無題」……………小川 茂正
 伊勢様へ 妻交換の申込み……………佐野 正
 西条紀代さんの魅力に思う……………小池 明男
 ふんどし、脇毛、etc……………鈴木ゆり子



縄に陶醉するひととき(2葉)……………前田真知子
 柔らかさを縛られる(2葉)……………西条 紀代
 訓練に耐えるM性(2葉)……………笠井奈保子
 ボリニームを縛る(2葉)……………高村 浩子
 マゾに感泣した頃(2葉)……………深田 菊子
 足の裏の温い女(2葉)……………荒尾 慶子
 剃毛の麗人(3葉)……………梨花悠紀子
 緊縛の中の美(2葉)……………福井 桃子
 鑑賞用M女(2葉)……………前田真知子
 マダム“芙美代”の近影(2葉)……………西条 紀代
 胴吊りに耐える……………館 典子
 海老縛りの苦悶……………西条 紀代
 飼育中の女の生熊(2葉)……………西条 紀代
 浴室での緊縛プレイ(2葉)……………西条 紀代
 豆絞りと長襦袢(2葉)……………西条 紀代

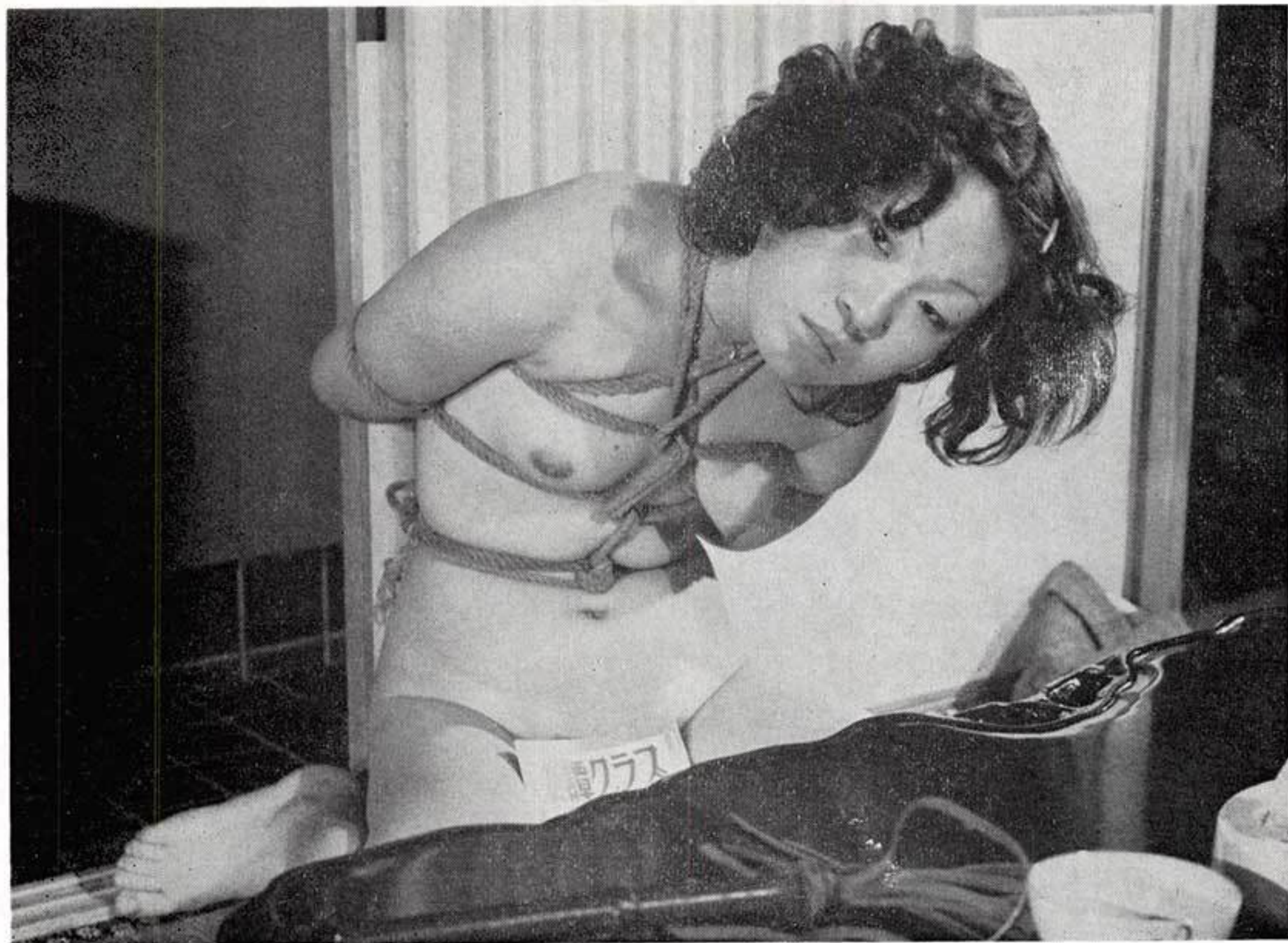
目次	枕奇房我楽多控(2)『幻の少女』……………辻村 隆……………(188)
	山口とき子様へ“自縛教室”と縄の掛け方……………まりさとる……………(208)
	マダム・芙美代『脂ぎった身体じゃお嫌や?』福井 桃子……………(212)
	懸賞体験記「謎の女」景子のこと……………真行 彰……………(218)
	懸賞創作応募作品“青い血潮”……………黒田南海男……………(226)
	読者通信……………編集部選……………(266)
	イメージギャラリイ……………「解けぬ結び目」志羽利也……………(47)
	「適正間隔は三分」飯田ひろくに……………(81)・「飢えた狼」岡たかし……………(93)
	「一打」須坂旭……………(98)・「二人一室」志羽利也……………(101)
	「痛覚を求めて」仲乃ミハル……………(137)・「丸太橋ゲーム」須坂
	「珍説唐人お吉」岡たかし……………(148)・「コートを脱いで」須坂
	「静夜」室井亜砂路……………(168)・「期待」岡たかし……………(177)
	「渡部好美喜悦の図」室井亜砂路……………(224)・「幸せな苦しみ」春川ナ
	「縄と面のもてなし」志羽利也……………(231)・「強奪」岡たかし……………(233)
	坂旭……………(220)・「静夜」室井亜砂路……………(168)・「期待」岡たかし……………(177)
	志羽利也……………(194)・「渡部好美喜悦の図」室井亜砂路……………(224)・「強奪」岡たかし……………(233)
	ミオ……………(229)・「縄と面のもてなし」志羽利也……………(231)・「強奪」岡たかし……………(233)
	笠井奈保子・玉木章子……………(233)

柔らかさを縛られる



△西条紀代▽





訓練に応えるM性

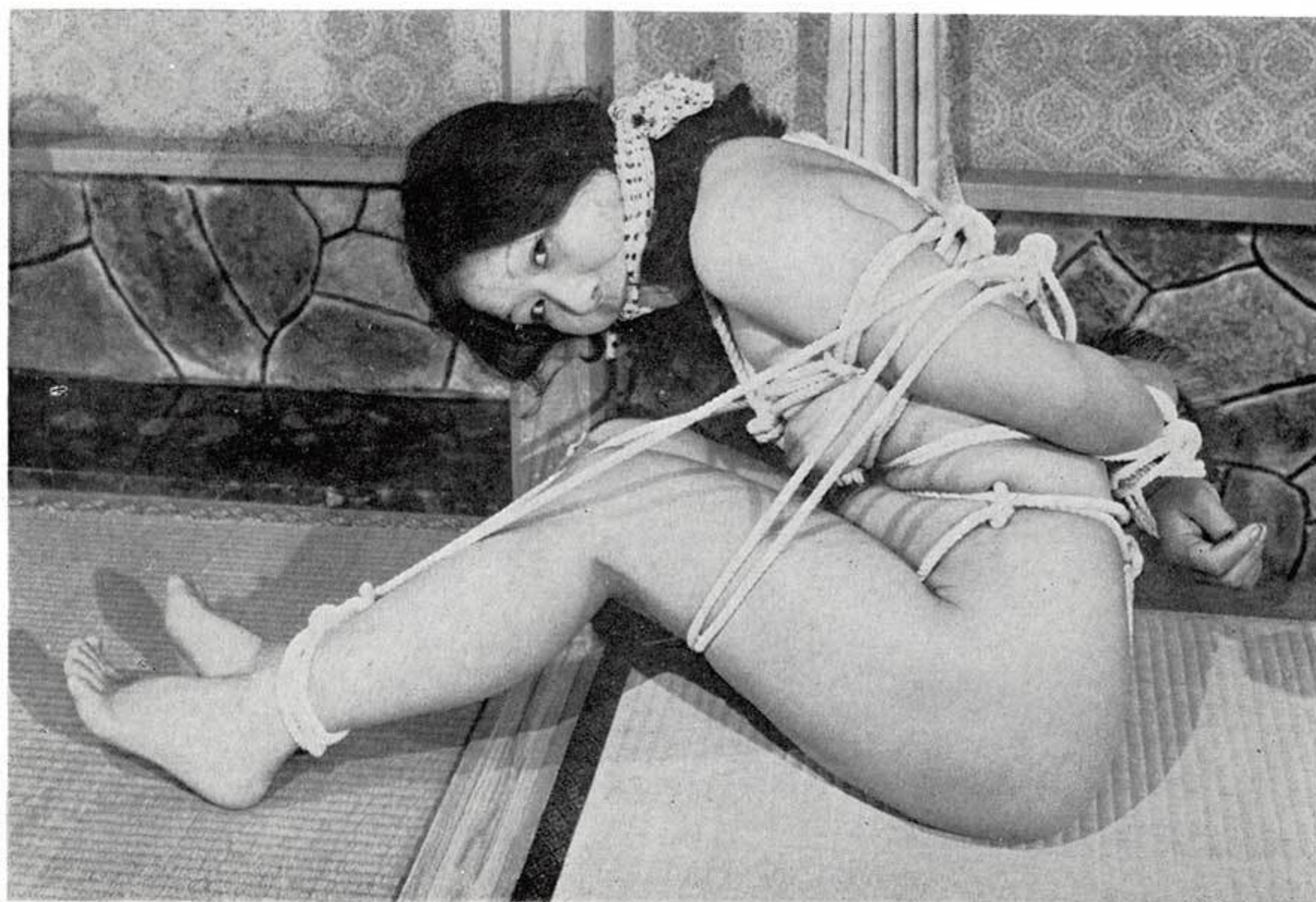
＜西 条 紀 代＞





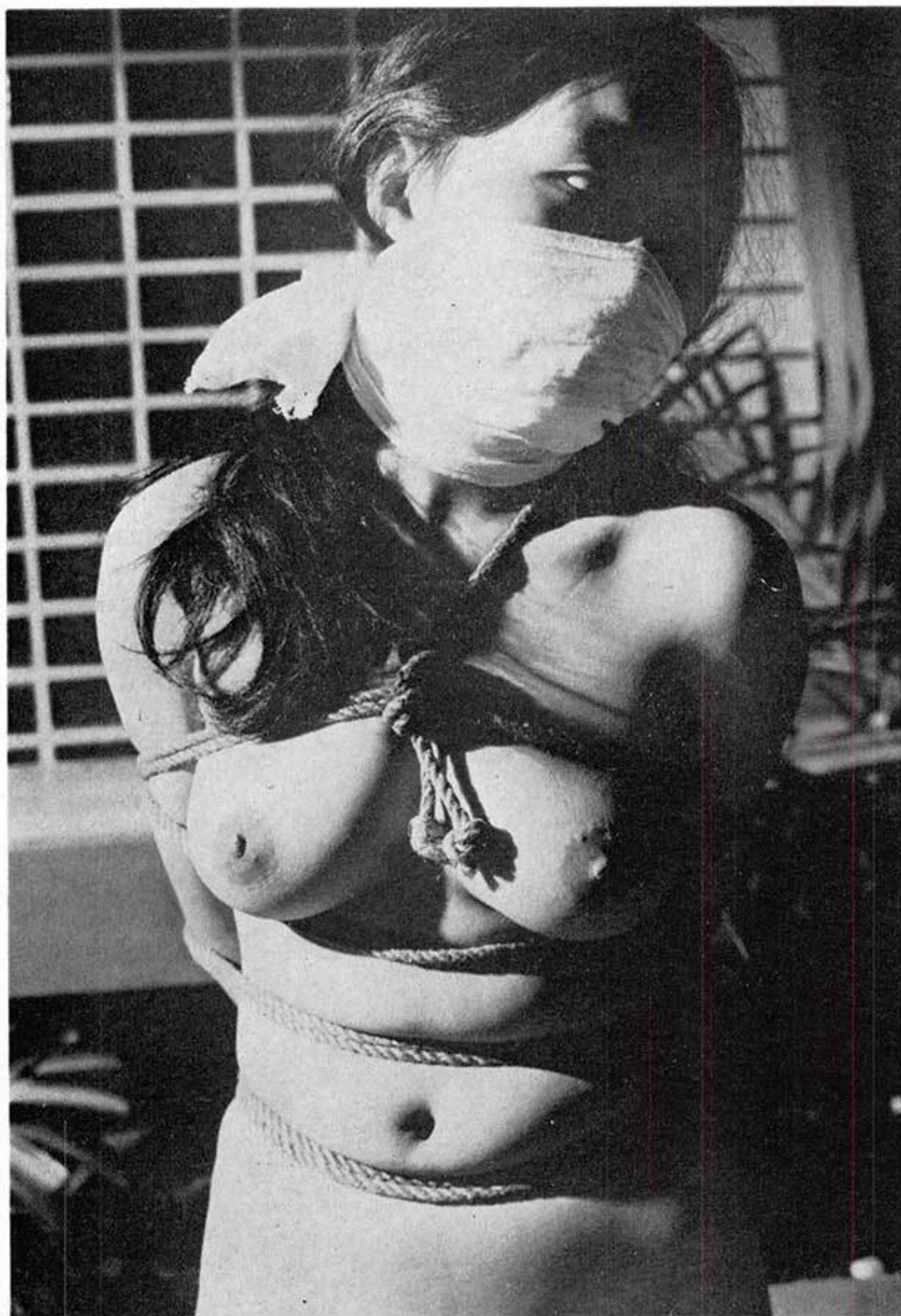
ボリュームを縛る

＜笠井奈保子＞



マゾに感泣した頃

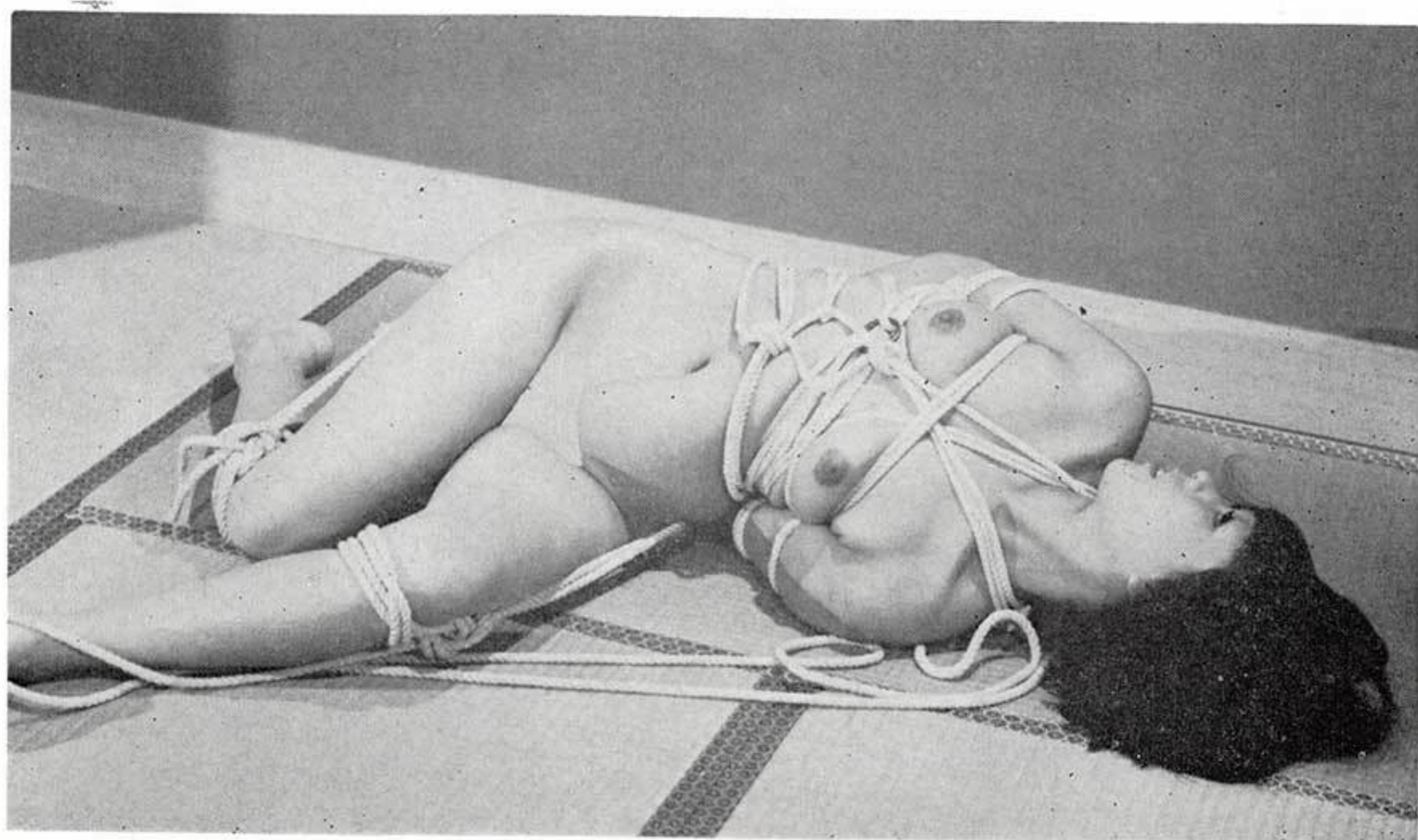
△高村浩子▽

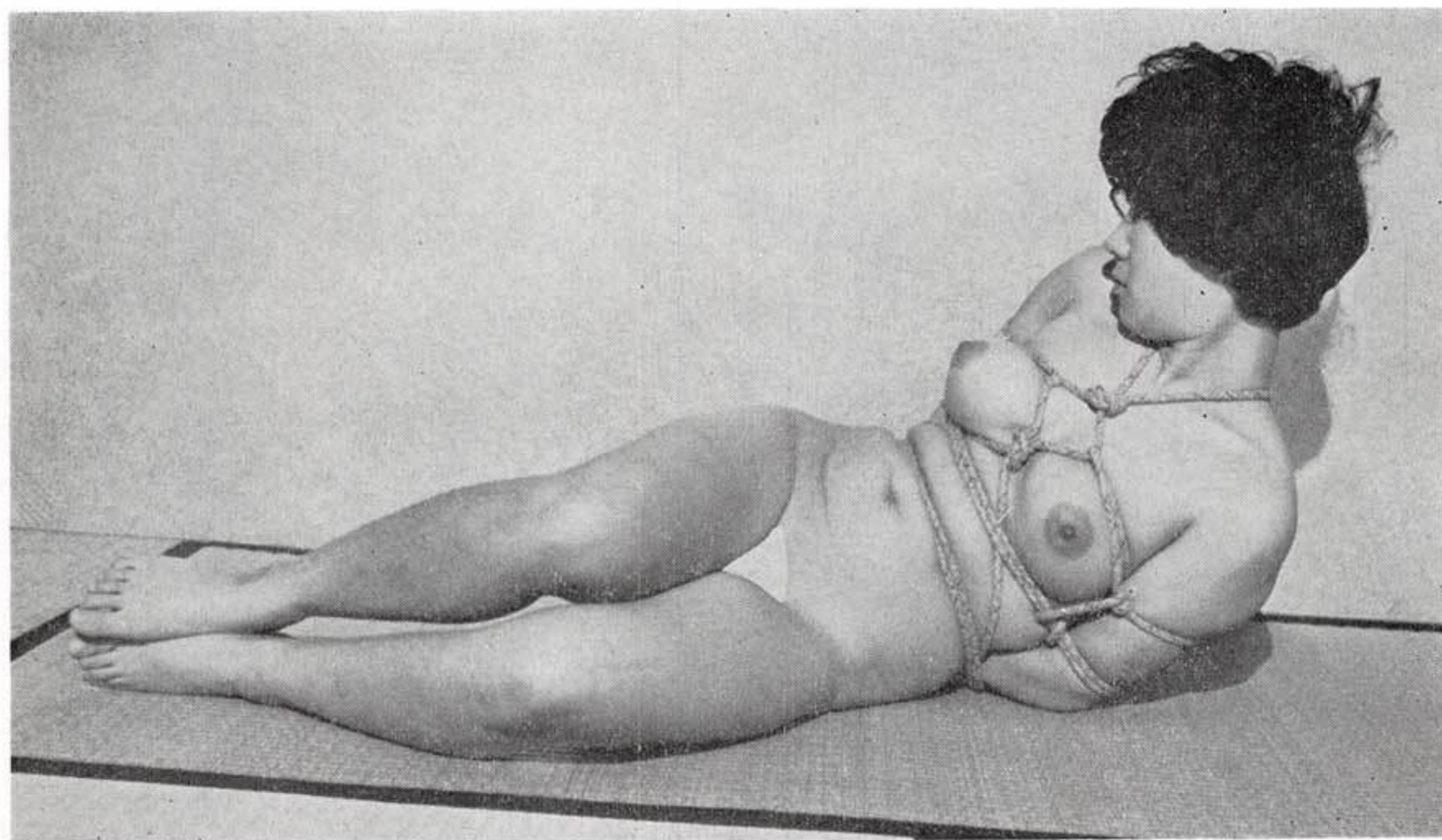
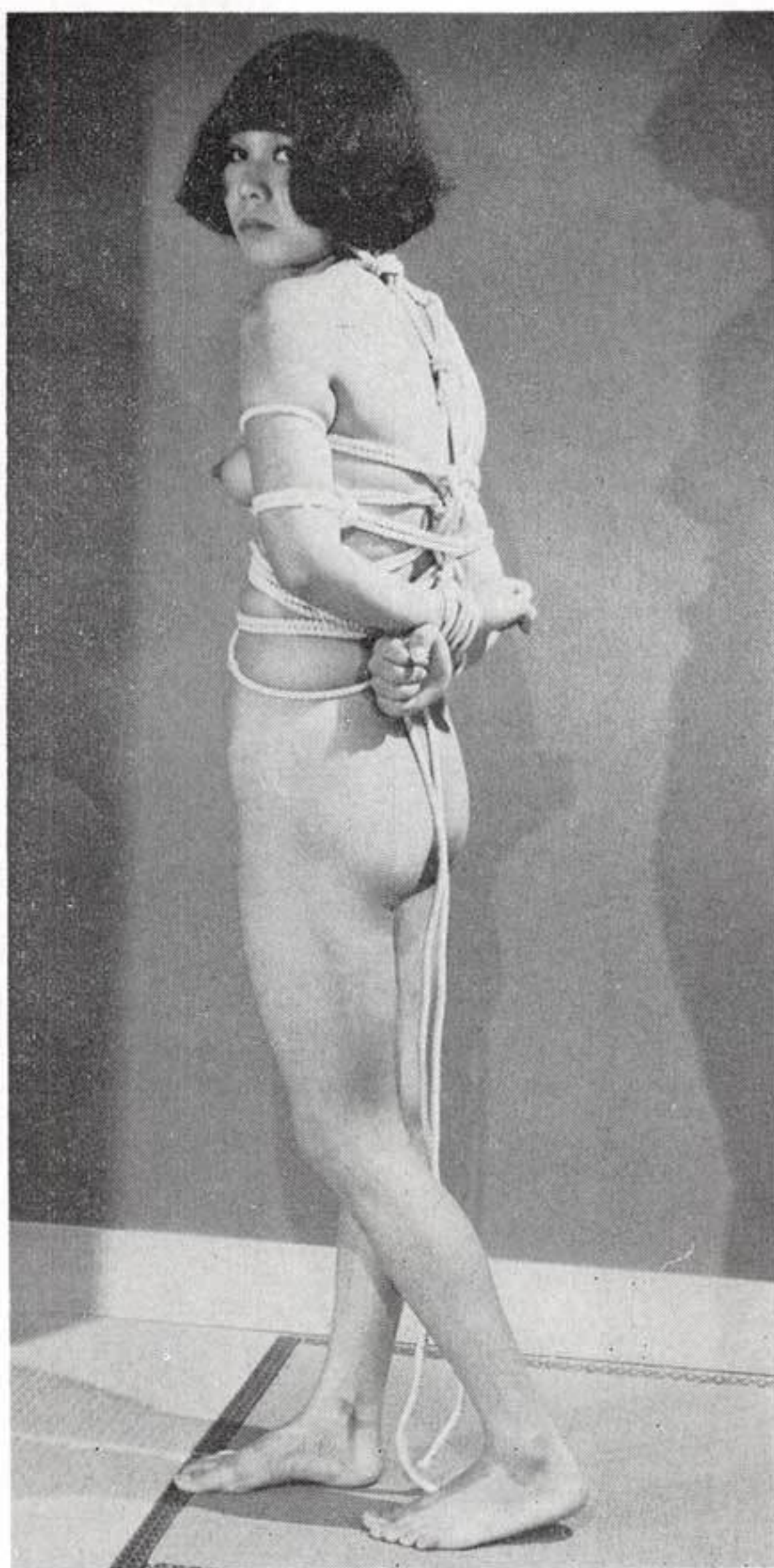
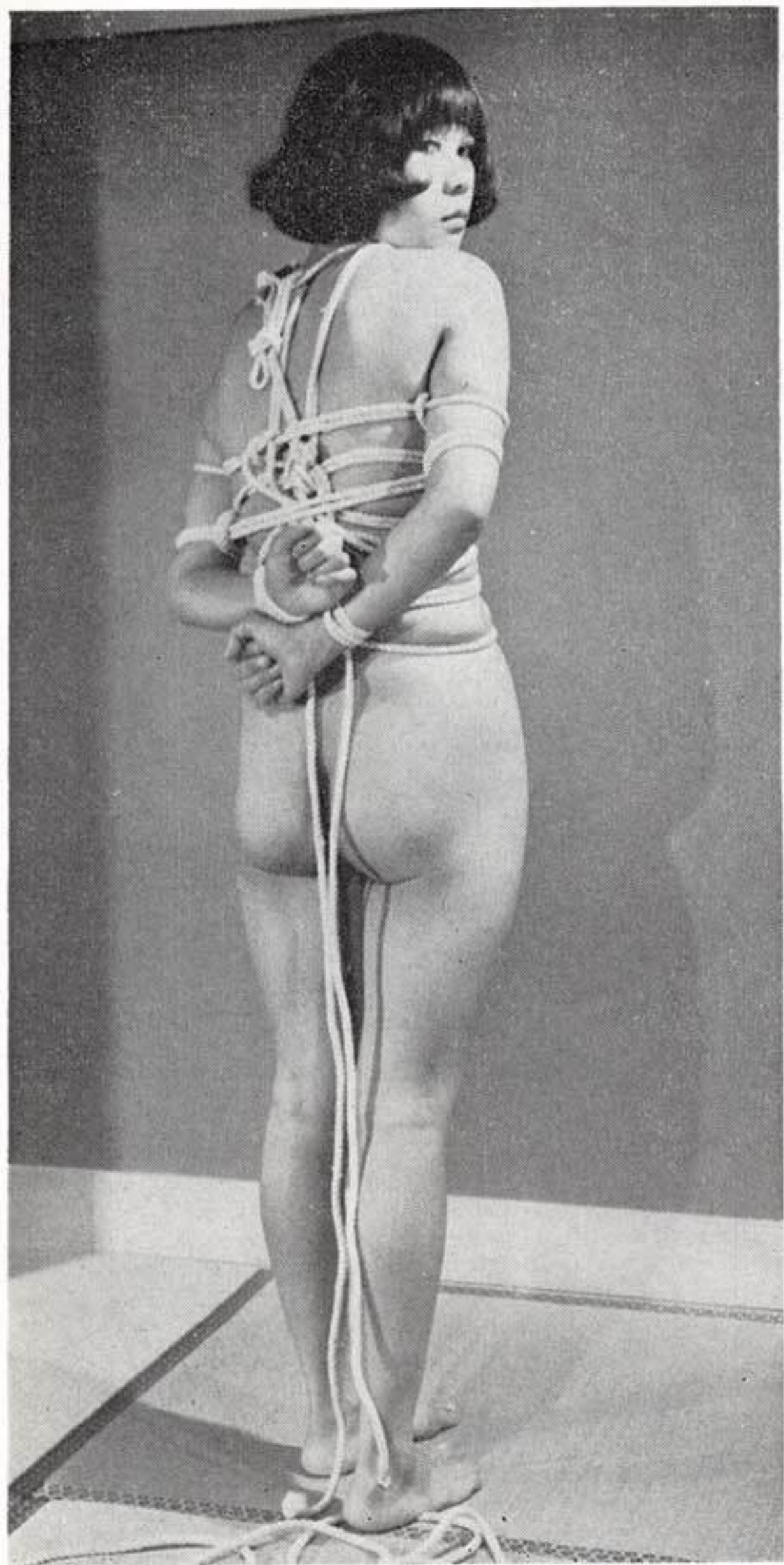


足の裏の
温い女



△深田菊子▽





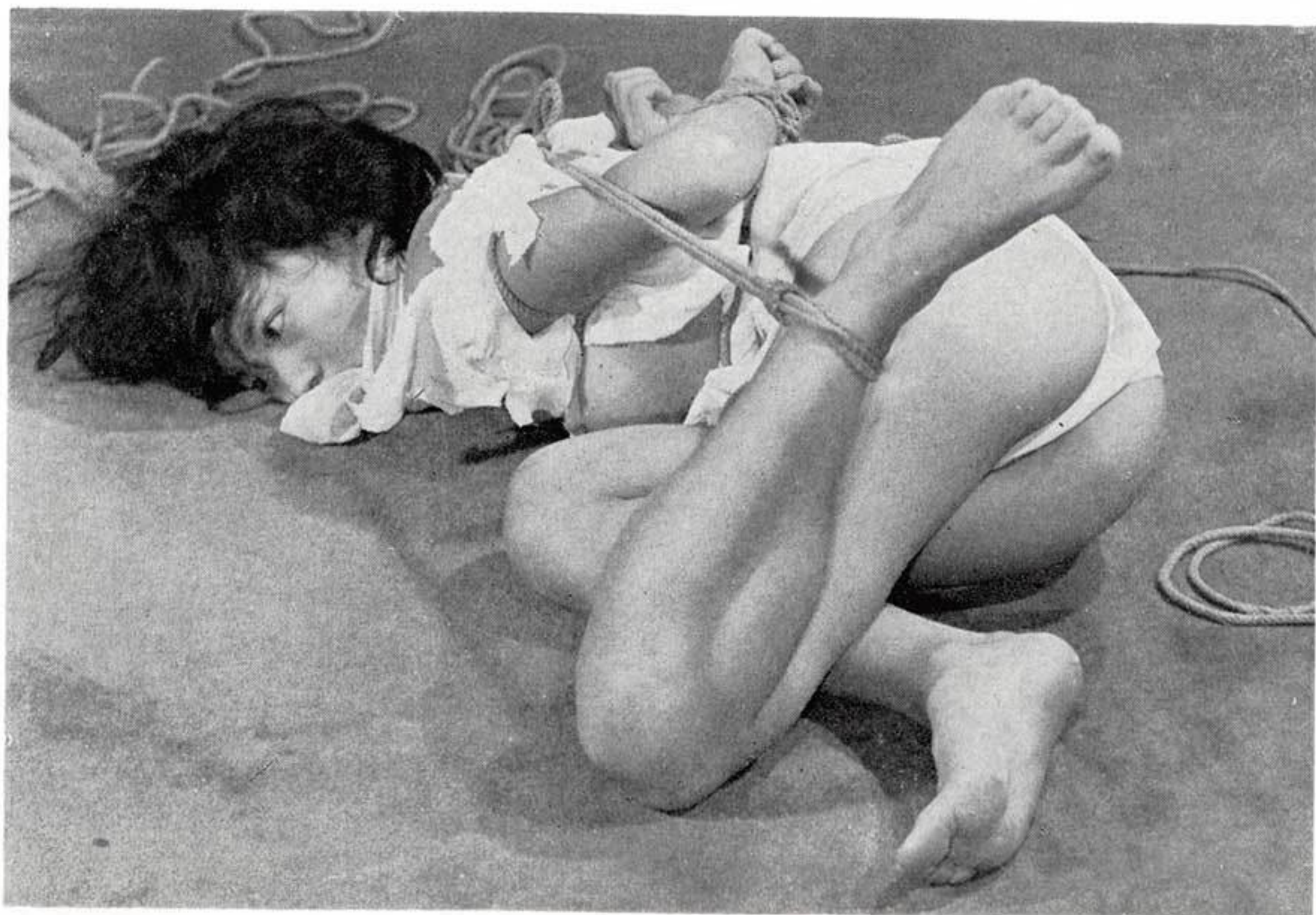
剃毛の麗人

＜荒尾慶子＞



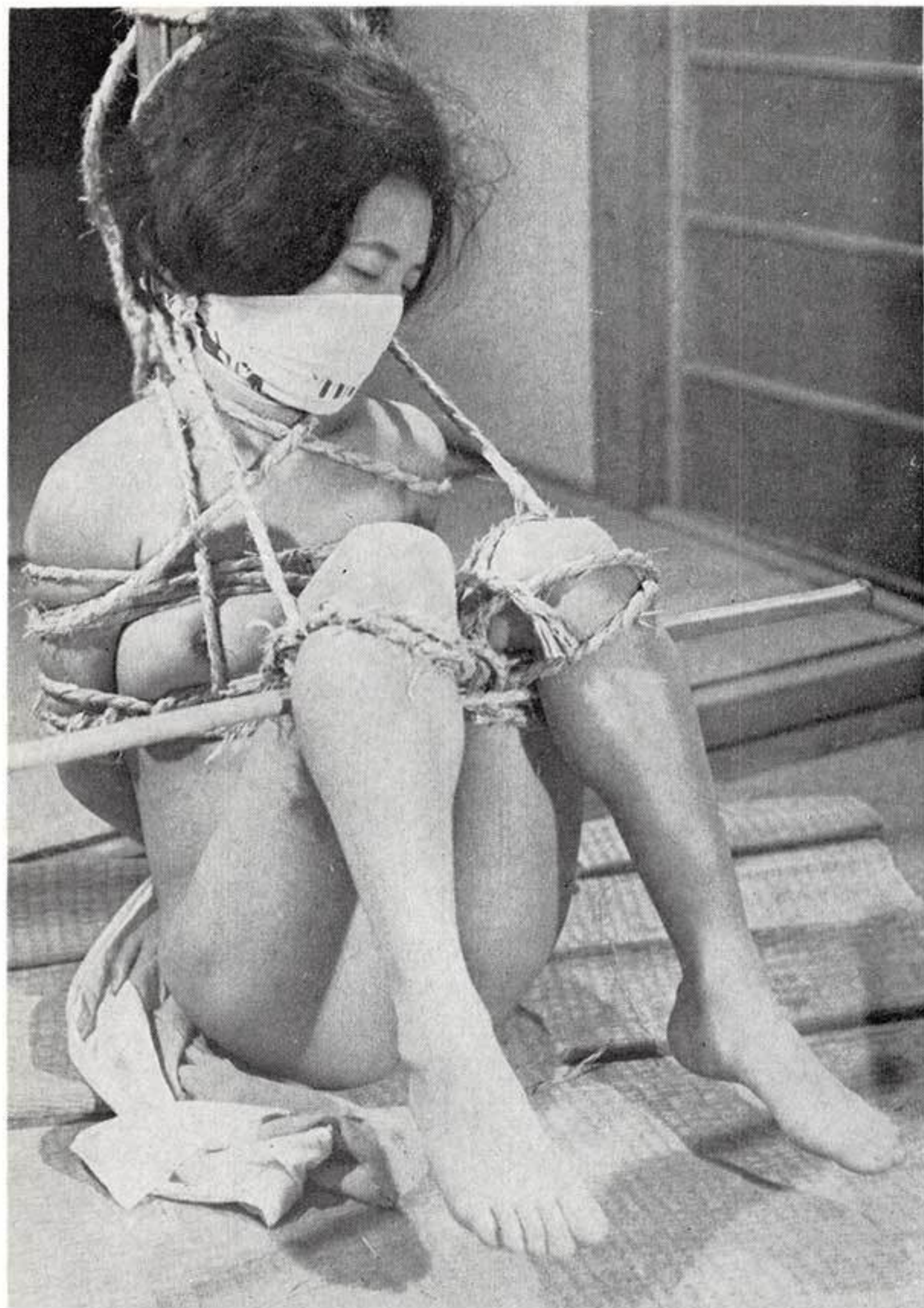
美 中 の 縛 緊

＜梨花悠紀子＞



鑑賞用M女性

△梨花悠紀子▽



マダム々美美代々の近影



△福井桃子▽

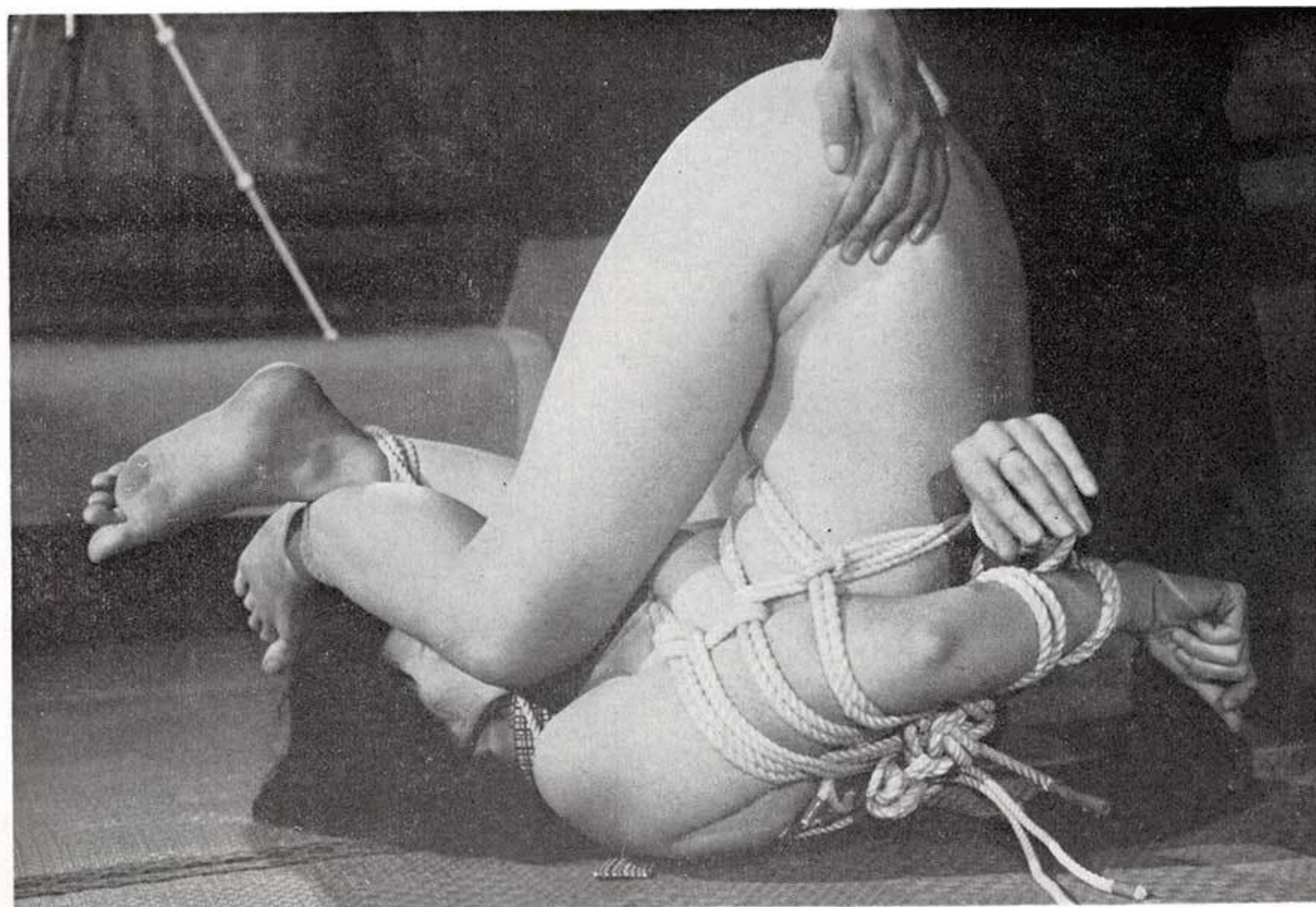




胴吊りに耐える

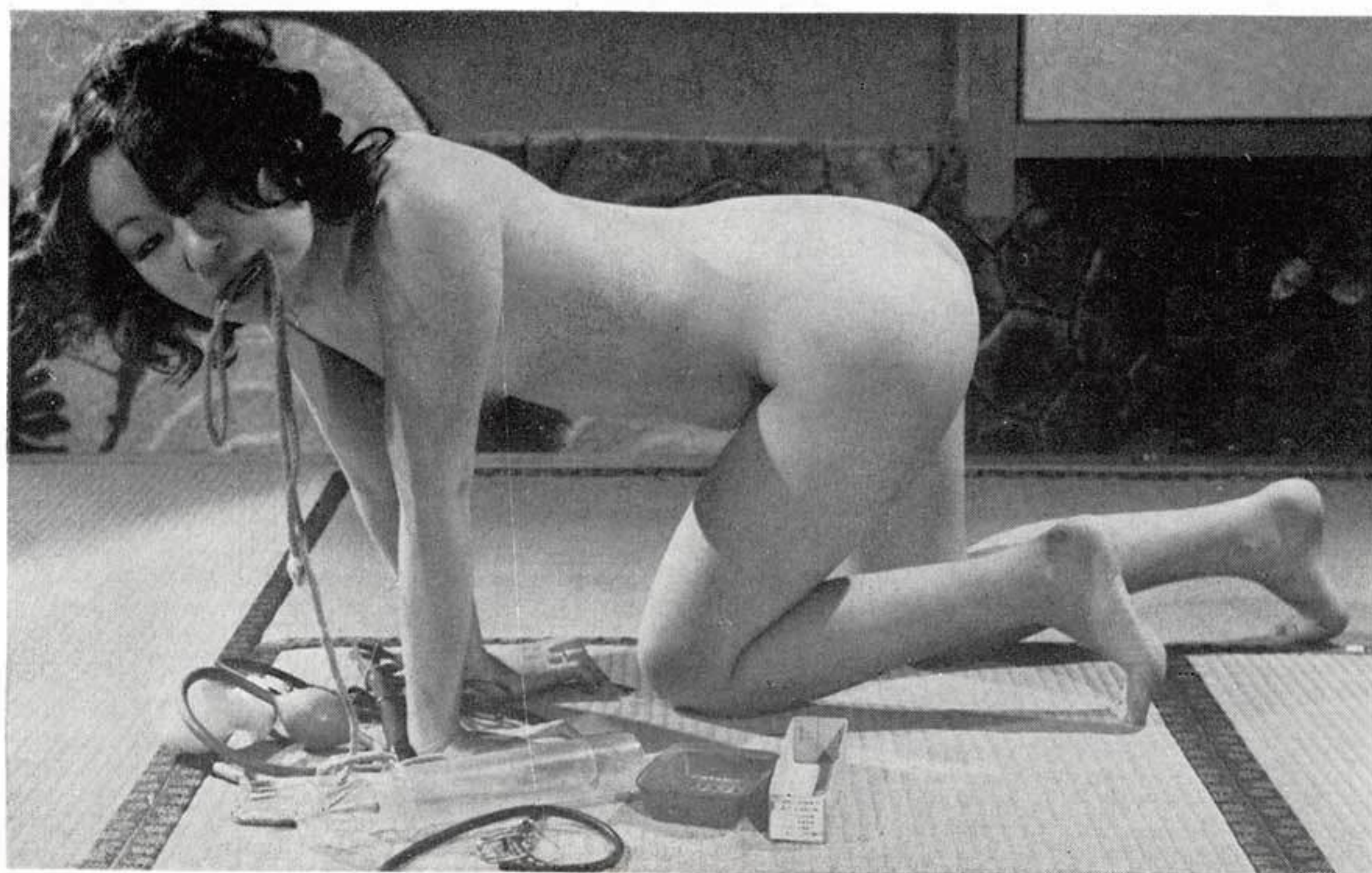
＜前田真知子＞

海老縛りの苦悶



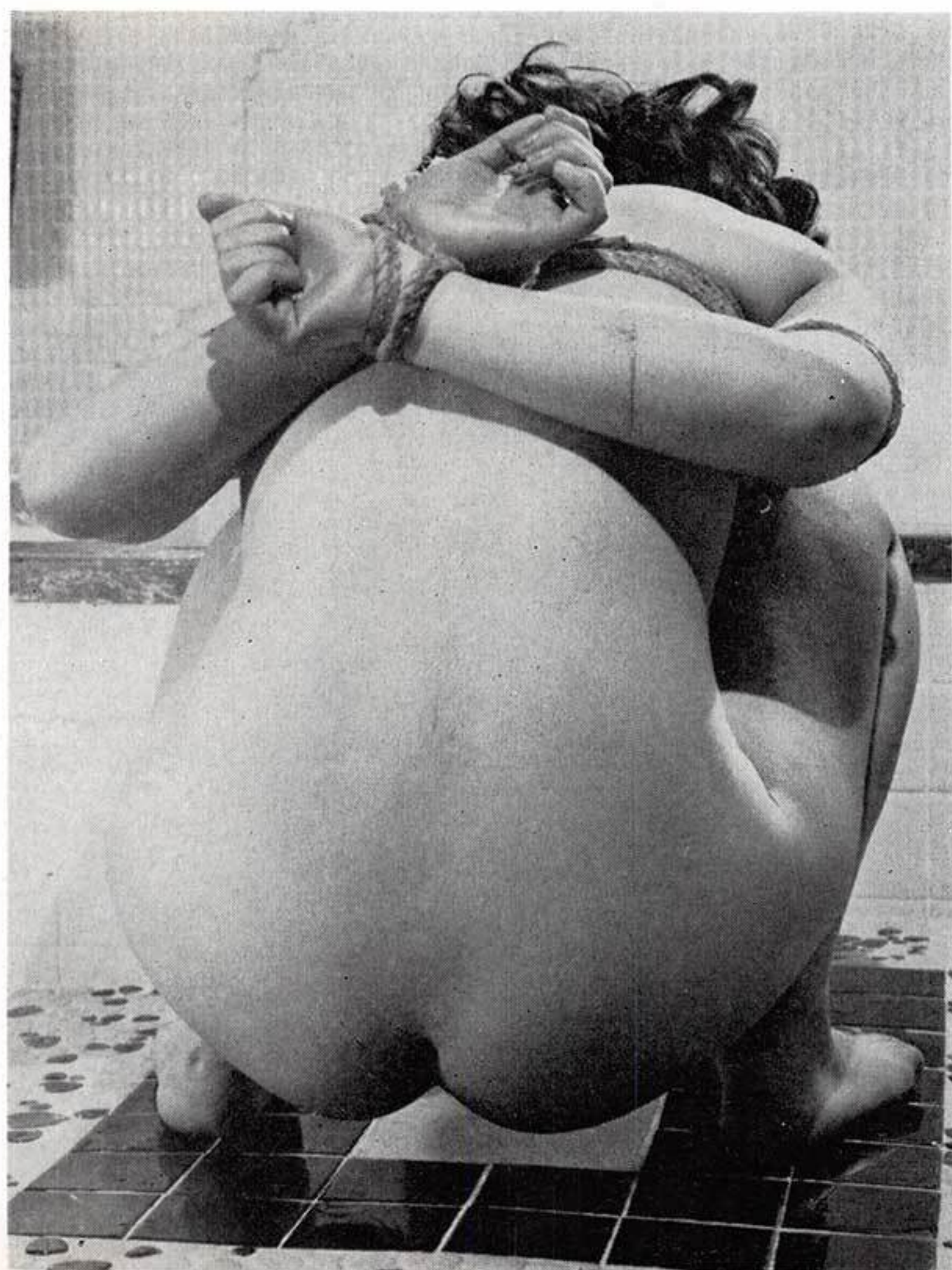
飼育中の女の生態

△西条紀代▽



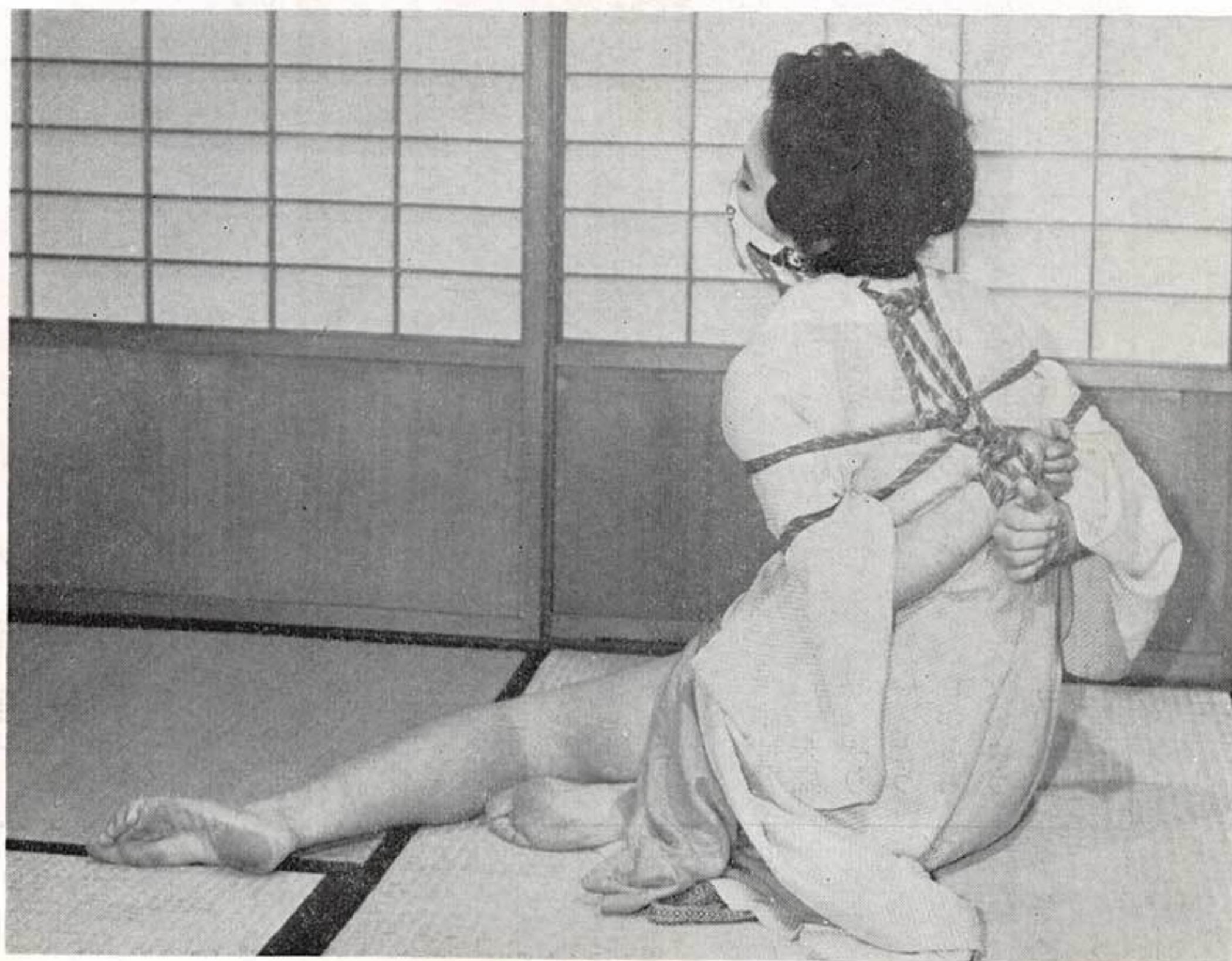
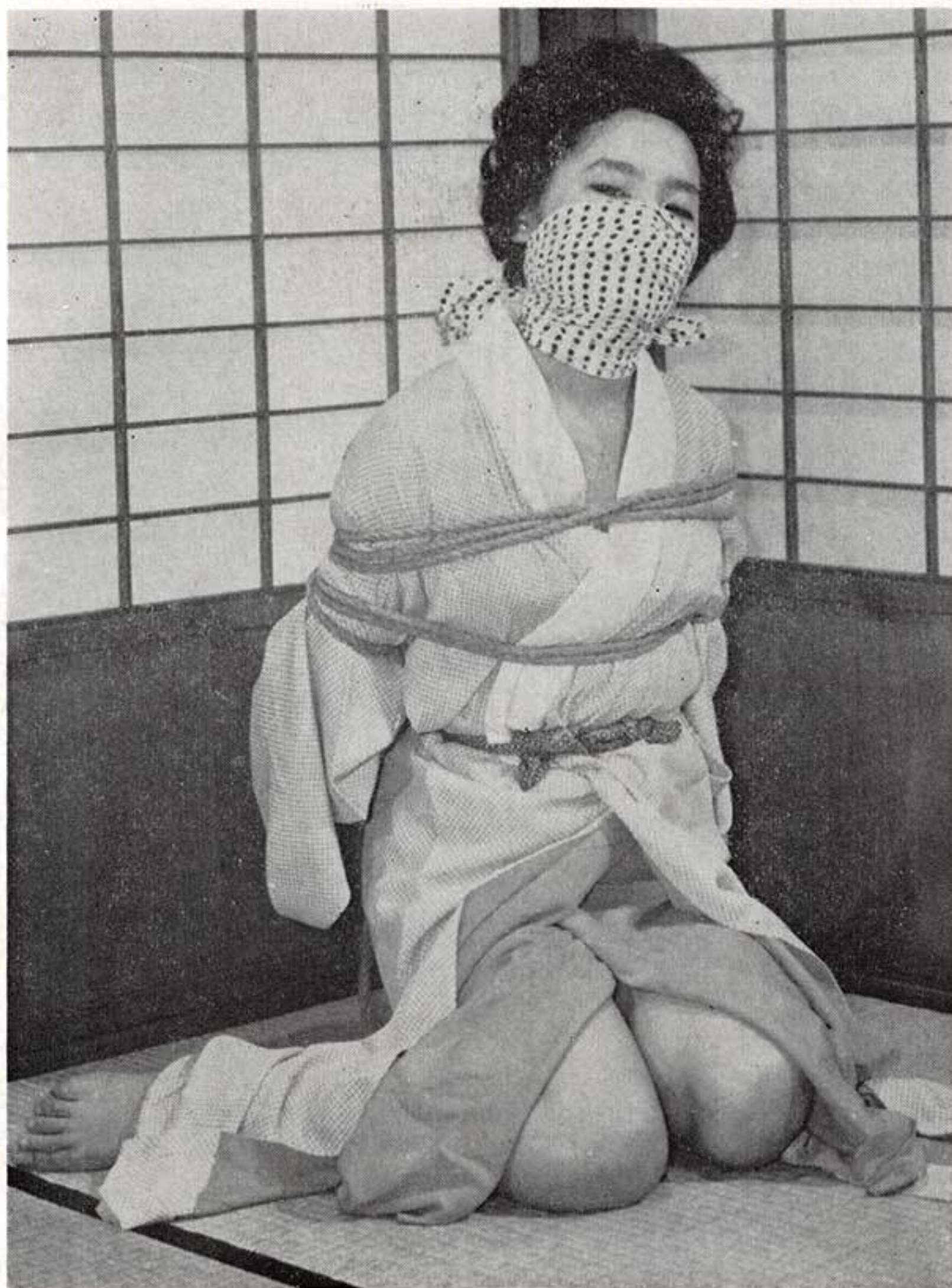


浴室での緊縛プレイ



△西条紀代▽

豆絞りと長襦袢



△館 典子▽

奇

譚

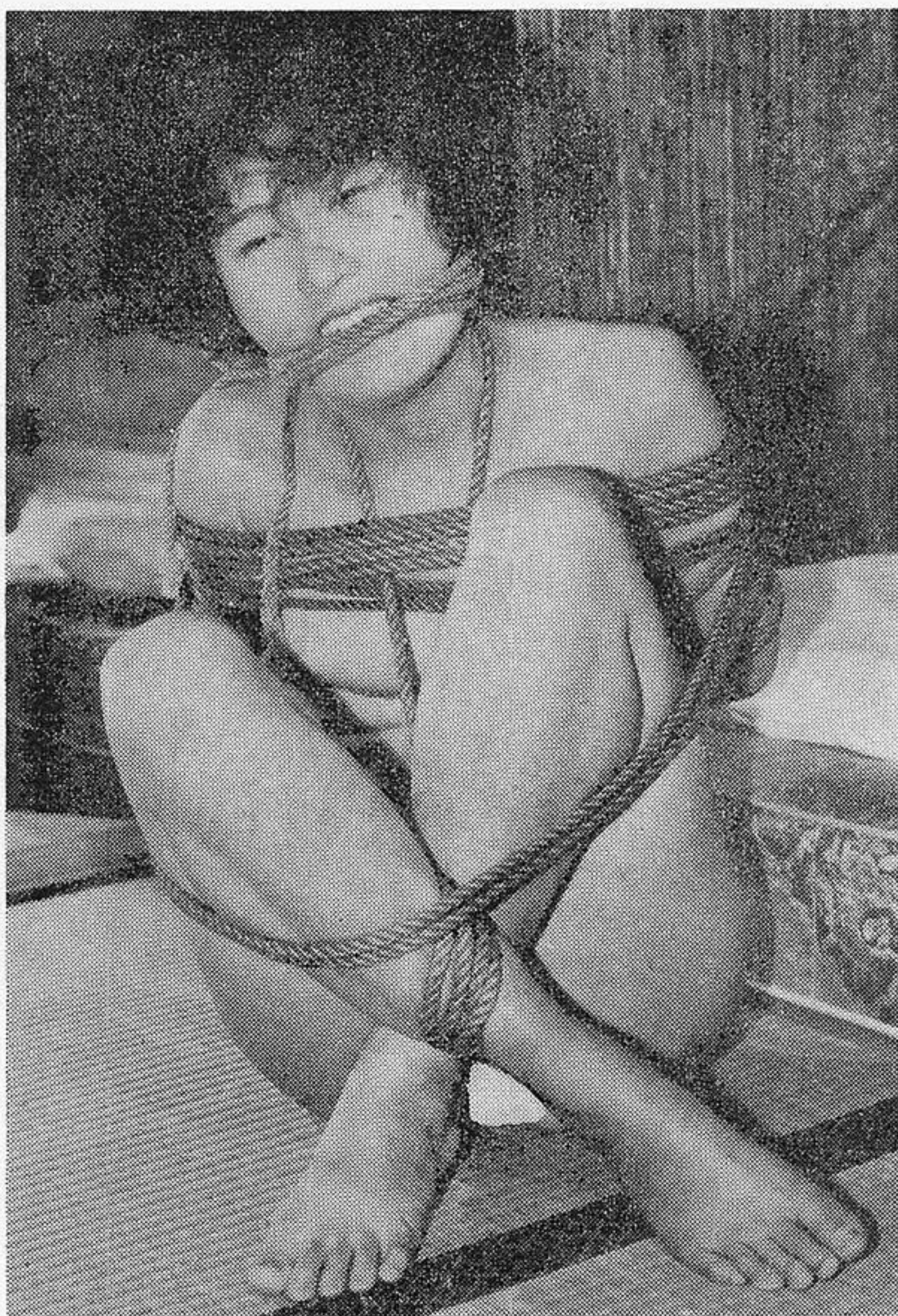
ク

ラ

ブ

昭和四十八年 五月号

(第二十七卷 第五号)
通刊 第三〇三号

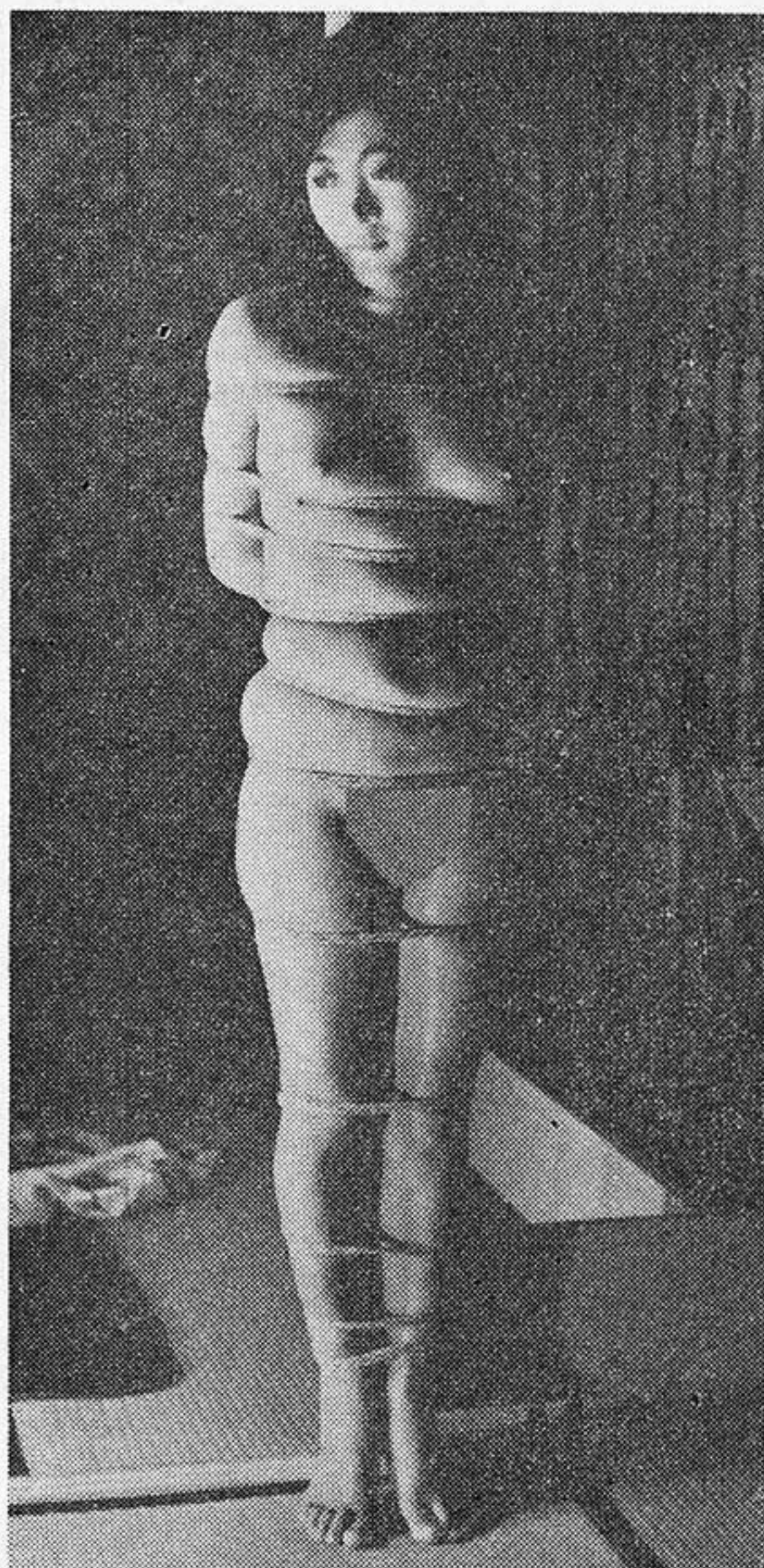


天女のような淑女

モデル：三浦純子

私達の周囲のどこにでも見つけることの出来る平凡な家庭婦人である三浦純子が私は好きである。淑かで大人しそうな物腰は、無条件に好感が持てるし、飼育されるままに剃毛され、浣腸され、緊縛されて、そのSMプレイの中に、夫婦の強い絆を繋いでゆくことに、私は限らない憧憬と羨望の念を禁じ得ない。どうか内に秘めたSMの情熱を、これからも益々燃え上がらせ、誌上に、天女のようなプレイフォトを見せてほしいものである。

(浜村喜美夫・記)



<告白>

マゾを忘れかねた恵子の便り

M^{エム}に耽溺^{たんでき}した頃^{ころ}のこと

中^{なか}河^{がわ}恵^{けい}子^こ

私の住んでおりますところは、一応、市という名前はついておりますものの、書店では奇譚クラブを見つけないことが出来ず、車で三十分ばかり走って国鉄の駅のある街へ買いに行っております。

書店の店頭で奇譚クラブの表紙を見つけましたときは、ほんとうに一種言うに言われないう懐かしさというものを感じて、思わず知らず手にとって胸に抱きしめてしまいます。

思えば私がまだ学生で大阪の実家から京都の学校へ通っていた頃、ふと書店で奇譚クラブを手にしてから、すっかり、この雑誌が大好きになって、それ以来、目につく限りのバックナンバーを、せっせと集めたものです。

自分がM傾向の性癖の持主であると気づいたのは、高校生の頃、体操倉庫で冗談のようにして、同級の男性に縛られた時です。

そのときの私の激しい心の動きは、自分でも、はっきりと意識するほどで、縄で縛られるということが、何故このように自分を昂奮させるのかと、とまどいました。

それから暫くして、奇譚クラブを手にしてから自分がM性であることを知ったのです。編集部へはじめて、お便りを出したときも「私はマゾの女です」という文字を知らず知

らず便箋の上に走らせていました。

夏はスキンダイビング、水上スキー、モータボート。冬はスキー、春秋の気候のよい頃は車に友達を乗せて、きゃっきゃっ騒ぎながら遠出をして栗拾いや松茸狩りをしたり、岩場でロッククライミングの真似をしたりしました。時速八〇キロで国道を、ぶっ飛ばしていて白バイに追いかけられ、免許停止になったこともありました。

そんな私でしたが、内面に巣くっている私の心の奥底には、マゾの芽が次第次第に芽生えて、大きく育っていたのです。

編集部の方から、縛りのモデルになってみないか、と、誘われたとき、私は一も二もなく、お引き受けしようと決心しました。

縄で縛られるということによって、自分の身体や自分の心が、どのように変化するのだろうか、試してみたかったです。いや、それは、ほんの一つの口実であって、ほんとうは、甘くて、とろけるような妖しい未知の官能の誘惑に抗しきれなかった私なのです。

縛られたい、縛られてみたい——という未知のものに対する、しびれるような期待は、私を極めて行動的にしていました。

はじめて縄で本格的に自分の身体が縛られ

たとき、私は自分がマゾであることを、はっきりと自覚しました。私は、もともと、縛られることが、大好きな女だったのです。

最初の日は最後までパンティは脱がされなかったのは私にとっては、いささか不満でしたが、それでも生まれてはじめての本式の縛りで、全身がかかったと燃えあがりました。そんな心の動きを、見すかされるのが恥かしくて、つとめて平静を粧ってはいましたが、その日、帰ってみて願ってみますと、甘美で切ない思いが胸いっぱいになるのです。

次の日に、パンティを脱がされたときは、思わず目の前が、くらくらとするほどの強い刺激を受けました。縄で、それも麻縄のようなゴツゴツとした縄で、自分の全身が、くいちぎれるくらいに縛られたい——。

その縛り方が、きびしければきびしいほど私の心は激しく燃え上がり、思わず知らず、口から、あらぬ言葉が、とび出すのでした。そのうち、三回、四回と回を重ねて縛られているうちに、私は縛られることだけではなしに、本来かくしておかなければいけない女



の部分で、あからさまにむき出しにされることに、自分の身体の中の内臓という内臓が、外部に向かって押し出されてゆくような激しい快感を覚えたのです。

ただ着ているものを脱がされたり、裸を見られたりすることだけでは味わえない、その目のくらむような強烈な快感は、椅子の上に坐らされて、両足を大の字に開かせられて縛られ、正面に三脚にのせたカメラを置かれてライトをつけられたときに起こりました。

見ていられるので、止めようとしたが自分の意志では、とても止めることは出来ませんでした。私の突然の発作に対して、びっくりしたような顔で好奇の眼を輝かして、じっと見つめておられると、私のその部分は、ひとりで、もうとどまることの知らない激しい運動を、くり返してしまうのでした。

こんなことは、今までの私の経験では、嘗てないことでした。生まれてはじめての経験が私を、すっかり生まれ変わらせました。

ただ見られるということだけではなしに、昼をあざむくライトに照らし出されて正面か



らカメラを構えられているということ意識すると、私は足の爪先から頭のテッペンまで電気のかかったようになって、その熱い熱い塊りが身体の中心部に向かって押し出されてくるように思えたのです。

縛られるということと、見られるということとが、お互いに掛け合わされて、私の身体の中で爆発点に達してしまっただけです。私の身体が、もう、どういう変化を起こしてしまっ

あったとは——。私は、そのときまで考えも及ばなかったのです。

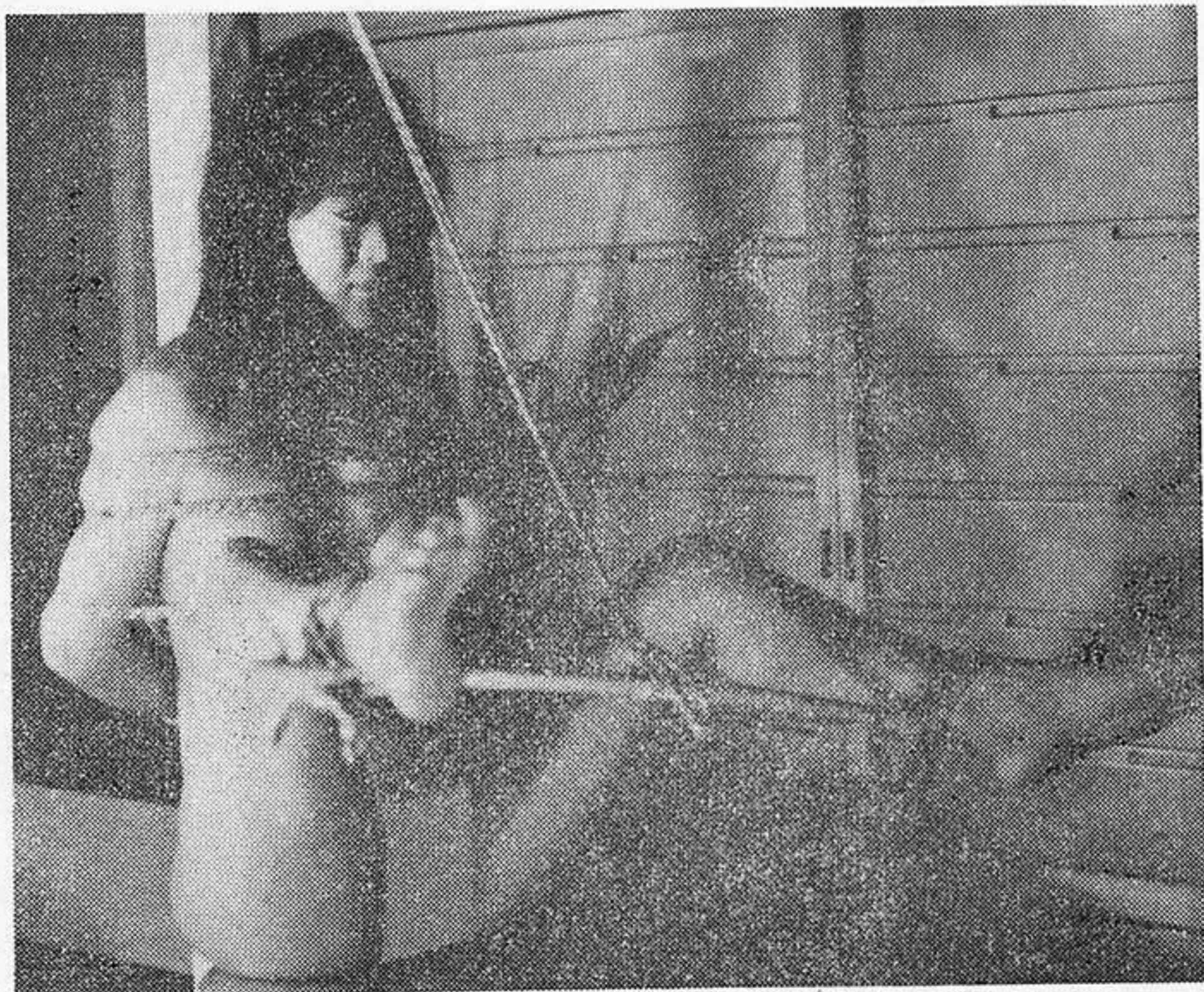
それからの私は、いろいろと曲芸的な縛り方をされたり、変型的な吊り責めをされたりしましたが、それらは厳しい縛り方をされてはいましたものの、私にとっては△責め▽とという言葉のニュアンスとは違った△愛撫▽という意味を持った行為に思えました。

次は、どのような責め（愛撫）をされるの

ているのか、自分では分かりません。ただ、時折、切られているシッターの音だけが、まるで足の裏から這い寄ってくるナメクジのように、私をいらいらさせました。

そうして、そのとき以来、私は縛りを併用したセックスの素晴らしさを知ったのです。

縛られるということが、縛られて身体を自由にされることが、こんなにも甘美なもので



かと考えますと、胸がわくわくして、ひとりで頬が赤く染まってきました。

とことんまで、虐め抜かれてみたいという気持が時には、はぐらかされてしまうことも

ありましたが、切ないまでの思いが、やっと果たされたときの愉悦は、また格別でした。

平常は上品にしている私でしたが、その時に限って、狂乱状態になって、恥かしい言葉

でも、無意識に口に出してしまっているのです。平気で喋っているのではないのです。にテープにとられたそれを再生して聞かされたときは、これが自分の出した声かと、どきりとして思わず蒲団をかぶってしまいました。

こんなあられもない言葉を口に出しているのですから、きつと縛られた身体も、どのような状態になっていたかと考えますと、知らず知らずのうちに、顔が真赤にほてってしまい、その赤くなった顔を見られることによって、更に一層、顔を赤くしてしまいました。

そんな私の心の底の秘密をすっかり見すかしてしまった責め手の方は、舐めるように

して、私の身体のすみずみにまで、執拗な粘っこい視線を走らされるので、私は今、自分の身体が、どのような変化を起こしているのか、どのような形に、どのような格好になっているのかを、考える余裕もなく、思わず取り乱してしまうのでした。

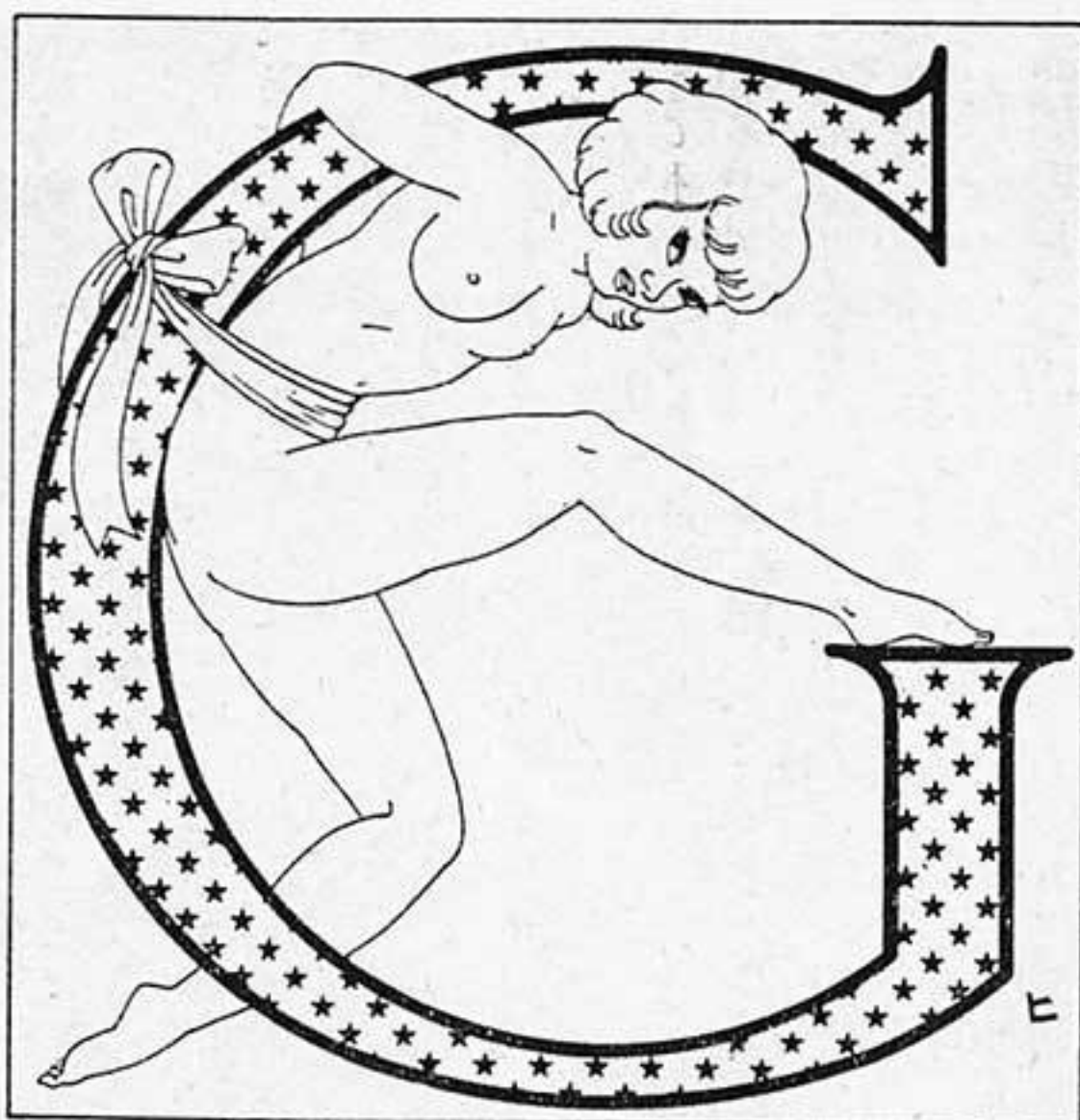
私のマゾの心は、こうして、徐々に芽ばえながら花を咲かせてゆきました。やがて、その花が満開になったとき、私は汲んでも汲んでも尽きることのない女の悦びを心ゆくまで満喫することが出来たのです。

私は幸福でした。女としての快感を、これほどまでに身体で味わうということが出来たのは、やはり素直に、自分の意志に従って行動したからでしょうか。

私は今、奇譚クラブを手にしながら、自分の心の動きを静かに願ってみました。静子夫人を懷つて、自分もまた、あのようになってみたいと心から願っていた私ですが、その幻想の世界から現実に戻ってしまいますと、やはりセックスプレイが、つまるところ、私を一番に楽しませてくれました。

もし仮に縛りや責めを伴わないそれがあるとしたら、私はいつも、頭のなかで、縛りや責めを考えているのが常でした。

カット・マエダヒオミ



告 白

白 夜 の 詩

瞳 耀 太 郎

誰が何をどのように話すかは知らないけれども、そこに真の心の潤いがなければ、それは、空しい白く塗られた墓標にすぎない、と私は思っている。私は、それを信じて生きてきたし、今もまた、それを強く信じている。依るべき誠を求めていた私の目の前に、幾つもの男と女の美しいカップルが現われ、また消えて行った。二つの光が一つになって流れて行ったのもあれば、激しく燃え、呼び合いながらも一つになれず、二本の併行線を描きながら空しく消えたものもある。空に昼と夜があり、地に陰と陽との光と影

が宿るように、人の情もまた、お互いが相手の求めに依って、譲るものは譲り、与えるものは惜みなく与えるものでなければいけないのではないだろうか。美しい言葉の中に剣が横たわっているとしたら、理智の中に氷のような冷やかさが感じられるとしたら、それは真実でないものが含まれているからだと思わざるを得ないのだ。生活のレベル……経済生活の向上に比例して、真実は少しずつ損われ、虚栄の色が、その部分を次第に埋めてくる。若い情熱で築いた愛ですら蝕む、倦怠期といわれる生活崩壊

の芽も、そこから芽生える。

勿論、如何なる時代にあっても絶えることのないプラトニックな愛情や、敬意に満ちた心遣いも軽視はしないが、それは凡てが聖者ではないから、極く少数の優れた人々に限られてしまう。私は愚鈍であり衆愚を代表しているのだ、そればかりを強いられると、エネルギーが、どこかで爆発してしまうと思う。私が、どうやら爆発や暴走をしないで過ごしてこられたのは、一つは妻の献身があったからでもあるだろう。

サジズムとマゾヒズムとは人々の身の内にある。その要素を持たない人は居ない、ということは、もはや衆知のことだろうから、今さら力説するまでもあるまいが、その何れかが大きくなり過ぎることに依って、マゾヒスト、或はサジストと呼ばれる人間になるのだらうと、私は考えている。

雛人形といわれた夫婦が、永年、連れ添いながらも遂に破綻をきたし、その夫人から聞き知った主要原因なるものに私は悲しみに耐えない思いがした。その夫婦の埋め難いまでの溝となったのは、片方が固執した、病的なまでの潔癖感であった。お互いが生きた肉体を持って、そのクレパスは、それほどまでに大きくはならなかっただらうし、まして、落ち込

むこともなかっただろうに……。彼と彼女が「信愛」と呼んでいたものは、至極ありふれた男女のいとなみと、世間体という観念だけに支えられたものに過ぎなかったようだ。

戦後、それまでの一つのモラルが崩れて、人間本位の世界が、やってきた。妻という座を持っていることだけで総てが正しくて、二号さんが総て悪女なのだというお話は、お伽話になってしまった。

もともと人間の美しさというものは、心と肉体を一つにして生きるところに芽生え、それが幸せを呼ぶものであるということを、平和の訪れによって思い出すことが出来たといえるだろう。世界の地図が塗り替えられるのと同時に、人間性の分野も大きく塗り戻されてきたのだ。否応なく狂気の時代を流されてきた私にも、それは大いに幸いした。

早坂夫人や渡部夫妻が語られたように、その世界に足踏み入れたことのない人々には狂態と映る男と女のいたわり合いも、かえって夫妻の情を強くする楔であることは、知る者ぞ知るで動かせない事実であろう。その真情を理解出来る者は、この二組のご夫婦の愛の深さに、めくらめく程の美しさと羨望を禁じ得ないに違いないと思う。

私もまた、妻に対して私の身内の叫びを伝え、この十年の間をSMプレイに終始してき

た。未知のそれを求められた妻としては、当初、驚きと不安と羞恥の襲来と思えたに相違ない。事実、怒りを現わして抵抗し、悪態の限りを尽したものである。

しかし幸いにして、妻は、私に対する究極の信頼感と、理解しようとする人間性を、愛という器の中で持ち続けてくれたのだ。そして、私の伝える叫びを沈黙の中に呑みこみ、噛み砕き、消化しようと務めてくれた。

鉄塊の如き堅い裸身が次第に綻びて、柔らかく温い地肌が拡がり始め、沈黙の扉が徐々に歓喜の歌声で押し開かれ始める様子は、私の身内に凝固していた氷塊を徐々に溶かす春の訪れを感じさせてくれたものである。今はあの重たく堅かった扉が、どこへ消滅したのかを探ろうとも思わぬが、あの頃は、その扉の再び閉じられることを恐れて、ひたすらに「微速前進」「前進休止」を繰り返したことも、懐かしい私達夫婦の辿り来た一里塚といえるだろう。

以来、私達は、私達だけの「陽光」に浸りつつ、気がついてみると十年の歳月が流れ去っていたのだ。

強い緊縛プレイといえるほどのことは、しなかった。だが、私達の上にも「技術革新」時代が反映し、常に目新しさを求めるプレイ生活が、私達に「生きている実感」を味あわ

せてくれた。

パイプ、羽根、化粧品類、果物類、生鮮食品類、電器類、化学物質品……等、あらゆる物が、妻の裸身のあらゆる部分に、それぞれ異なるプレイ感覚の妙を訴えた。

妻と私が演じる白夜の詩。それは、私達夫婦生活の基礎でもある。そしてまた、完全な陶酔は、細胞に訴えて血行を促進せしめ妻の美容の基礎ともなっていると思う。

大空に枝葉を伸ばして滋雨を求め、地中深く根を張って滋養を吸収する大樹にも似て、双唇樹（ふみき）と呼ばれる由来を女に見出すのは容易である。

草花も交媒あってこそ花開き、果樹は接木によって健やかに実を結ぶ。私は、私達の花園に咲かせた妻という名の麗花を、いつまでも美しく保ちたい念願のもとに絶え間ない手入れを怠るまいと思う。この花園と麗花こそ私の生活の基礎であり、希望であり、宝であるからだ。

いつの日か、この花園を訪れる旅人があるかも知れない。そんなとき私は、いや私達はきっと、私達だけの秘泉から汲み上げた美酒を以て、もてなし、心からの歓待のもとで、きっと新しい白夜の詩を詠うことだろう。

——（白夜の詩、おわり）——



三回分載・M体験小説

亜矢様をめぐる

不思議な夜

(1)

沢井和雄

フォトは本誌撮影部のMシリーズ

あるHさんが、ママをしている
“あけぼの”で運がよいと、マ
マさんやMあしらいの上手いコ
に当たって、プレイしてもらえ
た人もいると、聞き齧ったのが
事の始めでした。

亜矢様と初めてお会いしたのは、まだ肌寒
い春雨の、しとしと降る晩でした。

同好のN氏との噂話で、M仲間でも定評の

「どうせ行くんなら、はなっから、犬の首輪
でも嵌めてくんでさ。気に入ったコがいたら
構わないから、パツと見せちまって、外して
くれって頼むんですよ」

N氏は歯切れよく、激励してくれました。

最近、ほとんど御無沙汰で、その方面は本
を読む程度にしていた私は、そんなに、とん
とんと運ぶとも思いませんでしたが、M心の
浅ましさとでもいうのでしょうか、折角のN
氏の名案を容れ、格好の犬の首輪を求め、レ
インコートの襟の下に嵌め込んで、ちょっと
見には、わからない工夫を凝らしました。
“あけぼの”は場末の盛り場の、はずれにあ
って、周りは殆どが、しもた屋風の静かな所
に、一軒ぽつんと赤い灯が見えて、すぐにそ
れと、わかりました。

——(1)——

一見してスナック風で、店の中は普通にカウンターがあるだけでボックスもなく、隅の方に鉢植えのシクラメンが、つましやかに咲いているほかは余り飾りつけも少なく、入口近くに置いてあるデュークボックスが店のスケールにしては豪華に感じられました。

始めて行った店では、私はいつもオールドのオンザロックを場つなぎに頼む事にしていきますので、二口三口、含みながらママさんや店の女の子のやりとりを聞いていたり、派手な笑い顔を眺めてみたり、周りの雰囲気と合わせる調子でバーテン役らしい中年の女に、二言三言、話しかける程度にしていました。

酒を飲んでも、もてなかったために、そうなったのか、それとも元々そういう性質^{たち}だったのかは、中年もかなり廻った私自身にも、よくわからなくなっているのですが、酒場へ行っても、私は余り奇麗な子には直接、声を掛けず、正面から見ているよりは寧ろ片隅でじっと視線を送り、他の客と、それもあるべくハンサムな青年と、やりとりしているのを見ての届かないような気分になりながら飲んでいるのが性分に合っていました。

亜矢様のお名前を知ったのは、確かにこの日なのですが、皆が呼んでいるのでわかった

のか、ご本人に訊いたのか、今になって見ると、さっぱり思い出せません。

亜矢様は、その店では、やはり一際、目立って奇麗だったのですが、私の印象に、やきついたのは、奇麗な事よりも、表情のかわり身が早く、殊に目つきと、頬から顎にかけての線の、変わり方の中が広いとでもいうのでしょうか、打てばピンと響くような豊かな情感の持主に思えた点でした。

何か、ひょっと考えつくような感じの時はくりくりと瞳をめぐらせて気忙しように、まばたきを続け、睫毛がピッチリと揃う感じになります。次に自分も楽しそうに笑い、周りにも、どっと来させるような気の利いたギャグなどという時は、真っ白な格好のよい歯並びを一ぱいに見せて、両頬に、たっぷりと笑窪を刻み、ころころとしたオクターブの高い笑い声を立てると、柔らかそうな喉をゆさぶりながら首筋を覗かせて、無難作に羽織った黒いカーディガンが肌の白さを一層、浮き立たせる感じになって来ます。そうかと思うと話の合い間に、自然とそうなるのか、わざとそうするのはわかりませんが、目もとに急に瞼が籠り、両頬の笑窪を、かき消すようになくしてしまい、つんとした感じで、まるで

ぶつような視線を、それまで笑い興じていた同じ男に落としてみたりする事があります。

又、ちょっと高慢な感じのする、ふふふという含み笑いが、丁度、流行^{はや}っているテレビ番組のプレイガールに出て来る含み笑いにも似て、酔客に対する、あしらいも見事にこなし、いかにも男心を引きよせる感じでした。

もちろん、その時が初めてなので、(いい線を行ってるな)と思った程度で、間もなくその人が、私や、彼女をめぐる何人かの男たち(今でも表面に浮かび上がった人の数しかわかっていないのですが)に君臨し、統治し彼女との距離や位置さえも彼女によって決定されてしまうという、いわば絶対性を強めつつある「身分の違う方」に、おなりになるとは夢にも気がつきませんでした。

正確に表現すれば、この文章の書き出しでは「亜矢ちゃん」で一向に構わない筈なのですが、これを発表する頃は亜矢様と申し上げて置かないと、不敬だといわれてお仕置きを受け兼ねないし、それよりも怖い事は、捨てられるか捨てられないか、やきもきさせられたまま宙ぶらりん^{そらり}に放って置かれるのが、寒けがする程ぞっとする事なので、最初から亜矢様と書かなくてはならない気持なのです。

かなりネバって客の出入りも、まばらになって来ましたので、私はレインコートの中の犬の首輪を握りしめながら、何かきっかけがあれば、亜矢様に話しかけてみたいと心待ちしつづけていました。

私の一つ置いた隣には、私より、ちょっと大柄な、やはり中年の男がビールを空けて居りました。色もののカッターシャツの上に、洒落た感じのカシミヤのチョッキを着込み、英国製らしいダブルの茶の脊広を、きちんと着こなした風は、まあ一流会社の課長といったタイプでしょうか。服装は、なかなかのものでしたが、その割に陰気臭く、私も余り他人の話に乗って行く方でもないのですが、狭い店のなかで、みんなが、どっと沸くところでも、同じように余り笑わない様子でした。

亜矢様は手が空いて来たと見えて、カウンターの潜りを通して、ずっと私の右隣というより中年の男の隣の席に坐り、むっとりしたその男にビールを奨めたり、自分でも飲んだりしている様子でした。

さっきから亜矢様の事が気になっているものですから、私は自分の喫った煙草の煙を追う振りをして何気なく亜矢様の横顔を覗いてみました。横顔も、なかなかのものでした。

亜矢様は、相変わらず表情豊かに、はす向かいの遊び慣れた感じの眼鏡の男と、テンポの早い、やりとりをしています。少し薄暗くなった店の灯りで、亜矢様の感じは、ちょっと神秘的に見え、再び私の心を把えたのですが、すぐそのあとで、私は胸がキュッとしまるようなシーンを見たのでした。

中年の男は何となく口の重い感じで、黙々とビールを口に運んでいる様子だったのですが、驚いた事には、亜矢様は一旦、口に含んだビールを男のコップに吐いてやっているのでした。中年の男は、心なしか目を瞑って、亜矢様の吐いたビールを、うっとりとして飲み、コップを頬に当てて、肩で大きな息をついて再びコップを口に持って行くのでした。飲み終わると、また亜矢様が口に入れ吐いてやるそんな事が何回も続いているのですが、亜矢様と中年の男は一言も口を利かず、亜矢様だけが、はす向かいの眼鏡の男とボーリングの話をしたり、投げる真似をしたりして、相変わらず陽気に振舞っていました。じっと横顔を見つめつづけている私の方には、未だ一瞥さえも与えてくれませんでした。

中年の男が、何かぼそぼそといったように話した。亜矢様は、はす向かいの眼鏡の男の話

に大げさな笑い声を立てて応じながら、すつと手の先だけで中年の男のコップを取り、鮮やかな紅を散りばめた格好のよい唇を、やや、うつ向き加減に近寄せると、事もなげに、日常の茶飯事ででもあるかのような、極く自然な仕草で痰唾を、とろりと流し込むと、すぐに顔を上げて、すいと男の方にコップを、すべらせました。相変わらず手の先だけを動かして、笑窪や、ゆるませた目もとは、話し相手の眼鏡の男に向けたままでした。

それまでは煙草の煙を追う振りをしていた私は、思わず、はっとして胸のうずきを感じながら、視線を、まともに亜矢様の方に移し切ってしまいました。手元に力が入って犬の首輪が、ぐいぐいと締まり、額には、じつとりと汗が、にじみ、もっと次の動作を見たい気持で一ぱいになってしまいました。

すると亜矢様は、はす向かいの眼鏡の男から急に視線を外して、殆ど直線的に私の顔へ向けて来ました。視線を移すというよりは、殆ど見据えられたという感じでした。笑窪や目の柔らかみは一瞬のうちに消えて、頬から顎にかけての線が、ぐっと引きしまり、店の灯りで青白くさえ見える肌の白さは、何か凄艶とでもいうのでしょうか、その場に、ひれ

伏したいようなショックで、私は思わず伏目がちにさせられてしまいました。

こんどは亜矢様は、^{おとが}頤を心持ち突き出すような格好で唇元を、きゅっと曲げ、鼻先で嘲笑するような顔つきをされ、ずっと視線を私の反対側の黙々と痰唾入りのビールを味わっている男の方に戻してしまいました。

取り残された私には、亜矢様の肩まで届くかと思うような、長くて黒々とした艶のある髪の毛の束が目につり、亜矢様の視線を直接、浴びていないだけに、ゆっくりと見つづけていますと、心なしか甘ったるい香さえ漂ってくるような気がしていました。

(何かがいいたい、告白したい、ひれ伏してお願いしたい)などと想いは、こみ上げてくるのですが、ほんの一瞬間だけ、それも殆ど軽蔑と嘲笑のためだけに視線を向けてくれただけの亜矢様に、それ以上、とりつく島もないし、その上、横にいる陶然として黙ったままの中年の男の事も気になって声をかける事も出来ず、心の乱れを皆に気づかれてしまうような気分になって、私は、カウンターの内側で用をしていた男装の少女に、大して食べたくもないサラミを頼み、なんとなく、その場をつないで過ごして居ました。

夜が更けてくると、酔客の出入りも殆どなくなつて、デュークボックスのレコードも途絶えがちになるものですが、そんな、ちょっとした合い間に、亜矢様がコインのつぎ足しに、ずっと席を離れました。中年の男は、カウンターのの上に腕組みをして、その中に顎を埋め、目の前のコップを見つめたきりです。はす向かいの眼鏡の男は、ママと何か面白そうに話し合っています。バーテン役の中年の女と男装の少女は、せかせかと、注文の肴を造ったり、洗い物をしたりしています。

(今だ。チャンスは) そう思って私は、そつと立つと、さり気なくデュークボックスのレコードを探す振りで亜矢様に近づきました。その時、まるで後ろが見えるかのように亜矢様が、くるっと振り向いて、睨めつけるような鋭い強い視線と、おずおずした私のそれとが、ぱったりと合ってしまいました。

何か強い引力に引き寄せられたように私は亜矢様の耳もとに近づくと、レインコートの襟を払って犬の首輪を見せると殆ど同時に、

「私はマゾです。お願いします」

と、うわ言のように口走ってしまっていたのでしたが、亜矢様は、眉一つ動かさず、声を押し殺した調子で

「わかってるよ」

と、つぶやくと、素早い動作で網タイツに包まれた、すらりとした右足を伸ばして、私の両足を、ぽんぽんと蹴りながら鎖を、ぐつと引っ張ってくれました。

ふうっと安堵が襲い、全身から力を奪って行くように思えました。

亜矢様と私の初めてのふれあいに、スポットライトが晃々と輝いて、ほかのすべては暗やみの中に沈んだような感じでした。

私は椅子に戻る気もなく、立ったまま、少し落着くまで時を過ごしました。後ろ向きになつていたので、傍^{はた}から、デュークボックスの音楽に聞き惚れているように見えたかも知れません。

やっと客らしい顔にかえって、お愛想を済ませると私は、ずっと押し黙ったままの中年の男に気づかれないように亜矢様に、そつと会釈をしてドアを外に押しました。すつと冷たい空気が頬に快い感じがしていました。小止みにはなつて来ましたが、まだ外は雨足の音が軽快に、ひびいていました。

一、二歩、外へ出て振り向くと、亜矢様が見送りに来て下さっていたのでした。

「また、どうぞ」



破って私の耳に伝
わると、私は何の
抵抗もなく雨の道
に両膝を揃えまし
た。端然とした亜
矢様のお顔は、殆
ど灯影の消えた、
うすぐらい中で、
神々しいほど、ほ
の白く浮かび、私
は知らず知らずの
うちに、ひれ伏し
ていました。

「こうして、あげ

— (二) —

その後も時々「あけぼの」を訪れたので
すが、私の閑な曜日と、亜矢様の休みの日と
が、かち合ってしまったりして、もう亜矢様
には会えませんでした。

慣れて来てからは時々「あけぼの」のママ
さんにねだって、足腰を揉ませてもらったり
横っ面を引っ叩いてもらったりしました。

男装の少女に、うどんを造ってもらった時
に、少し床にこぼし、犬のように這いつくば
って床に落としたものを、じかに食べさせら
れた時、ママさんは調子に乗って、熱いつゆ
を散蓮華からヒタヒタと私の頭へ垂らしたり
して「ママ、やめて。可哀想よ」と少女に止
められたりした事がありました。

ママさんのS振りも、なかなか堂に入った
もので、既にM男を何人も持っているらしく
「SMの関係でも、愛情がないと駄目なの」

と私に言って、それ以上のプレイには入り
込む余地のない事を暗に教えてくれました。

ムードとしての楽しみは、ある程度、与え
てもらったのですが、亜矢様を初めて見た、
あの夜の感動は、再びよみがえってくる事が
ないままに、私も身の雑事に取りまぎれ、

る」

額^{ぬか}ずきつづけている私の首筋に、亜矢様は
跨がるようにして、ぽんぽんと跳ねかえりま
した。ヘッドライトが一つ二つ、私の目を、
かすめました。亜矢様は、やめません。人
の話し声もするようです。

プレイとか芝居とかの域を超えた森閑とし
た厳肅さが、あたりを包んでいて何が起ころ
うとも亜矢様のお許しがない限り、額^{ぬか}ずいた
頭を上げる事は冒瀆のような気さえして私は
ただ、じっと、ひれ伏しつづけるのでした。

亜矢様は、出口で普通の客にするように声
をお掛けになると、足早に私に近づいて、

「こっちへ、おいで」

と言葉つきも、ぐっと変え、レインコート
から鎖を引き出すように握りしめながら駐車
している車の間に私を引きずり込みました。
舗装した道路は、すっかり濡れきっていて
もう「あけぼの」しか、ついていない薄灯り
が、かすかにゆれながら映っていました。

「お坐り」

亜矢様のご命令が、しんと静まった夜気を

Mの世界も、雑誌を通じて空想する程度で済ませられていました。

多分、十月の末か十一月の初め頃と思いますが、“あけぼの”の近くの盛り場で、Wという女名前のついたクラブ風の店が、有名なKと肩を並べるほどのムードで、Mの社交場として登場するという広告をみて、早速に私は、近い所でもあり、一寸のぞいて見ようかと軽い気持で、そこへ出掛けてみました。

バーやクラブ専門のビルの地下にあるWはこじんまりとした感じの店でした。

本当はWという女名前だったのですが、私や、これから先に出てくる人達の間では“魔女の館”と呼ぶようになりましたので、これからは“魔女の館”と書かせてもらいます。

“魔女の館”は、Kとは対照的に明かるい照明で、床は群青色のウールの絨毯が敷きつめられ、入口の手前の方は左側がスナック風のカウンターになっていて右側にボックスがあり、カーテンが閉められるようになっています。その先はサロン風で、向かって右側はソファー式になっているのですが、左はクッションを敷いて坐るようになっていました。左側の壁には、見覚えのあるソフトな画風のM画が、殆ど実物大に描かれてあるのが目に立

ちます。手前の方は鞭を持つ女の図で、革の衣装を、まとい、胸は露わにしたままの美女で、目元が一寸、やさしい感じです。奥の方のは、樽の上に横向きに顔を据えられた男の頬ゲタに、むっちりとした、お臀を戴せた美女が、ハイヒールを男の両手に押しつけて、うっとり目を細めている図です。クッションを置いて坐るのは、この画を邪魔しないためでしょうか。

私の出掛けて行った時間が、やや早かったせいか、男の客は三、四組程度で、左側に坐り、右側のソファーには女客と店の女のこらしい感じの人が腰掛けていて、ボーイがひざまずいて応待するのが、何か羨ましいような気がしていました。

そのうちに見覚えのある“あけぼの”の男装の少女が現われたので彼女を相手に“あけぼの”の事など話しながら楽しんでおりました。 Hammondオルガンの甘いメロディーが弾き手の女性の、しなやかな指先から流れてくると、壁に描かれている、うっとりとした美女の息づかいが聞こえてくるような感じでした。

九時過ぎになると、開店早々との事で、招待客やら一般の客やらで、男女の数も、かな

り増えて来ました。その多勢の人達に混じって、私の席の前を、すっと横切った女をみてはっとしました。忘れもしない亜矢様なのでした。チャコールグレイの格子縞のトッパーを羽織って、その日はベージュ色のパンタロンを穿いていました。二、三人の連れが、いりらしく、可愛らしい笑窪をみせて、いかにも楽しそうに話し合っていました。時々、チラチラと目をやってみるのですが、亜矢様はいっこうに気づいてくれません。もう半年以上にもなるのですから、忘れられていても無理のない事です。

しばらく経ってから亜矢様が、すっと立ちました。向かいのトイレにお入りになったのです。(傍へ行ってみようかな)と思っても連れの人も居るし、覚えていてくれるかどうかかわからないので、あの夜、中年の男がしていたように、オンザロックを頬に当てて、そっと目を瞑って一口、含み、又頬ずりをしては目を瞑り、一口含む、という動作を繰り返しながら、カーテンの陰に入って行かれた亜矢様を慕っていました。

「ドア。あなたは、何て意地悪なの。」

御婦人は、そのかげで何をしていらっしやるの。

好きだった若い頃の芳野眉美の詩の、ひとこまが思い出され、私は、ふうっと長い溜息をついていました。

「ねえ、私を覚えていらっして？」

急に甘い声が聞こえ、私はハッと目を開けました。亜矢様の声でした。あんまりタイミングが、ぴったりなので、私には亜矢様がテレパシーか何かで、私の思っている事が、すぐに、わかってしまう超能力者でもあるかのような気がしていました。

「ええ、覚えていますとも。今度は、こっちへいらっしゃるんですか」

「時々よ、アルバイトだもの」

「これから、しょっちゅう伺いますから、よろしく願います」

「こちらこそ」

と普通の挨拶を交したただけなのですが、もし誰もいないか、亜矢様がお許し下さるなら初めてお会いした、あの夜のように、ひざまずいて、ひれ伏したいところでした。

その後、亜矢様は、色々な男の席へ行って一緒に飲んだり話したりしていましたが、私の処には全然、寄りついてくれません。他の女のコがついてくれましたが、何となしに話を通り一辺になってしまい、ぐんと胸に来る

感じにはなりません。

私の視線が、たまたま亜矢様のそれに合うと、それまで談笑していた亜矢様の表情は、あの夜のように、きゅっと変わり、いかにも蔑んだ感じになって、必ず私の方から視線をはずすにはいられませんでした。

クッションの上に坐っているのさえ気恥かしい気分になって、相手をしていている女のコの脊もたれに、自分のクッションをすすめて、私は絨毯に、じかに坐り直しました。

右手を、ちょっと通路に出していますと、亜矢様を通りかかり、ふんと軽く顎を、しゃくるようにして、スリッパの先で私の右手を踏んで行ってくれました。私は、踏んでもらった手の甲の辺りに唇を寄せました。

カンバン近くなり、客の数も、かなり、まばらになった頃、亜矢様は、やっと私の席に坐ってくれました。私は、いそいそとして、クッションを直し、壁にもたれても亜矢様の服が汚れない様に気をつかいました。

「何を召し上がりますか」

と私が、たずねますと、亜矢様は

「私はビールしか飲めないのよ。覚えておきなさい」

と応え、セブンスターを一本、取ると、格

好よく唇に銜え、傲然と私を促してライターをつけさせてから、

「ビールを頼んで来て。それから灰皿も取りかえるように」

と、テキパキとした調子で、私にお命じになりました。

ボーイが、うやうやしく持ってきたビールを一口、美味しそうに召し上がると亜矢様は「お前は女に媚びるような目つきをするね」といって、まるで私の心を見透すように、じーっと私の目を見据えられました。

私は、まるで三十年前の中学生の時のように、たじろいで、口籠りながら、
「は、はい。あなたの目をみると、自然に、そうになってしまうんです」

と訴えました。亜矢様は唇を軽く開いて、心の奥を品定めするような目つきをなさると「お前なんか、一目、見ただけで、Mだってわかるわよ」

と仰言いました。

「犬の首輪が見えましたか」

と訊くと、

「そんなもの、見る気もないし、見えなかった、わかるのよ。お前が『あけぼの』のドアを、くぐったとたん、こいつは、ほんもの

だなと思ったもの」

と軽く仰言います。

「でもあなたは、少しも私の方を見てくれませんでしたね。今日のような冷たい目つきをされると、たまらなくなるんですよ」

と私が、まだ崇拜者の範囲で讚美したつもりでいいますと、

「犬が来たからって、どうして一々、見てやらなきゃならないのよ。放つといたって犬の方で寄ってくるもの。可愛ければ撫でてもらうけど、可愛くなければ見てもやらないわ」と、すっと応じられる調子です。

私は不思議なものに魅せられたような気持ちになって、まじまじと亜矢様の顔に見とれ、目や、鼻や唇の一つ一つを、ゆっくりと見回しました。

まだ二十三、四というところでしょうか。アイラインを奇麗に伸ばした切れ長な目が先ず目立ちます。その上を、たどると、細い長い眉毛が流れるように掩っていて、右から左に大きな波のように、うねってみえる、やわらかそうな髪の毛の線と一緒に、なだらかな額の領域を格好よく、わけ合っています。

少しも淀みを見せていない目の色は、空色に澄み切って、赤黒くにじんだ線が一本も見

えないのは、女としての悲しみや涙などで汚れた事がないためなのでしょう。瞳の色は漆黒のように艶があり、まばたきをするとき毛が、ぴったりと揃って、眼光が、きらきらと輝いてみえ、何か眩しいものに出合ったときのように、私の方が必ず伏目にさせられてしまします。

鼻は、とり立てて高くもなく、平凡な若い女性のその感じですが、含み笑いをする時とか、軽蔑するような視線を投げる時とかはその目立たない鼻が、にわかに一番の主役になって来ます。

二つの深い線を下へたどると、唇の貌が目立ちます。ふくらみかけた蕾のように厚さはほどよく、やや左側に切れ上がった感じにみえる角度が、そこの女優などの整った感じよりも、はるかに個性的で、頬から顎にかけての線は、全体として細そりして、切れ込みが鋭く、彫りの深い感じを持たせます。

頬から唇にかけての肉づきは、こうやって見ている限りでは、うすく見えるのですが、笑窪を刻んだ時は、反対にふっくらとして来るのが不思議なぐらいです。首すじは細そりとして、肩の方へ、うねうねと続く線の女らしさは、肌の白さを伴って、そこだけ見てい

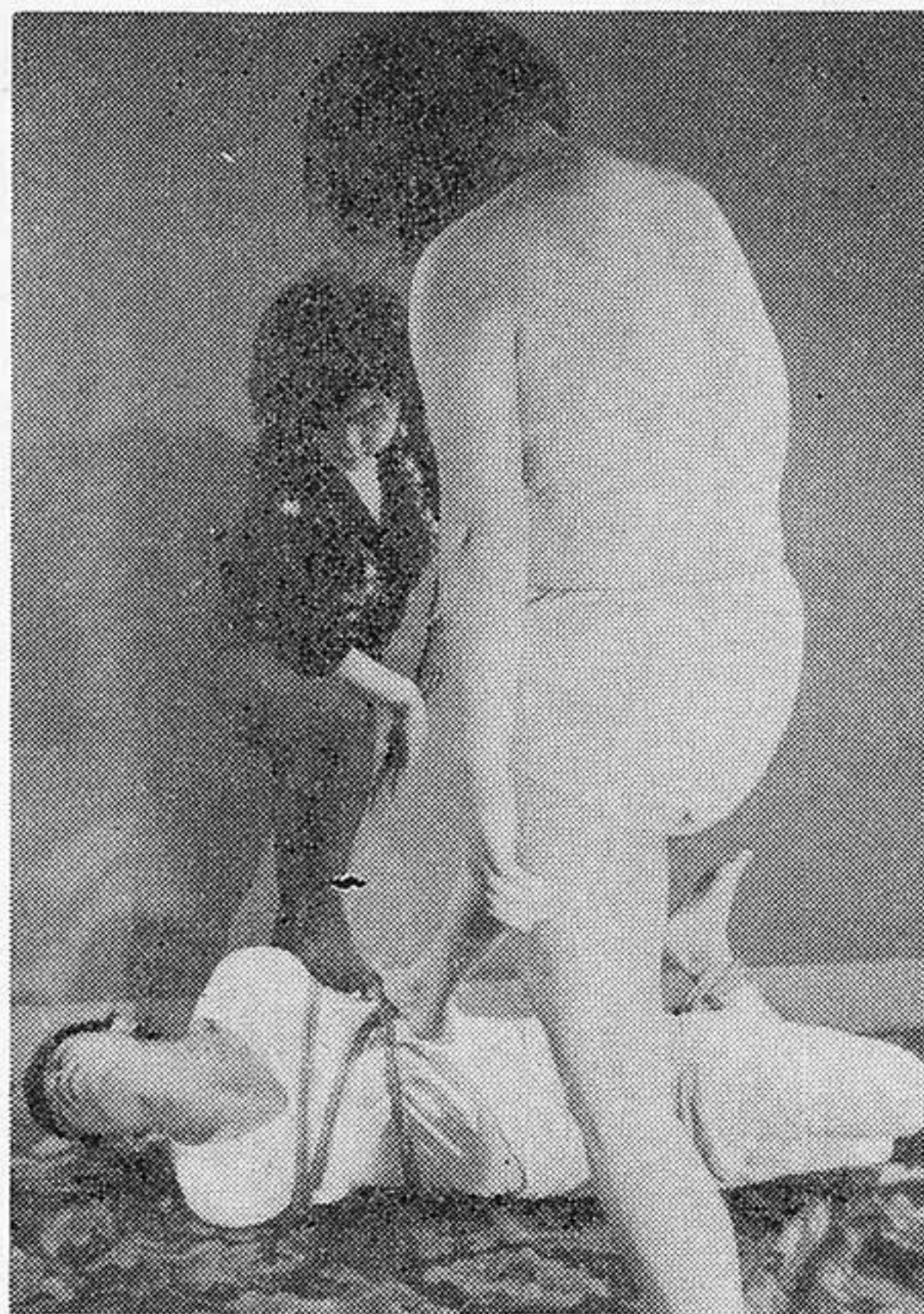
ると、寧ろ可憐な感じさえして来ます。

どうやって見ても妖艶というには女盛りから、はるかに遠く一見して、ういういしい感じさえ持たせ、胸のふくらみも、それほどなく、お世辞にもグラマーとはいえません。

ただ、全体から発散している独特の雰囲気や表情や、一言、口をひらけば、言葉のはしはしがM男の心を鞭打って把えずには置かないのは、いったい、どこから生まれてくるのだろうか。年にそぐわないような豊かな経験を持つベテランなのだろうか。それとも、天性の女王などというものが、果たして実在するものだろうか。

私の情念をよそに、亜矢様はセブンスターを旨そうに、くゆらせていましたが、ちょっと例の含み笑いをなさると、急にお顔を近づけて、一気に煙を私の顔に吹きかけました。私は口を、ぽかんと開けたまま、亜矢様のお唇の甘さを拾うように、顔を動かしながら、煙の群れを追いつづけました。

亜矢様は私の動作を、テーブルに頬杖をつき、きゃしゃな指先のしねりをみせて、さも可笑しそうに唇元をゆるめながら、ご覧になっていましたが、不意に顎をしゃくするようにして、私をお招きになりました。



「はい」

私が真顔に戻ってお傍へ体を寄せますと、
「奥の部屋に入って」

と、亜矢様は表情を動かさずに、ちょっと
小声で仰言いました。

私は何の事か、よくわからず、一瞬、ぼん
やりした顔をしていますと、

「早くっ！」

と、今度はピシッと命令されました。

私は反射的に坐り直しましたが、すっと立

ち上がっては恐れ
多いようで、ごく
自然に四つん這い
のまま一、二歩、
進みました。

「バカ、みつも
ない。立って人に
気づかれずに行く
んだよ」

亜矢様の叱り声
で、私はちゃんと
した格好になり、
そっと奥の部屋に
入りました。

部屋の中は、急
に照明が暗くなり、二燭か三燭の色電球が、
ちらほらしている他は、テーブルの上に蝋燭
が二本、立っているきりでした。

床には粗末な荒筵が敷いてあり、壁は一見
無雑作に木の皮を寄せ集めた感じに、なって
おり、見るからに牢獄らしいムードで、ドア
一枚隔てた豪華なサロン風の部屋とは、いか
にも対照的でした。

左側には水車のような仕掛けがあり、男を
載せて、ぐるぐる廻すらしい把手がついてい

ます。右側に、天井から滑車が途中まで降り
ていて、電気仕掛けで昇降できるようになっ
ています。生の地肌を露出している木の壁に
は、何本もロープや鎖や笞が吊るしてありま
す。隅の方には樽の形をした椅子が置いてあ
り、下の方は穴があいていて、大人の男が首
を入れる事が出来そうです。その傍に漏斗や
脱脂綿が、まとめてあります。

見ているだけで、胸がうずいてくるような
道具立てを、ひとわたり見たり触ったりして
から、私はぺたんと荒筵の上に腰を降ろし、
気持を静めるように、じっとしていました。
男と女がいい合う声がすると、ドアがパタ
ンと開いて、男が転げ込むように入って来ま
した。

「いい加減に観念しなさい」

「荒木さん、汚いわよ」

二人の女が、怒鳴るようにいいながら、つ
づいて来ました。さっき私の処にも、ついて
くれた順子と男装の少女の、とし坊でした。
「待ってくれ。ちょっと考えるから。ちょっ
と待って」

と、わめく男を尻目にして、順子とし坊
は男の上着やズボンに手をかけ始めました。
「暴力はいけない、暴力は止めなさい」

などと男は叫びました。筵の上に坐って、M的なアクシデントに期待していた私には、いささか裏切られた感じの男の言葉でした。「何が暴力よ。この部屋へ入ったら、そんな事は通用しないんだよ」

と、とし坊が云い返しました。順子は腹立たしそうに壁に吊るした笞をたぐり寄せて、びゅーんと空中で素振りをしてから、

「これでも云うことを聞かないのかい」

と下卑た調子で男を促すと、今度は私の方に向かって、

「あんたも早く裸になって」

と、いいつけました。

男は相変わらず、のろのろと、

「一寸、待って。待ってくれて、いってるとでしょ」

と、戸惑った態度をとっていましたが、私は、どっちみちプレイは、してみるつもりでいましたので、素直に服を脱ぎ始めました。

再びドアが開いて、女が入って来ました。

今度は亜矢様でした。

「荒木さん、あたしのいう事がきけないの」凛とした声で平静に亜矢様がいわれると、男は、その一声で急にシャンとした格好になり、上衣を、ぷいと隅の方へ脱ぎ捨てて、

「裸は、かんべんして」

と亜矢様に頼むように、いいました。亜矢様が何かいおうとする前に、

「この野郎っ！」

と順子が飛びかかるようにして、男を筵の上に仰向けにしました。それが、きっかけで順子と、とし坊は、荒木と呼ばれた男を、亜矢様は私を、責め始めました。

それから、誰が打っているのか見当もつきませんでした。背や尻や腹に次々と鞭を浴びて、痛さを耐える間もないほどでした。

荒木の方は、無粋に、

「やめてくれ。今日は、やめだ」

などと抵抗するものですから、さすがに順子も、とし坊も、

「ダメだ。亜矢ちゃん、この人、ちっとも乗らないんだもの、面白くありません」

「そんなんなら、最初から部屋へ入らなければ、いいのに」

ぶつぶつ、いいだしました。

「少し中休みしようか」

といって、亜矢様はビールをつぐと、コップを持ったまま、私の顔に、自然なポーズで腰を降ろしました。甘酸っぱい香が、パンタロンの生地を通して漂って来ました。私が夢

中になって匂いを嗅ぐとすると、亜矢様は意地悪く、慣れた動作で、お臀を一ぱいに当てながら、私の口と鼻を、ふさぐようにしました。呼吸がつかないので逃げようとする、と、亜矢様のお臀が追いかけて来ます。その間、亜矢様は荒木にビールを注ぐように命じたり他の女性と雑談をしたりして、傍からは、少しも私を責めていないようにみえるのではないかと思うほど平然とした態度でした。

「じゃ、あたしはお呼びでないようだから」

「バイバイ」

と順子と、とし坊はドアの外へ出ました。

「荒木さん、どうして素直になれないの」

亜矢様は、荒木に、まるで年上の女のような、いい方をしていました。荒木は、かきこまってビールを注いでいるようです。

「男はね、そこまで来たら、ぐっと落着いて腹を据えるものよ。あんたみたいに中途半端では、あたしが気を使ってしまうじゃない。あたしに気を使わせていいと思ってるの」

亜矢様は荒木にいい聞かすような調子で話しかけながら、するするとパンタロンを、ずり下げました。

やわらかくて、きめの細かい肌です。暗いのと、亜矢様の服でふさがれているために殆

ど何も見えませんが、甘酸っぱい体臭が一ぱいに籠って、さっきより楽に息も出来、私は思わず、すすり泣くような声を立てました。

「荒木さん。この男、泣いてるわよ。みてごらん」

亜矢様は荒木をうながして、私を覗きこませてから、

「こんな事で泣くんなら、これだったら、どうなるの」

と、いいながら腰をすべらして、私が息苦しさに喘ぎながらも、舌を動かしつつづけねばおられないようになさいました。

ぐったりしてしまった私は、亜矢様に、

「いつも、お前の満足を許してやるとは限らないのだよ。ありがたく思いなさい」

といわれ、土下座するような姿勢で、

「亜矢様、ありがとうございます」

と、心から感謝しなくてはならない気持ちにさせられました。

その後は亜矢様のお言葉通り、自分の満足も、お許しが出た時だけで、そのほかは、お預けの状態になってしまいました。最近ではむしろ満足する事が、もったいなくて、いつも、お預けの状態の方が長く、やるせなく、楽しめるようになってしまっています。

私が服を着ける間、亜矢様は今度は荒木を四つ這いにさせて馬乗りになっていました。二人とも、なぜか一言もいわず、そのままの姿勢でおりましたので、すっかり身仕度をした私は、何か場違いのような気がして、亜矢様に軽く会釈をするとドアの外へ出ました。後からわかった事ですが、この荒木という男が「あけぼの」で私が亜矢様に初めて会った晩、隣で、亜矢様に口から吐いてもらったビールを、目を閉じて飲んでいた、あの中年の男でした。

— (三) —

それからは、三日にあげず、私は「魔女の館」に通いつづけました。三日にあげずといっても言葉通りで、亜矢様と別れた翌日は、殆ど一日中、亜矢様の事を想い、天性の女王とも思われる言葉や表情が、はっきりと目に灼きついて、仕事に戻る時は、懸命になって頭を振ったり、やけに煙草をふかしたりして平静を保つように、努めねばなりませんでした。

二日目になると、少し余裕が出て（ああ、あの目は素敵だったナ）とか（あの言葉は、何て素晴らしいのだろう）などと、味わい直す

気分にもなって来て（ああ、明日は会える）と思うと、かえって元気が湧いて来たりするのです。

お恥かしい話ですが私は、これでも医者のはしくれで、見掛けによらず仕事には凝り性の上、職人気質なので、治療にムキになって患者を逃がしたりしたのですが、亜矢様を知ってからは、仕事も営業として、ある程度わりきれるようになったせいか、皮肉なことに患者の数も増え、従業員にも、当たりが柔らくなっていました。

商売柄、美味しいものの食べすぎは良くないと口ぐせにいつていますので、それを自分にもいい聞かせ、週二回か三回だけ、亜矢様にお目にかかるようにしようと、心に決めておりましたが、経済的にも、そのペースなら何とかありますし、仕事についても、かえって気楽になったのかも知れません。

しつこい患者や、いやな、そのの合わない患者の時なども、亜矢様が、

「仕事だけは、きちんとするのよ」

と仰言っていると思ひ込むようにしていましたので、案外うまく、こなせたようです。そんな訳で、亜矢様を精神的な支えにしていたせいか、肉体的な対象として、あこがれ

る事は、それほどでもありませんでした。

勿論、Mの男としての一通りの願望はありましたが、それをこちらから要求するのでもなく、何事も亜矢様の思召し次第なのだと自分にも、いい聞かせていたため、今までに経験した、単なるプレイの相手への思慕を超えた一寸、信仰めいたような気持ちにさえ、なっていたのでしよう。

「魔女の館」へ出掛けて行っても、亜矢様にならずとついていてももらえるわけではなく、大勢の男客の間を行き来する間、ちょっとお相手をしてくれる程度なのですが、「お前」と呼ばれるだけで、心の中に見えない杭を打ち込まれ、自然に手繰り寄せられるような感じになっっていました。この間に、荒木も通いつめお互いに会釈する程度にはなっていました。

十二月の始め頃に、初めてデートが許されて、地下街のあるレストランで食事をするこゝとなりました。私は、まめまめしく亜矢様のコートを脱がせたり、椅子を引いたりして忠実な態度を示しました。ウエイトレスが、ビールを先ず私から注ぐとするのを押しとどめ、亜矢様に先に注ぐように促すと、亜矢様は一寸、満足そうな顔をなさいました。

「外でお会いした時も、奴隷らしく振舞って

も、よろしいでしょうか」

と私が恐る恐るたずねますと、亜矢様は、「そうよ、当たり前じゃないの」

と応え、しばらくしてから、

「ただ、私に気を使わせないように心掛けるのよ。私が変わった女に見られないようにすることね。どんな風にしたらよいかは、自分で考えなさい。奴隷の頭でも、それぐらいは考えられるでしょ」

と、仰言いました。

一見、対等に見えるデートなどの時に、つい男と女の会話になってしまふ事は、女主人と奴隷の関係を損う大きな原因です。私は過去の経験で、人間としての近づき過ぎのためお互いに気まづくなって失敗した事がありましたので、なるべく世間話にならないように注意していました。

「亜矢様は奴隷を、たくさんお持ちですか」

と私が聞きますと、

「そうね」

一寸、考えるポーズをとってから亜矢様は「奴隷といえるかどうかかわからないけど、いろんな事をしようと思う時に、させられる男は随分、いるわ。あたしは、恵美ちゃんという猫を可愛がっているのだけど、恵美ちゃん

の食事の世話をしろって言えば、何時でも忠実にやってくれる男がいるし、会社へ行っても「寒いから一寸、コート借して」といえば黙ってそれだけしてくれるコもいるし、新しい靴を買った時なんか、雨に濡れるのが嫌だから「送って」といえば、どこへでも車を回してくれる、お得意先の男の人もいるわ。

また、会社で癪癪を起こして三角定規なんか放り出したりした時でも、黙って、そっと元の処へ置いといてくれる人。あたしが好きで上役と、けんかして会社を辞めてしまい、ガラス越しに、あたしを見たいために、向かい側の会社につとめ、今でも、あたしを追いかけている人もいる。一年も、つき合って、SMだけだったつもりなのに恋愛感情を持ってしまつて中途半端で、うろろうしてる男もいるし、フィアンセだって決めてあるし、反対に、あたしが、しおらしく追っかけている男も、いるのよ。あたしが、やさしい女になったら、男はどうなるかって実験ね。まあ色々な男とつき合ってみて、自分の若い人生にプラスしたいのよ」

と、それぞれの男との事を、思い出すような眸をしながら、ひとり言のように仰言いました。



「何の、ご用を勤めたら、よいでしょうか」
と私が尋ねますと、ご気嫌を損ねたらしく
急に心持ち、眉を寄せるようになった亜矢
様は、
「それは、あたしが決めます。お前が催促す
る事じゃないのよ」

「ああ、荒木さんですか」
私は、「魔女の館」でのプレイの時、M的
なムードを毀された感じを持っていましたの
で、荒木の事を、すぐ思い出しました。
「どう思う？」
続けて亜矢様に訊かれましたので、私は、

と仰言って、言葉を
お切りになりました。
私は自分の態度を恥じ
て、
「申し訳ありません。
つい自分の事を考えて
しまつて」
と謝りますと、亜矢
様は、
「わかればいいのよ」
と仰言って、セブン
スターの火を促す事で
私への、お許しの態度
を示されました。
「この前、お前とダブ
ルでプレイした男の事
おぼえている？」
亜矢様が訊かれまし
た。

「あの人、Mなんですかねえ。ああいう雰囲気
で、暴力だなんて言葉をいうのは野暮です
ねえ。あれでは……」
と、いいかけると亜矢様は、私の言葉を、
さえぎるようにして、
「違う。彼は、ほんものよ。ほかでプレイし
ていて肋骨を折って入院したぐらいなもの。
ただあの男は、もう一年も、あたしを追っか
けてるんで、あたし以外の人のいる処ではプ
レイを、したくなかったのね」
と説明されました。
「なるほどねえ」

私が感心していますと、亜矢様は、さらに
「荒木さんは、最初は、あたしとSMの関係
だったのよ。適当にプレイしてやっているう
ちに、結婚したいなんて不純な気持を持った
ものだから、プレイは、してやらないことに
したのよ。そうすると荒木さんは、恋人には
なれないし、奴隷にもなり切れないし、変に
ハムレットみたいになったんでしょ」
と続けられました。私は、あの中年男の荒
木が独身だったとは気がつきませんでした。
「奴隷だったら、あたしに責められているの
を、ほかの女の子に見られたり、あたしの命
令で、ほかの女の子に責められたりするの

嬉しい筈じゃない。あたしと二人きりの時だけ奴隷になっていたいなんて図々しい考えだわ。やっぱり恋愛感情があるからよ。そんな不純な気持で、SMを見ている荒木さんの態度が、気に入らないのよ。だから、あたし、ほっとくの」

亜矢様のお話を聞いているうちに、私は身につまされる思いがして、ついつつかり、

「可愛想にねえ」

と溜息を、ついしてしまいました。

「お前もそうになったら、奴隷にしてやらないわよ」

と亜矢様に、すかさず畳みかけられ、

「とんでもありません。私は分際を、わきまえて居ります。ただひたすら、忠義を尽くすつもりですから」

と私が慌てて申し上げますと、亜矢様は、

ふふふと笑いながら、

「どうだかねえ。まだ、あたしに対する気持が足りないんじゃないかしらねえ。まあ素質のある事は認めてあげるけどね」

と仰言いました。

私は深い感動の気持で、亜矢様の顔をみつめました。Sの女王の实在を半ば諦めて、安っぽいプレイの対象を探すことに慣れていた

私は、この日のデートでもプレイへの期待がふくらんでいたのですが、亜矢様の前に出ると、私の考えていることなどは、一目で見透かされてしまう気がして、期待する事自体さえ恐れ多く、プレイなどの範囲を超えた、すべてについて、この方のお指図に従うべきだなどと考えていました。

「亜矢様。つまらないことですが、迷っているのを教えて下さい。たとえば、いい加減でもよいですから、答えて頂けば、その通りにしたいんです」

と、私は部下が上司に判断を仰ぐような態度で亜矢様に伺いました。

「なんのことさ。いつてごらん」

亜矢様は微笑しながら応じてくれました。

「つまらんことですが、今度の選挙です。どこへ入れたらいいか、迷ってるんです」

私はその日、近くなっていた選挙に、どうしようかと迷っていました。私は、こんなふうになる前は、左翼運動にも、ある程度、携ったほどで、そういうことにも真面目に考えるほうだったのです。

「バカねえ、そんなこと。あたしの名前でもお書き。必ず様をつけて」

と亜矢様は、即座に仰言って、さも可笑し

そうになさっていました。

（このお方こそ、つまらない現実の社会から遊離して、次元を超えて生きるべき権利のあるお方なのだ）

私は、そんなふうに自分にいい聞かせて、事実ご指示の通りにしました。なぜこんな事を書くかといえ、実はこの事が、それまでの私の生きがい、ふっと書き消すように交えてくれた瞬間だったからです。

「だいたい世の中は、今まで男が威張り過ぎましたね。もうこの辺で女の人に、それも若く美しい人に委せて、その方々のご指示通りやれば戦争なんかなくなると思うんですよ。今にきくと、美しい女の人に支配される世の中になると思うんです。昔は力の強い男が、今は智慧のある者や、要領のよい奴が支配しています。が、どんどん進んで、水道の蛇口をひねるように智慧が簡単に手に入るようになって、経済力も殆ど皆、一緒の世の中になったら、次は美しさだけが、人と人との差を決めるようになると思うんです。そんな時代になったら、国会議員のかわりに、国家美人英雄なんて名前の肩書が、出て来るんじゃないでしょうか。どうです。そうなれば亜矢様が立候補なさったら」

私が調子に乗って冗舌を語っている間、亜矢様は、にこにこしながら、聞いていらっしやいました、

「そんな世の中になったら面白いだろうね」

と一言、いわれると、今度は、まるで予期もしていない事を、全く突然に、

「今日、プレイしようか」

と、ぽつ々と仰言いました。私は諦めていただけに、うなずくだけが、やっとでした。

亜矢様が、すっと、お立ちになりました。

私はコートを持って、亜矢様の後へ廻りました。薄茶色の、少しも目立たないハーフコートですが、まるでミンクか貂のコートでもあるような感じになって、私はぼんやりと見惚れていました。

「あたしに荷物を持たせる気なの」

亜矢様は小声で、しかも激しく私をお叱りになりました。私は慌てて、私の物のほかに亜矢様のハンドバックと買物袋を持って、亜矢様の後に従いました。

ホテルに入り、次の間で私は命ぜられた通り、裸になりました。亜矢様は、ちよっと、お顔をしかめてから、

「ひどい、からだね。これじゃあ奴隷になるより、仕方ないものね」

いかにも哀れんだように、仰言いました。

私は鏡の前に映った自分の張り出した腹部を眺めて、本当にそんな気がして、

「申し訳ありません。ハンサムな奴隷でなくて……」

とお詫びすると、亜矢様は、例の含み笑いを、なさっていらっしやいました。

裸になると、亜矢様は馬になるように命じられて、奥の間の電話のところまで、私を歩かせました。

「とまれ」

と号令を、おかけになると、亜矢様は、そのままダイヤルを廻し始めました。

「光夫さん？……あたし。いつも遅く帰ってご免なさいね。今日は十二時ぐらいになりそうなの。戸棚の左の下に、あなたの好きな、なめ茸と露の甘煮を買ったわ。ひとりで食べていてね。え、なあに……そうじゃないのよ。そんなんじゃないわ。ただ面白い奴なのよ。帰ってから、いつもみたいに、ゆっくり話すわよ……え、光夫さん、嫉いてるの？そうでしょ。嫉く筈なんかないわね。え、なあに……そう。仕事が忙しいの。そう。それじゃあ一生懸命、画きなさいね。後で見て上げるわ。あら、あたしが一番、わかるんじゃない。

ない。何よ、ちよっとも、あたしの事を画いてくれない癖に。ふふふ、変な人。えそう。

あら、あの時は気まぐれだっていったじゃない。こんどは、そうじゃなくなつて本気で……え、もうそんなに……そう。それじゃ、切るわよ」

私の脊中に腰を据えたまま、亜矢様の電話は長々と続きます。やっと終わると亜矢様はまた、次の番号を廻しました。

「もしもし、増本さん。あたしよ、わかるでしょ。又、残業なの、大変ね。あたし？あたし今、どこにいますと思う。そうよ、いい人よ、っていいたいけど。そうじゃなくなつて奴隷なのよ。あたし今、どんな格好で掛けると思う。わからないでしょ。奴隷の脊中に腰掛けてるのよ。増本さん羨ましいでしょ。でも、あなたはダメよ。友達なもの。え、いつ、そう。そんなら、きつとよ。あたし？

あたしは、時間に遅れた事なんてないじゃない。どこ？え、でも、あそこ高いわよ。大丈夫？借りたりしたら嫌よ。そういう事をきちんとしない人、きらいなの。本当に大丈夫ね。それじゃ、その時ね。さよなら」

亜矢様は、その間も下半身に力を入れて、意地悪く、ぐいぐいと私の背中を押し潰そう

となさいます。私は腕立て伏せをした時のように肩が、がくつとなりそうになるのを辛抱するのが、せい一ぱいで、全身から汗が吹き出て来ました。

「何よっ、汚いじゃない。早くタオルで拭いて」

亜矢様は私から、すっと、どいて、ひれ伏している私の頭を、ぽんと足蹴になさいました。同時に私は釈放されました。

からだを拭いて再び亜矢様のお傍に伺うと電話は蜿蜒と続いていました。煙草の灰が落ちそうですので、私は急いで灰血を捧げ持ち格好をしました。亜矢様は、私を振り向きもせずに、ぽんと灰を落とすと、身をくねるようにしながら電話をつづけていました。

「だって、そんなこと、いわれたって、困っちゃうわ。どうしてって、いわれても……意地悪ね。あたしは原さんのことなら、なんだって聞くじゃない。はい、え……いつも守ってます。いう通りにしてるわよ。そんなこと嘘よ。嘘に決まってるじゃない。そんなら今度、会って呉れたら、きつと、そうするわ。だって……そんなにいったって……あら、ずるいわ、そんな事は原さんからいつてくれないわ。女のあたしからは、いえないじゃ

ない。え、本当。うれしいわ。で、どこ？

いいわ。あら、いつだって忙しいってばかり。亜矢様のために閑をつくってくれなくちゃ。そう、いいわ。そのかわり、ゆっくり会って頂戴よ。きつとよ」

亜矢様は、まるで人が変わったように、左薬指を、デコラ張りの机の上を、すべらすようにしながら、話をしていました。私には、みせてくれたこともない優しい笑顔を、見えない相手に向けて、いかにも、いじらしいポーズをとっていました。

その後、ひと通りのプレイは、して頂きましたが、考えてみると、一対一で会って頂いたのは、後にも先にも、この時限りだったのでした。

亜矢様の腿が私の頬に柔らかく当たる姿勢になると、いつもそうですが、私は赤児のように泣きじゃくる気持になってしまいます。

Sの女王を求めて二十年にもなりますが、時には実在を諦めて、Mの心を必死になって追い散らかした思い出もあります。やっとSらしい人を見つけ、女王の真似をしてもいい、わずかに心を慰めた事も何回あったでしょう。真似事をしてもらう人を見つけるだけでさえ、砂の中からダイヤモンドを探すほど

大変だった時期もあったのですから、ひとりで仰向きになって、この顔の上に乗ってもらえる女のひとは、いないものかと、涙でくしゃくしゃになった若い頃や、そして、溜息と一緒にMの心を掃き捨てて、知識を得るためだけに、本の奴隷のようにされて、それこそものを感じてはならないのだと自分にいい聞かせて来た苦しい頃などと、想いは、くると廻って行きます。

そして今（やっと女王のお膝の下に顔を埋める地位になれたのだ。やっと奴隷らしく扱ってもらえる身に出世したのだ）などと想うと、ひとりで泣けて来るのでした。

「そんなに感激しているのなら、今日は、ご褒美をあげようね」

亜矢様は、そんな風に仰言って、私を仰向けになさると、激しいお叱りの言葉を浴びせながら、世にいうネクタールを、ご馳走して下さいました。

感激に蹲っている私に、亜矢様は、冷たいいい方で仰言いました。

「いつも、もらえるとは決まっていななんだからね。そのつもりで仕えるんだよ」

——（つづく）——

カット・マエダヒオミ



奇ク愛読者の皆様。皆様のSMPは、どのような状況でしょうか。私は過去、奇ク誌上に二度程、駄文と、つまらない写真を投稿し編集部の方達のお情けで運よく掲載していただいたラッキーボーイの後藤執生です。

私共夫婦のSMPも、この一年以上は全くマンネリ状態で、ただ日夜、あせりに似たものと、満ち足りない何ものかに、つきまわっていました。月に一度か、二月に一度のSMPを終わって、その夜、行なったプレーを反省してみれば、何の進歩も刺激もない同じ事の繰り返しで、やり場のない不満に襲われて来る最近でした。

奇クを一年分位、持ち出しては、先輩諸氏

体験告白

無料花電車ショー

後藤執生

の行なっているSMPを参考に、何度か真似して下手ながら行なってみました。が、やはり何かもう一つ、味付けの足りない料理を食べているような、感じがしてならない毎日でした。

これは私共夫婦が生意気な事を言っているのではなくて、私共のSM世界での傾向が幾晩かを費やして検討してみた結果ですが、確かにSMの気は十分ありますが、それは奇ク誌での先輩諸兄とは、少しばかり趣きを異にしているように思えるのです。

考えてみれば、私共も、夫婦生活の重症的なマンネリに陥っていた四年程前に偶然、奇ク誌を本屋の店頭で手にした時からSMPを

夫婦生活の特効薬として用いるようになったのです。その結果、次第に、この世界に没入していったまではよいのですが、毎月の奇ク誌を読破していった成果として、SMの世界では、まったくの耳学問、耳年増的な状態になってゆきました。

それに反して、自分達の行なっているプレーは鞭打ち嫌い、浣腸嫌い、勿論ゴム、鼻責め等もノーと言った状態で、二人で行なえる共通した好みは縛りと羞恥責めの二種類を行なうに過ぎなかったのです。時々縛りプレイがエスカレートした時に、吊りとかローソク責めを並行して行なうと言った程度でした。そのうちの一番主になる縛りが、子供の目

を気にしながら行なうので思い切った事を行なえない環境にあり、中途半端になりがちでした。自然、わりあい条件の良いV責めA責めを主体とするSMプレーを五回のうち四回行ない、あとの一回はコンディションの良い時に縛りと言った状態で一年以上を経過したのです。

当然、SMPの全てをレパートリーとする方達でも必ず味わうといわれるマンネリが私共夫婦には、あつという間に襲って来たのは当然の事だったのです。好き嫌いがあるくせに、あせりがつのるのは人間の悲しさで、その割に皆様ののように物事を徹底して行なうという度胸もない、といった状態でした。

そのうち私共夫婦は、閨の中で言葉による羞恥責めを次第にとり入れていったのです。想像の世界で、妻が各種の告白をするという型式のものが二人共、非常に興奮し満足する状態が続き、その想像は次第に御他聞に洩れずエスカレートして行きました。

体験告白の例としては、数人の男から妻が犯される事件。借金の抵当として妻が娼婦にされる話。SMの世界でのベテランを旦那にした妾の話。そのような設定をしながら、妻を誘導して話の筋を展開させているうちに二人共、演技は、なんとか、みられる状態になっていったようです。

そして、それら告白の後のV責め、A責め

も自然に熱が入り、かなり、ひんぱんに告白プラスA、V責めが続きました。しかし、やがてそれも次第にマンネリ化して来ました。そのうち、私の心の中には一つの事が次第に凝集して固まり、そして段々、成長し大きくなって来たのです。

それは全く悪魔的な考えだったのです。私の妻に対するV、A責めの訓練の成果を、第三者に見せる事はできないものかという事を考えたのです。妻と幾晩も想像の告白ゲームをするよりも、第三者を交えた花電車ショーを催す事が幾十倍も強烈な刺激である事は、まちがいありません。

何回か妻と相談し、話合った結果、妻の出した条件は、一、顔を見られない事。即ち身許を知られない事。二、セックスはノータッチの事。この二条件でした。勿論、私も全く同感でした。やはり、そこまでは徹底できないのです。しかし、妻を全裸にして第三者の男達の前で花電車を実演させてみたいという私の欲望は、つのるばかりでした。

諸先輩の方達の中には、何だそれ位の事と思われる方もおられると思いますが、やはり、これは平凡な市民生活を営んで来た、目立たぬ私達夫婦にとっては、大変な事です。又、目もくらむような、なんともいえない刺激的な事でした。自分の愛する妻が他の男達の前で女として、いや、人間として一番、秘

すべきところを、あからさまに披露、のぞかせ、そうして器物を挿入したり出したりするのを見ず知らずの男達に穴のあく程、見られるという事は、やはり何ものにも倍する倒錯した刺激剤でした。

さて、前記の二条件さえ満足すれば妻は、この企てにOKという事だったので、いよいよ、この計画を実行する事になりました。

当然、第三者の男達の人選です。これには一番、苦労しました。特に親しからずといって、一、二度、会った位の知人では相手の身許、性質等が判らなくて不安ですし、又、こんな話を持ち込めず、仮に親しさ、及び身許等が適当な人達でも、次にその人となりが真面目すぎてはいかず、といって不良がかっていては尚更もって、具合が悪いといった状態で、この人選には正直なところ三カ月以上もかかってしまいました。

そして、やっと二人の知人に白羽の矢を立てたのです。次の問題は、この二人に、どのようにして、この話を旨く持ち込むかという事でした。これは一寸プライバシーの面で、公開をはかりますし、それに詳細に書けばかなりの枚数が必要なので省略します。なにしろ、ずぶの素人の花電車を無料で見れるというのですから、それに、すべての事を急がずに、じっくりと筋書を運んだために割合と簡単に成功しました。

最終的に日時と場所を決め、私達はその日の来るのを待ちました。この場所は人選にかかった三カ月間の間に並行して捜した場所です。現在には使用していない消防器具置き小屋を選んだのです。近くにある人家も、二軒共いかなる理由でか今は無人になっていますし国道からは起伏の多い曲がりくねった道を通らねばならないといった、プレイには格好の場所でした。

いよいよ待った当日が、やって来ました。その日は早めに夕食を済ませ、親しい知人の家に子供を預けた私共夫婦は、もう一度、最後の打ち合わせと、道具の点検を済ませた後車で予定の場所に少し早目に向かいました。やはり生まれて初めての異常な事を行なうというためにか、妻も車内では、だまりこくっていました。後で聞いてみると、私が思っていた以上に緊張していたそうです。

予定の開演時間？ より三十分ぐらい早目に現場に到着した私達は早速、車を予定の人目につかぬ場所に駐車し、積んで来た種々の道具を、不安と期待のミックスした気持で運び込みました。

スーツケース、これには小道具類が入っています。それに数枚のゴザ、薄い夏布団等です。次に明かりの洩れないように、以前、調べておいた窓や、すき間に車のボデーカバーの古いのを当てて、手早く釘で軽く止めた後

場所作りをし、スーツケースの中味を、わかりやすいように並べて準備は終わりでした。時計を見ると、もう約束の時間に四、五分前だったので、一度、明かりを消し、私一人、外に出ました。

私が選んだ知人の二人、一応、便宜上、YとZにしておきましょう。この二人を連れて来る間に、妻は最後の準備、即ち、前もってサイズを計り、二、三度、使用してみて、これなら大丈夫と判っている、子供の使うお面の改造したものを、かぶり、正座して待っているという、てはずでした。

車の置き場近くまで行くと、闇の中に二つの人影が見えました。車も二台になっていました。近寄って挨拶を交しましたが、二人共、まだ半信半疑のようでした。考えてみれば無料の上、こんな話は普通、考えられないのですから……。

二人を連れて戻り、いよいよ小屋の扉を開ける時の私の心境は、なんとも表現のしようのない複雑なものでした。誰にも見せた事のない妻の裸身を、夫以外の男、それも二人にさらそうというのですから、いくら私が男でも心臓がドキドキするのは当然の事でした。

扉を開けて中に入ると、妻はやはり正面に正座して待っていました。勿論、着衣のままです。中に入った男三人は別々の意味で緊張のために重苦しい空気に包まれて、場違いな

事を口走って苦笑し合ったりしていました。YとZは普段、偉そうな事をいっていても、おそらく生まれて初めて見物する素人女による無料花電車ショーですから、かたずをのんでいるといった感じでした。

私は、こうした無言の緊張した空気を破るため、妻を立たせました。そうして、着衣を一枚宛、脱がせました。妻自身の手で……。最後のパンティは残したままで私達見物人の方に足を向けて大の字なりにねるように命じました。そこで目線でYとZに合図して大の字になっている妻の股間に近寄せました。

期待と好奇心で胸を、わくわくさせているYとZに、妻の足首を左右から坐ったまま肩にかつぐように頼んだのです。そうしておいて、私はスーツケースから出して並べておいた道具のうちの、大型鋏を取るために立ち上がりました。そして妻の方を見た時は、戦慄に似たようなものが、私の体の中を走りまわった。今この現在、妻は彼女にとって見も知らぬ二人の男達に、パンティ一枚をまとっただけといった姿で、足首の辺りを肩にかつがれて、おおむけに寝ているのです。全く複雑としか、いい現わしようのない気持でした。

私は携帯用電灯を更にY字形に開いた股間のそばに近づけて、見やすいようにしむけておいてから、一気に妻の最後の物を切り裂きました。妻の体は瞬間ビクツとしたようでした。

た。穴のあく程一点を見つめる四つの目。それを横目で見ている私。妻は今、男達の前にその秘所を余すところなく、さらけだしているのです。

私の倒錯した感情の昂まりは、次に妻自身の指による開陳を命じていたのです。電灯を更に近づけ拡大鏡で交代に眺めるYとZ。それからの私達三人の行動は今、ここに書く事をはばかりますが、万一、この告白を、あり

のまま書いても活字には、なりかねるでしょう。ただ、その時の私達三人のやった事を想像していただける材料として使用した小道具を書きますと、コーラの空瓶、ゆで卵、葉のついた生花の束、毛筆と墨汁と皿、習字用の半紙、ピンポン玉に強い糸を数本、取り付けたものの二個。以上のようなものです。

最後に妻の上演したものはピンポン玉をAとVに収め、その糸の先に種々の色の造花と



イメージギャラリー

『解けぬ結び目』

志羽利也

折鶴をぶら下げた、やや開股によるスネークダンスでした。これはYとZの感動を呼んだらしく、深い溜息が交互に聞こえていました。全部が終わってから妻に着衣させた後、無言のまま四人は後片付けをし、車まで帰り、時計を見ると、一時間余り過ぎていました。

先ず、YとZを先に帰した後、私共夫婦は十分程、ついさっきまで展開されていたショックな出来事について話し合い、それから、ゆっくりと車を運転して帰りました。

私達の卒直な感想は、当然の事ではあるのでしょうが、第三者を介在させて行なえば、夫婦の間だけだったら、とるにたりない事でも、物凄い刺激となって返って来るという事でした。私共夫婦にとって、この数年間のうち、この夜くらい興奮し満足した夜を持った記憶はありませんでした。妻も自分で、びっくりする程、ショーの後半は燃えたと語っていました。ですから最後のスネークダンス？はYとZの顔を、かなり正確に観察しているとの事でした。この次に又、もし行なうならもっとSM世界での羞恥責め的なものを取り入れてみたいと思っています。何しろ夫婦共全く初めての事なので、正直なところ無我夢中だったというところです。写真を同封したのですが、百数十枚ある、どれも公表の許可の出そうもないポーズばかりですので、今回は遠慮させていただきます。

コケコッコー

平清盛の寵愛を同時に受けることになった
祇王・祇女の姉妹。又、アラビアン・ナイト
を絢爛と彩る、シャハラザード、ドニヤザー
ドの二人。古来、権力者の好色に奉仕した女
たちの中に姉妹同衾の実例は、意外に多い。
男女一对の性生活に飽きた男は、当然、復数
以上の女性を同時に相手とした遊びを、考え
出す。そして、形質や経験を共に持つ双生児
や姉妹を、いちどきに、その閨房に入れたが

るものだ。

今まで不思議と有明の周辺に、こうした実
例が見出せなかったのであるが、フランスの
美しい女医、ジョセフィーヌ・フリーエール
と、その妹マリイは、二人して有明に隷従さ
せられる運命にあった。

宮殿の奥深く、隔離された一画はエステル
の館と呼ばれ、異人種（日本人以外）の中
で、特に有明の心に適った美女ばかりを収容
していた。これらの女たちは、異人ながらも
最初から「一等扱い」の待遇を受け、したが
って例の惨烈極まりないレセプションの苦盃

を強いられることもなく、一足とびに宮殿の
深奥、有明しか触れることのないエステル館
に送り込まれるのである。

秩序とか統制とかもなく、全くが有明の気
まぐれに委ねられているだけに、ここでの待
遇も一人一人、千差万別であった。たとえば
香港の美人女優、王美齡なども一夜、有明に
召されるまでは、館を出る自由以外は何一つ
拒否されることもなく、好みの衣服も与えら
れ、好きな食事を喰べて長いこと過ごしてき
た。（第49回、参照）もっとも、拷問檻への
短期移管が終わって帰ってきてからは自らの



第五十六回

意示？ という名目で持っていた着物を全部自分の手で焼きはらい（このため、彼女は焼却場で汗みどろになって一日、働かなければならなかった）この国に、ふさわしい全裸の生活を、はじめていたのである。

妹のマリーを手中におさめたことから、さしも、かたくなに抵抗を続けてきたジョセフイーヌも、泣く泣く有明に、その純潔な城門を明け渡すことになった。有明は欲した女を暴力で組み伏せることを好まなかった。手を変え品を変え、威したり賺したりして、結局は女の方から、彼の足下に、ひれ伏して隷従を誓うように仕向けるのである。蟻地獄が砂

前号まで秘密裸女王国の独裁主、有明は世界中から誘拐蒐集してきた数千の美女に君臨し畜隷隷従を強制している。彼女等は、その材質に応じて五段七階級に分類され、巧妙な統制管理を受けている。女ながら名医になるだろうと未来を囑望されていたジョセフイーヌ・フリーエールも、今はその学殖を全く無視されて、はだか身を有明の闥に奉仕する女の一人でしかない。そして、その姉を慕いながら、拐かされてきたマリーの運命もこれと異なるものでなかった。

で作った漏斗の中を、もがきまわるイケニエを、底の方からジッと眺めて、結局は力尽きて手元に陥ち込んでくるのを待つ姿に似ていた。そして、そこに到る道程が彼にとって何ともいえない悦楽だったのである。妹は姉を姉はまた、妹を、その身を犠牲にしても、この悲惨な苦界から救いたいと思う愛情の力を利用してことによって、労せずしてゲット・ツウを、ねらっていた。

小柄な、はだか身を、より小さくまるめて分厚い敷物の中に少しでも、それを隠そうとするように蹲っているマリーの鼻先に、キラキラする黄金のロザリオがつきつけられた。それこそ、正しく姉の生存を証す、唯一のものであった。（第一回、参照）

「おお、ジョセフイーヌ！ おねえさま」マリーは魂切るような声で叫ぶと、身をよじって、さめざめと泣き出す。顔を覆おうとする両手は、後手にくくられていて、どうすることも出来ない。おとす涙は、ポタポタと敷物の長い絨氈を濡らすばかりだった。

陶器のように艶のある真白な肌が桃色になり、宙に向いた両手首が心の中を明瞭に表現して、握ったり開いたり、それだけが特別の

生きものののように、マリーの背中の上で苦悶の踊りを繰りかえしている。

例によって寛衣（トガ）を裸身に、まきつけ、長椅子に寝そべった有明は、気に入ったフランス娘が、一本の金鎖のために心を干々に乱している姿を懶げに見下ろしていた。ボンヤリして見えるときこそ、有明は最も、くつろぎ楽しんでいたのである。このことを、よく知っている高橋侍従は、はるか扉口で扉に向かつて開股跪坐の待機姿勢をとりながら今日のマスターは、なかなか、ご機嫌がよくて仕合わせだったと、ホット胸を、なでおろす想いだった。実際、エステルに來たとき程有明が赤裸々な人間を、むき出しにすることはなかった。あらゆるものは生殺与奪の大権を持っていた。それなりの組織がある以上夫々の官職に応じた礼遇が秩序の基礎となっていた。だが、ここでは有明の気分が一切を支配できる。五段七階級の分別さえ、要らないのである。それだけに、その気まぐれの手伝いをする侍従の立場は、全く運不運があった。何もしないでいられるときもあれ、汗みどろになって女体を痛めつけなければならぬということもあるからである。

ややあって泣き濡れた顔をあげたマリィは「いつになったら、いつになったら、姉に会わせていただけるんですの？」

と途切れ途切れに訴えるのであった。強く言えば逆効果になることは、マリィも身に染みて分かっている。それだけに、声も弱々しく、自信なげに語尾が消えて行った。

「それは、お前次第だよ、マリィ」

有明のフランス語は英語ほど完璧ではなかったが、マリィには充分、理解出来た。

「私は、お前の日本語会話が、それ程、進んでないという報告を受けている。もっとシツカリ勉強して、姉妹二人が、日本語で話が出るまでは、会わせてはやらないよ」

「ウイ、私も一生懸命勉強がしたいんですがでも……」

マリィが口ごもる。

「でも、何かね」

「近頃は碌に教えに来て下さらないんです」女囚のカリキュラムは一旦、決まると、必ず実行されなければならない。エステルへは特別に任命された奥勤めの女官がマン・ツーマンで教えに来る。教え子の成績が悪ければ、その女官の考課にも影響するから、教える方も必死なのである。だから、教えに来なくなったのは、有明の指示によるものなのだ

が、そんなことはオクビにも出さず、「困ったねえ。先生がサボったのでは、いくら生徒が熱心でも、それ程、上達しないのも無理ではないな。それじゃあ、今日は私が教えてあげよう。おい、高橋」扉に向かって跪坐していた高橋淑子大佐がサッと向きを変えて平伏した。

「生卵を二十個ばかり持ってきてきなさい」

厚い絨氈の敷きつめられた廊下を隔てた向こう側の、ドア一つ開くと、雰囲気はガラリと変わってしまった。

裸のマリィが引き立てられてきたのは、例の拷問室、どんな汚物でも洗い流せるように床も壁も殺風景なコンクリートの打ちっ放しだった。王美齡がビニール塗料を吹きつけられたのもこの部屋だったし、そういえばどこかにマリィの姉、ジョセフィーヌの膏汗がしみついていくかも知れなかった。実際、水で流した位では落ちそうにもない不気味なシミが此処彼処に残っていて、哀れなイケニエを



余計、おびえさせるのであった。

卵を運んできた高橋侍従に、何か耳打ちをした有明は、彼女が出て行くのを見送って、さて、というように跪いて慄えているマリィに向き直った。彼の手には短い紐が二本、握られている。

アッといって、抵抗する間もない程の素早さで有明は、マリィの左右の肘に、夫々の膝頭を結びつけた。姉のジョセフィーヌが、しよちゅう拘束されていた方法である。

一方の壁全体が鏡のように思われたのが、ポツと明るくなると、その先が、もう一つ同じような部屋になっていることが分かった。マジックミラーなのである。こちらからは、よく見えるが、向こうからは見えないように光度が調節してあった。

「お、おねえさんっ」

縛られた身を忘れたかのように、マリィがつっ走った。壁面のガラスに顔をぶつけるようにして叫ぶが、もちろん厚い二重ガラスではジョセフィーヌの耳に届く筈もなかった。

ミラーの向こうでは、観念し切ったように従順になったジョセフィーヌが高橋侍従の指図通り、中央の拘束椅子に腰をかけた。手足

そして胴にピシピシと金具が締めつけられるその身動きもならない裸身を正面から見せつけられて、マリィは、ただオロオロと泣き叫ぶばかりだった。そして、何ということだろう。ジョセフィーヌの恰好よく盛り上がった双の乳房、まだ子供を生んだことのない小さな乳首に一つ一つ、細い針金が、くくりつけられたのである。

「いいかい、マリィ。おまえが日本語を、よく勉強しないと、あっちにいる、お姉さんにとっても悲しがるんだよ」

マリィにも臍氣ながら、有明の悪だくみが察しられたのであろう。なめらかな肌に粟粒のようなものが浮き上がった。

有明が、急に怖ろしい声音に変わる。もうフランス語ではなく、齒切れのよい東京弁だった。

「こっちへ、こい、マリィ」

後手のまま、マリィは有明のそばに、いざり寄ってきた。

辛うじて二十個の卵をイチ、ニイ、サン、

と数え終えたと思ったら、

「ちがう、ちがう。オルディナーレ（序数）で数えるんだ」

「ギャーッ」

部屋中、ひびき渡るような悲鳴だった。拡声器で、より強められているらしい。ジョセフィーヌの胸乳に電流が走ったのである。

「オオ、神さま」

マリィが蒼白になった。肘と膝が結び合わされているので、ペタンと尻もちをついたようになる。

「さ、早く。早くいわないと、もう一度、電流を入れられるぞ」

マジックミラーの近くで、高橋侍従が、マリィの態度を見つめながら、スイッチを操作している。

「ヒトツ……」

卵立てに卵が一個、立てられる。これを下で、くわえろというのだ。思わず、

「いや、いやです」

と叫ぶ。たちまち、隣室で悲痛な絶叫が起こった。マリィは屈服するしかない。やつのことで、半分ばかり押し込むと、そのまま部屋の周囲を一廻りしろと言いつけられる。しかも、

「タマゴが、ヒトツ。コケッコォー」

と言いつづけなければならないのだ。

上体を真下に折って、股覗きのような姿勢

で歩かないと、うまく行かない。卵と白さを争うような豊かな双丘が上になって、小さな卵が半分、チョココンと顔を出しているのが、如何にも滑稽だった。

長いことかかって、二十個の卵を、やっと運び終えた。その間、泣き声で「コケコッコ」を休みなく、繰り返していたのである。「よし、よし。やっと序数を覚えたようだ。姉さんも、大分、精力を使い果たしている。生卵を食べさせてやるかい？」

何が何やらわからず、マリーが夢中で頷くと、もう一度、卵をくわえてみる、と言われた。二十回もやると、嫌悪感は、ともかく、いわれた通りになった。

天井の自走クレーンに、用便スタイルで吊り下げられたマリーは、そのまま隣室に移動して行く。マジックミラーの壁は、いつの間にか下に引きこまれていた。拘束椅子から解き放されたジョセフィーヌは、今度は床に仰向けにされ、手足を大の字なりにひっぱられて、身動きも出来なくなっていた。

姉妹連縛

「マリー。ああ、マリー。あなたは、やっぱり生きていたのね」

ジョセフィーヌが叫んだ。彼女は、怖ろしい有明が、マリーを殺してはしまわなかったかと、不安でしようがなかったのである。

宙吊りのマリーは、床のジョセフィーヌの顔の上でピタリと停止した。

「いや、いや。お姉さま、目をつぶって下さい。見ないで下さい」

あわてて目をそらせるジョセフィーヌへ有明の叱咤が、とんだ。

「目をそらせるな。おまえは医者だったんだろ。妹のからだを、よくみてやるがいい」

さからえば、どんなことになるか、ジョセフィーヌは、おそろおそろ真上を見上げて、「アッ」

と、声を呑んだ。白い卵が顔を出していたからである。

「マリーは痛くてたまらないといっている。

助けてやるのは、ジョセフィーヌ、おまえの唇と舌しかないのだ」

有明が日本語で言う。マリーには分からなくても、ジョセフィーヌは、もう有明が何といったか理解できるようになっていた。

妹の苦痛を救いたいという一心から、ジョセフィーヌは必死に頭を上げて、生卵を、くわえ出そうと、空しい努力を続けていた。

ジョセフィーヌのその努力が、同時にマリーへの拷問となった。

「アッ、痛いッ」

マリーの金切り声が頭上から降ってくると一瞬、ためらいが唇を、そこから離させる。

力尽きたかのように、頭がコンクリートの床の上に、ゴツンと落ちた。

ズ、ズツとまた、五センチばかりマリーの丸められた裸身が下げられて、姉の顔を押しつぶしように、かぶさって来た。思わず顔をそむけるジョセフィーヌ。

だが、それ以上に狼狽したのはマリーの方だった。自分の足が踏みつけた柔らかなものが姉の乳房だったからである。神聖な乙女の果実を踏みつけにすることが許されていいのか。

そのいじらしい心根が神に通じたのであるうか。緊縛して吊られた四肢を必死に、こわばらせて、やっとのことで、半回転することに成功した。爪先が辛うじて床を掃いた。

マリーの思いやりが、哀れなまでに愛らし

くあったとしても、それは、とりも直さずその弱点を有明に、さらけ出すことになった。有明が、どうしてもこれを見逃がすであらうか。

けたたましい哀声が、上下双方から起った。

細い糸のような紐が、マリーの足の、左右の親指に巻きつけられ、それが夫々ジョセフィーヌの乳首にくくり合わせられていたからである。さっきの電気責めの傷痕が、まだ傷々しく残っている桜色の乳首だった。

二重の拷問であった。姉の顔に乗ってしまいそうな臀部を、少しでも上に上げようとすれば足に力を入れなければならない。足に力を入れるということは、その直下にある不可触の乳房を踏みつけにすることを意味する。しかも胸と膝を合わせて吊られ足指の二点を、姉の胸乳に固定されてしまっている今、二人の関係位置をズラすことは、絶対に不可能だった。

愁々として二人は哭いた。姉妹いちどきに思いもよらぬ責め苦に呻吟しなければならぬ苛酷な運命を呪った。

夢ならば……とねがう思いも、鮮烈な痛苦



に裏切られて、空しく現実の惨めさに引き戻される。気を失おうとしても、長い間、次第

に馴致されて来た条件反射が、それを妨げている。屈辱感と疼痛だけが、つねになまなましく、二人の裸女姉妹を痛めつけるのであった。

今や、息もつけない程の近さに、蔽いかぶさっている。

「ギャアッ」

マリーが、ありったけの声を、振りしぼった。

有明の電気鞭が、美しい腰の曲線を削ぐように、かすめたのである。痛みはなかったけれども、生まれてはじめて経験した電気鞭の刺戟は、マリーを心底から、おびえさせた。夢中でもがく両足が、ひきつづいてジョセフィーヌを責める。

「ア、アッ」

大の字なりに床に縛られている彼女は、胸を弓なりにそらせて乳首をかばうのが、やっとならった。

「ジョセフィーヌ。怠けていると、もう一度マリーを、ぶつぞ」

有明が叫んだ。

ジョセフィーヌは、おいおい泣きながら、それでも、目の前に半分ほど出かかっている生卵に、かぶりついた。

何回目かで、齒でも当たったのか、卵が割れて中身がドロドロと顔にかかった。

「何だ、割ってしまったじゃないか」

床に流れ出した白身を見て有明が言った。

「失敗は許されない。懲罰だぞ。とにかく残ったカラを喰べてしまえ」

中身の流れ出した殻は、とろうとするとポロボロに壊れて、かえって仕末がわるい。その上、有明がこんなことを言うものだから、ジョセフィーヌは苦渋とともに、味付けされた卵のカラをポリポリと噛んだのである。少しずつしか噛み取れないのを、根気よく繰り返す。全部を喰べ終わるまでには、気の遠くなるような時間が、かかった。

一方、肌をはい廻る姉の唇や舌の、異様な刺戟は、次第にマリーを、あらたな苦しみに追い込んでいた。

今さらながら、有明の悪だくみのおそろしさを思い知らされるような気がする。

その有明は、例の長椅子に寝そべり、高橋侍従に酌をさせて、うまさうにチビリチビリと黄金の盃を、なめている。待久戦の構えなのである。

「ゆるして……」

とか、遂には最も恥かしい、

「トイレに行かせて……」

と、哀れっぽく頼みこんでも、知らん顔で答えてくれない。

下から見上げている姉の目には、いじらしくも切ない妹の苦しみ、我慢の有様が、よくわかった。もじもじと、よじれる豊かな臀部も、さることながら、あえぐようにギョツと収縮したり、ゆるんだりしている様子が、何よりも明瞭にマリーの空しい戦いを、物語っていた。

「空しい戦い」というに、ふさわしく、それは遅かれ早かれ敗れ去る運命にあった。

「アッ、もう、ダメよ。辛抱できないわ」

その声を聞いて、姉が叫んだ。

「かまわないの。どうせ、どうしようもないんだわ。わたしは平気よ、サア……」

と言いながらも、あまりのみじめさに、思わず嗚咽を洩らすジョセフィーヌの顔に、真正面から、あたたかい霧が降り注いできた。

「ごめんなさい。ゆるして……」

こらえきれなかったのを早くも悔んで、打ちひしがれる思いのマリーだった。

頭から妹の小水をかけられたジョセフィーヌ

又は、辛うじて一旦、横一文字に床に貼りついたままの縛めから手首をほどいて貰った。その手首は、しかし、すぐに前で一つにロックされる。

そして、その縛めごと引っぱられて、無理に上体を起き上がらせる。

双の乳房がマリーの足指に結びつけられているので、丁度マリーを肩車したような形になった。

ここで今度はマリーの後手を解いて前で縛り、両方の親指を夫々ジョセフィーヌの耳に予め嵌めてあった耳輪に、くくりつける。丁度マリーは、その掌で姉の後頭部を、はさみ込んだようにみえた。

突然、マリーの吊り縄が切って落とされたように、ゆるめられる。瞬間的に、その全体重がジョセフィーヌの肩にかかる。

「ウツ——」

「ヒイーツ」

こもごもに叫びなら、二人の肉団が前につんのめった。両手足の、それも親指だけが細い紐で、くくり合わせられているだけだというのに、どうにもならない。マリーは、姉の耳と乳首を、かばうため必死だった。

ところで、ジョセフィーヌの足は、まだ大

の字縛りのままだったから、今までの仰臥状態から、今度は俯伏せに変わった変化の間に足が根元から外れてしまいそんな激痛に襲われたのである。

開かれた股の間から、下敷になった手首が出て、こんな姿になっても、なお、残る羞恥の心をあらわすかのように覆い隠そうとするのが、有明の苦笑を誘った。

その手首を高橋淑子がおさえつけるのと、前のめりになったまま慄えているマリーの髪の毛を有明が掴んだのと殆ど同時だった。再び魂切るような悲鳴が、二つの口から吐き出される。

有明がマリーの上体を仰向けに、ひっくりかえしたのである。

「助けて、助けて」

うわごとのように哀願するマリーの目は、もう焦点も定まらなかった。

有明は平然と、マリーの後頭部を、豊かなジョセフィーヌの双丘の間に押し込むようにおさえつけた。

高橋侍従が、器用な手つきで今度はマリーの両耳をジョセフィーヌの両手の親指と、くくり合わせた。

二人のフランス娘は、幸か不幸か耳輪をつけるための小さな穴を、子供の時から開けられていたのである。美しい宝石で飾られる筈であったその耳たぶの小さな孔。それすら、ここでは拷問のために利用されることになったのだ。

姉の掌は、はじめて懐かしい妹の頭を包みその指は愛しむように、その頬に触れたのである。

二人の姉妹を、シンメトリーに拘束しようという有明のアイデアでは、もう一つ、最後の縛りが残っている。

ジョセフィーヌが、ようやく引きねじられて痛む足首を自由にされたと思ったのも束の間、それらは直ぐに膝から折り曲げられて、わけのわからぬ言葉で、必死にわめいているマリーの顔の両側から、肩におさえつけられてしまう。

これも高橋淑子の巧みな手さばきである。「何だ。乳首が、ちっとも、出てないじゃないか」

さっきから、マリーの乳首に糸を、くくりつけようとしていた有明が、いった。乙女の乳首は、ふくよかな隆起の中に埋もれたまま

闖入者の辱かしめから逃がれようと、ひっそり蕾を閉じていたのである。

まことに「花も嵐も踏み越えて……」というのが、有明だった。彼の手にかかつては、その小さな蕾さえ容赦されなかった。無理無体に掘り出され、二つとも、糸を巻きつけられてしまったのだ。

だが、そうなったマリーは、まだしも幸せだったというべきであろう。さもないければ、有明のことだ、乳首に針を通したかも知れなかったからである。

「痛いわ。オオ、オオ……」

あまりの締めさにも、今はもう泣くだけの自由しか、残されていなかった。マリーの乳首を縛った糸は、高橋淑子がおさえていたジョセフィーヌの足の親指に、すぐに結び合わされてしまったからであった。

複雑に組み合わされて、くくり枕のようになった白い肉体は、愁々と哭きながら蠢くばかりである。

それを冷然と見下ろしながら、有明が高橋侍従に命令した。

「二人に下剤を吞ませてやれ」

——(未完)——

☆城章夫氏の再デビューを期待して☆

梨花は散った

長田二郎

写真・梨花悠紀子



“をんなが附属品をだんだん棄てると
どうしてこんなにきれいになるのか
年で洗はれたあなたのからだは
無辺際を飛ぶ天の金属。”

見えも外聞もてんで齒のたたない
中身ばかりの清冽な生きものが
生きて動いてさっさと意欲する。
をんながをんなを取りもどすのは

かうした世紀の修業によるのか。

あなたが黙って立っていると

まことに神の造りしものだ。

時々内心おどろくほど

あなたはだんだんきれいになる。”

附属品を捨て去った女身の素晴らしさについては、むかしから多くの人々が筆にし、描き又カメラによって、精緻克明に写し取ってきた。しかしそれでも尚、人は女身の美しさを讃美して飽きない。身に一糸だにつけることを拒否して、そこに美を追求する一群の人々がある。他方、生の女身に与えるものを一本の紐、または紐に限定することによって、紐または紐と女身との交錯に美を見出す人々がある。いずれも人間自然の本能に根ざすものでありながら、一方は芸術と謳われ、他方は異端・変態と見なされる。異端・変態と見なされようと、敢えてペンとカメラで挑戦し、紐と女身との交錯美を追求して止まない人々がいる。辻村隆氏、塚本鉄三氏が、そうである。そのキャリアから生みだされるカメラ・ルポは長い間、奇ク誌上を飾ってきている。だが、四十八年三月号をもって辻村隆氏は筆を折るといふ。山本一章氏が奇ク誌上から去って、すでに久しく、こんどまた、辻村隆氏がレギュラーの座を去るといふ。SMという

特異な世界の美を長い間に亘り、息長く表現していくのは蓋し至難の業であろう。十年近くの長丁場を孤軍奮斗、活躍された辻村隆氏に、あらためて敬意を表するものである。

辻村氏最終回のカメラ・ルポ掲載の四十八年三月号には城章夫氏が那津子追想『ひとり都の夕暮れに』を寄せている。室生犀星、三好達治の詩を織り交ぜて、いつもながらのロマンの香り高い文章である。辻村隆氏が梨花悠紀子の飼育に励んでおられた頃、奇ク誌上に発表される氏の文章は、不思議な程にロマンの香りを漂わせ、写真にも文章にも艶が感ぜられた。当時、学生であった私は、梨花悠紀子の写真を奇ク誌上に見るたびに、そのノブルな顔と、姿態にまつわる縄との交錯美に酔ったものである。城章夫氏が、梨花悠紀子を想わせるような、可憐な那津子を伴って奇ク誌上に登場したとき、私は梨花悠紀子デビュー当時の感激を新たにした。それほどに城章夫氏と那津子のカップル。そして、その香り豊かなルポは、私に魅力あるものであった。城章夫氏が辻村氏にならって那津子を飼育し、その魅力を引き出し、縄との交錯美を発表しつづけるのを期待したのである。だが「梨花は散った」対象を失った城氏は「淋しき家」に犀星の詩を想い出すという。ひそかに城氏に期待した私の落胆も亦、大きかった。

た。しかし、と私は思う。先日「読者通信」で、新しいモデルを模索していた城氏のことゆえ、必ず再デビューの時あることを祈るものである。

「那津子追想」のフォトに一言、触れておきたい。那津子のフォトは、いつもながらの城氏、緊縛美学を表現したものである。特に写真6は城氏会心の作と思う。女身と縄との交錯が、お互いにシンメトリックな対象のインタリンクとして描写され、見事な美を形成している。誌面の写真からも、その美しさは充分に満喫されるが、城氏の保有される写真原本のコントラスト、即ち白い女体と黒い縄との織り成すコントラストは、さぞかし素晴しいものであると、私は写真6を眺めながら自らの想像に酔った。惜しいモデルを未完成のままに失ったものと、つくづく感ずる。何ゆえに「未完成」と言うか？ 城氏の緊縛美学の根底を支えるものは、そのシンメトリックにあると考える。シンメトリックなもの静かすぎるのではないか。動きが少ないのではないか。私はシンメトリックを乱す僅かな破調にさえ、動きを……次の躍動への胎動を……感じたいのだ。もっとも、那津子の初々しさを描写するのに、この静的な動きの少ない緊縛方式と、カメラ表現とは最適と思う。事実、城氏が今まで発表されたフォトは、す

べて、この図式から割り出されるものである。

だが、巻頭の高村光太郎の詩にあるように「生きて動いて、さっさと意欲する」

といった動的な、潑刺さを含んだ表現を城氏に要求するのは無理であろうか。無理ではないと思う。自らの美学を繰り返して表現していくとき、当然、推移していくべき過程ではなかろうか。すでにその習作を城氏は試みておられながらも未発表、あるいは未完成のままだに、那津子の死に逢着したのではなかったのか。私が敢えて「未完成」といった所以である。

城氏が、再び素晴らしいモデルを発掘し、その「いのちの糧」を私達の前に繰り広げてくれるのを期待している。高村光太郎も唱っている。

「あなたのせつぷんは僕にうるほひを与へ
あなたの抱擁は僕に極甚の滋味を与へる
あなたの冷たい手足
あなたの重たくまろいからだ
あなたの憐光のやうな皮膚
その四肢胴体をつらぬく生きものの力
此等はみな僕の最良のいのちの糧となるものだ」

——(終)——

連載・S大河小説

パ
ロ
デ
ィ

花

と

蛇

(17)

女^{じよ}拓^{たく}

(二)

「うむ……」

と、清次は腕組みをしたまま、唸るような
声を出した。

あれほど驕慢なまでに誇り高かった京子が

溶けた砂糖菓子のように、ぐんにゃりとなってしまうことへの、満足の吐息である。

熟れた小山のような双臀に、ソファの背が、喰いこんでいる。脂肪がしぶいているような、なだらかな曲線である。

彼は今更ながら、京子の尻のたくましい量感に目を見張る思いだ。チンピラ共に寄ってたかって責め煽られ、女の体が持っている弱さを、くまなく引きずり出されながらこの臀部は、彼女の惑乱も知らぬげに収まり返っているかのようにすら見える。

逆にいえば、その逞しい双丘は、清次たち

山
光

純

に、より一層、淫猥な行為を、しきりに、そのかしているとも取れるのだ。

清次は頭に血がのぼってきているので、そのこれ見よがしの肉を力まかせに平手打ちにせずには、おれなかった。

「あっ……」

と含み声を出して、やわらかい背もたれにうつぶしている京子は、全身をビリリと慄わせ、その痛さに耐える。ややあって、
「法界さん、もういいかしら？ 京子、ぴつたりと押したつもりだけれど……」

と、もはや憎しみを振りはらった遠い所にいるような声でいうのだ。

「おっしゃるように、できるだけ開くように

したんだけど、旨く取れてるといいわね。
オッパイは、どうかしら？」

乳房を受け持っているのは三郎である。

右腕に和紙を掛け、ルージュで色つけた乳首を、そこに押し当てさせる。巨大な果実のような隆起は熱く柔らかく、三郎の伸ばした腕にグンニヤリと、よりかかっている。

エロ事師気取りの法界は、テカテカ光る海坊主のような奇怪な顔をふり立て、

「いつまで、そんな不様な恰好をしているんだ。もう少し器用にやれそうなものだが、案外ウスノロだな。もう、いいだろう。動かさないように旨く降りるんだぞ——もし旨く取れていなかったら、お前の所為^{せい}だぜ。何度だって、やり直させるから覚えてるんだ——」

こうして出来上がった女拓を我勝ちにのぞき込むチンピラ共は、互いに「へえ！」と言合い、拓本と実物の持ち主を代る代る見較べるようにしながら、しばらくは互いに肯き交すばかりである。

■空手二段の、華麗な身のこなし方とスタイルの良さで有名だった京子のことを知っている人なら、真裸に剥かれていることは別にしても、今の京子の鈍さを見ると、きつと腰でも抜けたのかと思うに違いない。また、パッチ

リと大きい勝ち気な明眸を、今、物言いたげに気弱く、しばたたいているのを見ると、てっきり彼女が恋をしているに違いないと思うかも知れない。

二十三才まで大切に、気高く育ててきた、いい所ばかりを漁り尽くされた恨みは、とくに忘れたように、京子は内から滾々と湧き上がってくる情念のほむらに身を捨てようとするのだ。どのように聴く、如何に敏捷でも京子は所詮、女でしかなかったのだ。

「そら見ろ、京子。手前、俺たちに、こんなものまで取られやがって、恥かしいとも思わねえのか？ 目を伏せるんじゃない。よく見るんだ、とっくりとな。はは……」

勝ち誇った法界の、齒をむいた容貌は恐ろしかった。しかも彼女は、この海坊主のような男とも一生、消し得ない、つながりを持ってしまったのだ。いや、法界だけではない。清次とも三郎とも五郎とも体を交し合った。卑劣な手段を使われたとはいえ、その瞬間には女郎そのままの大声を挙げてしまった。それに、ある味——京子は、もうどんな手段があっても、この男たちには、とうてい勝ちめがないことを思い、目の前につきつけられた女拓に狼狽する視線を向けるばかりだ。

「ははは、もうメロメロになってやがる。そんなことでエロ稼業が勤まるものか。さあ、この紙の模様のどれがお前のど、こなのか俺に説明しな。何が何だか、さっぱり分からん」

ローマンピンクのルージュは妖しい斑紋を描いて、のたくっている。京子は、稲妻のような眩暈をともなった羞恥に心臓を、どきつと一刺しされ、たちまち喉元まで紅潮してしまふのだった。

「だ、だって、む、むりよ。京子にも、よくわからない……」

ナマズのような坊主は意地悪にも美濃紙を本来ある位置を逆にして、京子の前に突きつけているのである。

「よく見るんだ。お前自身のものなんだぜ。種も仕掛けもねえんだ、なんなら、また鏡でとっくり見詰め直させてやろうか」

「わ、わかるわ……あたしの体ですもの」
その京子の切羽つまった言い方に、満座は腹を、かかえる。

ためらいたためらい、不思議な法悦境にいるような京子は、端麗な唇から皓い齒をみせ、「いちばん上のは、京子のお尻ネ……」
それは、京子の押しつけ方が上手だったのか、口紅の塗り方が丁寧だったのか、とにかく

く上々の出来栄であつた。そして、それに続いてゐる方は、ピンクの生々しさが最上の彩りを添え、哀れに美しく、一段と幻想的な情感を訴えているのである。ただ生暖かい顔廃だけではない。その落花微塵な女拓からはこれまでヒロインが受けてきた死に勝る汚辱と懊悩のすべてが読みとれるようだった。その証拠が、くつきりと押しつけられており、京子がそれだけ、止むに止まれぬ情念を込めて伏臥したことが忍ばれるのである。

法界は嵩にかかつて、もっと、きわどく指さして説明を強要する。

「そ、そうね。こ、これは、京子のいちばん感じるところ……オッパイを揉まれて、これをいたずらされると、京子もう、くにゃくにゃになってしまふワ。ええ、このあたりも、あたしの弱いところ。あまり強くなく、ゆっくりさすられると、腰のあたりから溶けてくるようになるの……」

この性地獄の中で、自らを苛むことだけが生きる手段であるかのように、裸女は夢見るあどけない表情さえ見せながら、男どもに自分の肉体の秘密を語るのであつた。

いつまで続くとも知れない揶揄が、ようやく一段落すると、二枚の和紙は丁寧に糊で継

ぎ合わされる。

一番上に当たる個所に、京子が形のよい唇を押しつけると女拓の出来上がりであつた。上から順に押し並べられた五つの花印という具合で、最後に本人のサインが書きこまれれば価値は一層、高いものになる。

床の上にうつぶせて、朱い唇を押しつけてゐる京子の後手の縛りが哀れであつた。豊かな髪が、美濃紙の上に、ぱらりと落ちかかった。さてサインをさせる時に、チンピラ共の間で意見が分かれた。

以前、静子夫人がAに筆を挿しこんで綺麗に文字を書いたのを知っている五郎が、是非京子にも、やらせろと主張したのである。もちろん、彼なりにその方が、もっと色気が出ると本気で思っていたこともあるが、別に、この際、手を自由に使用することによって、かつて街頭で叩きのめされたようなことが又しても起こりかねないという意味を言外に含んでいた。

そう言えば、京子と三兄弟が乱斗になった時、最初にブーツで強打されて悶絶したのは五郎であつた。あの凍っていたコンクリートの固さ……畜生。

「いいや、こういうものは、上手な字で書か

れてこそ、値打があるんだ」

清次は大口を開けて笑つて言う。

「教養のねえ女郎やパン助じゃねえんだ。大出の才女の性奴隷なんだぜ。こりゃ、ぜひ流麗なタッチでサインしてもらわなくちゃだめだ。ひひ……」

清次には完全な勝算があつた。いま、京子が見せてゐる虚脱したように朧ろに霞んだ表情に、まず反抗の色が戻るとは思えない。

兄貴分らしく太っ腹に振舞つてみせるため清次は三郎に顎をしゃくり、

「いいから、京子の両手を解いてやれ」

ところが三郎はキョトキョトした感じで、清次の言うことが聞こえない素振りをして、逆に京子のそばから離れてゆくのだ。三郎も五郎と同じ危惧を持っているのが、それで分かる。

しかし法界は、過ぎし日に、超ミニにブーツの京子がみせた颯爽とした胡蝶の舞いや、この邸に連れ込まれて、すでに性奴隷としての道を歩みはじめてからでも、耐えられずに爆発させた手練の早業などのことを、まるで知っていない。

彼は、したがって、ごく軽薄に清次に組しそれでも、

「おい、さっきみてえに暴れるんじゃないぞ。四対一だと、一つ足りねえしな」

などとふざけながら、固く縛った後手の結び目を解いてゆくのだ。

こうなれば、三郎も制止するわけにはゆかない。賭けである。

清次は一寸、滑稽なくらい貫録をつけて、そり返ってニタニタしている。彼は、もともと、賭けには、あまり強くないのだが……。

紐が、パラリと床に落ちる。

三郎は、部屋の隅に蹴倒された時の姿勢のまま、微かに啼泣している美津子の二の腕をムンズと、つかんだ。いざとなれば、美津子の柔らかい腕をねじ上げて楯にしようというのであろう。

五郎は、小道具に使った青竹を、さりげなく手元に引きよせている。場合によっては、この青竹で、あのジャジャ馬の豊満な尻を思いきり、しばき上げるつもりだ。それも悪くない。メス馬なみの大ききだから、案外、鈍感かもしれないのだが。

清次の目が、糸のように細くなり、口元がぐっとへの字に曲げられた。もし仮に……。

その注視をうけて、京子は解き放たれた両

手首を、かわるがわる優しくさすり、ぱたりと厚い絨氈の上につく。

そして誰の目にもつく大きな吐息をもらしながら、トロリとした瞳にくるむような笑みをたたえ、皓い歯を朱い唇から、こぼれさせる。

昨夜から、ぶっ続けの狂宴だ。そのヒロインとして、よく発狂もせず、ここまで耐え抜いてこれたものである。もうこれ以上、忍耐をすることはできなかった。肉体はいま、完全に心を裏切ったらしかった。京子に出来ることといえば、ただそんな自分自身を心の底から軽蔑することくらいである。

「ありがとう、法界さん。まあ、皆さん。急にそんなにおとなしくなったりして、どうなさったの?……」

何事も起こらなかった。――

三郎と五郎は、ほんとに安堵したように肩から力を抜いたが、そんな様子を気どられないように、京子をからかい始めるのである。

「京子、お前はメス犬みたいに誰かれかまわず寝てしまうが、その内に、どこのどいつの子とも知れない子を孕んじまうぞ。……まあ昔っから売れっ子の女郎は仲々孕まないというが、あれは本当だな。まあ俺たちにゃ、ど

うなろうと知ったことじゃねえが……だが、お前にご執心の吉沢の兄貴なんか、朝でも昼でも構っちゃくれねえだろう。メンスの時なんか、どうするんだ」

「え、ええ。できるだけ許していただけるようにお願いするの。でも大抵は……」

「そうか、お前も大変なんだな。ふふ……」

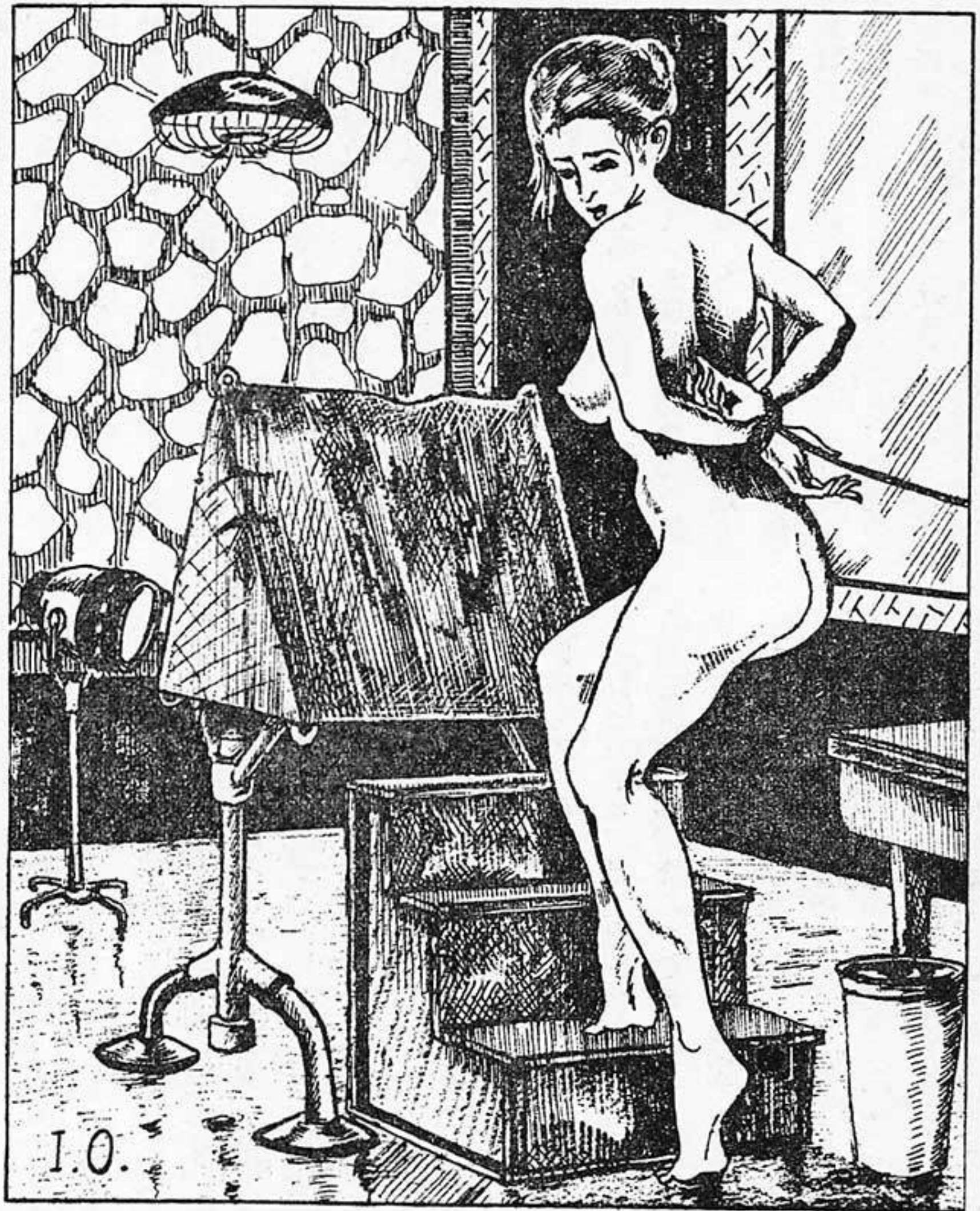
清次たち兄弟は、意味ありげに顔を見合わせながら、残念そうな笑みを交し合う。

吉沢は京子の処女を奪った男だが、その際散々にてこずって、危うく森田組幹部としてのメンツを失いかけたエピソードは、有名である。

だが一度、京子を物にしてしまうと、近頃は、あんまり寄りつかず、組の者一同は不思議に思ったものである。千代などがお節介を焼いて春太郎や夏次郎なんぞというバケモノをけしかけた後は、きまって水を向けたものであった。

しかし、それはメンツを回復するための、あくまで上べだけのことで、吉沢が京子に関心を持たなくなった筈はなく、最近ますます艶っぽさを増してきた京子のカラダに、憎しみと愛着のいりまじった獣じみた執念をもつに至っているのだ。

イメージギャラリー『ヒロイン登場』三鷹 I・O



京子を楽しむ時、吉沢はきまって彼女の豊かな裸体をギリギリに縛り、飽くなき肉欲をほしいままにするのだ。

近頃は酔っぱらった時など、あたり構わず大声で、京子に不妊手術を施してしまうのだ

と、よく言っている。そうしてしまえば、ピルを飲ましたり堕胎などという面倒なことをしなくても、一年中、使用可能だというわけであろう。

不妊手術などといっても、勿論、合法的に

やれば京子の身元も割れようから、森田組の息の掛かっている者で身を持ち崩したインチキ医者を使うのは当たり前のことである。

しかし、そのように暴虐な、天を怖れざる企みがあることを、もとより知らない京子は自らを鞭うつ行者のように、清次たちの野卑な冗舌に口を合わせるのであった。

「吉沢の兄貴は、お前にとっちゃあ初めての男だろう。女ってえものは初めての男は仲々忘れられないものだというのが、恋しい時も、あるにちがいないえ」

「え、ええ。会いたくて、体がうずく時だつてあるわ……」

答えながら、京子は目の前がクラクラするような感じに襲われるのである。

「さあて、吉沢の兄貴は、どう思っているかなあ？ ひょっとすると、お前に、もっと酷いことをするつもりかも知れねえぜ」

大笑いをしながら、たった今の緊張感を、

すっかり忘れて馬鹿陽気になった三郎が、墨を含ませた毛筆を京子の鼻先につきつける。

彼女を愚弄しきった口振りで、

「後々までの記念のために残しておくんだ。

精一杯、綺麗な字でサインして貰おうか。両手を解いてやったんだから、旨く書けないな

んて言わせねえぜ」

床の上に丁寧に拡げられた彼女自身の五つの生々しい女拓から目をそむけることもできない京子は、筆を受け取ってはみたものの、手先は見るもおかしい程ブルブル慄えた。

はた目に見ても、一人の糸も纏っていない美女を中央にして、四人のパンツ一つの野卑な男たちが声高に喋りたてている場面は、一種の奇怪な活人画のようである。少し離れたソファの陰で、中央にいる裸女に、よく似た、しかし、もっと若い娘が、噁り泣いている。こちらの方も無情に衣服を剥がれ、おまけに後手に縛られている。

この場面は巷に溢れているエロ映画の一番そのままであるが、三文映画とは全く違いヒロイン女主人公たちは現実の性犯罪の哀れな被害者たちなのだ。

だがもし仮に、何らかのきっかけから、この邸に警察の手が伸び、檻禁された美女たちが救出されるとしても、事は一層、妙なことになるはしないだろうか？

よく冗談話で言われることであるが、強姦と和姦の区別は、なかなか難しいらしい。女の尻の下にハンカチを一枚敷いただけで和姦が成立することが充分あり得るという。とこ

ろが、この邸に檻禁され輪姦されたという女達は、ニッコリと花のような恥じらいの笑みを見せながら、筆舌につくしがたいようなハレンチポーズで何百枚もの猥褻写真をとらせ傑作のほまれ高いブルーフィルムに次々と主演しているではないか。

例えば、静子夫人のように才色兼備の名流夫人が、誘拐され救出されたという事だけでも、警察側の報導管制が如何に厳しくとも、とうてい生馬の目を抜くマスコミの集中攻撃を避けきけることはできる筈はない。まして、事件が生々しい性的事犯であればニュースには猟奇性が、ふんだんに折りこまれることになってしまう。

事態が公判廷に移ると、もっと複雑なことになる。金力に物言わせる千代側の弁護士は堂々と論陣を張り、自分たちに、やましい処はないと主張するであろうし、多分、静子夫人たちの実演に見惚れた証人も登場するに違いないのである。見物人たちの前で、あの目にも綾な美女は強制されたことなどは気ぶりも見せずに糸も着けない姿になり、異様な男と乳繰りあって見せたのだ。公判はもとより永引き、その結果はさて置くとしても世間の耳目を集めた美女たちは、以後、絶対に世

間に出ることはできないのである。

だが、このような背景があっても、ただ一心に張りつめている京子には今のこの瞬間を許して貰えることの方が千金より重いのだ。

とどろく動悸を、いじらしくも懸命に抑えて、京子は、女拓の下の方に署名の筆を走らせる。

厚い美濃紙は、たっぷり含ませた墨跡をみる間に吸い取った。

それは、彼女の才知の燦きを存分に示した水茎の跡も麗わしいものだった。

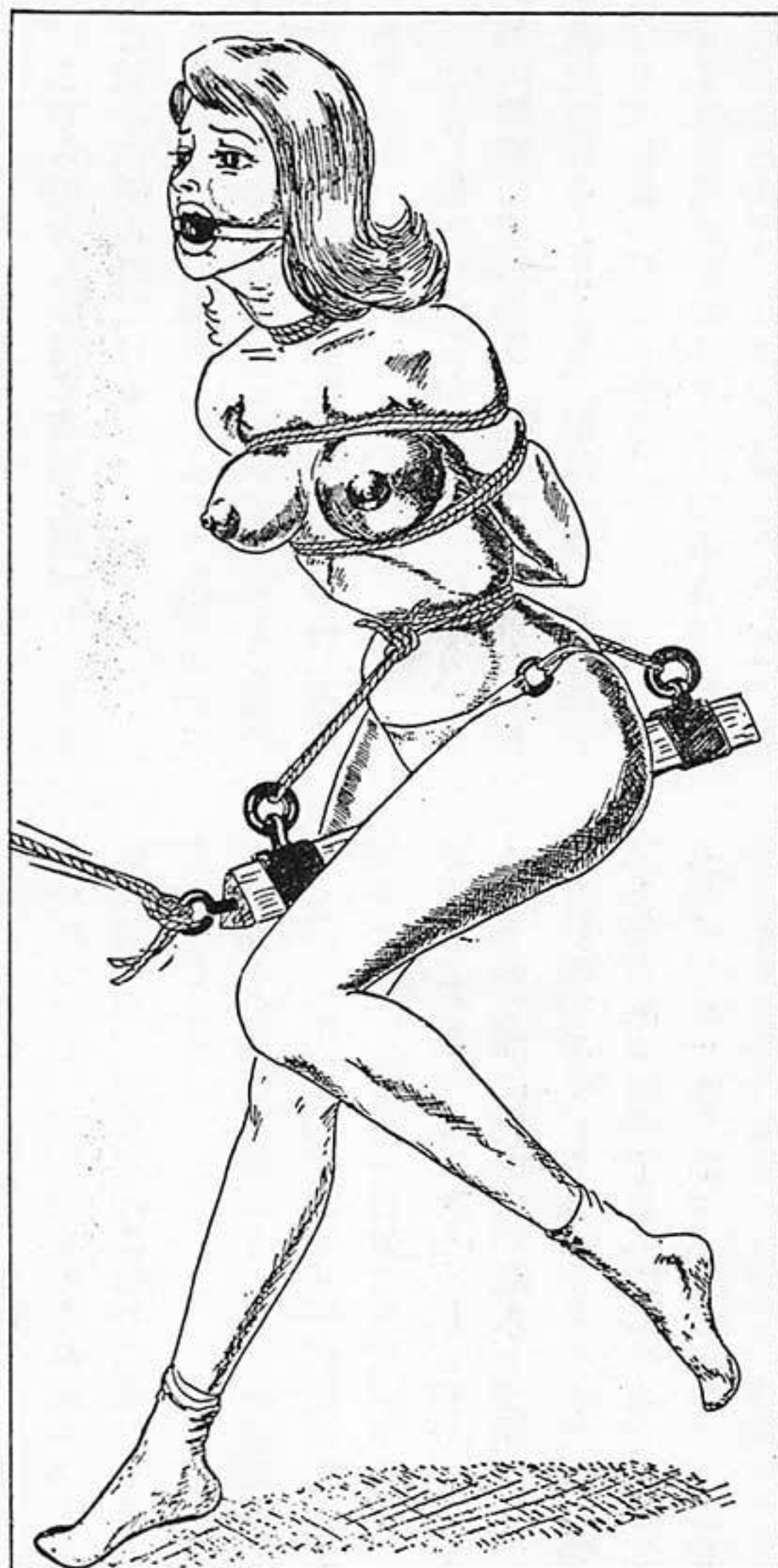
「ほほう、流石に女子大出のお嬢さんだけのことはあるぜ……」

とは言ってみるものの、いずれも文字といえど金釘流の、とても人には見せられないものしか書けない男共は、二の句もつげない有様である。

「まあいいや。だがサインだけでは物足りねえや。まあ俺達をタップリ楽しませた証拠の色っぽい文句を、ついでに入れて貰おうか」「え、ええ……でも、何と書けば、いいのかしら……」

「その位のことは自分で考えな。教養が泣くぜ。もっとも俺達には、お前の教養なんか屁の値打ちもありゃしねえ。俺達にとって必要

……イメージギャラリー……『引きまわし』……名古屋S生……



なのは、お前の、その体だけさ。さあ、書いたり、書いたり……」

冷静な時の京子なら、このような木端チンピラの罵倒を、許すはずもない。だが、昨夜以来、ほとんど一息つく間もなく罵られ、ののしられ続けて綿のように疲れた心身は、もう圧倒的に、多数の男どもの前で如何なる反抗にも出る余裕をさえ、奪っているのだ。

「ねえ、三郎さん。教えて……京子には、淫らなことなんか、とても書けないワ」

とピンクの唇を噛みながら、京子は媚るように濡れ濡れした目つきで、三郎を見上げるのだ。

片手で股間を押さえ、もう一方の手を胸に当てながら、甘えたような声を出す彼女の豊かな肌からは、甘ずっぱい香りが漂う。そのクナクナした曲線の揺れ方からも、京子がすっかり彼らに征服されつくしてしまったことが分かるのである。

三郎のパンツは、するどいほどに、こわば

っている。女遊びが面白い盛りの彼らの前にこのような好餌を投げだして、そうならない方がおかしいというものである。

彼は有頂天の様子で、ことさら京子の胸に押しつけるようにしながら、耳元でいやらしく、ささやくのだった。

京子は、虚空をみつめるような表情となったが、長い睫毛の間から大粒の涙を、きらめかせていた――。

△恋しい清次さま▽

と、京子は書いていた。流れるように美しい字だ。

△あなたと、京子の体が一つになった思い出のために……てちょうだい、とおねだりなにかして、許してね▽

△バックスタイルのお好きな、三郎さま。京子を、こんなに男好きにさせた張本人は、あなた……でも、京子は、あなたに教えられてこんなにな手になったのよ▽

△元氣モリモリの五郎さん。年上のお姉さんのお味は、いかが？……くやしいけれど京子は歌手のアッチャんの足元にも、よれない。京子の体のどこか一つでも好きになって▽

△女たらしの法界さん。とっくにご存知の京子の体よ……とくに、あたしの……お気に召

したかしらV

法界が、完成した女拓を壁に貼ると、部屋の中に名状し難い静けさが来る。

「まあ、そんな所でいいだろう。京子、お前も疲れたらうから一服やりな。そうだ、腹がへってるに違いねえ。どうだ、ここに旨い寿司があるぜ」

と三郎は、鷹揚な振りで京子の方に顎を、しゃくる。

うるし塗りの寿司桶の中には、食い余しの握り寿司や、ノリ巻きが散らばっている。パランの取り合わせが鮮かで、ノリの香りが、ぷんと匂ってくるようだ。

「頂いていいの?……」

京子が思わず蘇生したような声を出したのも無理からぬことである。

何しろ、昨夕以来、ほとんど食べ物らしいものは与えられていないのである。といって、嵩にかかって攻めこんでくるチンピラ共の攻撃を一杯に受け止めることに必死で、とうてい、空腹を感じる暇などはなかったし、第一、胸に鉛のように重いつかえがあつて、食べ物のことなどを考える余裕があらうはずはなかったのも当然である。

だが、売春婦の真似をした上に、浅間しい

女拓を取られ、それに顔の赤らむサインまでさせられた今となつては、どう抵抗しても無駄だという悲しい諦めの気持から、まるで女々しくふるまうようになってしまっている。この時、今まで叱られ、ののしられ続けた男から、まったく思いがけない、いたわりの言葉を聞いたのである。

京子は、それでも臆病そうにチンピラ共の顔を偷み見るようにし、

「ありがとう。じゃ、頂こうかしら……」

「大いに頑張ったんだ、遠慮せずに食ってもいいぜ」

ぴったりと正座し、股間に左手を当てたま右手をのばすと、上気した胸の盛り上がりが再び剥きだしになる。むっちり張った乳房の頂上に、紅いルーージュが花のように羞じらっているのだ。

散乱して寿司桶に投げ込まれている割箸を一揃い取る。誰のものとも知れない唾液や醬油で汚れているが、気にもかけない風に見える。半ば崩れかけたような握りを口に運ぶとき、京子の手元はおかしい位ブルブルと慄えるのだった。

「どうだ、旨えだろう。俺たちは、こうまでお前のことを考えてやっているんだぜ」

「ありがとう、おいしいわ……」

「遠慮なく食いな。美津子は、食ってきたばかりだから皆んな食っちゃまっていいんだぜ。その寿司は、上等なんだ。値段も普通なら、食えねえ位、高いんだぜ」

すっかり伏し目になって、上品に口をモグモグさせている裸女を取り巻いて、男たちは勝手なことを言う。

あのように酷使され、虐待されたにもかかわらず、京子の固太りの曲線は崩れたところもない豊満な、艶な、うす光りを、たたえているのだ。ゆるやかに呼吸しているピンクの肌には、男を知った女だけが持っている蠱惑的なぬめりのようなものがある。

そのネットリとした脇腹の肌が、発達した双臀にうねり続いてゆく辺りに、ぎゅっと思うさま、くびれた腰部がある。彼女が、それをグラインドするとき、腰の柔肌はたちまち滲みだしてくる脂汗にまみれながらタワタワと妖しく伸び縮みするのである。

だが、チンピラ共にとって、それにも増して見ものなのは、京子の臍から下の、ごく柔らかな暖い下腹部の辺りである。彼女が、これだけ理知的な美貌をしていなければ、彼等も少しは飽きもしたろうが、もとより、いっ

かな、そんな気配もない。男どもの車座の中に正座する彼女の裸身に、淫猥な空想をたくましくしているパンツ一つの加虐者たちの凝視が酷く、つきささるのである。

いかに空腹だとはいえ、このような注視のなかで食事などできるものではない。思いきって、うんと蓮っ葉に振舞ってしまうこともその誇りの故に出来ない京子は、二つ三つの寿司を食べると、すっかり胸につかえてしまったようだ。

「京子。酒でも飲ませてやろう。喉につまっちまうだろう」

「そんなに、お願いばかりしてもいいのかしら？ あたし……」

苛げられてばかりいる女の予感で、彼女は一寸、小首をかしげ、眩しそうな目で三郎を見上げる。爾来、女の予感は鋭いものだといわれるが、胸のつかえといい、男たちのいたわり振りといい、又しても只事では済みそうもないことを、どこまで京子は感知し得ただろうか。

コップに、なみなみと注いだ冷酒が差し出されると、嫌も応もない。断わった場合に因縁をつけられるのも恐ろしかったし、第一、喉がヒリヒリに乾いていた。

「ほほう、飲みっぷりが、いいじゃないか。いや、底まで、ぐっと飲んじまいな」

チンピラ共にすすめられるまま、二杯の冷酒を、すっかり空けた京子は、次の瞬間、わが耳を疑うようなことを聞いたのだ。

「いや、二日にもまたがって一生懸命、俺たちに詫びを入れたお前のいじらしさに感心しちゃったぜ。ご苦労だった。お前も疲れたろうから、そろそろ引き取っていいぜ」

「そう……あ、ありがとうございます！ 三郎さん……じゃ、美津っちゃんと一緒に、引き取らせて頂くわ……ありがとうございます……」

言いながら京子の涙腺は、みるみる、ふくらみ、溢れ出た大粒の泪が頬を伝った。嬉し泣きである。

柔らかな声がうるみ、以前の男勝りのきつい口調は、まったくない優しさで、

「ありがとうございます。京子、皆さんのことは決して忘れたりはいないわ……又、あたしの事を思い出して下さったら、お相手するわね……お約束通り、美津っちゃんも守っていただいたし……さあ、美津っちゃん——」

といい、離れたところのベッドの足に縛りつけられている美津子と呼ぶのだった。

拐われの美女達が思いも掛けない反撃に出

たり、一寸した油断で逃亡されたりするのを防ぐために、この邸の中ではルールのようなものが出来上がっているのは、すでに知られている通りである。

一つは女を全裸に剥いておくことである。このことによって、女の肉体の、ほの白さが邸の中のどこにいても目につくし、適当に刺戟も強く、また幹部連以外の三下の連中も、どうにかした拍子に彼女らにありつけるといふわけで自然監視も行きとどく利点がある。一糸纏わぬ姿にされていると、元来上品な育ちの美女たちは、とても活潑な身の動きはできないし、その上、衣服を纏っている男女に對して、もうどうしようもない劣等感を抱いてしまうということも、上げておいていいだろう。女たちの調教や従順さが順調にいつているのも、こうした思いきった飼育法が効果を上げていっているといつてよい。

遂に許された、という安堵感で一杯の京子が、しきりに巨大なベッドの陰にいる美津子の方に気を使っている間に、三郎は、元の通り京子の両手首を後手にガッチリと縛り上げてしまっていた。

邸の美女飼育法の二つめのルールである。

京子は、されるままに両手を後ろに回し、

束の間の四肢の自由な時間を思い返すのだった。

あの時に、一と思いに自殺する気で、空手の術を、ありったけ振り絞るべきではなかったか？ という疑問がかすめる。……

彼女が、その悔いを振り切るように、再び美津子と呼ばうした時、時々京子のほうを偷みみるようにしながら法界と額を寄せ合っていた三郎と五郎が振り向いた。そういえば、清次は先程からいないようだが、シャワーで

もあびているのだろうか。

「実はな、京子。法界さんが嫌なことを言いだしやがるんだ……」

と三郎が言い出した。

早くこの場を引き上げようと心せいている京子であるが、許しもなしに美津子に縛られている所へ勝手に歩いて行けば、又も一騒動起こりかねないし、三郎たちも、分かっていると口先でいいながら、仲々美津子を釈放してくれそうにない。

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆ 賞金 ☆

優作	一篇につき	五万円
良作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	貳万円
佳作	一篇につき	壹万円
可作	一篇につき	五千元

☆ 規 定 ☆

- 一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。
- 一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。
- 一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

- 手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。
- 一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたものの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。
 - 一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。
 - 一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別すること「告白懸賞」とお書き下さい。

ただ、この場を丸く収めるため、どんな哀願でもしてみせる決心をしている京子であった。

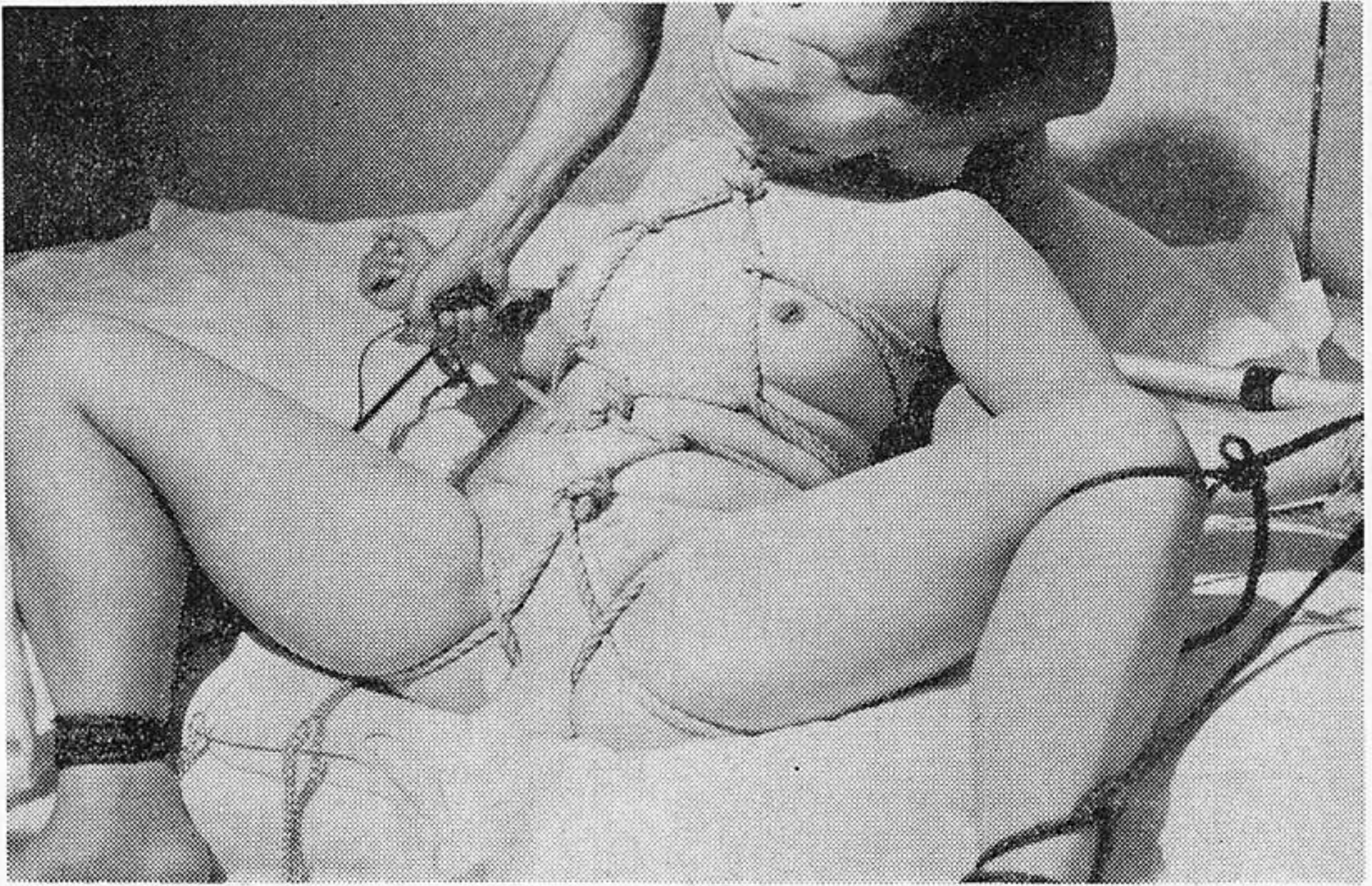
三郎は、「困ったことを言う男だぜ」などと口先では言っているが、そのくせ、特に困惑している様子でもなく、壁に貼った生々しい女拓に目を走らせ、ニタリとしてから、全然、別のことを言う。

「まったく、よく出来てるぜ、こいつは。ひょっとすると、お前をパン助として売りに出すより、こっちの方が高く売れるかも知れねえ……いや、これは冗談なんだが、それにしても困っちゃったなア。俺たちにゃ、金はねえし——」

「それ、いったい、どういうことですか。お金って？」

「こればかりは、さすがの知恵者の俺も困ったことになったぜ。いやなに、大したことじゃねえが、お前にも一口、相談に乗って貰わなくちゃならねえようだな……」

手を換え品を変えて攻めこんでくるチンピラ共に翻弄されてクタクタになっている京子は、美しい眉宇に憂いをたたえて、凄艶な表情で男たちを見るのだった。



プレイ記録余話——

私の S M 写真術

ロマン派生

辻村氏のカメラ・ハントを真似て、恐る恐る写真をとったり、記事

多少は、ましになって来たと自分では思っている。

事を書いてみたりするが、記事も写真も中々思うようには行かないものである。だが、記事は文才というか、一寸やそっと勉強しても急にうまくなるものでもないが、写真の方は多少の経験を積み、工夫をすると、少しは上手になるもので、私も最初の頃は、ストロボ一本槍で、接点を間違えたり露出の計算を誤ったり何回か苦い経験を重ねて来たが、それでも最近

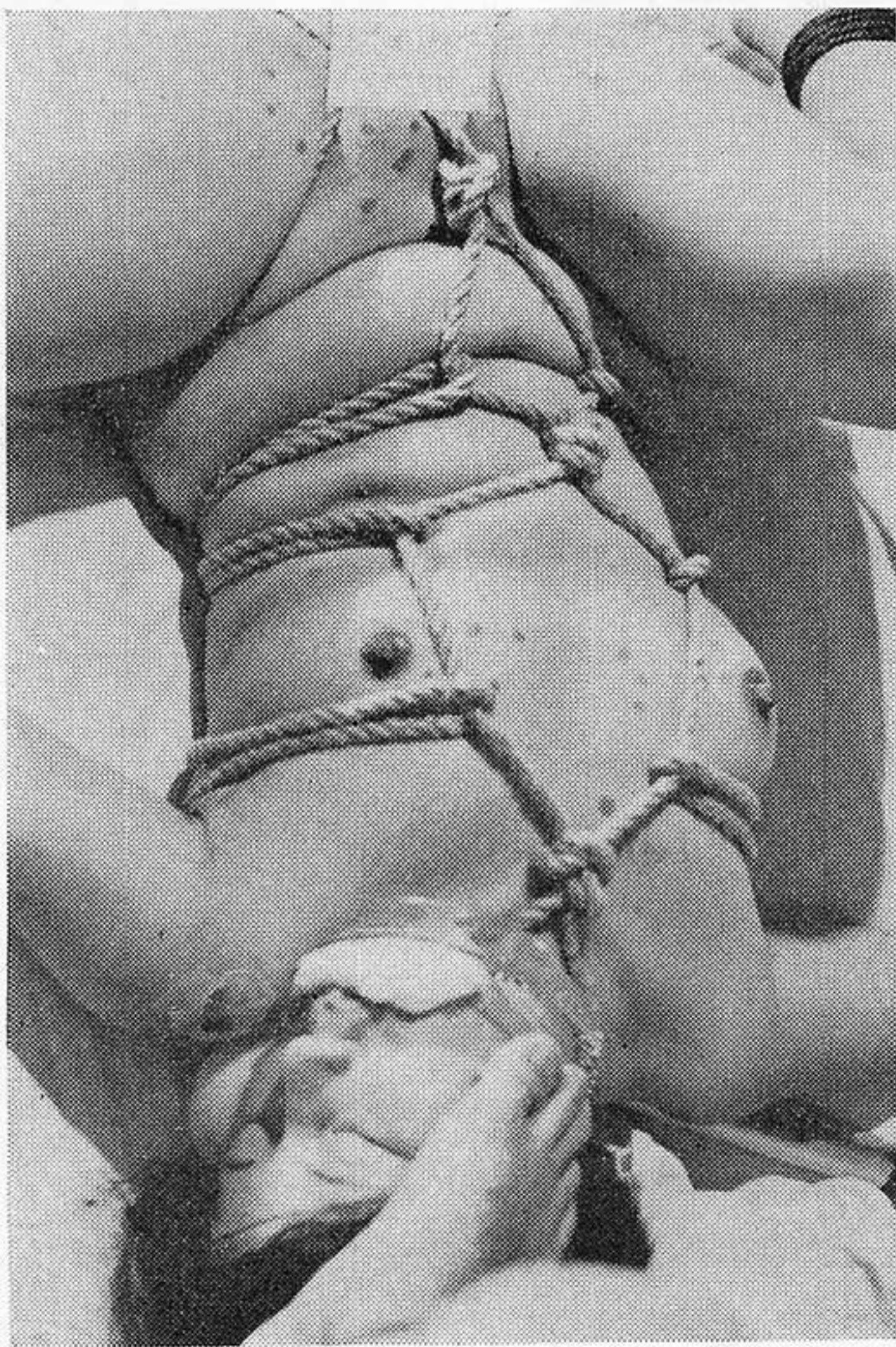
最近、夫婦プレイやらハントやらの素人写真が誌上を、にぎわせてくれるのは、本当に嬉しい。それは撮る人が、撮りたいから撮りたいものを撮るといふ本当のアマチュアリズムに徹しているからで、プロのモデルが仕事としてポーズをとり、プロのカメラマンが仕事として写すのとは、本質的に違った迫真性があり、それが、私達の共感を呼ぶからであろう。

もちろん、モデルはプロの方が綺麗かも知れないし、カメラマンの技術は、我々とは比

較にならない。しかし、我々は芸術的に立派な写真が欲しいわけではなく、本物の S M 写真が欲しいだけである。そこに、プロの提供してくれるものと、我々の欲するものとの間に、ずれを生ずる原因があるのだろう。もちろん、プロの写真には、アマでは、とても求められない良い点もあることは十分に認めてはいるのだが……。

さて、我々が S M 写真を撮る時、殆どの場

合は、被写体と自分の二人きりである。そして、ただのカメラ操作だけでなく、必然的にプレイを伴う。するとカメラマンはただ写真を撮ることだけに没頭するわけには行かない。まずコソテというか、写す場面や手順を考え、縄を掛け（これが結構むずかしい作業なのだが、今回は、そのことには触れない）ポーズをつけ、照明の角度を考え更に自分も助演者として演技に加わりながら、写真を撮すわけである。すなわち、シナリオライター、兼ディレクター、兼緊縛師、兼俳優、兼カメラマン、



と、少なくとも一人五役をやったのけなければならぬわけ、その五役ともに優秀な成績を挙げるといふわけには、なかなか行くものではない。ここでは他の四役は一応おとし、カメラの操作だけでも、かなり沢山のファクターがゴツチャになって、思いがけない失敗をして、あたら貴重な絶好のシーンを撮りそこなったり、或は、写ることは写っても、構図やライティングの、まずいものばかり

りということが、よくある。冷静に考えて撮れば、もっとまじに撮れる筈なのだが、もともとプレイの状況が冷静であるわけではないし、若しそんな冷静な雰囲気でも撮ったとしたら、カメラワーク以外の四役が、まるで落第となり、ろくな写真が出来るわけではない。プレイに没頭して頭に血が昇っていれば、カメラワークが、いい加減になるのも止むを得ない。

かくて、あまり冴えない写真を次々に撮っては、俺はスーパーマンではないのだから仕方がないなどと自分自身に弁解を繰り返す。しかし、これは私だけの話ではなく、S M 写真を撮ったことのある人は誰しも覚えのあることではなからうか。そこで甚だおこがましいが、私の S M 写真術を御紹介して、多少なりとも、ましな写真を撮るのに参考になれば

ばと考え、筆をとった次第である。

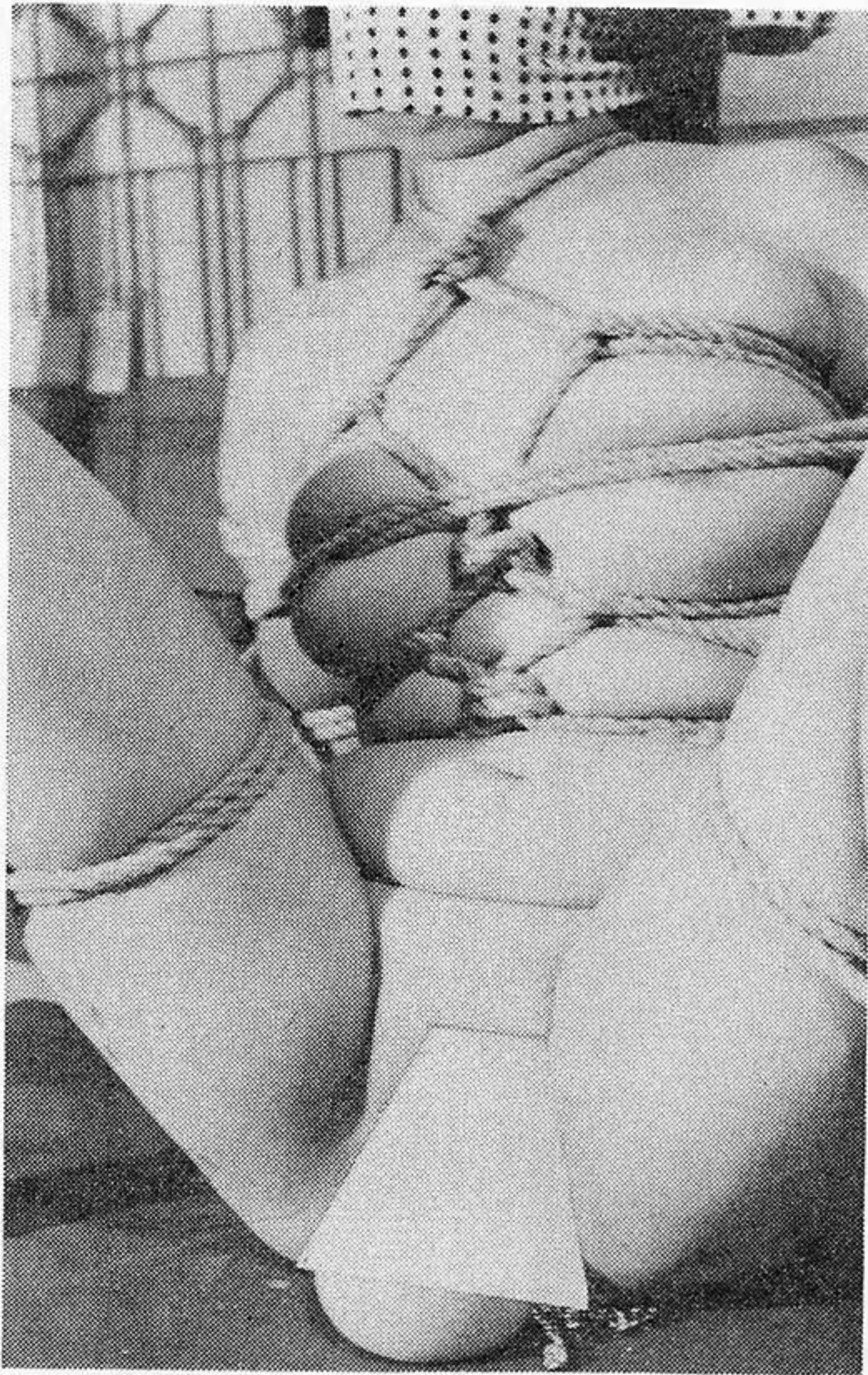
まず私の写真術の要点は、出来るだけ操作を単純化して、頭を使わないことにある。前述したような状況の中で、なるべく良い写真を撮るには、あまり、あれこれ考えないで写せることに、最も重要な要因があると思う。もちろん、助手つきで写すならば話は全く別になるが……。

いわば馬鹿チョン写真術こそが私の写真術

なのだ。その際、節約した頭の働きは、他の四役の方に振り向けようというわけである。とはいっても、ただシンプルにすれば、それで良いというものでもなくて、多少はそこに工夫も必要なので、以下、項目を分けて、やや詳細に説明を進めよう。

一、カメラ

カメラは先ず、E・Eカメラがよろしい。E・Eカメラは安物だ



といって馬鹿にする人もいるが、ニコンFやプロニカを持っても、それを生かして使うためには、頭を冷静にして使わねばならないから、この際は敬遠した方がよい。E・Eカメラを使えば露出を考える操作が一つ、減らせるし、おまけに現像した時、フィルムの濃度が一定で焼付けが大変、楽になる。

室内の撮影だから、広角気味のレンズでないと、逆さ吊りとか礫など、全身を伸ばしたポーズでは、狭い室内ではカバーし切れないところがあるのと、広角気味の方が焦点深度が深くなり、ピント合わせが多少、いい加減でもひどいピンボケにはならないからである。だからといって、今流行の二十八ミリとか、もっと短いレンズは遠近感が、ひどく誇張されて、独善的芸術写真になってしまい、我々の望むリアリティを失ってしまう。

レンズの明るさについては、どうせ照明を用いるのだし、絞って焦点深度を深くして使うことが多いのだから、F三・五もあれば十分である。

もう一つ大事な点は、フィルムの自動巻き機構である。これはSM写真を撮っているうちに誰でも、自身の一部、参加した写真というか、現に自分が相手を責めている、その決定的瞬間を写したくなるからで

ある。セルフタイマーで撮ればよいという人は、あまり経験のない人で、一回一回フィルムを巻き上げ、セルフタイマーをかけるためにカメラの所まで行っていたら、すっかり気が冷えて決定的瞬間などが撮れるわけはない。また一シーンに、たった一枚しか撮らないで良い写真を、というのも無理である。矢張り自動巻き上げプラス、リモコンリリースでジャーツ、ジャーツと連続して撮っているうちに、素晴らしいポーズや表情が撮れるものなのだ。

と、いうことは分かっているが、フィルム自動巻きのカメラは、ひどく高価だし、自動巻きでE・Eのカメラは、ないのではないかと思っている人も多いに違いない。ところがそういうカメラが存在しているのである。今私が並べたような条件を全部、揃えた上、極く安いカメラが一種類だけ発売されている。その名はリコーハイカラー35といい、値段は一万六千円位である。このカメラはスプリングモーター式自動巻きで、一杯に巻くと十枚位、連続して撮れる。S Mプレイの場合は、一シーンで七、八枚、撮れれば、まず十分なので、なにも電動式の高級品を買う必要はない。

このカメラのレンズは三十五ミリのF二・八で、焦点距離は手頃であり、四枚玉にしてはシャープで、六ツ切り位までは十分に伸ばせる。露出はシャッター優先のE・Eで、他のカメラのE・Eより幾分、露出オーバー目に写るくせがあるようだ。何よりも小形軽量で持ち運びには便利で、ハントに出向く時など、荷物を減らすのに大変、ありがたい。こう書くとりコーカメラのコマーシャルのようだが、私は決してリコーカメラの社長でも株主でもない。念の為。

二、フィルム

フィルムは、カメラとは反対に良いものを使わなくては不可ない。私はコダックのトライXにきめている。これは三十六枚撮り一本を買うと四百円位するようだが、百フィート巻の生フィルムを買って、自分でパトローネに巻き込めば、一本百六十円位にしかならない。しかし、十万円以上のカメラを買わずにリコーハイカラーで済ませるのだから、一本四百円位、払っても、フィルムはケチしない方がよい。トライXはASA四〇〇あり、現像の仕方によってはASA一六〇〇位に使える。どうせ照明を使うのだから増感する必要もないが、S・S級に較べて、絞りを二目盛

絞れることが焦点深度からいって大いにありがたし、カメラを手持ちで写す時にはシャッターをそれだけ速くして手ぶれを防げる。実際、手ぶれは、かなり多いものですぞ。トライXは感度が高いだけでなく、粒状性も良くて、大きく引き伸ばしても、あまり粒子も目立たない。そういうわけで、フィルムはトライXときめてふんだんに使うことである。なお、私はコダックの社長でも株主でもないが、現像液はコダックD76にかぎる。九百何ccかで二百五十円位するが、これで六、七本は現像出来る。

余分な注意だが、トライXをカメラに入れる時、ASA感度の設定を忘れずに四〇〇にしておかないと、えらいことになる。

三、照明

モノクロ写真の良し悪しは、殆ど照明で、きまる。ストロボは絶体に良くない。ストロボも自動露出のついた便利なものが市販され頭は使わなくても良くはなったが、なんとしても正面光のフラットな軟調な写真は面白くない。携帯には便利には違いないが、一灯ストロボでは良い写真は絶体、出来ないし、バウンスフラッシュとか増灯とかいうことになる、照明の効果は写してみないと解らな

いし、ひどく頭を使って計算しなくてはならない。

私は、殆ど室内で写し、あまり動き廻らない被写体を写す以上、ストロボはSM写真の敵であると思っている。ただしカラーの場合は話が違うが、カラーについては、まだあまり経験がないので割愛する。

ストロボを使わないとなると、当然リフレクターランプのお世話になる。カサが大きい上、壊れ易いので、持ち歩きには、ひどく都合が悪いが、私は止むを得ず、これを二灯、持って歩くことにしている。夫婦プレイなど自宅で撮るならば、二灯でも三灯でも自由に使えるので、大いに活用して欲しい。

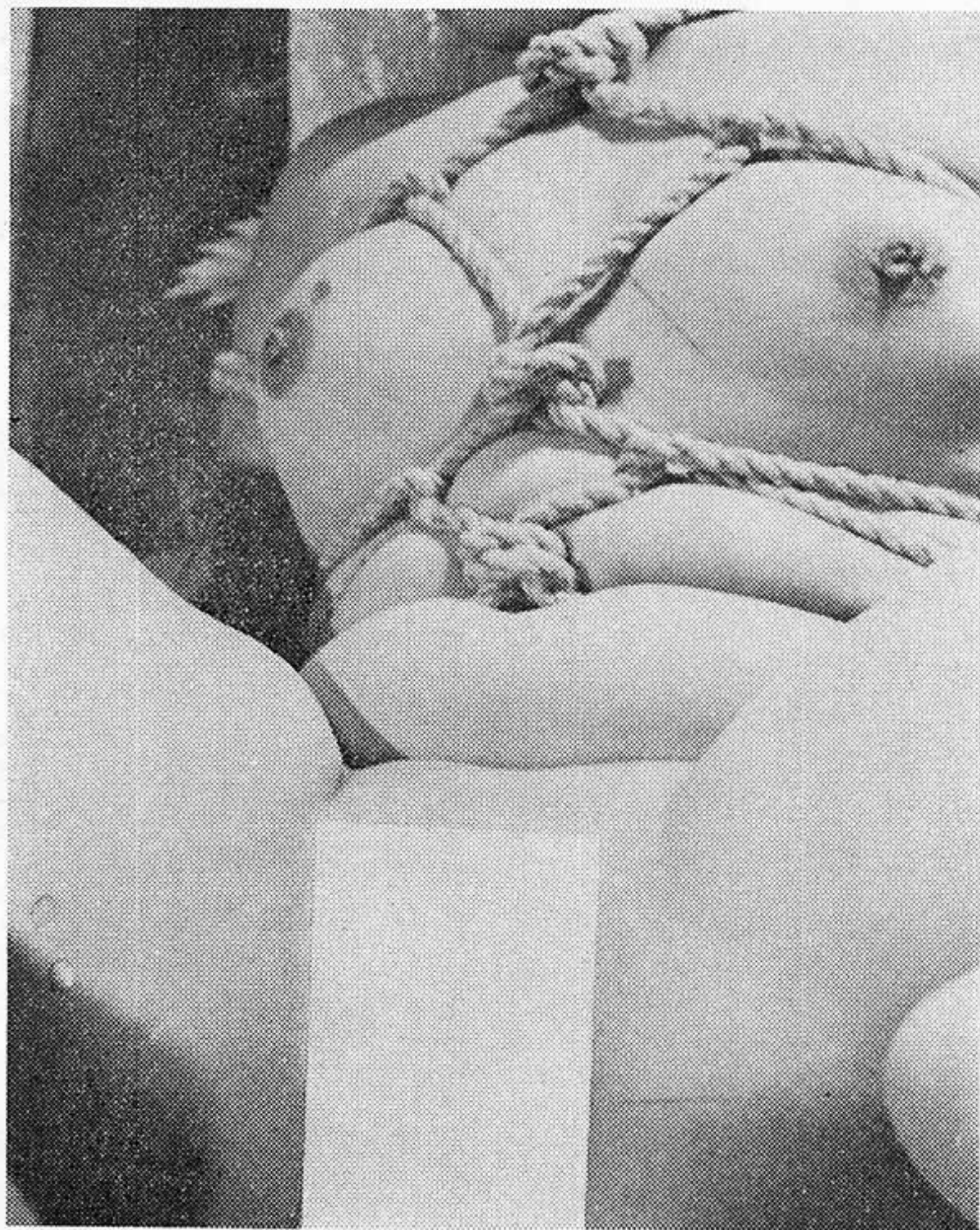
ワット数は、トライXを使用するならば、それほど大きくなくても間に合い、三百ワッ

トのフラッド二灯で十分だが、もう一灯、用意するなら、二百ワットのスポットで良い。この二灯なり三灯を適切に配置しておけば、被写体やカメラが多少、動いても、まずまずの照明効果が得られるし、あとはカメラのEにまかせてシャッターを押すだけで、やや硬調の露出の揃ったネガが得られる。

ランプはフラッシュと違って、どこに蔭が出来るか、照明効果を自分の目で確かめながら、配置を考えることが出来るのが、なんとも最大の特長である。また別の副産物として、被写体が明るいのでピント合わせが楽になる。尚、ついでに一言すれば、リコーオートハーフは、距離計がついていないが、

一メートル前後の近距離を写す時は目測よりメジャーで正確に、はかった方が、手間をかけただけの効果はある。

さて、ランプの配置、すなわちライティングについては、いろいろと専門の本も出ているが、本格的なむずかしいことは別として、次の点に一寸、気をつける程度でよい。まず顔を下から（アゴの方向から）照らしては、いけない。これは普通の写真では、めったに、やるわけのない照明だが、SM写真では、下半身に光を当てようとすると、その角度が丁度、顔を下から照らしてしまうことになる場合が多い。また、逆さ吊りにして天井から照明したりするといった顔を下から照らすことになる。



こういう時には、頭のトップンの方向から、もう一灯あてて、グロテスクな顔にならないように気をつけければ良い。

次に真正面から光を当てず、乳房や太ももの立体感が出るように斜め横から主光線をあて、次に主光線による、度ぎつい影を消すように、反対側の少し遠くから副光線をあてるようにする。時には、半逆光が面白い効果を生むこともある。

その次には、鏡やガラスにライトの反射が入らないようにするとか、自分の影を被写体の上に落とさないなどという注意も必要だがやってみれば、それほど、むずかしいことではない。こうして一度うまく光をあてておけば後は、あまり頭を使わなくても、結構いい写真がとれるのだから、面倒がらず、やって欲しいものだ。

四、その他

カメラには当然、三脚が必要で、リコーハイカラーならばカメラが軽いので小型の三脚で十分、間に合うが、高さが足りなければテーブルの上にも乗せればよい。雲台もシネ型よりも球関節型の方が自由度が大きくて使い易い。これは雲台だけでも売っているからそれと代えるとよい。

リモコンリリースも電波式の高級品もあるが、私はゴムチューブ式の安いものを使ってゐる。ただ、これは小型軽量なのは良いのだが、足で踏む時など、時々、シャッターが降りないことがあるので困る。長さは三米か四米あれば十分で、それ以上、長いと、かえって扱い憎い。

フィルム現像は、先に述べたD76で六分から六分半位が適当で、印画紙は二号で、丁度よく仕上がる。

フィルム自動巻きだと、つい余分に沢山、写してしまうが、私はいつも、ネガは三十六枚を一度に六ツ切印画紙にベタ焼にして、それをループで、よく見て、良いものに印をつけ、それだけを引き伸ばすことにしている。同じようなポーズでも、表情その他、ウンと良いものと、つまらないものの差は、えらく大きいものである。

以上で、私の写真術の、あらましを記したわけだが、この方法は、さして費用もかからず、それほど面倒もかからず、その割には、うまくとれるので是非、皆さんもやってみて良い写真を、とって下さい。

二月号、三月号の最優秀作品と、ひそかに

敬意を表している山口とき子さんの自縛教室に触発されて、おこがましいのを承知の上でこの記事を書いたわけですが、山口さんが自縛写真を撮る際にも、きっと参考になると思えます。もっとも私のいう一人五役より、もう一役多い、一人六役をやっている才女のとき子さんは、こんなことは、とくに御存知かも知れませんが、たまにはモデル一役だけに見してみませんか。及ばずながら残りの五役は私が引き受けます。

作例は、いずれもモデルは佐野みさ子さんで、カメラはリコーハイカラーS、レンズはリケン三十五ミリ、F・二・八、シャッター六十分の一、EE露光。フィルムはトライX、フィルム現像D76六分半。印画紙は月光V2。照明は三百ワットフラッドランプ二灯使用。能書をいうほど上手くは撮れませんが参考までに、どうぞ。

実は、三月号の読者通信で伊勢国男氏が、小生の撮った佐野みさ子さんの写真を、ほめてくれたので、つい嬉しくなって作例を、そえたわけです。

——(おわり)——

カット・岡 たかし



紫 蘭 の 門

— 連載・時代S小説 —

風 流 極 道 軒

(21)

夫に“いとしさ”を覚えさせてこそ“妻”なり。
 男に“いじらしさ”を感じさせてこそ“おんな”なり。
 “いとしさ” “いじらしさ”
 は男が判断するものなり。

抱いておくれよう！

拷問部屋に隣接するその部屋は、四畳半ほどの広さであろうか――。

三方が壁にかこまれた穴倉のようなたたずまいで、畳もない黔ずんだ床に荒筵が一枚おかれ、ムウツとする埃くさい匂いが、よどんでいた。

「ア、ア、アッ！ 早く、早く抱いておくれよう。ねえ、早くしておくれったら！」

なまめいた声の主は、小紫のお景であったが、その声にくらべて、なんという厳しくも無残な縄目であろう。

ほっそりとした頸の回りに二巻きされた縄が、鎖骨のあいだを抜け、乳房の谷に垂れて

ぐるりと双つの隆起を締めあげ、さらにへ、その中心にして幾つかの菱形をかたちづくっている。二の腕に絡む縄は、ふかぶかと柔らかい肉に喰いこんで、三重か四重か、さだかなく、脇腹から腋毛へかけても幾条かの堅固な縄目が施されている。しかも縄の色は、青大将を思わせる青色――。

穴沢流緊縛術の達者である青蛇の青蛇が腕をふるった荒踊の縄掛けであった。

その青蛇が、目のまえにいた。

もう一人、七尺近い巨軀は、羅卒一家の親分、鞭兵衛。淫らに歪んだ顔を、ぎらぎらとあぶらぎらせて、足下によこたわるお景を見おろしている。

「親、親分さん……早く、早く抱いて下さいよう……ほんとに、もうダメ、ダメなの……はやくう！ はやくしてえ！」

尻あがりに甲高い声が朱い唇から、じれっ

前号まで――戌夜のロザリオの秘密をめぐって、元禄屋の手におちた徳夜叉の情婦・小紫のお景は、羅卒の鞭兵衛たちの穴沢流・綱渡りの拷問に哭くが、決して秘密を白状しようとはしない。そこでさらに淫器・夫面恋がその裸身を苛み、媚薬・櫃の粉が、柔肌を襲う。

たそうに、ほとばしり、短く引きしまった胸がくねり、かもしかのように発達した両脚がしきりに蠢く。

裸蠟燭の光に揺れるその痴態は、櫃の木の粉のせい。あれほど羞恥心の強いお景も、この媚薬のために、われを忘れて悶え乱れるほかはない身であった。

「フッフッフ。お景姐御も、こうなっちゃあ、ただの女だねえ」

病的に青白い顔をひきつらせた青蛇が、仰向きに荒筵の上に、よこたわり、太股をひらいて悶えている妖艶このうえない、お景のそばにかがみこむと、蠟燭の光をうけてうっ金色に輝く内股のあたりに右手をのばした。

「ア、アッ、青蛇さんかえ。早く、早くしてったら……ア、アッ……そ、そこじゃあないってバ！」

「あわてるねえ、姐御。櫃の粉は、半日は効目がある。まあ、ゆっくりと、むずがゆさを楽しむことさね」

と答えはしたものの、青蛇の小倉のきもの突っぱりようからみれば、彼もまた一刻も早く抱きたいらしい。が、一番檜は鞭兵衛にきまっている。

「親分。お景の阿魔もああいってますし、そ

れに斑猿たちも、じりじりしながら待ってますでしょうから、さあ、どうぞ」

などと、せかすようにいい、

「お景、さあ、親分のお情けにすぎりな」

と、なかばひらかれている、お景の両脚を大きく「八」の字にひらかせ、膝まで、右、左と立てさせる。

しみひとつない素晴らしい双脚であった。

うっ金色に映える内股の妖しさが、男を誘いよせずにはおかない魅力で息づき、ほのかに嵯峨菊の花の匂いが、かおってくる。

「お、お、おや分さん……は、はやく！」

迫ってくる男の気配に、広い額にうかぶ眉根をよせて、お景が喘いだ。

「お景。俺に抱かれてえのなら、はつきりそういつてみな。そうすりゃあ抱いてやらねえこともないぜ」

この場におよんでなお鞭兵衛は、女心の髓芯まで翫らなければ、気がすまないのだろう。お景の唇から、あられもない言葉を吐かせようとした。

ふだんのお景なら、尋常の拷問をうけていだけならば、ここで小気味よい紅の啖呵がとんだであろうに、いかんせん、お景は、すでに惑乱状態に陥っていた。

「親分、親分のお、おなさを、う、うけとうございます。早く、早く！ 親分ったらアじ、じらさないで！ お願い！」

「フッフッフ、徳夜叉の野郎に見せてえものだぜ、このざまをよ。ワッハハ……」

得意この上ない高笑いが途切れたかと思うと、お景の叫びが、くぐもり声に変わった。

「ア、ア、ア……」

櫃の粉によって、責められはじめて小半刻

——、その間、狂ったように悶えつづけたお景はいま、厳しく縛りあげられた縄目もちぎれるほど豊かな胸を波打たせて、底知れぬ大渦のなかに身も心も投げこんでいくのであった。

裸蝨燭が妖しく、またたき、十三夜の月に向かつて飛び立っていった夜鷹のあとを追うつもりなのであろうか、野犬の群れが、いっせいに遠吠えていた。

その哭声よりも鋭く悩ましいお景の呻きを、酒をくみかわしながら白豚と斑猿が、すぐ隣の拷問部屋で、きいていた。

「兄貴。や、やりきれねえや……」

目と鼻のさきで颯りものにされているお景の姿を想像するだけで、白豚はもうカーッと頭に血がのぼってくる。

「俺も同じでえ。チェッ、青蛇の兄貴。親分と二人で、さんざん楽しんでいなさる」

斑猿は、やけになったように、分けまえにありついた例の松茸を着に、酒盃をグイッとのみほした。

正面、脇息によった元禄屋は、どうやら、さきほどから、うたたねをしているらしく、身うごきひとつ、しない。

身動きをしないと云えば——、

さつき青蛇が、お景と入れちがいに、こちらの部屋に運びこんだ千登世もまた、気を失っているであろう。ふかく臉を閉ざして、うなだれたままであった。

そのとき、ふたたび、お景の悩ましいことこの上ない叫びが洩れてきた。

「ど、どこを、どんなにしてるんでしょうかねえ、兄貴」

白豚は、もう気もそぞろの様子である。

「そんなことがわかってたまるかい！」

斑猿は、一喝したものの、やはり、気にならなく、隠し戸のほうを見やって、腰をもじもじさせながら、

「早いこと回してくんねえかなあ。夜があけっちゃうぜ」

「夜があけようが、槍が降ろうが、俺は、こ

こを動かねえぜ、兄貴。ぜつ、ぜつたいに抱くんだ！」

グウーッと盃をガブのみにした白豚は、順番の回ってくるのを待ちきれなくなったように膝をずらせると、血の気を失って、ただ虫の息をくりかえしている千登世の、深々と縄目を受けた柔肌に指を這わせようとする。

「やめなよ。気を失ってる女を颯っても、面白くもなんともねえぜ」

「横っ面ひっぱたいて、起こしてやりやしようか」

「起こして、どうする」

「ヘッヘッヘッ。お景姐御をこの手の中にしつぽりと抱くまでのひまつぶし、からかってやりやしようや」

「バカ！」と言った斑猿は、

「白豚、こんなときは、じいーっと待ってるのが一番なんだぜ。考えようによっちゃあ親分たちよりも、俺たちのほうが幸福かも知れねえ」

「そ、そりゃあまた、なぜですかい。どんじりのくじをひいちゃった俺が、なぜ、幸福なんですかい」

「フッフッフ、女は抱くのも楽しいが、抱くのを待つ、つてのもオツなもの。ああもして

やろう、こうもしてやろうと夢を描いてさ、果報は寝て待てというじゃあねえか。真っ先に抱いてしまった親分には、この待つ間の楽しみがねえってことさ」

もちろん、これが斑猿のやせがまんであることは、「じゃあ、兄貴、俺を三番にして兄貴が、どんじりになってくれますかい」という白豚の提案を、にべもなく拒否し、隣の部屋から三度あがったお景の叫びを聞いて、いまいまいそくに舌打ちをしたことから、あきらかであった。

こうして——、ともかくも千登世を騙ることをやめた白豚が、お情けで分けてもらった松茸を肴に、斑猿ともども一升ちかくも酒をくみかわした頃であつたらうか。

小さな潜り戸が、やっとひらいて、満面に笑みをうかべた鞭兵衛が姿をあらわし、そのあとに青蛇がつづく。

「親、親分、ど、どうでござんした！」

叫びはしたものの、答などは、どうでもよいとばかりに、隣室にかけこんでいく斑猿のあとから、

「兄、兄貴、たのむ、俺もいっしょに！」

これ以上、待たされたら気がへんになるとでもいうように白豚が走りこむ。

その二人のあわてふためいた恰好を見おくった鞭兵衛が、ニヤツと青蛇と顔見合わせたが、それよりも早く

「お、お世話になります、姐さん！」

という白豚のうわずった声と、

「ア、アアア……白、白豚さん、そ、それにまだらざるさんも……」

お景の、七彩のもやのなかを、さまよっているような甘ったるい、よびかけが聞こえてきて、すぐまた斑猿が、

「お景さん。お、俺だって、青蛇の兄貴など

にゃあ負けはしねえぜ」

「あ、あいよ。どうか、どうか、このお景を存、存分に抱いて……」

自分たち二人で完全に屈服させてしまったと信じきっていた鞭兵衛と青蛇は、お景が意外にも新しい男たちを喜んで迎えるらしいようすに、ギョツとなり、

「親分。もうこうなりゃあ、われわれもお相伴させてもらいましょう。女には五人の男が、よく似合う——と元禄屋の旦那もよくいっていらっしゃることですよ」

鞭兵衛に異論のあるはずはなく、徳利と肴を両手にもつと、いま出てきたばかりの潜り戸を再び、もどっていくのであった。

こうして、厳しく縛りあげられたままのお景を、四人の男がとりかこむ。

それにしても、「櫃の粉」——お景ほどの女をここまで追いこんでしまふとは、まことに恐ろしい魔薬といわねばなるまい。

と——、

その時、天井裏で、

「お妻、女というけどものは、単純なものだねえ」

「あいよ。お前さんのように複雑な人間じゃあないからねえ」

「複雑な人間か……面白いねえ」

「そうよ、お前さん、二重人格の人間なんてかわいくって。六重七重、八重九重、お前さんのような男でなくっちゃあ」

洗い髪のお妻。そういうより早く亀甲縞の上田八丈の裾をひるがえしたかと思うと、が、んぎのように入り組んだ天井裏の鋭く尖った梁から梁へと、雌鹿のように跳ねた。

あと見送った虹の陣兵。

「咄、咄——咄」

これは、陣兵の得意の呪文であった。男として生まれた以上、九次元の人格を行使しなければならぬ「天命」から発する、満面に微笑をたたえた心の叫びといえた。

……イメージギャラリー……『軽便モッコ』……小川 茂 生……



と、見るまに、その陣兵、まるで、九天の

雲をかき消すかのように、いづくともなく、

消えて行って、あとに残るのは、^{いらか}薨——十三

夜の月に照らされて眠る大江戸八百八町の屋

根屋根に、ところどころ、ポツンと暁闇の空

に向かって聳えている薨——^{いらか}夢の瓦”だけ

であった。

“夜明けのまえが一番、暗い”と歌ったのは

いつ、どこのうたよみであったのだろうか。

ここ、麻生六本木には一番鶏が鳴いて、多磨

川の流れは、凍てつくように寒い。

縄 痕

寒くないのは、部屋の中だけであった。

八畳ほどの拷問部屋に、新しくつぎたされ

た裸蠟燭が、眩いばかりに照りはえているな

かで、縄一筋かかっていないアカ裸の身を、

お景は息も絶え絶えに横たえていた。

四人の男に、骨の髄まで、しゃぶられてし

まった肉体であった。

鞭兵衛、青蛇はまでも、三番手、四番手の斑猿と白豚の執念深さは、「兄貴などには負けねえ」どころの騒ぎではなかったのである。

そして、いま、奥の部屋からこちらの拷問部屋に運びもどされて、「お景さん。さあ、こちらへきて酒でも、ついでもらおうか」と青蛇によびかけられていた。

(な、な……んで……お、お前たちなんかに酌を……)

瞬間、チラリと反抗の気持が脳裡を、よぎったものの、

「お景。酌だ！ 酌をせい！」

と、男の声で命令されると、心の底で、いくら抵抗しても、踏みにじられた女の体が、いうことをきかない。

「……………」

恨みとも、いとおしさとも、憎さとも、離れがたい、きずなとも、まったくいいようのない表情を浮かべたお景の顔が、鞭兵衛、青蛇、斑猿、そして、ぐったりと疲れ果てた顔付きを白豚へと注がれる。

いつのまにか、主人の元禄屋は、姿を消していた。千登世もまた、いない。

「元、元禄屋さんは……千登世さんは」

四人の男の、だれにともなく、お景は口を開いていた。

体のふしぶしが、まるで夢のなかでもあるかのように、まどろっしく痛む。

「鞭、鞭兵衛さま、元、元禄屋さんは！」

「旦那はお帰りさ。それに千登世にも、もう用がないので、もとの所にもどしたのさ」

もとのところというのは、別棟の土蔵のことに違いない。そこで千登世は、豊香とともに、アカ裸の女囚として、ずうーっと捕えられているのであった。

が、千登世のことよりも、いま、お景の気になることは、夢うつつの間に戌夜のロザリオの秘密を口走りはしなかったかということである。

八つ裂きにしても飽きたりないくらいの仇敵の手に陥ちてしまい、せめて身を守りたい肌を汚されまいと思ったのは初手のうち。スッ裸にされてからは、たとえ肌身は汚れても心までは許すまい。「石の花」になって、被虐の悦びに鳴咽したり、あられない声をあげるようなことはすまいと誓ったのだが、それもむなしく破られてしまったいま、残るのはただひとつ、夫・徳夜叉の生涯をかけての

夢である戌夜のロザリオの秘密を守り抜いたか否かに、かかっていた。それまでも白状させられていたら、どうして夫のもとに、おめおめと帰ることができよう。

「鞭兵衛さん、妾、妾、もしや、ロザリオのことを……」

思いきってお景が顔をあげて尋ねてみた。

「フッフッフッフ……」

含み笑いをうかべた鞭兵衛は、

「そんなことより、姐御。もうこうなったらどこへもお前さんをやらねえよ。これからずうーっと、ここにいてもらう。そして俺たちの惣嫁になってもらうぜ。いやかい」

大あぐらを組んだ鞭兵衛は、お景の質問をはぐらかした。

その言葉や態度の、はしばしに、蔑むよう

な気配のあるのを感じたお景は、

「い、いったのかえ。妾が、ロザリオのありかを白状してしまったとでも！」

右肘を畳にたてると必死のおもいで問いつめた。

裸蠟燭が、妖しく、またたき、

「姐さん。見えますぜ。それにそんなに親分にちかづく」と

誰かが、そういうと、むっちりとした双唇

をバシッとたたき、そのまま指を這わせてきたが、お景は、気にもとめなかった。

「親分、お願い。妾は、白状したのかえ、教えて。いったい、妾は……」

俯伏せになって、肩も、背中も、腰も、男たちの淫らな視線をもちに浴びながら、さらには、顔をあげ、肘を立てるにつれて、いやもおうもなく乳房があらわになるのを知りながら、お景は、「女であるがゆえに前後不覚の忘我の境地」に陥らされてしまったときの自分の言動が気にかかる。

「フッフッフッフ……。どうかねえ、姐御」

女を賜ることにかけては、非凡の腕をもつ鞭兵衛のこと、毛むくじゃらの手で、盃を持ちながら一向に答えようとはしなかった。

「親分……」

悲痛な翳を、瞳にうかべたお景は、

「親分……お、おしえて頂戴！ 妾、ほんとに、あの秘密をしゃべっちゃまったのかどうか……ね、親分！」

右肘で、床を押して身をのりだし、鞭兵衛をふり仰ぐその姿は、女心のあわれさに、あふれていた。

いくら八重垣流小太刀の達者とはいえ、そこは女のこと、ほっそりとした手首や、ふ

かぶかとした二の腕に残る無残な縄痕。並み外れて大きくはないが、くりくりっとして弾力のある乳房のいただきに映える紅珊瑚のよな乳首——。

身長割合に較べて腰から下が長く、よく発達した双の脚。そして、その太腿のつけねにまで残っている幾条もの縄の痕跡や、淡く桃色に匂う、ふくらはぎの柔らかさ。

まるで小菊の花の懸崖をみるような「可愛い女」のその雰囲気は——。

読者諸賢よ。じっと目を閉じて想い出していただきたい。あれはもう十年ほども昔になろうか、「奇ク」のグラビヤを飾った梨花悠紀子嬢の艶姿を。

「縄をつかわない緊縛ムード」——とでもいうべき新しい境地を指向されて編集部の方々が精魂を傾けられた、あの一葉の写真を！

さらには「憂愁の囚女」「柱と荒縄」「責めに憑かれて」……以下の組写真——女に縄を掛けるということは、より以上に、女体に美を齎（もたら）すためであり、さらにいえば、より美しく育てた花を愛するという男の本能のあらわれに、ほかならない。

ところが——、
女は「子供を産む機械にすぎぬ」とソクラ

テスは言い、「女は男の付属品に過ぎぬ」と孔子がいい、「女は、外面如菩薩・内心如夜叉」とゴータマ・シッダルタは言う。

いずれも「女」にふられた腹いせにしか過ぎぬ。彼等に、昔は梨花嬢、今は「奇ク・五人娘」の諸嬢を、かいまみさせたとしたならば「我不関焉」と見すごすことができたであろうか。

私は、ソクラテス以下の聖人・君子たちに「奇ク」を一目なりと見せてやりたいとおもう。そうすれば、人類の歴史が大きく変わったことは疑う余地がないと信じている。

ところで、いまひとつ——、

梨花嬢は、おろか、どんな領域の美女にもまさる御令閨さまが、鞭兵衛たちに罵られるとしたならば、どんなお気持であろうか。

（和子よ、舐めろよ。舐めてみい！）

と、浅草は御蔵横で口入れ稼業をいとなむ六尺豊かな大男の鞭兵衛が迫るとすれば。

口径九百十四ミリ、第二次世界大戦で使われた各種の大砲のなかでもっとも口径の大きいアメリカ陸軍の重砲が迫っているとしたならば！

和子さまでも昭江さまでも美智代さまでもひろみ夫人でも静子夫人でも良子でも妙子で

も明子でも、いずれでもよろしい。日本中で一番、美しい女とむかし思い、いまも心のかでは、そう思っていらいっしやる御令閨さまが、一糸まとわぬ姿に剥きあげられて、その「炎と燃ゆる春の淡雪」のような裸身を、羅卒の鞭兵衛一家に責め罵られている光景を想い描かれよ。

読者諸賢よ、はたして、いかに！

舐 め る

「フッフッフ、お景。わかりきったことじやあねえか。穴沢流の拷問を喰って白状しなかった女は、まだいねえぜ」

膝にとりすがったお景の右手を握った鞭兵衛が、「吐いたさ」と、グイッと毛むくじらの両腕で、ぜい肉ひとつないくりくりとひきしまった裸身を抱きしめた。

「ほ、ほんとに！」

吐いたさ。といった鞭兵衛の口が、まだ閉じられないうちに、お景が声をふりしぼる。

「ほ、ほんとに、妾は、吐いたのかえ！」

抱きしめられた嵯峨菊のつぼみのような体が、三分咲きのように花開く。

「フッフッフ……ほんとだともさ。戊夜の

ロザリオの在処は」

そこまでいったとき鞭兵衛は、自分の腕のなかの女体が、急激になえていくのに気づいた。

それは、三分咲きの菊の花が、ときならぬ

霜のために、咲き誇ることなく朽ちていくのにも、雪女郎が、朝日をあびて溶けて行くのにも似た風情であった。

「お、お景！」

思わず、鞭兵衛は右手の指を、お景の唇に



……イメージギャラリー……『適正間隔は三分』……飯田ひろくに……

突っこんだ。

間一髪とは、このことであつたろう。鞭兵衛の指の動きが、ほんの、ほんの少し遅ければお景の歯は、その舌を噛みきってしまったにちがいない。

「姐御！ 変な真似はするんじゃないねえ」

「白豚のぶよぶよした右手の指が、鞭兵衛のあとにつづいて朱い唇のなかに割りこむ。

「……だ……だ……だって……妾、吐いたのでしょう……」

かろうじてそうとれる言葉が、鞭兵衛たち四人の耳を打った。

「バ、バカ。バカな！ お景姐御、姐御は何ひとつ白状しちゃありませんぜ！」

斑猿がスットン狂な声をあげると、

「ほんとですとも、姐御。姐さんは偉え、頑張りぬきなさった。えれえのなんのって、俺はもう感心しちまって……」

と白豚が、右手だけでなく、左手もお景の唇の端につっこんでいう。

「ほ……ほんとに……な、なんにも……」

あとは、明瞭な発音ではなかったが、お景の言わんとするところは、はっきりと判る。

判るだけに、鞭兵衛は、いよいよ、この女が、かわいくなり、

「お景。話は、最後まできくものだ。元禄屋の旦那のおことづけだ。お前は、立派な女だとよ。儂も、つくづく、そう思うよ」

「俺もだよ、姐御！」

斑猿が、お景の双臀に顔をよせて叫ぶと、白豚が、

「姐さん、俺は、最初から、姐さんは白状なんかしねえと信じていたさ……」

まるで、徳夜叉側に、寝返ったようなことを平気でいって、皓齒の間に突っこんでいた指々を引き出すと、ペロリペロリと、うまそうに吸ってから、

「姐さん、すきだよ、俺は。姐さんが一番好きだ……」

と、お景の肩から背中に顔を埋めて、烈しく舐め廻し始めるのであった。

「そ……そ、それで、元禄屋は……元禄屋の旦那は、な、なんと……」

俯伏せになって顔を鞭兵衛の膝にのせたままのお景は、白豚と斑猿に背面を騷られながら必死で尋ねていた。

貞操をも捨てて、守り抜こうとしたのは、戌夜のロザリオの秘密だけ。それを、吐かなかったとすれば、女の意地は、ともかくも貫きとおしたというもの——小紫のお景の顔に

かすかな生甲斐の灯が、ともる。

「こんな執念ぶかい女は始めてだとさ。手活けの花にしてみたい——これが、元禄屋の旦那のおことづけよ」

鞭兵衛の言葉とともに、スウィーツという吐息が、お景の肩を、なでおろした。

（よ、よかった！ 妾は勝った。勝ったのだよう！ 徳夜叉……妾は結局、白状しなかった。妾は勝ったのよう！）

と、みるみるお景の裸身に生気が、よみがえってくる。

「フッフッフ。これでもう、死ぬ必要はなくなっただけだな、お景」

（あいよ！）とはいわなかったが、白蟻のように蒼ざめさせていた顔に、ほんのりと紅を浮かべたお景は、じいっと瞳を閉ざして、徳夜叉の白暫端麗な顔を、脛のうらに想い描くのであった。

そんなお景を見おろしていた鞭兵衛が、

「さあ、お景。今度は姐御が俺たちに奉仕してくれる番だぜ。なにさま、へとへとになるくらい奉仕してやったのだからね。そうだろう、白豚」

「そうですとも親分。おいらはもう、いざりになっちまったようで……」

「フッフッフ、おききのとおりだ、お景。

ぼつぼつ、始めてもらおうじゃあねえか」

「な、なにを始めるというのだよう……」

もすこし、夢を見させてくれてもいいじゃあないか——とでもいうように、お景が眉をひそめるのを、

「これだよ、これ。疲れた男を慰めるのはこれ以外にはねえ」

もそもそと鞭兵衛のうごく気配に、しかたなく徳夜叉の顔に別れを告げて脛を開いたお景の眼前に、ニョキッと突き出されていたものは……。

「アッ！」と息をのむ、お景に、

「舐めるんだよう！ さっきは、どうもお世話になりました。おかげで生きながら、この世の極楽を見せて頂くことができましたのでそのお礼に、これから妾が皆さまがたを優しく、お慰めいたします——と、なあ、お景。そうじゃあねえのか」

「そうだとも。親分のおっしゃるとおりだ。俺も、やってもらうぜ」

よこで白豚が、博多の角帯を臆面もなく解きはじめる。

お景は、おもわず吐気を、もよおす。

「お景姐御。親分も、ああおっしゃっている

んだ。舐めてさしあげにゃあなるまいよ」

ことのなりゆきを眺めていた青蛇が、盃をのみ干して斑猿と顔を見合わせて、ニタニタと笑ってみせる。

許してくれといっても、きき入れてくれるはずもなく、かといって拒否すれば、いっそうかさにかかって、この男たちが騷りにくることは目に見えていた。

裸蠟燭の光に美しい顔を、きわだたせたお景は、自棄的な口調で、

「舐めれば、いいのだろう、舐めれば」

「そうともさ。舐めりゃあ、いいのさ」

鞭兵衛たちは、もう、お景が、決して噛みついたりしないことを知っていた。

両手で床を支えて上半身をおこすと、紅珊瑚のように色づいた乳首が黒々とした腋毛ごしに揺れて、坐って酒をくみかわしている青蛇と斑猿の眼を楽しませた。ついで両膝をおこして中腰になったお景の右手は震えていたが、同時に、さすがの鞭兵衛がピクツと身ぶるいをした。

これまで金で買った女たちと、こういう遊びに興じたことは何度かあったが、吉原の女郎や大川土手の夜鷹では、とうてい得られない征服感が、鞭兵衛に、はじめて女と接した

ときのような新鮮さを感じさせるのである。

「お景。なかなかのもんじゃあねえか」

腹のうちとは反対のことをいったのも心のうちを見すかされまいためであった。

「はじめてじゃあねえな。毎晩毎晩、徳夜叉の野郎と……」

と、ここまでいったとき鞭兵衛が「こ、この！ アアッ、や、やめろ！」

と怒鳴った。

「親分、どうかしましたかい」

「な、なあに……ち、ちよっと」

「ちよっと、どうしたんで。まさか噛みついたのじゃあ……」

たちまち逃げ腰になる白豚に斑猿が、

「臆病な野郎だ。お景姐御が、そんな、はしたない真似をするかよ」

斑猿のいうとおりであったかどうかは、鞭兵衛がその後は無言であるのでわからなかったが、ともかく、お景が突きとばされもしなかったことで白豚は安心したらしい。

「チェッ、姐御、お、おどかさないでくださいよう」

白豚という男、よほど単純で現金な男らしく、そうと知ると、ふたたび、しゃしゃり出る。

お景はもちろん、その場の男たちが呼吸を

とめた一瞬ののち、パツと退いたお景は、

「こ、これで気がおすみかええ、親分」

と、ペッペツと唾を吐き散らす。

「まだダメだな、お景。こんなことくれえで済むとおもってちゃあ大間違いだぜ」

と、いうより早く、大熊のような両手でお景の肩を抱きかかえた鞭兵衛は、傍でのぞきこむ白豚がとびあがったほどの大声で怒鳴った。

「口をあけな、大きく開きなつてことよ！」

悲鳴をあげるひまもなく、小さなお景の握りこぶしが盲めっぽうに振り回されたが、それは赤銅の板に、ぶつつかるほどの効果もない。

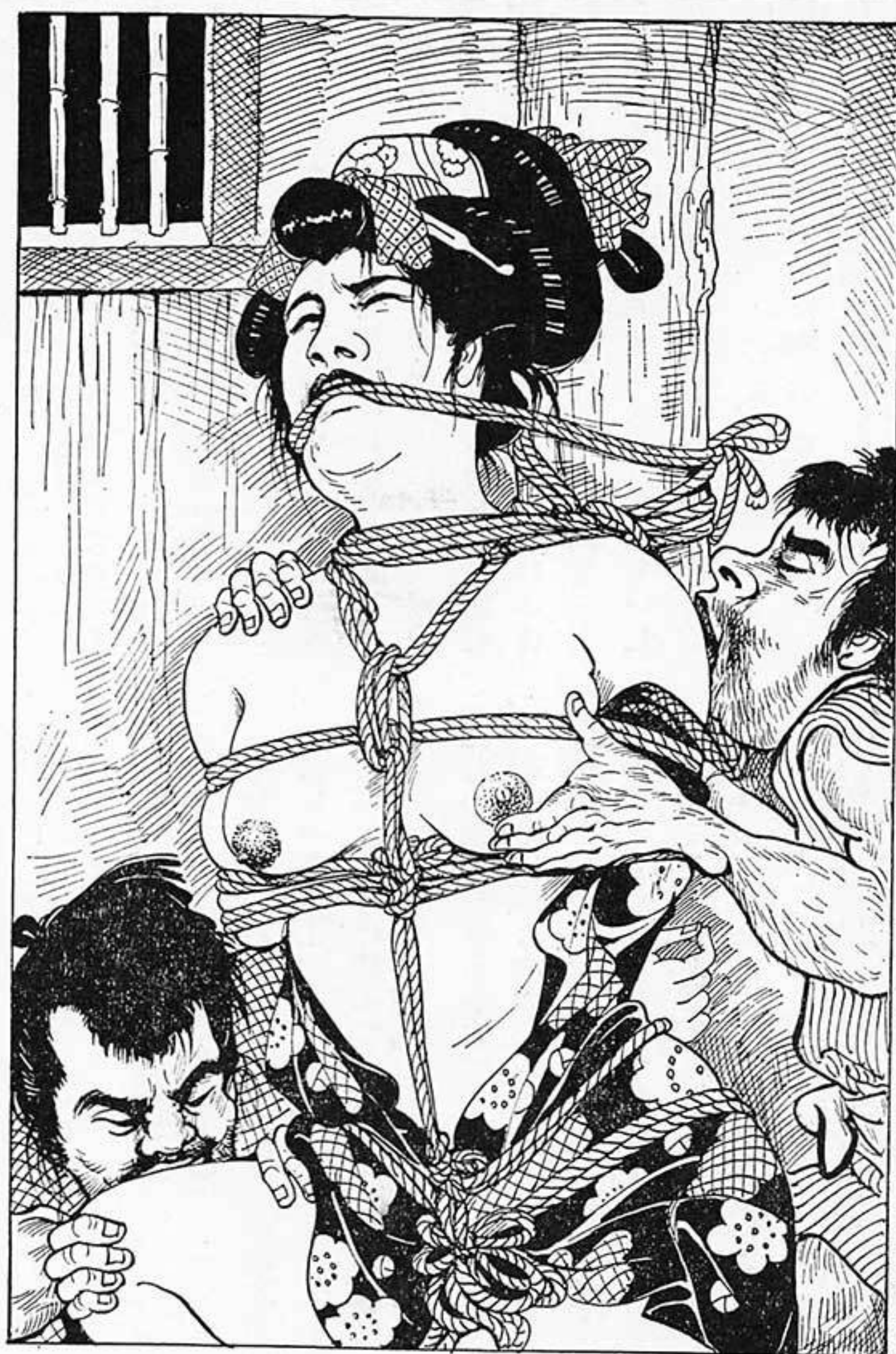
両膝立って、燦めく双臀を後にひいた上半身を掴みあげられているお景の裸身は、こうして裸蠟燭が明滅するなかで、しばらくは身動きすることもできなかった。

穴沢流・女独楽廻し

「親分、もういいでしょう。今度は、こ、このあっしに」

白豚が、やもたてもたまらなくなったよう

……イメージギャラリー……『飢えた狼』……岡 たかし……



に催促したとき、鞭兵衛が白豚ではなく、
「お景、ちょっと待ちな。俺もとしだ。もす
こし、あとにしようぜ」
と、さき程とは打ってかわった静かな声を
お景にかけた。

「親分。じゃあ、いいんですね！」

歓声をあげて鞭兵衛にとって代ろうとする
白豚の背に、

「白豚。おめえ、さっきから少し調子よすぎ
るんじゃないかねのか。兄貴分の俺たちをさし
おいて」

やはり、青蛇の陰気な声がとんだ。弟分の

白豚が、さいぜんからお景のそばを離れずに
いるのを、いままでは酒の肴に眺めてきたが
ことここに至っては黙ってはおれない。

「フッフッフ、お景姐御。俺たちも、たの
みますぜ」

と青蛇が大急ぎで酒の座を立つと、斑猿が
おくれじとばかり、これにつづいて、お景の
まわりに、つめよってくる。

それをみて、いち早く青蛇の意図を察した
鞭兵衛が、

「『穴沢流・女独楽廻し』……ひさしぶりに
やってみるか、青蛇」

「フッフッフ、親分。それが一番、平等で
よろしうございましょう。白豚ひとりが悦に
いるのを見逃がしちゃおけませんや。さあ、
はじめますよ」

鞭兵衛、青蛇、斑猿が、うずくまっている
お景を中に輪を描くと、

「せ、せっしょうな！ あっしも仲間に入れ
てくださいよう」

と、あわてて白豚が割りこんでくる。これ
で、男は四人――。

一瞬、顔を見合わせてニヤリッと笑うと、
「立ちませい、小紫のお景」

「立って、舐めませい！」

「舐めて、舐めて、くる、くる、くる、くると廻るがよろしからう！」

お白洲の鬼与力よろしく口々に叫び、お景の肩に四方から手をのばし立ち上がらせる。

「な、なにをするのだよう！」

四人の男たちのつくった輪は直径三尺もなく、その輪の中でたち上がることを余儀なくされたお景は、へそから乳房にかけて異様な衝撃をうけ、しっかりと閉ざしていた瞳をハッと開いた。

その瞳をもらにうけた青蛇は、しみひとつない白い両肩を、がっちり^{つか}と把み、

「女独楽廻し」——わかるな、お景。おめえさんは、ただ独りで廻ればよろしい。ただし、舐めることを忘れるんじゃないぞ」

と、把んだ両肩をぐっと押えて、ひねるように、お景の向きを変えさせる。

「つぎ、斑猿！」

「あいよ、こっちだ」

青蛇が半回転させて譲り渡してくれたお景を自分のまえに据えた斑猿が、うれしそうにニタツと笑った。

両膝で立っているわけではないので、お景の上半身は自然とまえに傾いて全身が「く」の字を描くことになり、必然的に豊満な双臀

が、斑猿の正面に立つ鞭兵衛のほうに突き出される。

「親分、それそれ！」

「合点、承知！」

「ヒ、ヒャアッ！」

お景の口から悲鳴があがり、おもわず身をおこそうとするのを、肩口を押えた斑猿が、

「白豚、おめえの番だぜ！」

「待ってました、兄貴！ さあ、姐さん、こっちだ、こっち！ ヒッヒ、ヒヒ」

上体をうつむかせたままお景をうけとる。

押さえられた肩口の痛さは耐えられるとしても、この思いもかけぬ屈辱に、うろたえたお景には、もうそれを避けるすべとは、なかった。

しかも、双臀は鞭兵衛から横に移って青蛇の前に曝け出されたことになる。必死で閉じ合わせて、おぞましい攻撃に備えねばならぬ。

「次は親分」「はいきた、白豚よ」

鞭兵衛の前に回されてきたとき、鞭兵衛が六尺豊かな巨体の持主だけに傾いていたお景の上体が、いくらか上に向いた。

「親分。ひ、ひどいおもてなしですねえ。穴沢流というのは、こんなにアコギな流派なの

ですかい」

せいっぱいの、お景の啖呵であった。

「フッフッフ、お景。まだまだ、これくらい、なまやさしいものじゃあねえぜ」

柔らかい肩に、把み切られるかと思うほどの力を加えられたお景が、じいっと唇を噛みしめて痛さに耐える。

背後の斑猿が、今度は俺さまの順番だとばかりに、手ぐすねひいて、待ちかまえていたことは、もちろんである。

「これで一巡したことになるな。さあ、今度は、もすこし早く廻ってもらうぜ」

青蛇の声が頭上でしたかと思うと、とたんに、お景はキリキリ舞いをさせられ始めた。「もっと早く！」

三巡目が始まり、四巡目、五巡目——。

それは、「かごめ・かごめ」の遊びを淫らにしたものともいえようか。

上体をまえに傾けて、鬼は、いつもお景。

周囲をまわる四人の男たちは仁王立ったままで、鬼になったお景ひとりが、くるくると廻る。くるくると、くるくると……。

いつのまにか、何が何やらわからなくなりしっかりと閉ざしていた太腿が次第に、われ知らず、ひらいてくる。

悲鳴をあげていたのも始めのうちで、やがては呻くのが、せいいっぱい。「ヒィ、ヒィ……」と、ただ、肩を押され、脇腹を、つかれて廻るだけ。

「女独楽廻し」ぼつぼつ、とどめと参りますか、親分」

青蛇の音が頭上ですると、お景は、自分の回転が、いくらか、ゆるやかになるのを感じて、いくらかホッとした。

「ゆっくり、ゆっくり、ゆっくり……」

斑猿の声もする。脇腹を押される力も、心なしか優しくなったように思う。

ふらふらする足元ではあったが、自分が畳を踏んでいるのも、どうやら、わかりかけてきて顔をよこに二、三度、振って、めまいに似た状態から、たちなおろうとした、と、その刹那、

「親分、とどめを！」

誰かが声高く叫ぶのがきこえ、お景がハッと身を締めさせたが、

「ヒ、ヒアッアッ！」

いままでの、どの場合よりも強い衝撃に見舞われ、お恵みのめまいは一気に錯乱状態にまで、つつ走ったのであった。

がっきと両頬を抱きこまれたまま、ズズ、

ズウーッと陥ちこんだ忘我の闇の中で、どのくらいの時が、ながれたことであろう。

裸蠟燭が、五、六滴の蠟涙を、したたらせるほどの間であつたのかも知れないが、お景の辿った闇路は数年まえまで走りぬけ、愛しき夫、徳夜叉の逞しい胸に、はじめて抱かれるよろこびに打ちふるえていたのである。

(と、徳夜叉さまあ……)

ひとと、すがりつこうとして、ふと、われにかえたお景は、現在おかれている、わが身の立場に、うろたえながら、不思議に燃える欲望の疼きをどうしようもなかったのだ。

(惨めだわ。ど、どうして、こんな、こんなに嬲りものにされているというのに！ お景恥かしいことよ。いけないことだわ)

と自分自身にいきかせるのだが、かえって、そのたびに体内に、より烈しく被虐に溺れたいという炎が燃えたつのを覚えるのだった。

そして、その炎は、呻くことはおろか、喘ぐこともできない状況のなかで、ますます熾烈に渦巻いてきて、頬がほてり、眼がうるみ鞭兵衛が、ニヤツとして把んでいる手を離そうとする気配に思わず知らず、

「だ、だめ！ はなさないで……や、やめ、

やめないで……お願い……」

お景は、確かに、そう呟いたのである。

「フッフッフ、嬉しいことをいってくれるじゃあないかい、姐御」

顔を見合わせた四人のうちで、まず親分の鞭兵衛が、

「嬉しがらせてくれるついでに、神妙にお縄をうけてもらおうか」

潤んだ瞳をあげたお景は、もういわれるまでであった。そっと身をおこして、車座の中央の一尺四方もない空隙に正座し直すと、

「ど、どうぞ、親分さん……」

しなやかな両手が背後に回った。二の腕の付根から、はみ出た黒々とした腋毛が、妙に肉感的で、男たちに新しい刺戟を与える。

「万事、その調子でやるんだぜ、姐さん」

白豚が、部屋の隅にちらばっていた真紅の伊達巻をとりあげて、素直に重ねあわされている手首を縛っていく。

この本絹博多織りの伊達巻は、ほかならぬお景自身のものであった。

両手を縛りおえると二の腕、ついで、前に回って、鞭兵衛の手が伊達巻を乳房の下へと喰いこませていく。

四人が協力して一本では足りず、もう一本

を、つぎ足して、きっちり縛りあげた裸身を満足そうに眺めるのだが、それは、初夜があけた朝、いまは完全に自分のものになった新妻の裸身に縄掛けて見つめる新夫のそれに

も似た、好奇心にあふれるものであった。「中腰になって、股をひらいて……」
いわれるままに腰をおこすと、膝が鞭兵衛の脛に触れ、双臀が白豚の鼻に、くつつく。

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実に発売!

一月分	1冊	四〇〇円(送32円)
三月分	3冊	一二〇〇円(送共)
半年分	6冊	二四〇〇円(送共)
一年分	12冊	四八〇〇円(送共)
		郵便番号 558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何力月分と御指定下さい。

○六月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分三十二円の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替

(大阪四二七八三番)のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法です。必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料四三二円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたします。御留意願います。

○予約金が切れましましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致します。何月号からとお書き願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

「膝を、左と右に、一直線になるくらいに」青蛇の声とともに、お景は、ゆっくりと両足を、観音開きの扉をあけるように開いていき、やがて、両膝が、左右にいる青蛇と斑猿の足に触れる。

「フッフッフ、姐さん、恥かしくはないかい……」

斑猿の手が、むんずと、裸蠟燭の明かりをうけて輝いている下腹に、飽くこともなく、のびて、

「今度は、いよいよ、穴沢流・四つ搦みにかけてみようとおもうのだが、覚悟は、できていなさるんでしょうね」

長い腱毛の下の瞳を、うっとり見開いたお景は、斑猿から正面の鞭兵衛に視線をうつすと、

「覚悟は、できています。ど、どうか、このお景を、どんなにでも、ご存分に賜って、くださいな……」

むっちり肉ののった太腿が、ひくひくと小さく、ふるえる。

蠟燭のまたたく部屋中には、嵯峨菊の匂いが、むんむんと、ただよっていた。

——(つづく)——

カット・春川ナミオ



あるフェチ的マゾヒストの告白

悦

えつ

鈴

れい

記

き

梅

越

泰

三

私は自分の、この奇妙きわまりない性癖について、これを何かくすことなく告白する。ことに、限らない嫌悪の情と劣等感を覚えるのですが、また、その反面、自分の性癖をペンにすることに、一種言うに言われない愉悦の感情も覚えるのです。

私が自分の男性自身に穴をあけて、その穴に鈴を吊るすようになってから、すでに、もう十数年にもなります。

私が夜の町の最下層の女達に取り囲まれ、野卑な嘲笑や毒舌、あくどい、からかいを受けながら、それも素面のままで、ぞくぞくと

背筋を這う倒錯の性の悦虐にまみれて、灯の下に余すところなく、その男性自身を、さらけ出すようになったのは、いつの頃だったでしょう。

その町は場末といっても、普通の住宅街とは違って、売春宿や木賃ホテルが密集している所でして、それにポン引き、売春婦、男娼などの、たむろする一角で、日暮れともなれば妖しい性の取引きに狂奔する陰微なエリアだったのです。

私は、この町の薄汚いパチンコ屋で、一人のポン引きのオバハンと知り合ったのです。

彼女は若い時は売春婦をしていたのですが、年をとると共に、買ってくれるお客が減ったので、今では、若い女の世話をするポン引きになっていたのですが、相手によっては、自分も売春婦に変貌するという商売をしていたのです。

私が彼女と知り合ったのは勿論、客としてですが、男性自身にあけた穴に吊るした鈴を見つけれ、客であるべき私が反対に、わななく口で、その説明をしつつ、鈴をつけた外したり、果ては自瀆のさままでも見せながら、さげすみの哄笑を受けたのが、きっかけ

でした。

そんな私の行為に対して、唾を吐きかけられたり、同じボン引き、売春婦を面白半分に呼んできて、お互いに冷やかしの言葉を交しながら、軽蔑しきった様子で見物されることに、私は魂の芯までふるえるような喜びを感じずるのです。

といっても、こんな機会は一年のうちに、そう何度もめぐり合えるものではないので、時たま訪れるその行為を思い起こしつつ読みふけるK誌のページに、白い汚点を落としているのです。

私が自分の男性自身に穴をあけた頃、当時独身だった私は、一人一戸の家に生活していたためあって、もてあます性のはけ口を、専ら自慰の行為に関連することに求めていました。

それでも月に数回は、近くの貸席の女と交渉を持っていたのですが、薄給の身では、旺盛な性の欲求の数十分の一しか満足を得られず、やむなく自慰にふけるより仕方がなかったのです。

水道のホースを利用しての浣腸や、ジュースや牛乳瓶によるアヌスへの自虐行為もありました。排泄から排泄までの間は鶏卵を入

ておき、昼間もそのまま出勤したこともありました。

その為かどうか、あれから十数年も経った今でも、私のアヌスは楽に卵を受け入れることが出来るのです。

その頃の私の性癖から発した行為としましては、出張した時などは、旅の恥はかき捨てとばかり衝動の赴くままに行動したものでして、その一つに、地方の都市の駅やバス待合所の便所には、男女の別を設けていない所が多いため、大便を装って中に入って奇怪な所業をしたことがありました。

わざと内からの鍵はかけず、ズボンとパンツをずり下げ、戸の外に向かって男性自身を露出し、摩擦しながら壁の落書を読みつつ待ち受けていますと、あわただしく走り込んできて戸を開ける若い女性の眼にさらされることがありました。そんな時、私は自分の下半身をさらしていることに、ぞくぞくする喜びを感じるのです。

そんな時、若しその便所に、使用済みの真赤に濡れたアンネちゃんでもあったとしたらこれに勝る喜びはなく、ひそかに、その中心に舌を伸ばして、すすり、男性自身に塗りつけては、幸福感に浸りながら、果てしない楽

しみに耽るのです。

しかし、そんな幸運は、いつも望み得るところではありません。求めて得られない焦りの末に、ふと思いついたのは、婦人専用の便所でした。夕方とか夜の人目の少ない時を見はからって私は婦人便所へ入り込みました。大きな駅やバス待合所の便所で比較的、人の出入りの少ない所を選びました。

汚物入れをあさって、今しがた替えたばかりの、じくじくと滴るような真赤なアンネちゃんを見つけた時の狂喜せんばかりの嬉しさは如何ばかりでしょうか。丁寧にビニールにくるんで持ち帰り、こころゆくまで、すすり男性自身を染めるのです。

でも、その衝動もさめてしまえば、自責と後悔の念にさいなまれる哀れなフェチシストの生活でした。

私が自分の男性自身に穴をあけたのも、そうした行為に対する反省が自分の肉体に向けられた影響が多分にあったものと思われるのです。

その前に私は、片想いの女性の名を亀頭に入墨しかけたことがありました。

墨で字を書いた上から血が噴き出るまでナイフで傷つけてゆき、更にその上から墨を入

ナミオM画廊 『ペーパーをどうぞ』 春川ナミオ



れてゆきましたが、思いもかけなかった激しい痛みと、それに結婚前であったことの恐れと、それに娼婦たちとの交渉を休まねばなら

ないことのために、ひどく傷つけることは出来ませんでした。

半月ばかりたって、その傷がなおり、かさ

ぶたが剥がれると共に、入墨も消えてしまいました。

それで、次に思いついたのが、亀頭の下側の皮膚が筋になって結びつくところ（繫帯と呼ぶところでしょうか）の薄い膜に穴をあけることでした。

先ず針を刺してみましたら、血管を避けていたため血も出ず、殆ど痛みもなかったので第一夜だけでも、妻揚子や千枚通しぐらいは通るようになりました。

穴がふさがらないように紐を通して結んどおき、次の夜は更にひろげてゆきますと、三晩目には、楽に箸ぐらいは通る程の穴をあけることが出来ました。

その穴に小さな真鍮製の錠を吊るして出勤したり、一人居の夜は、薬缶や一升瓶を吊るすなどして鍛えながら、倒錯の性の旨酒を味わっていました。

そんな時、田舎の親類から話があつて急に結婚したため、性の充実と満足を得ることが出来たので、平静な生活に戻り、男性自身の穴も妻に気づかれることなく、だんだんと小さくなってゆきました。

それから約十年ばかりは、時折、僅かな悦虐的なフェチ衝動が起きたものの、幾分は妻

によって、いやされていました。やがて妻に對する新鮮味が、うすれてきますと、第二、第三の倦怠期が訪れてきました。

たまたま目に触れたKK誌によって、再び以前の悦虐的フェチの倒錯性が急速に呼びさまされてきました。また、或程度、經濟的にゆとりが出来たことが拍車をかけて、以前に倍するフェチ行為を、くり返すようになって変態性奴としての喜びが蘇ってきました。

以前に大きな穴をあけていたために、男性自身の穴は、今でも直径三ミリから四ミリはありましたので、ふと思いついて、その穴に鈴をつけてみたのです。

キーホルダーのお守りを外して、金と銀の二つの鈴をつけ、男性自身の穴にとりつけるだけでよいのです。取り外しは自由ですし、歩くたびにチリチリと鳴る音の快さは、「花と蛇」の静子夫人や小夜子嬢の鈴繩の悦虐に通ずるものもあるのでしょうか。

しかし、それを女性の前にさらけだして見せるということには、幾分の勇氣が必要でした。

出張途次の汽車の中で鈴をとりつけて駅を出て、地方都市の繁華街を歩きますと、さわやかな音で鈴が鳴ります。

そのまま旅館に入ると、鈴開陳の第一番は女中さんです。服を脱いでいると女中さんは後に回って浴衣と丹前を着せかけてくれますが、その時、わざと大きくみじろげば、鈴は快く鳴ります。

女中さんの目につくように、思いきってズボン下、パンツまで脱ぎ、下半身を見せるようにして着換えたものの、身ぶりは、ぎこちなくて、果たして目に触れたかどうか、ころもとなく、さりげなく女中さんは去ってゆきました。

夜の町へ出て散歩する私は、浴衣の下には何もつけていず、下半身は、あけっ放しです。鈴の音は余計にチリチリと冴えた音を立てます。

開陳する第二の相手は、ストリップ小屋のスターたちです。かぶりつきに陣どりますと思いきり着物の前をはだけて、いきりたつ男性自身を露呈するのです。熱狂している周囲の男性客は誰一人として私のこの行為に気づく者としてありません。

目の前の舞台の袖では、ストリッパーが女性自身の御開帳の真最中ですが、それに対する形で、かぶりつきの私は男性自身に手をそえて妙なる鈴の音を、かき鳴らすのです。

私の目は、ひたと濡れて輝くストリッパーの女性自身に注がれています。そんな私の異様な行為に気づいたストリッパーは、さまざまな反応を示すのです。

「ふん」と輕蔑の目で鼻を鳴らすと顔をそむける女。「まあ、いやらしい」と、あからさまに口にしつつ、自分の御開帳の行為は続けられている女。「まあ、変な物をつけてるのね、よく見せて——」と言いながら、しげしげと覗き込もうとする好奇心の強い女。

そんなあとで、きっと楽屋では、こんな私を話題にして、嘲笑しているだろうと思うと私の倒錯の心は、嵐に吹きまくられたように激しく、ゆさぶられるのです。

そうした悦虐に浸りつつ二、三軒のストリップ劇場をまわると、夜もすっかり更けて、流石に人通りも少なくなってしまう。帰途をいそぐホステス達の姿が目につきだし、物かげには春をひさぐ街の天使やポン引きのオバさん連が、ちらほらと目立たぬように見えかくれしています。

誘われるふりをして、そんな女達と連れだち、男性客の目のないのを見ますと、街灯の下で着物の前をはだけて、「これをごらん」と、さらけ出した男性自身を見せながら、そ

の鈴を振るのです。

「まあ、いけ好かない。この人、変態だわ」と、さげすんで逃げだしてゆくポン引のオバさん。「いやア、エッチ。あんたと遊ぶのよすわ」と、唾を吐きかける街の天使など、その反応は、さまざまです。

「そんなとこへ鈴をつけてるのって変わってるわね。あんた、そうしてると気持ちいいの？そして女の人とアレする時は、それ、どうするの？」と、やさしく問いかけて、しげしげと眺める女もあります。

そして、時としては物好きに「ネエ、ちょっと、ちょっと、この人、変わったのを○○○につけているのよ。来てごらんさいよ」近くにたむろしている数人の仲間達を呼び集めてくれる女もあります。そんな女達の前で、わくわくする性の倒錯に酔い、しびれるような悦虐を噛みしめながら、自ら男性自身を摩擦して鈴を鳴らすのでした。

年に数回の出張の毎に、そんな奇妙な行為を繰り返しているうちに、街の天使やポン引のオバさん達とも、すっかり馴染みになってしまいました。

私が訪ねてゆきますと、「まあ、鈴オジさん、又来たのね。今日は鈴つけていないの」

と言葉をかけて近づいてきて、私の前を軽く手で叩いて、「やっぱり、つけているわ。チリチリ音がするもの」と、のっけから私を誘いたがるポン引のオバさん。通りすがりに、わざとぶつかるようにして「ハハハ、やっぱり鳴っているわ、鈴がね。でも、あんた、どうかしてるんと違う？ ハハハ……」と、大声で嘲笑を浴びせながら、見下げるように通り過ぎてゆく、美しくて若い街の天使。

ある夜のことでした。三人のポン引のオバさんが私に近づいてきました。一人は顔見知りですが、他の二人の女は見知らぬ人です。

「鈴オジさん、今夜は鈴をつけてるのね。また見せてやってね」と声をかけてきました。

「うん、いいよ」と言いながら、私は街灯の下へ三人を誘いましたら、「こんな暗い所じゃ駄目じゃないの。もっと明るいお店へ行こうよ」と言います。

「そりゃ良いけど、男がいたら困るよ」と、私は尻込みしました。私は本能的に、自分の変態行為を同性に見られることを極度に嫌いました。それが、もし、どんなに年輩であっても女性であつたら、限らない愉悦を覚えるのに、男性にだつたら、嫌悪の情しか起こらないから不思議です。

「大丈夫よ。女だけの店だから。ゆっくりと見せてもらうのよ」

私は三人の女にせきたてられて、一軒の小さな飲食店に連れてゆかれました。昼は、うどんやそばを売っているらしく、そんなつくりになっていますが、夜更けは、そんな女達の溜り場になっているらしく、既に六人の女が屯ろしていました。

「さあ、鈴オジさんの御入来だよ」と、大きな声で仲間を掛けておいてから、私には小声で「大丈夫、男は一人だつて入れはしないから、さあ、出して、出して——」と、せかすのです。

最初から私を酒の肴にして、大いに辱かしてやるうという魂胆が、ありありと感じられました。幾分、たじろいだものの、私としては、またとない悦虐のチャンスです。体が知らず知らず、わななくのでした。

「ふるえなくてもいいのよ。今夜は、たっぷりと見てあげるわね。帯も解きなさいよ」
「まあ、この人、下には何もはいていないのね。驚いたわ」

「うん、この人は、いつもそうなのよ」
「この人ね、アンネちゃん舐めたいって言うてたわよ。誰かメンスの人、いないの？」

「汚れたパンティ欲しいって言ってたわよ。誰か脱いで頭から、かぶせてやりなさいよ」大騒ぎで女達が集まってきて私を取りまき私は帯まで解かされて、男性自身を手にとつて余すところなく数人の女達に眺められ、鈴をチリチリと振られました。

「面白いわね。この鈴、外してみても。一体どんな穴をあけてるの」手で持って、しげしげと眺めたり、鈴を外させたり、つけさせたりして興味深かそうにおもちゃにするのです。

「まあ大きいわね。わたしも変な気持ちになっ



イメージギャラリー 『幸せなる終宴』 岡 たかし

てきたわ」と、私の男性自身の頭を弾いて、大きなゼスチュアで腰を揺すってみせる女もあります。私は前を突き出すようにして男性自身を振って鈴を鳴らしつづけました。

「まあ面白いわ」と笑いこける女。「いやらしい。あんた、それでも男なの」と唾を吐きかけるように軽蔑しつつも、それでも好奇心でチラチラと見つめる女。「あんた、どこかのエロショーに出演したらいいわよ」と囁んで吐き出すように言う蓮っ葉な女。

数人のそんな女達の反応は、さまざまですが、私は昂ぶる興奮と倒錯の喜びに、身体中が打ちふるえ、『パロディ花と蛇』の桂子嬢さながらの心境になるのです。

私の口から淫靡きわまりない喜悦の言葉がとぎれとぎれに洩れはじめますと、「まあ、いやらしい。この人、よがり声、出してるわ」

私をとり囲んで、わあわあど騒ぎ立てて喜んでいのです。渦巻く嘲笑と軽蔑の女達の視線を浴びながら、私は悦虐の鈴をチリチリと高鳴らしつつ、やがて、絶頂に到達してゆきました。

女達の一入、高い哄笑の中で――。

――(おわり)――

カット・マエダヒオミ



連載・奴隷妻小説

命預けます

——八の章 屋外プレイの展開——

柴 利 好

30 飽くなき倒錯性の亢進

この事があってから春子は、感心な事に勝手に小屋に行かなくなった。それは彼女が、この小屋での生活を放棄したのではなく、ひたすら、そうする事によって、主人への絶対的服従の誓いを、身を以て実証しようと、したからであった。むしろ、そこでの生活を熱望し、しかも、それを強制的に抑制させられる精神的苦痛を堪え忍ぶ事さえも、彼女は別途なM的樂しさとして、受け止めていたのかも知れなかった。

その代り、ときたま主人に許されて、公然と小屋に鎖つきで引かれて行く時の、春子の嬉々とした様子は、もし彼女が本当の犬であったなら、尻尾をピンピン左右に打ち振って、るだろうと思われる喜び方で、部屋を出る時から、早くも四ツ這いの姿勢をとって、いそいそと引かれて行き、鎖尻を持つ新吉の方がかえって引きずられて行くほど、気負い立っているものであった。

もともと小屋の生活は、折檻を受ける事が主眼ではなくて、畜生の棲家で、畜生同然の惨めさを実際に味わう事に本来の目的があった。従って、そこでの生活は、口をきけない

ように猿ぐつわを嵌められたり、小さな本物の犬の檻に詰め込まれたりあるいは無制限の柱つなぎなどの単調な暮しの連続であった。

折檻が、たまたま食事時に当たると、手を全く使わないで、口だけで直接、粗末な食事を喰べさせられたりした。生理現象が辛抱しきれなくなると、彼女の身振りで、それを訴え、新吉が戸外へ連れ出して、四ツ這いのままの彼女を、植込みや、時には庭境を越えた用水池の堤下の辺りまでも引いて行つては、用を足させた。その時、彼女を繋いだ鎖尻は彼女の用が済むまで新吉の手に固く握られていて、彼女の行為の一部始終が彼の監視を受

けた。用済み後の身体の始末は、小屋で繋がれる前に、風呂場に立ち寄って、全て新吉の手によって、ねんごろな処理を受けるのが常例であった。しかし、時には不用意の罪を問われて、汚れた身体のまま、いつまでも庭隅の立木や、犬繋ぎの柱に繋がれ放しでいる事もあった。

こうした家畜妻の生活と平行的に、奴隷妻としての被虐の生活も、相変わらず盛んに続けられた。しかも、その内容は、初期の幼稚なプレイに較べると、次第にその残虐性を深めて行ったのは、この種の性欲者として当然過ぎる事である。

そのような、春子の奴隷妻としての悦虐生活では、縄縛りの楽しさを肉体的に充分、味わう必要から、鎖下着を全部、脱がせてもらって、従来同様に裸で折檻を受ける事が多かった。しかし、その時でも細腰に嵌め込まれている胴鎖だけは、はずす事を許されなかった。そればかりか、特別のお仕置の時には、普段用の物より四センチも短い特製の胴鎖で一層、厳しくウエストを絞り上げられた。

胴中をギリギリに締めつけられた時の彼女の苦しさは、全く言語に絶した。けれども、そんな時、春子は、自分で両手の指を細腰に

回わしてみると、両方の指先が楽々と届くほどの蜂腰の形状を、姿見に映して眺めながら自分の姿の美しさに、我ながら見惚れて、飽くことがなかった。胴中の一ツ所だけが、瓢箪のように細く、くびれた腰付きは、尋常の神経の持主から見ればそれを「グロテスク」と、表現したかも知れないほど異様だった。

が、その柱に締めつけられている当人の春子は勿論のこと、これを強制している新吉。更には春子の限らない信奉者である浩介にとっでは、その有様を一見しただけで性的昂奮さえ催させる、たぐいまれな絶品として映るのが不思議であった。

折檻の苛酷さとはいっても、それには特別の用具や機械を駆使した、西洋中世紀風の物とは違っていた。いつもと変わらない場所でああでもない、こうでもない、二人して考へ出した悦虐倒錯の世界に他ならなかった。例えば立柱への緊縛にしても、家中の全ての独立柱、小屋に新設された細身の柱をも含めて五本の柱が動員され、緊縛方法も春子の好みに従って、身体中、全体くまなく、平均した間隔を置いて縛られたのだった。しかもその縄目は、一箇処に少なくとも二筋か三筋の細引が巻き締められた。

柱縛りといえば、普通なら柱を背に当て、正面を向いて縛られるところを、わざと柱に胸や腹をつけた姿勢の縛り方も、時折、行なわれた。彼等は正面向きを「表縛り」と呼んだのに対して、柱に対面した、この縛り方を「裏縛り」という新しい名称で呼んでいた。

柱縛りで足を床につけた単純な緊縛は、特に長期刑に用いられ、二時間から三時間、放置されるのが普通の事で、足が床に届かない。つまり縛り吊るしの時には、大体、一時間を限度として実行されていたのだった。

表縛りにしろ、裏縛りにしろ、肩口から足首まで、時には首根や足の甲にさえ、細引を掛け絞って、柱に宙吊りのまま縛りつけられた時の春子の全身には、その要所々に、何れも複数の横縄が、皮肉に喰い込むまで厳しく縄掛けされている。しかも、それらの縄目の各々は、時間の経過と共に益々皮肉深く埋没の度を加えた。一方、縄目からそれた部分の肌はプリプリに張り出した。その姿は一見大中小、色々の鏡餅を、ダルマ落としのように、幾段にも積み重ねたかのように見えるのであった。その重ね餅状に見える、縄目と縄目との中間に張り出した柔肌には、当然、極度の鬱血状態が起こって、その肌色はピンク

に燃え立つように思われた。しかも、場所によって、釘頭状の内出血斑が、まるで寄せて来る潮のように、急激に一面に浮かび出して来る事もあった。

柱縛りは、両手を後ろ手に縛ってから柱に縛るか、柱の後ろに両手を回して縛るのが普通だったが、たまには両手を一括して上に挙げさせたり、両腕を上の方から柱の背後に回わして縛る事もあった。裏縛りでは、春子の肉づきの良い背面、つまり背中から臀部、腿腓に至る部厚い皮肉が、縄目によって作り上げられた深くくびれを見せ、表縛りでは味わえない面白さを満喫させた。殊に臀部の丸々とした肉塊のくびれは、正に圧巻であった。

アクロを応用した吊るし責めには、胴吊るしとか、一直線開股逆吊りなど、随分、激しい苦痛を伴うものが多かったが、その中で春子が考え出した「スピン」と呼ぶ鍾紡糸巻に類する転回吊るしに掛かると、流石の創作者春子も、殆ど例外なく失心した。

例の廊下中央に天井近く渡された吊り丸太に、両手首を合わせて縛り吊るされた春子は足先が廊下の床上四〇センチ位の距離まで引き上げられる。そして宙に浮いた両足首を合わせて別縄で縛られると、かねて、この折檻

用に準備された、廊下の内外に対立した二本の柱の根元に、床すれすれに掛け渡されている横木の中央に、その縄尻を掛けて強く引き絞られる。つまり彼女は、手首と足首とを縛った二本の細引で、上と下から一直線の伸ばし吊るしに掛けられる。更に別縄で胴を一巻き縛られると、その縄尻を、くびれた胴に、縄の長さ一ぱいグルグル巻に巻きつけられ、これで「スピン」の準備は完了する。そこでこの腰縄の縄尻を強く引っ張れば、それに連れて春子の宙吊りの身体は、糸巻のようにキリキリと転回し、巻きつけた腰縄が解け終わるまで回り続ける。この身体の回転によって、身体を上下から引っ張っているロープによりが掛かるから、腰縄が解け終わると同時に、今度は身体は逆の方向に転回し始め、再び腰縄が胴に巻きついて行く。このようにして腰縄を急激に引っ張る動作を繰り返す毎に彼女の身体は右回り、左回りと交互に転回し続ける訳である。この折檻の時、彼女の頭的位置は、上げられた両腕より前に出した俯向きの場合もあるし、両腕より後ろに、のけ反った仰向けの場合もあった。どちらのポーズを取ったにしても、この激しい転回吊るし責めは、彼女に取って最も苦しいお仕置の一つ

であった。

小屋に置かれた新調の責め台も、次第に利便度を高めて行った。X字形磔刑も板について来たし、それも頭を下にして逆さに立てた「逆さX」とか、横に倒した「横X」など、格別な苦痛を味わう事が出来て、この台の使用は、むしろ彼女が好む、お仕置の一つになった。というのは同じ磔刑でも、風呂場の磔柱に縛られると、他の姿勢で磔されるためには、一回毎に縛り直さなければならないが、この新兵器だと、一度、縛りつけられただけで、その責め台の位置や角度を色々変化させることによって、数種類の形の磔を実行出来る便利さがあったからである。時には縛った身体の方を下に、責め台を上にして小屋の梁から吊るしたりした。そうすると丁度、棒縛りのままで身体を下向きに吊るされたのと同じような趣向を得られた。

犬の檻への収監も、春子の好きな責めになっていた。初めは身体を丸めて、両膝を折った姿勢で閉じ込められていたのが、この頃になると、アクロ応用の逆反りの姿勢で入れられる事を覚えた。後頭部と尻とが密着するまで胴体を逆さに折り曲げ、両膝を曲げ拡げて腿で顔を挟み、腰で両腋を挟みつけた苦しい

姿勢は、アクロのポーズとしても至難な業だが、春子はこの苦痛に満ちた格好をして犬の檻に押し込められ、小一時間近くも辛抱する事さえ、出来たのであった。

31 水責め・三段平行棒

家畜妻として小屋で飼育されるようになってから、自然、四つ這い姿で戸外を出歩く事が多くなり、従来は縛られたまま外出する機会の少なかった春子は、次第に戸外での飼育に慣らされて来た。例の布団干しの柱とか物干柱、棒杭、庭木の幹や太枝などに、昼日中でも平気で縛られ続けては、彼女は外光に惜しみなく美しい全裸を晒した。時には、いつかの杭繋ぎの時のように、雨の中でも、時の経つのも忘れたかのように何時までも縛られ続けるのであった。

何事によらず「慣れ」程、恐ろしいものはない。こうした戸外での縛りが習慣になって来ると、春子は別の冒険を試みたくなって来た。夜陰を選んで、近隣の空閑地に、裸で縛られたまま出沒するようになった。人通りの全くない夜路を、鎖下着を着せられた上から、後ろ手に雁字搦めに縛られて、鎖と縄と

の二重苦に喘ぎながら、半キロ近くも遠方に引き回されたりした。その経路は大抵、用水池の堤の下の暗い細径が選ばれたが、往復一キロの引き回しを受けて、クタクタに疲れ果てて家に辿りついた春子の、嗜虐に痺れ切った脳裡には、更に飽く事のない苛酷な折檻の新手が浮かんで来ていた。それは全く妖魔に魅せられた異常者の執念とも、いふべきものであった。

この新手というのは、用水池を利用した水責めなのである。従来も彼女が屢々身に受けた水責めは、主として風呂場でのもので、それでなければ、折良く降り出した降雨によるものであった。それを彼女は用水池の、満々と湛えられた水を使って責めて欲しいと、新吉に、その実行を、せがんだのだ。

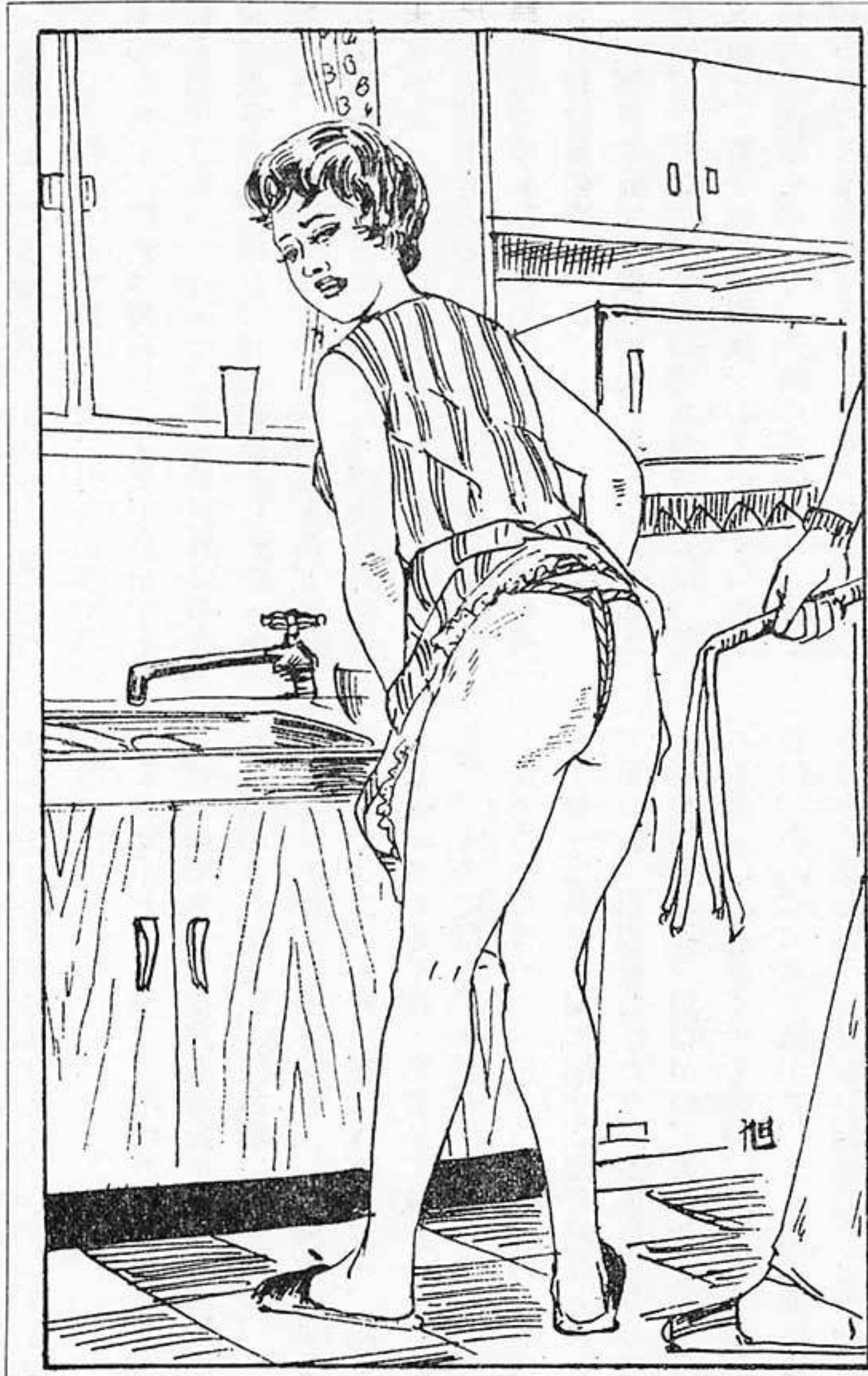
度々述べるように一度、こうと思い立ったら、春子は事S・Mに関する限り絶体といって良い程、自説を曲げたり、妥協したりしない女なのである。かねがね、夫の新吉ですらこの彼女の頑迷さに手を焼いており、これが普段、あんなにまで淑かで、まるで天使のようになんと思われる、優しい気性の女と同一人物とは、到底、考えられないほどなのであった。

彼女にいわせれば、この用水池の利用は、むしろ、今まで気がつかなかったのが遅いぐらいで、何故、もっと早く、夏の間に実行しなかったのか悔まれてならないのであった。

水責めは、発案の翌日の夜から直ちに実行に移された。春子は当夜の縛り縄が、水に濡れて引き緊まる感覚を楽しむために、特に新吉の許しを受けて、鎖下着を取り除いてもらった。前夜の遠距離の引き回しによって彩られた細引の跡や、鎖下着の締め跡が赤く肌の上に残っているのも、全く意に介しない風で彼女は全身に古式の菱縄の緊縛を受け終わると、喜び勇んで用水池に引かれて行った。

彼等二人の他は人気の全くない用水池の水面はヒッソリと静まり返っている。月のない暗夜ながら、満々たる水面に、そよ吹く秋風を伝えた小波が、時折、静かに波立つ。転ばないように足元を用心して、ソロソロと水に爪先を入れた春子は、その冷たさに一瞬、たじろいだ。しかし後ろ手の手首に、新吉に引かれた愛の縄尻を感じ取ると、意を決して、静かに水中に、その全身を浸して行った。秋の池の水が冷たく彼女の五体を包むにつれ、その凍るような冷感に抵抗するかのように入、彼女の嗜虐の焰を、燃え滾らせるので

……イメージギャラリー……『朝飯前の一打』……須坂 旭……



あった。

用水池での水責めは、こうして第一步を踏み出したのだが、その内に、ただ水中に漬けられているだけでは物足りなくなった春子は縛られたまま水中を歩かされたり、短い梯子や例の責め台に全身を縛りつけられ、仰向けに池の水に漬けられることを望むようになって

た。春子は責め台や梯子を、自分で進んで背負って、小屋から用水池までの遠くもない道程を、時間をかけてトボトボと歩いた。これは彼女が、いつか見た事がある、本の口絵に描かれていた、キリスト殉教の故事を心に描いて、したことのなであった。

春子は更に、自分で昼間の内に実地調査し

て見つけて置いた、池の端の水杭に、嚴重に縛りつけられて、夜中を過ごす事も、せがんだ。水杭を背負って水中に縛られると、彼女の腰の線まで水に漬かった。水中の足の方を杭に縛りつけるためには、新吉は水中に潜らなければならなかった。

こうした責め具縛りの水漬けにしても、水杭縛りにしても、旧幕時代の私刑、特に姦婦に対する制裁などに行なわれていた事を、果たして彼女が知っていたかどうかは分からない。しかし、このような戦慄的で残酷な仕置さえも、亢進した彼女の異常な倒錯感覚では至高最上の悦楽、として感じられたに違いない。

これらの水責めに際しての新吉の労苦は、水杭縛りでも分かるように、並々ならぬものがあつた。しかも彼は、折檻の最中は決して彼女の傍から離れず、つききりで、その責め苦の成り行きを観察し続けていた。これは、命がけの冒険をする事への用心深さも、さることながら、そうした折檻を興味深く眺めるS性以外に、嗜虐の激情に狂う愛妻に対する限りない純愛が、しからしめたのであつた。

この水責めと平行的に、春子の新発明は地上でも開発された。

新兵器は、女子の体操競技で使われる平均台と、段違い平行棒とを一つに合作させたような物だった。これによって、今まで布団干し用の横木で行なっていた木馬責めを、はじめ、更に多くの複雑な折檻を実施出来るのである。早速、布団干し用の横木は取り除かれその跡に、この新しい責め柱が組み立てられた。

先ず二米の間隔を置いて、二本の支柱を地中深く埋めて立てる。この支柱の地面からの高さは二メートル余りで、その頂と中段と、更に地上十五センチ位の位置とに三段の平行棒が取り付けられた。中段の平行棒には、元の布団干用の横木が利用され、従来、その横木を支えていた二本の支柱は、小屋前の空地に移して立てられた。勿論、これらの柱は奴隷妻、或は家畜妻を犬畜生同然の姿で、繋ぎ止める目的を持つものである。

こうして新たに立てられた三段平行棒によって、木馬責め、開股逆吊りは勿論の事。胴吊るし、正逆の四ツ手吊るし、両手吊るし、逆さ直線吊るし、その他が、室内の時より以上に自由に、楽々と楽しめるようになった。それだけに春子の悦虐生活の内容は一層、充実し、多彩なものとなった訳である。この三

段平行棒に吊るされた時の彼女の姿は、帆船のマスト高く帆を張ったように見えた。

これらの吊るし責めには、奴隷衣一装の、いでたちで、革環を身体の要所々々に嚴重に嵌め、手首や足首を保護する事を彼女は怠らなかつた。それが、自分の被虐生活を、より以上、長持ちさせる結果を、もたらす事を、よく理解していたからである。

高い上段への緊縛は、初めは長梯子を立て掛けてしていたが、その作業が余りに面倒なので、間隔をあけて三箇の滑車を取りつけ、引き縄の操作で、下に居ながら吊るしが出来るように、改められた。それから、この平行棒の中央部に、時に応じて別の副柱を組み込んで立て、十字磔や逆さ磔なども容易に行なえるようにもなった。春子は益々有頂天で、戸外のプレイに、より一層、精出すようになった。

32 寒 中 の 苦 業

年の瀬が迫って来る頃になっても、春子は上天気で無風の日を選んで、この平行棒に好んで縛られ、責め続けられた。責め手は、いつもは新吉一人だったが、特に新しい虐め

方が採り入れられたり、念入りなお仕置を実施される場合などには、浩介も呼び出しを受けた。浩介は新吉から呼び出しが掛かると、必ず指定に違わぬ確かさと正直さで、この家を訪れ、始終、新吉の助手となって喜んでプレイに励んだ。

しかし浩介にしてみれば、既に春子を心から愛するようになった今となつては、こうした機会に、こうした場面でしか、彼女に接する事が出来ない、我が身の状態を悲しく思った。とはいえ彼は、新吉を差し置いて春子を独占しようというような野心は毛頭、持ち合わせない善人なのである。しかも尚、春子を相も変らぬ様々な悦虐プレイを通じて虐め続けている間は、彼は彼女に対する恋情さえも忘れ果て、一人の女、一匹の牝奴を虐めぬく事にのみ痴呆のように熱中して、妖しい愉悦の感情に没入している自分を見出しては、我と我が性格の二重性に慄然とし、且、その腑甲斐なさを嘆くのであった。

春子は、浩介に愛の告白をして以来、彼と会う機会を得ても、努めて平静を装っているようであった。それは、彼女の持って生まれした慎ましかさからでもあろうが、心の苦悩を堪え忍ぶM性心理によるものであったのか

も知れない。とはいっても、二人の男性を同時に純愛している事が、この奴隷妻として飼育されているM女性にとって、どれ程の苦しみであつたことか。

しかも夫である新吉は、彼女のこの悩みに全く気付いてはいない様子で、最愛の妻、春子の飼育に、全てを打ち込んでいるといつて、決して言い過ぎではなかった。況してやその人柄を信頼し切つて、夫婦の秘事の全てを、あからさまにして、はばからない賓客、浩介その人が、彼の妻と相愛の絆で結ばれている事など思いもよらない事なのであつた。

やがて年も改まり、本格的な冬の到来と共に、さしもの戸外プレイ好きの春子も、健康に障る事を恐れて、中止せざるを得なくなつた。それ故、彼女は、この冬季中は、もっぱら室内、特に風呂場を自らの責め場と定めて、不断の仕置に明け暮れていた。だが、その間にも、いても立ってもいられなくなって、三度ほど、木枯しの中を裸で、例の新兵器に掛けられる冒険をせがんだ。呆れ顔の新吉が、「少しは自分の身を考えてらどうなんだい」と心配する言葉も、更々耳に入らない風で春子は、いつものように三段平行棒の上に乗った。高みから眺め渡す冬枯れた田園風景は

それなりに、一幅の名画を見るような美しさがあつたけれども、彼女には、それを觀賞する余裕など、もとより、ない。

「寒い時は、お縄を、いつもより沢山、戴いて、キツメのお縛りを受けると、随分、寒さが楽になりますわ。ですから、お願い！ 思いきり、お縄を締め上げて下さいな」

彼女は、そういつて、数本の細引で、まるで「お菊虫」のように全身を巻き縛られ、久方振りに戸外で吊られる苦痛を楽しんだ。

寒中、二度目の戸外晒しの時にも、

「今日は先達てより寒いようですから、この前より、もっと厳しく、力一杯、縛り上げて下さいませ。思いきりキツクね！」

と春子は、好きな「柱縛り吊るし」の折檻を受けた。細首から足先まで十三段もの横縄が、女体を絞り切るかのように締め上げていく。それ等の縛り縄は、一箇所毎に総て二筋も三筋も巻かれており、横縄の間隔は何処も十センチ位しかない。その縄の間に張り出した肉柵が丸々と脹らんで、極端な血行障害と外気の寒さによる鳥肌とのために、身体全体が、見る見る桜色に変色した。その眺めは、まるで細長いソーセージを一つ一つ、輪に丸めて、それを幾段にも積み重ねたように見えるのであつた。

そうした寒中苦業の成功に喜んだ春子は、益々自虐の欲望の虜になって、更に三度目の寒中、戸外縛りを夫に、せがんだ。

その日は、余り天候は良くなかつたものの寒さは二、三日前よりは幾分、和らいだように思われる日だったのだが、彼女が二回目と同じ柱縛り吊るしにあつて間もなく小雨が降り始め、やがて、それが俄雪に変わった。厳しい縄目に赤く火照つた牝奴隷の肌の上に、粉雪が美しい乱舞を見せて降り掛かり、その冷たさが、半ば感覚を失いかけている春子の皮膚の神経を刺戟して、彼女を弥が上にも快い倒錯の淵に引き込んで行くようであつた。

雪のせいばかりではあるまいが、三度目の正直で、このプレイの度が過ぎたのであろうか、春子は遂々風邪を引いて、それを、こじらし、五日も寝込んでしまった。一家の主人にとって、主婦の病氣ほど往生する事はあるまい。まして新吉の場合は、自分の手で妻を病床に追いやつたような罪の意識さえあつたから、尚更、堪まらなかつた。市販の薬を買い与えても、中々下がらうともしない頑固な風邪熱の処置に、新吉は困り果てた。

「貴方！ 苦しい。ああ、苦しいわ！ 本当

に、わがままで失敗してしまいました。ご免なさい。貴方にお預けした筈のこの体ですのに、こんなに悪くしてしまって申し訳ありません。良くなったら、この悪い牝奴を、うんと思い切り折檻してやって下さいね」

半ば熱にうなされながらも、尚も被虐の妄想に酔い痴れている妻の症状を、ただ手を、

こまねいて、なす処なく見つめる新吉の顔は苦悩に歪んだ。春子が普通の身体の女だったら、直ぐにも町医者に診せられるところなのだ、奴隷妻たる肉体上の異常の故に、それが憚られる事を新吉は怨めしく思った。

「俺は、なんという事をしてしまったのだろう。罪科もないこの愛しい女を、こんな時に



イメージギャラリー 『一人一室?』 志羽利也

医者にも診せてやれない身体にしてしまったんだ。全く馬鹿氣た事をしたもんだ!」

幾度、計って見ても、なかなか下がらない体温計の目盛りを、いらいらして眺めながらつくづくと後悔してみても、所詮は甲斐ない後の祭であった。

それでも、幸いに風邪そのものが悪性でなかった事と、彼女の肉体が日頃の習練によって鍛えられ、強靱な体力を保持していた事によって、ようやく、さしもの熱も下がり始めた時の、新吉の喜びようはなかった。

「春子! 俺が悪かった。勘忍してくれよ。でも、よく辛抱して頑張ってくれたねえ。ありがとう、ありがとう」

と、頭を何度も下げる新吉に、春子は「いいえ、そんなこと。いけませんわ。奴隷妻に、そんな言葉をお使いになるものじゃありません。病氣は、勝手になった私が悪いのです。貴方のおいつけ通りにしていたら、なんでもなかったのに、お心に抗って不始末をしてしまいました。厭よ、厭よ。やめて下さい。私に謝ったりなんかさらないで。ねえ、それより、悪い私を懲らしめのために、お仕置して下さいように、お願いしてありますわねえ。覚えていて下さるかしら?」

と、やや面癩れした顔に笑みを浮かべて答える、いじらしい春子であった。

33 明 烏 雪 責 め

春子の風邪が全快して間もなく、この地方では珍しい大雪に見舞われた。それは二月の末であった。夕刻から急激に冷え込んで、宵には雪になったのであった。静かに降り積もる雪の様子を、自由妻として夕餉の片づけを終わった台所の窓から眺めていた春子は、何思つてか、急に目を輝かして奥の間に戻ると炬燵に入っていた新吉に向かって言った。

「貴方。明烏って何か、ご存知？」

「夜明けに鳴いて飛ぶ鳥のことさ」

との新吉の呑気な返事に、いささか期待が外れたらしく、彼女は少し焦れて

「厭々！ そうじゃありませんわよお！ 明烏夢泡雪っていう、昔のお芝居の事をいっていますのですわ！」

と珍しく不満顔で続ける。

「浦里という遊女が松の木に縛られて、雪の中で折檻される、お話ですわ」
「なんだ、その事かい。それが、どうかしたのかい？」

と、時ならぬ彼女の態度に、さては一魂胆ある事を見て取った新吉は、わざと、そっけない振りで答える。益々焦れ気味の春子は「外は大雪が降り出していますわ。このぶんだと、きっと沢山、積もりそうよ。ねえ、貴方！ 私、浦里のように雪責めに遭つてみたいの。雪の中を縛られて、お引き回しを受けて、あげくは、雪だるまのように埋もれたいんです。ねえ、貴方。お願いですから、私を雪責めにして下さい。遊女だって受けたお仕置ですもの。奴隷が、それを受けないなんておかしいわ。お慈悲ですから。ねえ、貴方！ 私は貴方の奴隷妻なのよ！ 奴隷妻は、どんな酷い、お仕置でも、喜んで受けなければ、いけないんですわ。どんな折檻にも耐えなければならぬんですわ。ねえ、そうでしょう？ いつも貴方は、そうおっしゃって、私を飼育して下さいましたわ。お願いです、お願いです」

と、夢中になったように、せがみ始めた。

事実、春子には、先日の三度目の戸外折檻の折の、肌を感じた、あの淡雪の素晴らしい感触が忘れられなかったのである。彼女は、その後で患った事など全く意に介していない様子で、止め途のない被虐願望の執念を燃え滾

らせ、新吉の膝近くに、にじり寄ると、夫に取り縋るように、その場に崩折れて、迫りに迫った。その形相からは、冒す事が出来ない魔力的な靈氣さえ、感じられた。

矢張り、そうかと、半ば諦め顔の新吉は又しても彼女の熱意に、ほだされて、
「やれやれ、分かったよ。そう、さらに降る事もなからうから、それじゃ一番、明烏の幕開きと、いこうかい」

と内心は洩々ではあったが、芝居気たつぷりに気取つて見せた。

「まあ、嬉しいこと。それでこそ、奴隷妻春子の、ご主人様ですわ！」

と喜び勇む春子を、僅かに制して新吉は、
「つまらんことを言わずに、直ぐ支度に掛かれ！ その代り、今度は病氣になつても俺は知らんぞ」

と一応、邪険に口先でこそ言つたものの、彼にとつては、春子こそ可愛くて可愛くて仕方のない女なのである。

春子は、着衣を全て隣座敷に脱ぎ棄てて、使い慣れた細引の束を幾つか持つて、炬燵部屋に戻つて来た。そして、いつもの通り正座すると、早くも両手を後ろで合わせて組み、お縄受の姿勢に入る。その間にも新吉が、

風呂支度の準備、おさおさ怠りないのは、彼も熟練した悦虐プレイヤーなればこそであろう。やがて部屋に立ち戻った彼は、寒さも、ものかわ。正座して大人しくお縛りを待っている春子に向かい、

「今夜は菱縄で、いこう。覚悟は、よいな」と口調を改めて申し渡す。

「はい、ご主人様！喜んで菱縄を、お受け致します。特別のお慈悲をもちまして、厳重な、お縛りをして戴きとうございます」

そういつて姿勢を正した春子の首から、前に降ろした二本の縦縄に、新吉は、幾つもの結び玉を作り始めた。

春子の豊かな臀部から背後に回ったその縄が、項の下で首縄に繋がれ、身体の前後の縦縄に順次に縄が引っ掛けられて強く引き絞られると、見る見る彼女の、胸元から下腹部にかけて、五箇の美しい菱形の縄線が形作られた。ふっくらした二の腕には、上下に二カ所も縄が巻かれて背筋で縄止めされ、その余りの縄が、背中では合わせた両手首にギリギリと巻きつくと、もう完全な菱縄の後ろ手、高手小手縛りが現出していたのである。

「猿ぐつわを嵌めてやろうねえ」

新吉は独り合点して、春子の口中に、あり

合わせのお台布巾を押し込むと、その上から手拭いでシッカリと押さえ縛りをして、猿ぐつわの仕上げをすると、手拭いの頬への喰い込み具合を点検した。

跣足のままの春子が庭に引き出された時、霏々として降り止まぬ細雪に、庭一面、真白く覆われて、既に五、六センチも積もっていた。その雪の中を全裸の春子は、菱縄の縄尻を新吉に引かれ、足裏を通して疼くような寒気に打ち震えながら、辛い足取りもトボトボと庭中を、あちこち歩き続けた。新吉は厚手の毛の丸首シャツにデニムズボンという普段着で、この雪の中を、奴隷妻を持った因果でのそのそ、彼女の後について歩かなければならなかった。

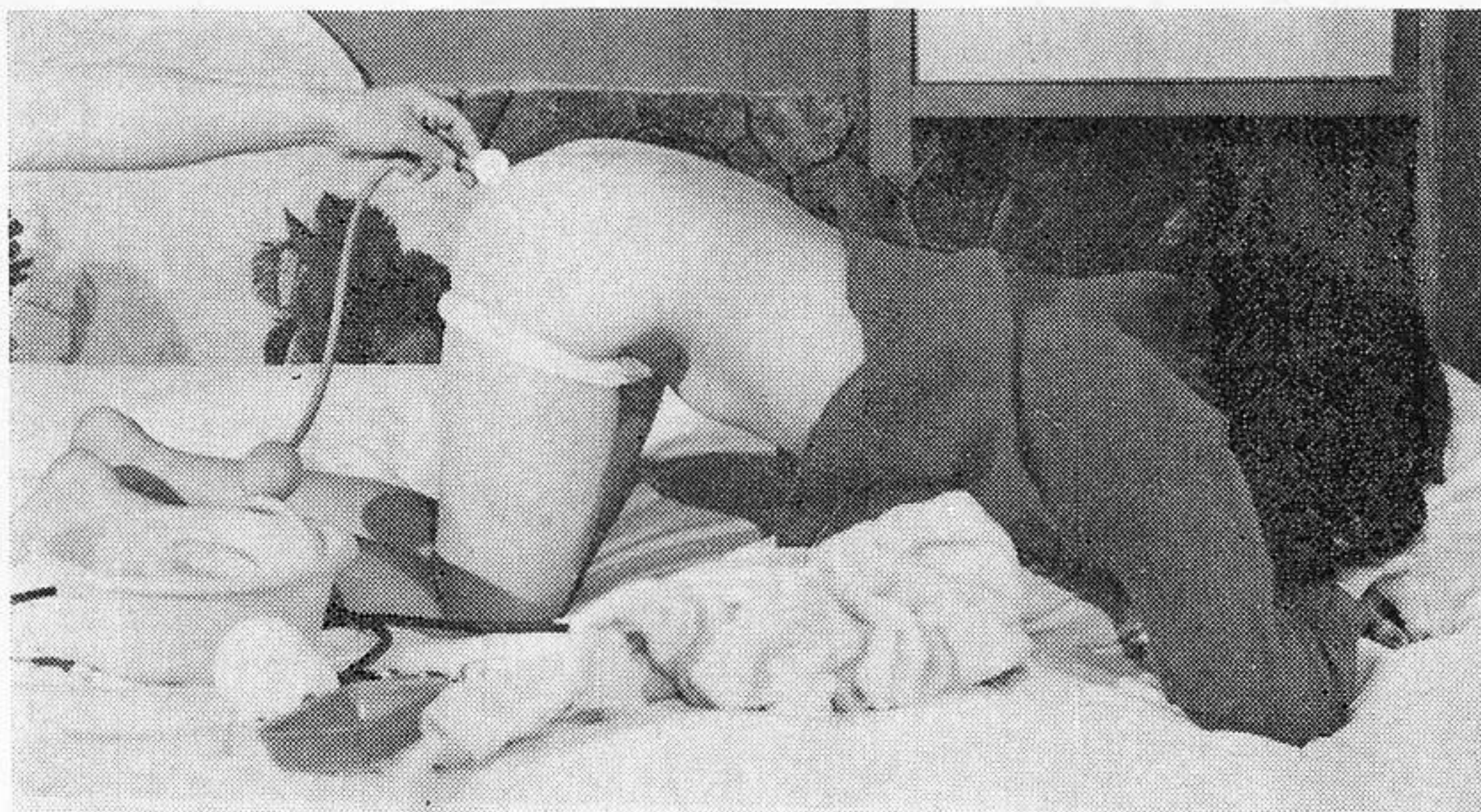
三回、四回と、広くもない庭中、同じ所を引き回し続ける間、縛られた奴隷妻の裸身にも、新吉の上にも、小止みなく降り募る細雪が、美しい純白の衣裳を着せた。二人が踏み締める足跡は、歩く後から後から、直ちに新しい雪粉で掻き消されて行った。

新吉は、春子の縄尻を犬繋ぎの杭に繋いで置いてから、探して来た板切れで、その辺の雪を集めにかかった。初めは明烏の浦里のように、木の幹に縛ろうと考えたが、植木の根

元までは雪は降り屈かず、生い繁った枝葉に積もってしまったて、肝心の根方は、ただジメジメしているだけなので、計画を変え、降り溜りになって雪量の多い、座敷の前に春子を引き据え、そこで雪だるまを作る事にした。軒先や枝に降り積もった雪を物干し竿で掃き落として一カ所に集めると、雪だるま一つを作るのには、あり余る程になった。

春子は庭に追い出された頃は、寒さに耐えるために、特に厳重な手加減で縛り上げられなかったので、上体には、さして寒さを感じてはいなかった。しかし、引き回しを受け、犬繋ぎに繋がれたまま、じっと雪の降り積もる中に坐らされている内に、五体の感覚が全く失われはしないかと思う位、激しい寒さに打ち震えていた。春子は犬繋ぎから解かれると、雪溜りの中に坐らされ、縛られたまま、首から上を除いた全身を雪に埋められた。生きながらの雪だるまに仕上げられたのである。固く閉ざされた猿ぐつわの奥で、自分の歯がガタガタ音を立てて震えているのを静かに聞きながら春子は、自分が始めに望んだ、芝居の中の浦里の刑よりも、もっと酷い、この雪責めの歓喜の中で、失神寸前の夢幻の世界を彷徨するのであった。

(未完)



「カメラ」と「ペン」のルポルタージュ

「浣腸」という名の飼育に耐えた紀代

西条紀代の巻

塚本鉄三

甘いものが好きだという西条紀代は、新大阪駅の売店で買ってやったチョコレート、部屋へ入るなり、ポリポリと、やりだした。

私は紀代に、「それを食べ終わったら風呂へ入ってくるんだよ」と言い残しておいて脱衣室へ足を踏み入れた。

午後の陽がガラス窓に直接、当たってその反射光で浴室の中は目のさめるよう

に明るかった。私は湯を出し放しにして、ざあざあとタイルの床に流しながら浴槽の端に首をのせて、長々と伸びていた。

今日は何故、このように、のんびりと湯につかっていられるかというと、紀代からの電話で、「一月は休みをとらなかつたので、二月には、その代休をとれるから、二月十五日の定休日の外に十四日の休みをとって、一泊で大阪へ行く」と言ってきたからだだった。

第一回目、第二回目の時のように、日帰りのカメラ・ルポであつたら、私がのんびりと風呂へ入っているというような、のんきなことは、とてもしておれなかった。

それが、今度は一泊で縛られ、責められてみたい——と言ってきたのだから、ゆっくりと落着いていられるというわけだった。

と、その時、浴室の扉が細目に三分の一ほど開いて、小さな白い足が見えた。

濡れていないのに、如何にも濡れているように、その肉づきのよい足の白い肌が、タイルに触れて瑞々しく私の目に映えた。

ガラス窓を透して射し込む明るい陽ざしが複雑に乱反射して、その白い肌の一部が微妙な陰翳を見せていた。

扉が半開きになって、紀代の全身が浴室の中へ入ってきた。

前にタオルを当てて、前かがみの姿勢で顔をのぞかせると、茶目ツ気な円い瞳をくるりと回して、あたりを見まわしてから、私の方へ視線をやってニヤリと微笑んだ。

「さあ、紀代。遠慮しないで、お入り」

さっき、私が「あとで風呂へ入ってくるんだよ」と言葉をかけたとき、「ハイ」と返事をした紀代であつたが、恥かしがって、きつ

と私と一緒に入浴はしないだろうと思っていたのに、紀代は浴室へ入ってきたのだ。

タイルの上に、ぴったりとお尻をつけて坐ると、湯をかかりだした。

「紀代は、芙美代姉さんから、三月号を見せてもらったんだってネ」

「ハイ、暮れに田舎へ帰るとき、挨拶に、ちょっと寄ったんです。その時に『あんたの写真、雑誌に載ってるわよ』って言って三月号を見せて下さったんです」

「芙美代姉さんは紀代が大変、喜んでたと言ってたけど本当なの。そうそう、それから載ってる写真が少ないとか言ってたそうだね」

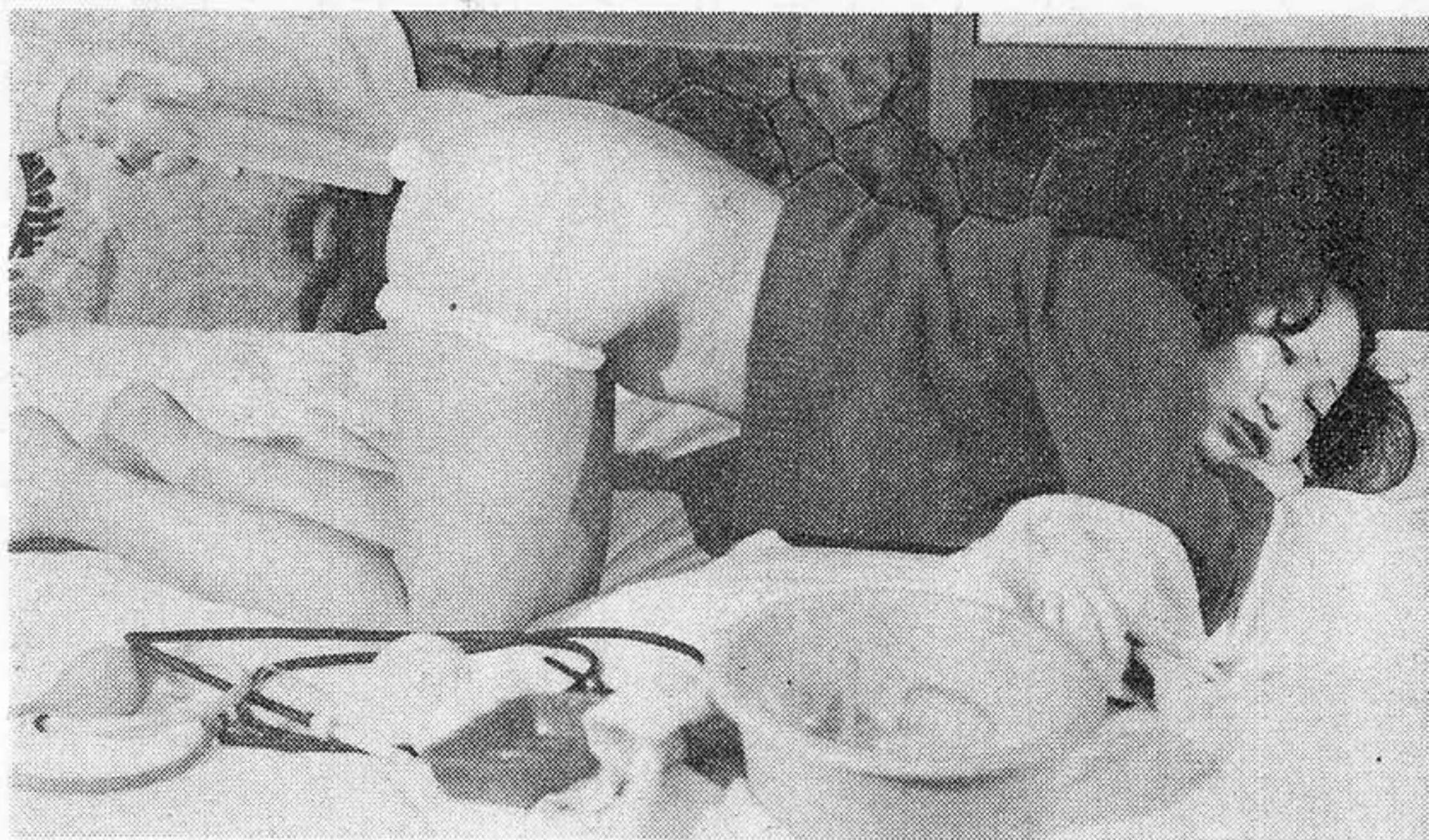
「あら、そんなことまで姉さんが、お知らせしたの、いやだわ。でも、お写真は沢山とったでしょ。あれ、みんな載せるのかと思っていたんですもの」

「そりゃね、撮るのは沢山、撮っても、誌上に載せるのは、その何分の一にもならないんだよ。さあ、こちらへお入り」

私は、段になったところへ腰を下ろして紀代を浴槽へ誘い入れた。

脂肪のかたまりのような、ぬめぬめとした丸まっちい紀代の小柄な身体が、水面を





押し分けて湯の中に沈んだ。

「紀代。浣腸って、知ってるかい？」

「カンチョウ？ うわあー、痛い！」

「痛いって？ わかってるのかナ。紀代は浣腸されたこと、あるのかい？」

「ええ、あるわ。小さいときに。お尻

へお薬を入れるアレでしょう」

「フン、少しはわかってるらしいナ。

まあ、そうなんだが、浣腸って、そんなに驚くほど痛くはないもんだよ」

「だって、お腹が痛くなるでしょ」

「だから、今から痛いって、悲鳴を上げてたってわけか。無邪気な奴だナ」

私は湯の中で紀代を膝の上へ抱えあげた。

アルキメデスの原理ではないが、同容積の水の重量だけ軽くなって、紀代の身体は私の両腕の中で、ふわふわとたゆたっていた。

「今日は一寸、目先が変わったところで、浣腸責めで紀代を飼育してやるからナ、よく洗っておくんだよ」

「あら、今日は括りはらへんの？」

「紀代は縛られるのが好きかい？」

「ええ、嫌いじゃないですわ」

「だったら、今日は時間もたっぷりあるから夜通しでも縛ってやろうかナ」

私は紀代に、そう言い残して浴室を出た。

○

△東京外為市場きょう再開、日銀二七〇円前後で介入か▽

一面のトップを、そんな大きな見出しで飾っている朝刊を眺めていた。

ドルは10パーセント切り下げになり、円は変動相場制に移行した激しい経済界並に金融機構の変化を、蒲団の上で寝そべりながら目にしていると、紀代が、顔を真赤にはてらせて風呂から上がった。

私は西条紀代が、今日のように、押しかけ女房式にやって来なかったら、前の二回で彼女に対するカメラロボは、やめようと考えていた。私なんかより、もっと若い彼女には、ふさわしいSの相手がいると思ったからだ。

それが、二月ほど経った今日、紀代の方から望んでやってくることになったので、それでは一つ、△浣腸▽で飼育してやろう——と思いついたのだ。

最初の頃、私は、△縛り▽についても、紀代に対しては全くの未知数で、その可否に關しては全くの白紙であった。

同様に、△浣腸▽についても、紀代が果たして、飼育に耐えるものかどうか、私には全然わからなかった。

松本たえのように、「私はどんな厳しい縛りや責めでも受けますが、浣腸だけは勘忍して下さいネ。浣腸以外だったら、どんな責めでも甘んじて辛抱します」と始めから、はっきり言っているM女もあるが、言わなくても概して、アヌスを見られたり触られたりすることを極度に嫌う女性が多いようだ。

鈴木千鶴子のように、ちんまりと小作りの可愛い菊花でありながら、その柔軟さと、類稀な許容性を併せ持った素晴らしい女性も、いることはいるが、これは既に彼女がアナルセックスの経験を持っているからではないだろうか。

交通事故で重傷を負って入院中だった鈴木千鶴子も、足の複雑骨折ということで意外に手術後の療養に日がかかったのだが最近では松葉杖をついてだったら外出も出来るようになったそう



なので、いずれ気候がよくなったら、再びS Mプレイのクイーンとして登場してくれそうである。

さて西条紀代に対して、今日こそは浣腸をしてやろうと考えていたので、私は手提げ袋の中へ一式の浣腸道具を秘かに忍ばせてトラノクの隅へかくしておいた。ホテルの部屋へは「これは破れ物だから大事にしてくれ」と

言って、紀代に運ばせたのだ。

「紀代、浣腸するから、こっちへ来るんだ」私は掛蒲団をめくって、紀代を招いた。

「ひやー、浣腸って、怖いわ、怖いわ」

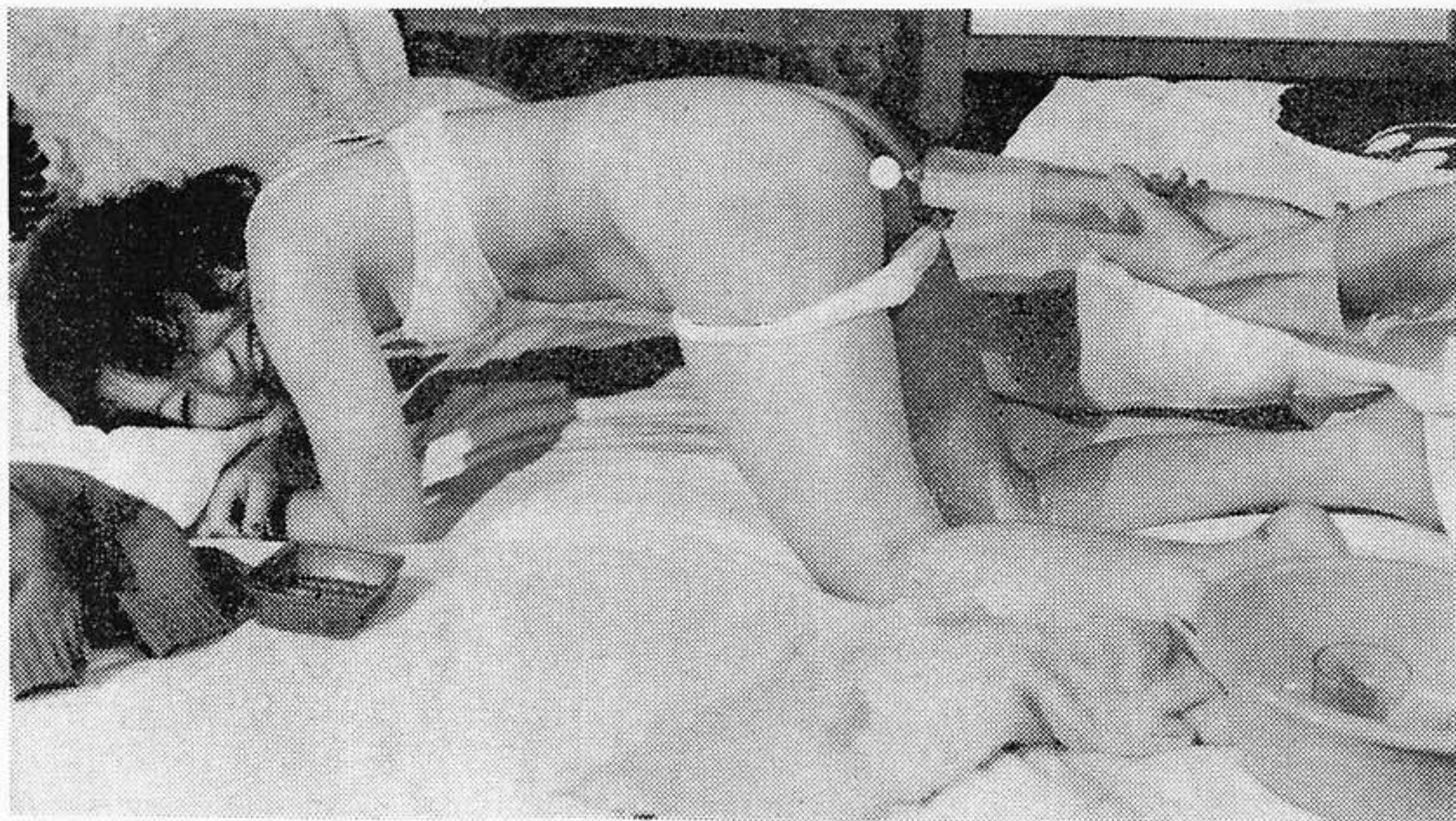
言葉では、そう言いながらも、紀代は万更でもなさそうに、いそいそと床に坐った。

洗面器に湯をくむと、その中に石鹼を丸のままつけた。二〇〇CCの浣腸器で温湯を吸

い上げておいて器へ噴出させると、湯でふやけた石鹼が溶けて、忽ちのうちに白濁した。

「紀代、お尻をつき立てて頭の方を低くして。そうそう、肩の力も抜いて……」
「怖い、怖い。だって、そんな大きなので浣腸するなんて、きつと痛いわ」

私が二〇〇CCの硝子製浣腸器を片手に、あいた方の手で紀代の肩をポンポンと叩いていると、折角、尻立てのポーズをとっていた紀代が、姿勢をくずして横倒しになってしまった。浣



腸器の嘴管の先からは、ともすれば、石
鹼液が溢れそうになる。

私は浣腸器を洗面器の中へ投げ込んで
おいてから、紀代の双臀に手をやってア
ヌスを、のぞき込んでみた。

きゅっと固く締まって、何物も受けつ
けないような堅い表情ではあるが、土人
娘のような、ぎこちなさのなかに素朴な
粧いを、なにげなく見せていた。

「ガラスの浣腸器が怖いんだったら、こ
の細い嘴管で浣腸してやろうか」

私は黒いゴム管でイルリガートルに繋
がっている嘴管を石鹼水の中へつけて、
ばさばさと泡を立てておいて、紀代のア
ヌスへ近づけていった。

だが、紀代のアヌスは頑として、その
イルリガートルの細い嘴管をさえ、受け
つけようとしなかった。鈴木千鶴子の時
は、あの豊かな膨らみを持った二〇〇C
C硝子製浣腸器の嘴管をさえ、何らの潤
滑剤をつけることもなく、するりと呑み
込むように根元まで易々と受け入れたの
であったが、紀代は、アヌスに異物が触
れたことで、益々全身を緊張させて、か
たくなになってしまった。

私は紀代の緊張をほぐすように、一呼吸い
れて、浣腸されるとき姿勢を教えた。口で
言ってわからないところは、自分で手本を示
しながら、手とり足とりして、仰臥位から横
臥位、膝立位……という具合に、ポーズをと
らしたのだが、マットレスの蒲団の上では、
ふわふわとして安定性がなく、ゆっくりと体
が落着いていずに、すぐにくずれた。

このとき、一つのハプニングが起きた。

石鹼水を入れた洗面器を蒲団の上に置いた
ままポーズをとらしていたので、身体を動
かした途端、マットレスがへこんで、横にな
った洗面器から三分の一ばかり液が敷布の上
にこぼれてしまった。

器から飛びだした石鹼の塊がふやけて、周
りがヌラヌラになっているのを掴んで元に戻
しておいて、洗面器を畳の上に置く。

私は手についた石鹼のヌラヌラを紀代のお
尻へ当てて、なすりつけたが、これが巧まず
して、格好の潤滑剤となった。

どうだろうか、イルリガートルの嘴管をす
るりと、受け入れてしまったではないか。

嘴管をアヌスに挟んだまま黒いゴム管を長
く垂らして、紀代は四つ這いのポーズで、お
尻を高く掲げて動きまわっている有様は、ま

るで動物のシッポのようだ。

「シッポをたらしたワンチャンだね」

「ええッ、なんのこと？」

紀代は私の言っていることが、はっきりとわからないらしく、黒いゴム管を白いお尻からブラブラさせながら、私の方を顧みた。

昨年十二月に西条紀代を始めて縛ったときも、△縛り▽については、彼女は全くの未知数であったが、今日これから飼育をはじめるとも、△浣腸▽についても全くの未知数である。

私は紀代にお尻を突き出させておいて、イリリガートルの嘴管を抜くと、次にエネマシリンジの嘴管をアヌスに挿し込んだ。

この方は、少し太目なのだが、それでも、さっきのぬめりがあるせいか、何の抵抗もなく、するりと入り込んだ。片方の端を洗面器に漬けておいて、中間のゴム球を握ると液が直腸内へドクドクと送り込まれるわけであるが、今はまだ、そこまではやらない。

エネマシリンジを、お尻から、ぶら下げておいて、私は紀代のポーズを変えた。

ブラブラ、ブラブラ……と丸いゴム球が風船のように太股の間で揺れている。そのゴム球の先には、いささか太目のゴムの管を垂らして、その端子には黒いエボナイトの吸い込



みがついている。それを、お尻からブラブラさせているのだから、見事といえば見事だ。

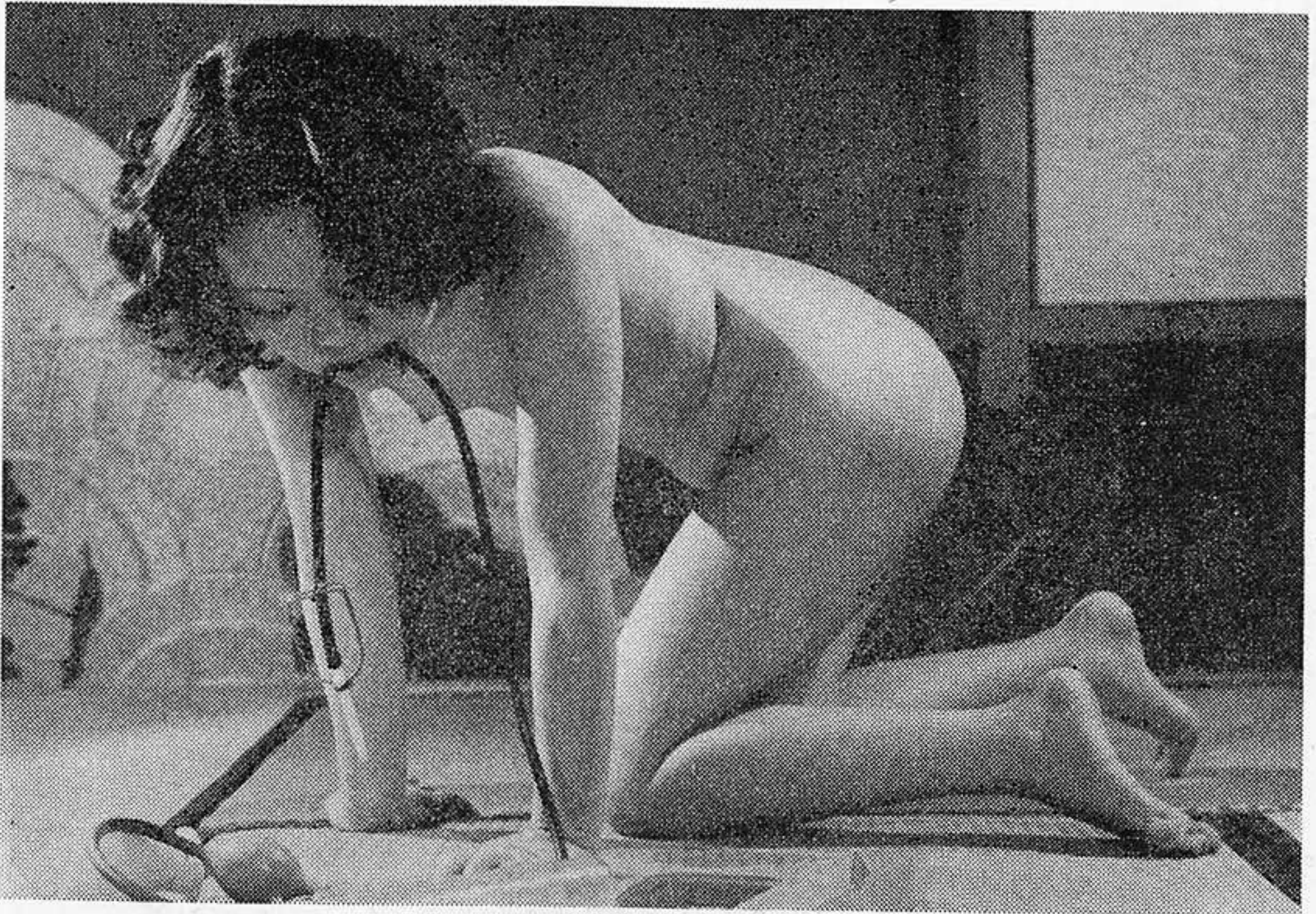
ゴム球が揺れるにつれて、ゴム管を通じて嘴管に振動が加わり、紀代のアヌスに対してどのような効果を与えているだろうか。

と、見る間もなく、紀代の括約筋が耐えきれなくなつて、つるりと嘴管が抜けて、エネ

マシリンジが、だらしなく落ちる。

私はエネマシリンジを拾って挿し込む。最初の頃のように丁寧にはない。当然のように乱暴に、しかも無雑作にやっても、紀代の丸まっちいお尻が、少しピクとするだけだ。

ポーズを変える動作で抜け落ちれば、ただ無雑作に挿し込んで、そのままにしておく。



抜け落ちれば抜け落ちる回数だけ、嘴管を変えて、ただ挿し込むだけだ。

それによって、紀代の肉体に、どのような変化が起こっても、私は知らない。

これが、△浣腸▽の飼育というのであろうか。鈴木千鶴子のアヌスの、あの絹のような柔らかい感触を手指に味わった私は、飼育済みの（或は自ら開発済みのかも知れないが）アヌスの醍醐味を知ったのであるが、流石に紀代は、そこまでは出来っこない。

次に手にしたのは、二〇〇CCのガラス製浣腸器だ。丸味を帯びた中ふくらみの嘴管は、なだらかな曲線を描いて私の目の前にある。

紀代のアヌスは、この二〇〇CCの嘴管をも容易に呑み込んでしまったのである。

しっかりとくわえ込んだ確かな手応えが、これからの紀

代のアヌス責めを一層、面白いものにしてくれそうだ。

手に、ずしりと重量感を覚えるガラスのポンプを見ていると、私は一気に、二〇〇CCの石鹼液を紀代の直腸内へ、ぶち込んでやりたいと思った。

その時、ぞくぞくする期待感が湧いた。大人になってから、浣腸をしたことも、されたこともない紀代に、今、ここで初めての浣腸の体験を味あわせてやることに、私は、たまらない嗜虐心にかられた。

三〇〇CC、五〇〇CC、一〇〇CCの浣腸器それに、いちじく浣腸も準備してはきたが、今は、そんな小さなものは、まどろかしくてならない。

洗面器に入っている石鹼水を全部残らず、この二〇〇CC浣腸器によって、紀代の直腸に浣腸してやりたかった。

「紀代、今度こそ、本当に浣腸するゾ」

私はガラスのポンプ一杯に白濁した石鹼水を吸い上げておいて、紀代の臀部に迫った。

「ええッ、本当に浣腸するの？」

紀代は一瞬たじろいだように、お尻をずらしたが、それは私の掌によって元に戻され、嘴管が、ずぶりと挿し込まれたかと思うと、

忽ちのうちに、ポンプの把手が押された。

チュル、チュル、チュルチュル……。

嘴管を通じて噴出した石鹼液は、一呼吸で半分ばかりに減った。

「アアア……。気味悪いワ」

紀代の肩が、がくりと崩れるように落ちていよいよやをするように、お尻を左右に揺すったが、嘴管の根元を、ぴったりと密着させておいて、残量の石鹼液を一気に送り込んだ。緊張に背筋を、こわばらせていた紀代は、嘴管を抜き取るや否や、全身の力を抜いて、ころりと横倒しになった。

私は待てしばしなく、再び石鹼液をポンプの中に吸い上げる。あわてて空気と一緒に吸い上げたので、空気を追い出しておいて、二〇〇〇一杯に液を充たす。

「ひやー、まだ浣腸するの。これで沢山。もう勘忍して、辛抱できないわ」

「なにを言ってるんだ。まだまだ、これぐらいじゃ駄目だよ。少なくとも、この浣腸器で三本は、やらないことにはネ」

「いや、いや、そんなのヒドイわ。一本で許して。ねえ、お腹が痛くなってきたのよ」

「まあ、とにかく、出来るだけ浣腸をやっ
ね、便がしたくなったら、ここに尿瓶しびんもある

し、便器もあるよ。少しも心配しなくてもいいんだよ」

「いやー、そんなところでするなんて、とても考えられないわ。早く、トイレへ行かせて」

「何、言ってるんだ。この尿瓶も便器も、さっき、君が提げてきたもんだよ。さあ、駄々をこねないで。浣腸、浣腸——」

私の言葉にせかされて、紀代は観念したように、私の目の前にお尻を開く。

二〇〇〇の石鹼水が苦もなく、更に紀代の直腸内に注ぎ込まれる。

じっと黙って辛抱している紀代のお尻の肌に、ぷっぷつと鳥肌が立ち、ふんばっている太股が、ぶるぶるとケイレンしている。



三本目。さっき、蒲団の上に液をこぼしたので、残りは半分ほどの一〇〇CCぐらいしかない。しかし、これから追加の石鹼水を作りに行く暇などはなかった。私は、それだけの残量全部を、一気に注入した。

気のせいか、紀代の下腹部が少し膨らんでいるような気がした。液は、まだまだ許容す

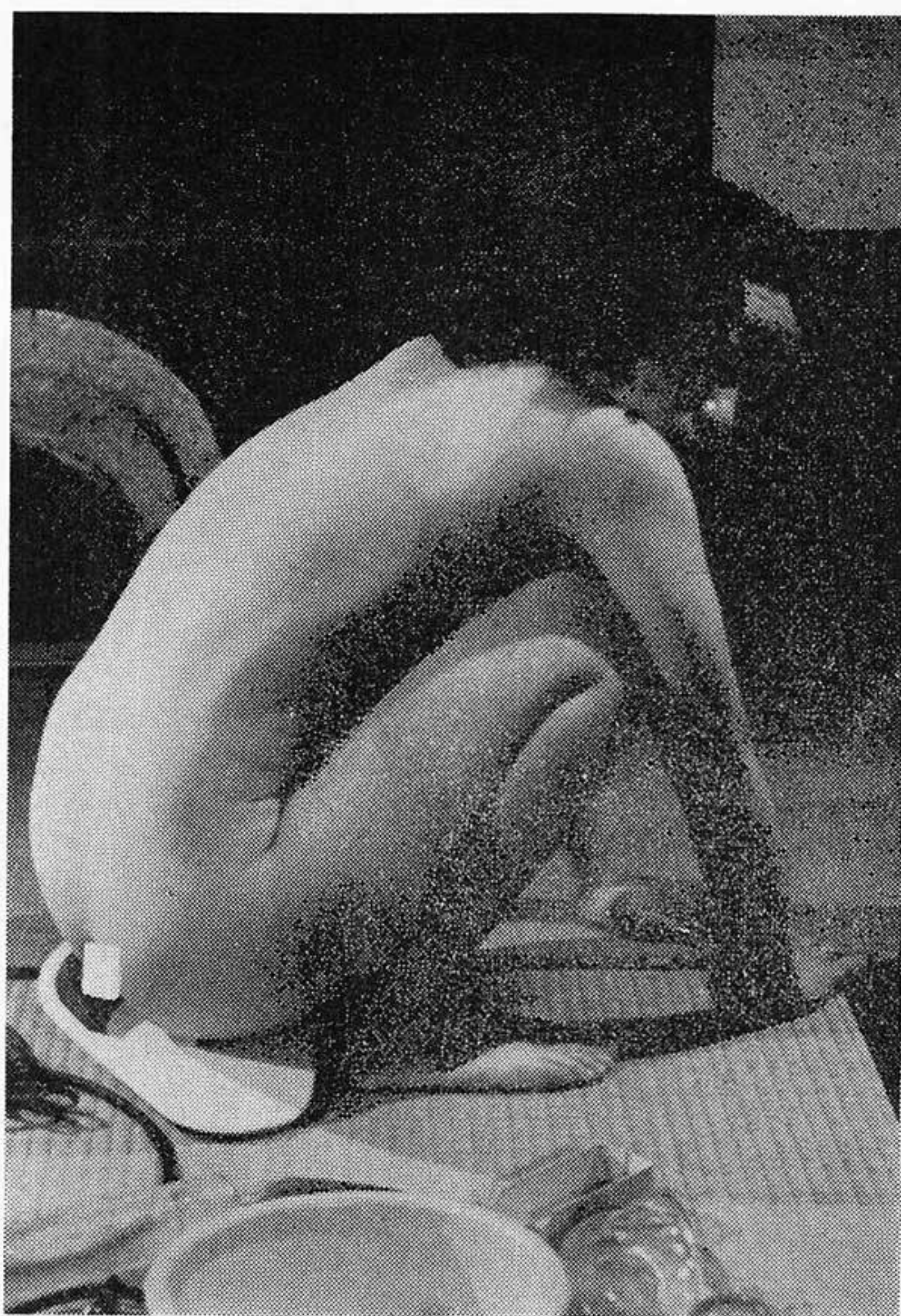
るような按配である。

だが、その時――。

紀代が突然、腹痛を訴えだした。

「ああ、お腹が痛い、トイレへ行かせて。お願い、トイレへ行かせて――」

「フン、そうか、まだ早いだろうが、尿瓶と便器の準備をしておこうかな」



「だって、そんなところで出来ないワ。トイレでゆっくりさせて、お願い。お腹がだんだん痛くなってきたのよおう。早く、早く」

「まあ、そうあわてなくなつて、急に出てしまわないヨ。こうして押えておいてあげるから、十分辛抱してから、どうしても我慢出来なくなつて、思いつきり、この便器の上に出してみなさい。私が見てあげるから、落ちていてやるんだよ」

「いやいや、そんなの羞かしいから、いや。トイレへ行かせて。ああ、お腹がゴロゴロ鳴って変な具合。こんなの初めてだわ」

「うん、辛抱して、辛抱して。今日は最初だから、紀代も流腸に馴れていなくて、勝手がわからんだろうが、早く力^{りき}むと、液だけが出てしまつて、あとが反つて気持が悪いもんなんだ。ゆっくり我慢しておいて宿便まで一緒に排泄してしまうと、凄く気持がよくて紀代も一遍に流腸ファンになつてしまうよ」

「そんなことより、お腹がしぼるように痛いヨ。もう出そうだわ」

「それだったら、ここで、この便器の上にやるんだね。いいね」

「ええ、もう我慢できないから仕方ないわ。早く、早く、そこへ連れて行って――」

私は出来るだけ長く、紀代の便意を辛抱させておきたいと思った。

額にうっすらと冷汗をうかべて、必死になって激しい便意をこらえている紀代の表情はいたく可憐だった。背中が汗ばんでいる。

畳の上に、しつらえた急造の便所。その便器に跨がった紀代の背後から、奇妙な音がしたかと思うと、たちどころに、異臭が私の鼻先に漂ってきた。

それから後は、もう快便の連続であった。

堆^{うず}高く便器の中に積まれたそれは、年若い紀代の腹の中から出てきたものとは思えないほどの嵩^{かさ}であった。

「ひやあ、凄い量だな。これは驚いた」

「いや、そんなこと言っちゃ、いや。見ないで、見ないで。そっちへ行つて——」

「まあ、いいじゃないか。紀代のお腹の中にこれだけのものが、現に入っていたんだからね。そう恥かしがることもないさ。そのうち二回目、三回目の浣腸もやってやるからね。でも、出たあとは、すうっとして、気持ちいいだろう」

「ええ、それは、少しは……」

紀代は新聞紙で便器をくるむと、あわててトイレへ駆け込んで行った。

○

とにも角にも、西条紀代に對して、浣腸の洗礼を味あわせてやった。

△縛り▽のように、紀代が、△浣腸▽を好きになるか、どうか、それは私にはわからない。△浣腸▽について、何らの知識も経験もない無垢の女性に對して、「浣腸プレイに依る飼育」を施すことが、果たして可能なものか、どうか？ 今日はその一つの実験である。

若し、可能なりとしても、その経過は、どういうコースを辿るものだろうか。これは私にとっても大いに興味のあるところだった。勿論、浣腸マニアの方も、そうだろう。私は紀代が戻ってくると、浣腸用具一式を提げ袋に、ほり込んで、浴室へと伴った。「あら？ まだ、浣腸をするの？」



「そら、そうさ。いよいよ、これから、本格的な浣腸をやるんだ。今までののは、いわば序の口さ。紀代のお腹をきれいにしておいて、ゆっくり浣腸プレイをやるんだよ」

「だって、さっき、あれだけ沢山、出したんだもの、もう出ないわよ。それに、トイレで、今、もう一度、出してきたんよ」

「まだまだ、これからね、強制浣腸と浣腸それに大量浣腸というのをやるんだ。だから浴室へ来てもらったんだよ」

「なんだか、わからないけど、そんなの、怖い。お腹にお湯を入れたりするの？」

「まあネ。だけど、痛くなんかないさ。紀代のお腹の中を、すっかり綺麗に洗ってしまつて、汚れた物は何も、なくしてしまうんだ。だから、そのために、このイルリガートルとエネマシリンジで

どんどん沢山の浣腸液や温湯を紀代の直腸に送り込んで、洗うというわけさ。立ったままで、あちらを向いて、両脚を開いてごらん」

浴槽の縁に両手を添えて支えさせ、前屈み



洗面器にくんだ温湯の中に、小片の石鹼を投げ込んでおいて、薄い石鹼液を作り、エネマシリンジの端を浸した。

双丘を押しひろげるまでもなく、目の前に露呈しているアヌスに、エネマシリンジの黒い嘴管を、するりと滑り込ませた。

それからあとは、エネマシリンジのゴム球を、きゅっ、きゅっと握りつめるたびに洗面器の中の石鹼水がチュッ、チュッ、と、ゴム管を通じて、紀代の腸内へと吸い込まれてゆくのだ。

前屈みになっているので、腹圧が低くなっているためか、抵抗も少なく、面白いように液は送り込まれてゆく。

紀代も、二回目の経験なので、時折、お尻を揺すり、踏まえた足を僅かに、にじる以外は至って平静を保っている。

洗面器の中の石鹼液は急速に減ってきた。

紀代のお腹が心持ち、ふくらんだ。

私は石鹼液を追加調製するため、一旦、エネマシリンジの嘴管を抜いた。

になって、お尻を突き出させた。

うっすらと脂肪を浮かべた紀代の真白い臀部が、私の目の前にあらわれた。

さっきの浣腸で、少し紅味を帯びた可愛い菊花が、これからの再度の浣腸も知らぬげに、ちんまりと私に微笑みかけている。



「紀代、そのまま待ってるんだぜ」

そう言いつけたのにも拘らず、紀代は、ふん張っていた両足をくずして、くたくたとタ

イルの上に腰を下ろしてしまった。

「仕方ない奴だな、言うことが聞けないとは。後手に縛ってやろうか」

「ええ、縛って縛って。」

あたい、縛られたままで浣腸される方がいい」

私は洗面器を置いて、縄をとり走る。

やわらかくて、よく上がる後手である。こんな柔軟な肢体は、あながち手首や腕ばかりではなからう。内臓だって、それ相応に柔軟な筈である。肌の色の白い女性は、粘膜もまたソフトタッチであるというが、浣腸とかアヌス責め、或はアナルセックスともなれば、やはり訓練と飼育が大切であろう。

私は、もう何年も使って、汚れきったロープを手にして、紀代の後手首を高く掲げて縛り、下が

らないように肩へ掛けて前から胸へ回して、乳房の上下を締めつけた。縄を二の腕にも通して、高手（二の腕）小手（手首）縛りだけに使って、下の方は解放である。

さて、引き続いて大量浣腸である。

今度は両手を浴槽の縁につくわけにはいかないから、両脚を思いきり開かせておいて、前屈みにさせる。洗面器に八分目くらいの石鹼液を直腸に入れられて、更に二の腕と胸とを縛られているのだから、さっきのように、お尻を突き出した格好にはならない。

「紀代は縛られた方がよいのかい？」

「ええ、その方が逃げだせなくて、気が楽ですわ。そうじゃなかったら、私、手が使えたら、浣腸器をはねのけてしまうかも知れないわ。だから、縛られた方がいいのよ」

「だったら、大人しくしてるんだナ。紀代が辛抱できなくなったら、遠慮しなくてもいいから、ここへ出せばいいのだ。あとで湯で流せばいいからね。それを繰返すんだよ」

「まあ、汚い。ここへですか？」

「そうさ、だんだん薄くなるから、そうも、汚くないさ。お腹は痛くないだろう？」

「ええ、痛くはないけど、なにか胸の方へ圧迫されてるみたいで、気持はよくないわ」

面白いように液は入る。

そのうち、前屈みで胸が苦しいと言い出したので、しゃがませて、その場で排泄するように命じる。タイルが冷たそうなので、浴槽の湯を汲んで、ざあざあと床の上に流していると、それにつられて、奔流のように赤褐色の水が噴出してきた。激しく太い奔流が溢れたかと思うと、途切れ、途切れたかと思うと再び太い奔流が噴出した。

私は、その奔流の噴出を眺めながら、浴槽の湯を汲んではタイルの床に流した。

僅かの固形物の残渣を混じえながら、その赤褐色の流れは、次第に薄められて排出孔へと消えていった。

「どうだ、お腹が、すうっと軽くなって、気持ちがいいだろう」

「でも、そんなに、じっと見ていたらいくらなんでも、恥かしいワ」

全部、排泄し終わらないうちに、私は待ちきれなくなって、再び浣腸をはじめた。

今度は石鹼を入れないで微温湯である。

澄んだ湯を、もうどのくらい入れたであろうか。シューシュー、シューとエネマシリンジのゴム球の圧縮のたびに、確かな手応えで紀代の直腸に送り込まれる湯の音だ

けが、この静かな浴室の中で息づいていた。

調子にのって、微温湯の浣腸に熱中している私の耳に、紀代の言葉が響いてきた。

「ちょっと、ちょっと、待って。私、トイレへ行きたくなってしまったの」

「だったら、さっきのように、ここでやってしまったら？」

「そうじゃないのよ。……の方よ」

紀代は小さな声で囁くように言う。

「フン、そうか、それだったら、尚更、この方がいいじゃないか。私もゆっくりと、紀代のオシッコをすることを見せてもらうよ」

「いやいや、そんなこと、絶対にいや」

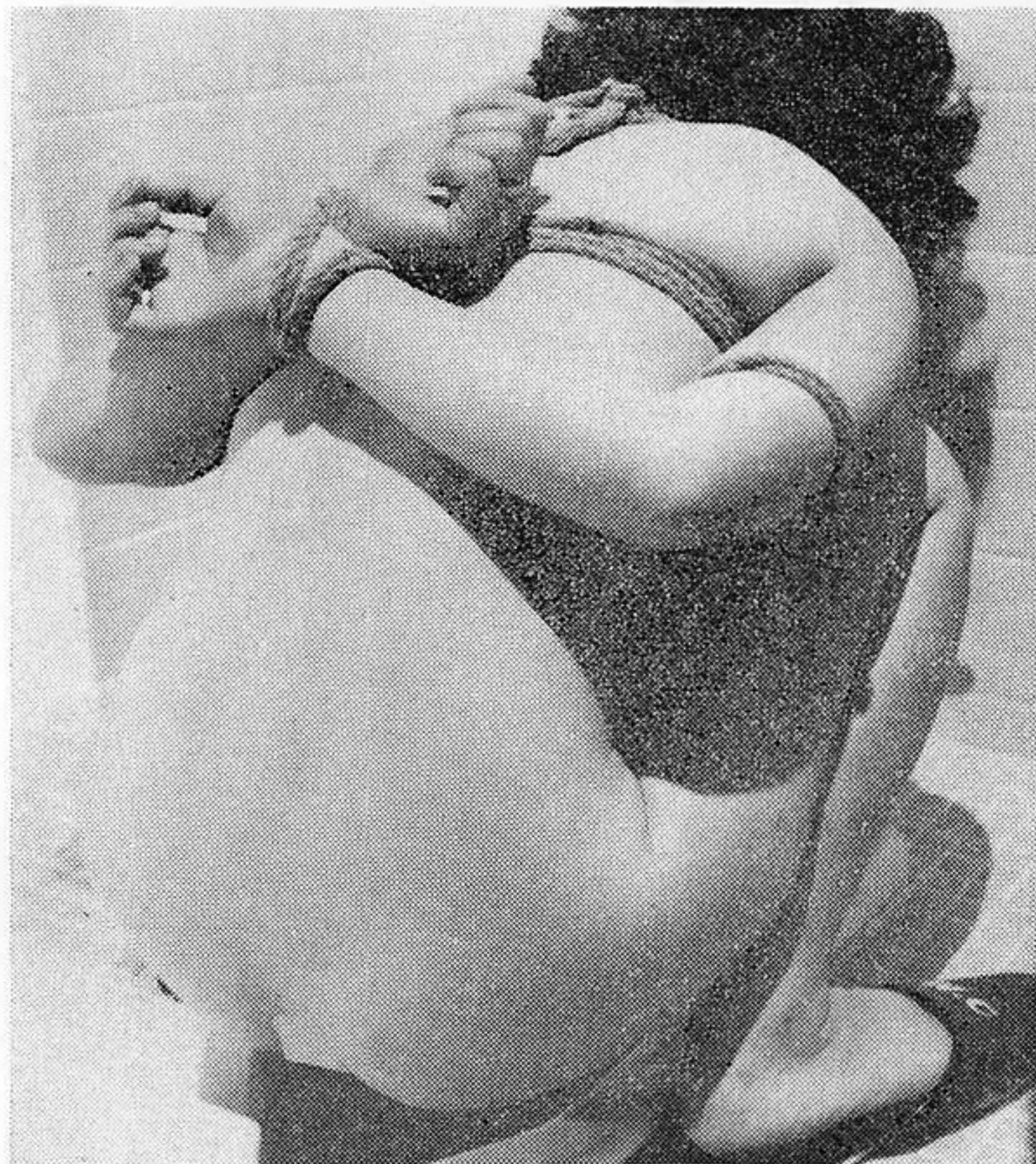
「正面がいやだったら、横向きでもいいよ。

私がお湯を流していてあげるから——」

「このタイル、冷たいんだもん。私、身体が冷えてしまって辛いよ。早くトイレへ行行って、休ませてほしいわ」

私は浴衣を着ているからいいが、紀代は全裸なので、冷えてきたのだろう。お尻や太股の肌が鳥肌立っているのが、よくわかる。

「よし、それだったらトイレへ行かせてやろう。そのかわり縛ったままだよ。私はカメラを持ち込むから、それまで、ポ—





ズをとって待っていなさい」
脱衣室の向かいが、トイレである。

此処のトイレは案外に広い。だが、私は広角レンズを持ってこなかったのを悔んだ。

八〇ミリのレンズで壁にぴったりに背を押しつけながら私は紀代の排泄ポーズにピントを合わせていた。

○

近くのレストランで夕食をすませて帰ってくると、SMプレイの余熱が残っている、この密室にはまだムンムンとする妖しいムードが籠っていて、なんとはなしに、プレイ意欲が、むずむずとしてくる。

「紀代は、二カ月前に比べると、ツケマツ毛やお化粧をするようになったし大変きれいになったネ」
「そうでしょうかしら。そんなに言うて頂いたら嬉しいけど、私なんか、田舎から出てきたばかりでまだ駄目ですワ」

「そんなことはないよ。二月の間に、見違えるように、色気も出てきたからね。きっと、若い男の人は放っておかないと思うよ」

「でも、まだボーイフレンドって、一人もないんです。欲しいと思ってるんですけど、その機会がなくて……」

「紀代に適当な人があったら紹介してあげよう。それはそうと、三月号は芙美代姉さんに見せてもらったそうだが、全部、読んだの」
「いいえ、写真のところで、私のことを書いた文章だけ。あの、前田真知子さんて、大変きれいな人ですね。それに、年も若いんですよ。私と同じくらいかしら？」

「いいや、紀代よりも少しは上だろうね。近いうちに四月号が出るから、編集部へ言っておいて貰うことにしよう。三月号は今ここに持ってきたから、紀代にあげるヨ」

「まあ、嬉しい。私、芙美代姉さんのを一寸見せて貰っただけなので、文章の方は、ゆっくり読んでいないの。見たかったわ」

「紀代は雑誌に載るのが希望だったんだろ。これから、写真を撮った分はルポを書くつもりだから、雑誌が出たら送ってあげよう。ゆっくり研究したらいいね」

「ええ、私のことを書いたところを読むのが大好き。自分のこと、こんなだったかしらと思って、興味があるわ」



「じゃあ、一つ、次のカメラルポのネタに、紀代を思いきり縛り上げて、どんな悦虐ぶりを見せるか、試してみるとするか。今日は、今までと違って、縄も麻縄を使うし、縛り方も少々手厳しいゾ」

私は紀代を促して洋服を脱がせる。

三〇米はあろうかという麻縄を二つ折りに

して、手でしごいた。

まだら斑の軟いロープから、白ロープ、そして今

日は、いよいよ麻縄が西条紀代の、しっとり潤いを帯びた肌に襲いかかるのである。

夕食が終わってしまえば、もう日が暮れるのを心配することはない。

体力さえ続くなれば、翌朝までの十何時間

を縛りまくり、責めまくってもよいのであるが、このあどけない表情の紀代は、果たしてこの連続責めに対して、どのような反応を示すであろうか。

さっき取り出した携帯用ビデオや革ムチが、畳の上にとろがっている。ムチ打ちも、一度は、やってみたい責めである。臀部に炸裂するムチが、関谷富佐子に於けるような起爆剤としての役目をするだろうか、どうか。

責めを受けるM女にも、それぞれ個性があるのは勿論だが、ムチ責めの女王としての関谷富佐子は、その絶妙の表情とポーズで、私を一挙に魅了してしまった。

だが、多くのM女たちは、縄目の痛さに喘いでもムチの痛さには耐えられず悲鳴を挙げてしまう者が多かった。

黒ずんだ麻縄が、妖蛇のように紀代の首にまきつき、胸でひとひねりすると、それからあとは、するすると伸びて後手首にまといいついて、これを高々と締め上げ、アヤ取りのように、胸前の縄を菱形にしていた。

上半身をきっちり締めつける強い緊縛感に、紀代は、「イ、イイイ、イー」と前歯を噛み合わせて、耐えている。

今や、腸内の老廃物は、すっかり排出し終

わった紀代である。あれだけの洗腸を行なったのだから、当面は汚物が出てくる恐れはない。いわば、文字通り、無垢で汚れなき女体である。どのように手荒く責めても、この美しさ奇麗さに、変化を与える要素はない。

縄尻は、ツツツと肌の上を走って股間縛りとなって埋没してゆく。

「どうだ、この縄はこたえたか、紀代ッ」

畳の上に転がされた紀代は、下になった後手と股間縄の痛さに、全身を弓のように反らして、「ううう、うう」と呻く。

肩を持って抱き起こし畳の上に坐らせる。動かす時に肌に喰い込む縄は、紀代の全身にどのような影響を与えているのか。

私はもう、第一回、第二回の際のような手心は一切、加えなかった。

それは、あながち、縛り方や緊縛用具、責め方だけではなかった。精神面でも紀代を完全に近いまで飼育したベテランのM女として取り扱っていた。

西条紀代に初めて縄を掛けてから、早くも数十日の日が経っているが、そ

の月日が、紀代の精神と肉体に対して、一体どのような成長を育んだのであろうか。

紀代の、なにかくすことのない、まぶしいような女体を、直接じかに目にしている私にとっては、その変化は明らかに見えた。

肌に艶と潤いが浮かび、しっとりとした丸味さえ、帯びてきているのだ。この色気は、

一体、どこから来たのであろうか。縄によって彼女の肌を刺戟し、春を目ざめさせたからであらうか。それは、しかとはわからない。

だが、当の紀代は、麻縄に依る本格的な菱縄股間縛りの受縄で陶酔し、うっとりとしたまなざしで宙を見すえながら、口からは熱い吐息がハア、ハアと洩れている。

喘ぐたびに、あの小さくて可愛いかった乳房が、縄の間から、息づくように膨らみ、その頂点にある、ちっちゃな乳首が、ぴくぴくぴく……と、ふるえている。

ピンク色の乳首の先が、星形に割れていて如何にも生娘きむすめの清純さを象徴している。

私は余った縄を紀代の首から両膝へと通して締めつけた。菱縄縛りに加えて、この女体二つ折りの縄掛けは、一層の緊縛感を紀代の身体の間々にまで、じわじわと迫った。

ピンと張りきった太股の皮膚が



噛みつきたいような水蜜桃さながらの瑞々しさで、私の目の前に横たわっている。

両膝を引きつけられて、まるまっちいお臀は、一段と丸味を増してふくらみ、黒ずんだ麻縄を、その双丘の谷間に喰い込ませながら美しいアクセントとなっている。

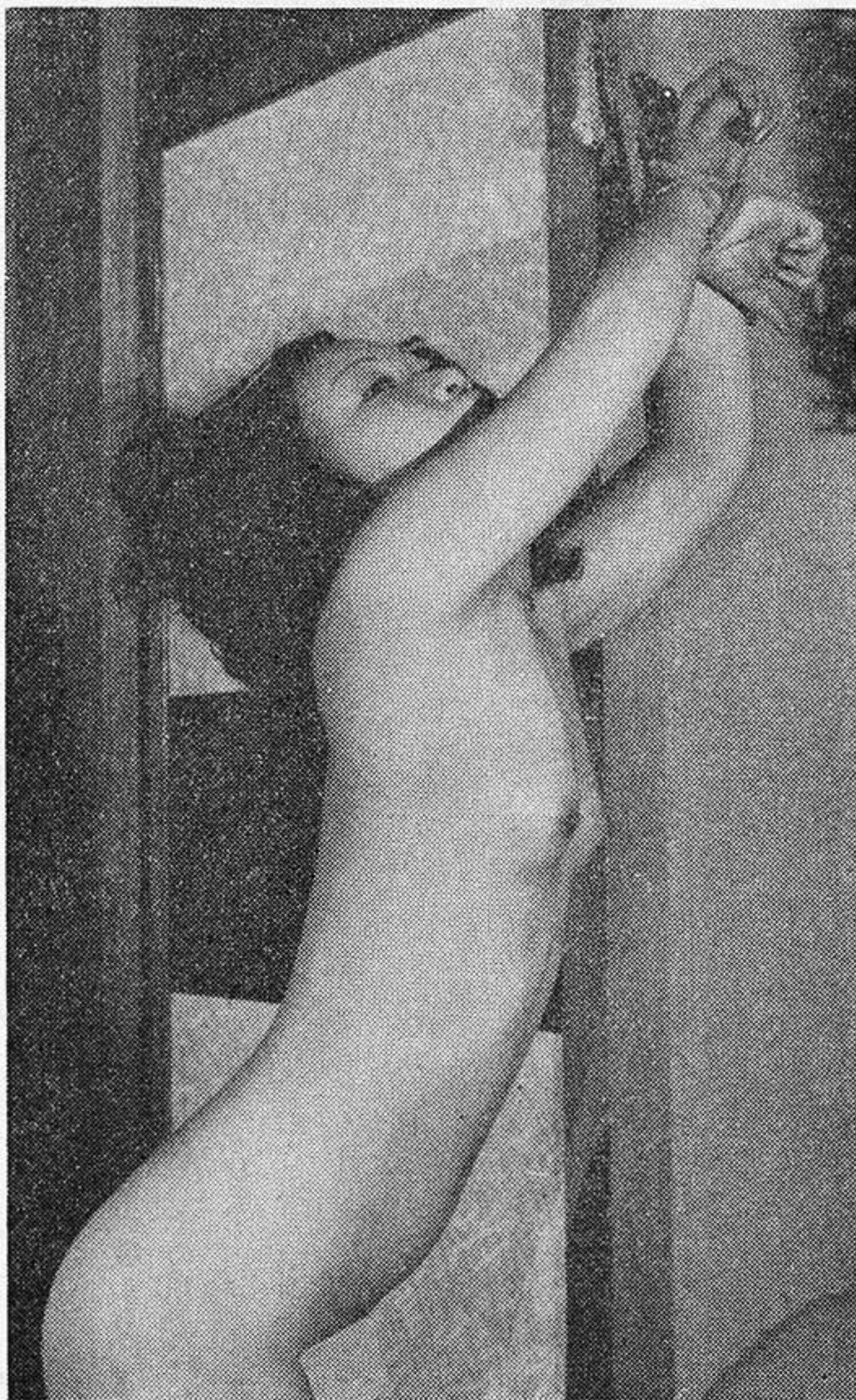
投げだされた足の拇指が、くの字に内側に曲げられ、そうしているうちにも、この若々しい女体が、刻一刻とマゾに育ってゆくように、私の目には見えた。

畳の上に投げだされたように横たわっている紀代の全裸の肢体が、私の凝視する視線にさらされて、明るい写真電球の下で、何一つかくすすすもなく喘いでいた。

私は、そんな紀代の女体を、舐めるように隅々まで眺めながら、ここぞ——と、思う狙い場にくると、すかさずカメラを構えてシャッターを切った。

長い時間のようであったが、心のはやっている私にとっては、もう待つのも、まどろかしい気持だったから、休みなしに縛っては解き、解いては縛っていった。そんなに長い時間、縛ったままで放っておいた気はしない。

ただ、腕時計を見ると、この部屋へ戻ってきてからでも二時間以上も過ぎている。



私の紀代に対して、どうしてもやりたかった菱縄縛りをやれて嬉しかった。それに、後手首のよく上がる紀代の特徴を活かした後手の高手小手縛りを麻縄でやってみたかった。

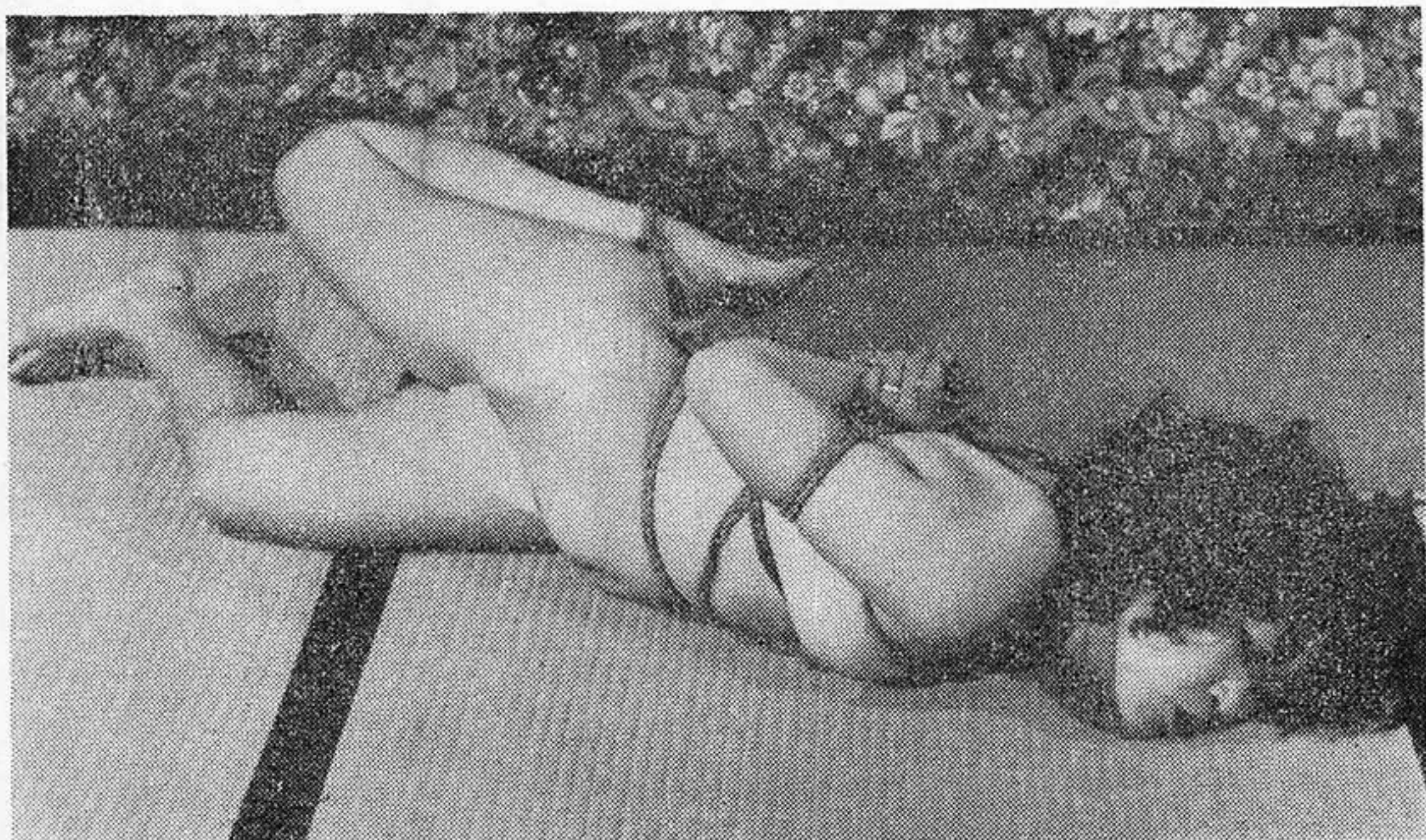
紀代のために持ってきてやった奇譚クラブの三月号を正座した膝の上に置いた。ファインダーから覗くと、色彩があるので中々面白い。両膝を一直線に開いて、両方の足の裏をぴったりと合わせた開股ポーズの前にも、奇

クを置いてみた。更に仰向けに寝かせて両足を八の字に大きく開いたその間にも置いた。

次第次第に、極端なポーズを強制して、その挙句、いつも奇クが、その陰蔽の役目を果たしていった。勿論、カメラのシャッターは雑誌のない時も切られてはいたが……。

「どうだ、紀代。大分、疲れたろう。一つ、ここで休みとするか？」

もっともっと虐めたい。強烈な縛りで紀代



に音を挙げさせてやりたい。と思う反面、若さ溢れる紀代の女体を美しく縛り上げ、どこから見ても見事な緊縛美——美しき縛しめを完成させたいという気持が強かった。しかし一応、紀代に対して、打診してみたのだ。

「いいえ、私だったら、いいんです。休みなしで縛って下さっても——」

「そうか、それだったら、一つムチ打ちをやってみようか。勿論、紀代は初体験だと思うが、痛けりゃ派手に泣いたっていいよ」

「あたいをムチで叩くの？ ひゃーこわい。どうしよう、どうしよう」

「まあ、これも責めの一つだ。さっき紀代が口にくわえて持ってきただろうあのムチだよ。お尻と背中と、太股ぐらいだ、叩くのはね。それに、こんなに太い百奴ローソクも持って来てるから、お望みだったら、ローソク責めもしてあげるヨ」

両手を揃えて縛り、洋服ダンスの上にある柱に括りつけて、ムチを揮ったが、これは思ったような効果は現わさなかった。

時間の無駄だと思ったので、直ちに中止して縄を解く。紀代はホッとした表情の中に、済まなそうな面持ちで私の次の指示を待つ。

私は女体が縄で縛られることに依って醸しだされる雰囲気、特に生々しい肢体の各部分部分が、平常な状態から、どのように異常に変化してゆくかを見るのが好きだった。

その変化のなかでの最も美しい部分のカットを剔抉して、それを四角い画面に切りとってみたいという意欲を常に念頭に置いているのだが、やはり、どうしても、絵にならない女体責めの部分にも私の目は行ってしまふ。

それは、男性としては宿命的なものなのだろうか。今や、私の責めの手によって飼育されつつある紀代だが、その全身全霊を投げ打って、春の花のように華麗に開花しようとしている寸前なのだ。

必然的に、紀代に対する、あくなき羞恥責めを展開することになる。

縄で女体を縛るということ自体、これこそスキンシップの極致であるといえる。

大体、女体というものは、これすべて、性感帯といってもよいだろう。もっとも、個人差によって、場所の強弱のあることは勿論のことであろうが、その未知の、未発見の未開

発の埋もれた性感帯が、縄で緊縛されることにより、縄で圧迫され、摩擦されて、意想不到的結果を惹起しかねない。

詳しいことは当の女性に聞いてみなければならぬが、先ず紀代は多分、喋るまい。

○

「紀代、今度は、少しは手荒な責めになるかも知れないが、覚悟をするんだナ」

そう言葉を掛けたが、紀代は諦めきったように、易々として、白い女体を私に委ねきって、自らの手を背後へまわした。

黒く汚れたロープを手にした私は、例によって紀代の手首を背中中で交叉させて括った。

嘗て、高村浩子という娘を責めた時、彼女は前以て、私に長文の手紙を寄こし、自分の好みの責めの趣向を詳しく書いてきたことがあった。

その日、その密室では、私が主人であり、浩子は女奴隷であった。彼女はよく演技をして、私の台詞にうまく受け答えして、スムーズにSMプレイ（洗腸と縛りとセックスプレイの混合したプレイだった）を遂行した。

今日の西条紀代は、私の誘いの言葉に対して、直ちに反応してくる気配はなかった。だから私としては、独り相撲ですぐに次の動作

に移ってゆく必要があった。

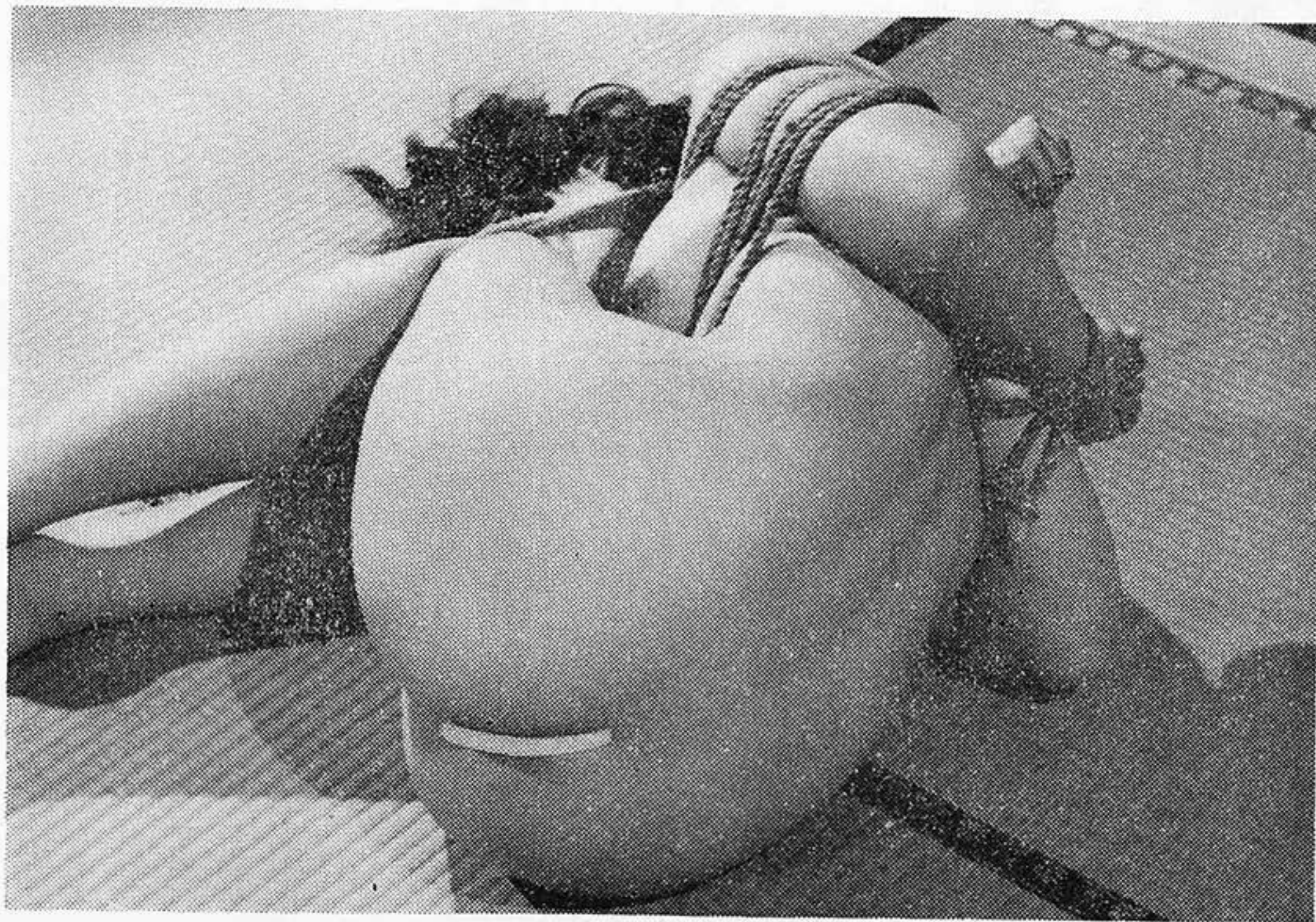
縄尻で胸に十字の交叉をさせて、型通りの高手小手縛りにした。これで紀代の手の自由は完全に奪ったわけだ。

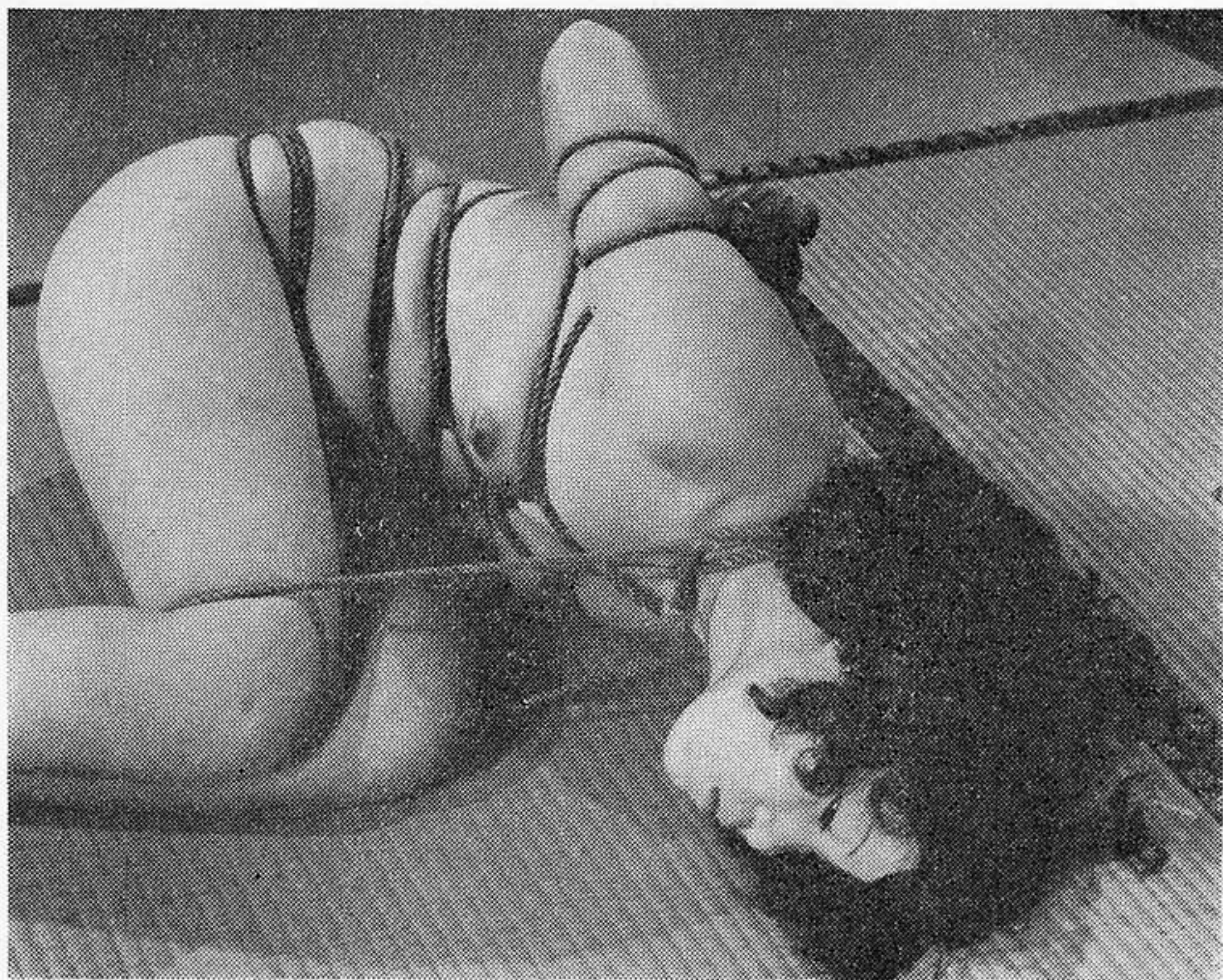
縛り終わって畳の上ところがすと、荷造りされたイキのよい剥玉子が弾んだように横たわっている。自由な脚だけがバタバタと、いそがしそうに跳ねまわり、そのたびに剥玉子の卵白が、ピンピンと揺れる。

生ツバの湧きそうな食欲をそそる双丘へ、デンと腰を下ろして、私は紀代の足の裏へ手をやった。脂足なのか、ねっとりとした粘っこい皮膚の感触が掌に伝ってきた。

「いやいや、擦りたい。やめて……」

足をバタつかせたので、双丘がむくむくと動いたのが私の臀部にも、よくわかった。それが合図のように、私の





触手はバタつく足の裏から離れて、脇腹から胸の脇へ、逆なでするかのようにはいり回って

いった。

「イイイ、イイ、くすぐったーい」

お尻を揺すって両足をばたつかせる。

私の手の動きが止まると、紀代の蠢動と悲鳴の伴奏が止むが、それも束の間、再び、私の触手が執拗に、活動を開始すると派手な悲鳴が洩れてくる。

不思議なもので、悲鳴の妙なる伴奏があればこそ、私の擦り責めの触手も張り合いがあるというものだ。憎い筈が少しもないのに、なにかしら、もう、抓るように指先に力をこめて擦らなければならぬ気持ちになる。

紀代が、擦ったがれば擦ったがるほど、私は、あくどく責めたくなるのだ。

バタバタと激しく動く

両足にも縄を掛けて後手の結び目と連結して逆エビの格好に縛り上げた。これで、両手ばかりか、両足も気ままに動かせなくなったのだ。

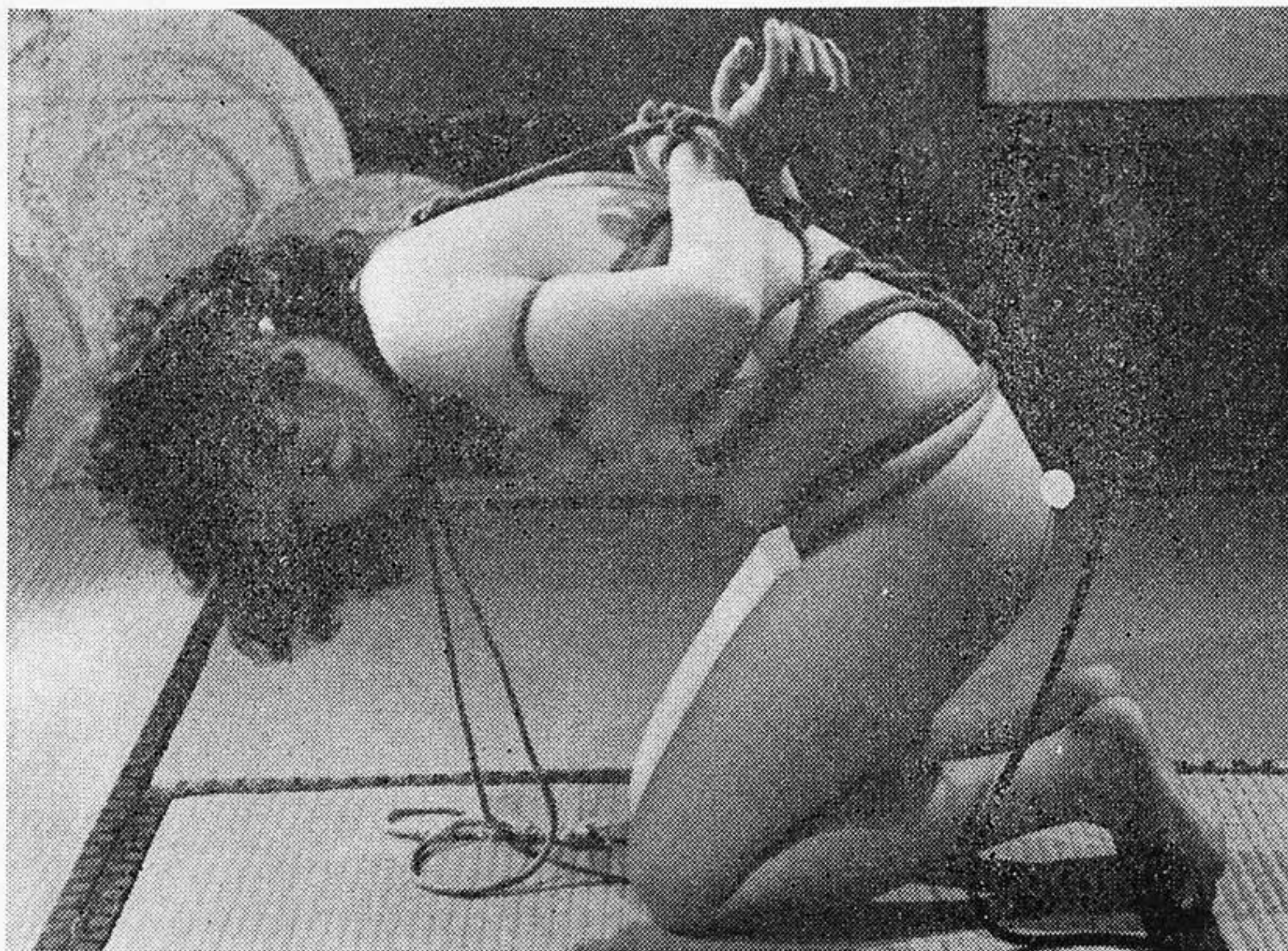
私の触手が、脇腹のあたりを、うろついている間は、まだよかった。それが次第に拡散して、お尻の割れ目から太股のツケ根の方へ這いずりまわってゆくにつれて、縛られていながら足をピンと突っ張り、口からは、ハアハアと荒い息づかいが洩れだした。

よく緊張した皮膚を摘みあげるようにして指先で擦ってゆくと、そこだけが、ぽっと紅薔薇の蕾のように小さく赤らんでゆく。

紀代のもがきよう、暴れようは、益々激しくなってきた。その動きにつれて、私の指先もまた、肩先から顎の下へ下がって、胸から腋の下へと急がしく移行してゆく。

その時、余りにも激しく身体をゆすり、足を突っ張ったので、左足を縛っていた縄が解けた。すると、忽ち自由になった片足が、激しく躍動して、それにつれて、全身もまた、海老がはねたように躍った。

自分自らの激しい運動で、ハアハアと荒い息づかいで喘いでいる紀代を見ていると、私は意味もなく、彼女が憎くなり、きゅっと唇



を噛みしめながら、白い肌を擦り、抓りまくっていった。

躍り、跳ねる姿態のなかに、美しい被虐絵模様が幾度となく現われ、それもまた、一瞬のうちに私の網膜の奥から消えていった。

私はいつの間にか、自分の上下の犬歯で、唇を噛み切っていた。

唇から伝ってくる、かすかな痛み到我に返った私は、ふと指先の動きを止めていた。

ぐったりと、全身の力を抜いている紀代の足首から縄を解いて抱き上げた。

皮膚の上に、ふつふつと噴いた汗の玉、その汗の玉がころろと転げて縄のところで、すいと吸い込まれて消えてゆく。

移心伝心——と、いうことは、このことだろうか。何も、一言も、お互いに喋らないのに、紀代と私と、そのお互いの心の中には万言を費やしたような心の通いがあった。「苦しいから解いて——」とは、紀代は言わなかった。

でも、私が堅く堅く締まった麻縄に手をかけた時、「まだ解かないで——」とも言わなかった。

今、ここで行なわれることは総べて、これ皆、神のお告げの運命と諦めて、その動かすことの出来ない運命の中に自分の身体を、とっぷりと漬けて、自由意志をいささかも働かさず、他人の命令のままに生きてゆく紀代。その定められた運命の枠の中で、自分の幸福を少しでも発見しようとするマゾの世界。

縄こそは、そのマゾの世界に於ける唯一無二の帝王であり支配者である。紀代は今、その支配者の完全な制禦下にあった。

すっかり更けた夜は静かであった。

恐ろしく静かであった。

この密室だけが、世界中から鎖ざされ、孤立した存在のように思えた。

筋書きのないお芝居が、誰一人、観客のいない舞台の上で演じられているようなものだ

った。静かなのは、そのためなのだろう。

隣室で、針の一本が落ちてても、判るような静寂の中で、徒らに時間ばかりが刻々と経っていった。

秒針が一目盛一目盛を確実に刻んでいた。その時だけが、いやに、はっきりと私の耳に残っていたのを覚えている。

私は、紀代のすすり泣きを聞いたように思った。

○

もう、あれから、何度、縄を解いたり縛ったりしたろうか。

縛ったり解いたりすることで、紀代の肌が変になったりしはしまいかと、心配するほどだった。時には、今、縛っている縛り方が、ついさっき、やったばかりの縛り方だったりした。

縄が、紀代に対して、ツケマツ毛をつけさせ、指の爪にはマニキュアをさせた。

急速に飼育され、成長してきた西条紀代。

私は縄を変えて、再び紀代を縛った。

「紀代、お前のことを書いたカメララルポだ。これを読んでごらん。写真も見てごらん」

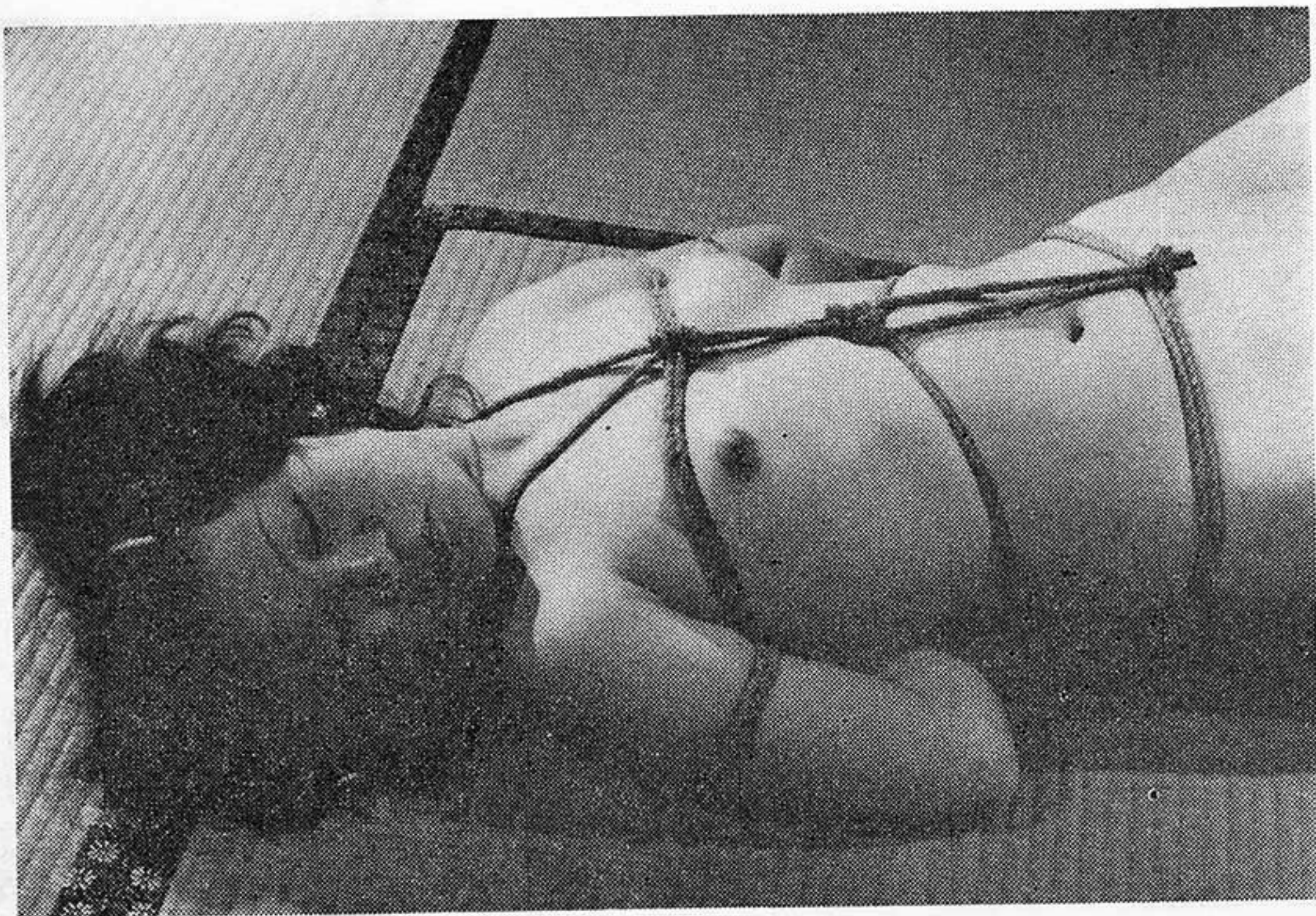
私は、紀代の膝の上に、奇クの三月号の頁を開いて置いた。

「この文章、うまく書いてるわね。そっくり、あの時のままよ。私の思っていたことなんか、少しも喋っていないのに、そのまま書いてあるんだもの、驚いたわ」

「まあ、ルポルタージュとしては、出来るだけ忠実に書いてはいるが、紀代の心の中までは、中々推測は出来にくいよ。おやッ、今、十五日になった。時計を見てたら、丁度十二時で、カレンダーが14から15になった」

「あたい、五月の十五日が誕生日なの。今年の五月が来たら、二十才だわ。お誕生日と言ったって、誰も祝ってくれないけど、今年の五月十五日には、きつと呼んでね。こんなことを言ったら、また雑誌に書く?」

「そりゃ書くかもしれないねでも、言ったり、したりしたことを皆、書くわけじゃない



ものね。必要にして充分なものだけを書くので、 unnecessaryなものは書かないよ」

「これから、どんな責めをするの？」

「紀代も△責め△なんて言葉を口にするようになったんだね。今度帰ったら、一度、感想なんかを書いた手紙をくれないか。そしたら私も返事を書くよ」

「でも、紀代は字も下手だし、それに、手紙なんか書いたことないもん」

「字なんか読めさえすればいいんだ。電話をかけてくる時のように、思った通りのことをそのまま書けばいいんだよ」

「じゃあ、書いてみる」

「紀代は、ムチは余り好きじゃないらしいから、この携帯用のビデとバイブで責めてみようか。これは面白いゾ」

「ムチ打ち、怖いワ。でも、こう、うつ伏せになっているとこだったら、辛抱できると思うのよ。さっきは立ったままだったでしょ。だから身体が安定しなくて……」

「よし、それだったら、畳の上で、うつ伏せになっているところを、やってみるか」

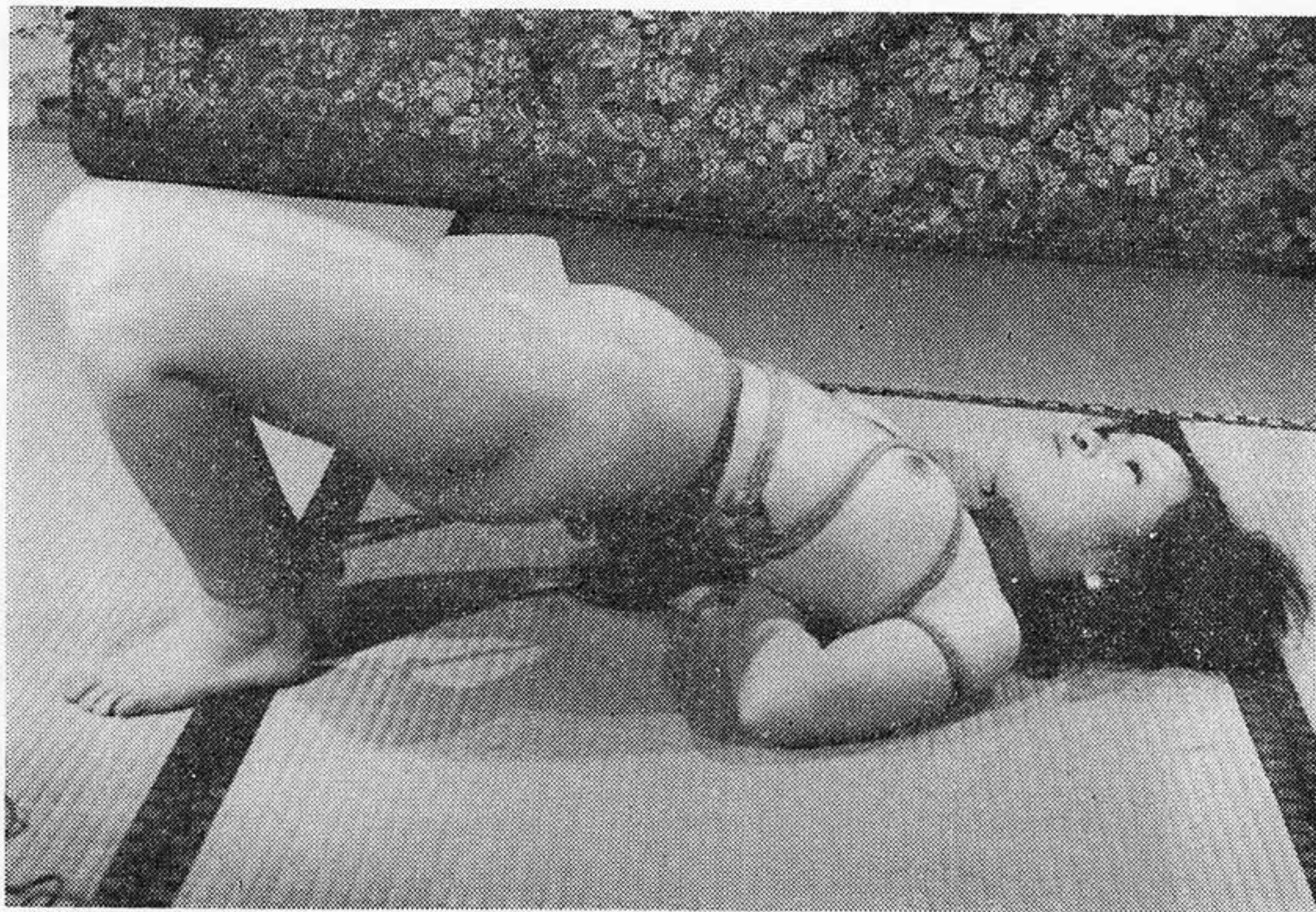
私は紀代を、うつ向けに腹這いにさせておいて、携帯用のビデと小型バイブ、それに革鞭を持ってきた。

叩き易いように寸をつめて先に十数本の革の紐を束ねたムチである。もう既に、幾人ともなく、若い女の肌の脂を吸って、ねっとり底光りする艶を帯びた愛用のムチを手にした私は、ピュッ、ピュッと、軽く数度の素振りをくられた。

紀代は、豊かな臀部を晒して、蛙を潰したように、ぺたりと腹這っている。

畳に、はりついたようになっていて、その緊縛ポーズ自体は、とりたてて良い被写体ということはない。ただ、これから行なわれる私の行動によって、紀代が、どのように呻き、叫び、喚き、そして激しい喘ぎのなかで、責めのムードに、浸ってくれるかである。

演技でないとすれば、一方的に私の思いのままの責めの中に、紀代はただ忠実に、自





分の身体の指示通りにしておればいいのだ。

私はムチを右手に仁王立ちになった。

「さあ、行くゾ」

自分に言いしかすように掛声をかけて、先ず第一打は盛り上がった臀部に下ろした。

ピシッ

快いムチ音を伴って、ピク

ッと双丘がケイレンして、薄い条痕が忽ち浮かんだ。

それからあとは、もう狂ったようにムチを揮って乱打を浴びせた。

太股から脛へ移って足の裏へ。再び臀部へ戻ってから、脇腹、背中、肩口へ——と、ムチは執拗に目標点を変えてゆく。

「ううう、ううう、うう」

ピシッ、ピシッという冴えたムチ音に混じって、紀代の呻き声が洩れてくる。

絶妙のポーズが幾度となく

現われる。

そのたびに、私はムチをカメラに変えてシャッターを切っていた。

太股から脛、そして足の爪先にかけて、凄まじいほど力が入って、ピンと伸ばされ、畳から少し浮き上がってブルブルとふるえている。

と、見ている間に激しく上下運動をくり返して、凄まじいほどのケイレンである。

私はムチの手を止めて、じっと紀代の肉体的変化を観察していた。

ひとしきり、両足交互のケイレンが終わってしまつと、緊張がとけて、足が膝のところまで、ぐっと曲げられて、お尻がそれにつれて心持ち、横へ捻じるように盛り上がった。

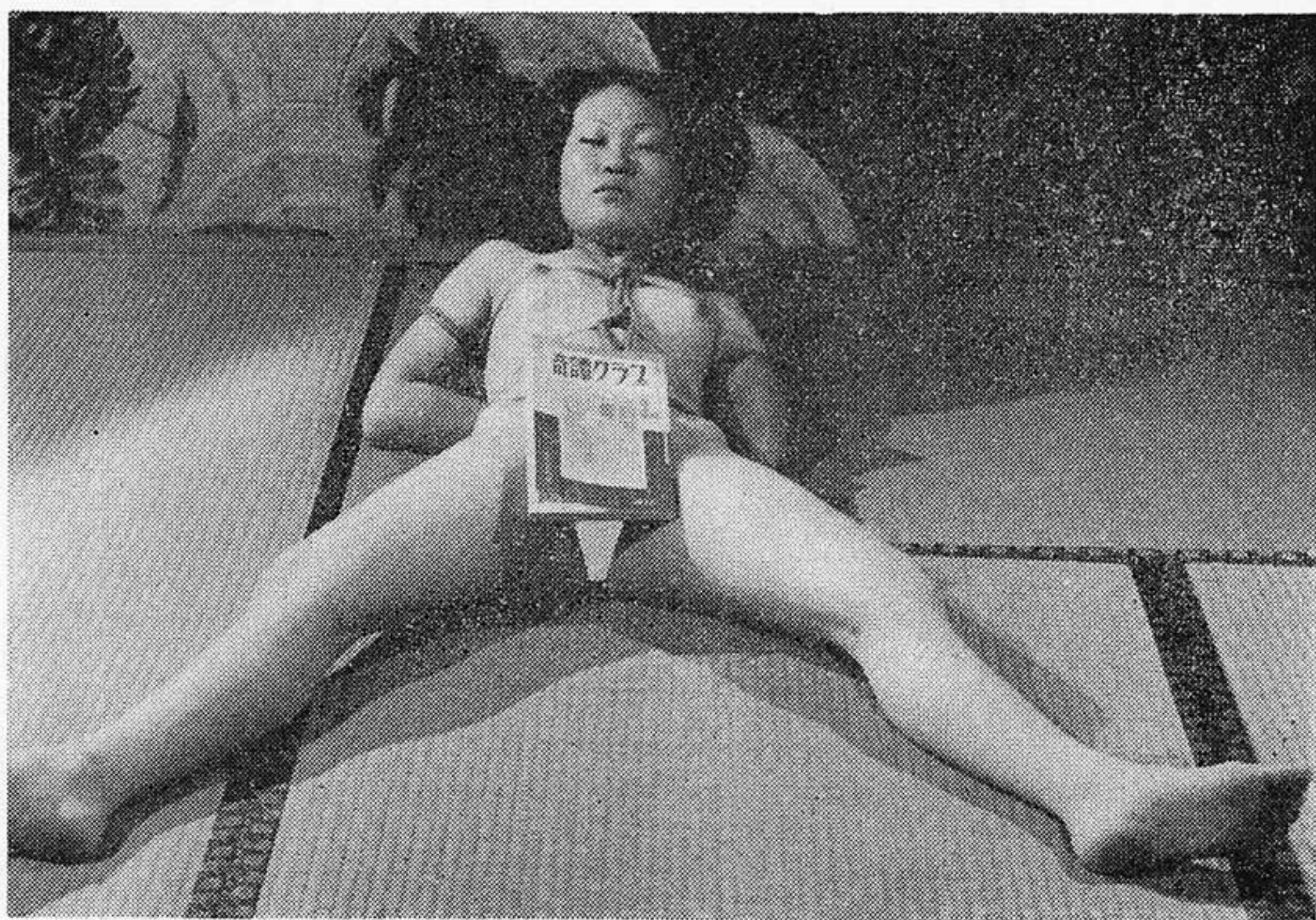
それでも、紀代は、かたくなに、うつ伏せのポーズを変えようとはしなかった。

私は携帯用のビデオを手にして、紀代の双丘の間に挟んだ。

「ひゃー、冷たい。それ、なになの？」

桃源境から、さめた紀代が声を出した。

「これはネ、ビデオといって、本来は洗滌に使うもんなんだが、浣腸にも使えるんだ。一回に注入できる量も比較的、多いし、それに、この嘴管が普通の浣腸器と違って、凄く太くて長いだろう。だから、浣腸プレイには、も



ってこいだと思うんだ。紀代にも、これで浣腸してやろうか」

「でも、さっき、あれだけ出したんだもん、もう出ないわよ」

「出なくてもいいんだよ。プレイなんだからね。そんなにしていると、まるでお尻から白い花が咲いたみたいで奇麗だよ」

太くて長いビデの嘴管は、一度アヌスにくわえ込まれると、簡単にはとれない。

私はバイブを手に、紀代を抱き起こした。

前門の狼、後門の虎。

この前後二匹の猛獣に囲まれていると、そう容易に飼育して、家畜として手馴らすことは出来そうにもない。

狼と虎と、そのいずれが手なづけ易いか、紀代の場合はどちらであろうか。

仰向かされた紀代は、私の

膝の上に背をもたせて、両足をピンと伸ばしている。

白い皮膚の下には、若々しい皮下脂肪が、たっぷり溜まっているような肌である。その脂肪の白さが、表皮を透して、鈍く輝いているように、私には思えた。

操りと抓り、そしてムチが、狼と虎に対して、どのような飼育の効果を与えているか、私は、それを確かめてみたかった。

紀代の太股に手をかけて引き寄せた。

なんと、ハリのある肌であろうか。プリプリとして、私の掌を弾き返そうとするほどの素晴らしい弾力性である。

だが、弾力性のあるのは、紀代の若々しい肌だけであって、すべてを私に委ねきった紀代の身体は、もどけたゼンマイのように、自分の意志では動かない人形になっていた。

私は、やおらバイブを手にしていた。

○

私は、これまでに14本のフィルムを費消していた。

夕食までの「浣腸」を主としたものに6本を使い夕食後から今までに8本を費やした。

十二時を過ぎてしまうと、流石に私も疲れしてきた。今日は一応、これで休むことにしよう。

う——と、思ったとき、私は一つの素晴らしい趣向を考えついた。

「紀代、これから明日の朝まで、海老縛りにしておくれけど、いいかい？ 自分で解きたかったら、そりゃ解いてもいいんだよ。私は紀代の横の蒲団で寝ているから、

紀代は裸のまま縛られて、夜通し、私に眺めていられるって、わけだよ」

「だって、眠るんでしょ？」

「そりゃ眠ってもいいよ。暖房をハイにしておいてあげるし、それに五〇〇Wの写真電球を点け放しにしておくから、裸だって、寒くはないヨ」

「蒲団は着せてくれないの？」

「蒲団を着てしまったら、紀代の美しい身体が見えないだろう。私は紀代が縛られたままで放っておかれたら、どんなになるか、見ていたいな」

「どんなにも、なりはしないワ。

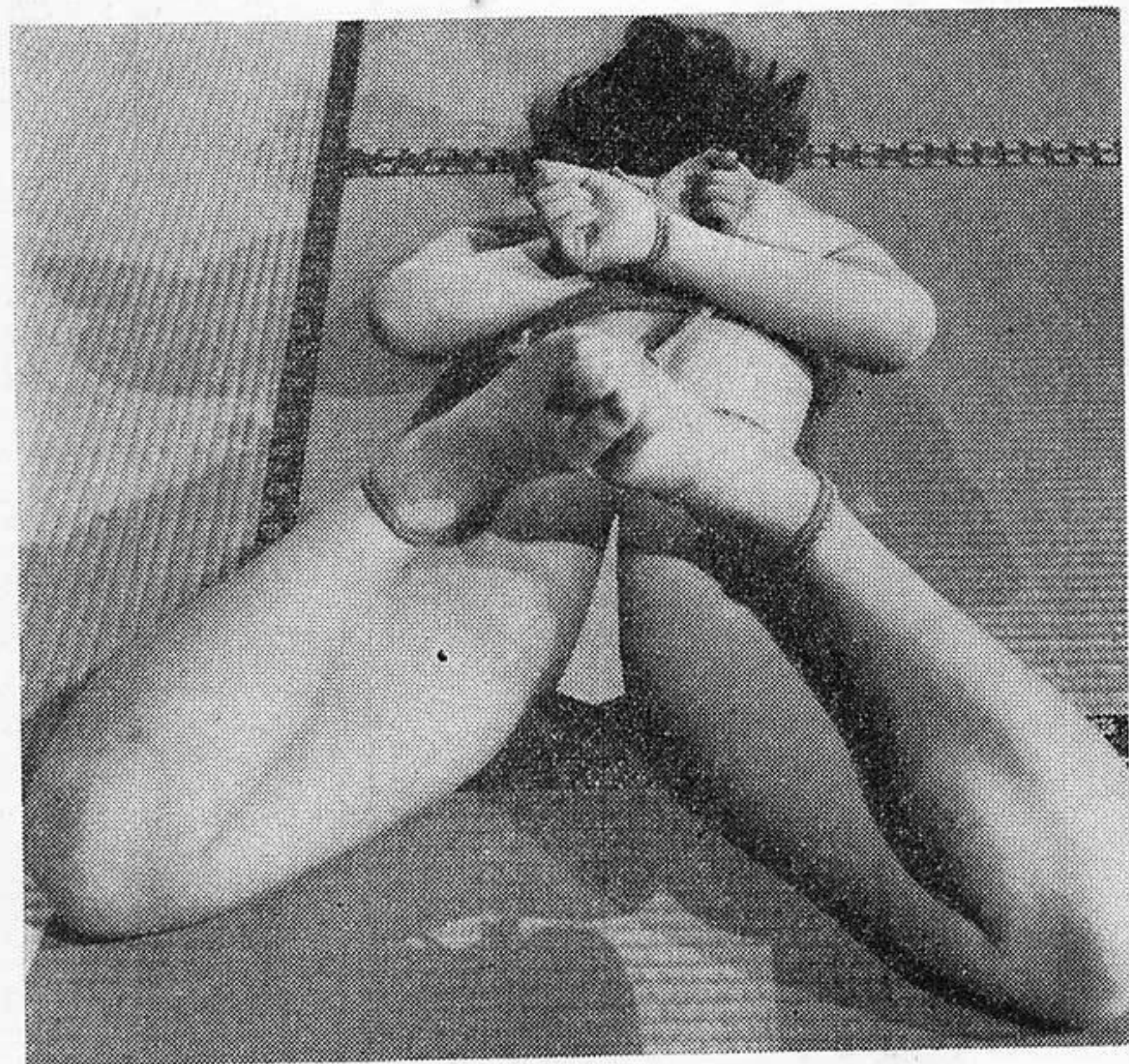
このままだと思うわ。眠くなったら寝てしまっヨ」

「それでいいんだよ。何も起きて

いなくたって構わない」

私は紀代の両膝が、顎につく位、極端に二つ折りに縛っておいて、畳の上に放置した。

背後で掛けるの字に完全に交差した両の手首が、高々と逆手になって、二の腕も何重に



も麻縄を掛けられているので、凄じいような緊縛感が、小柄な紀代の身体全体から、ムンムンと漂ってきている。

首と膝とを合わせて縛られているので、縄と縄との間から飛び出した乳房が、太股で押しつぶされたようになって、ひしゃげているのが、痛々しい。

私は蒲団の上で頬杖をついて、海老縛りの紀代のそんな肢体を、身近に眺めていた。

揃えて前に出していたピンと反りかえった足の指が、急にピクピクと動いたかと思うと紀代の身体が、ころりところがあった。

私の方には、後手とお尻、それに乳房が僅かに見えた。

蒲団の上で寝ている私は王様で、畳の上で縛られているのがっている紀代は女奴隷であった。まん丸いお尻を私の方へ向けたままで一体、何を考えているのだろうか。

もぞもぞと、にじるように動いて、回りながら徐々に、位置を変えていった。

首と膝に掛かっている締め縄が、紀

代の必死の運動を阻止していて、縄を解くどころか、緩みさえしなかった。

私には、西条紀代が、一晩中でも縛られたままで辛抱しようという決心を知るだけでよかった。何も、縛ったままで朝まで放置しておく必要など、さらさらなかった。

「紀代、私はこれから風呂へ入ってくるから眠くなったら眠ってもいいよ」

「この、首のところが縄が痛くって、痛くって、辛抱できないの。明日の朝まで、こうしてるから、首の縄だけ解いて下さらない？」

「それを解いたら、紀代は立って歩いて、どこへでも行くだろう。それよりも、こうしてお尻を突き出してるから、一つ、浣腸をしてやろうかな」

「イヤイヤ、今、そんなんされたら、うち、かなわんわア」

「だったら、そのまま、ゆっくり寝るんだナ。私は風呂へ行ってくるよ」

私が時間をかけて入浴を済ませて戻ってくると、紀代は、さっきの位置から少しずれて蒲団から離れていた。

私は可哀そうになって、手早く紀代の縄を解いていた。

眠くて、眠くて仕方がなかった。



それから、あと、紀代がすぐに寝たのか、入浴を済ませたのか、少しも知らなかった。

翌朝、目が覚めると、既に陽は高く昇っていて、窓硝子が明るかった。

照明器具やカメラは、昨夜のまま、足の踏み場もないくらい乱雑に投げ出されていた。

普通だったら、昨夜以来の長丁場のSMPプレイによって、飽和状態になってプレイ意欲

が極端に減退する筈なのに、余燼が残っているためなのだろうか、起き抜けに、もう一度紀代を縛ってみたくなった。

玄関の入口に近い、控えの間で冷蔵庫に保存してあった寿司をパクつきながら、熱い茶を飲んだ。この部屋が、今回の最後の責場となった。

私がライトの移動をやっていると、紀代は



既に自分が縛られることを覚悟して、両手首をうしろへ回して、私に近づいてきた。

昨年十二月一日に第一回、そして同じく十九日に第二回。そして今回の二月十四日、十五日が西条紀代の責めについては第三回目に当たる。私は紀代の飼育ぶりをレポートしたくて特にこのカメラルポを三回連続で書かせ

て貰った。これで一応、未経験の年若き女性に対する飼育経過は見て頂けたことと思う。

紀代の誕生日である五月十五日は、幸いにして、彼女の公休日であるらしいので、今からSMプレイの予約をしておいた。

それまでに紀代が心身両面に於いて、どれほどSM的に成長してくれるか、大変興味を

持っている。紀代の手紙なんか来たら、差し支えない範囲で皆さんに紹介してみよう。

私がラストに撮った、いろんな趣向の緊縛写真の解説はしないが、この原稿に添えて提供しておくから、御覧頂ければ幸いである。

ほんの四十分ほど前までは、プレイの後片付けをしていたのに今、新大阪駅の正面入口の前で、別れの挨拶を交していた。

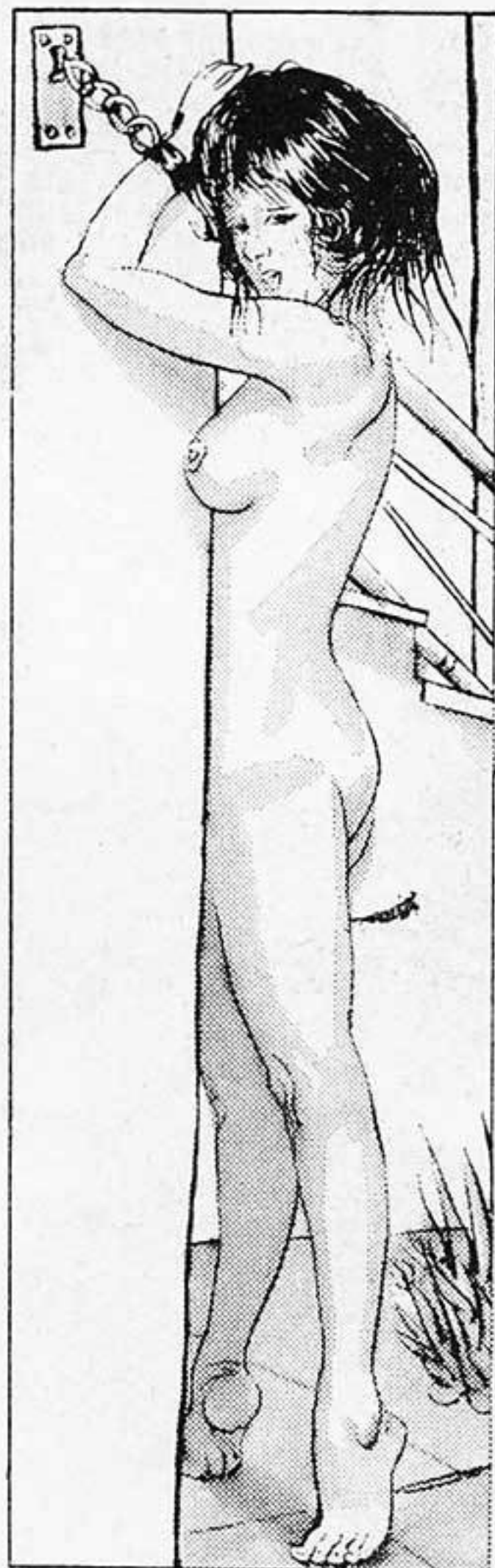
「じゃあ、次は五月の十五日だね。まあ、二三日前に、時間なんか電話して下さい。それから、書けたら、手紙も忘れないでね」

「はい、書けたら書きます。でも、期待しないで下さいね。どうも、いろいろと有難うございました。さようなら」

挙げた紀代の手首に、ついさっきまで縛っていた縄のあとが、うっすらと残っているのを知っているのは、私だけだろう。

改札口で見送る私の目に、紀代の姿が見えかくれして、やがて一度、顧ってから軽く会釈して人混みの中に消えていった。

流石に昨夜の寝不足が臉を重くしていた。下から吹きあげてくる寒風を真向うに受けながら、私は駐車場へ通ずる正面階段を足早に降りていた。



カット・小川茂正

美容手伝い致します

うるわしき女性に

野村多津男

貴女は、そんなに立派な体格を、お持ちのうえに、肉づきも、すばらしく、とても健康そうなのに、ニキビや吹き出もので悩んでおられるそうですね。

便秘がちなのではありませんか。

やはり、そうなのですね。

貴女は美しい。でも、もっと美しくなりたいたと、思いでしよう。その悩みを除く適切な処置はなさいましたか。

友達にすすめられて、浣腸を試みたのですか。

でも、一人では無理でしょう。薬が十分、

効果をはたすまで、がまんするには、柱やベットの枠に縛りつけられていなければなりませんからね。

それに、あの排便のときの、力のない、ユルユルした感じがお嫌いなのですね。

そう、もっとしっかりした固形が中からアヌスを押し分けて、ムリムリと現われる、あの充実感が、好きなのですね。

そのお気持は、よく分かります。お腹をこわして下痢をしたときの、あのいやな感覚は誰でも、記憶のあることでしょう。

でも、何日も便秘をしていると、いちばん先端は、水分がなくなって固くなってしまっていますから、スラスラと自然に、というわけにはゆきませんよ。

それに、いよいよ中からの圧力に耐え切れなくなったときには、その固さがアヌスを傷つけてしまうのです。

貴女のアヌスは美しい。将来のアナル……のためにも、そっとしておきたいものです。そのために、とても良い方法が、一つだけあります。

いままでに、私は数人の女性に試みてきました。

そのみんなが、はじめは、いやいやながら

も、しかたなく始めたのですが、回を重ねるにつれて、すばらしく甘美なものと感じるようになったのでした。

貴女にも、後になって、きっと感謝されることと信じています。

浣腸をこらえる苦痛も、笞で打たれる痛さもあります。

ただ、少し恥かしいだけなのです。恥かしいことさえ、がまんすれば、もっと肌は美しくなります。

太りすぎていて、やせたいと思えば、無理なくやせることも、できます。

いいですね。

詳しく説明しましょう。

貴女と私は、他人を気にせずに済む自由な場所に行きます。

まず、お互いに、にっこりと微笑を、かわすでしょう。

そして、私は畳に、あぐらをかいて安定した姿勢になります。

「さあ、パンティをとって、こちらへ、いらっしゃい」

私に促されて、貴女は恥かしそうに背中をみせて、中腰になり、くるとパンティを抜き取ります。

馴れてくれば、そのパンティは私に渡してもらうのですが、初めのうちは自由にしてください。

貴女は、いま脱いだパンティを一番、汚れやすい部分を中心に、まるめ、ハンドバッグの横に置きます。

そして、私のそばに歩み寄り、じっと立っています。

「さあ、おしりを上にして、私の膝の上に横になってごらん」

そういっても、貴女は顔を真っ赤にして、立ったままです。

貴女を私の膝の上に、うつ伏せに横たえさせるには、やはり、両手をとって引き倒すようにせねばなりません。そうされることを、貴女は内心で望んでいるのです。

やっこのことで、貴女は両手で顔を覆ったまま、横になりました。うつ伏せですが、体は緊張して固くなっています。

「さあ、体の力を抜いて、柔らかく……」

と、いいながら、私は貴女のスカートを、ぱっと、めくり上げます。

貴女の口からは、「あっ！」と、覚悟をし期待じみた気持でいるものの、思わず声が出てしまいます。

私は、そんなことにかまわず、「汚れると、いけないから、脱いでしましましょうね」

と、無雑作にチャックをはずして、脱がせてしまい、シュミーズも、ずっと上の方までまくり上げます。

何一つ、おおう物のない真っ白な、おしりが、目の前に現われます。

「力を抜いて……」

と、いいながら足を、やや広げさせ、おしりを左右に開きます。そこにあるのは、内容物を十分に持ったアヌス！

私も、胸の高鳴りを覚えます。

続いて、もう一方の部分。

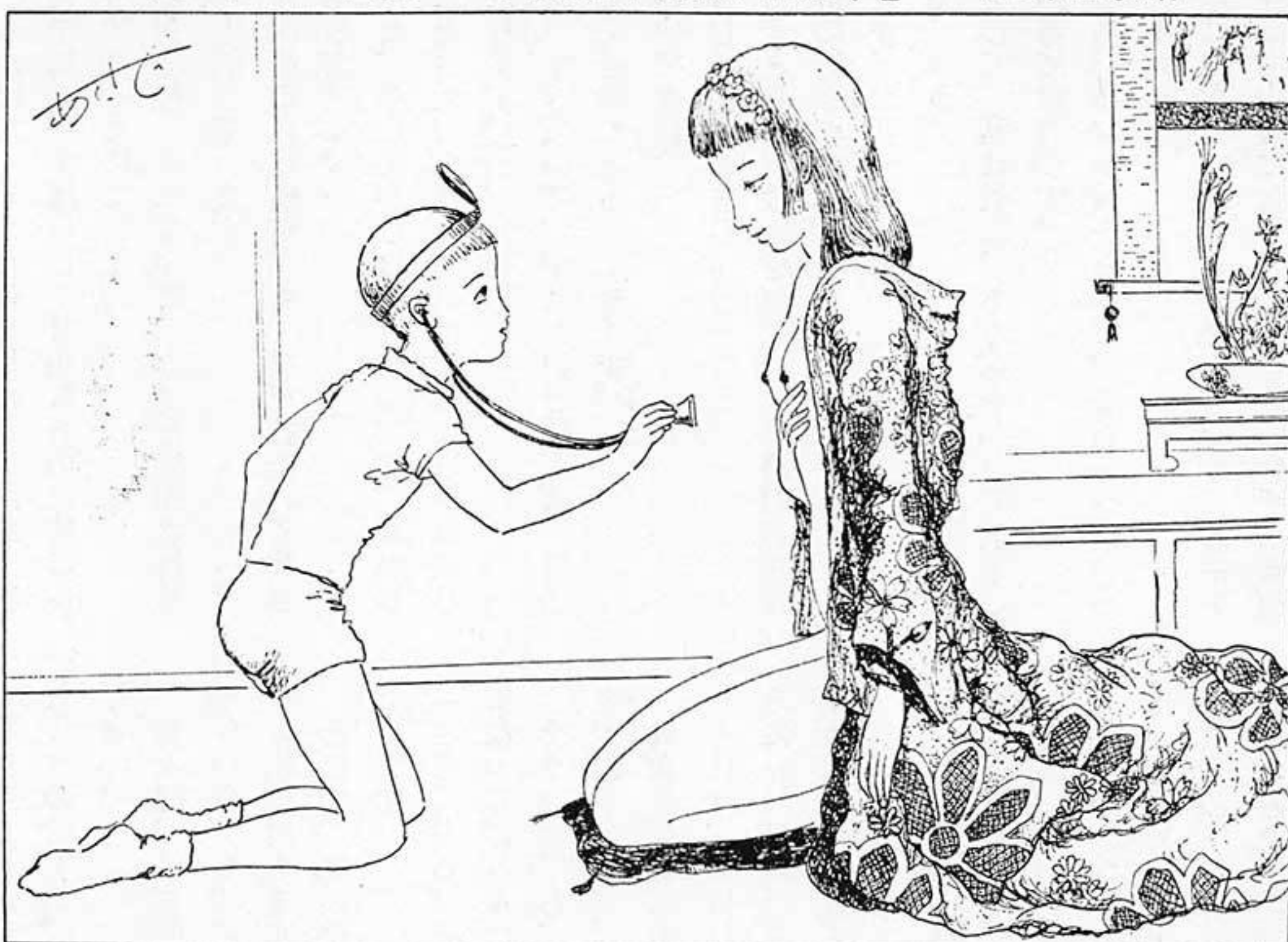
それぞれの芳香に、処置する者としての責任と幸せを感じる一瞬です。

この時、「お風呂に入って、きれいに洗ってからにして！」と、歎願するように、い人も多いのですが、そんな事は、すこしも気にしないでよいのです。自然のままの状態でよいのです。

お互いに、なにも気にしないことを誓い合いましょう。

私は、二つの部分に、ぴったりと唇を重ねたい衝動を覚えるに違いないのですが、横道

-----僕のイメージ画集-----『欲求不満症では?』-----室井亜砂路-----



に、それないう、それは、がまんします。ただ、前半の部分に
おりものが認められる場合には、ティッシュペーパーで、ていねいに清拭してあげましょう。

さて、いよいよ貴女を、より美しくするための処置を始めます。

最初に、貴女のアヌスの許容状態を私の人差し指で調べねばなりません。

しかし、結果はだいたい分かっています。

貴女にかぎらず、一般に、みんな堅固なのが当然です。

そこで、用意してきたオリーブ油を脱脂綿に、しませて湿らせま

す。「いきむように力を入

れて!」

と命じると、貴女はもう、なかば夢の状態
でアヌスに力を入れます。すると、アヌスが
少し突き出てきますので、内部にもオリーブ
油が、つけ易くなり、脱脂綿が中へかくれま
す。そうして、脱脂綿を抜きとったあと、も
う一度、私の指が活躍します。

こんどは、自由に出入り出来ます。奥のほ
うに、確かに手応えが感じられます。

「相当、固いな。何日ぐらいかな……ずいぶ
ん沢山の収穫が、あるだろうな……」

いろいろな想いが、私の頭の中を駆けめぐ
ることになります。

貴女の体の準備は、できました。

処置始めるに当たって、まず私の右手に
は、ジュース用の柄の長いスプーンが、にぎ
られます。

左手は、貴女のおしりをやわらかく、もみ
ほぐしながら、「もっと、おしりを高く上に
あげて……」と命じます。

緊張のためでしょう、自然と息づかいの荒
くなっている貴女は、言われるままに、おし
りを、つき上げます。

ちょうど、よい高さになったとき、

「ハイよろしい。そのまま、体の力を抜い

て。……おしりだけを外へつき出すようなつもりで、力を入れて……」

といいながら、第一回の処置をします。

耳掃除をするような要領ですが、第一回はあまり欲ばらず、先端二センチほどを、かき取ります。いちばん固い所です。もちろん、いくら優しくしても少しは抵抗がありますが無事に現われるのが普通です。

と同時に特有の異臭が漂い、貴女は、ますます真っ赤になって、「恥かしいわ……」と小声で、いいます。

でも異臭は、お互いに気にしないことを思い起こしてください。

採集した実質は、すぐに私の横に置いてあるステンレスのボウルに入られます。

そして第二回目の処置です。

貴女は、じっと目を閉じています。あまりの恥かしさに、いっそ裸のままでも、外へ飛び出して逃げて行きたい気持です。

でも、そんな貴女の気持には、おかまいなしに、私の右手のスプーンは貴女の可愛いアヌスに向かって進みます。

あなたの体の中で半回転して引き揚げられます。やはり固い物が、いっぱい。

私は無表情でボウルにうつし、左手で再び

オリーブ油を塗り込みます。

またしても、単一作業の繰り返し……。

五、六回もスプーンが活躍する頃、貴女はようやく馴れ、体も緊張が、ほぐれてくるでしょう。

真っ赤だった顔も、平静に戻ります。

それを待ちかまえていたように、私は貴女の内容物の、いっぱい入ったボウルを貴女の目の前に置きかえて、「よく見てごらん」といいながら、スプーンを逆さに持ちかえ、柄の先で、内容を、もてあそびます。

「ほら、これが貴女を悩ませていたのです。こんなに固くちゃ、まるで粘土で栓をしているようなものですよ」

「毎日、何を食べているのか、よく検討してみましよう。……もっと良く噛まなくちゃだめですよ。ご覧なさい、エビが形のままですね。ピーナツも、あんまり、こなれていませぬね。……このあたりは、野菜が多いですね……全体として匂いは健康で良いですね」

こうして、続けるうちに、貴女は再び元の真っ赤な顔になり、「やめて下さい！」と叫ぶでしょう。

すばやく、私はスプーンを、また活躍させます。そして、かき出すのです。十回もすれば、直腸部分は空っぽになってしまいます。

そこから先は大腸です。できるだけ、大腸にも手を伸ばし、取れるところまで取りつくします。

そうして、直腸内は空っぽになります。

しかしそれで終わったわけではありません。こんどは、直腸壁に、こびりついたのを、かき取らねばならないのです。何回も何回も直腸壁から、残滓をはずします。

貴女は、そのたびに、「ウウッ！」と声にならない声を出します。

でも、これが苦しいからでないことは、私の経験上から断言できます。

よく見れば、あなたの体に、しっとりとした変化が現われます。

私は、ときどき手を休めては、じっと眺めます。貴女は恥かしさを一層、つのらせてはその変化を、ますます露わにするのです。

ついに、私の口が処置に加わるでしょう。

しかも、できるだけ、ていねいに。

この時のためにも、貴女は事前に風呂に入ったり、ぬれタオルで拭いたりしては、いけないのです。おわかりですね。自然の香りは何よりも大切なのです。

貴女の変化につれて、私も変化しますが、

貴女から要請のない限り、目的の美容処置以外のことは慎みましょう。

さて貴女の体内は、すっかりきれいになりましたね。そこで、仕上げとして、洗滌します。私は、道具入れのカバンからエネマシリンジを取り出します。

ここで初めて浣腸です。しかし、洗うためのものですから、ちょうどウガイをするようなものです。

やはり用意してきた魔法びんから、湯を取り出します。一度、煮沸させて殺菌してありますから、安心して受け入れてください。

大型のビーカーも取り出して、並べます。

そして、エネマシリンジを使って二〇〇ccを注入します。普通の浣腸プレイなら、貴女の額から油汗が流れだし、やがては真っ青な顔になって、身もだえするまで許さず、時には「アッ!」という声と共に、耐え切れなくなつて、どつと畳の上に、そそうをしてしまふといった場面も展開するのですが、ここでは、もっと上品です。貴女が「もう、がまんできないわ!」と、いえば、「それじゃ、このビーカーを、おしりにあてて、そのまま、しゃがんで、一息で出してごらん」といって私は注意深く、じっと見つめます。

貴女にとっては、恥かしいことでしょう。

でも、たいていの女性は、「この恥かしさがないと興奮しないの」と、いいます。貴女も、たぶん同じ経験をされることでしょう。

ビーカーに排泄された微温湯は、体内に入る前と違い、かなり着色されています。

私は、貴女の恥かしがるのもかまわず、目の前にかざして、よく見るでしょう。そしてそのビーカーを横に置くと、二本目のエネマ洗滌です。

エネマは全部で三本、行ないます。それぞれ、アヌスのうがいの跡を、三箇のビーカーが示します。

順番に着色の違いを、貴女に説明します。

ここで、貴女があまり恥かしがると、私も興奮のあまり、貴女の目の前で、ビーカーの液を飲んでしまうかも知れません。

もし、そうなつたとしても貴女はそれに関して一切、気を遣う必要はありません。すべて私の自由意志で行なつた事であり、貴女はただ恥かしがってさえいればよいのです。

もちろん、何も手伝うことも要りません。病院へ行つて、手伝う患者がいないのと同様です。これは貴女が、より健康で、より美しくなるための処置なのですから、病院へ行く

のと同じような効果があります。ただ違う点は、病院での治療より、もっと楽しいということ。また、この治療費は無料です。たとえ、ホテル代が、かかったとしても、貴女に負担していただくことはありません。

貴女に要求されることは、ただ恥かしがること——しかも、恥かしさのあまりに拒んだりせず、脱ぐものは脱ぎ、開く所は開き、つき出す所は、つき出し、出すものは出すというように、私の要求通りの動作をとっていただければよいのです。

そして、だんだんと楽しい気分になつてください。よく、おわかりいただけましたね。

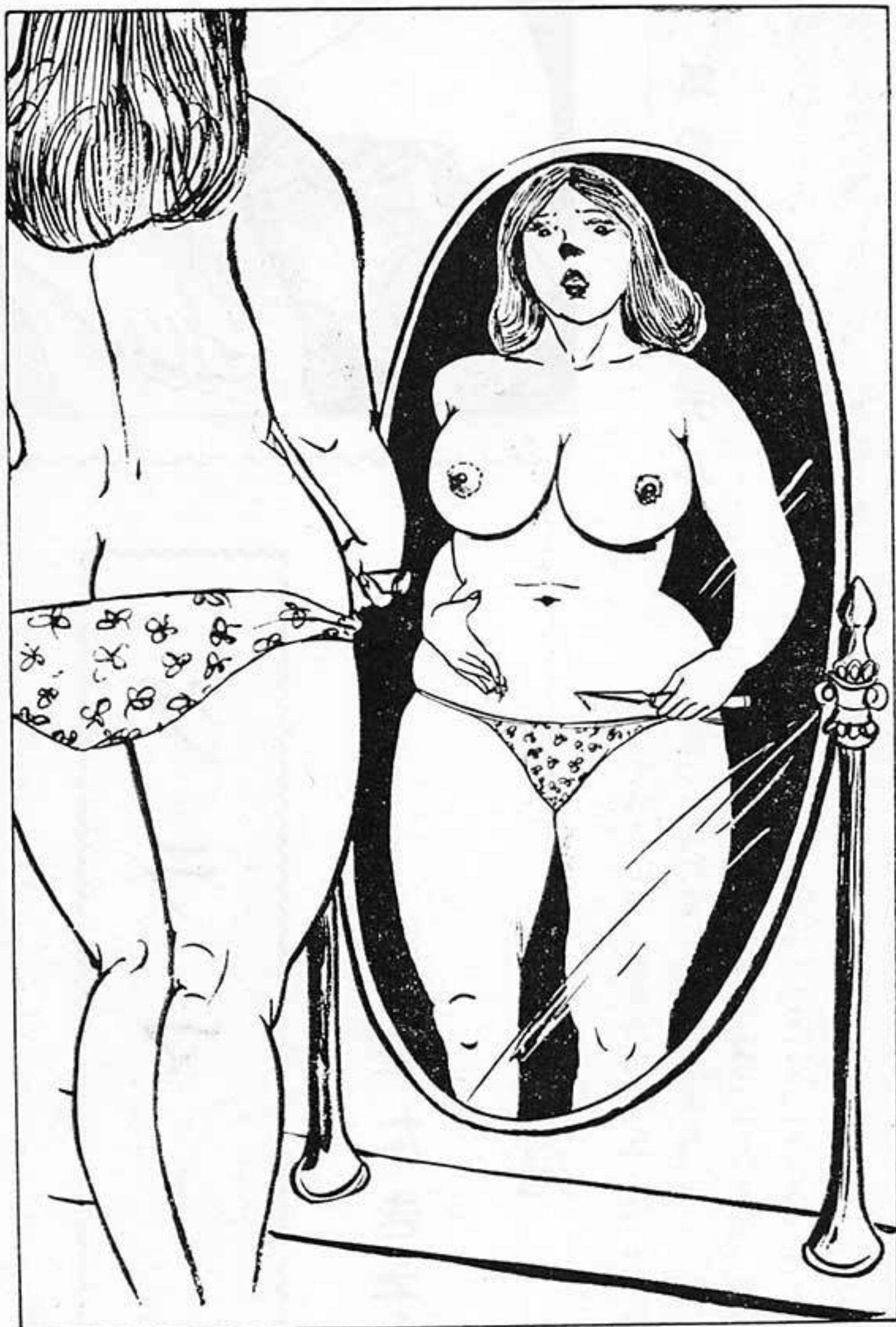
さて、貴女の直腸はウガイも済ませましたので、いよいよ終わりに近づきました。アヌスと、その周辺、できれば貴女の下半身の前半部分も、きれいにしましょう。べつに、大して汚れてはいないのですが、ここまで体験した貴女は、私の舌が働いても、さほど驚かないでしょう。

まず、アヌスをきれいにし、だんだんに上の方へと、すすみます。アヌスの時は、先程と同じく俯伏せで、つき出した恰好ですが、そこが終わると反対に仰向けになつてもらいます。もし、お小用の必要があれば、大きな

ピーカーがありますから、それを当てて済ませてください。私に「直接」という方法もあるのですが、貴女には、まだ無理かも知れません。

そして周りは、すっかり、きれいになり、あとは、中心を清潔にします。この頃、「も

っと……」と悶える女性もいますが、貴女はどうでしょうか。「どう？」と、たずねると「そんなこと、知らないわ！」と、いいながらも「もっと、おねがい！」というのが、ふつうです。中には、自分から「ねえ、もっと」といってしがみついてくる人もいます。



……イメージギャラリー……『痛覚を求めて』……仲乃ハルミ……

貴女が処女であれば、処女のまま、最高の経験をしてください。処女は大切に守るべきです。貴女は、湧き出でる泉のようになり、しびれながら、天国へと向かうでしょう。

貴女は我に返るのに数分間は、かかるでしょう。そして、いままでにない甘美な充実感をもって、着ていた物を元通り身につけるのです。

これを一週間つづけければ、目に見えて効果が現われます。

もし、急いで済せたいのなら、一日、二回この処置を受け直腸内を常に空っぽにしておきますと、好きな物を好きなだけ食べながらすらっとした体になることができます。きっと、お友達から不思議に思われるでしょう。「食事を制限せずに、どうして、そんなにスタイルを良くできるの？」

「あなた、この頃、ずいぶん肌が、きれいになったわね。秘訣を教えてくださいませんか？」などと、いわれるでしょう。

すべては、この処置にあるのです。

さあ、何も躊躇せず、いますぐ、あなたも私の処置を受けてください。

私は、あなたからのお申し出を、お待ちしております。

カット・岡 たちし



気の強いモデル

植座たき子は、絵の勉強をしている。

美術学校へ通いながら、いろいろなアルバイトをやって自活している二十四才の女性で、身長一米七十二センチ、体重六十五キロと、ちょっと目立つグラマーである。

まあ最近では若い者ほど大きいのが出てきたから、若い男から見れば大したことはないかもしれないが、中年や老人から見れば、見上げるような大女で、しかも均齊のとれた美人

M 派交友録

(38)

グラマーな猛女

植座たき子の巻 (1)

鬼 山 絢 策

ときているので、電車の中などでは、よく男に見つめられていることがある。

たき子も、その視線は感じているが、始終のことなので馴れっこになっている。たき子の方で見返してやると、男達は急に視線を伏せてしまう。中年の男ほど、そうした卑屈な態度をとるのだ。

だから、たき子は中年の男や老人が、大嫌いだ。その嫌いな中老年の男と関係を結ぶようになるのは夢にも思わなかったが、皮肉にも、のちに老人の紳士のパトロンを持つ身となってしまったのである。

彼女は、いろんなアルバイトをやった。

喫茶店のウエイトレスもやったし、バーのホステスや、レストランのバーナード、時には自分の学校のモデルにもなった。

その中で、バーのホステスは、すぐやめてしまった。

マネージャーが、お客の機嫌のとり方を、いろいろこーちする。だが、たき子には、どうもそれが、ピッタリしない。マネージャーは頭をかかえた。

「君は、どうも女っぽくないな。可愛らしさがない」

美人でグラマーで愛想もよいのだが、いかにも大きいことがバーのホステスには不向きなのだろう。

モデルは楽しくもあり、苦しくもある想い出が残った。

同じポーズを何時間も続けているということは苦しいことであり、かなり辛抱を必要とした。だが、自分のヌードを見つめる画学生の目は、ヴィーナスのような美しさに打たれたように彼女の肉体のあらゆる美を求めて描き出そうとする。それは同じ画を勉強する彼女にとっては楽しいことだった。

服をつけている時でさえ、彼女の前に圧倒される男性は多いのに、ヌードとなると一層その圧倒的なグラマーさは、とても日本の女性とは思えず、アメリカあたりの女性を思わせる、みごとさだった。

大きいとは言え、デブデブに肥っているわけではなく、足も長いし、むしろモデルとしては最高のプロポーションと言えるかもしれない。それだけに彼女自身、自分の身体には大きな自信を持っていた。

時には彼女のヌードを写生する男の中に、変な目で見える男もあった。

それは獣的な情欲にギラギラひかる、まな

ざしだった。たき子は、そういう視線を受けると、敏感に察知して、

「なに、あなた、画を描いてるの？ 描いてないの。ふまじめよ」と、きびしく注意する。

画学生のモデルになることは滅多にないが会社の絵画部などに招かれてモデルになりに行くことがある。この方がギャラもいいし、時間も短いし、楽なポーズですませられるので、その点は、いいのだが、こういうグループの中には、いやらしい目で見える男が多い。絵を勉強するのは、ついたりで、女の裸を見たいために絵画部へ入ったというような男達も居るからだ。

彼女が叱りつけると、大抵の男は赤くなって「どうも、すみません」などと謝るのが多い。殊に中年の男は、

「イヤ、あまり、あなたが綺麗だもんだからつい見とれてしまって、すみませんでした」と笑って明るく済ませられるのだが、若い男の中には、

「ぼくが何をしたというんだ。君を見つめなければ、絵が描けないじゃないか」

「絵を描くために見る目と違うわよ、あなたの目つきは」

「ばかなことを言うなよ。君が勝手に変な方に、とってるんだろう」

「冗談言っちゃ、いけないわ。あたしは何十人も何百人もの男の人に見られてるんですからね。絵を描くための目か、変な欲望の目で見るのかぐらい、ちゃんと分かるわよ」

そんな、やりとりがあって結局、男の方を謝らせてしまうのだが、中には徹底的に、つつ張ってくる男も居る。そういう時はモデル台から下りて行って、男の画帖を、ひったくり、

「何よ、これ！ あんた全然、描いてないじゃないの。エロ写真のモデルなんかとは違うんですからね。絵の神聖さを冒瀆するような人は出て行って下さい。でなければ、あたしこれでやめて、帰りますよ」

「生意気なことを言うな。たかが、モデルのくせに」

「あたしを侮辱するの。許せないわ」

「何が何だ」

男が右手でドンと、たき子を小突いた。だが、ピクともしない。

「何が何よ」

たき子がドンと突き返すと、男は一米も、すっとなで転んだ。

「女のくせに、やったなっ」

起き上がったところを「まあまあ」と他の連中に、なだめられ、

「このひとの言う通り、喧嘩なんかされたんじゃ、我々の迷惑だから、やめたまえ」

「生意気だよモデル料をとっておきながら」

「モデル代なんか、返すわよっ」

たき子は男の頭へ手を当てて突きとばすと二人がかりで抑えていた男達までよろけて、男は再び、尻餅をついた。その前に足を開いて仁王立ちに立ちはだかった、たき子は、

「あんたの見たいののは此処じゃないのッ！」

男の顔を両手に、はさんで動かないようにして、その目の前に逞しく生い繁ったものを突きつけた。

突然、途方もないアクションに男は呆氣にとられ、同時に突然に降って湧いたような女体に眼前をふさがれて、さすがに言葉も出なかった。

「サア見たいなら、よく拝ませてあげるからトツクリ、見なさい」

たき子は太股を男の額のあたりにベッタリとおしつけ、大きく尻を上下に振って、こすりつけた。

「サア、よく見たでしょ。お前のような奴は

とつとと出て行けっ。この、ど助平っ」

たき子は、やってしまってから、まわりの人達に、ちょっと恥かしかったが、もうこんな会社のクラブなんか二度と来るもんかと思っていたから、思いきったことができたのだった。

ところが、これが却って彼女の人気を高めて評判となり、あの無礼な男は退部させたからは是非、来てくれと幹事の社員に平身低頭して頼まれ、ギャラも二倍につり上げられたので、また、行くようになった。

バニーガール

いろんなアルバイトをやったが、アルバイトをしている頃は、彼女のやりたいと思うことは何一つ、叶えられなかった。それは金と時間がなかったからである。

たき子が金と時間に恵まれるようになったのは、橋本宇吉のお蔭である。

だが、その橋本と知り合う縁も、また奇妙な、つながりから生ずることになる。

植座たき子がモデルをやめて赤坂六本木のレストラン「コルベール」のバニーガールになったのは二十三才の春ごろだった。

彼女のバニーガールは拔群だった。

赤いコスチュームから自慢の長い足をスラリと見せ、髪には金色のリボンを兎の耳のように入れて結び、黄色いバンドを首へかけて煙草やチョコレート、造花などを入れた箱を吊るし、ユラリ、ユラリとテーブルの間を縫って歩く。まことに簡単な仕事で、馬鹿でもチョンでもできることである。それが、たき子にとっては、もの足りない仕事だったが、やり出して一週間も立たぬ間に、その退屈さは、なくなって、結構、楽しいことや、いやなことが織りまぜて、おこるようになった。

コルベールには、バニーガールが四人、居る。だが、一番あとから入った、たき子が店に現われると人気を一ぺんに、さらってしまった。彼女と一言、話をするために煙草や、お菓子をかう客が増えて、彼女の箱の中の商品は、いつも一晩で売り切れた。

元来、バニーガールは、おへその前にブラ下げた、籠の中の商品売るのが目的ではない。ユラリユラリと店内を縫って歩く、生きた花である。だから、籠の中の商品は一割が普通で、二割も売れば、よい方である。

もう四年もやっている一番、古株の花井ゆう子は、他の子が一割も売らないのに二割五

分ぐらいも売るのが自慢だった。商品の額は知れたものであるが、自分の籠の中のものを買ってくれるということは、それだけ人気のバロメーターになっているわけである。

それが入るそうそう、五割も売ってくるたき子に嫉妬の目を向けるようになり、他の同僚からも、そねまれた。

大体、植座たき子は、同性からは、うとまれることが、どの世界に入ってもよくあるので、ホステスを一カ月ほどした頃も、古手の連中から憎まれたのが原因でイヤ気がさしてやめたのである。

だが、マネージャーは彼女を支持した。彼女のために俄然、店の入りが、よくなったからである。

この店の椅子は、低いソファだから、たき子がテーブルの間を通る時は、彼女の太腿のところ、お客の顔の高さになる。

他の女の子だとスカートの部分だが、彼女の場合はミニスカートが、お客の額のあたりになるので、スカートの中が坐ったままで覗けるのである。フレヤーのついたパンティと網目タイツの境目の素肌がチラッと見える。

これがエロティックで、秘かにお客に受けているのである。

時には彼女の太腿が、ソファから乗り出した、お客の頬を撫でることもある。

見た目には弾力のあるスラリとした脚線美も、肌にさわると網目のタイツはザラザラしていて、たき子にこすられると頬が痛いことがある。それでも殊更に、それを好む、お客も居て、また、それを、たき子はちゃんと知っているのである。中年の助平そうな紳士がさり気なくソファから乗り出して顔を寄せてくるのには、遠慮なくタイツで、こすってやる。痛そうな顔を我慢しているのを振り返ってみて、

「ざまあ、見やがれー」

と心で言いながらニッコリ笑い返してやると、お客は尻を下げてニヤニヤしている。

「だから、年よりはイヤなんだよ」

と、たき子は思う。

だが朋輩のそねみは、だんだん激しくなってきた。はじめ歓迎していた男のボーイ達までが、冷たい態度をとるようになってきた。まあアルバイトにしては割のいい収入なので我慢してきたが、そろそろ飽きてきた頃だった。

話は前に戻るが、彼女がモデルをしていた頃、会社の絵画部の人達が偶然この店へ来て

たき子を発見すると、仲間を誘って、ちょいちょい、来るようになった。

その中に、村中二郎が居た。

この村中は、前に彼女と喧嘩して彼女に突き倒され、デルタを皆の見ている前で、顔にこすりつけられた男である。

その後、たき子は、また、その会社へモデルに行っていた。村中は絵画部は退部したけれども、たき子に改めて謝ってきたので、たき子も快く許し、仲直りしていたのである。

その後、この村中という男は、口の中からたき子の毛が出てきたという話を、酔っぱらって、しゃべったのが、いつとはなく知れわたって社内で有名になった。女の子達からは嫌われたけれど、どういうわけか係長から課長補佐、課長とトントン拍子に昇進した。

同僚からは「あのモデルの毛を飲むと出世するかもしれないな。俺も飲もうかな」などと、蔭口を叩かれるようになった。

その村中二郎がコルベールにやってきて、たき子と再会した。それからは取引先を招待してコルベールへ、よく来るようになった。

その招待客の中に中央生命の専務、橋本宇吉が居たのである。

橋本宇吉は、植座たき子を、ひと目、見る

なりショックを受けたような魅力を感じた。

彼は若い頃、アメリカに留学していた。その頃は金がなかったので、アメリカの若い美人を見ても、どうすることもできず、ただ、指をくわえて眺めているだけだった。彼が下宿していた家にサリーという美しい娘が居て彼は熱烈に恋したのだが、貧乏な日本人ではとても相手にされないうと思って諦めていた。そのサリーに、たき子が顔と言ひ、身体つきと言ひ、そっくりだったので、ショックを受けたのである。

橋本は、仕事の話にかこつけて、コルベールに足しげく通うようになった。

村中二郎の会社は、三石銀行から融資を受けたかと思っていたが、元三石銀行の重役だった橋本に、仲に入って、とりもってもらおうとしていた。その役を村中が引き受けているのだった。

橋本は女関係にかけては堅い人物だという評判だったので、村中は女性を介して彼の機嫌をとるといふようなことは考えていなかった。だが、何度も会って二人の間が打ちとけて来た時、橋本はコルベールで食事しながら「君、村中君。あすこにいるバニーガール、実に綺麗だね。チャームングだね」

「あれは有名ですよ。抜群でしょ。あの子は植座たき子と言って、元モデルなども、していたこともあるのです」

「へエ、君は委しいんだね」

「いや実は、うちの会社の絵画部で、モデルとして招んだことがあるのですよ」

「フーム、なるほど。彼女のヌードだったら素晴らしいだろうな」

「圧倒的ですな。あのボリュームでしょ。ぼくなんかフラフラになって絵を描くどころか見とれてばかりいて彼女に叱られたこともありますよ」

「へエ、君がそんなに親しいのなら、ひとつ折入ってお願いしたいことがあるんだがね」

「ハア、お安い御用です。何なりと」

「彼女にねえ、ぼくのことを話してもらいたいんだ」

「ああ、簡単ですよ。じゃ、いま呼びましょうか」

「いや、そうではなく、君から、ぼくのある希望を彼女に伝えてほしいんだ。いや、そうだ。やっぱり呼んでもらおうかな」

日頃、決断力に富んだ橋本専務としては、ドギマギと戸惑うさまが、村中には意外に思った。

「これは、よほど御執心と見えるな」

と素早く察知したのだった。植座たき子を呼んで橋本専務を紹介し、しばらく話をしたあとで、たき子を去らせたあと、橋本専務は「ある希望」を村中に打ち明けた。

それは、橋本専務が彼女を援助したいという。その条件は、月五万円を手当として支給し、その他に、橋本専務が彼女とデートする毎に、一回五千円の小遣いをあげる——というのであった。

「まあ、恥かしいことだがね。ぼくには忘れ得ぬ女性の面影が、いつも脳裡にやきついているんだよ」

とアメリカに留学時代に恋した片想いの女のことを話した。

「この年だからね。打ち割って言えば、今更彼女を、めかけ同然にする、と言った気持はないんだよ。金で彼女を拘束する気もなければ、セックスするわけでもないんだ。そこるところを、よく話して彼女の返事を、きかせて欲しいのだよ」

「かしこまりました。彼女は恐らく大変、光栄に思うでしょうし、喜ぶと思います」

「サア、どうだか。こんな年寄りが、変な気をおこして、と誤解するんじゃないかな。単

なる親しい友達として、つき合いたいんだがね、そのところを君から、うまく通じてもらいたいのだよ」

と、くどくどと頼んだ。村中は胸を叩いて「お任せ下さい。その代り」と三石銀行の融資の件を尽力してもらうように頼むことも忘れなかった。

奴隷になれる？

「ヘエ、変わった、おじいちゃんね。でも、

あたし、イヤだね。お断わりしてよ」

「どうしてだい、君。こんな有利な条件は、今時、ないと思うがな。月に五万円、一回



ナミオM画廊

『丸太橋ゲーム?』

春川ナミオ

会う毎に五千元。月に十回、会えば五万円。十万円が月々、転がりこんでくるんだよ」

「何よ、あなたの言い方。あたしを、お金で転がそうとするの? そんな侮辱的な言い方ってある? あたし、失礼するわ」

「ま、待ってくれよ。ぼくの言い方が悪ければ謝るよ。いや、橋本専務は、ただ友達づきあいしてくれればいいと言ってるんだ」

「フン、それは体裁を飾って、言ってるだけよ。早い話が、めかけじゃないの。誰が、あんな年寄りの、めかけなんかななるほど、落ちぶれては、いないわ」

「そうじゃないんだ。分からないかなあ。あの老人は、もうあの方はダメだと言ってるんだよ。もっと清らかな気持で、君を好きになってるんだ。だから何度も言ったらう。若い頃、初恋のアメリカの女性と君が瓜二つなので、ただ君と話ができればいいと言ってるんだよ」

「バカねえ、あんた。月に五万円も出して、そんなことで済むと思うの。あたしね、年寄りには、大嫌いな。肌にさわられるだけでもゾッとするわ。だから断わって頂戴」

恐らく二つ返事で承知すると思った村中は彼女が意外に強硬なので、慌て気味だった。

橋本宇吉からは、たき子の返事は、どうだったか、と毎日のように聞かれる。

「もう少し考えさせてくれと言うことです。あなたのような立派な方の庇護を受けるなら一も二もなくお受けすると思っていいたら意外に慎重なのです」

「それは君、当然だよ。女の一生にかかわることだからね。それでこそ、たき子さんは並の女と違うところだ。ぼくは、ますます気に入ったよ。ついてはね、彼女にプレゼントしたいものがあるのだ。それを君の手から渡してもらいたい。ぼくは彼女がOKするまでは彼女と直接、会わないからね」

橋本宇吉のプレゼントはダイヤの指輪だった。「へエ、これは大したもんですね。失礼ですが、いくらぐらい、しました」と聞いたが橋本は笑って答えず「これは今度の件の成否とは関係ない、単なるプレゼントだからそのつもりで話してもらいたい」

村中は、橋本専務が、いかに熱を入れているかを肌で感じとった。と同時に、植座たき子という女が、たかがバニーガール風情に思っていたのが、何か貴婦人のような存在と見直さずには、いられない価値ある女性であることを知った。

彼は前にも植座たき子を、たかがモデルのくせに、と思つて、こっぴどく、やられていた。今度も、また彼女を、あまく見て、しっぺ返しを、くっているのだ。

「これは慎重に行かなければ、いけない」
村中は、これを大きなビジネスだ、と思つた。相手が難物なら、それだけファイトも湧いてくるというものだ。

村中は毎晩のようにコルベールに通つた。もはや会社の伝票は通じない。自費で行くより仕方ない。

その夜は強い雨だった。店をしまったあと苦勞して車を拾つた。たき子も車を見つけるのに困っていた。

「今夜は雨がひどいから、君の家まで送って行つてあげるよ」

青山の、たき子のアパートまで行くと、たき子も村中の熱意に、ほだされて、「ちよつと、あがつて行かない?」

と誘つた。村中は喜んだ。いつも家の前で車から降りて帰っているの、たき子の部屋へ入るのは、初めてだった。

部屋の中は、女性の一人暮らしらしく小綺麗に整頓されていて、壁に何枚かの絵が、かかっていた。

「すばらしい絵だなあ。これ、高いんだろ」
「あたしが描いたのよ」

「エッ、君が? 驚いたなあ」

「何言つてんのよう。あたしが絵の勉強をしているの、知らなかったの」

「そりゃ知つてたが、まさかこんなにうまいとは思わなかったよ」

「フン、おせじが、うまいわね」

「おせじじゃない。ほんとうに、びっくりした。これなら、もう大したもんじゃなにか。いくらでも高く売れるだろう」

「あんたは絵のこと分かんないからダメよ」
たき子は滅多に自分の絵を人に見せなかった。綺麗に写實的に描くので、素人受けはするが、仲間の画学生に見せると「君の絵は個性がない。タッチが弱い」と、けなされた。

「そうかなあ、ぼくには分からないけど」

「だからあたし、もっともっと勉強したいのよ。もっと世界の絵を見て、その中から自分の個性を、つかみ出したいのよ」

「それだったら、欧州へでも一年位、行つてくればいいじゃないか」

「お金がないわよ」

「橋本さんに頼めばOKだよ」

「あのおじいちゃん、出してくれるかしら」

「当たり前だよ。財界の大物なんだよ。あ、橋本さんから頼まれものがあるんだ」

村中はダイヤの指輪を出して、これは友情のしるしで他意はないことを伝えた。

「凄いわね。いくらぐらい、するかしら」

「百万ぐらいするんじゃないか。値段は、笑って言わないんだよ。ともかく、この誠意を君は考えて見るべきだよ」

「それは分かるけど、お金も欲しいわ。けど、おじいちゃんの奴隷になるのはイヤだなあ。そこまで落ちたくはないわ」

「イヤ橋本さんは、あの年だから、もうあの方はダメなんだよ。奴隷は、むしろ橋本さんの方だよ。そうだ。君は橋本さんを奴隷にすれば、いいんだよ」

「そうお」

たき子の目が、輝いた。

「君は女神のようだと、敬服している。全くその通りだ。ぼくだって今では君を日本ではめったに見られない美人だと尊敬してるよ」

「へへ、また、うまいこと言ってる。それじゃああなた、あたしの奴隷になれる？」

「なるとも、喜んでなるよ。大体、君には初対面の中から奴隷扱い受けたじゃないか。ぼくは君の毛を飲んだんだからね。そのお蔭で

トントン拍子に出世したんだ。また二、三本飲ましてもらいたいと思ってるよ」

「冗談で、言ってるんじゃないのよ。あたし本気なのよ」

「ぼくだって、本気だよ」

「よし、そんなら、やってやるわ。あたしの前に平伏しなさい」

「ああ、平伏でも土下座でも何でもするよ」

「余計なことを言ってるので、実行が先よ。もし、あんたが、あたしの奴隷になれば、橋本さんのこと、OKしてあげてもいいわ」

「ほんとう？ ありがたい！ それで、ぼくも中に入った甲斐があるというもんだ」

「つべこべ、しゃべってないで、そこへ平伏しろと言ったら、何故、実行しないの？ 口先ばかりの嘘つき！」

村中は跳びはねるようにして、たき子の前に両手をつき、頭を畳へつけた。たき子は立ち上がり部屋の隅の机の傍の椅子に腰かけて「こっちへおいで。此処へ来て平伏おし！」

言葉つきも、奴隷に対する命令調に変わった。

村中は膝で這って、たき子の足もとに行きそこでまた、平伏した。

「よし、お前は、あたしの奴隷だよ！」

奴 隷 中

たき子は右足をあげ、足のうちで村中の頭を踏みつけた。

「分かったか？ お前の頭を足で踏んでいるんだよ、奴隷！」

足に力を入れ、顔が畳にめり込む位に踏みつけた。何しろ65キロもあるグラマーの、長い足で踏みつけられるのだから、へたな男よりも力がある。

たき子が足を、どかすと、「ウワー驚いた。えらい力だなあ。顔の形が変わっちゃったよ」

村中はテレ笑いでいたが、たき子は怒ったように村中を見下ろし、

「サ、此処をお舐め！」

村中の顔の前に、大きな足のうらを突きつけた。

「エッ？ これ、舐めるの？」

「そうよ。お前、奴隷じゃないか。御主人のあたしの命令には絶対、服従だよ」

「だんだん本格的になってきたなあ」「何言ってるのさ。ぐずぐず言ってるので、早く舐めろ！ お前は口数が多いよ」

足のうらが、ベタリと顔一面におしつけられた。村中は舌を出して、土踏まずのところをペロペロ舐めた。

「ウワァ、くすぐったい。あんまりいい気持ちのもんじゃないわね」

「そうだろう。ぼくだって、こんな所、汚いばかりで、よくないよ」

「バカ！ 何言ってるのさ、奴隷のくせに」
「どうせ舐めるなら、もっと、ふくよかなところが、いいなあ。もう奴隷ごっこは、やめようよ」

「バカ！ 奴隷が御主人さまに対して命令するやつがあるかい。やめるやめなはいは主人のあたしが決めることよ。やめようなんて言うのは、御主人さまに対して忠誠心が足りないよ。よし、やめようと思ったけど、もっとやってやる。第一、お前は奴隷のくせに、御主人さまに対して言葉使いが乱暴だよ。もっと丁寧な言葉を、お使い」

「ハイ、ハイ」

「二度、返事するのは失礼のもとだよ。ハイと、ひとつだけにするんだよ。ほんとに大の男のくせに何も知らないんだね。返事の仕方から、しつけて行かなきゃならないんだから骨が折れるよ。ハイ、御主人様と返事すれば

いいのよ。言っでござん」

「ハイ、御主人様」

「それで、いいのよ。今度、二度したら、お仕置きするからね」

「ハイ、ハイ」

「ホラ、また。ようし、言うことをきかないんなら、お仕置きしてやる」

短いスカートのはしをつまんで、たき子が立ち上がった。村中は、それを期待したようにうす笑いを浮かべて、ちょっと捲くれた太腿の間に目をやった。靴下は部屋に入った時濡れていたもので、すぐ脱いでいた。店ではフリルのついたパンティがチラチラ見えたのだが、あれは営業用のもので、いまは白いパンティを、はいている。

「御主人さま。お願いがございます」

「何だい！」

「どうか一生のお願いですから、そのパンティを脱いで、お仕置きをして下さい」

「バカ！ ウフフフ、お前は、このパンティ

の中が見たいのかい、拝みたいのかい」
「ハイ、ぜひ拝ませて頂きたいのです。できれば口づけの栄誉をお与え下されば最高の幸せでございます」

「バカ！ アッハハハ」

たき子はサツと足をあげて村中の肩を跨ぎ顔の前に白いパンティの脹らみを、押しつけるようにして突きつけた。

「ウオッ、このポリウム。全くすばらしい老人でなくなつて若者だって、君のこの足の前には抵抗力を失って、しびれてしまうよ。男なら誰だって……」

「そうかしら。あたし、この頃、少し肥ったのよ」

「イヤ、肥った方が、いいんだよ。男には、やせた細い足なんて、遠くから見るとは恰好いいけど、こう目の前に来てピッタリおっつけられる時は、太い足に限るよ」

「あたしの足、そんなに魅力がある？」

「日本じゃ滅多に見られない足だよ。橋本さんも、この足に参ったんだろうな」

「あ、いつの間にか友達のような言葉を使ってるな。コラ、お前はまだ奴隷中なんだぞ」

「奴隷中か、こりゃよかった。アハハハ」

村中の笑いは、途中で消えた。たき子が、残る一方の足を跨いで、逆肩車の態位で、パンティの脹らみをピッタリと鼻と口に押しつけてきたからだ。半透明のテトロンの布越しに、ムーンとする女体の香りが、顔一ぱいを掩うように、かぶさってきた。

同時に両の太股で顔をはさんで締めあげてきた。

「ウウッ……」

「この無作法者。御主人さまに対して対等の口をききやがって」

両股に、力が入る。

最初は、やんわりと、すべすべした感触でザラザラしたテトロンの感触よりは、よかったが、そのやわらかい肌が、堅く締まって両頬を締めあげると、想像もしていなかった力が加わった。

「どうだ、この野郎。これでもかッ」

ますます、力が入る。村中は苦しくなってプロレスラーのように畳をバタバタ叩いた。

「降参か、参ったか」

「参りました。ウワァ、きつい。締め殺されるかと思ったよ」

「パンティを脱いで、一度やってやろうか」

「あ、それなら、我慢します。ぜひ、やって下さい。お願いします」

たき子は目の前でパンティを半分ズリ下げた。

「フフフ、よそうっと……」

と、またパンティを、あげる。

「そんなこと言わないで、やって下さいよ。」

ぼく、あなたの毛を食べると縁起が、いいんです。又きつと、いいことがあります」

「お前は縁起をかつぐために、あたしの毛を食べたいのかい。そんなら、食べさせてやらないよ。これは、あのおじいちゃんに食べさせてあげるんだ」

「ああ、お願いです。食べなくても舐めるだけでも願いを叶えて下さい」

村中は切ない声を出して哀願したが、心の中では、

「占めた。たき子は、もうOKしている」

いまの、たき子の一言で、成功したことを知ったのである。

真の屈辱

「も、もう勘弁して下さい。舌が動かなくなっちゃった」

「ダメダメ。もっと舐めるのよ。舐めろ、舐めろ。舐め続けろ」

たき子は残酷な笑みを浮かべて、村中の汗みづくの顔を上から見下ろしている。

「もういいだろ。随分、サービスしたつもりだがなあ。くたびれ……」

言葉は途中で、たき子の体内に消えた。口

のきけなくなった村中は、額に皺を何本も寄せ、哀願の目で、たき子を見上げた。その額の皺の間に汗が、にじみ出ていた。

たき子は別に何もしてないのだ。ただ顔をはさみ、舌をはさんでいるだけなのだ。それだけで男に死ぬ苦しみを与えている。

「あたしが、ほんとに力を入れたら、この男は死んでしまうかもしれない」

男を、こんなにも簡単な方法で征服できるとは思っていなかった。

舌を伝って、したたる愛の泉は、強い芳香を放って、間歇的に何回も村中の渴を、いやしてやっている。

「男が女を征服する時は、その刻印を、女の体内に放流する。いま、あたしがやっているのは、女が男を征服した刻印を男の体内に、流し込んでやっているのだ！」

たき子は、そう思った。

村中の顔が真っ赤になる。興奮して村中の呼吸をとめてしまったのに気づいて、たき子は腰を浮かした。

フーッと息をする。彼は何度この苦しみをさっきから味わったことだろう。

たき子はタオルをとって、村中に渡した。

「だめっ、あたしを先に拭くのよ。御主人さ

イメージギャラリー 『珍説唐人お吉』 岡 たかし



まを忘れると、又、ひどいめにあわすよ」

村中は、たき子に脅えていた。丁寧に拭いたり、それから自分の口のまわりや、汗一ぱ

いの顔を拭いた。

彼には、もう一カ所、拭くところがあった。しかし、それは、たき子に見られたくない所

だったので、トイレに立って行き、そこで拭いた。

村中は、はじめ彼女にサービスしておいてそれから彼女を犯そうと思っていた。

彼女の狂ったような兇暴さをも、あまんじて受けたのは、あとでタツプリお返しをしてやるつもりだったからだ。

次から次と注がれる液流も飲んだ。それだけ又、注ぎ返してやるつもりだったからだ。

だが、首を締められると、彼のものはズボンを突き破るほどの勢いであった。

「だめだ。いま放ってはダメだ」

と制していたが、そのブレーキが、きなくなり、彼はズボンの中で放った。

一度、放ってしまうと、あとは意志が弱くなって、二回目に復活した時も、呼吸を止められ、死ぬのではないかと思った時、放っていた。それは彼が、かつて経験したことのない、苦しくて、また快美な感覚であった。

彼は、そうして三回も放流してしまったので、いま許されて対等の立場に戻されても、最初に考えていた彼女を征服する野心は、萎え失せてしまったのだった。

「もう奴隷は解放してくれるんだろうね」
「フフフ、許してあげるわよ。少しやりすぎ

たようね。御免なさいね」

たき子はベッドにシュミーズ一枚で寝ていた。その傍へアンダーシャツ一枚の村中が添って寝た。

「ああ、驚いた。君に、こんな兇暴性があるとは、思わなかったよ。何度、殺されるかと思っただか、しれないよ」

「アハハ、力には力よ。振りほどけば、いいじゃないの」

「それができないんだから情けない話だ。このボリウムで圧倒してくるんだから……」

村中は足をあげて、たき子の太股へ、からめた。さっきまで自分を苦しめた「兇器」がいまは優しさに返っている。弾力のある肌理きめのこまかい肌ざわりは何とも言えない。

いまそうしても、たき子は抗う様子を見せないのは、次の行動を許容しているからだ。

そう思っても肝心のものが、ファイトを失って、うなだれているのだ。

村中は歯がゆかったが、そのうちに復活するだろうと、腿を、こすり合って待った。

「だけど、ふしぎだなあ。あんな、ひどいめに合っていないながら、その中に得体の知れない快感が、あるんだなあ。あれがマゾの境地というもののかな」

「あたしもよ。あなたを虐めている時に、何度もオルガズムに達したわ」

「女のサドか。おっかないなあ」

「あのおじいちゃんにも、ああしてやって、いいかしら」

「いいとも。きっと喜ぶよ。だって、ぼくは嘗て、サドだのマゾだの、そんな気持、おこしたこともないし、もちろん、やったこともないんだ。それなのに、君から、ああされた時、すばらしく興奮したものだ。だから、人間は大なり小なり、サドもマゾも持ち合わせているものなんだね」

ザボンのように大きな乳房に胸を、すり合わせているうちに村中は、どうやら男の機能を、とり戻してきた。

「ほんとに君は、すばらしい、ひとだ」

村中は、たき子の身体の上に、全身を重ねた。たき子は、下から村中の背中へ手を回した。唇を吸おうとすると、それだけは顔を横に向けて拒否した。村中は頬へキスした。

我慢に我慢を重ね、屈辱に耐えてきた報酬が、いま受けられるのだ。

心は、その期待にワクワクはずんだが、彼女に触れるか触れぬうちに、早くも力のない放流とともに、うなだれてしまった。

「どしたのよう」

いかに手を施してもだめと知ると、たき子は村中を身体の上から下ろした。

「ダメねえ、あんたって、ひとは」

たき子は村中の両肩に手をかけて、下の方へグイと押し下げた。えらい力である。シーツが皺くちやになって村中の身体が、たき子の乳房の下まで押し下げられた。たき子は、その胸の上に太い足をのせて跨がってきた。「あんたは、やっぱり奴隷が身分相応ってところね」

軽べつしきった、たき子の眼差し。村中はこの時、ほんとうの屈辱を感じた。

たき子は村中の上半身の上に腹這いになった。男の勤めを果たせなかった、その代償を唇と舌に命じたのだ。村中は嘗て、こんな屈辱を感じたことはなかった。それは、たき子から辱かしめを受けているという感じではなく、折角、女として迎え入れてくれた絶好のチャンスを自ら、つぶしてしまった不覚を恥じているのだった。

イライラした焦燥感が、まだ脳裡にモヤモヤと残っていた。たき子が怒るのも無理はない。軽蔑するのも当然だと思った。

プリプリと重い肉塊が圧しつけられても、

ベッドのスプリングに救われて、それほど苦痛ではなかった。村中は自分の不覚の埋め合わせを舌で奉仕した。

「これが、ほんとの埋め合わせだ」

と自嘲しながら奉仕を続けた。たき子が身をよじり、時には両股で強く頬から耳のつけ根のあたりまで締めつけてくるのは、快感に酔っているであろう。

「これで彼女が喜べば、よいのだ」

橋本宇吉も恐らく、こんな形になるのではなからうか？ などと想像しながら、齒を唇でおおうようにして噛んだ。

たき子も同じようなことを考えていた。

「男なんて、えらそうな顔してたって、存外いくじがないんだわ。こっちが高圧的に出て行けば足元に、ひれ伏してくる。あたしってそんなに魅力があるのかしら。いままで男から手を差し伸べてくるのを待っていたけど、ばかばかしいことだったんだわ。こっちから手でも足でも出してやればいい。そうすれば男は尻尾を振って、あたしの言いなりになるんだわ。おじいちゃんをパトロンに持つなんて考えても見なかったけど、どうせ、あの方はダメなんだし、結局いま、こうしてやっているようなことに、落ちつくんじゃないかしら」

ら。おじいちゃんに金で縛られるのは奴隷のようでイヤだと思ったけど、あたしは、あたしの肉で、おじいちゃんを縛ってやる！ こんなことで楽に暮らして行けるだけのお金もらえるんなら、悪くないわ」

身体の中から、うずきあげてくる快感とは別に、たき子はそんな胸算用をしていた。

「あたし、ヴァンプになったのかしら？ それも、いいじゃないの」

たき子は、思わず身体の中心部に力が入った。下の村中が「ググツ」と悲鳴をあげた。

「ブン、男なんて、こんな見すばらしい弱虫なんだわ」

弱虫が、どんな顔をして苦しんでいるのかのぞいてやりたくなり、尻を持ち上げて、テラテラにひかる村中の顔を見下ろした。

腿の間にはさんで、ちよいと締めてやると村中の顔は狐のように頬が、そげて細くなり貧相な顔になって許しを乞うている。腿を弛めてやると、ホッと息をつく。そこを、また締める。これを繰り返して責めてやった。

報酬の価値

植座たき子がOKしたことを報告すると、

橋本宇吉は狂喜した。

村中は、橋本のこんな笑顔を、見たことがなかった。事業の成功時に見せる会心の笑みは、一分の隙もない英知の微笑であるが、いま見せる橋本の笑いは、目尻に皺を寄せ、不覚にも口から、よだれを流す隙だらけの笑いだった。

「ありがとう。君のお蔭で、念願が叶った。これは少ないが――」

橋本は十万円を裸のままで出した。

「こんなものを頂く筋合いではありません。それよりも、三石の件を、どうぞよろしく御願います」

「それは心配せんでいい。実は、もう内諾を得てあるんだ」

村中は一応、辞退したものの、内心では橋本が、いくら出すかを、期待していたのだ。その額は、まず十万、ケチれば五万と踏んでいたから、村中としては満足だった。

「ところで御世話になりついでに、もう一つ頼まれてもらいたい。マンションの手頃なのを探してくれないか。場所は、あまり不便な所は困る。便利な所ほど、よい。八百万まで出す」

たき子のためにマンションを買ってやろう

と言うのだ。えらい打ち込みようだ、いまさらながら橋本の惚れこみように驚いた。

だが、村中が持って行った十数軒のマンシヨンのパンフレットを橋本は、ろくろく見もせずに全部、はねた。

「もっと場所のよい所でなくてはだめだよ」「でも、それでは八百万では、ちよっと、むずかしいのですが」

「君も頭の廻らん男だね。マンシヨンなんか正面から、かけ合うバカは、ないだろう。うまくやれば千二百万ぐらいのマンシヨンでも八百万で楽に手に入る筈だ」

マンシヨンは過剰気味で、あちこちに空室がウジャウジャある。中には金に詰まってい

「伝言板」○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

るものもある。そういうのを叩けば、三割ぐらいは引くものだ、そういうマンシヨンの探し方、交渉の仕方を橋本は教えてくれた。

「わしが動けば雑作はないが、目立つから、わしは動けない。で、君に頼んでるのだからしっかり、やってくれ給え」

こうなると橋本は一分の隙もない男に返っていた。株券だろうと債券だろうと、定価のついているものを定価通りに買ったことのない橋本としては、値切る手段については、驚くべきの才能を持っていた。

村中は苦心の末、麻布の十番にあるマンシヨンを提供した。新しいマンシヨンではなかったが、千三百万というのを八百五十万までに下げさせた。橋本は大して、ほめもしなかったが手数料として村中に二十万を渡した。普通、不動産屋でも紹介料は五分が相場だから、少なくとも四十万は、くれるものと思っていた村中は不満だった。

「君がライセンスをとっている不動産屋なら五分の手数料を払うがね。素人だから、そのへんが相場というものだよ」

と橋本は、さとするようにして金を出した。「何いってやがる。人を散々コキ使っておいて、渋ちんめ」

と思ったが、不足だと抗議する根拠がないので、表面は頭を下げて、もらった。

「よし、その代り、たき子を盗んでやる」橋本の女となったら、徳義上、手は出さないと思っていたが、妙なところで彼は、心をひるがえした。

だが、いままでを冷静に振り返ってみるとたき子を口説きおとすまでは随分、日にちもかけたし、自分の金も使ったりして、苦労した。彼女へのサービスだって、橋本には話さなかったが、考えようによっては「死ぬ苦しみ」の重労働だった。その報酬が十万。その十万をもらった時は有難い気がした。マンシヨン探しは、苦労したと言っても橋本が急かしたので、会社に休暇届を出して三日で、けりがついた。その報酬が二十万。苦労の割合いから見れば後者の方が、ずっと楽である。にも関わらず、不満に思う。

「人間の心理なんて、ヘンなものだなあ」村中は反省してみても矛盾した心情に苦笑を禁じ得なかったが、それでも「たき子を盗んでやる！」という決心に変わりはなかった。

たき子は、バニーガールを、やめる決心をした。

マネージャーに対して「月給が少ないから上げてくれ」と要求した。

「何をいってるんだ、君。君のサラリーは他の人より一番、多いんだぜ。三年も古い花井君よりも、多く払ってるんだぜ」

「でも、あたしを目当てに来るお客さんも、相当、多いと思います。それだけ、水揚げを増したのですから、それ相当のお給金が、ほしいわ。いまのサラリーじゃ、やって行けませんもの」

「うぬぼれちゃ、いけないよ、君。そりゃ、君のチャームポイントの原因もあるだろうが店のよさが原因して、お客が来るんだよ」

「見解の相違ですわね。では、やめさせてもらいますわ」

「おいおい、君。やぶから棒に、そう短気をおこされては困るよ。一体いくら上げてほしいと言うんだ」

「いまの二倍」

「エッ。バ、バカな。ぼくだって、そんな高給を、とってないんだぜ。冗談も、休み休み言いたまえ」

「ダメでしょ。だから、やめさせて、もらいますわ」

たき子は、気持よさそうに笑った。

「ま、持ってくれたまえ。ほんとのところ、いくら、ほしいんだい」

「ほんとにも、うそにも、二倍といったら二倍よ」

「そんな無茶な。そりゃダメだ！」

「あなた一人で、ダメと決められるの。社長さんに相談しなくても、いいの」

「当たり前だ。君達の給与も、クビにするかどうか、一切の権限を持っているんだ」

「あ、そう。あなたじゃ、話が分からないわね。あたし、社長さんに、じかに話すわ」

「ちょ、ちょっと、待てよ」

たき子はプイと話を打ちきった。その足で社長室の扉を押した。社長の結城は、まだ若い四十年輩の紳士で、たき子は、ここでも給料二倍の要求をした。結城は、たき子を、しばらく見つめていたが、

「給料を上げることは統制を乱すから、できないが、特別手当を出そう」と言って、たき子の要求額に、ほぼ近い額を出した。たき子は、自分を認めてくれた社長に感謝し、実は欧州へ絵の勉強に半年ばかり行くので、一時辞めさせてもらうが帰ってきたら、また、お願いしますと言い、

「退職金は、いくらですか」と聞いた。

結城は苦笑しながら、

「日給制度の雇いに退職金は出ないが、これは賤別だ」と言って五万円を出した。たき子はマネージャーが横暴であること、バニーガールの給料が安いことを、ズバズバ言っていた。

「もうそろそろ、賃金のベースアップを考えていたところだ。よく言ってくれた」

結城は、たき子に新しい魅力を感じたように、欧州から帰ってきたら、是非また来てくれと、しっこく、念を押した。

社長室を出た、たき子は朋輩達に一部始終を語り、

「近く、あなた方の給金を、あげてくれるそうよ」と話した。やめるとなると一番悲しんだのがライバルの花井ゆう子で、皆、手のひらを返すように、たき子をほめ、別れを惜しんでくれた。

「人間の情なんて、いい加減なものだわ」

たき子は心の中で、わらった。

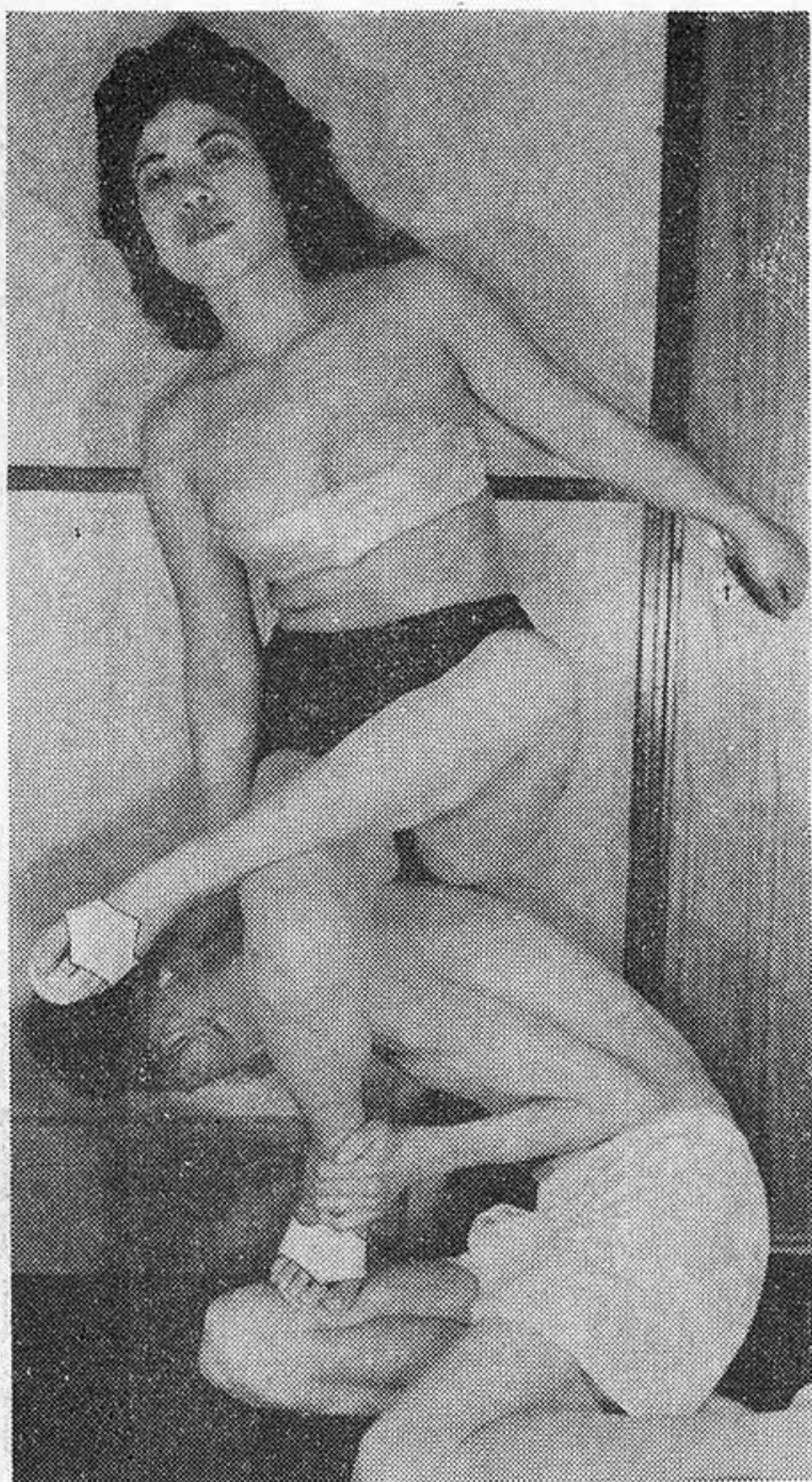
「サアこれから、あたしの新しい世界が、はじまる。あたしは変身するんだ」

橋本老人を利用して、自分の慾望や野心を満たすべく、たき子は決意を新たにした。

告白——わがM癖の複雑さに戸惑う——

マゾプレイの妄想と現実

丸 目 忠



——M男を責める春日ルミ嬢——

昨年六月号以来、これといったレポ事項もないままに御無沙汰していましたが、ごく最近、マゾヒストの心情を充分に心得られた素晴らしい女性を知ることができました。

切れ長の美しい瞳。美的な鼻筋。魅惑的な唇。一見、華奢な感じでありながら、豊かな曲線に満ちた容姿。その包容力に母性本能を垣間見る思いのする人柄。それでいながら、時に見せるサディスティックな表情、発言、そして行動……私のペンでは、その素晴らしさを、とても表現できない、もどかしさを痛切に感じますが、このママさんを慕って、連日多くのM人士が集うという事実を報告すればお察し、いただけると思います。

幼児が母の乳房を求めるが如く、このママさんを訪れる人達は、Mで有名な和歌山のA Z氏をはじめ、いずれも立派な紳士揃いで、社会的地位の低い私などは場違いな感じを抱かざるを得ないのですが、これらの人達と親しくなれたおかげで、M男性の殆どは真に誠実な人々であることを改めて認識することが出来、又、その願望、思索等に、多くの種類があることも知りまして、私自身が悩むM癖も、M界? のホンの一部分に属するに過ぎないことを痛感させられた次第です。

以前に、ある高名な方が「マゾヒストの根元は、女性の驕慢への渴仰である」といわれていましたが、この意味の中に果たして、ど

れだけの内容が含まれているのでしょうか？

精神的虐待、緊縛、鞭打ち、舌奉仕、馬化顔面騎乗、唾液拝受、コプロ等々、まことにMの分野は広く、とても数え上げることすら来難いほどですが、私の場合は、残酷美を備えた女性のお尻と太腿が最高の憧れでして、人間馬となって押し潰され、鞭打たれることを願望するMで、いわば一般的？　なM性ではないかと思っています。

私は幸いにも、去年は三度のプレイ体験に恵まれ、本年も、またつい最近に、この素晴らしいママさんのご紹介で、理想的な女王様にプレイしていただける光榮に浴することが出来たのです。

本格的なSM設備のある密室で、ポリウム豊かな若き女王様と相對した時には、慄え上がるような期待と羞恥にまみれ、ただ、ソファに、ゆったりと腰かけられた女王様の足下に跪いて、ひれ伏すのみでした。

「何をボヤボヤしているのよ！　足の指でも舐めたら、どうなのサ！」

足の爪先でコツコツと私の頭を、お蹴りになりながら仰せになる女王様の一言々々が、私の高鳴る胸を更に疼かせるように突き刺しこの瞬間に私は我を忘れてしまいました。

「皮のコスチュームをピッタリと身につけ、鋭い拍車をつけた長靴を穿き、鞭を手にした女主人の足下に、ひれ伏す奴隷の姿」

スタントンの絵に象徴されるMの世界が、そのまま私の脳裡で現実化され、陶酔のうちに、その奴隷になりきってしまった私。

ガッチリと首輪を締めこまれて、息も詰まるかと思うばかりに曳きまわされた上、ずっしりと背中に落ちてきた女王様のお尻。

全体重を受け止めた私の背骨は、きつと弓なりに、しなっていたことでしょうが、女王様は容赦なく、私の貧弱な尻に鞭を当てられ騎り潰さんばかりに追い立てられたのです。

藤色のパンティでピッタリと包まれた女王様の大きなお尻が、私の背中の上で、ゆるやかに、そして激しく、背骨を圧し折らんばかりに揺れ動く！

この状態こそ、私が長年に亘って夢見つけ、恋こがれつづけてきた状態なのです。その渴望が、今こそ現実のものとなっている。あれほど憧れ抜いた豊満なお尻と太腿が生々しい重量感と圧迫感を、ひしひしと感じさせてくれている……。私は当然、無上の快楽に溺れこみ、昂奮に五体が慄え上がるはずなのに、どうしたことでしょう。その快楽受感の密度が薄いのです。昂奮度が低いのです。従来、このようなシーンを想像するだけで、絵画や写真などで見るだけで、狂おしいばかりの昂奮を覚えていたのに……。その絶好の状態が現実になっているのに……。まったく我ながら不思議とも、おかしいとも、理解の

しようがない気持だったのです。

この不可解な私の燃焼不足は続き、その後の女王様の手慣れた縄さばきによる息苦しいまでの緊縛。そして、滑車による逆吊りにも一向に燃え切ることにはなかったのです。無表情で縄を操作される女王様の、むっちりとした張りきった両腿の美しさを眺めながら私は、縄目の痛さ、逆吊りの苦しさを快楽に結びつけようと、必死の努力を払いました。そしてその努力は、その次の、待望の鞭打ちにも振り絞ったのですが、遂にお許しを乞い、中止して頂かねばならぬ仕末だったのです。

女王様は、むしろ不思議そうに「おまえは駄目ね」といわれました。ここを訪れるマゾヒストは、これらの責めに随喜の涙を流すのです。ようから、女王様のご不審も無理のないことです。私は、クッキリと残った縄痕を撫でながら、こんなはずではなかったことを、何度も繰り返して陳謝しました。そして最後に、お情けで戴いた女王様の吐かれた唾液によって、ほんの少しマゾの喜びを、とり戻し得たのみという結果に終わったのでした。

素晴らしいママさんを知り、そして、理想的な女王様とのプレイという、得難いチャンスを与えて頂きながら酔いきれなかった私。これは、どういうことなのか？　私は、しみじみと考えこんでしまいました。

日々、余りにも妄想を逞しくし、想像主義

者的な時間を持ちすぎたために頭の中だけのM癖に固定してしまったのでしょうか？ お尻や太腿の圧迫、鞭の痛覚、縄の苦しさ等のM快楽も直接、我が身に受けるよりも、第三者として眺めることに高ぶりを覚えるということは、マゾヒストを名乗る資格がないということでしょうか？ 想像のみのMとしても人それぞれの欲望の違いというべきなのでしょうか？

ともあれ、私の場合は、あの憧れの状態下にあるプレイ中よりも、今、思い出の一駒として、脳裡に浮かべる方が、格段のM陶醉がおおいかぶさってくる思いなのです。そして自分は、やはりマゾヒストに違いないのだと再確認する状態に立ち至ってしまうのです。

こんな私のM癖が大変、共鳴を覚えたのは二月号に掲載されました、並原新一氏の告白「馬のられ体験記」で、我が胸中を覗かれたような思いがし、想像力によって、より密度の濃いMの快楽を追求する並原氏の思索に、共通のものを感じて、安心した次第です。

何やら、とりとめないことばかり書きつらねてまいりましたが、冒頭に書きましたところの「マゾヒストの心情を充分に心得られた素晴らしい女性」は、ママさん（内心では女王様と私は、お呼びしています）という呼び方から、ご想像がつくと思いますが、全くM癖に対する洞察力というか、理解力というか

素晴しく、接し始めて間もない私などにも、グリーンと胸に感じるようなふるまいを、時に応じて見せて下さるのです。

いささか飲める私がカブトをぬぐ程の酒量にも、決してその美しいお顔に紅をさすようなことは、ない程ですが、その時々のお囀りによって、信奉者の一人（主としてN氏）をやり玉に挙げて、乱れたふりをなさいます。

ママさんの美しい顔がサディスティックに輝いて、N氏を床に引き倒した上からハイヒールの雨を降らせ、髪をつかんで引き上げたN氏の頬に強烈な平手打ちをとばし、更には突き転がしたN氏の首の辺りに、どっしりとお尻を落として、その苦しむさまを冷然と見降ろされるママさんの美しさ。

こんな素敵な状態を目の前に出来る時の私の幸せは、とても書き表わすだけの文才はありませんが、魂を宙にとばす………というのは、このことだと思えます。このような時には、こぞ、呆然自失、私のM癖が百パーセント燃え上がるのです。そして……、この辺が私自身でも不思議でたまらないのですが、つぎには、自分もあのようにされてみたいという欲望が、むらむらと湧き上がるのです。だが、その時には居ても立ってもいられないほどの欲望が、いざ現実になると、前記のような仕末に終わったのです。もっとも、あの場合の女王様は、私の理想的タイプのお方ではあ

ても、ママさんではなかったから、と考えられないでもありませんが……。

あの日のプレイの結果は、あの女王様からママさんにも伝わっているものと思われれますが、それかあらずか、ママさんは、近い内にN氏の代りに………というようなことを、私にほめかせて下さったのです。

もし、そのチャンスに恵まれたら……。プレイの成り行きは、私にも分かりません。しかし、現在の私の夢だけは止めどもなく拡がっています。

ああもされてみたい、このようにして責められてみたいという妄想は、ママさん女王様に犬畜生にも劣る奴隷として弄ばれつづける私の、あさましい姿の連続です。容赦のない鞭打ちに呻く私に女王様は穿いていたパンティで猿ぐつわをされることでしょう。その上から、しっかりと巻かれた縄が、手綱代りになって、女王様の豊満なお尻が私の背骨を、きしませて乗り廻されることでしょう。奴隷馬の細首が、まろやかな両腿によって肩越しに挟みつけられ、女王様の気まぐれで引かれる手綱で大きく、のけぞるのに苦勞することでしょう。そして、その痩せ馬は、おそらく数分間で潰れ、女王様の怒りの鞭や足蹴に、のどの奥で悲鳴を挙げることでしょう。私は今、その時こそ自分のM癖を見極めたいと念願しているのです。（おわり）

北欧のポルノより

見たSM随想

長谷田 亀治

妻にせがまれるまま、正月休暇を利用して六日間のハワイ旅行を楽しんできた。ホノルルでは、やれ島巡りだのポリネシア文化センター見学だのサンセットディナーだのと、ベルトコンベアに乗せられたような団体旅行のあわただしいスケジュールに追いまくられてる妻を尻目に、私は単独行動をとって連日ダウンタウンに入りびたり、ポルノあさりにうつつをぬかしたが、正直いって期待はずれもいいところで、すっかり落胆させられた。

ダウンタウンにはポルノショップが、ひしめいているが、その殆どが中国人経営によるもの。店内狭しと並べられたポルノ雑誌にはすべてビニールのカバーがかけられ、ごていねいにも「まずお買い上げになり、それからカバーを破ってゆっくりごらんください」と「日本語」で張り紙がしてあるのには驚かされた。見られても減るものじゃないのに、なんと了見のせまいこと。しかも、その内容たるや北欧ポルノの複写ものが大部分で、色調は崩れ粒子は荒れて、まったく食指も動かぬ代物ばかり。

それでいて値段だけは結構高く、一冊8ドル〜12ドル。カラーのページ数の多少によって値段が違いうらしい。8ミリにしても推して知るべしで、総て複写。35ドル〜50ドルも出し、恐ろしい？ 税関の目をかすめてまで買って帰るほどの値打ちは、さらさらない。そ

れを我が同胞たちが目を血走らせ、手をわななかせて、我勝ちに買い求めている有様は浅ましいとも何とも、いいようがなく、エロチックアニメルの面目躍如というところだ。

私自身は結局、ダウンタウンでラバー製のディールド（張り形）を20ドルで買っただけだったが、これにはベルトがついていて、腰にしっかりと取り着けるようになっており、本来はレスビアンの方役が用いるものだ。しかし男の私が装着すれば、コックが二本、出来たことになり、ダブルウェイを行なうには、まことに都合がいい。事実、ごくスムーズにカントとアスにラバーコックと本物のコックを同時に受け入れた妻のエキサイトぶりは大変なもので、20ドルが、たとえ100ドルでも安いものだと思ひ知らされた次第。

評判になっている白人娘とハワイ土人のラブ・ショーも見したが、これがまた、とんでもない、くわせものだった。観客席からは、けっこうファックしているように見えるのだが、真後ろに回り込んで、とつくりと拝見すると全然インサートしていないのだから、まるでサギも同然。よほど「まじめにやれ」とどなりつけてやろうかと思ったが、あわてて飛び出してきたマネージャーとも用心棒ともつかぬ巨大漢に「ゴーア・ウェイ」と席に連れもどされてしまった。

こんなものに20ドル（もっとも飲み物代、

レス・ブラウン・フィルムの総合プログラム

(10シリーズ30本から成る)



こみだが……)も出すくらいなら、大阪近郊のYやDやIでストリップの派手なオープンぶりを見ている方が、どのくらい楽しいかわからない。

ただ劇場でやっている16ミリサウンドのブルーフィルムだけは、やはり迫力があつた。ごくノーマルなものをやっている劇場、ホモやSMなどアン・ユーズルなものをやっている劇場などが乱立しており、それぞれの好みに応じて選ぶことができるのは、やはりありがたい。しかし、いつ、どの劇場へ入っても

一見してOLとわかる日本の若い女性連れが派手なムーム姿で熱心に観賞？していたのには度胆を抜かれた。しかし物も考えようでポルノスターの演じる巧みなブロージョブや強烈なアス・ファックを、しっかりと頭へ叩き込み、恋人と愛し合うときの参考にしてもらえれば、まことに、ご同慶のいたりというべきであらう。

ポルノ・フィルムといえは、最近の北欧ものの充実ぶりは素晴らしいの一語に尽きる。とくに鬼才レス・ブ

ラウンの手になるフィルムは、私たちマニアにとって垂涎の的というべきで、ヨーロッパ各地でも大ヒットしているという。彼の作品は総て一シリーズ三部作(いずれも200フィート、カラー)から成っている。処女作は遠くカリブ海の小島にロケを行なった「トロピカル」シリーズで、これは「リンボー」「ブラック・パワー」「パラダイス」から成り、南海の楽園を舞台に黒人たちのギラギラするような強烈なセックスを画面いっぱい叩きつけたもの。

「オー・パリ」シリーズは、パリ観光にやってきた日本娘と彼女を出迎えたマドモアゼルとのレスビアンラブ、あるいは、そのボーイフレンドたちとの乱交パーティーなどシャンゼリゼや凱旋門、あるいはセーヌの流れなど美しいパリの風物を、ふんだんに取り入れて詩情豊かに描いている。

また「プロステイテーション」シリーズはパリの売春窟で性奴隷として調教されている二人の、いたいけな少女が、ありとあらゆるテクニクを使って、客に奉仕を強いられる「ホー・ハウス」。ロンドンのコールガールが三人の客をオーラル、ノーマル、アナルで同時に楽しませたあけく全身にピス(尿)を浴びせられ、身をふるわせてアクメに到達する「コールガール」。ニューヨークの街娼が客を拾い、千変万化の体位でファックする「ストリート」などプロフェッショナル・ウエイのサブタイトル通り、その道の厳しき、絶妙のテクニクを赤裸々に描いている。

彼の作品は、このほか「ニンフォマニア」「バイキング」「トップシークレット」など10シリーズ30巻あるが、ロケやセットに、ふんだんに大金を投じモデルを厳選し、しかもカラーの16ミリのネガで撮影したものを8ミリにプリントしているため、まことに鮮明で非の打ちどころがない。値段も一本60ドル、(一シリーズなら160ドルに割り引きされる)

だから、つまらぬ複写ものを同程度の値段でつかまされることを思えばどれくらい、ありがたいかわからない。できうれば同好の方々のご高覧に供したいのだが、こればかりはポルノ解禁を空しく待つより手がないのは残念で、しかたがない。

三月号で伊勢国男氏から妻に対して、ご丁寧なお呼びかけをいただき恐縮している。一月号の「A感覚に魅せられて」は、お説のとおり妻の告白で、最近では妻のアスホールもすっかり調教され尽して、文字どおり年中菊花満開、受け入れ態勢は万全というところだ。伊勢氏はバイブとの併用が効果的といわれていたがフォアプレイ（前戯）の段階ならともかく、クライマックスが近づいてくると、どうしてもバイブを持った手の方がお留守になり勝ちで、物足りない思いをされているのではないだろうか？ その点、前述のラバーコックは、まことに重宝で、激しい動きにも脱落しないし、余計な神経を使わなくて、すむ。「まるで二人の男性に愛されているみたい。いやらしくて、たまらないわ」といいながらも、妻は失神するほどの絶頂感を迎えている。

伊勢氏は同じ三月号の奇クサロンに「同好

レス・ブラウン制作

「バイキング・シリーズ」のカタログ



の士を求めて」との一文を、寄せられていたが、拝見して昔の私たち夫婦の姿を目のあたりに見るような思いがして、なんともいえない親しみを覚えた。当時の私たちもホームポルノにこり、モノクロながら36枚撮りのトライXを使って100本近くも撮影したのだろうか。傑作は全紙に伸ばしてパネル張りまでしたがそのうちに次第にモノクロではあきたらなくなりポラロイドカメラを購入してのカラー撮影、さらにカラーの自家現像までやるようになった。まったく伊勢氏と同じである。もっ

とも私の場合はカラーはエクターのロームのBタイプを使用していたからスライド専門で、プリントにはしていない。

現像も、いまのようにE4プロセスが普及していなかったのでE2、E3プロセス。そのキットが総代理のN産業にさえなく、京阪神を探し回って、ようやく京都駅前のK堂で1/2ガロン用を手に入れる始末だった。リバーサルフィルムの現像はネガとちがって15のプロセスがあり、第一現像—硬膜のさしは温度差の許容度はプラスマイナス0.5度という厳しさ。温度計とにらめっこで現像タンクをかき回しながら「湯を持ってこい」「こんどは氷水だ」と妻を、ずいぶん、こき使ったものだ。

ところが人間の欲望には、きりのないもので、いかに、こつてみても動きのないスチールには、あきがくる。とうとう三年ほど前から自家製の8ミリポルノの製作に進むようになった。それというのも当時、あるルートを通じて国産のポルノフィルムもいろいろ買っていたのだが、どれもこれもお粗末で「これは！」という傑作には、なかなか、お目にかかれない。こんなものに大金を投じるくらいなら、自分の趣味に合った思い通りのものを自分で作った方が、よほど気がきいていると

思ったのも理由の一つだった。

なまめかしい長襦袢の女郎スタイル。黒いネットのストッキングに真っ赤なガーターベルトをつけた欧米の娼婦スタイル。あるいはセーラー服を着せた女学生スタイルなど、いろいろ趣向を替えて撮りまくったが、これら



レス・ブラウン製作
「トロピカル・シリーズ」のカタログ

の8ミリの特長は、そのいずれもがMVAを必ず使い、それぞれで私がクライマックスを迎えるというもの。したがって三、四日かかりの撮影になるのも当然で、そのつど、妻には入念なメーキャップを施さなければならぬから、時間のロスは大変なものだった。

むろん剃毛した上でディルドを使った自慰シーンから花電車に進み、バナナ、習字、ビールビンの釣り上げ、さらにはVとAに卵を挿入して静子夫人よろしく同時に産み落とすなど、およそ考えられる珍芸の総べてを披露させて撮影したが、傑作なのは節くれだった巨大なディルドを手を使わずにカントに吸い込んだり、床にばらまいた多数の銀貨を電気掃除機よろしくバキュームするというプロフェショナルでも不可能に近い珍芸もカメラの逆転撮影装置を使って簡単に撮影できるのだから楽しい。

このトリックを見破れない人がみたら、人間ポンプ顔負けの世界一の名器の持ち主と、びっくり仰天するだろう。フジのRT50（タングステン・タイプ）を使い、延べ6、000フィートは撮影したが、編集のさい、思い切ってカットして400フィートもの二本、300フィートもの五本に、まとめている。いずれ伊勢氏御夫妻も私たちと同じ過程をたどられるのではないかと思うのだが、美貌と素晴らしいプロポーションを持っておられる

奥様のこと、私たちとは比較にならない立派なホームポルノムービーが完成するのではないか。お互いお近づきになれ、作品を持ち寄ってのホームポルノ談義やコレクションに対する、ご批評などに花を咲かせる日が一日も早く来てほしいものである。

最後になってしまったが、伊勢氏は奥様の花芯に穴をあけ金の鈴をつけたとのこと。最近の北欧のポルノでも、こうした傾向がみられ、中には左右の花弁に金のリングを三箇所ずつも、ぶら下げているモデルがあった。私も創作「秘密クラブ・ヘルファイヤー」（71年7月号）の中で、この穴あけを描いたことがある。これは、やはり専門医に相談されるべきだと思う。約二年前私も友人の泌尿器科のドクターに頼み込んでコックの裏側の包皮の境目に穴をあけてもらったことがある。

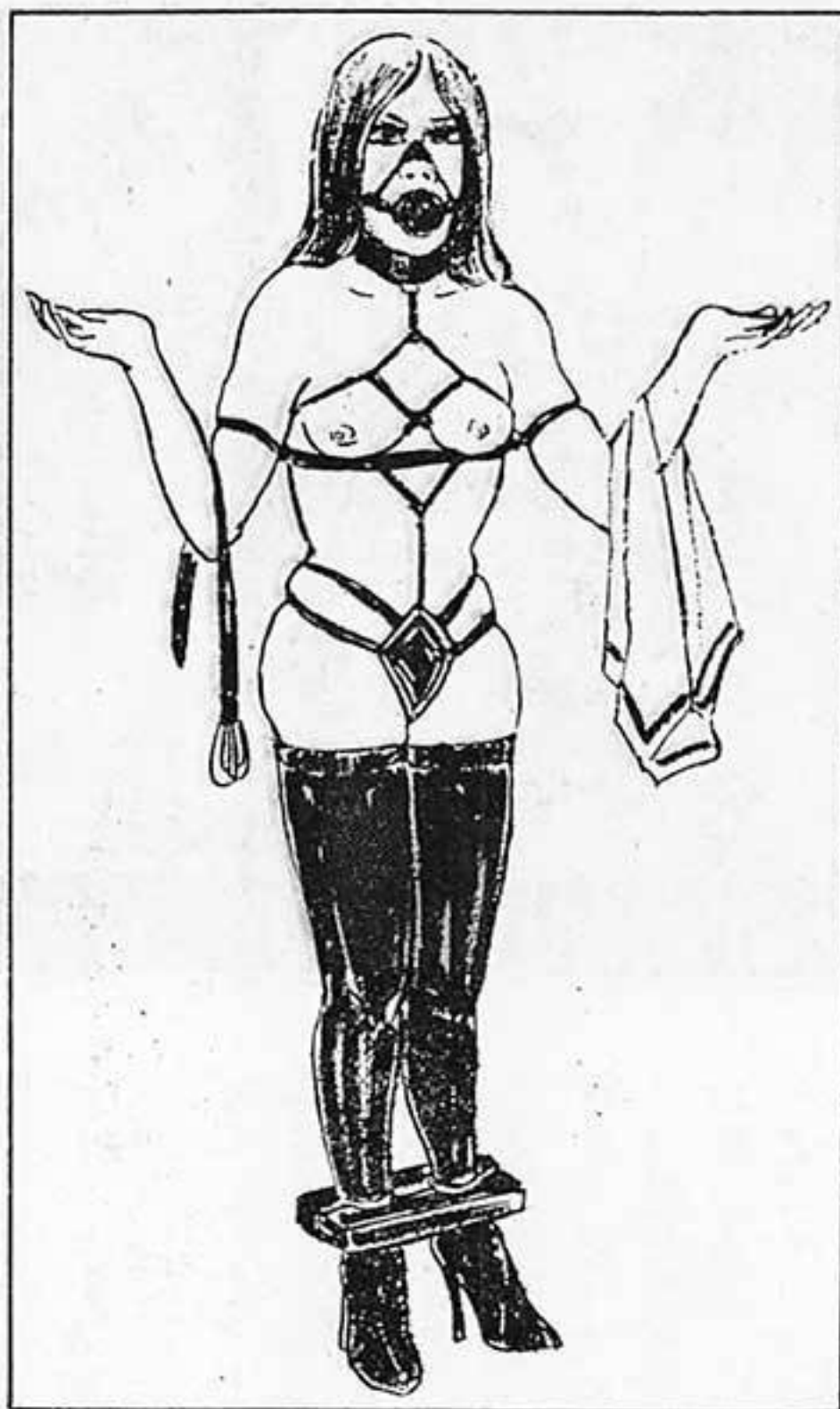
しかし人間の体の回復力というものは大変なもので、たった一日で肉が盛ってしまい、再びあけてもらったが、今度は妻揚子を通して肉の盛り上がってくるのを防がねばならなかった。しかし、そのまま捨てておくと肉が巻いてしまつて妻揚子が抜けなくなるので、少なくとも一日数回は、ぐるぐる動かす必要がある。そのたびに傷口が破れて出血するので三日ばかり頑張ったが、とうとう諦めてしまった。穴をあけることは専門医なら特殊な器具で、いとも簡単にやってくれる。

S 小説三部作

残酷・スター誕生

〔第一部〕 変身

カット・志羽利也



久留木 栄

心は通う ひとときの
愛のあかしの

ひとしづく

清纯スター大島さゆりの
流行歌「愛の泪」が聞こえ
てきた。花やかなステージ
から深いムードのメロディ
が流れる。歌詩も、曲もブ

一人はキャバレー「火の弓」の経営者、小
川等志社長（四六）。この地方では、いや興
行会では知らぬ者はないと言われた、若手社
長のパリパリだった。いま一人は、その友人
で北山伍郎。年齢も、はっきりしないが職業
も、はっきりしない。しいていえば、トラブ
ル・コンサルタント、とでもいったらよかる
う。

◇ 発端 ◇

流す泪は、だれのもの
いとしい人に贈るもの
遠くはなれて いようと

ルーでありながら、不思議とホットな感じの
歌い方。それが、諸岡あけみの特徴だった。
「よく似てるでしょう」

「まったくだ。そっくりさんだ」
ステージから程遠からぬボックスの中で、
二人の男が、ひそひそ話をしていた。

小川がシックな背広を、いきいきこなして
いるのにくらべ、北山は、日本人ばなれした
服装をしていた。本場、英国でも珍しいとい
われるくらいの渋い身づくろいで、スキがな
かった。
「噂以上の女ですネ」

「ええ、やはり残念です」

「わかりますよ、その気持。とにかく、あけみのことは、わたしにまかして下さい」

北山は、ゆっくりした言葉でしゃべった。

その言い方に自信が、あふれていた。

× × ×

ボックスの中で、そんな話がささやかれて
いるとも知らず、あけみは熱演していた。歌
が歌えて踊れる。そして、清純スターの大島
さゆりのマネをしていれば、まずは、うける
こと間違いない。そう考えているのだろうか
衣装も髪型も、さゆりに似せていた。

× × ×

「一五三センチ、八二センチ、六五センチ、
八〇センチでしたネ」

「そうです、本物が一五二センチ、七九セン
チ、六六センチ、七五センチですから、全く
似てますネ」

北山は楽しそうにビールをのみ、にこにこ
笑いながらステージを眺める。その目が、と
きどき鋭く光る。

小川が北山を知ったのは、自分の経営する
キャバレー「火の弓」に歌手や映画・演劇人
を出演させたことからである。こうした人た
ちの間に「クツ」と呼ばれる愉快な男がいる

からと、すすめられ知人になったのだが、何
度か飲むうち、頼もしい奴ということになり
失踪女優、仰木ひろみの世話を頼まれ、うま
く処理したことから、いっそう親しくなり、
いまでは、この町に北山がくると、必ず小川
の家に寄るようになっていた。

× × ×

この日は約半年ぶりの訪問だった。

「珍しいな」

「ともかく、のもう」

と大川の家を振りだしに料亭「ひさご」に
くりだしたところで、ぐちになった。滅多に
ぐちをこぼしたことのない小川だが、やはり
あけみのことには未練があったらしい。

「そんなに、いい女か」

「そうでもないんだが、掌中の珠をとられた
感じなんだ。商品にそだて、これからという
ときに」

「いまどきは、映画俳優でも、そんなのが多
いからな」

「全くだ」

小川は、それがきっかけで一応のあらまし
を北山に語って聞かせた。

小川の経営するキャバレー「火の弓」のホ

ステス諸岡あけみが、競争相手の観光キャバ
レー「月花星」に引きぬかれたのは、春の終
わり頃だった。

二十一歳「火の弓」のスターといわれるく
らい人気が出ていただけに、この地方の水商
売の間で、ちょっとしたニュースになった。

しかも、あけみは創設当時の古顔で、ま
じめで評判がよい子だっただけに、新興「火
の弓」の経営者、小川にとっては許しがたい
ことだった。しかしこの世界では、よくある
こと。表面上、ことを荒だてるわけにはいか
ないが、なんとか復讐をしてやりたい、と小
川は考えていた。だが、あけみは、そんなチ
ャンスを与える女でもなく、また「月花星」
の経営者の林友善のバックには組織暴力団、
飯田組の代貸で、飯田文実親分の実弟光三が
「月花星」の支配人となって控えていた。そ
れだけにシャクのタネである。

小川が「火の弓」を開業したのは四年前。

そのとき、あけみは両親を事故（炭坑）で失
い、都会に出てきたばかりだった。やぼった
い鉦山（ヤマ）の娘だったが、小川は、その
タフな持ち味とセンスのよさに目をつけ、親
代りとなり、ホステス中のホステスとなるよ
う、育てた。だから行く行くは、しかるべき

男をみつめて、と考えていたくらいである。だが、そのチャンスもないまま、あけみは小川を裏切った。当世流に言えば、金を多く支払ってくれる方に、つくつと、いうわけである。月給をあげて欲しいなら欲しいと、はっきりいえば考慮したのにも思っても、もう遅い。あけみを口説き落とす相手方の巧妙さに、よけい腹が立つばかりである。

小川も、もうこの町では市議を二期つとめ上げた、若手のホープといわれる男である。腹が立つからといって、ホステスの引き抜き騒ぎに目くじらを立てるわけにはいかない。支配人を呼んで事情を聞き、今更ながら若い女を信じた自分を、うかつだと苦笑するしかなかった。

「とにかくシャクだ」

そういうと北山は、「それなら、その女を見よう」と、小川を連れ「月花星」に、のりこんできたのだった。

× × ×

白のカクテル光線をあび、グリーン一色のミニスカートのあけみは、さっそうと舞台を降り、舞台のそでで一息いれた。場内からドツと拍手がなった。小川も思わず拍手しそうになるタイミングのうまさである。再び舞台

に出て、あいさつした、あけみは、こんどは「もう一曲」の声を背後にステージを降り、指名の客やフリーの客にビールをついで回った。

軽やかな足どり。黒い髪、黒い目。上気して、ほんのり紅のさした膚は艶やかで潤いがあつた。それでいて若々しく、大島さゆりの清純ムードを、ちよっぴり持っていた。

× × ×

「これじゃ『月花星』がひきぬくのもムリはない。こんどは、おれがひきぬくか」

北山は不敵に笑った。

「まさか」

「そのまさかだよ……人生は」

クツは、そういう人生が好きといわんばかりであった。

二人は二、三十分間、そこで飲み、引きあげた。

◆ 失 踪 ◆

それから一カ月後である。あけみは、全く前後の音信もなく、小川の目の前から、暴力団飯田組の前からも、まるで蒸発でもしたように姿を消した。

このことが小川の耳に入っただのは、更にそれより約一週間後のことであつた。日ごろから目をかけているバーのママで、「月花星」のホステスとも仲良しの友達が多い弘子が、教えてくれたのだ。

ほろ酔い加減でぶらりと弘子の経営する、「よろけ大名」に顔を出した小川に、弘子はいきなり、こう切り出した。

「あーら、ひとしちゃん、珍しいわね。あなた、あけみの噂、知ってる？ もっぱら、ひとしちゃんが、かくしたという評判よ。どうしたの、いったい」

「知らないよ、何の話だい」

「そんなはずはないでしょう。諸岡あけみの失踪事件よ」

「え、そんなことがあつたの」

「あら、ほんとに知らないの。フーン、おかしいワネ」

と弘子は、いぶかしげに頭を、かしげた。

それから、ぼつぼつ、語ってくれた事は、小川にも意外な話であつた。

「ほら、清純スターで売り出した大島さゆりが、この町に來たことがあるでしょう。あのとき、さゆりは『火の弓』でなく『月花星』に出演したワ。その夜あけみは、さゆりとそ

の若いマネジャーに連れられ、黒いクライスラーでホテルに向かったの。その途中、自宅付近で降ろされたまま行方がわからなくなったのよ。翌日から大騒ぎだったの。警察沙汰にこそならなかったけど、クライスラーの運転手もマネジャーも飯田組に調べられ、降ろしたことは間違いないというのよ。謎の失踪だから、ひとしちゃんが帰路に、待ち受けていて——」

「冗談じゃないよ。オレはそのとき、党の選挙対策会議で上京していたことは、君も知っていたはずじゃないか」

「ええ、それはそうよ。でも、ヘンねえ。だって、ほかに原因がないもの——。飯田組では、ひとしちゃんが不在だったことで、一応ひとしちゃんへの疑いは解いたようよ。それにしても、それくらい下宿には帰っていないし、ウンともスンともいってこないらしくって、組では、まじめに警察に家出人搜索願いを出そうかと考えたくらいだそうなのよ。それを組長が抑えたんですって」

「ほう、それはヘンだ」

「ヘンって？」

「あなたも知っているだろう。あけみという女は、そんなスキを与えるような女ではない

と、ボクは思っている」

「そうね。でもそれなら、なおさら、ナゾじゃないの」

「ナゾか」

そういつて小川は思わず腕組みをしたが、ふと、これにはクツが一枚かんでいるな、と思った。

× × ×

そんな小川のもとに、ひょっこりとクツからの便りがあったのは、それから約半年もたってからである。人の噂も七十五日。もうこの町では、あけみの噂も全くとだえ、人の耳から忘れ去られた存在になっていた、そんなころである。

そのころテレビに押される映画界はSM路線を走っていた。大島さゆりも、その影響をまぬかれず、時代劇に出演させられSM女優1号になったほか、純情映画やテレビにも、あいもかわらず八面六臂の活躍ぶり、スタン・インでもいるんじゃないか、という噂も一部に出ていた。

それだけに北山の手紙を見た小川は、びっくりし、目を見はる思いだった。

文章は例によって簡単なものだった。

『君は大島さゆりの『月花星』出演で、かな

り気分をこわしたのではないかと心配していた。まあこれは、遠謀深慮もあること。話はいずれいつかの酒のサカナにしよう。ところで、あけみ君の処置、こんなもの（同封の写真）でいいのでしょうか。これは、珍しく本人の顔の見えるスチール。当分は、さゆりの代役専門で、責めシーンばかり、とらせています。なにしろ、それ専門のスタンディンは一人しか、いませんから。呵々』

その写真はカラーでアップと全景の二枚あり、いずれも乳房を露出したあけみが、腰巻一枚の、しどけない姿で高手小手に縛られ、責められているで、映画『千代姫受難』のシーンだった。

小川はその時、クツのいう「まさか」とはこのことかと、いまさらながら驚いた。

× × ×

それから、さらに半年たった。あれから小川が上京すると妙にクツは旅行に出ているという、めぐりあわせが続いて、会う機会がなのまま、小川は欧州旅行に出かけることになった。一度その前にあいたいと思っていたら運よく、その前日、東京の宿舎にクツが訪ねてきた。北山は例によって、英国紳士スタイル。葉巻を、くゆらせていた。

……イメージギャラリ……『コートを脱いで』……須坂 旭……



その時、ざっと一年間の、あけみの生活や失踪事件の一部始終を話してくれたが、なるほど女心をそそる盲点は、妙なところにひそんでいたと小川は、あきれもし、そんな弱点をつかれた、あけみがあわれですらあった。それと同時に、平気でスターを育て、そのう

ちには幾多の女性を踏みこむ映画、テレビという近代企業の残酷さは、ききしにまさるものだと身ぶるいが出る思いだった。だが、あけみは、こうした世間をも、のりこなしていまはスターになろうとしているという。全く世の中は、わからないものである。

クツの話を中心に、あけみ失踪事件を再現してみると「真相はこうだ」と、まるで一篇のSM小説まがいの物語が、できあがってくる。

◆事件のあらまし◆

話は再び一年前にさかのぼる。

大島さゆりの所属する西映は、テレビ攻勢にたえかね、なんとか、もうける映画をと考えていた。IO・グロ路線OK。ギャングもOK。となんでも、とびつく姿勢だった。かといって、アングラ並みには、おとせないし、何とかしたいというので清純スターとして人気のある大島さゆりを時代劇に出演させることで時代劇をテンポの早いものにし、西部劇まがいのアクションに富んだものにし、人気挽回を企図していた。さゆりを選んだのは、さゆりの体が小柄で時代劇向きであること、清純派のイメージを姫様にいかし、姫様をいじめることで大衆の支持を一層、固いものにしたというネライがあった。そして最初に企画されたのが、武士道残酷物語「千代姫受難」である。落城の城主の娘、千代姫の受難劇で、筋より、さゆりの受難場面が見世

場の映画だった。

しかし、さゆりは、この千代姫出演をOKしたが、裸はいとわれないが縛られるのはイヤと注文をつけてきた。なにしろ、さゆりは映画界育ての親の故山村元右衛門の娘だけに、親族の意向もあって、責めシーンは代役で、ということになった。千代姫受難を企画した佐藤監督は反対を唱えはしたものの大勢には抗しがたく、しぶしぶ了解。さゆりに代わる責めのスタンドインをひそかに探し始めた。

ところがスタンドインそのものが少ない上に、そっくりさんがギャラで地方巡業できるような時代。おまけに責め専門、そんな代役が、そこらあたりにいるわけではない。やむをえずクツに大任が降りかかったのは当然のことである。というのも、クツならという気を西映の幹部が持っていたのと、佐藤監督と、さゆりのマネジャー岩村とクツの三人は、学生時代の同級生だったことからである。

さっそく手を回して調べたクツは、さゆりによく似たホステスが『月花星』に引きぬかれたという噂を重視した。そんな矢先に小川とあったのである。小川のこぼし話に相槌を打った筈であった。

クツは、あけみを見たたん、この女は、

ものになると感じた。ひよっとすると将来、さゆりを、くってしまうかもしれないと思った。クツが、そう思ったのは、あけみの感じに肉感的なものがあったこと。恩のあった小川をすて、銭で動くドライな性質が、この社会に向いていることなどである。

東京に帰ったクツは、さゆりの兄のマネジャー岩村と佐藤監督を呼んで話し合った。

「いい娘がいる」

「ものになるか」

「かもね……だ」

「これはSM専門で、いけるかもしれないぜなにしろ肉感的だ」

「そうか、よし決まった。少しふんばつしてでも、早速、そいつをとろう。SMを教育しなくっちゃならないからな」

「ところで、どうして引き抜く？」

「まず、キャバレー『月花星』のマスターを口説くことだね。これには、さゆりの『月花星』出演と飯田組に見返りのギャラ百万円、それでいいだろう」

「百万か。ま、仕方なからうね」

「契約はスタンドイン契約で、ギャラは月二十万円。当分、さゆり専門ということで、いいのではないかな」

「なるほど、一年契約で更新という奴か」

「ま、そんなものだ」

「清纯スターが二人いるとわかるとファンのイメージをこわすので、自宅では、あけみの住家から一步も出ないこと。あけみの家の地下に一部屋つくって住んでもらう。あけみの動作を勉強してもらう。うちの撮影スタッフ以外には絶対、顔を見せない——という条件で、どうだろう」

「それはいいが、それでOKするかネ」

「しにくいのをOKさせるのが、クツの腕のみせどころだよ」

「なるほど」

「それが実現したら、われわれの徳川時代劇考証研究、のヒロインを、してもらおう」

「それはいい」

と意見は、まとまった。

徳川時代劇、考証研究会というのは、クツや佐藤、助監督の潮六平らで作っている研究会で、江戸時代劇といわないところがミソであった。というのは、江戸時代劇の中に現代を持ちこむための時代考証を、どうするかというところが研究のテーマだった。その反面、出世欲に目のくらんだ若い女優の卵を、うまくだましてモデルにし、縛りあげて楽しむと

いう、佐藤らの遊ぶ会でもあったのである。

佐藤監督らは性格的にもサジストであり、一致した面をもっていった。だから本格的責め映画をと社の方針で決まったとき、この研究会は、きわめて貴重なものになり、一週間前にも開かれ、グラマーな新進、依田よし子の涙を、さんざん、しばったばかりだった。依田よし子は、千代姫受難では、さゆりの相棒をつとめることになっていた。

それを、えさに佐藤監督に口説かれれば、この研究会のメンバーにならざるをえない。そんなわけでSM旋風は、あけみの引き抜きを前に、早くも西映内部に風波を、たて始めていたのである。

× × ×

クツは、さっそく飯田組組長飯田光三の元にとんだ。飯田は全国組織のある川西組の若衆頭であった。クツは川西組組長の川西展蔵親分の添書をもらうのを忘れなかった。

「いやあー、驚きましたな。売れっ子スター大島さゆりの出演ですか」

と飯田は目を、まるくした。川西親分の添書には『こんど御地で大島さゆりの公演があるので貴キャバレーに出演させたい。よろしくギャラを奮発してくれ。万事はこの男、北

山伍郎によろしく。北山は遠い縁籍に当たるもの、男にしてやってくれ』とあった。

飯田はこの方面に余りコネがなかった。大親分の添書を持ってくるだけで驚きであるのに、スターが出演してくれるとなると、願ってもない宣伝材料であった。

「で、ギャラは、いくら？」

という飯田組長に、北山は軽く一千万円と吹きかけた。一千万というのは決して高くはない金だが、暴力追放運動で資金源の乏しくなっている組織にとっては痛い出費である。

「うむ、ふむ、一千万」

と腕組みする飯田に、北山は「ある条件をのんでくれれば、相殺してもよい」と切り出した。もちろん、ある条件というのは、あけみ引き抜きの件である。北山は口説きに口説いた。口説かなくても、飯田組長が断われないことは知っていたが、そこがクツのクツらしいところであった。

「実は、おたくのホステス、諸岡あけみさんが実にいいセンスをしているので、西映としては、ぜひこれを、スターにして売り出した。そういう計画を立てているのです。ですが、いますぐ映画にといっても、本人もまだ演技力があるわけなので、一年間ほど大島さ

ゆりのつけ人ということで、その代役をしりして演技力をマスターしてもらう、つもりです。だが、スター養成には世間の目が、うるさいし、本人の心がけも大切。それで、まず飯田組長さんに相談したわけです。本人のOKをとり、秘密裡にスターに仕立てられないかとネ」

「なるほど。で、それと大島さゆりの出演とになにか……？」

「いや、それは別の問題です。さゆりの地方公演は規定路線で、普通なら小川興行に引き受けてもらうべきでしょうが、まあ、ここはあなたの顔をたててというわけなんです。でこちらも無理を頼んでいるのだから、ギャラは棒引き。さゆりの小遣いに百万ぐらいも戴けば、よいと考えています」

「それでいいのですか。百万円の小遣いぐらいなら、なんでもないこと。それじゃ、あけみのことも目をつぶりましょう」

「じゃあ、こちらは、さっそく諸岡嬢と交渉することにしてましょう。あけみには当分、知らせずにおいて下さい。さゆりの出演の日にあけみに、さゆりの歌をうたわせ、そのお礼に、さゆりのハンドバッグを贈る。その席上で出演を口説くことにします。OKしたら、

その場から誘拐したように姿を消さしましう。キャバレー「火の弓」との、いきさつもあることですし、失踪という形式をとった方が、あなたにとっても好都合でしょう」

「そこまで考慮して下さったら、当方には何の異存もございません。なにしろ、大親分の紹介でもあり、それでは手付け代りに」

と飯田組長は、さっそく代貸の弟光三を呼び相談。そのあとで金一封を、もってきた。

帰路クツがあけてみると二百萬円で、クツの言った金の二倍だった。駅まで見送りに来た飯田兄弟は

「ともかく交渉がうまくいかなかったら、わたしは引導を渡してやります。思う存分にしてお下さい」

と確約してくれた。そうして計画は完全にできあがったのだ。

◆映画出演への道◆

大島さゆりの「月花星」出演は、夏の夜の納涼水着パーティの席であった。映画スターの来演というだけに前景気がすごく、ホステスたちは、そわそわ。ボックスも満員。これで二百萬円は安いと飯田兄弟は目を細めてい

た。

まだ何の話も聞かされていない、あけみは自分のオハコの本人が来るというので何だか変な気持ちで、落着かなかった。着物を吟味し美容院に行つてその日の午後出勤すると、すぐマネジャーから、肩をたたかれた。

「すごいぜ、あけみちゃん。大島さゆりの監督の佐藤さんから名差しだよ。さゆりちゃんの席に、いっしょについて。いっしょに歌ってくれというのだ。あとで、おごれよ」

「へえ、ほんと？ かつがないでよう」

「かつぐもんか——」

「ほんとうなの？」

とは、いつてみたものの、まだ、あけみは信じかねていた。だが同輩、先輩のねたみを一身にあびてみると、はじめて実感がわき、ベテランと、うぬぼれてはいても、ポーツとのぼせあがってしまった。

さゆりは淡いグリーンのに地にシルクの光るブラウス、グリーンのフレアスカートをはいて、登場した。あけみも同じ色合いで、さゆりに似せた服を着ていたが、本物には遠く及ばなかった。夜も深まり、客でにぎわったころ、さゆりは新曲の「花の若さに」を歌ったあと、十八番の「優しさを、こよいも」を、

ゆっくりしたりリズムで歌いあげた。さすがに声のはりもあり、節まわしも、うっとりするくらい巧みだった。

拍手の嵐の中で、さゆりは、あけみたちのいるメインテーブルにやってきて、あけみの横に坐った。

その時、あけみは、マネジャーの岩村四郎に酌をしていたが、ビールびんをにぎる手がふるえ、ガラスが、かちかちと音をたてた。

「素晴らしいワ、素晴らしい」

あけみは、それだけを小声で、くりかえしなかなか興奮がおさまらないといった、かたちだった。実際そう思っていたのだ。これらの一連の行動が、すべて計画的に、しくまれたものであるとも知らず、あけみは純粋に喜ぶ。そんな、あけみを好ましく見ながらマネジャーの岩村は代貸の飯田光三に、

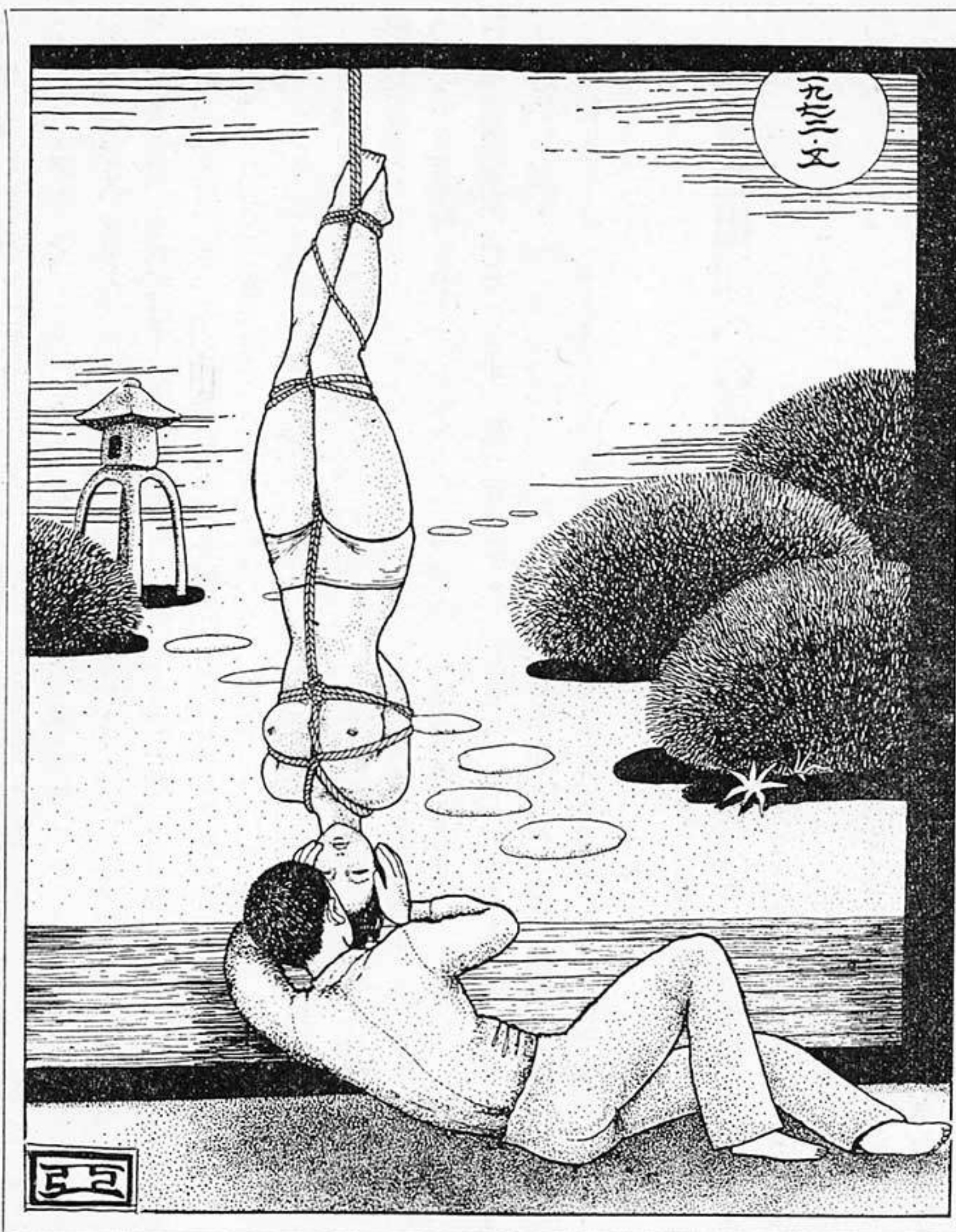
「ねえ、マスター。あけみちゃんに、ちょっと用があるのだが口説いて、いいだろうか」と聞く。光三が

「あけみちゃん、岩村さんが、君と話したいって呼んでいるよ」

といつても、あけみは、まだよく、その言葉が聞こえないほど、上の空だった。

アンコールにこたえ、大島さゆりが、また

……僕のイメージ画集……『静（せいや）夜』……室井亜砂路……



ステージに立った。

さゆりは、にこやかに、えしゃくし「ミニ

ミニは私の世代」を軽く歌った。

歌い終わると、また、すばらしい拍手。

拍手が鎮まると、岩村四郎が、いつしか、

さゆりの横に立っていた。

「大島さゆりちゃんの好意で、本日のシンデレラ姫に、さゆりちゃんのハンドバッグを贈ります。その幸運な人は誰でしょう」

その一瞬、シーンは場内は鎮まった。

「それは……」

満座の視線を集めたさゆりの白い細い指がしなやかに伸びて、あけみの方を指さした。

「それは、当店の、さゆりちゃんこと、諸岡あけみさんです」

どっと拍手がきた。その拍手は、なかなか消えない。この店での、あけみの人気の根強さを示すものだった。

あけみは、あがっていた。ぼーっとした。岩村にひき出されるまま、ステージに立ち、さゆりと握手。なにか、しゃべった。それから、どうしたのか、ともかく、さゆりといっしょに「愛の泪」を歌ったことだけは間違いなかった。このアクシデントに場内は酔っていた。あけみは、にわかに忙しくなり、ステージから降りると、お客のサービスに追われた。

場内の興奮がおさまったところ、飯田光三があけみを呼びに来た。

「シンデレラ姫、さゆりちゃんがお帰りだ。そのままの服装でいいから、車で送って行き

なさい」

と言った。仕事着のまま外に出ることは普段なら許されていない。これは異例のことだった。

「はい」

と返事した、あけみは、皆にすすめられるまま黒いクライスラーにのり込み、さゆりの横に腰かけた。さゆりの白い手が、あけみの手を握った。その手を、ふりほどきかねながら後ろをふりむくと、ハンカチが、いくつもふられていた。車は夜の町に突入していた。

嵐が去り、静かさが訪れた。

興奮が去った。

「落ちついた？」

「ええ、すっかり、あがっちゃって……私、

恥かしいわ」

「いいのよ。ネ、私、いって、いいかしら」

「何？」

「実はねえ、お願いがあって、あなたにきてもらったのよ」

「お願い？」

「ええ。わたし、これでも、とっても寂しがり屋なの。あけみさんと同じように両親がいないの。だから、いつも岩村や、おばたちに監視されているのよ。とても寂しいのよ。ど

う、いっしょに住まない？　そして映画俳優にならない？　そしたら少しは、にぎやかになるワ」

「えー、映画俳優？」

「ええ、私といっしょに映画に出ない？　私の家、とっても大きいのよ」

「まさか私が——。映画なんか考えもしなかったワ」

「大丈夫よ。わたし、きょうのあなたを見ていて素晴らしい人だなと思ったのよ。一年ほどみっちり勉強したら、きっといい女優さんになれる。そう直感したの。岩村に言ったら、彼も同感ですって。私には姉や妹がいなくて。だから、このまま私の家に来て妹にならない？　私はいまスタンド・インを捜しているのよ。私の代役をしながら、しっかり勉強したらいいわ。キャバレーのホステスをしていても、うだつが、あがらないワよ。あなたも、やがてスターになれるのよ。どう？」

「どうって……いますぐにと言われても自信がないわ……」

「そりゃあね。でも自信なんかどうでもいいのよ。慣れたら、どうでもなるわ。あなたに異存がなかったら、さっそく、そうしましう。きっと、あなたも気に入るわよ。岩村の

話では、ギャラもはずむといっているし、仕度金も出すように、交渉してあげていいのよね。さゆりが、こんなに口説くなんて初めてのことよ。それだけ太鼓判を押されたと思わない？」

「ええ。でも……」

「心配ないわよ。万事、マネージャーの兄にまかせておけばいいのよ。実は、もうそのことで飯田組長や支配人にも相談してあるんですって。いつでもOKだそうよ。あとは、あなたの気持次第——と、いうわけなの」

さゆりは、ここをせんとと、よくしゃべった。巧言令色鮮きかな仁^{すくなじん}というのであろうがあけみは不幸にも論語は知らなかった。

ぽーっとして答も、できなかった。

「さゆりちゃん。そう、たたみかけては、わるいよ。どうです、飯田さんの別荘あたりでゆっくり、話しては」

そういう岩村のすすめで車はUターンし、町はずれの飯田の別荘に行った。『私亭・白雲荘』と看板の出ているこの別荘は、昼なら山が美しくみえるのだが、夜は、ひっそりと静まりかえっていた。

光三の案内で岩村、さゆり、あけみの順で応接室に通された。そこに佐藤監督やクツラ

が待っていた。予め打ち合わせが、してあったらしい。

黒い皮の豪華なソファ、マルチグラスの置き物、赤いジュタン。淡いワインの飲み物が出た。それを傾けながら、こんどは岩村が熱心に映画界入りを説いた、監督も熱心にすすめるし、支配人の光三の、あとおしもあり、さゆりも、ついに同意した。

契約書を見せてもらい、サインした。

「これで、いいのかしら？」

「いいとも、万事OKだよ」

と、佐藤監督は初めて笑顔をみせた。

契約書は、一つは、西映との専属契約書。

一つは、さゆりとの代役了解書とでも、いふべきものだった。

専属契約書は、

一、諸岡さゆりは西映との間にこの三年間専属出演契約を結ぶ。西映との了解なしに他の一切の映画演劇テレビに出演しない。

一、支度金は八十万円とする。

一、出演料は一本二十万円とする。

一、当分の間、月手当十万円を支給する。

一、双方責任を持って、この契約を守り、

違反した場合は賠償金を支払う

と、なっていた。

一方、さゆりとの代役契約書は

一、諸岡あけみは一年間、大島さゆりの代役として出演することを西映と契約する。

一、諸岡あけみは、この代役には、どんなシーン、たとえば残酷・全裸シーンも、いとはないことを誓う。

一、この契約期間、大島さゆり家に起居し大島さゆりと親族および映画撮影関係者以外の人には顔を合わせないよう努力する。

これは大島さゆりが二人いることを世間に知らせないためで、その秘密保持には厳重注意する。

一、さゆりは、あけみに月手当十万円を支払う。あけみは俳優としての訓練もかね、積極的に、さゆりの指導を受ける。

一、この契約は一年契約とし、双方が異存なければ、その都度、延長するものとする。と、なっていた。

ともかく、これで全部の書式は、とこのったのだ。その意味する文面が、実際どんな不幸をもたらすか、あけみは、これは一つのカケだと思った。

◆トランク詰め輸送案◆

一息ついたところで、

「さて、あけみさんの、これからの身のふり方だが……」

と、まずクツが口をひらいた。

岩村が、それをひきとるように続ける。

「ホステスから映画界にデビューした例は山口〇〇子など例がないことはないが、あまりパツとしない。ホステス出身の身分を、かくすのも一つの手だな」

「新聞社にかぎつけられたら一巻の終わりと

いうわけだな。大々的に報道されるだろう。あけみさんの演技もしっかりし、独立できるようになっていれば別だが、ともかく、この引きぬきが、ばれれば、清純派女優が売り物の、さゆりちゃんの代役は、むつかしい。このあたりを、どう処理するかだ。さゆりちゃん、どうしたらよい？」

「そうねえ。ちょっと考えつかないワ」

さゆりは、まだ、あどけなさの残っている顔を、ほころばせていった。この、あどけなさ、くせもので、本物は、もうかなりの年のはずだが、とクツは思った。

「なにしろドラマチックなできごとだからなあ。いっそ、もっと劇的に、謎の美人ホステス失踪という風な細工をしたら？」

そうだったのはクツである。岩村が聞きかえした。

「失踪？ 確かに面白い。だが、バレたら」「バレないところがミソなんだが、もしバレたら、たとえば、清純派女優を慕ってホステス逃走。そのホステスが更生。と逆宣伝に使う手はあるネ」

「なるほど。用意周到だな」

「ところで失踪となると、おだやかでないがその事実を作るには、この場からの方がいいと思う。いままでの、あけみさんの生活と、ふんぎりをつけるためにも、それがいいと思うんだが……。なあ、あけみ。後始末はワシにまかせて、そうしてみないか」

光三も失踪説を支持した。そして奥に姿を消した。

「わかりました。契約した以上、五十歩百歩ですから。でも、この服装では人目につきますワ」

「そうだな。どうしよう、クツ」

「わけないですよ、岩村さん。例のトランクを使いましょう」

「トランクというと」

「わたしが説明しましょう」と、さゆりが語った。

「ロケ先などで——大群衆にかこまれたりするでしょう。そのとき、かくれて逃げ出すために使うの。普段は着替えの一、二枚しか入っていない、ジュラルミン製の大型トランクなのよ。これにかくれて逃げるのよ。衣裳道具入れで、たいてい旅行には持って行っているワ。だれも、それに本人が入っているなどわからないので、スリルがあっているワよ。チョッピリ、誘拐されたような気にもなるのよ。そのトランクに、あけみちゃんを入れ、私が持って出るという寸法なの。もっとも、重いのでクライスラーに積んだらいいワ。これなら人に顔を見られることもないし、二時間の辛抱で、ドラマは完成というワケね」

「なるほど」

「でも、きょうは旅館に泊まるとして、君の家までとなると、ざっと半日。そんなに我慢できるかね——」

「途中で出せば、いいでしょう。私の経験では三時間ぐらいなら我慢できると思うワ。あけみちゃんの考えは？」

「考えて、そんな経験はないし、きゅうくつなんでしょうね」

「それは仕方ないワよ。それに荷物になるんだから。体をベルトでとめてないと危険だワ

ネ。ぎっちり、まるで展示された昆虫よ。それだけにスリル満点だけど」

と、さゆりは、いかにも楽しそうだ。何度もトランクにかくれてファンをまいた経験があるという。「これもスターへの勉強ね」と笑う。あけみは、そんなものかなと思った。

こうして結局、あけみはトランクに入ってからトランクを持ってきた。

◇実行◇

ジュラルミン製のトランクだった。カギをあけると、頭のところに小さな酸素ボンベがついている。まったく人間運搬用のトランクに、できていた。これに入って運ばれるのかと、あけみは目を皿のようにしていた。

「こうして、いるのよ」

と、さゆりが入ってみせた。足を抱くようにして、こんもり中にこもると、それはもうオトギの世界だった。悪者が令嬢をさらうというシーンに似ていた。派手な衣裳がトランクから、こぼれていた。さゆりは、もぞもぞしていたが、やがてトランクから、はい出しあけみに入ることを、すすめた。あけみはマ

ネをした。体が同じ大きさなのでトランクはすっぽり、あけみをのみ込んだが舞台衣裳が邪魔だった。

「どう？ 感想は」

「なんだか罪人みたい。スリル満点ネ」

と、それでも心は、はずんでいた。

「じゃ、OKなのね。それじゃあトイレに行つて準備して頂戴ね」

さゆりの命令で、あけみは、いわれるとおりにした。トイレに行つて化粧を落とし、さゆりの命ずるまま衣裳をぬいてブラジャーとパンティだけの姿でジュラルミンのボックスにおさまった。契約書も、その中に入れられた。本番なので胴に幅広いベルトを巻きつけて締め、さゆりの手で手足と頭が、それぞれベルトで固定された。足は足首、手は手首、頭はヒタイと、それぞれ柔らかい革のベルトでトランクの中にとめられる、しくみになっていた。固定が終わると、

「どう？ 気分は！」

と、さゆりは冷やかした。

「いくら暴れても、もうわたしがハズすまでは出られないのよ。このまま、上海の暴力団にでも売ろうかしら。あけみちゃんなら、きっと一千万円で買いに来るワよ」

と冗談をいう。

「脅かさないでよ」と、あけみは笑ったものの、もし本当に、そうされても、もうどうにもならないと思った。

「きょうは旅館までの予行演習だワ。三時間の辛抱よ。さ、酸素マスクをつけるよ」

と、さゆりは鼻と口をゴムで覆った。ちょうど高々度飛行のときのようなもので、口にマウスピースをくわえさせて押えた、かたちになった。そして酸素ボンベを始動した。これで万事準備は、ととのった。さゆりの合図でクツたちがきて、フタをしめた。二重底、防音装置つきの、トランクは実は、さゆりの希望で、あけみ専用に作られたものだった。さゆりは一人でよい。二人目のさゆりは、人目については、いけない。だから家を出るときは必ず、このトランクに入れ、撮影所しかあけない。帰るときも必ず、そうするという筋書きになっていたのだ。一度、あけみの代りに入れられた、さゆりは、完全装備されたたった十分間で悲鳴をあげてしまった。息ぐるしいというより、動けないことに、まいったのだ。そんな状態に、あけみは何時間も、しかも、これから毎日、入れられるわけである。代役さん……全く御苦労さんと、さゆり

は思った。

あけみの姿が視界から消えると、

「ああ、しんど」

と、まず、さゆりが一息、いれた。

「さすがに名演技だね」

「だって、こちららも必死ですもの。もし、あけみ誘拐に失敗したら、君が天井から吊るされるんだ。毎日毎日、裸にして縛られるんだよ、って佐藤さんが、おどすんですもの。佐藤さんは、それでなくてもすごいんだから」

「ハハハハ、そんなに、きらいか。さゆりちゃんも案外、縛られるのが好きじゃないかと思つていたんだが」

「いやよ、縛る方が好きだわ。好きな人に縛られるのならいいけど、仕事で縛られるのはいやネ。佐藤さんに縛られたら殺されるワ」

「殺されるというのは誤解だよ。でも、さゆりちゃんの口説きで、一コロ——純情な娘だね。映画出演の色よい話なんて、そうどこにでも、ころがっているハズないもんネ。それが、ねらいだ。クツも罪つくりな男だな」

「なにを言ってるんだい。この考えは、もともと、君や岩村のアイデアじゃないのか」

「まあまあ。内輪もめは、やめようぜ——」

「とにかく、出発しよう」

さゆりが光三を呼びに行った。

あけみの衣裳はクツの手で、もうすっかり別のトランクに詰められ、現場には失踪に関する何の痕跡も、とどめずに、大小二つのトランクは、運転手達が車に積みこんでいた。

「たいへん、お世話になりました」

「じゃあ、よろしく。皆さん、くれぐれも、あけみを頼みますよ」

と光三は、ていねいに頭を下げた。

車は門を出て、再び夜のしじまの中に消えた。その車の中で、さゆり達は賑やかに歓談していたが、あけみは、まんじりともできずひたすら自分の運命を未来にかけていた。

× × ×

その夜は、近くの温泉町に一泊する予定になっていた。

四馬孝画秀麗口絵八葉が巻頭を彩る 団鬼六作『花と蛇』特集第四弾

本誌S42/1よりS44/4までの連載分を収録し、四馬画伯の華麗なる口絵を附した集大成ですが、重版刊行は致しません。只今、若干在庫がありまゝの状態で、未入手の向はお早めにお申し込み是非蔵書の一部にお加え下さい。申込は大阪市住吉郵便局私書箱第41号 暁出版株式会社へ。

略号「花」 定価五〇〇円(送共)

さゆり、佐藤監督、岩村マネージャーにクツ。それに、運転手に荷物のあけみの一行は特別室に通された。

すでに深夜に近かったので、旅館では軽食を用意していた。さゆり達は、さっそくフロに出かけ、ビールを飲み、かるい食事をすませてから、それぞれの部屋に引き下がって寝たが、あけみがトランクから引き出されたのは、こうした騒ぎが一段落してからである。

さゆりは個室に引きこもると、こっそりカギをあけた。あけみは、まんじりともせず、トランクの中に横たわっていた。

「疲れた？」

そういわれると、あけみは首を振らないわけには、いかなかった。実際は、固定された筋肉の不思議な圧迫感で、何ともいえない苦しさだった。それだけに優しくされると、思わず涙さえ流れる。

さゆりは、まず酸素ボンベを、はずしてくれた。あけみは、それで、やっと口の自由をとりもどした。

「慣れないと、きついでしょ。でも、それも代役の仕事の一つよ。出してあげるけど、また人に見られると都合わるいの。パンや牛乳も、ブドー酒も、ここにとってあるワ。部屋

つきのバスもあるの。ここで一泊するのよ。そして、あすの朝が本番よ。人に見られないよう、またトランクに入ってね。そうしないと出してあげられないワ。いいこと？」

「ハイ」

あけみは、すなおだった。しかし固定ベルトをはずしてもらっても、ひとりでは、なかなか出られず、さゆりに手伝ってもらって外に出ると、足がふらふらした。

「あそこから、ここまで、まだ二時間半のコースよ。そんなことでは困るワ。しっかりしてよ」

といいながら、さゆりは別のトランクから真赤なスケて見えるネグリジェを出し、

「今夜は、これしかないのよ。派手だけど我慢してネ」

と、あけみに渡した。それを見て、あけみは、まるで少女趣味だわと思ったが、口に出しては言えず、大きく背のびした。

「じゃ、あすの朝、早く来るワ。その間、この部屋の中だけでなら自由にしているのよ。用事があったら、電話で私を呼んでネ。用心のため、ドアは外からロックしておきますから」

そういって、さゆりは出ていった。

さゆりの言うようにサンドイッチと牛乳が卓上にあった。部屋はバス、トイレつきで、冷房も、よくきいていた。なにより、ベッドが豪華だった。あけみは、すばやく湯を使いサンドイッチを、ほうばりながら、少女趣味のネグリジェは着ずに、裸でベッドに、もぐり込んだ。

疲れているので、すぐにねむれると思っていたが、いっこうにねつかれず、その日一日の出来事が走馬灯のように走って、落着けば落着くほど目がさめた。

ステージでの、競演、表彰、映画出演、失踪。どれもこれも劇的であった。いったい、真実の世界なのか夢なのか――。でも確かにいま自分は、こうしたオトギの国のヒロインを演じている。そう思うだけで明日、再び味わうであろうトランク詰め of 苦しみも、何故か楽しく思われた。

あけみは、いつしか、うとうとと眠ったらしく、さゆりからの電話で起こされた。

「おきてた？ まだ、ねていたの。いまから朝食、持って行くワ。もう九時よ。十時半には宿を出ますから、ちゃんと準備をしていてちょうだいね」

あけみは、とびおきると素速くブラジャー

パンティの下着類をつけ、赤いネグリジェをまとった。そして顔を洗っていると、さゆりが岩村といっしょに顔を出した。

「おはよう」

「お早うございます。あら、こんな恰好で」

「いいんだ。それより早く食事をして、仕度をしよう。さあ」

さゆりが持ってきた膳をテーブルに置く。

「ねむれた？」

「いいえ、いっこうに」

「目が赤いワ」

「そうでしょうね。やっぱり興奮したんですワ。何しろ前代未聞のことですから」

あけみも、もう雑談をかわす心の余裕が出ていた。そしてそそくさと食事をとった。

「これから、きょうは一路、直行する予定なの。そうすると、午後五時頃、家につくかしら。途中、一度のトイレで、いい？」

「多分、それでよいと思いますが」

「我慢できないかしらね」

「できないこともないと思いますけど、何しろ、初めてなので」

「そうね。じゃあ、人気のない海岸かどこかで、もう一度、出してあげようか」

「危険ですよ。ここに泊まるのも、よそうか

と思ったくらいなんだが、さゆりが、かわいそうだと、きかないもんだからきみは、旅館の人数には入っていないんだよ」

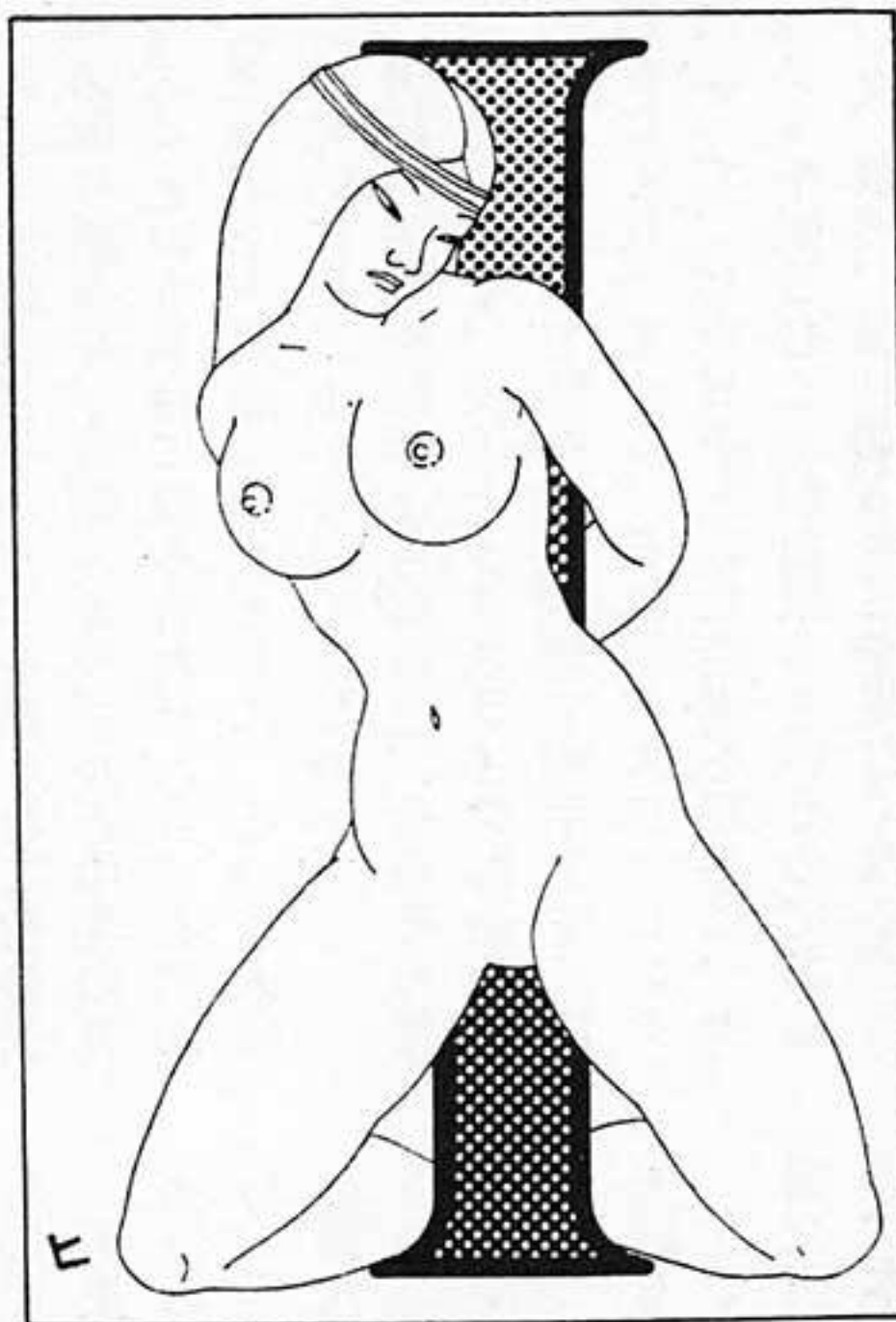
「え？」

「いや、それは、こっちのこと。定員オーバーだからな。ともかく、我慢して下さいよ」
「そうね。じゃ、お味噌汁は、やめにしとうかしら……」

そんなことで、一息ついたあけみは、また二人の手で、きれいに梱包されてしまった。口にはめる酸素ボンベのマスクは嫌いだが大時間は、それがないと、もてないというから仕方がない。荷造りされると、きのうのときの筋肉が意外と、こわばっていることがわかり、体をゆすっても、ゆすっても、きつかった。ネグリジェを着たままだったのも妙に変わった。しかし、前回とちがって安心感を持てたのは、不思議なことだった。

が、蓋をしめられ、暗黒と沈黙との世界に閉じこめられるのは、やはり、さびしく、いやだった。

「でも、失踪中なんだから仕方がないわ」と自分に、いい聞かした。あけみは割合、あきらめのよい方だった。



カット・マエダヒオミ

スワッピング（夫婦交換）に

ついでにSM的考察

若

林

串

良

セックスを利用しているようだ。

現在は、姦通罪という方法はないが、戦前は、姦通罪で相手方に告発されると、当事者は、双方（男も女も）、刑事罰を受けなければならなかった。もっとも親告罪だから、姦通された夫が不問に附すのだったら問題はなかったのだが、それにしても、姦夫姦婦とか、間夫とかいった暗い影が、つきまとった。

スワッピングは、それと違って、あくまでも明るい大人のセックスVであって、相互の信頼と理解の下に、夫婦が互いに理解した上で堂々とやるセックスプレイである。

ここに二組の健康な夫婦がある。一方の夫が他方の妻と、一方の妻が他方の夫と、互いに一時的に、立場を交換してセックスプレイを楽しむということに、背徳感を

スワッピング——というと、ひと頃、アメリカあたりで流行して日本にも上陸してきたことのある「夫婦交換セックス」のことである。つまり、二組の夫婦が、お互いに合意の上で、夫や妻を取り換えっとして、セックスを楽しむという変わった性の形態である。

とだけ言うてしまうと、道徳家には目玉の飛び出るほど叱られそうだが、これは何も今に始まったことではなくて、日本でも昔は、そんなことがよくあったらしく、近代になつてからでも、有名な作家が細君を交換したということが公にされている。

だが、今、流行しているスワッピングは、そうした夫婦交換とはニュアンスが相当違って、多分に「夫婦の倦怠期を打ち破るための一つの方便としての刺激」に、夫婦交換

抱かずに済むだけの確固たる信念があれば、倦怠期を打破する一手段としては、まことに妙なるものがあると思う。

一時期に、「八人生二度結婚論」というのはやされたことがあったが、これは議論としては納得がいても、実際には中々行なわれ難い条件が種々とあって、特殊な環境の人々以外は困難である。

男性に例をとれば、先ず第一回は年上の女性と結婚して、経験豊富な女性にリードして貰い、年長じて第二回は、年若い女性と結婚し、未経験の女性をリードするというのである。女性の場合は、逆に、第一回の結婚は中年以上のベテランの男性と結婚し、第二回目には、若い未経験の男性と結婚して性的にリードしてやるというのである。

セックスの面だけを考えれば、誠に合理的であって、人生の中で二度結婚し、豊富な性生活を男女共、互いに存分に楽しむことが出来るという論で、何人も賛成しそうである。

子供の問題とか、経済的な問題とかを一切考慮に入れなければ、結構、合理的な響きを以て我々の耳に伝ってくるから、議論というもの面白いものである。

こうした同年輩の夫婦間に於ける、性的な面のアンバランス——若い夫は、若い妻をリードする力がなく、ようやく年期が入ってくる頃になると、妻に魅力を感じなくなつて、浮気をする。——

こういった夫婦間のありきたりの危機、若しくは倦怠感といったものはスワッピングによつて或程度、防げるのではないかと思う。

即ち、夫婦交換セックスを楽しむ二組の夫婦の取り組みを、若年のカップルと中年のカップルという具合に組み合わせたら、必然的に老練者と未熟者（男女ともに）という夫婦が一時的に出来上がるのではないか。

夫婦生活も十数年ともなると、そろそろ倦怠期を迎えて、夜のセックスライフも途絶え勝ちで、情性で時折、お義理で相手をするに過ぎなくなってくる。それが、スワッピングによつて、ピチピチとした若妻を相手に、セックスを楽しむことが出来るというのであるから、俄然、張り切らざるを得なくなる。

細君の方はといえば、ようやく脂ののりきった女盛りの肉体を持て余していたところへ若くて元気はあるのだがテクニクは、さっぱりという青年を迎えて、自分の思い通りのセックスを、たっぷり楽しめるということになるのだから、ハッスルしない方がどうかしているということになる。

さりとて、新婚間もない若年の夫婦の方に有利な点がないかといえば、そうではない。

男性の場合は、熟しきつて受け入れ態勢十分の中年の奥様からセックステクニクの実地指導を微に入り細を穿って手とり足をとつて教えて貰えるわけである。油ぎった中年婦人の生態を、身近に肌で感ずることが出来るわけで、これは、今後の若夫婦のセックスライフに如何ほどプラスするか計り知れないものがあるだろう。

若夫人の場合はどうだろう。若い未経験な男性の性急な、それでいて手荒なリードよりも、手馴れたオジサマの味も実もある緩急を心得た指導に、堅い蕾も徐々に開こうというもの。前戯、後戯のテクニクも、たっぷりと駆使して、羽化登仙の境をさまよわせて頂けること必至である。こう考えてみると、若夫婦も又、万更でもなさそうである。

さて、SM夫婦に於けるスワッピング（夫婦交換セックスプレイ）であるが、これは最近、本誌上でも度々取り上げられていること

は、皆様も既に御存知の通りである。

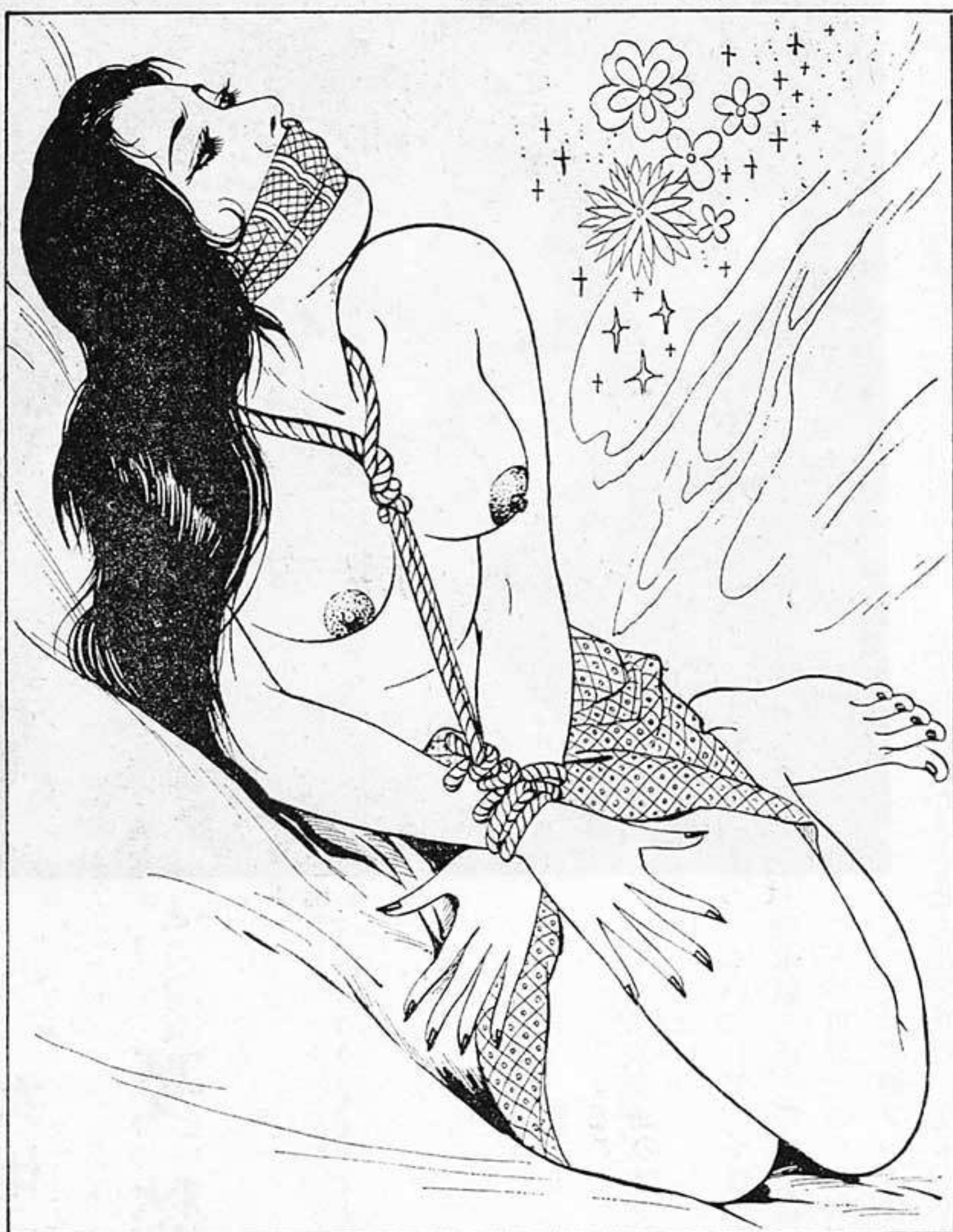
本誌十二月号の「奇クサロン欄」に、はからずも、私の「スワッピング賛美論」を現実に裏付けするような告白の投稿が二篇、載っているのが驚いた。それは早坂信治氏の「SM夫婦プレイ・レポ」『夫婦交換プレイに思いを馳せる』と佐藤真由夫氏の「夫婦交換プレイに耽溺したSM夫婦の告白」である。

早坂氏は、その後の四月号にも、「夫婦交換プレイに思いを馳せた『愛妻への特訓プレイ』」を発表されて、「SM夫婦の交換プレイ」について、並々ならぬ意欲の程を見せておられて頼もしい。是非、今後の成果を誌上に発表してほしいものだ。早坂信治氏こそ、SM夫婦のチャンピオンであると言っても、過言ではないだろう。

佐藤真由夫氏の告白は、私の提唱した若年と中年の二組の夫婦についての夫婦交換セックスプレイを実際に体験した文章であつて、それがレズとか、下着とかいった倒錯趣味も加わつて、まさに多彩なものになっている。

私は、SMといった特殊なセックス分野に於いては夫婦交換プレイの活躍する下地が大いに存在すると考えている。と言うのは、私の説に依れば、「SMといっても、所詮それは、セックスの変形、又はバイプレイヤーであつて、本来、主役ではない」と考えている。もし仮に、「セックスの代替物」であると

-----イメージギャラリー-----『期待』-----岡 たかし-----



いうのであれば、これは大分、話が違ってくるのであって、世間から指弾されるところの「変態」と目されても仕方がないと思う。

私は、「夫婦交換のセックスプレイ」を楽しんでいる二組のSM傾向の夫婦を知っているが、この四人は、共に奇クの愛読者であり

ながら、自分たちが十二分に快楽を味わっているから——という理由で、その体験を発表する気持を持たないらしい。

写真も、その都度、相当撮影していて、その一部を私に見せてくれて、その時の楽しさを自慢げに話すので、私は極力、発表するよ

うにと、すすめるのだが、未だにペンを持つ気にならないらしい。

単純なる「夫婦交換セックスプレイ」とは違って、お互いに相手の細君を、いろんなテクニックで責め合うのであるから、これは面白いに違いなからう。それに興至れば、一人の細君を三人で責め、また交替して、他の細君を三人で責めるといふバリエーションを求める事が出来る点、SM的な特色を発揮できて、楽しみも一段と深いだろう。

彼等の場合、日常の生活から、プレイの日だけは完全に逃避して、何事も忘れてプレイに没入するため、四人、打ち揃って旅行に出ることにしているらしい。それと、やはり慣れからくるマナーを防ぐため、年に何回という具合に、回数を極力セーブしていると言っているが、これは賢明な策だと思う。

スワッピングが更にエスカレートして、数組、或は、十数組の夫婦（又は恋人同士）が一カ所に集まって、自由にパートナーを選ぶといった「スイング」（グループセックス）が、アメリカあたりで流行していると伝えられるが、日本でも、そうした非公式の会合が秘かに企画されていると聞く。

こうしたセックス・スタイルが、必ずしも日本に於いて定着するとは考えられないが、SMという観点から考えてみれば、種々の空想を働かせる余地があって面白い。



女体緊縛美各論

憂愁の佳人

梨花悠紀子

小雅田 勇

ている女体緊縛愛好者とい
ってよい。

私は奇譚クラブの昭和二十七年六月号からの熱心な愛読者であり、数えて愛読者歴も今年で二十年を越えようとしている。

根っからの女体緊縛愛好家であり、縛りの愛好家でもある。だが、未だに自ら手を下して女体を緊縛したという経験を一回も持たないという、いわば、空想の世界をのみ遊泳し

接お目にかかることも出来たし、更に、M女の生態についても、氏を通じて、仄聞する機会を持った。

今ここに、寸暇を得て、私の心を真底からゆさぶり続けた人緊縛された女体の美しさVに関して愚見を述べてみたい。

私が物心ついた頃より、縄で縛られた女性

や、異性に責められている女性について、少なからず関心を持っていたにも拘らず、現在のように、空想的な女体緊縛マニアになったということは、一にかかって、結婚の際に妻の選択を誤ったことが原因である。

私が適令期になって、妻帯をすすめられたとき、迂濶にも女性であれば、誰でも直ぐに夫の要求に応じてくれるものと頭から信じ込んで、詳しい調べもせず、一人の女性と結婚した。それが現在の妻である。

この妻が、潔癖というのか、正常というのか、私のS的な要求を極端に嫌うのである。

その頃は、私も若くてテクニックも拙かっ

たのかも知れないが、とにかく激しい肘鉄を喰ってしまった以来、全然そうしたS的気配の片鱗も見せず、現在に至っている。

誌上にて、早坂信治氏、伊勢国男氏、渡部好美氏、三浦純子氏、紀川正信氏などのSM夫婦の方々の告白や手記、それに写真を見るにつけ、只々羨ましくてならない。

特に早坂信治氏御夫婦の琴瑟相和すSM夫婦ぶりは、羨ましさを通り越して、全くお見事という外はない。私は折角、結婚はしていても、前述したように、妻にはSMに対して一片の理解もなきため、徒らに空想のSM世界に遁走を計っている始末である。

幸いにして、かくの如き大きな欲求不満の渦中にあっても、私をして大過なく世渡りさせてくれたのは、一にかかって、奇クという専門的なSM誌があったからこそである。

必然的に私は非常に熱心な奇譚クラブの愛読者となり、そして女体緊縛フォトの信奉者となっていった。石油箱に数個の、それらの夥しい資料は、私にとって、妻に通じて得られなかったS的執念が怨念となって、そこに保存されているとあってよかった。

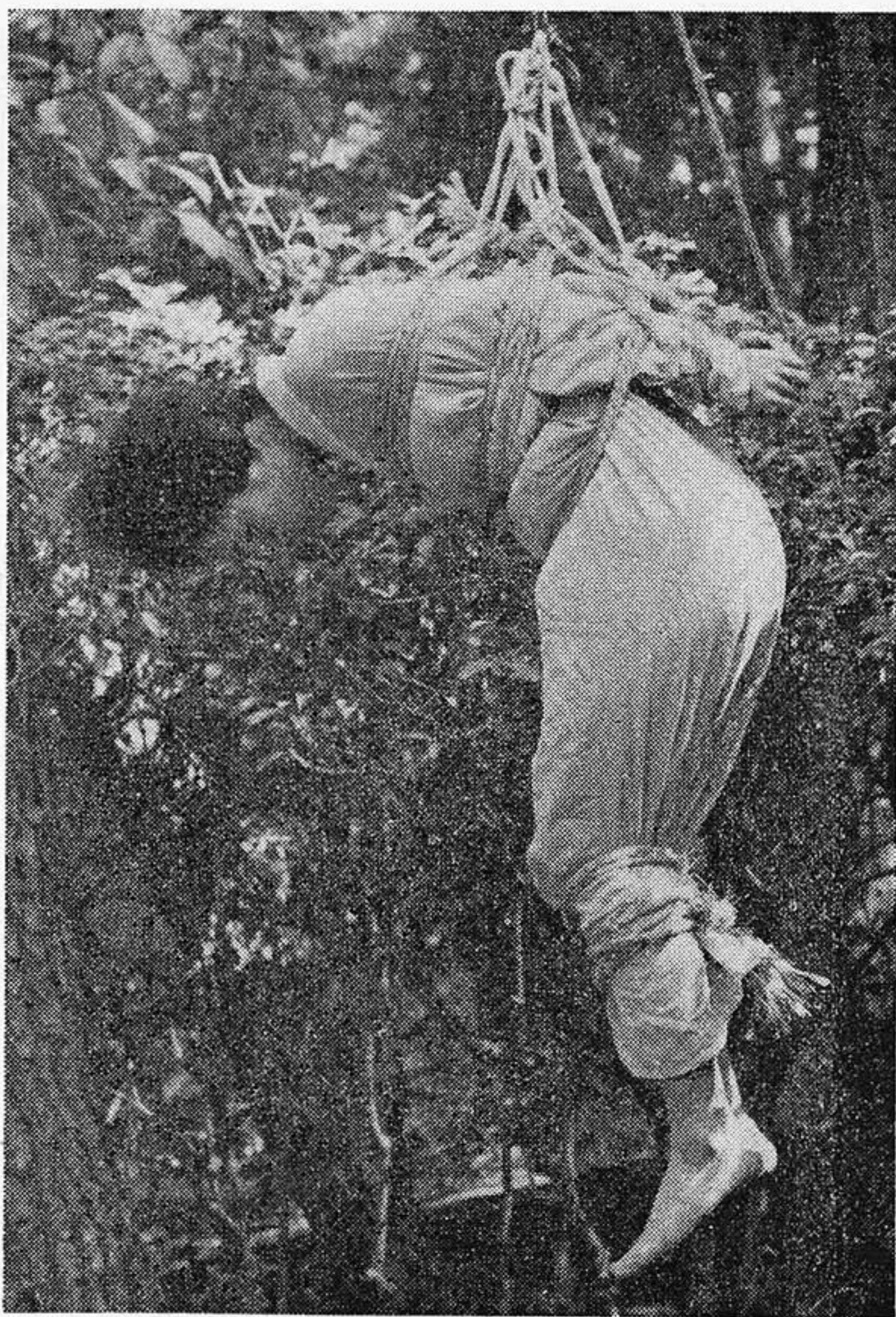
そうした資料の中から、今、無差別に選り出して、絹川文代、梨花悠紀子、左近麻里

子、大塚啓子、山原京子、関谷富佐子、中河恵子、長野良子、安井喜久子、木村洋子、東浦ひかる——などと書かれたセクシヨンが、目白押しに出てくるのだ。

今日は、それらの沢山のM女たちの中から最もファンを湧かし、また私にとっても忘れ難い思い出に残っている——梨花悠紀子につ



いて、私なりの賛美論を述べてみたい。「女性で縛られることによって、魅力を発揮する」と信じ込んでいる私のことであるからたとえ、どのような女性であっても、そこに何らかの美を見出すことが出来る。しかし、私が、まず最初に挙げた人梨花悠紀子Vは、文字通り無条件で、最大に、私の空想的嗜虐



心を満足させてくれた。

梨花悠紀子には、にじみ出るような清潔感があつた。

美人という点において、彼女以上の美人はざらにいるであろうが、ストリッパーやピンク女優のような人工的な美の影が、いささかも見えないところに、梨花悠紀子の良さが集

約されていると思う。お化粧を全く、していないとさえ見える、この素人娘の清潔感こそ彼女の魅力を最大に盛り上げている。

自分の身の辺の何処にでも、容易に見つけだすことの出来る、この素人じみた娘であればこそ、私達、女体緊縛マニアの琴線が妖しくゆさぶられるのである。

これが、いくら美人でも水商売の垢に、とっぷりと漬かっている女というのであったら興味が半減どころか、食欲も全く起こらなくなってしまう。奇クの緊縛女性に関して、私が常に高く評価しているのは、この素人娘という点においてであるということは、あなたがち、梨花悠紀子のみに限ったことではないがこの際、特にペンにしておく。

次に、梨花悠紀子のたまらない魅力として挙ぐべきは、愁いを帯びた独特の被虐的表情である。ここに嘗て奇譚クラブの口絵に載った彼女のグラビア写真が数十枚あるが、その何れの写真を見ても、端正のなかにも、物頼いような憂愁を漂わせた表情が、私達S人士の胸を、ぐっと掴んで放さないのだ。

梨花悠紀子こそは、天成の観賞用被虐女性といつてよいだろう。

私は奇クの口絵、本文を全部バラバラにして、モデル毎に区分けして閉じ直してしまっているの、今、手元にあるグラビアフォトを見ただけで、何年何月号掲載の分であるのか不明なのが残念であるが、とにかく、梨花悠紀子の緊縛フォトを眺めながら、私の感想なり思いついたことを書いてみよう。

悠紀子の吊り責めの写真が、グラビア、印

画紙に焼付けたものを含めて二十数葉ある。

私は、この吊り責めの写真が、彼女の被虐性の美しさを発揮した究極のもののように思う。「吊られたままで放置されたことによって、初めてマゾの真髓を体得した」と告白したM女性がいるが、(川端多奈子の「破れた日記帳」においてか、今、手元にその雑誌がないので確認できないが)梨花悠紀子もまた今まで体内で、くすぶり続けていたM性が、この吊り責めによって、一挙に表面化したのではなからうか。

吊り責めは、野外のものと室内のものに大別されるが、松の木に滑車で目よりも高く吊られた写真は、逆さ吊り、猪吊り、後手吊り、その他は、両手を左右に竹に縛られたまま吊られたのなど、ポーズは、さまざまであるが、梨花悠紀子の美しさを、余すところなく画面に、にじみ出させている。まことに、この写真こそは、芸術的な高さにまで、緊縛美を盛り上げた一作であると信ずる。

室内の吊り責めの方は、やはり密室における人間臭さが、漂っているのだが、彼女に限ってみれば、そうした生臭いものが、却って女本来の美しさに繋がっているように思えてならなかった。ガラス細工のような繊細な作

り物が、今、まさに壊されようとする、はかなさの中に、ねっとりとした色気が、へばりついているように思えてならない。

後手吊りで天井近くまで滑車で高々と吊られた写真の悠紀子のうつむき加減の表情は、まるで天平時代作の天女の顔のように、私には見えた。能面のように凍りついた白くて、

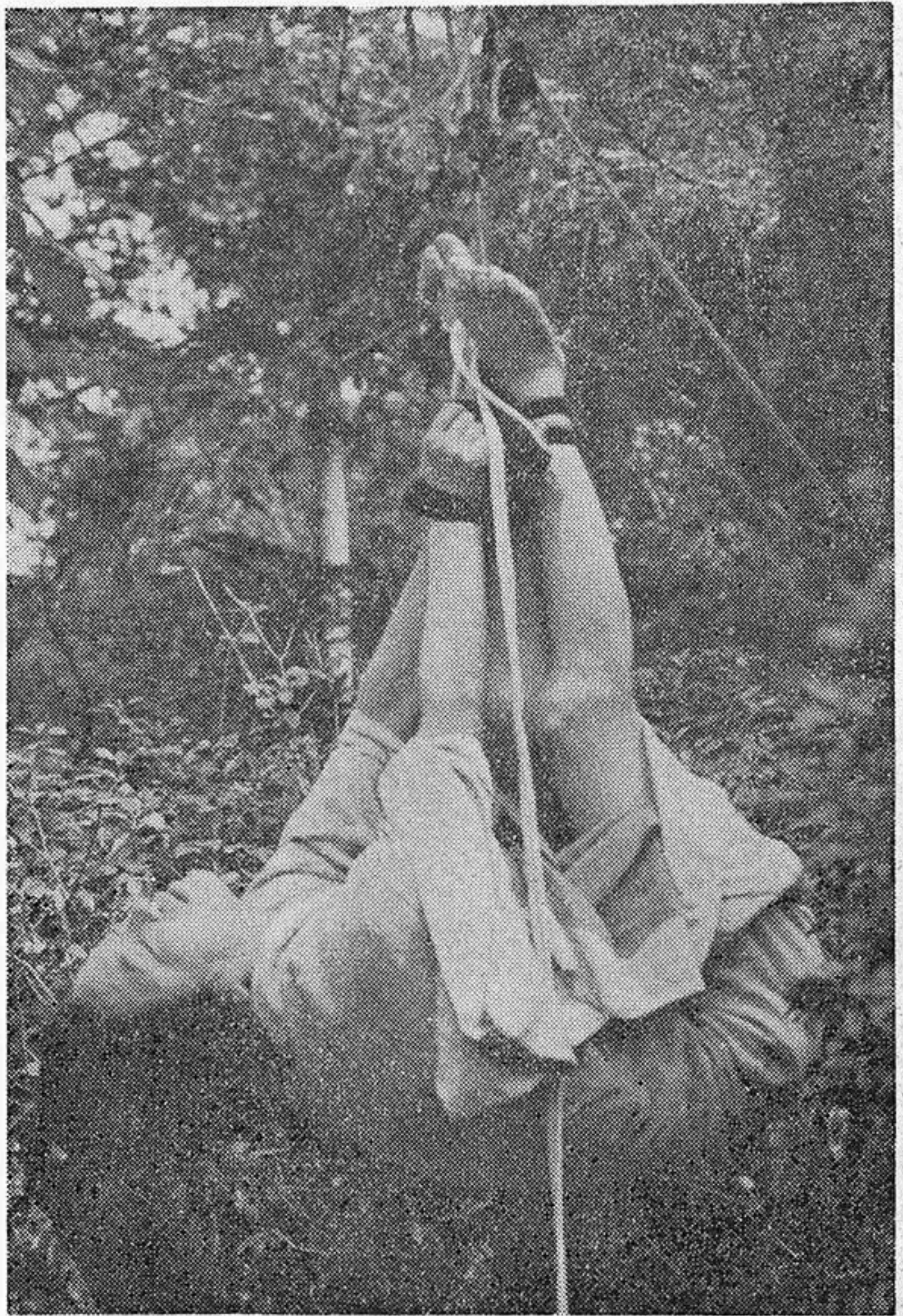
無表情とさえ見える、その表情の中に、私は永遠の日本女性の顔を見た気がする。

全身が高々と吊られながら、揃えて、だらりと垂れた両足の白さが、私には現実の血の通った若い女性、梨花悠紀子の爆発寸前の性を見たような気がする。私は、この吊り写真を現実の女性とは見ずに、一つの抽象化され



た、美化された一つの女性像として見ていたが、やはり、これは仏像ではなくて、現実の女性であると気づき、はっとしたのである。

木製の滑車、金属製の滑車によって、逆さ吊りになっている彼女の写真は、組写真になっていて、その逆さに吊られるまでの順序を最初から終わりまで刻明に写真によって描写



している。これは、私達のように、責め写真の撮影の場に立ち合う機会を持たない者にとっては、ああだろうか、こうだろうか、と、

空想を働かす材料になって面白かった。

こうした至近距離からアップに近い写真がうつされる場合、愁いを帯びた端正な細面の顔や、全身が、ほっそりとした、なよなよ型

の梨花悠紀子のプロポーションが、いたく私達の嗜虐心を、そそのものである。

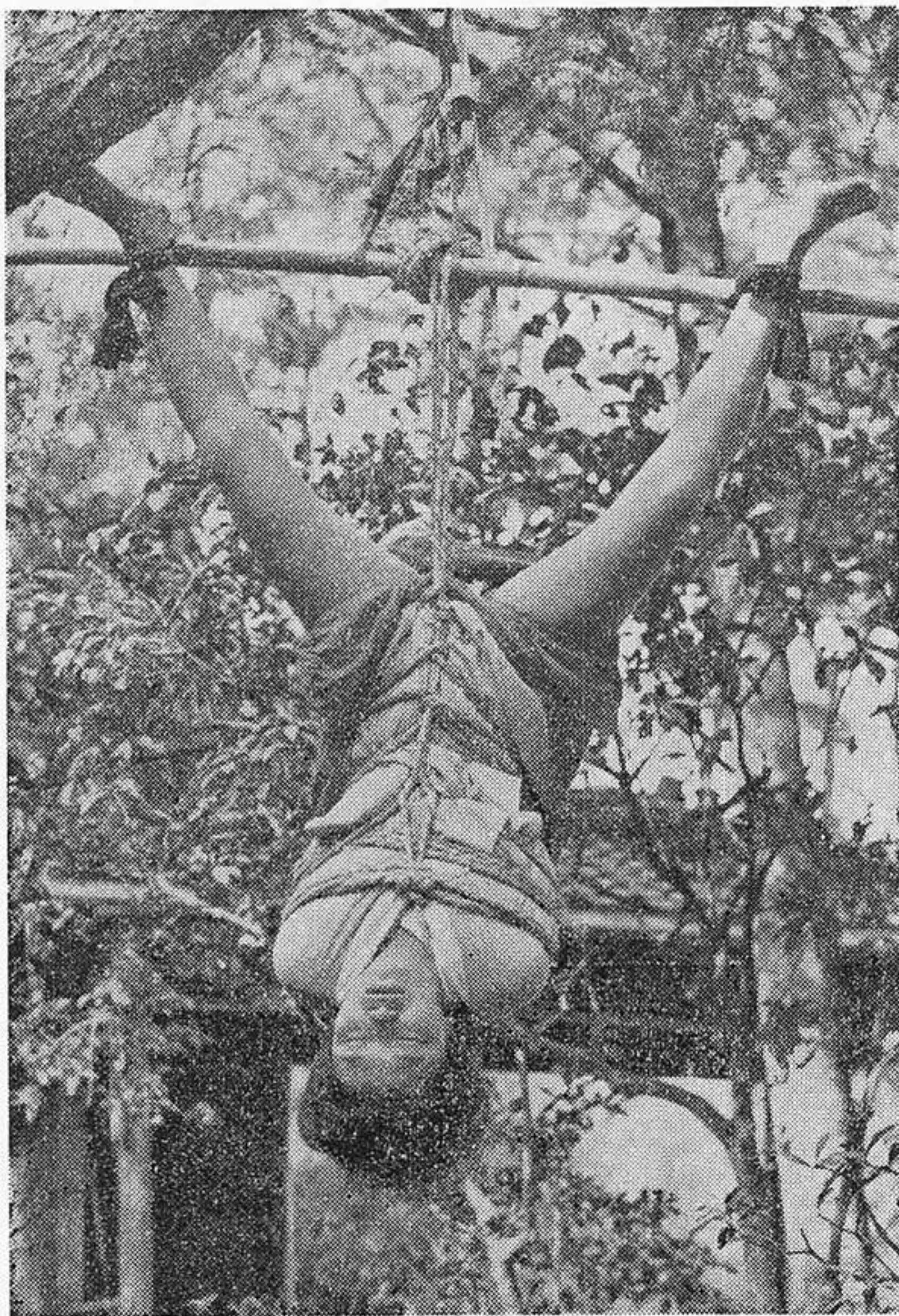
彼女の肢体の各部の一つ一つが、曲げられねじられ、折られて、喘ぎながら、それぞれ独自の表情を出していることに、私は何度、眺めても見飽きない、永遠の被虐性の姿を、そこに見るのである。

いみじくも言い放って、妙なる語であるところの、『観賞用被虐女性』という名に、彼女こそは、最もふさわしい女性である。

梨花悠紀子こそは、私にとっては、永遠の憧憬の女性である。奇ク誌上に発表されたどの写真をとってみても、印画紙に焼付けられた、どの写真をとってみても、一つとして私のイメージを破壊するような写真がないということは、流石に立派である。

全裸になって縛られていても、将又、長襦袢姿や腰巻姿であっても、ブローズ、スラックス姿で緊縛されていても、被虐ポーズのさまになっているのが梨花悠紀子である。

私は、自分の妻に求めて果たし得なかった永遠の被虐女性のイメージを、梨花悠紀子の上にダブらせて僅かに、この飢渴感を癒しているのであるが、彼女こそは、この私の期待に対して十二分に応えてくれるのだ。



後手に縛られた時の後手首の上がり具合が私達のような緊縛マニアにとっては又、大きな一つのファクターである。だらりと垂れ下がった後手縛りよりも、きゅっと緊まって背中に高く挙がっている方が、よいには、きまっているが、私にとっては、それが絶対というわけではない。両腕を背後で揃えて伸ばし

それに縄を編むように掛けた縛り方でも、結構、エキサイトする私である。

だが、しかし、梨花悠紀子の場合、私はそこに、後手縛りの理想的なものを見ている。それは、裸の彼女が胸から二の腕へかけて厳しく縛られているばかりでなく、両手首が背中中、あたかも太鼓帯でも背負うように、

手の甲と甲とを合わせて縛られているもの。左手首の上に右の手首をXの字に、ぴったりと合わせて、そのXの接点に縄を掛けられているものなど、数十枚の後手縛りの彼女の写真があるが、その何れをとってみても、梨花悠紀子の肢体の柔軟さを現わしていないものはない。

私を含めて、緊縛マニアの多くが期待し、憧憬し、空想の世界の中で描いているのは、この後手縛りに集約されている。後手縛りの中にこそ、私は限らない緊縛感を見出すことが出来るのであって、前手縛りに於いては、私は残念ながら、緊縛感を感じることが出来ない。

梨花悠紀子が、お尻を引いて胸を張り、可愛い乳房を、ぴょんと飛びだすように菱縄縛りにされ、左右の手首を、くびるように括られ、掌と五本の指を、シンメントリカルに、左右に開いたポーズなんかは、涎のしたたるほど、私の心を揺さぶり続けた。猿ぐつわを噛まされた顔面の中でも、眼の表情が素晴しく、さっきも書いたように、清潔感が画面全体に、溢れているようだった。

清潔感といえば、彼女の足首に、鉄鎖と鎖をつけた足部のアップなんかも、清潔感が、

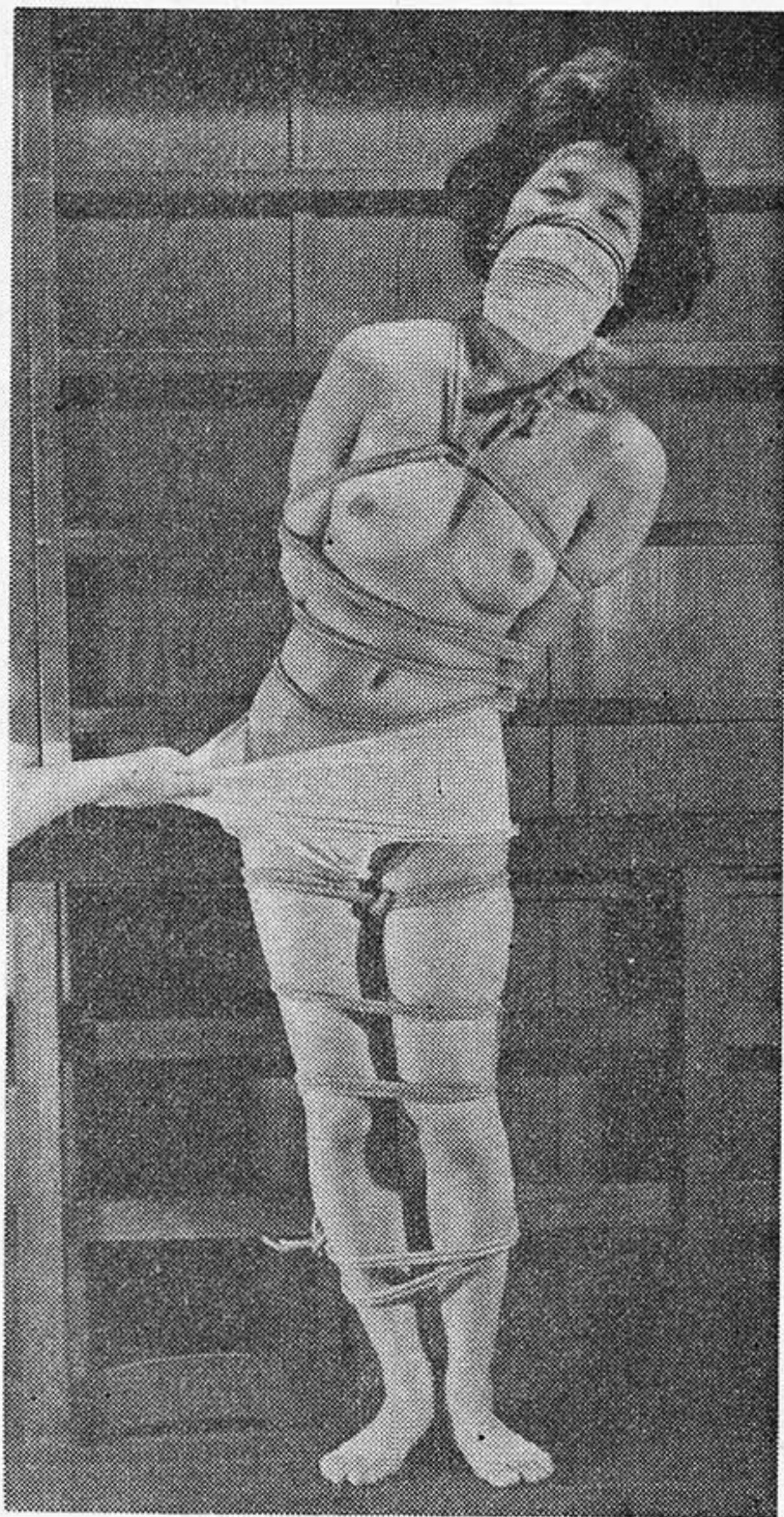
そのポイントとなっている作品で、私の好きなものの一つである。他の全身的な作品でいえば、足部までを入れた写真は少なく、ましてや、その部分に重点を置いたものは、これぐらいではないかと思う。

しかし梨花悠紀子の身体の各部に於いてはまだまだ、特筆すべき個所は多くある。

帽子をかぶった正面、黒縄縛りのフォトなんかは、うつろな顔面の表情が素晴らしいばかりでなく、適度の膨らみを見せた乳房と、お臍の格好が、これ又、たまらない魅力を見せて縄の間から顔をのぞかせている。

多くの場合、女性の容貌の美醜というものが、その女性を評価する際の条件の大きなウエイトを占めている。その点で多くの人は、フェイス・フェチリストであるといってよいのではないか。「本好^{もと}ければ末も好し」という言葉がある通り、顔が良ければ、他の身体の部分も多分、良いだろうということは確かにある。さて梨花悠紀子の場合、どうであろうか。写真で見る範囲の観賞用被虐女性としての彼女は、眉毛、瞳、唇、鼻、耳、乳房、手、足、お臍、臀部——と、その一つの何れをとっても満点といってよい。

全体のプロポーションについては、これは



各人の好みがあって、もっと肉づきのよいグラマーを好まれる方も、決して少なくないであろう。しかし、これは、私の好みからだけで言えば、中肉中背であって、一番責め易く責めを受け易く、そして観賞用としても一分の隙もないタイプだと思っている。

それと、もう一つ、責められている梨花悠紀子の素晴らしいという点は、長襦袢や腰巻を着させられたり、浴衣を着せられたりしている際も、又、猿ぐつわを噛まされたり、噛

も、すべて、被虐味をそれなりに、にじませさまになっていることである。

例えば、シユミーズを着たまま縛られた写真なんかでも、普通だったら、野暮ったくなるところを、裾からこぼれ出ている両足の曲げ方によって、ふるいつきたいような色気を出している。これは演出者の指導によるものか、或は彼女の巧まずして作ったポーズなのかは知らないが、完成した写真を鑑賞する側の私にとっては、そんなことは、どちらでもよく、緊縛女性のアイドルとしての梨花悠紀



子に対して、私は万腔の讃美と賞讃の言葉を捧げたいのである。

私は心酔している梨花悠紀子に対して、いささか、過褒の言葉を吐いたようであるが、彼女の被虐女性としての素晴しさはまだまだ、これでも言い足りないと思う。

縛られた時の肢体の表情の豊かさは、顔面の表情と共に、まことに抜群であるが、これが、演技で作られた人工のものでないということが、私達の目によくわかるだけに、より素晴しいのである。物懶い、うつろな表情が私達緊縛マニアの心を快くくすぐり、この世の中に、こんな陶醉境が存在するのかと、しばし、呆然とさせてくれるのである。

ずたずたに破られた白い下着の間から、こぼれている乳房、お臍、太股、臀部などが、輝くような美しさと、ふるいつきたいような色気をたたえていることにも、私は素晴しさに思わず目を瞠ったものである。

奇譚クラブのグラビア写真を蒐めた、私の数多い資料の中から梨花悠紀子の分を選び出してみても、私は彼女の緊縛的な美しさを十分に味わ

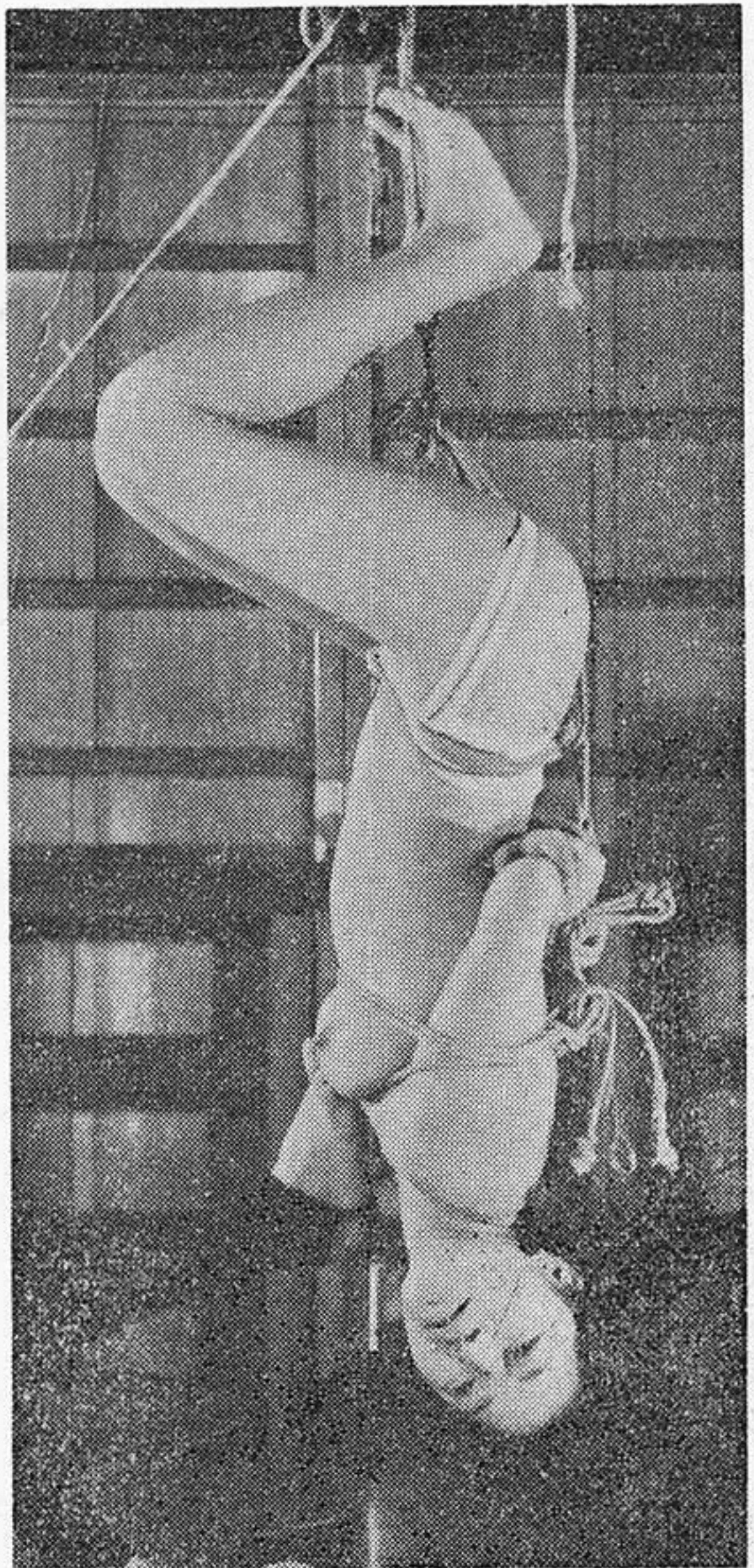
うことが出来たが、それが印画紙に焼付けられた鮮明な写真に接した時は、あたかも、自分が直接、手を下して緊縛しているような、わくわくした気持ちになったものだ。

部屋が寒かったのであろうか、鳥肌だった胸のあたりのデテールまでが、鮮明に写真面に、うかがえるのなんかを見ると、如何にも切実に、身近なものとして、緊縛女性梨花悠紀子の裸身のすべてが、その息吹きまでもが私に感じられるのである。

彼女の吐く熱い息が、私の耳元に触れてくるようなフォトが、この数十枚の印画紙焼付の写真の中から、何枚も何枚も発見されて、私は妻子の寝静まった夜半の書齋に於いて、しばし桃源の境を、むさぼるのである。

首筋にまで近く拳がっている後手首のきびしい縛りは、きっと手の指先までを、しびれさせているだろう。髪の毛を驚づかみにされているために、うつ伏せになりながらも、無理矢理、顔を起こされたときの彼女の表情は今にも「いや、いや、許して！」という悲鳴が洩れそうな緊迫した瞬間である。

荒縄にしても、綿ロープにしても、麻縄にしても、黒縄にしても、その鮮かな縄目が堅いピントによって、現実の緊縛女性を見るよ



りも以上に、被虐的迫力を以て、梨花悠紀子の柔肌を、いじめている。痛めつけている。シミ一つ、傷一つない、すべすべとした彼女の肌に残っている縄目の痕も、写真には、くっきりと残っている。どのようにして、どれだけ責められたのであろうかと、私の嗜虐心は、あらぬ妄想に徒らに高ぶりを見せるのである。

現実には、私は自分の妻に加えることの出来ない嗜虐行為を、私は被虐的観賞用女性、梨花悠紀子の上に、いや、その写真の上に、あくことなく加えてゆくのである。

そうした私のおぞましい妄想の餌食になって、机の上に並べられて、ほしきままに手にとって眺められる彼女の写真は、すでに、私の手によって、幾度、幾度となく翻弄されつくしたために、今では、角かった四隅も丸くすり減っているくらいである。殊に、私の気に入った写真には、この傾向が多い。

何故、かくまで、梨花悠紀子は、私に対して執拗に誘惑しつづけるのだろうか。めくっているうちにセーラー服を着て縛られた彼女の写真が出てきた。こうした清純なイメージの必要な服装に於いては、彼女は又

独壇場的な魅力を発揮している。縄に依って醸し出される哀愁が彼女の可憐なフェイスとプロポーションにて倍加されているが、私は格別、女学生趣味は持ち合わせていない。

囚衣を着せられて、首枷をつけられた写真も私の一番好きなものの一つである。女囚という暗さが微塵もなく、むしろ明るい雰囲気の中に、この被虐姿態を晒しているのである。梨花悠紀子というM女性は、実に色々と変わった緊縛用具や服装、それに構想によって責められているが、それを総べて、うまくこなしているのである。

この囚衣と首枷という責められ方も、彼女の持味を、それなりに活かして、やるせない被虐の哀愁をただよわせている佳作である。

その他、くさりとか鉄鎖、これなども、私の趣味ではないが、ゴム布とかレインコートやゴムのオシメカバーというものも一度、彼女のあの柔肌に触れると、それなりの魅力を発揮するのだから、如何にも天成のM女性だということだが、よくわかるような気がする。

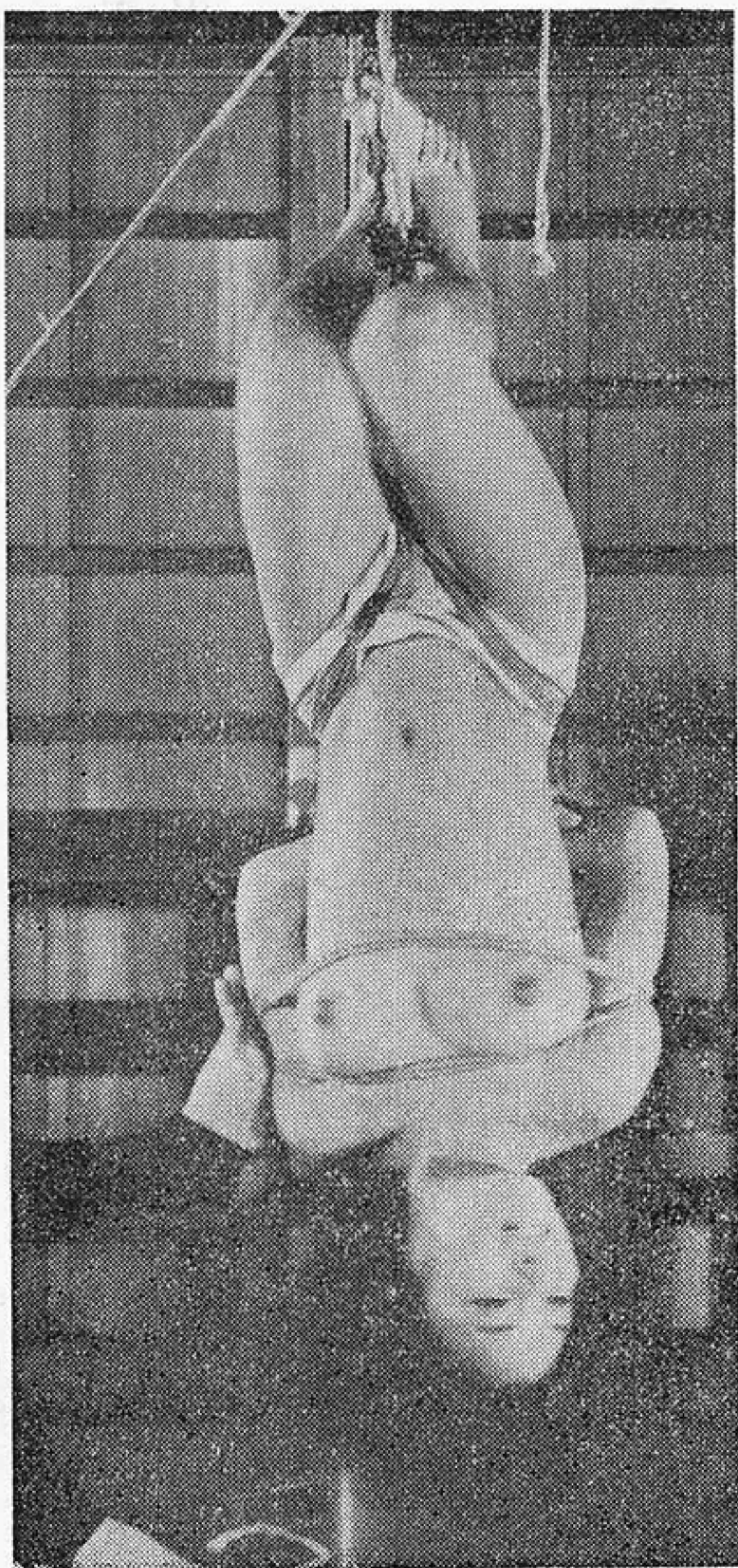
私は前にも言ったように、奇譚クラブの旧号は全部バラしてしまつて再び、各モデル毎とか部門別に綴じ直しているのだが、梨花悠紀子の部を取り出してみると、昭和三十六年

四月特大号（定価四五十円）の時のもので、辻村隆氏の「私は緊縛用鑑賞女性を、どうして獲得したか」というサブタイトルで、「緊縛用鑑賞女性」という作品が目につく。

私が、この奇譚クラブの号を何故バラバラに解体してしまわなかったかと、いうと、巻頭のグラビア四八頁の中で、梨花悠紀子の組写真「華やかなるモンタージュ」（辻村隆構成）というフォト集が七頁にわたって掲載されているのと、近藤一氏の随筆「奇譚クラブの五人のモデル」というのが掲載されていたからである。この近藤一氏の随筆は、私にこ

の原稿を書かせた原動力になったようなものであるが、辻村隆氏の「緊縛用鑑賞女性」という文章も、大いに私の興味を引いた。

私の梨花悠紀子に対する知識としては、昭和三十六年の三月特大号に載った「鑑賞用緊縛女性（辻村隆）」ぐらいのものであるが、それでいて、私の逞しい空想力は空馳ける妄想となって彼女の周囲をブンブン飛びまわっている。空想とは、楽しきものかな。私は、この自分の豊かな空想力によって、一冊の奇クから、何十冊の単行本にも劣らないところの文献を頭の中に生み出している。



先日休みの日、私が書斎でSM資料の整理をやっているところへ妻がやってきて、「貴方の悪趣味も中々直らないのネ」と皮肉を言った。それで私は、

「これで、私はお前を縛ったり責めたりしなくともいいんだから、有難く思え」

と言い返してやったが、妻も負けていず、「そんな事は、死んだって御免だわ」と、噛んで吐きだすように、冷たく言い放つので、いつも二人は平行線を辿ってしまうのだ。

とんだ内輪話を書いてしまったが、さりとて、私は自分で手を下して、女を縛ったり責めてみたいとは思わない。無器用な私は、そんな機会があったとしても、うまく縄を掛ける事が出来ないだろうし、現実の女体を目の前にしたら、冷静にしておれるかどうか、自信が持てない。やはり私は、第三者的な鑑賞の立場でいる方がいい。

梨花悠紀子に引き続いて、私の好きな緊縛女性としては、絹川文代や中河恵子、関谷富佐子、大塚啓子、左近麻里子、花坂道子、それに最近では前田真知子や鈴木千鶴子、深田菊子など沢山あるが、又暇を見て、それらの女性に対しての私なりの感想を述べてみたいと思う。

カット・マエダヒオミ



〃耽奇房〃 我楽多控 〆第二回〆

幻

の

少

女

辻

村

隆

スカトロ映画に驚嘆すること

世に、非公開映画、アングラ映画は実に多い。ハミリの普及で、安易に自家製作が出来る可能性に恵まれているからである。

我々SM同好者にとって、所謂ブルーフィルムという奴は、正直見飽きて、最近では、もうちっとも面白くもなんともない。

温泉街での、散々にすり切れて、雨の降った、愚にもつかぬシロクロ映画など、金をやるにしても、見るのが退屈してしまう。

劇場は、外国ポルノ、ロマンポルノ、ピンクフィルムの氾濫で、十センチ平方の露出が

許されていないというだけで、ブルーフィルムそのものの珍奇や、斬新、奇をてらって競作に鏝ぜり合いであるが、観客はすぐ飽いてしまう。それでいて、一向に衰えないのは、恰度、SM雑誌の読者が、次々と新旧交代してゆくように、観客も移動しているせいかも知れない。

助平心、人一倍、旺盛な私であるが、ここ二、三年、この種の映画は覗きにいったこともない。私が、秋山夫人を、大阪の天保山ホテルで縛っているシーンが長々とうつる、東映の「エロスの女王」の試写を見たのが、最近の唯一の映画観賞であった。

そんな私が、モノクロ、無声の、時間にして、せいぜい十七、八分ぐらいの、ごく短篇のハミリ映画一卷に、魅せられてしまったのだから、オカシナ話である。

独立プロでユニークな作品を発表して、そんな世界では、かなり名の知られているT氏から、ひょっこり電話がかかり、一寸、変わったフィルムを借りたから、一度、訪問して私の批評を仰ぎたい、という。

彼は、嘗て奇ク誌上にも、葉山啓というペンネームで、独特の作品を紹介しているからT氏というより、葉山啓と呼んでおこう。

たとえペンネームでも匿名のTよりは真実

性があるだろう。

夜の十一時、ブルーバードを飛ばし、彼は予定通り、私宅を訪れる。たった一卷のフィルムを映写するために、八ミリ映写機御持参の親切さである。私の映写機は、古いダブルのもので、フィルムも勿論その頃のものだから、最近のように、シングルエイト一辺倒になつては、かかりようもないので、彼は、心得て持参してくれたのであった。

「どんな映画なんです？」

と、緊縛の凄いやつを内心、期待して私は聞いた。というのも、葉山啓には、緊縛的なSM要素が、どちらかというと、乏しかったからである。S人士をもって自認している私に、わざわざ見せるというからには、当然そんな期待をもつても不思議ではなかった。

「辻村さんの好きな、縛りシーンは、ひとつもないんですよ。一口にいえば、羞恥映画とでもいいましょうか、多分にスカトロジックなんです」

スカトロジックならきいたが、スカトロジックなんて言葉あるのかなと思ひ乍ら、その意味が大体、通じる同好仲間の奇妙さである。

汚物崇拜主義と難しく開き直らないでも、広義の意味で、排泄に関心があり、排出を伴

う行為に興味を抱くのも、近頃はスカトロジックの範疇に入るようである。

「じゃあ、排泄のシーンということ？」

「ええ、まあ、そんなところですよ。私の友人で、仲間でもある男が撮ったのですが、まあ一度、御覧になって下さい」

「そう、確かに百聞は一見に如かずですね」

「タイトルも何もありませんがシーンが三つに別れております。彼は『儀式』『曼陀羅』

『小笠原流』と名づけています。何かいいえて妙なんですヨ。能書きは、このくらいにして、先ず見て戴きましょう」

手馴れた動作で、フィルムを掛け始め、私は、慌てて俄づくりのスクリーンをつくるべく、一枚カレンダーを裏返して、壁面に貼るつける。

ピントの確かな、鮮明な画面が、前触れなく壁面を照らす。

——儀式——

静かな茶室。中央に炉が掘られ、茶釜がかかっている。

髪の毛の長い、あどけない少女が、すり足で登場する。白のブラウスに黒っぽい上衣をきて、スカートの標準ミニの、ごく平凡な服装で、素足がスラリと伸びている。

化粧のない素顔の少女の表情は、能面さながらに無表情を保っている。

炉の前に、少女は静かに正座すると、深々と一礼する。

少女の能面の顔のクローズアップ。

一見、十六、七才にみえた。

静かに立ち上がった少女は、すり足で後ずさりし、横を向いて、ミニのスカートをクルリと、まくり上げる。

まるまるとした無垢の、丸まっちい白おしりが、いきなり、画面に利き出しになる。

スカートの下に、少女は下着を穿いていなかったのである。

少女は再び静々と正座すると、深々と頭を下げ、両手を前方にのばして一礼する。

両踵の上に鎮座した、白々とした臀部が、何とも奇妙なコントラストを与える。

正面に向き直り、少女は再び、一礼すると茶釜の蓋をとって、炉の傍に置く。

能面の眉間が迫り、チラリと苦悶の表情を泛かべて、少女は、炉端に、大きく両肢を拡げて立ち、おもむろに腰を落としてゆく。

開ききった両肢がM型になり、羞らしい蕾が恰度、蓋をとった茶釜の真上に位置する。

少女は更に、スカートを高々と、まくりあ

げた。意外なくらい蒼丘は豊かに繁茂し、下から狙ったカメラが仰ぎみる、湿潤の亀裂から菊座にかけて、セーフティゾーンの植込みのように、一線を画して続いている。

カメラはパンして、少女の顔をとりえる。まぎれもなく、秘丘が、少女そのものであることを、確認させていた。

チラチラと、こぼれた水滴が突然、激しい瀑布となって、見事に茶釜の中に落下してゆく。M族ならずとも、この私ですら、刹那、茶釜にかわって、そこに身を伏せて、開口してみた魔力に魅き込まれていった。

したたるしずくをその俛に、能面の少女は静かに立ち上がると、巧みに両肢を踏みかえて、背後をみせ、炉にしゃがみ込む。

茶釜に標的を合わせて前後に体をずらせ、菊座が正しく、茶釜の位置の上にくると、少女は、上体を伏せ、腰を少々、持ち上げた。直径十五センチぐらいの、茶釜の口に、正しく落下させるべく、少女の両手は、自身の両脚を支え、懸命に努力している。

カメラのズームが、徐々に一点に近づき、まるで、別個のいきもののように、軟体動物が息づくかの如く、うごめいているのがアツプされる。

ポトポトと、粘稠な液体が、粘い尾を曳いて落下するのが映る。

「イチジク浣腸をしてあるのですよ」

葉山啓が、息をのんで見守る私に、註釈を挟んでくれた。

黒く硬い塊りが、チラリと顔を覗かせ、再び隠れる。

全程、凝り固まった硬い硬い石塊のような宿便らしく、声が入れば、少女の腹力と共にかなり激しく、いきんでいたに違いない。

難関を突破しようとして、再度挑戦した可憐な洞窟口が、膨れ上がってゆく。

胎児の分娩に似た必死さがそこにあった。間隙を縫って、グリセリン液は、粘くトロリと落下する。

眼鏡のレンズぐらいの直径があるかと思われる、硬い黒塊が、コロリと落下した時、私は思わずホッとした息を吐き出していた。

更に、コロコロの、徐々に小さく、柔らか味を増す石ころに似た塊りが、ポロン、ポロンと落下して、茶釜の中に消えてゆく。

そして一瀉千里、堰をきって、細長く、連なって落下し終わると円い臀部が視野から消え、引いたズームに、立ち上がった少女が、うつる。

元の位置の正面を向き、少女は上衣のポケットから四つ折りにした懷紙をとり出して、静かに拭い終わると、細かく畳んで茶釜に入れ、その蓋をすると、抔げた炉端の両肢を、後ずさりして元の位置に立ち、正座すると、両手を前に揃え、茶釜に向かって深々と一礼して顔を上げる。

羞恥も衒いもない、ポーカフェイスの能面の少女の表情は、無気味なくらいに澄んでいた。(映写時間、五分二五秒)

——曼陀羅——

同じ少女が、人気のない山道を、鍬を右肩にかつぎ、セーターにモンペ姿で、大名行列の先払いのような足どりで歩いてゆく。

槍をかついで、シターニー、シターニーと髭の奴が、練ってゆく、あの足どりである。

山道のはずれに、雑草に蔽われた土橋が、かかっている。

少女は鍬を地に置くと、モンペを、ずりあげ、しゃがみ込んで、土橋の下を流れる小川のせせらぎに向かって、長々と放流し、雑草が水勢に押されて、ゆらゆらと、なびく。

木の間洩る陽の光が、拋物線を描いて落下する飛瀑に潑ね返って、キラキラと輝く。用を済ませて少女は立ち上がり、モンペを

上げ、何事もなかったように鍬をとり上げ、肩に、になって歩き出す。

見晴しのよい台地に、灌木が茂っている。その一角に立った少女は、鍬をふるって、小さな穴を掘り始める。

随円形の穴を掘り終わり、少女は足許までモンペを、ずり下げると、その穴に跨がる。産みの苦しみもなく、コロリと一個の黒塊が穴に落下し、続いて遅いのが、長く顔を覗かせてゆく。

少女は一区切りつけたつもりらしいのに、この駄菓子の飴ン棒は何を途惑ったのか一向に落下しない。奇妙な紐が、この飴ン棒と腸内の残滓を繋いで、いつまでも、ぶら下がっている。

この少女は、一体、何を食したのであろうか――。

少女は、しきりに腰を振った。

真剣と噴飯が交錯した風景に、思わず私は大きく笑った。

ふれども、ふれども落下しない飴ン棒に困惑したのか、少女はその時、始めてカメラに振り返り、ポーカーフェイスが、照れ臭げにアルカニックに笑って、顔を戻す。

氣力を籠めて、少女は腸内から押し出そう

とする。

飴ン棒の端が、細い紐状でつながり、洋菓子のクリームを絞るようにして出来上がってきた後続部隊で、やっと頑強に抵抗していた飴ン棒は、後続部隊のチョコレートとクリームと共に、小穴に落下していった。

クリーム絞り器を自在に繰って、少女は巧みに、可憐な御馳走を小穴へ盛り上げる。

紙拭いは平凡であった。小穴に投げ捨て、立ち上がると、もんぺを上げ、鍬で、サラサラと辺りの土を蔽せてゆく。

蔽せ終わった少女は、あの両脚を外へ踏み出す、歌舞伎の六方を踏むような足どりで鍬をかついで、立ち去ってゆく。

うしろ姿が消えて曼陀羅が終わる。(映写

時間五分四十三秒)

――小笠原流――

少女は全裸である。

オッパイがポツンと、ぐみの実のように色づいていて、胸のふくらみは、少女の成長期を示すように、柔らかく盛り上がっている。

茶室めいた一室の中央に、ポーカーフェイスの少女は正座して坐っている。

丁寧に一礼すると、両膝を開いて中腰になり、傍の大きな抹茶椀をとり上げて、股の間

に挟むように据える。

ありありと、抹茶椀をみたしてゆく、ほとばしりのシーンが、一しきり続く。

股の間から抹茶椀を、とり出した少女は、それを眼の上に高く捧げ、抹茶椀に一礼しておくと、茶筌をとり出して、シャシャと茶のお手前を始め、水を切って茶筌を立て、くりと椀を回転させて前に差し出し、もう一度深々と礼をする。一服、啜ってみたい欲望にかられるから不思議である。嘸かし泡立ちもいいに違いない。

少女は、浅い花瓶のような壺を捧げもってくる。

壺を前に置き一礼して、それを手にとると蹲踞の姿勢になって、壺を落地点に据える。

少女の位置は部屋の中央である。

カメラは、少女の周辺をパンしてゆく。

背後から、壺を捉え、クローズアップは、

少女の双臀と壺の口を画面一杯に撮し出す。

サラミソーセージが壺に消え、ウインナソーセージが消えてゆく。

この少女は、この日のために何日、我慢したのであろうか。

止め度なく、次から次へと、延々と、ソーセージが製造されては姿を没してゆく。

飴ン棒がある。クリームパイがある。細長いクラッカーがある。

造形の妙を堪能させて、膨大につづく。

少女はウン、蓄を傾けて、ひたすら、その作業に没頭していた。

製造は終わったらしく、少女は懷紙をとり上げて拭くと、更にそれを二つに折って、小さい塗りの菓子盆に敷く。

恭々しく壺に一礼して、長い箸をとり上げると、壺の中から、一つまみを摘み上げ、そろそろと、菓子盆におく。

抹茶碗の傍に、一つまみの生菓子をのせた菓子盆を添え、少女は礼儀正しく、両手を小笠原流に揃えて、深々と、一礼するのであった。能面の表情は、徹頭徹尾、微動だにしないかったのである。(映写時間、六分十五秒)

この短篇を見終わって、私はしばし呆然としていた。汚辱や卑猥、臭気を微塵も感じさせない、この排泄儀式に、驚嘆の余り、心を奪われていたのである。

どのような貴人、美女にしろ、生きとし生ける者、排泄は必至の、しかも日々の行事である。排泄を、醜いもの、汚いものとする、世の常識を打ち破った、この短篇の製作者の

卓越した想念に、私は文句なく最敬礼したのであった。

葉山啓から聞くとこの裏話によると、この場所の異なる三つの排泄シーンは、すべてイチジク浣腸によるものだ、ということであつた。

少女の、端麗にして、澄み切った無表情さは、浣腸を感じさせない。唯、僅かに、第一の儀式の場の、茶釜に跨がった折、一度だけ眉を、しかめたのをチラリ認めただけであつた。宿便を排泄させようとして、イチジクを量多く使い、そのための、腹痛によるものだったのかも知れない。

私は今一度、彼に上映を請うた。こんなことは、私にとっては珍しいことである。

葉山啓は、ニコニコ笑い乍ら、うるさそうにもせず、再び上映を始めてくれた。

スクリーンに写し出される、この無垢の少女の、巧まぬ演技の排泄シーンは、胸を抉るように、私の脳裡に、少女の映像を刻み込んでいった。

排泄シーンにだけついていうなら、私にとっても、過去、幾度か、数多の女性に試みてきた。だが、切めて覚えたこの感動は、どこに起因するのだろうか。

一、少女が無感動、無表情で排泄すること。

一、少女の清純、無垢な、その肉体。

一、儀式、曼陀羅、小笠原流と続く、卓抜なアイデア。

一、排泄を芸術にまで昇めていること。

一、少女の排尿、排便が、実に大らかに逞しいこと。

一、演出が自然で、誇張も作為もないこと。

一、スタンドイン、替玉など一切、使わず、少女の意志通り、フィルムを廻していること
etc. etc. …と、数え上げると、キリがない。

これは私の分野にない、一つの世界であつた。葉山啓は、この映画を称して、スカトロジックという。確かに、この少女に関する限り、私は、スカトロマニアになりそうであつた。

少女の、最高の羞恥を剔抉^{てつげ}したこの映画をみて、私は少女に魅せられてしまった。

再度、見終わって、俄然、私の好奇の関心は、この少女に集中し始めていた。

「あんたの友達は、よく、こんな素晴らしい少女を、発見したものだね。おそれいりましたよ。ここまで飼育するのは、嚙かし大変だったと思いますよ。あんた、この少女を知らない

いの？」

私は知りたくて、ウズウズしている。単刀直入に斬り込んでいった。

「知らなくもないんですよ。この私だって、映画をみせられて、極度に、この少女に会ってみたくなったんですから……」

「それで出会ったの？」

「ええ、彼に無理をいって」

「そいつは羨ましい。私も一度でいいから会ってみたいなあ」

「多分いいでしょう。彼は、辻村さんのファンなんですから……。カメラ・ハントを、かかず愛読している奴ですからね。唯、彼を通じないと、この少女の居所が分からないのです。彼の唯一の切り札ですからね。謂わば幻の少女なんですよ」

「フーン、幻の少女か。正に彼女にピッタリの表現だよ。こいつは愉しくなってきた」

「この映画が、そんなにお気に召したのですか？」

「ええ、感嘆久しいですね。正に驚いたというより、言葉がありませんよ。センスがいいというのか、この少女と、この演出が、ピッタリとマッチしていますものネ」

「辻村さんが、それ程、感心なされたことを

彼が知ったら、喜びますよ」

「俄然、意欲が湧いてきました。私はハミリをやめて既に久しいし、最近ではビデオも珍しくなくなって、余り撮らなくなった。しかし、この少女なら、是非、ビデオに撮ってみたいですね。これは動かなくちゃ、価値がありませんからね。こんなハッスルした気分になったのは、実に何年振りかですよ。相当マッネリ化していましたからね」

「いいですよ。免も角、彼にその旨を告げてみます。彼の場合、本職が堅いので、どうしても警戒するのですが、辻村さんなら心配いらないでしょう。唯、どこまでも、辻村さん個人の、非公開のもので、お願いしたいのですよ。少女の名誉のために」

「勿論ですとも。絶対に発表しませんから」

意気込む私に、葉山啓は胸を叩き、後日の快答を期待してくれと云って、更に小一時間雑談を交して、早々に立ち去っていった。私に大きな夢が膨らみ始めたのは、この瞬間である。

幻の少女を知る男との奇妙な出会

葉山啓は、約束に堅い男であった。

あの日から一週間経ち、その夜の感激も、

幾分、薄れ始め、あれは矢張り、その場限りの適当な社交辞令だったのかと思い始めた頃未知の男性からの電話が、かかってきた。

「小西？ 誰だろうな……」

家内の、電話を告げる声に、小西という名に不審を覚え乍ら、受話器をとる。私には、一向、記憶にない名前であった。

「辻村さんですか？ 私、小西と申しますが葉山君から連絡をいただいて、お電話、差し上げました。ごくつまらぬ拙作のハミリを、褒めていただいて恐縮です」

「ああ、あなたが、あの持ち主の方ですか。どうも有難う。私のカメラ・ハントが恥かしくなりましたよ。全く素晴らしい」

「とんでもない。ベテランの辻村さんにそう仰有られると、穴にでも入りたくなります。カメラハントは毎月、愛読していました、終焉になって、私の愉しみが、一つなくなりました。あわよくば、あのハミリで、辻村さんのハント熱を、今一度、かき立てられたらなどと、大それた考えで、葉山君にお預けしたのですよ」

「確かに——、正にかき立てられましたよ。それにしても素晴らしい少女ですネ。ポーカーフェイスで、平然と排泄儀式を行なうのは、

……イメージギャラリー……『秘書の残業』……志羽利也……



最早、驚嘆以外の何ものでもありませんよ。よく、あそこまで飼育なさいましたね」
「凄く変わった少女です。辻村さんが、少女に関心をお持ちになったと、葉山君から聞き私も早速、御紹介したいのですが、実の処、彼女の住所も電話番号も分からないのです。気分れに、向こうからヒョッリ電話して、

るのです。私の考えですが、生理前後とか、何か精神的に、そうしたものを求めたくなつた時とかで、私自身、未だに彼女の正体が掴めないのです。出会う場所も、神戸であったり、京都であったり、新幹線の大阪駅であったり、伊丹の国際空港であったりで、何度も訊ねるのですが、絶対、あかしません。そ

なわけで、今度、電話がありましたら、必ずその時、御連絡して、御一緒に少女に紹介いたしますから、それまで、お待ち願いたいのです」

「いいですとも。首を長くして、その日を待ちますよ。どうも、いろいろと気を使って下さって有難う」

「いいんです。辻村さんに喜んでいただけたら……。唯、こんな事を申し上げるのは、決して交換条件ではございませんが、一度、御宅へお邪魔してもよろしいでしょうか」

「ええ、是非。いつでも、お待ちしておりますから……」

彼は、自己を紹介した。成程、本職は堅い社会的な仕事である。彼の名誉のために、それは書く必要もあるまい。

思い立てば矢も楯も堪まらないのか、小西某は、その週の土曜日、早速、私宅を訪れてきた。

彼はその時、八ミリ一巻を携えてきた。私がシングルエイトの映写機を持っていないことを、葉山君から聞いて知っているのか、小型映写機、御持参であった。

私は快く、彼の為に、秘筐を開いた。持参の八ミリは、幻の少女の別のフィルム

かと、内心、期待していたが、そうではなかった。

「辻村さんだから打ち明けますが、この人物は、二年前に子宮外妊娠で亡くなった、私の始めの妻のものなんです。誰にも見せたこともなく、葉山も知りません。辻村さんが快く遊びにくるようにと云って下さったので、思い切って持参しました」

彼は半年前、再婚したといていた。見た眼に三十才を半ば過ぎた彼に、早くも人生の悲劇が訪れていたのであった。

不帰の人のフィルムには、懼らく、彼だけの、もろもろの感慨が秘められているのであろう。

例によってカレンダーを裏返して、速席スクリーンをつくり、私は、その陽の目をみぬハミリを間近く見る光栄に浴した。

カメラは崖下にある。崖の上に女人の姿が現われ、じっとカメラを見下ろしている。これが亡き先妻なのであろう。二十五、六才の細面の美人は、やおら、大きく両脚を開く。スカートを一たくし上げた下には、何も穿いていない。

立ち上がった女人は、羞恥を転換させるかのように、眼を外らして、空を仰いだとみ

るや、絹糸の滝が、みるみる奔流となって、カメラに降りそそぎ、叩きつけるしぶきは、雨足の激しさで、女人の姿をゆらめかして、奔流に没し去ってしまう。雨足が納まったあと、仰ぎみる女人の姿は、水滴にゆらいで、歪曲の影を写し出していた。

「レンズの上に大きな硝子をのせたのです。カメラは濡れなかったですが、私は妻のしぶきを全身に浴びましたよ」

彼は暗い中で、註釈を加えてくれた。その思い切った奇抜な構想には度胆を抜かれる。この人のセンスは並々ならぬものがあつた。根っからのスカトロ愛好者ならでは、全身に飛沫を浴びての撮影は出来るものではない。

シーンは、かわる。

ホテルの一室のようであつた。背後で手首のみを簡単に縛られた女人の裸身が、いきなり画面一杯を蔽って、前のベッドへと歩んでゆく。カメラは、ベッドを捉える。

背中を向けた俤、ベッドへ上がった女人は蹲踞のポーズをとり、こころもち、お尻を持ち上げる。

浣腸してあつたらしい。粘稠な液体が、こぼれ始めたとみるや、真白なベッドのシーツに、こらえようもなく、柔らかい一条の太い

線が、みるみる溜って盛り上がってゆく。

純白のシーツの真中に、柔らかに盛り上がった景観は、想像を絶しての驚きであつた。

或はシーツの下に、ビニール布を敷いてあつたとしても、この大シーツ一枚を犠牲にする意欲と、欲求は大したものである。

このシーン、最初から最後まで、女人の顔は写らず、背中のみであつた。

驚くべきスカトロ趣味である。

彼は、その目的のみに、カメラを集中させているようであつた。次のシーン。

キッチンの食卓に向かつて、和服姿の美貌の佳人は、皿に盛られたライスカレーを、みつめている。ライスにかけられたカレーは、それを意識してか、細長く振れて堆積している。謂わば、そっくりなのであつた。彼女の前に、カレーのかかっていない、ライスだけを盛って、スプーンの添えられた一皿が置かれてある。

黙々と女人はカレーライスを食べ始める。

ワンカットのあと、そのカレーライスは、殆ど、なくなっていた。食べ終わってスプーンをおくと、彼女は傍のコップの水をのみ、静かに立ち上がって、椅子に足を掛けて、食卓へと、のぼる。裾に手をかけて、くると

胸のあたりまで着物をまくり上げると、真白い陶磁のような、臀部が丸出しになる。

正面を向いて、しゃがみ込んだ彼女は、飯だけ盛った皿を引き寄せると、股の間へ押しやり、適中の位置を定めて、カメラに顔を上げる。

愧らいに笑った表情は、始めていいのネというように彼の合意を求めているようであった。

カメラは、食卓面スレスレに、その瞬間をねらっている。クローズアップは、豊かな腿から下だけを写し出していた。

レンズすれすれに、水鉄砲が弾き出され、紛れもなく、白いライスの上に、とぐろをまいて、彼女特製のカレーが、盛りかけられてゆく。

立ち上がる両脚のアーチの彼方に湯気の立つライスカレーが出来上がっている。

食卓の中央におかれたライスカレーに、画面一杯の男の姿が、椅子につき、その盛り上がった皿を、かくしてしまう。

これは正に、スカトロの真髄であろうか。同じキッチンにエプロン掛けの女――。

ニツと微笑んで、卓上のビール瓶をとり上げ、漏斗を口に挿す。

ミニスカートをまくると、素肌が白々と浮き上がる。正対した彼女の蒼丘は、かたちよく、繁茂は、ふさふさとした感じである。

立った俚、上体をかがめ、ビール瓶に挿し込んだ漏斗を、あてがう。

激しい勢いに溢れこぼれ、飛沫を撒き散らして、奔流は漏斗で渦を巻く。

漏斗を抜きとり、ジョッキのコップをとり上げると、彼女は出来立ての生ビールを並み並みとつぐ。微かな泡立ち――。

ジョッキを、カメラに差し出して、この端麗な女性に、じっとレンズをみつめていた。

静かな波間に漂う小舟の舳^{へさき}で、窈窕の佳人は吊糸を垂れている。

女人は、チラリとカメラをみると、うなずき、辺りを見廻し乍らワンピースの裾を徐々に、たくしあげてゆく。予想通り素肌が現われる。よろめきつつ、女人は、ポリのバケツの上に中腰で、しゃがむ。しゃがんだ俚、釣竿は離さない。

かなり硬い塊が、コロリとポリバケツに落下する。一瀉千里のように、あとから、あとから、吐き出されてゆく。女人は、このフィルムで始めて、紙で拭った。

ポリバケツを差し出す。

バケツの中のクローズアップ。

数匹の釣り上げた魚が、汚濁の中で白い腹をみせて、押し潰されそうになって、のたうっている。

女人は舟端に体をのり出し、ポリバケツを海面につけてゆく。

ザブザブとバケツを洗っている。

静かな海面に、白い塵紙と、溶解した固型物が漂い、次第に遠ざかって、水面に没してゆく。

女人はカメラに向かって、股のぞきのポーズをとり、双臀を高々と屹立させ、股の間の美しい顔が笑っていた。

ズームが菊花に、ぐんぐんと迫って、画面一杯になった時、パツとスクリーンは白くなった。

奇想天外の、スカトロ映画は終わったのである。時間にして、約二十分ぐらいのものであろうか――。

このフィルムには、ごく簡単な後手縛り以外、SM的な要素は何一つ、なかった。

それでいて、見終わった時、私の心臓は、苦しいまでに、激しく躍っていたのである。

私なら、絶対、挿入するであろう浣腸シーンは、すべて省かれている。

この排泄の手段は、すべてイチジク浣腸によって、促進させたのだという。

冗漫や、そうした手段は、すべて捨てて、唯、ひたすらに、その目的のシーンのみを、彼は追求し続けていた。

「思いがけないことで、アレに先立たれた時は、もう私自身、生きるのが厭になり、後を追って、死のうかとすら思ったほどです。私の変わった趣味を理解してくれて、アレは全面的に、よく協力してくれました。新しく貰った、今の家内を飼育中なんですが、とてもとてもで、当然ながらイヤがりますよ」

「女性にとっての最も羞恥のシーンですからね。若く美しく、そしてごく協力的な、あんな方は、そうそうは、いませんよネ。私だって過去、数知れぬ女性をハントしましたが排泄をここまで美化出来た女性なんて、いませんよ。もっとも、今迄には、そうした関心が、薄かったせいもあるでしょうが……もう感嘆と驚き以外の何ものもありませんよ」

「いやいや、私のこんな趣味は、邪道です。人間、生きとし生ける者の、日常の必然のものであり乍ら、その必然性を、あれこれ弄んでいるのです。こんな種の映画は、アレを対象にして七、八本、近くあります。そのため

に必要なものに金を使うのは、ちっとも惜しくないんです。自分ながら奇妙だと思っていますよ」

彼は明るくなった灯の下で、照れたような笑みを浮かべた。

「思考のすべてが驚きです。奥さんの排泄をすべて美化した感じですね」

「便はトイレですするという規則はありませんものね。不浄化するから、そう思い込んでいるのですよ。当人同志、承知の上なら、寝床の中だっていいし、卓上でも、座敷でも、床の間でも、いいわけです。特有の臭気すら、妻の場合には、かぐわしい芳香に思えるのです。トイレは、あたかも、私の専用みたいで妻は催しますと、私の意向を伺います。携帯便器、挿込み便器、おマル、尿瓶、それらはすべて、便器用としてつくられています、それ以外の日用品でも、便器として使用しても、誰からも咎められるものではないと思います」

「その通りです。最近のポリ製品一つ、例にとってみても、用途は違っても、材料は皆、同じですからね」

「そうなんです。極端な話が、かなだらいで、お汁をつくってもいいわけだし、戦時中

なら、鉄カブトで御飯を炊いたり料理を煮たとか、ききます。ポリの洗面器を携帯便器にして、いけないという理窟はないわけです。ポットを、尿瓶にしたって、それは人、好きずきです。熱帯魚の水槽を、便器代わりにしたって、いいわけで、透明で、楽しいものです」

熱のこもった彼のスカトロ談義は尽きそうにもない。私は折をみて、幻の少女の方へ話を転換しようとした。

一寸、筆ににくい極端な思考を、次々述べる彼を、私は幾分、持て余し気味になってきた。

異常性癖といえ、それまでだが、妻の排便を、観賞なしで過ごされぬという彼の性癖には、流石に一寸、ついてゆけなかった。

興乗れば偶には、そんなプレイも面白からうが、徹頭徹尾となると、とてもではない。

自己の性癖を追及する余り、私という同好の士を知って、彼は、まるで堰を切ったように、あらゆる手段を披露するのであった。

亡くなった先の奥さんは、よくも、こんな彼に協力したものだ、つくづく、その努力には頭の下がる思いである。彼の性癖に追隨する気持になる迄には、懼らく、散々に悩み

苦しみぬいたことであろう。

彼の職業からは、凡そ考えられない性向だけに、ここにも、ジェキルとハイドの二つの相剋する想念を、みる思いであった。

「それで、今の奥さんでは果たされないものを例の少女に求めたというわけなんですネ」

「そうです。私はあの娘に望みをかけ、自己の願望を果たすために、百万円近く費い果たしました。しかし、それは決して、彼女が求めたのではなく私が押しつけたようなものです。あの娘は、決して金には不自由しておりません。かなりの生活をしている家庭の娘のようです。私はこの少女を逃がしたくなかった。一生懸命、気嫌をとり、車で、あちこちへ連れて行ってやり、献身的に、奉仕しました。彼女は、私のこの努力によって、情にほだされたのでしょう。やっと承諾してくれました。あとはラクラクです」

「最初、どうして知り合ったのですか？」

「三重県の志摩半島の奥座敷に、浜島というところがあります。友人と釣りに出掛けた時泊まった旅館で、彼女は卓球をしていたのです。数人とやっておりましたが、彼女だけ飛び抜けて、格段の腕前なんです。私も高校時代、卓球の選手をしておりまして、もともと

好きなものですから、見ているうち、この少女を叩きのめしてみたくまりました。相手変われど主変わらず、少女は独り頑張っていて立ち向かうものもないのを幸い、私は求めて仲間入りし、カウントをとって、彼女と対戦したのです。腕に自信があったつもりですがかなり卓球から遠ざかっていたせいもあって第一回は、ものの見事に負けました。内心は少女だから、手加減してやったのだぞと、独り慰めておりましたが、第二回目が巡ってきた、私もかなり真剣にかかりました。

ロングで、丁々発止と打ち交すうち、カンが戻ってくると、バシバシ打ち込み始めたのです。旅館の慰みの卓球ですから、やがて彼女の仲間は一人居り、又一人と去って、いつしか、私と少女だけになっても、夢中になって打ち興じておりました。

一時間も続けるうち、やはり昔とった杵柄で、私の方が優勢になってきました。少女はかなりムキになって参ります。

流石に私も疲れて一服し、並んで腰掛けに坐り、

(何処から来たの?)

と問いかけましたが、少女は警戒心があるのか、友達と遊びに来たという以外、精しく

はいいません。卓球は中学生の頃から、ずっと続けていると、運動の話になると口が綻びました。

(又、機会があれば勝負してみたいな。私の会社に卓球台があるから、いつでもいらっしやい)

と、いつてしまったのです。その実、卓球台などなかったのですが、私は既に、その少女に心を惹かれていたのでしょう、ついウソを、いったのでした。

(じゃあ、ゆくわ)

と少女は気軽に応えます。私はゲーム場の従業員に頼んでメモを貰い、電話番号を知らせました。

旅先の気紛れと、帰ってからは、忘れともなく一週間ばかり経った頃、ヒョッコリ、少女から電話があったのです。

私は慌てました。早速、三階の小会議室を臨時の卓球場に換え、卓球台を大急ぎで注文する始末です。所内のものは、一体どうなったのかと訝るのを、何とか誤魔化して、ときふせ、運動不足解消に、やることにきめたと行って、その土曜日の午後、心を弾ませて少女の訪れを待ったのでした」

彼の説明は微に入り細に亘っている。

謂わば、卓球が、とり持つ縁であった。

卓球から、ドライブ、ボーリング、そしてゴルフ場へ同伴と、彼と少女の交際はエスカレートしてゆく。

最愛の妻に先立たれた悲しみが少女によって埋められていったことは想像に難くない。

「始めて、私の願望の達成したのは、夏の宵例によって彼女から電話がかかり、これが何度目かの、私の自宅を訪問した時でした。故意に私は、のみものを奨め、お手伝いを休ませておいて、水洗便所の元栓を閉じておきました。尿意を訴えて、トイレに立とうとした時、私は困惑の表情を浮かべ、トイレの故障を告げたのです。私は、アレが嘗て愛用していた携帯トイレを部屋の中央に持ち出し奨めたのです。勿論、少女は頬を染め、モジモジしていましたが、私に出ていってくれるように頼んで、それを使うことを承知したのです。私は、さりげなく部屋の外へ出て、鍵穴から胸を弾ませて覗き込みました。携帯トイレは洋式便器の形をして、坐って用を足すようになっております。

蓋を立て、それに跨がっている少女の背がみえます。

時間を置いて、私は部屋に戻り、さりげな

く便器を抱えて持ち去りました。普通は、濃緑色の消臭液を入れるのですが、私はワザと入れませんでした。用を足したあと、蓋をした俛、ポリバケツのように、中味をスッポリと外して、捨てるようになっていきます。

躍る心を抑え、蓋をとりますと、清澄な液に混じってポツリと三つの小塊が浮かんで丸めた紙の隙間から、なつかしい芳香が私の鼻腔を刺激したのです。

私は中味を、家内に使っていた、ポリのパットに宝物のように移し換え、念入りに便器のバケツを洗浄して、再び部屋に持ち込みました。

（綺麗に洗ってきたよ、ヤスコちゃん）そうです、少女の名はヤスコというのです。

少女は、ハツとした表情になって、私をみつめる眸は、見る見る羞恥にうるんでゆきました。なじるような視線が交錯します。液体の外に、数個の固型が、たゆたうことを、少女自身が、よく知っていたからでしょう。

俄に激情がつき上げ、私は思わず少女を抱きしめました。拒まず、ヤスコは、私の腕の中で、体を固くしております。

その夜、私は思い切って、アレのハミリの一本を、ヤスコに見せたのです。口で説明す

るよりも、その方が、私の性向を知ってもらえる手っ取り早い手段に思えたからです」

彼は憑かれたように雄弁であった。彼は哀願せん許りにヤスコに頼んだのであった。

——ヘンな人——

ポツリと呟いた、少女の体は、心なし熱かったと、彼はいう。

その夜から、一カ月以上、少女からの消息はなかった。その間、彼の身辺も、多彩であって、奨める人があって、再婚に踏み切っている。

やはり嫌悪されたかと諦めていた時、かつてきた少女の電話に、彼は欣喜雀躍して、少女と神戸の三の宮で会った。

もう、自宅へは連れてゆけない。さりとてアベックホテルへ同伴するには、ヤスコは余りにも若かった。

彼は警備員に、調べものがあると告げて、所内へヤスコを連れ込んだ。

彼はポケットの中で、薬局で買った、二個入百円の、イチジク浣腸の小箱を、しっかりと握りしめていた。

——ヤスコの欲しいものは、何でも買ってあげる。だから一度でいい、私の希いをきいてくれないか——

彼は哀願する。

——欲しいものなんか、何もないわ。ただこういうこと、きいてあげる——

意外にも少女は、彼の願望をきき入れて、パンタロンを脱ぐと、彼をみつめ、行為を促す眼付きになって彼をみつめた。

「パンティを下げる私の手は、歓びに慄えていました。イチジク浣腸をとり出すと、少女は、そっと柔らかい腿を開いたのです。

かげらう蕾を、始めて眼のあたりにした私の歓喜は、口では、いい現わせません。

痛くないように、注入して、私は背後からいとおしさの余り抱きしめました。

このトイレは洋式です。腕を離すと、ヤスコは洋式便器に跨がり、眉間に、しわをよせ、微かな腹痛を、こらえていました。

トイレの扉を開き、私は、ヤスコの一部始終を、じっと見守っていたのです。

終わったのでしよう。把手を押えようとした彼女の手を慌てて制し、私はハーパーを長く引き伸ばして千切りとり、まるで腫物にでも、触るかのように丁寧に、あとを拭きました。

——見ないで、羞かしいもの——
立ち上がって便器をうしろにし、ヤスコは

小さな声で拒みました。その言葉を見無視して私の手は早くも蓋にかかり、そっと開き、覗き込みます。水溜りの中に浮かぶ片々。

ヤスコがいなくば、手摺みにして、とり上げてみたい思いを辛うじて制し、この眼に灼きつけて、未練一杯に把手を押したのです。

激しい水勢に巻き込まれてゆく固型に、私は宝物を亡くしたような感懷を覚えました。

排泄のある風景。そんなデートが断続的に続き、ヤスコは、いつしか馴らされてゆく。

遂に八ミリが登場する。一卷のうちの、何分の一かが、その行為で占められている。

その積み重ねののち、遂に、ヤスコの協力によって、儀式、曼陀羅、小笠原流が完成したのであった。

ヤスコ自身、徐々の根よき飼育のうちに、いつしか狎らされ、羞恥の圏外に、排泄を置きかえていたのであった。

「いずれ近々電話が、かかってくると思います。電話してくるかどうかは、彼女の意志次第です。もし、辻村さんが、こうした行為に興味をもたれたら、あとは御自身で、いかようにでも交渉して下さい。私のアイドルを、独り占めしたい気持と、アイドルなればこそベテランの辻村さんに、その飼育振りを見て

もらいたい気持が交錯して、私自身、ジレンマに悩んでいるのです」

その気持、よく分かる——。私がベタ褒めしたからこそ、彼も、同類相憐れむの気持で心ならずも紹介する気になったのではなからうか。

その電話に期待するところは大きかった。その日の近からん事を、互いに願って、彼は私宅を去っていった。

これだけ出会っているのだから、或は、小西某自身、ヤスコの住所、電話番号などを知っているのではないかと思われるが、分からないという以上、聞き出す術もない。

幻の少女、ヤスコとの出会いは、すべて、彼の意志にかかっているようであった。

幻の少女と出会って、われにもなくアガること

私自身、スカトロ的興味を覚え出した折も折、まるで符牒を合わせたかのように、トイレ、バスの改築に踏み切ったのであった。

私で、もう百数十年は使用したと思われる便器は、瀬戸物の便器以前の、木枠の古めかしい明治調の便所で、勿論、汲み取り式である。しゃがめば、板がフワつき、欠け落ちた

壁間から陽の光が射し込み、堆積する排泄物が、まざまざと、否応なく眼につき、生理期になると、若い末娘は、いつも羞かしがり嫌がっていた。もう、倒壊寸前で、何とかしなければと、以前から、馴染みの大工に頼んで

いても、仲々順番が廻ってこず、やっと、手をつけてくれることになり、数年前から表の下水道の受益者負担をしている、水洗の恩恵にありつけたのである。

数十年、お世話になった便所は、一日で棟



イメージギャラリー『暴漢ムードプレイ』——二鷹I・O——

ごと、こぼたれて、その日から不自由なトイレ生活が始まる。

小西氏の謂う、携帯便器を買ったが、どうも尻が落着かない。結局、裏庭が広いのを幸い、片隅に穴を掘り、こぼった建物の材料で足のせをつくっての臨時便所であるが、周囲の二階家からは見下ろせる位置にあるので、娘は羞かしがって夜更けにしか、ゆかない。

中年男の私など、その点、図々しく、催せば、夜昼の区別なく、広々した裏庭での、野天便を愉しみ、傍に咲く紅梅の匂いに、むしろ風流だわいなどとウソブいているが、確かに不自由は不自由に違いない。

そんなところへ、嫁いだ長女が、予定日より半カ月も早く男児を出産して、私にとっては三人目に当たる孫と共に、産院から里帰りしてきては、正にテンヤワンヤである。

携帯便器は長女の専用になってしまった。娘も二人目の子供を産む年令になると、親である私に対しても、かなり露骨なことをいうようになる。

元気がなく、痛そうな顔で寝込んでいるので、どうしたのかときくと、長女曰くに、初産の時は、会陰部を初開して出産したが二度目だから、切らずに産ましてくれたのは

いいが、陣痛の時、ぐっときばったら、会陰部が裂け、縫合してくれたが、退院の時、糸を抜いたあとが、昨夜、固い便をしたら、力を入れたので又、裂けて、尿が滲んでヒリヒリ痛くて仕方がないというのであった。

この後、放っておいたらセックスの時、弛緩して、よくないでしょうとときくから、そらアカン、もう一ペン縫い直してもらてこい。固い便、余りきばったらアカンで。イチジク浣腸でもして、ユルユル出しや、といったがこんな親娘の会話の出来る長女をつれて、始めて、曙書房当時の、堺の箕田氏の家を訪れての帰り、臨港埋め立てもしてなかった、港の浜辺で、ロンパス姿だけにして、水遊びさせてやった時は、二才だったのと思うと、何かつくづく隔世の感を覚えるのであった。

本職と改築と出産のドサクサのそんな時、小西氏から電話がかかる。

「ヤスコから電話があったのです。明日の正午、大阪の厚生年金会館の正面で会うことになっております。おいでになりますか？」

「ああ、必ず……」

と、いったものの、内心、困惑する。家内は明日、長女を連れて婦人科へゆくし、末娘も息子も、銘々の仕事で出てゆく。大工は、

くる。私独り残って采配を振る予定であったからである。しかし、チャンスを通しては、又、いつ巡ってくるか分からない。

「フォトはお撮りになるのでしょうかね」

「そう出来れば、有難いのですが……」

「発表しないでやって下さい」

「ええ、もうカメラ・ハントは書いていませんから、私の愉しみのつもりです。それで、排泄はするのでしょうかね」

「そのつもりです」

「じゃあ、カメラはやめて、ビデオを持ってゆきますよ。こんなシーンは、動かなくちゃ面白くないものね」

「さあ、多分O・Kでしょうが、大変でしょう」

「なあに、その気なら大丈夫ですよ」

「そうですか。じゃあ、お待ちしています」

要件のみでアッサリと切れる。

実の処、最近のようにビデオが出廻ってきでは、もう私のビデオ熱は、かなり醒めていた。携帯ビデオや、カラービデオも始めた今、私の持つ、初期のビデオは、本体だけでも四十キロ近くもあって、それに、カメラ、モニターテレビ、マイク、附属品となると、これは相当の物量である。

渡部好美さんを最後に、ここ二年許りビデオを撮っていなかった。早速とり出し、調整して、新品のテープを装填し、万全を期し、車に積み易いようにして、私は、いよいよ、幻の少女と、現実に明日、出会えるという実感が湧いてきたのであった。

いろいろの、スカトロ的構成が、頭の中に渦を巻いて、かけ巡る。

しかし、小西氏と一緒にでは、私の構想は、独断では果たせそうもない。

根っからの嗜虐好きは、同じ排泄シーンにしてみても、やはり緊縛するか、自由を束縛した上で、イチジク浣腸程度のものではなく、ポンプや、エネマなどを使って、存分に、浣腸の醍醐味を味わった上、排泄シーンを撮りたがっていた。

私が、いかに妄想を逞しくしても、当の本人の幻の少女が、果たして、そうした行為を容け入れてくれるかどうか問題である。

私は久し振りに、カメラ・ハント的な激しい意欲を取り戻していった。

明けて翌日は、生憎の、朝からの雨降りである。

折角、昨夕、ガソリンスタンドでピカピカに洗車してきたのに、忽ち汚れてしまうこと

だろう。

のっぴきならぬ用事が出来たからといって
会陰裂傷で痛がっている長女の、婦人科行き
を一日、伸ばしてもらって、この不埒な父親
は、いそいそと、十一時過ぎ、家を出る。

ビデオ道具類を、車のトランクに、せっせ
と積み込んでいるのだから、長女も家内も察
してか、余り、いい顔はしない。

僥倖を願って、若干の縄や、手錠、女性の
パイプ、浣腸具なども、ダンボール函に詰め
込み、若し機会あらばと、カメラも忍ばせて
おく。

車だから、いくら積んでも、荷物にはなら
なかった。

四つ橋に近い、厚生年金会館へ到着したの
は正午十分前。

早く到着して、よかった。

小西氏は、自家用のセドリックで、既に先
に来て、私を待っていた。

「もう、間もなく到着すると思いますよ。ヤ
スコは時間に正確ですから——。車を一時、
この近くのモータープールにでも入れておき
ましょう」

勝手知ったように、彼は車に戻ると、バッ
クさせ始める。付き従う私——。

男同志の、一本の相合傘で、再び、会館へ
と戻ってくる。

「生憎の天気でしたねえ。ヤスコが承諾しま
したら、私に遠慮せず、どうぞお二人でお出
かけ下さい。若し、嫌だというようでしたら
私も、おつき合います。一応八ミリを、準
備するだけは、して参ったのですが……」

「ええ、どうぞ御一緒に結構ですよ。私はビ
デオを積んできましたよ」

「今日は、辻村さんのお手並を拝見させてい
ただきますよ。それを愉しみにしているの
ですから」

「縛っても、いいんですかね」

「一、二度、簡単に、それらしきことはやっ
てみました。うまくリードすれば大丈夫だと
思います。今日の私はオブザーバーです」

私達は、会館の正面で、雨足の激しい、舗
道の左右を、それらしき少女を求めて、見廻
していた。

タクシーが、正面に横づけになると、真赤
なレインコートをきた、少女が降りる。

ジャズコンサートの開催で、会館の正面入
口に、若い男女の群れが多い。

赤いレインコートに、小西氏は近づき、何
か二言、三言、声をかけていた。チラリと少

女の視線が私に走り、カブリを振っている。
小西氏は私を手招く。

「ヤスコですよ。御一緒だとイヤだといって
駄々を、こねているんです。私と二人でコン
サートをみようなんて……弱っている
んですよ」

私は黙って頭を下げ、柔らかに笑った。

少女にとって、私は未知である。

赤いミニのレインコートから覗く、黄色い
ネックのジャケットと、腿まである、編上げ
のブーツが印象的である。

肩に髪を垂らした少女は素顔であった。

その表情は、あどけなく子供っぽい。

お義理のように、私にペコリと頭を下げた
が、何となく拗ねているようにみえる。

彼と二人のつもりであったのが、私という
思いがけない同伴者のいたことで、内心フク
レているのかも知れなかった。

「儀式」で、茶釜を跨いで腰を落とし、コチ
コチの宿便を吐き出した童女が、今、現実
に私の眼前に佇んでいる。

「曼陀羅」で、鍬をかついだモンペ姿で、自
分の排泄場所を掘った乙女が、ナウなスタ
イルで、私をみつめている。

私の末娘より未だ若い少女に、私はスカト

口的な抄録の眼を向けていた。

「免も角、ここに立っていても仕様がなない。ねえ、食事でもしよう。話はそれからだよ」

彼は、この雰囲気から脱出すべく、少女の意向を無視した恰好で、歩き出した。

喫茶室で、相対してコーヒーを啜るうち、少女は、やっと落着きを取り戻したらしい。

彼は、私の人柄や、趣好、仕事などを、かなり正直に、フィクションを混じえず、少女に紹介していた。私という人間を、なまじハツタリで説明しない処に、彼の実直さが窺われる。

「でも、愧かしいなあ。センセだけでも、いい加減ハズかしいのに」

彼をセンセと呼んで、少女は羞恥を、いい立てる。

緊縛モデルや、M女性にない、ウイウイしい、青麦のような新鮮さが、少女の身边に、かぐわしく匂っていた。

「映画をみせて、すっかり話してしまったんだ。安心出来る人だから……」

「誰にも見せないって、約束したくせに」

「ウン、そのつもりだったけど、この人には義理があつてね」

彼は、苦しいウソを、いわざるを得ない。

まさか、私とよしみを通ずる手段に使ったなんて、少女の前では、いえる筈もない。

私の脳裡には、既に一つのオドロドロしい疑問が渦を巻いていた。

現実の、今眼の前に坐る少女は、正しく、あどけなく、潔らかな乙女そのものである。みかけた処、高校、二、三年生ぐらいにしか見えない。

それでいて、あのハミリによって知った少女の爛熟しきった秘所の、どれをとり上げてみても、この初々しく、あどけない少女の、現実の実感とは結びつかなかった。

男性にとって好ましい女性を「昼は淑女、夜は娼婦」と譬えることがある。

この幻の少女は、ハミリをこの眼で、ジカに見た感覚からすれば、それこそ「昼は聖処女、夜は娼婦」という、稀代の少女のようにも思われるのであった。

中学三年生の十三才の少女が、クラブのホステス勤めをする怖るべき世の中である。客の誰しもが、若くて十八才、せいぜいハタチぐらいと踏んだホステスが、その実、十三才の少女であつたとは異常な時代である。

中学一年生で家出して、大阪西成区のマンションで、24才のパチプロ氏と同棲。ミナミ

のクラブで働いていたというのである。

身長157センチ、体重54キロで、ミニやパンタロンをうまく着こなし、とても子供とは、判定しようのない、近頃の少女の見事なプロポーションであった。

十六才のホステスが、数々の男性を手玉にとって、殺された事件も、他人事ではない。幻の少女ヤスコの場合、この逆であった。初々しく、あどけなき、スタイルの、肉体に秘めた、爛熟さは、どう解釈してよいのであろうか――。

それを知っている者は数少ない筈である。いや或は、それは私の幻想で、この幻の少女は、小西氏や、葉山啓等、一連の、スカトロ趣味の連中の知らぬ世界で、自由奔放に羽根を拡げて、性の深淵に惑溺しているのではなからうか――。

数多のハント女性のかげりを、露出し、この眼で見えてきた私である。例え映画とはいえあのクロースアップで撮し出された少女と、眼前の聖少女めいたヤスコとは、どうしても結びつかぬ、豊富な体験者のように思えてならなかったのである。

小西氏も、葉山啓も、このあどけない少女の幻影に惑わされて、オドラされているのか

も知れない。

住所も告げず、電話番号も告げず、自分の方から、気が向けば一方的に電話を掛けてくる秘密は、そのような奈辺にも潜んでいるのではなからうか。

詮索好きな私は、少女と相対し乍ら、そんな妄想に耽っていた。

少女は確かに可愛い魔女のようである。散々スカトロ趣味の連中を、じらせておいて、自らそれに応じているし、「儀式」等一連の映画の、あのポーカーフエイスの、能面めいた表情には、底知れぬ妖しさを胚^{はら}んでもいるようであった。

私の豊富なハント体験のうち、この少女に近い年令は、金原奈加子ぐらいであろうか。彼女の場合、報酬と、その夫の意志の働きがあったが、この少女は奔放不羈にみえる。

私の知るM女性にはない範疇であり、事実彼女が、M性を、保有しているという「しるし」は何一つ、なかった。

大人を手玉にとって喜び、それらの男性の願望を充たしてやることによって、彼女は尚更に自由を謳歌しているかの様であった。

コンサートに来るからには、勿論、無教養ではない。それどころか、少女の瞳は、折々

理智的に光り、小西氏と喋る話題の中にはセクスと、ナウな感覚が、あふれていた。

「免も角、今日は、ヤスコの自由意志に任せよう。しかし雨の中を折角、こうして、わざわざ、君に会いたさに出てこられた辻村氏をお帰しも出来ないじゃないか——」

小西氏は妥協案を出して、少女に求めた。「私のことなら、いいですよ。勿論、初対面だから当然でしょう。今日は帰りますよ」

内心、満腔の未縛を残し乍らも、私は彼の手前そういわざるを得なかった。今、この俚別れたら、この少女との繋がりには、プツリ切れてしまうことは間違いない。にもかかわらず、この年令が、私にそう云わざるを得ないものにしていた。親娘程も違う、年令の開きが、私に若干の、諦観の念を抱かしめていたことも事実である。

「いいわ、センス、御一緒でも……我儘いつて済みませんでした」

少女の態度は、意外に軟化した。どうした感情の変化なのであろうか。

忽ち豹変する、若い娘の感覚など、大正生まれの私が、理解しようとしても、無理なのかも知れない。

「そう、有難う。恩に着るよ、ヤスコ。じゃあ、いつもの店でメシでも喰ってから、いつものところへ出掛けよう。いい具合に、今日は土曜日で、午後から休みで、ガードマンだけだから……じゃあ、辻村さん、どうぞ」

私を、いざなう。当初から、一対一のプレイを願っていた私の観念は、彼と一緒に、同行するだけが精一杯の、恰好になってしまっていた。

この住所不明、所在不明の、幻の少女を、いつかは適確に把握してみたい。内心に、そんな鬱勃たる野心を抱いて私は立ち上がる。スナリと、私の誘いにのる女性より、こんな少女の方が、張り合いが、ありそうだ。わざと、振り廻されてやってもよし。中年男のバカなピエロになってもよし。

さあれ、謎に包まれた少女の正体を剔抉^{てつ}するまで、私は執拗に喰い下がってゆく腹をきめたのである。

私自身、我にもなくアガっていることを、自覚せずにはいらなかった。

幻の少女の、思いがけぬ正体

まるで、十年の知己のように彼と話し合う私の様子に、少女は、かなり警戒心を解いて

いた。まさか私と彼とが、ほんの数日前、始めて知り合った仲であることなどオクビにも出さず、私のそんな演出に、彼も誠に調子よくツジツマを合わせ話に乗ってくれていた。

彼の唯一の目的は、排泄にあることは、既に承知の私である。その為の前戯的緊縛や、浣腸は、私の分野である。懼らく彼は、その目的以外には、ハミリを廻さないかも知れない。

しかしヤスコが果たして、私の行なう緊縛や浣腸儀式に、どのような反応を示すかという興味は、かなり、抱いては、いたようである。

「辻村さんはね、緊縛のベテランなんだよ。ヤスコも、知っているだろう。SMプレイという言葉を知？」

「ええ、サドマゾのことでしょ。私はマゾヒストかも知れへんわ」

「へえ、どうして」

驚いて彼は、きき返す。思いがけない言葉をきいた表情であった。

「よく、そんな夢みるの。誰かに暴行されてゴーカーンされている夢」

「そいつは驚いたなあ。そんな願望、持っているの？」

「でも、現実には一度もないわ。そんなことされてみたい気はあるわ。本当なら怖いんだけど」

これはこれは。フロイドの分析にでもかけたら面白いような少女の、思いがけぬ発言であった。

「アナルセックスって知っている」

「ああ、おしりのね。知ってるわ。どうして？」

平然として、きき返す。いよいよ、コレはコレである。私は俄然、興味津々の想念に憑かれた。

「経験あるの？」

「ないわ。どうして？」

「いや、何となくね。ハミリから想像して、アナルが、かなり使われているように思われたから……」

「イヤだ。センセ達の、せいだわ」

少女は、けたたましく笑った。

「そうでもないぞ。私が、浣腸をヤスコに始めてしたとき、君のアナルは、かなり荒れていたぞ」と彼。

「本当に、ないのよ。でもオナニーは、中学一年生から始めたわ」

ケロリとした顔で、このあどけない少女は

ドキリとするようなことを口走る。所内のオフィスは、徐々に温まりつつあった。

「随分と早いな、性に目覚めるのが。誰に教えてもらったの？」

「誰ってことないわ。だって、手をやるうち何となく感じちゃうんだもん」

「今も続けているのかい？」

「ええ、気が向けば、毎晩かかさないわ」

かなり、つき合い乍ら、小西氏は、少女のこんな告白を始めて聞いたらしく、眼を丸くしていた。スカトロ一辺倒の彼にとっては、すべての思考力を、そこへ傾注していたせいだが、こうした少女の告白には、思いも及ばなかったらしかった。

爛熟と、リップの肥大は、そんな点に由来するのか。しかし？

「初体験は、いつ？」

私は少女の、天真爛漫の発言に乗じて、さりげなく聞いてみた。

「高校一年生——」

それにも少女は、あっさりと返答する。

「相手は？」

「私が好きになった大学生よ」

「ずっと続いたの？」

「半年ぐらいネ」

「よく妊娠しなかったネ」

「彼は、その方の知識豊富な。アンネを聞いて、コントロールしていたもの」

スラスラと答える言葉に、私は毒気を抜かれて呆然としながらも、抱いた疑問は、こうして、あっさりと氷解してしまう。

「今は？」

「かっこのいい奴と、時々遊んでいるわ。でもヤツはカラッケツでしょ。いつもワタシが出てやるの。だけど、オナニーの必要、ないくらいに、ワタシを喜ばせてくれるわ」

こう判っきりいわれては、返事のしようもない。あどけない童女の吐き出す言葉の妖しさに、私と小西氏は、苦笑して、顔を見合わせるばかりであった。

「私には、全然、許さなかったくせに……」

彼は、真剣な表情で訴えるのであった。どうやら、拒否されたらしい。

「だって、今の私は、カッコいいヤツに、熱をあげてるんだもん。センセに許すと、ヤツに悪いんだ」

「そのヤツとは、初体験の大学生かい？」

「アイツは半年とிட்டたでしょ。今のヤツは比較にならぬくらい、テクニックが、うまい

のよ。しびれるわ」

マイッタ、参った。正に、私の予想通り、
「昼は聖少女、夜は娼婦」である。

いや或は、時と場合では、夜昼の区別なく聖少女と娼婦を使いわけているようだ。

「そんなヤスコが、どうして今日、あんなに辻村氏を拒絶したの？」

「この人、もうオジサンだもの。好き嫌いの選択は私の自由でしょう。でも、話せる人と分かって、一寸、見直したところよ。だってオジサンったら、パパみたいだもん。しらけちゃうわ。分かるでしょ、この気持——」

分かる、分かる。私はその時、うちの末娘が、私の知らないところで、こんな状態だったらと考えると、ゾツとした。

事実、末娘は、ただいま恋愛中であった。

夜の十一時や、午前一時頃に、車で彼に送られて帰ってくることも度々である。まさかセックスまでは、とは思って、自分の娘を信じてはいるが、もう年頃である。

(キスぐらいは、したのか)ときいたら、(お父ちゃんの想像に任せるわ)といった。

想像に任せられたら、当然そこまでは行きついているが、相手の青年が、北海道だけにいざとなると親心は迷うのであった。

巡る輪廻^{りんね}で、親の私がこうだから、末娘が当然そうなくても、仕方ないとしても、年頃の娘を持つ、親の心配は、常に付き纏う。

厳然とした事実の一つが、ヤスコの口から吐かれ、この化粧っ気もない、素顔に幼な顔の残る少女が、憶面もなく、性の歓びを謳歌するに至っては、私の、末娘に対する自信もぐらつかざるを得なかったのであった。

しかし、反面、恋愛は自由の今の世の中で好きな相手が出来て、交際するのも当然である。それが、簡単にセックスに結びつくところが、問題であるにしろ、一旦、好きときめたら、そのヤツと称する青年に操を立てて、彼に悪いといって、誰とでもフリーセックスに走らないところが、現代に生きるヤスコの一つのモラルであるのかも知れなかった。

幻の少女は、いつしか、その正体を急速に曝露しつつあった。

私の心は、激しい嗜虐欲に、かられる。

自ら称してマゾヒストという少女に、私は緊縛から浣腸、そして排泄のすべてを記録にとどめるべく、ガレージへと引き返した。

ビデオやSMプレイの道具を、持ち込むべく……。

〔愛読者通信〕

『自縛教室』と縄の掛け方

△山口とき子様へ▽

まり・さとる

拝啓、山口とき子様——。

二月号と三月号の『とき子の自縛教室』、
楽しく興味深く拝見させて頂きました。

私は一度でもいいから、女性の方を本格的
に縛ってみたいとは思っておりませんが、残念
な事に、まだその機会はありません。

従来、いろんな縛り方の絵や写真が有りま
すが、縛りの手順を紹介した物は数少なく、
詳細な手順を見るのは、私は初めてで有り、
大変興味を覚え何度も読ませて戴きました。

縛りの手順を参考にしようと思っている私
や、縛りと云うよりも、縛りのムードだけを
味わいたいと思っている、他の女性の方達の
為にも、再度登場して戴きたいと思ひます。

今回の読後の感想や意見を、さし出がまし
いとは思いますが二、三、書かせて下さい。

何かの参考にして戴ければ幸いです。

自縛の限界は、貴女の云われる通り、後で
自分で、ほどかなければならない事です。

縛る時や、ほどく時に、「誰かに……」と
思った事は有りませんか。貴女は男性に興味
はなく、他人からの暴力に似た行為にも興味
は無いとの事です。この様な事を思った
事は無いでしょう。

私には残念でなりません。しかし、ほど
く時に、「ロボットの様な物が、ほどいてく
れたら、自縛とは云え、自分でほどけない縛
りが楽しめるのに」と思った事なら、一度や
二度、有るのでは無いでしょうか。

今後は、ほどく役目をするロボットを研究
し、製作して下さい。私が、二、三ヒントを
書きますので参考にして戴ければ幸いです。

私がロボットの役目を出来たら、と思ひ
ますが、私ごとき者では無理な話でしょう。
しかし、いずれ、間もなく貴女も良き男性パ
ートナーに恵まれる筈です。

でも、これから書きますロボットが、ライ
バルの役目を引き受けてくれるのではないか
と思ひます。貴女には申し訳ありませんが、
ロボットに苦戦してくれればと思ひます。

長々と前置きを書き連ねましたが、早速、
本題に入ります。

ロボットと云っても、いろいろ有る事は、
貴女も知っての通りです。例えば自動販売機
や、人間の神経の役目をする火災自動感知報
知器、液面自動制御器など数多くあります。

姿や形が異なれど人間の様に万能では無く
限られた役目しか出来ません。一ツか二ツの
目的にしか働けぬロボットなれば、用途や細
工次第では、自作出来る物が、かなり有る筈
だと思ひます。

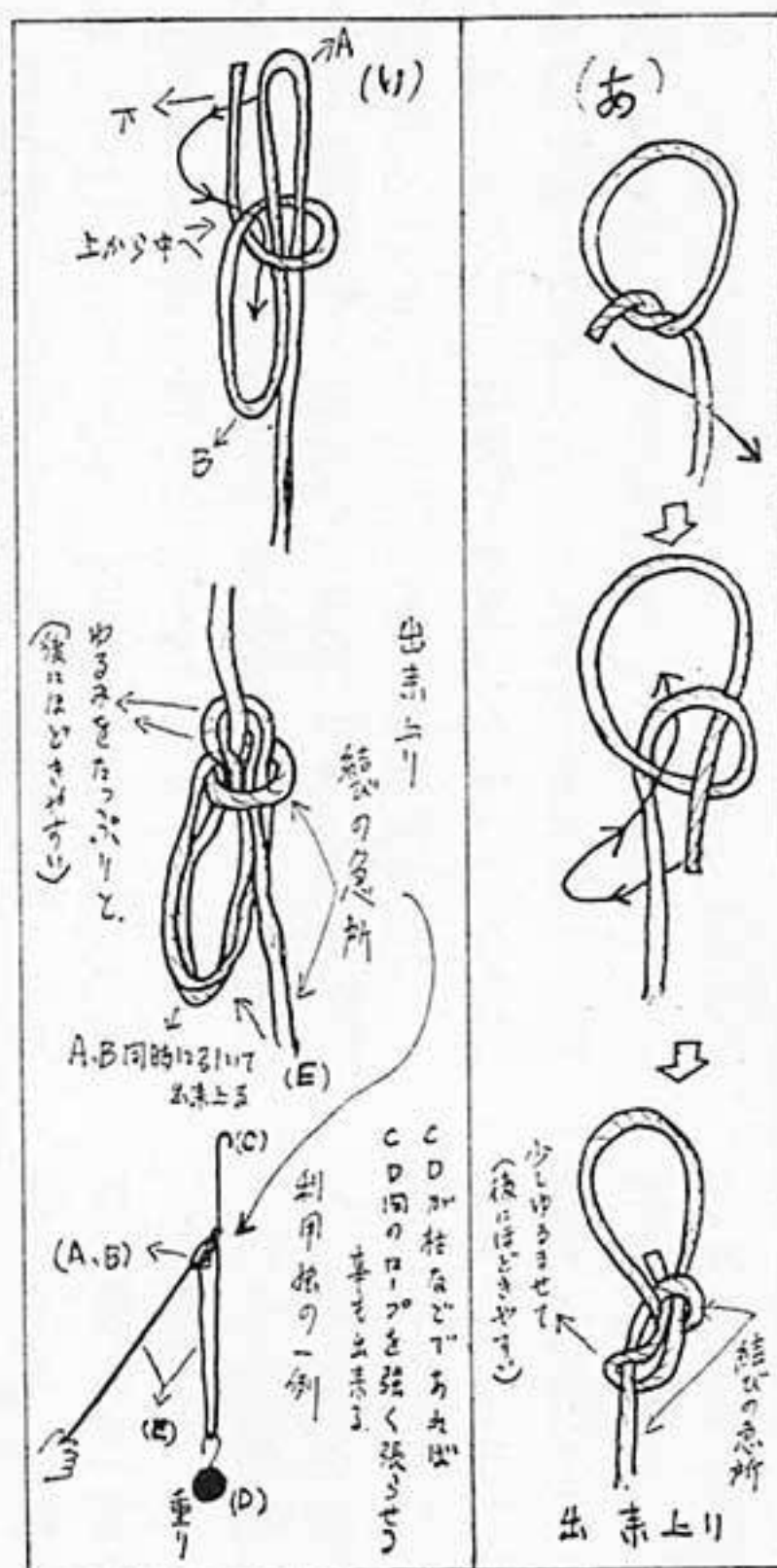
しかも、幸な事に、私達の身の周りには、
文明の利器や道具が豊富に有ります。細かな
工作をしないで、少し手を加えるだけで本来
の目的と異なる別の働きをしてくれます。

例えば、縄の一端を引けばほどける様な結
びで縛れば何かの力で引いて貰うわけです。

二個のポリバケツを用意したと仮定しまし
よう。一個は机か台の上に置き、針の様な物
をガスの火で焼き、小さな穴を開けます。

それに水を適当に入れますと、小さな穴から流れ落ち下のバケツを満たします。その満たされた水の浮力や重量、それに水位などが縄を引く役目にするのです。少しばかり細工を必要としますが、小さな穴から水が少し宛流れ落ちる、かなりの時間が価値有る物だと思ひます。自分で定めた一定の量や浮力、重量に達するまでは、自分でほどこけない設定であれば、自縛とは云いながら、縛り終えたらもう自縛と云えない事ではないでしょうか。

また市販のタイムスイッチを利用するのであれば、掃除器やパンが焼けたらパチッと上がるトースターのバネなど、必要な力は身のまわりに豊富に有ります。具体的に詳細に説明しない方が貴女の新たな研究と云う楽しみになりますと云えば、これ程が良いですが、種を明かすまでも無く、私にはその才能が無い



りますので、図で紹介いたします。見ての通り、自縛に、そのまま使えそうもありませんが、研究や楽しみのヒントにでも応用して戴けたらと思ひます。

(あ図)の結びは自縛以外の縛りにも使用して戴きたく、練習すれば簡単な結び方です。誰が考案した物か知りませんが、結び目に楽しさや興味を覚えられ目と云います。結び目下さい。

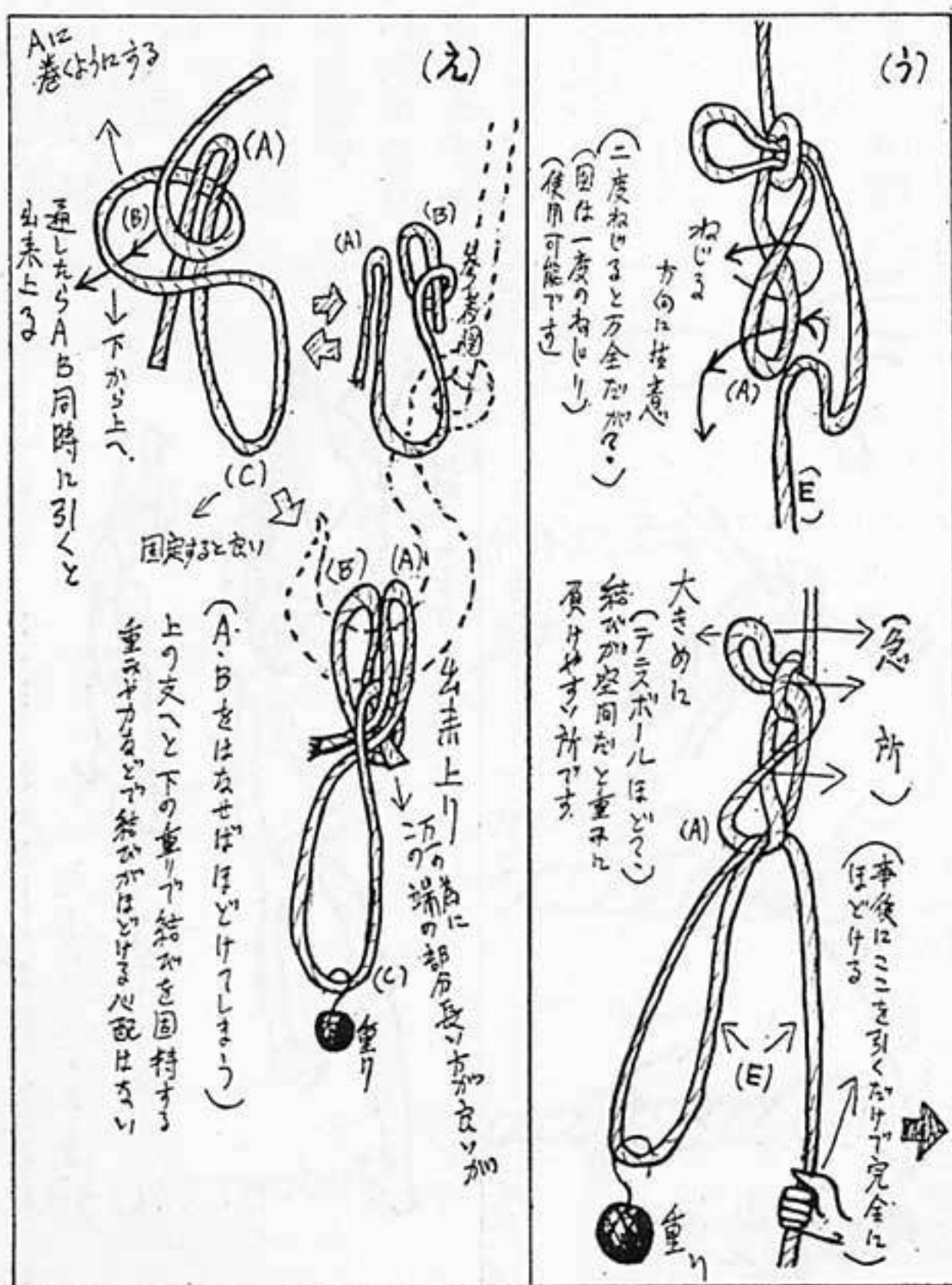
(い図、う図)は良く

のです。確実にロボットに、ほどこいて貰う為には、ほどけ易い結びの研究も、新たな楽しみの中へ加えて下さい。

私も鳶工と云う職業柄一般に余り知られていない、特に山口さんは知って居られないと思われる縄の結びを少し知って居

似た物ですが(う図)には、ほどけ易いと云うのが欠点になって居ります。吊りには不適當な結び方です。図で見る通り、途中の輪が用途に応じて滑車の役目やブレーキの役目を致します。(い図、う図)共に、かなり用途が有ると思われる結び方です。

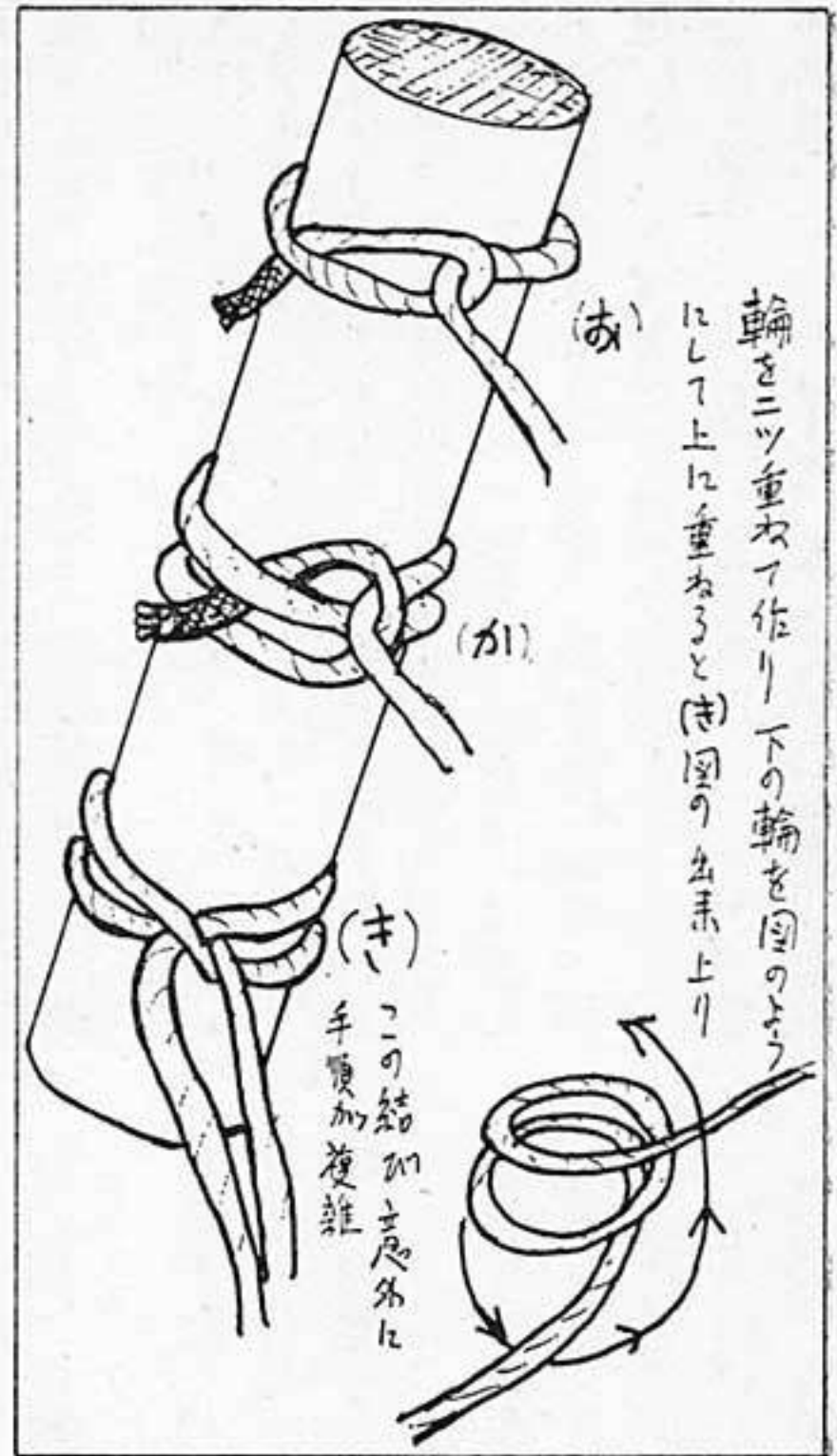
(え、お、か、き図)は、一見して意外と思われる物もあり、力や重みに耐えられそうもなく見えますが、正確な結びで有れば大丈夫です。(え図)は覚えておいて損のない便利な結び方です。(き図)は二本の縄を別々に広げて引くと輪が縮まりますが、図のように



二本、同一方向に引けば、輪が縮まる事は無い筈です。但し万一の危険の為に腹部を、この輪の中に入れて縛る事はしないで下さい。ロープに引く力が加えられている時に身体を、もがく様に動かすと輪が縮まり、かなりの危険が有ると思われれます。

この結びと云うより、縛りの方法は、一度縛って二本のロープ（一本でも使用可能の場合も有ります）に力が加えられると、輪が大きくならないと云う特色が有り、別名をトックリ（徳利）と云って、徳利の丸い胴体の倍分を縛っても、抜けないと云う意味です。

滑り易い柱の中間やテールブルなどの足を縛るのに適した縛り方です。上下に滑りそうな所へロープを取り付け縛るのに最適の方法です。どれも一見して簡単な様ですが、手順を何度も練習して、自分の手に覚えさせる事で



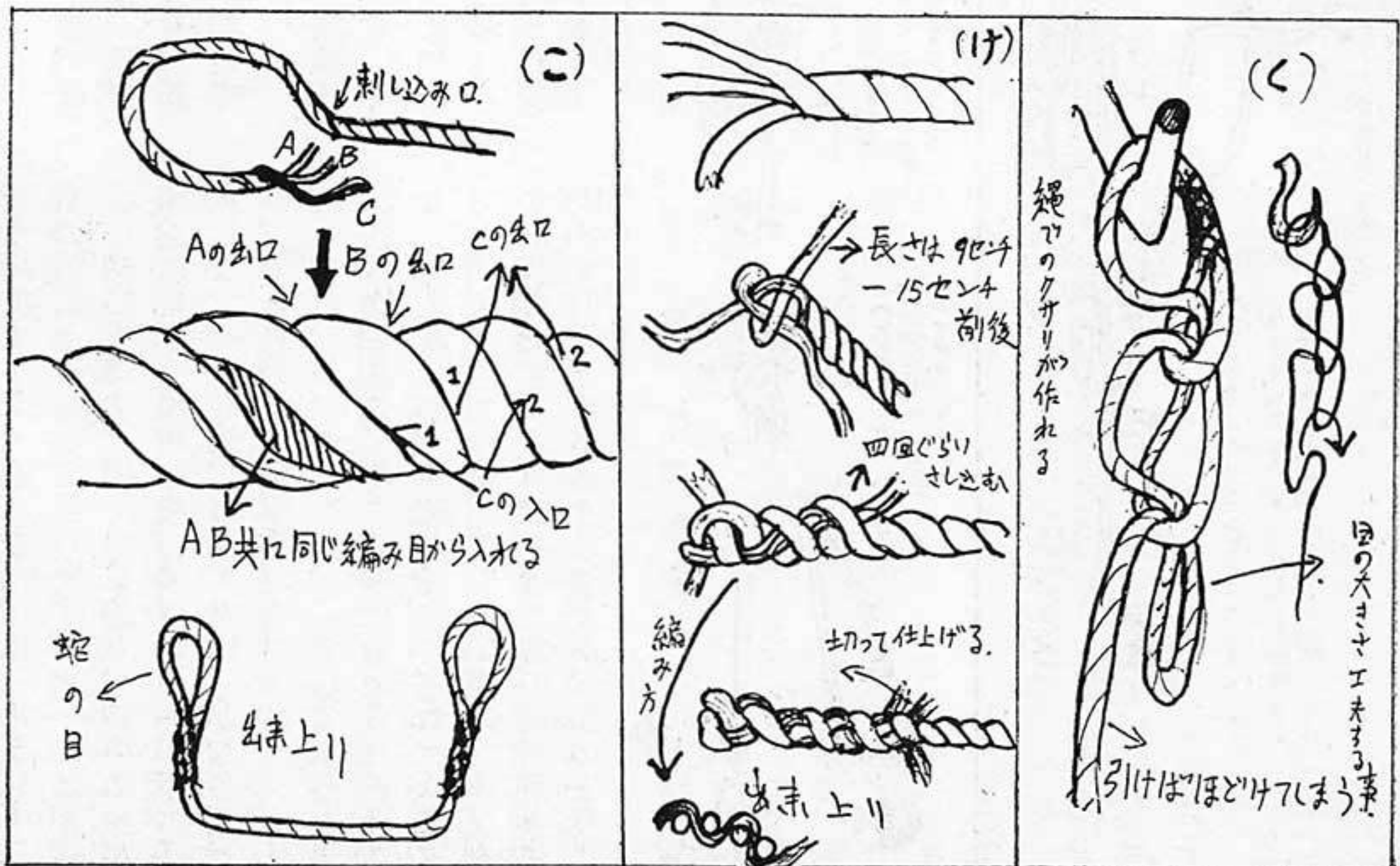
かと思えます。

結び目に似た身のまわりの品物で形を変えて手製できそうな物では、ベルトのバックルが有ります。同様の効能を持つ物では、安全ベルトの命綱、伸縮調整金具とでも云う物があります。これは電工も使用して居り、貴女も一度や二度、目にされている筈です。

いろんな種類の金具が有りますがバックル式の物がワンタッチで縄がゆるむので良いかと思えます。かなり高価のようですが、一本でも買えます。建材工具を取扱っている金物店に有ります。一本と云っても一式と云った方が良いでしょう。三千円前後だと思えますが、カタログなど

す。意外に複雑でもあり、また意外に簡単でもあります。

今まで書きました結び方法は、何の役に立ちそうも無い、つまらない物ばかりでしたが登山や手品の案内書などに、素晴らしい結び目の作り方が有るのではない



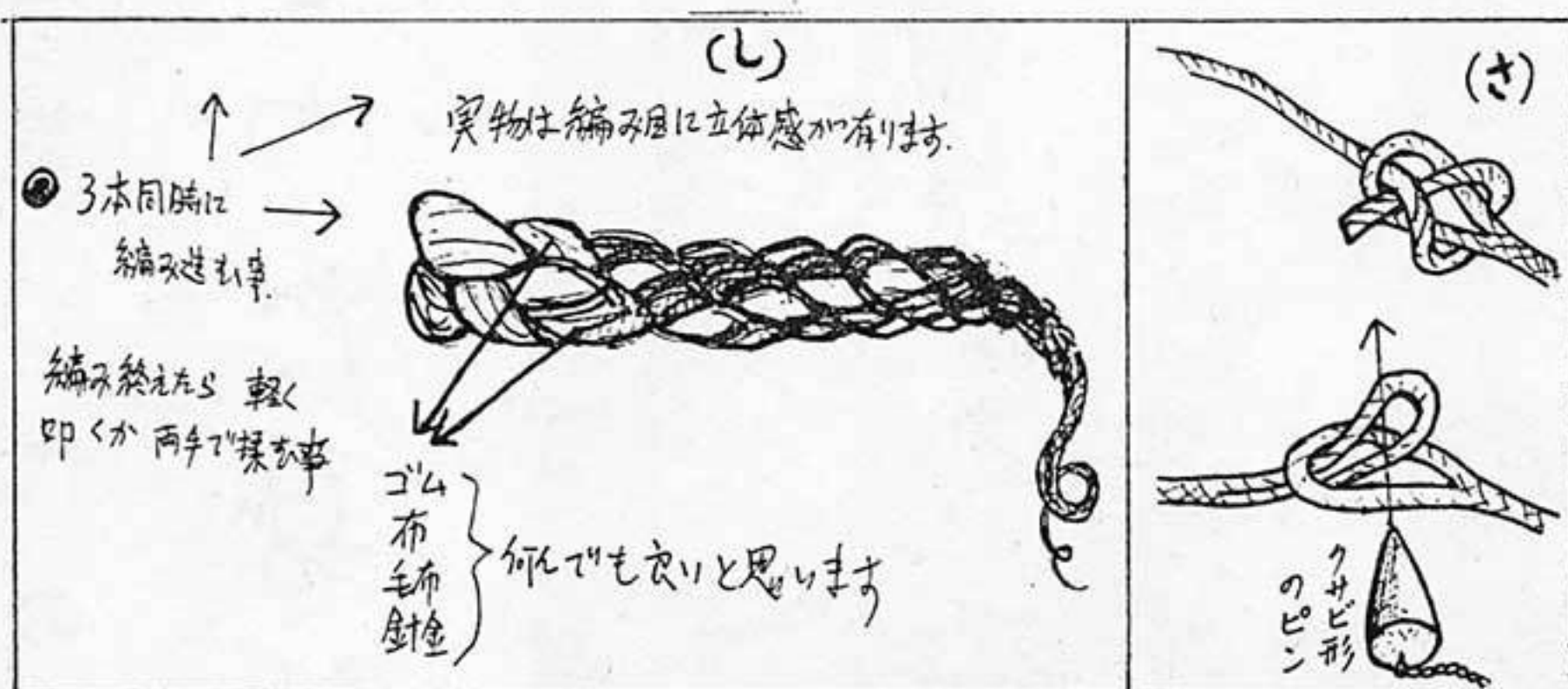
を見せて貰う方が良いでしょう。

もう一つ便利な物では金属製の中折れ式の時計バンドが有ります。一般に一番良く使用されている物ですが、縦からの力に強いが横からの力に弱い特性で、これに似た物は沢山有りますが、何かに利用させない手は有りません。

そのままの形に近い物ではスキの金具が有りますが、力の加わる角度を巧みに利用している、これらの物は、大いに見直すべきで、女性でも考え方ひとつで別の形の物を作れそうですが、いかがですか。

(く図)は、結びにも使用できますが、長く縮み続けられくサリ様になります。(け図こ図)は、縄の切断部分を整理する編み方です(こ図)は長いロープの一方にも良く短いロープの両端にも良く、輪の長短、大小は好みのままです。

(さ図)は輪を使った接続方法ですが、クサビを何かの力で抜く事を、考案すれば『吊り』などにも使用出来ると思



います。クサビを木や鉄以外の物体を考えて下さい。

例えば、氷なら、その太さがタイマーの役目をして何の工作も必要でなく、氷が無ければ、チリ紙も代用になるのでは？ チリ紙に

少し宛、落とす水滴がタイマーとなって、チリ紙をとかす役目をするのではないかと思います。

(こ図)を見て、もう気付いて居られる事と思いますが、(ABC)の三本の縄が、別の物だと考えて下さい。縄と同じ長さの布であったり、または他のゴムで有るとか、いろんな物を使って編み込んで行けば、本来の編み目とは異なり、手製の自由な好みの色彩や感触の縄が出来上ると思います。(し図)を参考にして下さい。

大の字形の縛りは、不可能に近いとの事ですが、不可能とは思えません。片手を縛っても縛られた手の手首や指にかなり運動性が有るとの事です、その手首や指で、魚釣り用のリールを回せば、縛

られていない方の手を引くことも出来るのでは……。

リールの歯止めは、小さな力や簡単な、他の何かの力では、はずす事が出来るのではないのでしょうか。他にもいろんな方法が有りそうですが、私がここに書くまでもない事です。

自縛で自動的にほどける方法を考案できたら、ほどけるまでの時間を、縛り以外のものでの責めも考えられます。『責め』の動力源は、扇風機の風を利用するもよし、子供の玩具の動きを利用するのも良いのではないのでしょうか。

責めの方法が完成し、実行のその時に、貴女の空想や夢の中へ、私を招待して戴きたいのですが、無理な私の高望みでしょうか。しかし、辻村さんや塚本さんを夢見る事は、御遠慮下さい。貴女の日頃憧れて居るスターで手の届きそうもない(失礼)ドロンカベルモンドで、我慢して下さい。理由は私の夢の為です。申し訳ありません。

これを貴女への手紙の積りで書きました。返事を戴きたいのですが、再度と云わず、何度も奇ク誌上に登場され、私への返信として下されば幸いです。期待して居ります。

さようなら

マダム笑 代の告白

脂^{あぶら}ぎった身体^{からだ}じゃ、お嫌^いや？

福井桃子



久しぶりですわね。こうして、貴方と直接お逢いして、私のお喋りをテープに、とって頂くのは――。

電話では、何度も何度も、お話をしましたけれど、やはりお逢いするのって楽しいわ。

いつか貴方が、「近頃の若い人は、電話だったら、三十分も一時間も話しているのに、手紙となると、さっぱり書かないんだね」と言ってるんだけど、私にも、耳が痛いわ。

あれから、一回もお便りしてないものね。全部、電話でしょ。あら、私も手紙、出したことがあって？ 忘れてしまっていたわ。きつと用件だけ書いた、電報みたいなもんじゃなかったかしら。

去年の今頃は、太鼓みたいなパンパンの大きなお腹で縛られたりしてたんだもの、なつかしいワ。予定日が近づいて、もういつ産まれてもいいっていう間際まで、マタニティドレスで、大きなお腹をかくして、街を歩いていたあの頃が、ほん昨日のような気がするんだけど、もう一年になるんだわね。

二月の末って言ったら、臨月で、一番お腹の大きい時だったわ。

それに、縄で縛られたり、犬の真似をさせられたり、もっともっと、ひどいSMプレイもやったわね。臨月妊婦の私の卑劣な振る舞いを撮る

のが目的なのか、プレイが目的なのか、わからなかったけど、妾にとっては結構、楽しかったわ、あの頃は――。

妾って、根っからのSM好きなのね。赤ちゃんが産まれる直前まで遊びまわるなんて、本当に、どうかしてるわね。

身体を中心に、熱した鉄棒が貫ぬくって感じ、男の方には、わからないでしょう？

赤ちゃんを産んで、しばらくしてから、そうそう、あれは五月頃だったかしら。久しぶりに逢いたって言って、カメラとテープを提げて訪ねて来て下さいましたわね。

「子供を生んだお前の身体が、どのように変化したか、調べてやる」って言って、ひどい責め方をなさいましたわね。

右足を柱に縛っておいて、左足を頭の上まで一直線に伸ばして、縛ってしまわれたでしょ。「そんなにしなくても、自分で上げる、上げる」って、言ってるのに、無理に括ってしまわれて、本当に無茶だったわ。

私は右足がキキ足なので、右足で支えておいて、反動をつけて、パッと左足を挙げるんだったら、今でも、それぐらい出来てよ。

ええ、左足の踵をおデコにつけるくらいはね。それを、無理矢理、左足を柱にくくりつ

けてしまわれて、診察だなんて言って、ヤニ下がってらしたけど、出産前の身体と同じだったんで、安心されたでしょ。

そりゃね、妊娠してたときは、お腹が大きくて苦しかったから、アクロバットのようなポーズは、とれなかったわよ。でも、生んでしまったら、前と同じことだわ。

私が、ちっとも痛いって言わないもんだから、大汗をかいて大分、頑張ってたけど、美美代って、シブトイ女なのね。自分でも、つくづく、そう思うわ。

あの頃は、毎月のように、お見えになった

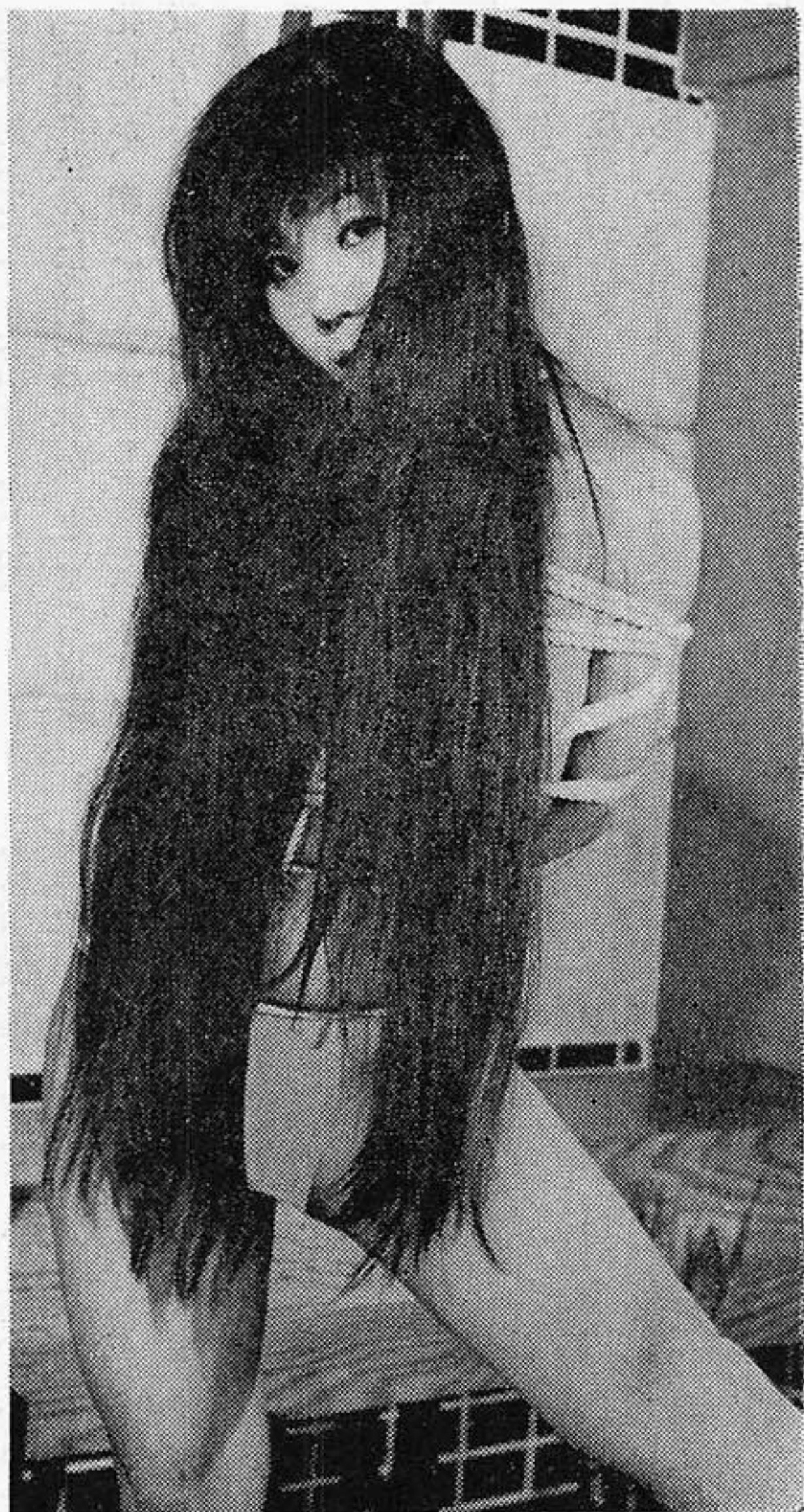
のに、この頃は、すっかりお見限りなのね。

ああ、そうそう。ここに、あの頃の雑誌があるんだけど。ほら、去年の4月号と5月号6月号、それに7月号と続けて四冊も出ているのよ。それが、最後の7月号を除いて、あの3冊全部が、私の妊娠に関係したお喋りってわけ。面白いですわね。

ごらんないよ。この4月号では、『妊娠したって、嘘じゃないでしょ』というのが、最初なのね。妾が、「妊娠してるのよ」って言っても本気にしなかったわね。

そりゃ、いつも、平常から地腹が大きかっ





たから信用しないのも無理ないわ。はじめは冗談かと思ったでしょ。

本当は、あの前に、暮れになる前にM男を責めようって、いろいろ、話してたでしょ。もし、妾が妊娠しなかったら、きっと、募集して貰ったM男を責めてたと思うわ。

それが、私の妊娠で急に予定が変わってしまって、妊娠のお腹ばかり責めるようになってしまったのね。4月号、5月号、6月号とだんだんと大きくなってゆくお腹。月の順にこうして、雑誌に残っているのを見たら、本

人の私でさえ、変な気持ちになるわ。少し、趣味じゃないこと？

5月号が、ホラ、見てごらんさい。九カ月の妊婦の私。『私の蛙腹を責めてみて』という題のお喋り。それに写真の方も、4月号のよりも、ずっと大きいわね。なんだか、大きなお腹を、つき出して威張ってるみたい。

私ね、後で、この5月号の雑誌を見て驚いたのよ。私の以前に、この木戸悦子さん、中河恵子さん、富田由美子さん、それに双胎の増田みゆきさんと、沢山の方が妊娠した写真

を撮っているのね。本当に綺麗だわ。

あら、他にもあるの。ええ、金原加奈子って言う方もそうなの。で、妾はどう？ お腹は格好よく大きくなってたでしょ。今は、こんなに、ペしゃんこになってるけど……。

6月号の『出産予定日十二日前』っていうこのページ、ごらんさいよ。お臍がすっかりむくれてしまって、やはり臨月のお腹の凄い大きさだわ。お乳も、こんなに大きくて。

ちょっと、妾っておかしいわね。自分の妊娠した臨月のお腹の写真を眺めて喜んでるんだもの。やっぱり妾って、変わってるわ。自分で感心したら、世話はないわね。

今から思ったら、あの頃がなつかしいわ。

それに、妾のお喋りと写真が、こんなにして残ってるんだもの、楽しいですわね。

最後の7月号が、妾の鼻責めの写真ばかりで、がっかりだったわ。あの時、他にも、いろんな写真を沢山撮られたのに、あれ、一体どうしたのかしら。

あれ以来、すっかり御無沙汰しちゃって、ごめんなさいね。新しく開いた、お店の方も結構、忙しいし、それに、とんと来て下さらないんだもの、つまらなかったわ。でも、雑誌の方は、ずっと見せて貰っていたのよ。

私の紹介してあげた、紀代って女の子、あの子、どう？ 私のにらんだとこじゃ、マゾがかつてると思うんだけど、飼育された手ごたえは、どうかしら？

奇譚クラブを最初に見せたとき、凄く興味を持って、「見せて、見せて」って、ひったくるようにして見てるのよ。もっとも、文章の方じゃなくて、専ら写真の方だったけど。

1月号の一番始めの笠井奈保子さんの写真ね、あれが気に入ったらいいのよ。

自分も、こんなに縛られて本に載ってみたいって、言い出してね。それだったら、妾が話してあげる——ってことになったのよ。

彼女は妾なんかと違って、我を張らないから、今だったら、どのようにでも好きなように飼育出来るのと違う？ 一度、妾のこの大きなお尻の下敷きにして、思いっきり責めてみたいと思うんだけど、駄目かしら？

フフフフ、二人で一緒に責めようってですか？ そうね、次の機会に面白いわね。

カメラとテープを持って、こちらへ来て下さったら、準備をして、待っていますわ。

さあ、おビール、ぐっと空けて下さいませね。妾も頂戴するわ。この頃、こんなに胴まわりが太くなって、それで、おビールも程々

に、してるんですの。でも、今日は久しぶりにお逢いしたんですもの、妾も羽目を少しぐらい、はずしても、いいでしょ。

お店の方って？ まだまだ、いいのよ。遠慮しなくたって。二月は、まあまあ暇な方なの。だから、もっと、ゆっくりしてって。

昨年5月から後のことを話せて、おっ

しゃるの。なにもないのよ。忙しいばかりで仕事に追いまくられていて、ろくすっぽ、楽しむ暇もありやしないのよ。そりゃネ、SMのことだったら、類が友を呼ぶってことかしら、結構、いつの間にか、好きな人たちが集まるようになったわ。

ええ、お店の方のお客さんには、不思議と



そんな方は、一人もないのよ。みんな、やっぱり、奇譚クラブの読者の人だわ。

中にはね、あんたが紹介してくれた、あの人、Aさんって言ったかしら、あの人なんか妾にいじめてくれとか、下着をくれとか、ネクターがほしいとか、なんだかんだと、冗談のように言うのよ。

そのうちに——って言うてるんだけど、紀代を責めて、下地を作っておいて、それからM男を責めてやろうかしら。

妾も、最初の頃は、縛られるのが楽しくって仕方なかったわ。縛られたあとでは、必ず、責めがあるでしょ。今日はどんな責め方をされるかしら——って、なんだか、いろんなことを期待して、いそいそと出かけたものだったんだけど、妾の喋ったこと、知ってて？「今日は、どんな気持よいこと、してくれるの？」って言ったりした妾の言葉、もう忘れてしまわれたでしょうね。

縛られてから責められるって言う、SMPレイは、妾のように経験の豊富な者にとって



も、胸がドキドキする感激だったわ。

「責めて、責めて、責めて——」って言うのが、何の合図なのか、自分でも、なんだか、顔の赤くなるような、初心^{うぶ}な気持になるの。

そりゃネ、来るたびに責め方が変わるんだもの、自分の身体が自分でなくなるように思えたり、また自分の身体のある部分が、どの

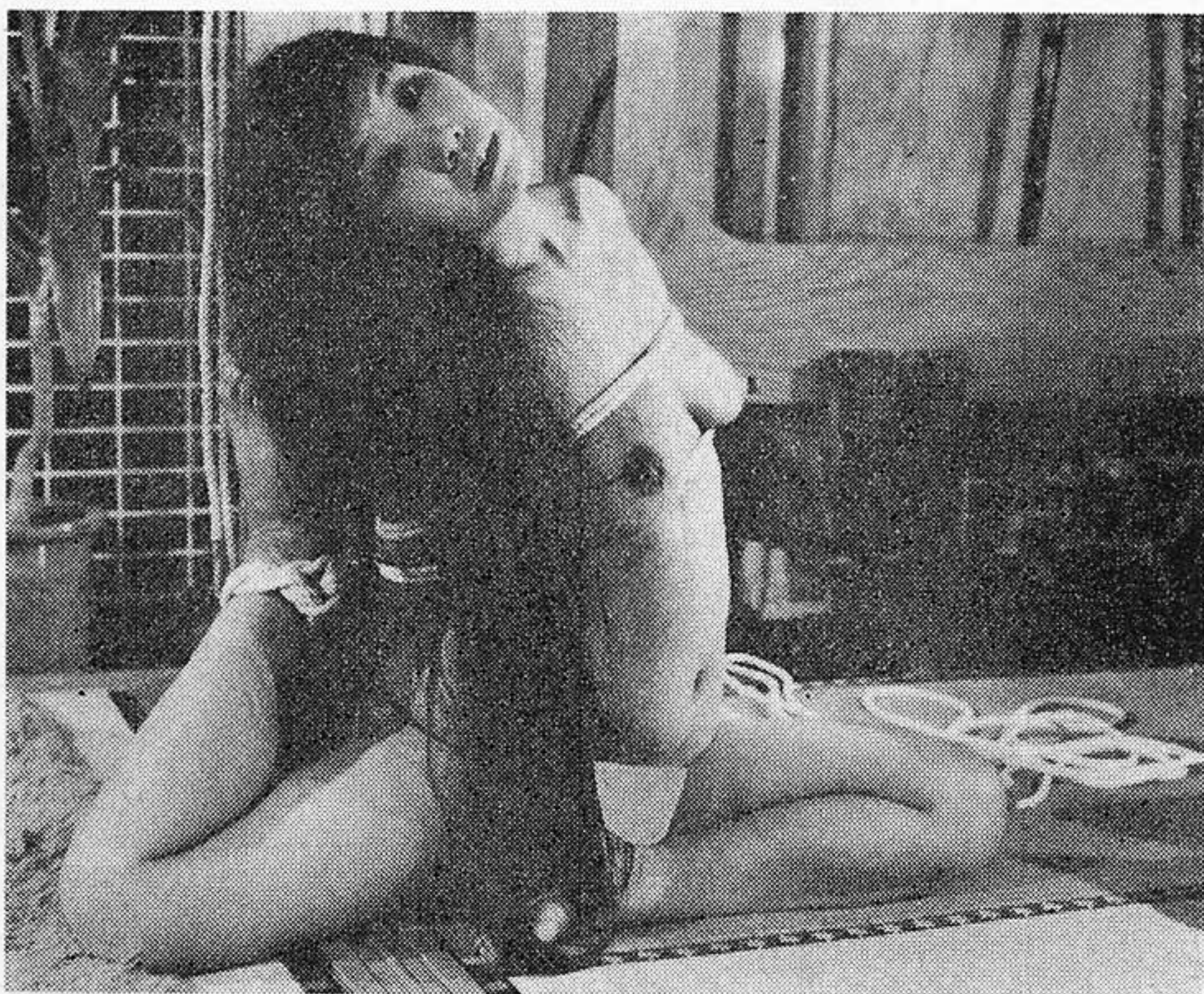
ように変わってゆくのか、と考えるたりしたら、まるで導火線に点火されたように、パチパチと燃えひろがってゆくよ。

こんな気持って男の方には絶対に、わからないでしょうね。妾なんか、お喋りだけど、ここんこは、うまく言い表わせないのよ。

そのうち、責められている時にほんね本音を吐くかも知れないわ。その時は、忘れずにテープに記録しておいて下さいね。妾って、案外、正直だから、なんでもかんでも、喋ってしまうのよ。なんですって？世迷言を吐かすために、腕に縫いをかけて責めるってですか。それでしたら本望ですわ。

さあ、もう一杯、グツと、お空けになって下さいナ。オツマミ持ってきますから——。

この間、出た4月号を紀代に見せてやったネ、凄く喜んでたわ。3月号は貰ったって言ってましたわ。これで二冊分に載ったからって、紀代は張り切ってたけど、次の5月号にも載りますの？ああ、そうです。きつ



と紀代も嬉しがるでしょうよ。

自分の写真が載るようになってから、他のモデルの人の写真が、気になるらしいのよ。

そりゃ、そうでしょうネ。まだまだ若いん

ですもの、競争心があるのが当然ですわね。

妾も紀代ぐらいの年頃の時には、朋輩に負

けまいと必死になって踊りの稽古をしたものですわ。足の拇指にタコが出来るくらい、一寸の暇でも、レッスン、レッスンで、鍛えたものだわ。もうこの頃は駄目だけど。

ええッ、なんですって？アノ方だけは元気だろうって、ですか。そりゃ、今、丁度、女盛りってところで、もの、脂ぎってますわ。こんな脂ぎった女って、お嫌いじゃないでしょ。

私ってネ、お風呂へ入るでしょ。そしたらね、お湯の表面にガラガラっと、脂が浮くのよ。顔なんか、こうして、一寸、手で触るでしょ。手がぬらぬらになってしまっ——。

お化粧してるからだって

妾って、これで案外、厚化粧はしないのよ。

余り太ってしまったら困るから、この頃は節食してるんだけど、結構、肉や油物が好きだから食べるのよ。それに、唐辛子とか、辛いもんが好きだから、スタミナが余ってしまっ、いくら凄く責められても、こたえないのよ。縄の方がはじめてしまっ、いつか言っただでしょ。

いいえ、おビールになんか酔って言ってるんじゃないんですよ。こんな脂ぎった女でもよかったら、トコトンまで責めてみませんか、言いたいんですよ。妾の身体中、どこでもここでも、むちむち、ぴちぴちしてんのよ。

ホラ、この太股のとなんか、こんなに張りきって、責めてほしい、責めてほしいって泣いているわよ。

どう？ 久しぶりに、思いっきり、ヒドイ責めをやってみないこと。

妾だったら、いいのよ。出産一年目で、今一番、調子がいい時なの。だから、疲れを知らないこの身体で、無茶苦茶にハッスルしてみたいわ。縄を使ってだったらアクロバットのポーズも、とれると思うわ。

ねえ、さあ、やってみなさいよ。

妾じゃ、うずうずしてるんですから。



懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

謎の女「景子」のこと

真 行 彰

まだ正月気分が抜け切らない街を、私と景子は、人の少ない歩道に白い息を吐きながらある批評家の全集を買うために何軒かの本屋を探し歩いていった。

景子は、その年の六月にアメリカへ留学することになっており、日本での残り少ない時間で、なるべく多くのことを吸収しようと意欲を燃やしていた。その批評家の全集は、私が景子にすすめたものであり、景子は私が貸したその一冊を読んで是非、全部、揃えたいと言いつ出したのだ。

松飾も、まだ、はずされておらず、鑑戸を下ろしている店が大部分だった。しかし、商店街の中心に進むにつれて、正月の商店街特

有の気だるさは、しだいになくなり、いつもの通りの、どこか嘘言めいた賑やかさが漂ってきていた。

三軒目の本屋で、その全集を見つけ、景子はピンと張った一万円札を手渡し、店員にそれを二つの包みにしてもらったと、その一つを私に持たせた。なんのことはない、私は運搬係に、かり出されたらしかった。

景子と知り合ったのは、その前の年の夏休み、ある語学学校の同じ速修クラスである。

彼女をとりまく、その賑やかな仲間の中でも景子は、ひととき華やかにしゃべり、さっそうとした身のこなし方で動き回っていた。流

行の最先端に行く服を毎日のように替えてくるところから、良家のお嬢さんであることはすぐに知れた。

その明朗さと、歯切れのよい活発さは、すぐクラスの注目を集め、わけへだてのない態度で誰とでも、すぐに親しくなり、誰からも好かれた。そんな景子と、物静かで消極的な私が親しくなったのは、ある日の雷を伴った夕立のとき、駅から語学学校の途中で半分ぬれねずみの、彼女を発見したことからだっ

た。私の傘の下に彼女を入れて、語学学校まで一緒に歩いた。道々の語らいで景子が、女子大の学生であること、この六月に、アメリカ

へ留学すること、帰りの方向が私の家のそれと同じであることなどを知った。

それ以来、私と彼女は一緒に帰ることが多くなった。彼女の仲間とは、うちとけなかったが、二人は、しだいに緊密の度合を増し、夏休みが終わっても、月に幾度かずつ、顔を合わせるようになっていた。

景子には男友達が多かった。景子の口から彼らの何人かと彼女が、すでに肉体関係を持ったということを聞いた。だが景子の言葉の中に、私の知らない男の名前が出てくるのをしだいに私は不愉快な気持ちで、聞くようになっていた。

自分は、景子の数多い男友達の中の、単なる一人に、すぎないのだろうか？ 私は、しばしば、こう思い、その考えが私の心に、とげを刺した。私たちの関係は、あいまいで、景子は何も知らない蝶のように太陽の光の祝福を受け、私の目の前を自在に舞っていた。

景子は若さに輝いていた。にぎやかな、おしゃべりと、人を魅きこまずにはいられない機智に富んだ話を、誰もが舌を巻く顔の回転の早さで、まくし立てた。私は景子の眩しさに、しだいに苛立つようになった。

何ら決定的に景子の心を読みとれないまま

の月日が流れ、私は彼女にとって特別な存在ではないことが感じられ始めた。自らを傷つけまいとする用心深さが、引込み思案の私を、これ以上、彼女に、のめり込ませないようにした。私は自分を抑え、単に彼女の「友人」であるということを自らに課し、それを演じとおしていた。

景子は豊富な知識と、一風変わった経験と疲れを知らぬ好奇心をもち、話し相手としては申し分のない存在だった。いつしか私たちは、互いに何でも、こだわりなく話し合えるような間柄になっていた。しかし、それは景子流の、つき合い方であり、要するに私は、景子のボーイフレンドの列の最後尾についてすぎなかった。

その日、景子は、これから行かなければならないところがあると言って、全集の半分の包みを私に預かって欲しいと頼んだ。

私は彼女と別れ、それを自分の部屋に運び入れた。見ると、いく冊もの本が包装紙で包まれ、セロテープで止められていたのだがひどく荷ぐずれしてしまっており、改めて包み直さなければならなかった。私は不器用な手を動かして、丈夫な紙で包み、持ち易いよう

に紐をかけた。

翌々日、景子に会って、その包み直した預り物を渡した。

その夜、景子から電話があった。いつもなら半時間程、よもやま話をして切れるのだったが、その夜の彼女は、包み直して手渡した全集の礼を言ったあと、私の苦勞が水の泡だったことを笑いながら伝えた。せっかく、ゆわいた紐も、彼女の家で、たどり着く頃にはゆるゆるになって、結局、包みをまるごと抱えるはめになったという。景子は、まだ笑いを残しながら続けた。

——でも、あなた、縛るの、お上手ね。

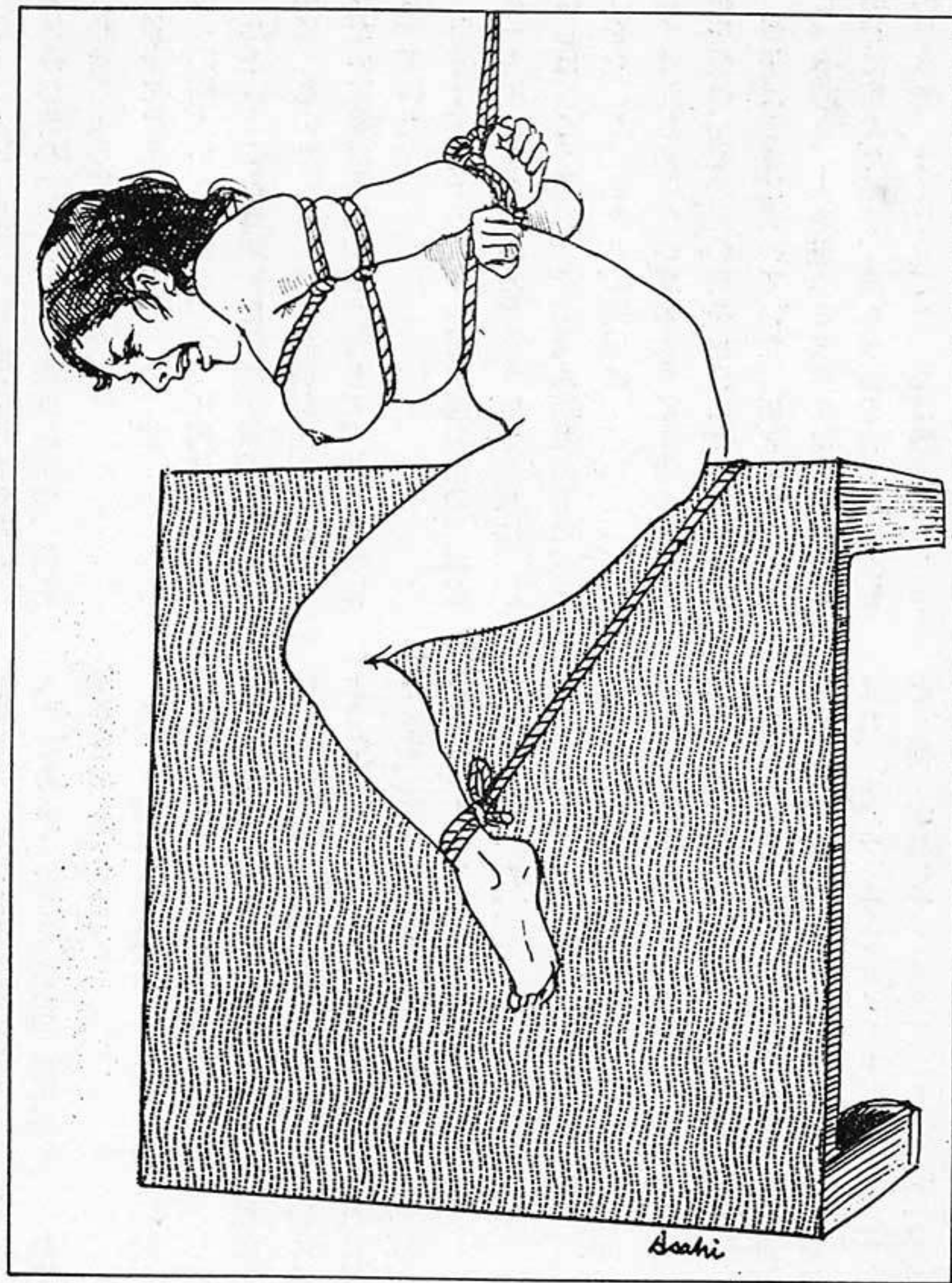
私は一瞬、息をのんだ。幸い電話だから、私の驚きの表情を見られる気づかいには、なかったが、体の奥で、じーんと何かが熱くなってくるのだった。私は体勢をたてなおし、幾分、無頓着を装って言った。

——何？ よく聞こえなかったんだけど。

——あなた、縛るの、お上手ね。……引越するときはあったら、手伝いに来てもらおうかしら。

そもそも、恵子がまるごと抱えることになったのは、私の包み方が拙くて、紐がほどけてしまったのだから、私が縛るのがうまいと

……イメージギャラリー『物は使いよう』……須坂 旭……



いうことは、どこをどう押しても出てくるはずがなかった。それを、わざわざ皮肉でもなく、無理押しに、私を縛るのが上手な人間にってしまったのは、どういうことだろう。も

しや景子がSMに関して何らかの知識、嗜好を持っているのではないか。縛るのが上手だと賞めるのは、その上手な腕前を見せてくれということなのか。

しかし、逆にこのSMの世界のことを、何も知らずに育ってきた、お嬢さんタイプの女性に、よくありがちなことが、「縛る」という、私たちSMに通ずる者には、一種の呪文めいた響きを持つ言葉を、実に無難作に使うのである。それも殆ど常に、お嬢さんにふさわしい「ゆわく」という穏やかな語ではなく「縛る」という生々しい語を、いとも気楽に口に出すのだ。

景子も、おそらくは、SMプレイの世界については何も知らないのだろう。しかし、景子が隠れたマゾヒストではないという証拠もないのだ。品性卑しくない女性が縛られた場面や姿を、映画・小説等で見たり読んだりして、自分でも無自覚のうちに、悲劇の女主人公になったような淡い陶醉感を体験している人間であるかもしれないではないか。

サディズム、マゾヒズムという言葉の意味を知っていても、又、そのような場面に反射的な快感を覚える人間でも、必ずしも、SMプレイと呼ばれる楽しみ方を知っているとは限らない。その多くは緊縛、責めを犯罪や残酷な事件と結びつけて罪悪感を覚え、自らの性向を他の分野によって試し、その欲求を享樂するすべを知らずに過ごしている。景子も

そのような人間の一人なのではないか、と私は考えた。

そこで私がやってみたのは、景子に、もう一度、同じ文句を言わせることだった。その反応の、しかたによって、景子のSM度を計ろうというのである。

景子の答は、ごく無難作だった。だが、彼女は他人の視線の中で自分を作ることには精通しており、人一倍、演技力に富んだ、女である。私の、かけた小さな罠を素早く察知して軽く跳び超えていったのかもしれない。あるいは、SMに関して日陰者意識を全く抱いていないために、彼女は、あけすけに答えたのかもしれない。

私は、一つの迷路に落ち込んでいた。そして、景子がM性を持っているという可能性に対して、深い注意の目を、いま、向けるようになったのだ。

灰色の街が、しだいに華やかな色を取り戻し、人々は、その装いの重みから解放され始め、やがて桜の花が、人々の目に華やかに映る頃になった。景子と私の、つき合いは、相変わらず不定期に続けられ、特に親密の度を加えた様子もなかった。

その夜、私は珍しく景子と電話で長話をしていた。この三月に行ってきた京都の話から旅一般の話となり、キャンプの思い出に移っていった。そして私は、彼女の奇妙な体験を聞くことになった。

景子は、高校時代に友人からの紹介で、ある体操クラブの小学生の夏休みキャンプでの世話係（リーダーと呼ばれるのだそう）をアルバイトで、したという。

キャンプ地は湘南のある海辺で、恵まれた自然の中で一週間のテント生活をするのだった。景子が行ったのは、小学校上級生のキャンプで、五十人ほどの小学生の男女に、高校生・大学生のリーダーが十二、三人、ついてきていた。ここで水泳やキャンプ生活のイロハを教え、楽しく一週間の共同生活を送るのだった。景子は、人から好かれやすい性質の故か、すぐに、一つ年上の「ブラッキー」と呼ばれる色黒の男子リーダーと仲良くなった。周囲の小学生の敏感な心は、これを、たちまちに見ぬき、うわさの輪は、すぐ広がった。もちろんそれは、悪気のない、ひやかしであり、仲の良い二人は、逆に小学生からのからかいの対象であった。

ある日、男の子五人が、なにかの理由でブラッキーに、こっぴどく叱られた。その夜、五人は、その仕返しのためブラッキーと仲の良い景子を標的に選んだ。ブラッキーには、かなわぬが、小柄で女の景子ならば、五人で何とかなると考えたのだろう。

皆が寝静まった頃、五人は景子をテントから呼びだし、近くの林の、暗がりへ連れだした。そして彼女の油断をみすまして、五人がかりで彼女を取り押え、パジャマ姿の景子を後手に縛った。そして更に景子を裸にしようとしたのだった。

意外な話の進展に、受話器を持つ私の右手は、じつとりと汗ばみ、自分の心臓の鼓動がこめかみに感じられた。喉は、からからに乾いて、景子の話に相づちを打つことも、かなわなくなった。そんな私のショックには気付かぬ様子で、受話器から流れてくる、彼女の話は続けられた。

景子の抵抗もむなしく、着ているものを、しだいに、はがされ、ついに残るは一枚の白い布切れだけとなった。景子は、これまでも脱がされてしまっただけ、たまらないので、ますます、狼狽しそうな自分の心を戒め、しっかり

した声で、何故、自分が、こんな目に合わなければならぬのかを尋ねた。そして、もしその理由が正当であれば、最後の一枚は自分から脱ぐと主張した。

五人の男の子は、予想外のこのリーダーのきっぱりとした態度に気押され、弱気になったのだろう。その条件を、のんだ。景子は五人が、昼間ブラッキーに叱られたことを聞いた。景子は、自分は自分であり、ブラッキーと自分が仲が良いにせよ、そのことには無関係なのだから、もし五人が、自分たちが正当であり、ブラッキーが、まちがっていたと考えるのなら、まずブラッキー自身に抗議すべきであり、それが受け入れられなかったとき、仕返すするのは、判断のかぎりではないが、それはブラッキー自身に、おこなわれるべきだ、と懸命に言い張った。景子の必死の努力のかいあって、五人は、彼女の縄を解いた。

——縄を、ほどももらったときはホッとしたわ。ホントに、あのときは、どうなるかと思っていたんだから。必死になって色々と理屈をつけて言いくるめたの。でも、やはり子供って可愛いいわね。翌朝五人揃って「リーダー、ご免なさい」っ

て謝りに来たの。私が、「気にしない、気にしない」って言ってやったら、とても喜んで、それ以来、その五人とは、とても仲良しになったわ。

私は、景子が月あかりの林の中で、白い三角形を残して裸にされ、縄で両手を縛られた姿を想像した。

小柄ではあるが、女らしい、ふくよかな肉づきを保った景子の姿態。細い首筋を下りて柔らかな曲線が両肩を撫で、鎖骨の凹地からきめ細かに透き通り、薄い赤をさした地平がしだいに盛り上がり、濃いピンクに色づく二つの乳首に、つながる。

可愛い、へそをめがけて引き絞られる、くびれた胴の下に豊かな海を、たたえ、一本の深い溝を隠した、触れれば融けてしまうような柔らかい布は、二本のしなやかな足を謎めかして接合している。腕は不自然に、ねじ曲がり、しだいに細くなって行く先に、交叉された二つの手首を、しっかりと結び合わせた縄。それは観賞用に、きちんとした縛り方をされてはおらず、まさに自由を奪う目的のためにあるものであり、荒々しく、ぶざまな結び目を浮き上がらせている。

私の想像は次から次へと、湧き上がってくる。いつしか、私は五人の小学生の一人となり、肌をさらして縛られている景子の横に立ち、荒々しい呼吸をさせながら、景子の体を目で、なめまわしている。私は一步、景子に近づき、そして……。

五月に入り、親密の度合いを深めていた私たち二人は、生暖かな湯ざしの午後、私の部屋のベッドに並んで腰かけていた。

私の部屋には、勉強机の前に金属製の椅子一つしかなく、私を訪ねてくる友人は皆、いやおうなく私のベッドに腰をおろすことになる。たった今まで、二人でしていた難しい議論にあきて、私と景子は、気だるい沈黙のにおいを、ほこりっぽい部屋の中に、嗅いでいた。薄曇りの空は湿った空気を含んで、いく分、陰鬱なこの都会に重く、のしかかっていた。

——体が重いや。

何年も見慣れた自分の部屋の壁に、焦点の定まらない視線を無意識に泳がせていた私はぽつんと白い画布の上に垂れた一滴の絵具のように、つぶやき、そして、だるそうに首をまわした。

——肩が凝っているのじゃない。私が、もんであげましょうか。これでも結構、うまいんだから。

くだけた表情を彼女はみせて、今までの気だるい沈黙から救われた満足さに心を弾ませているかのように、返事も待たずに素早く私の背後にまわり、実際、少し凝っている肩に手をかけた。

殆ど今まで、あんまをやってもらったことのない私からは、景子の自讃する、あんまぶりが、果たして、うまいのか、へたなのか、見当が、つかなかったが、私の感じたのは、筋肉の快い解放感ではなく、ピンポン玉のような、くすぐったさだけだった。

しばらくは景子の、なすがままにされていた私は、ついに耐えきれなくなった。体を少し前に屈めて、肩を彼女の手から、はずし、突然、動いたので、手の動きを止めている彼女に振り向いて、

——こんどは、僕がやってあげる。

——いいわよ。もっと、やってあげるから、後ろを向いて、いなさいよ。

——でも、少し、くすぐったいんだがなあ。景子は、白い歯を見せ、なおも私の肩をももうとする。両手を私の肩に置いて私に、ま

っすぐ正面を見ているようにと言う。そのとき、私の視線が、ずるがしく景子の身体の上を走った。私は身を翻し、すばやく景子の後ろにまわって、彼女の肩をつかむ。今度は私が景子の肩を、ももうとしたのである。勿論、若い女の体の感触を楽しみたいという魂胆もあった。

——あーっ。

甲高い声とともに、景子は、くすぐったそうに大きく身体を、よじった。その嬌声に誘われたかのように私は、なおも景子の身体に手をかけ、むきになって、くすぐり始めた。

いつしか二人はベッドの上で、二匹の、じやれあう子猫となり、互いに相手の身体に手を伸ばし、背中を、えびにして、くすぐり合いをしていた。

景子は私が、ちょっとでも触れると、大げさに声をたてて、くすぐったがった。私たちは、ごく単純な、この遊びに夢中になっていった。しだいに二人は熱をおびてきて、大胆になっていった。

私は景子の右手と左手を後ろへもっていき左手で両手首を彼女の背後に押えて、自由を奪い、残る右手で彼女を、くすぐった。景子は両手を後手にされながら、懸命に私の攻撃

から逃がれようとした。しかし圧倒的な優勢が私の方にまわってきており、今や私の空いている右手は、荒い息使いをしている柔らかな肉体の、どこにでも触れることができた。

景子は私の胸に横顔を押しつけ、不自由な両手を、なんとか抜こうとして、うごめいていた。だが、この試みにもかかわらず、私の右手は、おなかや横腹へ軽い、つつきを加えたり、なでるように滑ったりしていた。それに対して景子は敏感に反応し、私の体の下で笑い声とともに、勢いよく弾けた。

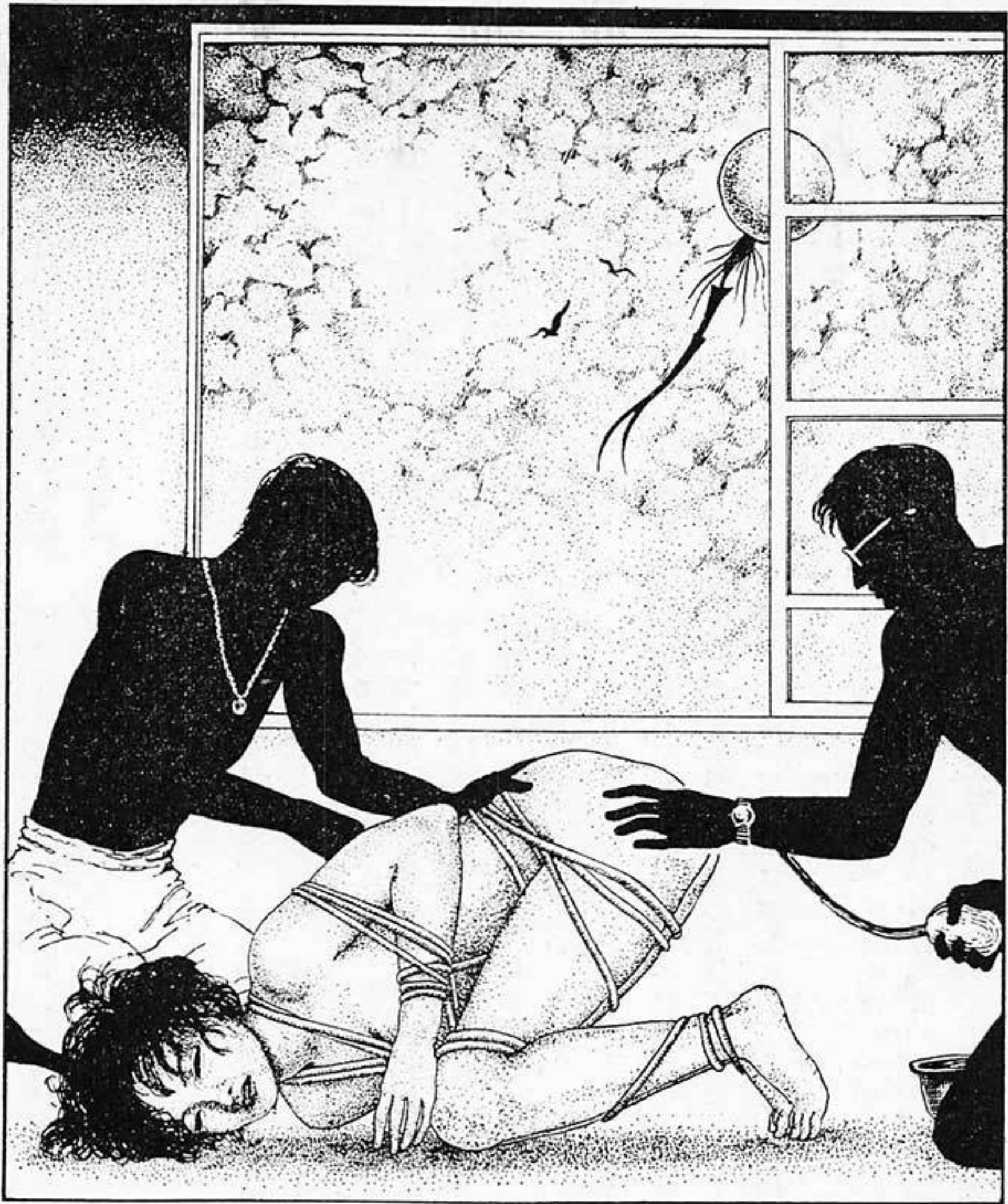
——ずるーい。ずるーいわ。

笑いで苦しそうな声から、こんな言葉が、いたずらっぽく発せられた。私は、ますます大胆になり、遊びを離れ、私の若い血が、しだいに躍り狂いだしたのを感じた。間歇的であった接触の所要時間は、だんだん延び、景子の胸の二つの花実に触れて、更に乱れたスカートの内側に指を滑らせようとした。

——やめて。

景子の声は媚びて甘ったれたような調子でも、きっぱりとした拒絶の調子でもなく、学校の教科書を、いやいや読むような具合だった。私は、しばらく手を止め、それから景子の両手を後手にして、つかんでいる左手の力

……僕のイメージ画集『渡部好美喜悦の図』 室井亜砂路……



をゆるめ、解放した。

——ずるいわよ。手を後ろに結んじやうなんて。

景子は、私が思っていたのと方向違いの非

難を加えている。彼女にとっては、私の手がスカートの下に伸びたことよりも、彼女の両手が後手に組み合わされたことの方が、大きな関心事だったのか。

景子は、大きく息をついていたが、それは一時の休戦から、再び戦闘状態に入るべく、ねらいすましていたのだ。彼女は私の背後にすばやく、まわり、私を再び、くすぐり始めた。私は一瞬、あっけにとられたが、さっきのが景子の作戦だと気づき、猛然と反撃に出た。男の私の方が、どうしても力に勝り、結局、先程と同じような体勢となった。ただ、景子の背後にまわされた両手は、先程より深く、ねじり上げられ、手首と手首は、よりがっちりと組まされていた。

これは、まさに高手小手の姿勢である。もし、縄があれば、緊縛された女体が私の前に完成する、はずである。私はゲームを装い、右手で彼女を、くすぐり続けながらも、心はそのことに向かっていた。

景子を縛る。そう考えると、くすぐり合いの結果の心臓の早打ちに、怪し気な変調の加わるのが感じられた。景子は私の内心の動きを知ってか知らずか、今や機械的に彼女の体の上を這っている右手の動きに応じて、下腹をけいれんさせ、笑いながら、くすぐったがっている。

ふと、机の上の片すみに置かれている電気の接続用コードが私の目に入った。長さは二

メートル強。少し堅いが、これで縛れないことはない。

身体を少し曲げて、手をいっぱい伸ばせば、届く距離にある。私が決心をすれば、景子を縛ることもできる。そして、それは、あくまで、ふざけてやったこととして何ら不自然さを伴わない。今なら冗談としてまぎらわすことができる。

景子を縛ろう。彼女が本当のM女性かどうか、その瞬間、わかるであろう。私の心は浮き立ち、景子の両手首を、はさむ左手に力が入った。

そのとき、私の胸の下に隠れていた景子の顔が、笑いを消して、むっくりと起き上がり私の顔の間近に据えられた。振り乱れた髪が景子の顔面に振りかかり、その奥に、きらりと光るものを見た。

私は、その小さな光に吸い込まれるように思った。縛るはずであった景子の腕を離し、彼女の身体を抱き寄せ、唇と唇を合わせた。それから二人は、くずれるようにベッドに重なり落ちた。

景子は私のベッドで魚になった。白いシーツの海原を彼女は活々と泳いだ。

私は彼女のうろこを一枚一枚、はがし、彼

女の秘密の貝殻を開いた。

勢いよく反り返って、魚は海底深く、その身を沈めた。

景子は帰りぎわに、じっと私を見詰めて、こう言った。

——また、いつか、さっきみたいな遊び、しましようよ。とっても面白かった。

これは、どういうことだろう。景子には、私とのセックスよりも、後手に自由を奪われくすぐられていたほうが快かったのか。彼女は自ら、それとは知らずにM性を持っているのだろうか。

この次には景子に縄をかけ、縛ってもよいのだろうか。彼女の謎かけは、私を出口のない迷路に追いやった。

景子の帰ったあと、私は電気のコードを手にとってみた。そしてベッドに腰をおろし、彼女の体臭が、かすかに残っている部屋の空気を深く吸った。

この次には、私はこんな電気のコードではなく、柔らかな縄をベッドの近くに、しのばせておくだろう。そして、例の面白い遊びをくり返せば、いいのだ。景子の両手を後手にし、しのばせた縄をとって……

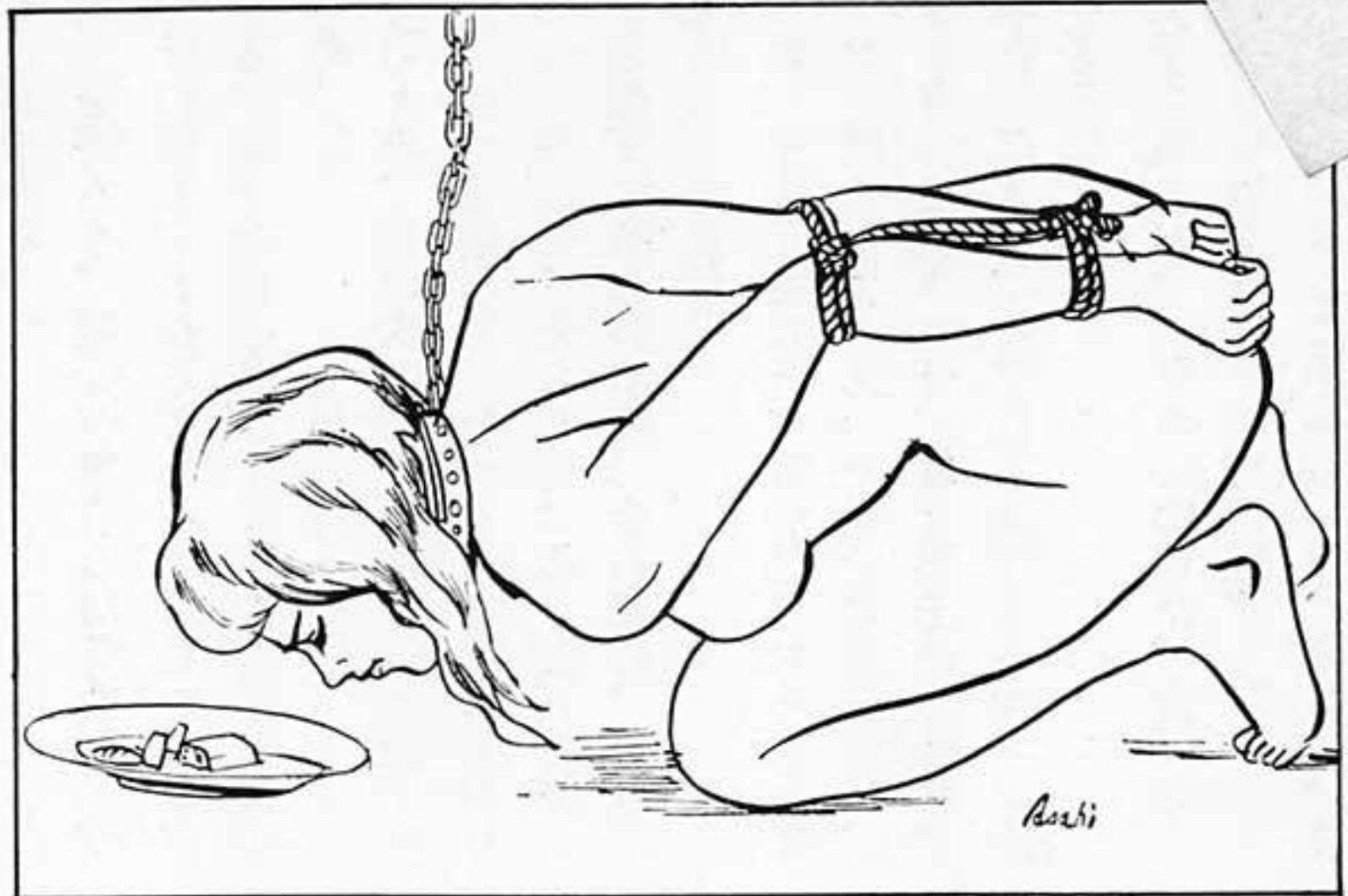
私の夢は、とめどもない。しばらくしてがらんとした部屋も大分、薄暗くなってきた。私はベッドから立ちあがり、手に持っていたコードを意味もなく左右に引っ張ってみた。ブルンという音をたてて、コードは私の胸のところで、かすかに震えていた。

その後、私の母の急死、景子の出発前の、あわただしさに紛れて、彼女と二人きりで会うことは、できなかった。したがって私の夢は実現されるに至らなかった。

六月の末の晴れた朝、景子はアメリカに発った。おそらく彼女は、大勢の友人に囲まれて新しい未来へ向けて出発したはずだ。

私の部屋には今、電気のコードに代って、一本の縄が真新しいままに放置されている。おそらく、まだ当分、この縄は未使用のままに、ちがいない。たとえ、景子が二年後に帰国しても、彼女に新たにつけ加えられた晴がましさに、私は近づくこともできないであろう。

景子の謎めいた言葉は、きっと分らずじまいに終わるに違いない。



(一)

「おはようございます」

洗いざらしのGパンに、清潔な白のポロシャツを身につけた圭介は、約束どおり九時きっかりに「亜紀」の店に着いた。

大きなウインドの中に、流行のミニドレス

懸賞創作応募作品

青い血潮

黒田南海男

やパンタロンで派手に飾りつけられたマネキン人形たちが、大きなゼスチュアでツンと胸を張り、半開きの唇を上向きに、つき出して立っている。

圭介は小さい頃からマネキンが嫌いであった。どれもこれもバカみたいに口をあけ、生意気な顔つきだ。もっと可愛い顔にできないものだろうか。と考えていた。だが「亜紀」に置かれている、それらのものは、その一つに個性的な表情があり、ポーズも生き生きとしていて、なかなか可愛い。圭介は、ちよっと嬉しくなった。

「あ、圭介君、来てくれたのね。ご苦労さま

折角のお休みなのに、ごめんなさいね。でも助かるわ」

洋装店「亜紀」の女主人、坂上亜紀は、栗色に染めた豊かな髪をアップに結び上げ、アイボリーのスラックスに、あざやかなオレンジ色のサマーセーターという軽装で、すでに仕事にとりかかっている様子の大工らしい男のそばを離れ、美しい顔に、あでやかな微笑を浮かべて圭介を迎えた。

ずっと後になって聞いたことだが、亜紀は短大を出て单身パリに渡ったそうだが、以後の経歴についてはナゾの部分を残している。

二年前、帰国と同時に今の店を開き、本場仕込みのパリセンスを売りものに、たちまち、高級店の評判を獲得した。かなりの大物をパトロンにしているらしい、と店員の間でも、ささやかれてはいるが、誰も確かなことは知らないという。

フランス語を思わす、やわらかさを持った彼女の口調には、ねばりつくような艶があった。しかし完全に相手をおさえつけてしまうような尊大さをも含んでいた。

「ねえ、私のお店の模様替えを手伝ってくれない？ バイト料はハズムわよ」

大学生の圭介は、アルバイト先で出会ったばかりの亜紀の誘いを受けた時、その美しさに半ば見とれながら、頷いていた。

「亜紀」には、若い女の子が二人いた。赤茶けた細い髪をショート・カットにした、かなりグラマーな女と、長い髪を真っ直ぐに背中に垂らした腰の細い女である。

裸のマネキン人形を運んだり、店内の飾り物を取り替えたり、忙しく動いている女の子を、圭介の目が素早く追った。髪の高い女の子の、細いスラックスに包まれた身体や、クリクリとよく動く瞳が可愛い。太った女は嫌

いだ。……というより、彼の場合は、嫌悪の度合いが強く、むしろ憎しみに近かった。

「ほな、学生さん。さっそく頼むよ」

圭介は、あわててその声の主に近寄っていた。栄さんと呼ばれるその大工は、簡単に仕事を説明してくれた。

圭介は、栄さんの助手をつとめながら、時折、女の子たちの方を見るのだが、どうもショートカットの女の方にばかり目が引きつけられる。

白い、はち切れそうな足が、極端に短いスカートからヒザ上20センチほど露出され、少し前に、かがんだだけで、もう純白のパンティが、のぞくのである。ふっくらと肉のついた太ももから腰にかけての線は、まさに牝牛を思わせる。ブラウスに包まれた胸のあたりに、時々、白いブラジャーのヒモがのぞける。

（あの豊かな肉にギッシリと縄をくいこませて、ぶ厚い皮ベルトで思い切り、ぶちのめしてやったら、どうだろう）

そう考えて眺めると、白い肌に浮かぶ真っ赤なムチのあとが、目にみえるようだ。

（あの娘の縛られた姿は、わりかし、いけそうだ。あの女主人ほどではないだろうが、又

別の美しさだろう）

昼食の時も、寿司とお茶を持ってきてくれた髪の高い女の子を、圭介は、我知らず熱いまなざしで見詰めてしまっていた。

（そうだ。この主人と、あの子を縛りあげたら、食事も水も与えずに、暗い部屋に一日中放り込んでおこう。そして時折、カメラのフラッシュをたくのだ。闇にきらめく、二つの個性ある美しい縛られた裸像は、目にまばゆく灼きつけられるだろう。犬の皿に盛った残飯を与える。赤い髪を振り乱し、二人は、汗と涙でグシャグシャの顔を、うらめしそうにこちらに向け、やがてどうしようもなく、ブタみたいに残飯の中に顔を、つつこむだろう。跪いて俯伏せになった背の中央に、縛り上げられた両手が痛々しく交叉して、そこから腰にかけて、それぞれの盛り上がった肉の線が、ムチをさそっているかのように、艶かしく蠢くに違いない）

圭介は、独り秘密の空想にふけていた。

栄さんの手際のよい仕事ぶりに、夕方までには、すっかり店は装いを一新して、後片づけをすませた女の子たちは、亜紀にいわれて銭湯へ出かけて行った。

「さあ、できあがりよ。どう、圭介君。かなり、いいセンスでしょう。一寸、二階へ上がらない。お茶でも入れるわ。……あ、シャッター、降ろしてきてね。こっちょ」

いいながら、亜紀は奥の階段を上がっていった。圭介は、いわれるままに後を追った。

二階は表通りに面して女の子の部屋がありその奥に亜紀の私室があった。郊外にマンションをもっている彼女だが、私室のほうも、女一人の部屋としては十分すぎる、ぜいたくな家具が入れられている。生まれて初めて入る女の部屋に気おくれしながら、招じられるままに、ぎこちなくソファに浅く腰かけて、亜紀の、派手なゼスチュアで吸いつけたケントの紫の煙が、ゆらゆらと天井近くに、ただよっているのを、手持ち無沙汰に見上げていた圭介は、

「汗、かいたでしょ。ごくろうさま。シャワーを浴びるといいわ。狭いけどバスもあるのよ。さあ、入ってちょうだい」

という亜紀の声に、内心はホッとするような気持だった。部屋全体の妖しい色気に気押されていたばかりではなく、実際、身体中、汗で気持が悪かったのだ。

シャワーのコックを軽くひねり、適当に調

節した温湯が、疲れた筋肉に心地よく、はじける。思わず鼻唄が、とび出す。

と突然、背後のドアが開き、反射的に振り返った圭介は一瞬、身体中が電気にあったようにジーンと、しびれてしまった。

(二)

「身体、流してあげるわ。坐って」

亜紀の柔らかな両手を肩に感じると、圭介は、催眠術にでもかかったように、拒否できない自らを知った。

タオルは使わない。石けんを、そのまま彼の背に塗りつけ、ゆっくりと両の掌を、はわせた。ヌルヌルと、まといつくように亜紀の掌は動く。くすぐったさに、時々ビクッビクッとして、うごめく圭介の筋肉を、その手ざわりを楽しむかのように、亜紀の指先が、すべってゆく。肩口から腰のあたりまで脊骨を、なぞるように降りていった掌が、やがて脇腹から、首筋から、前に回る機会を、うかがっている。

初めは、肩から胸へかけて時々伸びていたのが、次第に腹の方へと、柔らかい掌の動きは大胆に拡がって、ついに背後から抱くように、豊かな量感ある柔肌が、ぴたりと押しつ

けられ、白い指先が小さく美しい妖蛇のように、うごめき始めた。声もなく、思わず圭介は、その手をつかんだ。

「じっとして……動かないで」

かすれたような亜紀の声が生暖かい息と共に、彼の耳に注ぎこまれた。

石けんの泡に包まれた白い蛇は尚も動き回る。とらえた獲物を、いとむように、あるいは、もてあそぶかのように、五つの頭を持つ二匹の白い蛇は、たわむれかかる。

恐らく押しつぶされているはずの、亜紀の豊かな胸のふくらみが、圭介の背や、ひじに快い弾力を感じさせながら、白い蛇は、ゆっくりと、うごめき続けた。耳にかかる、せわしい息吹きを聞きながら、圭介は何も考えなかった。ただ、押し寄せる激流に身を任せて目を閉じていた。嵐は急激に強さを増した。

「フフフ……」

どこかで、妖しい含み笑いが起こった。ずっと遠くから聞こえているようだ。蛇は尚も巻き、捕えた獲物を離そうとはしなかった。妖蛇の餌食化した圭介の背に息苦しく、まといついていた豊かな量感がヌルヌルと滑って彼を石けんの泡でくるみこんだ。彼にはその泡膜が、五体をがんじがらめにする捕縄のよ

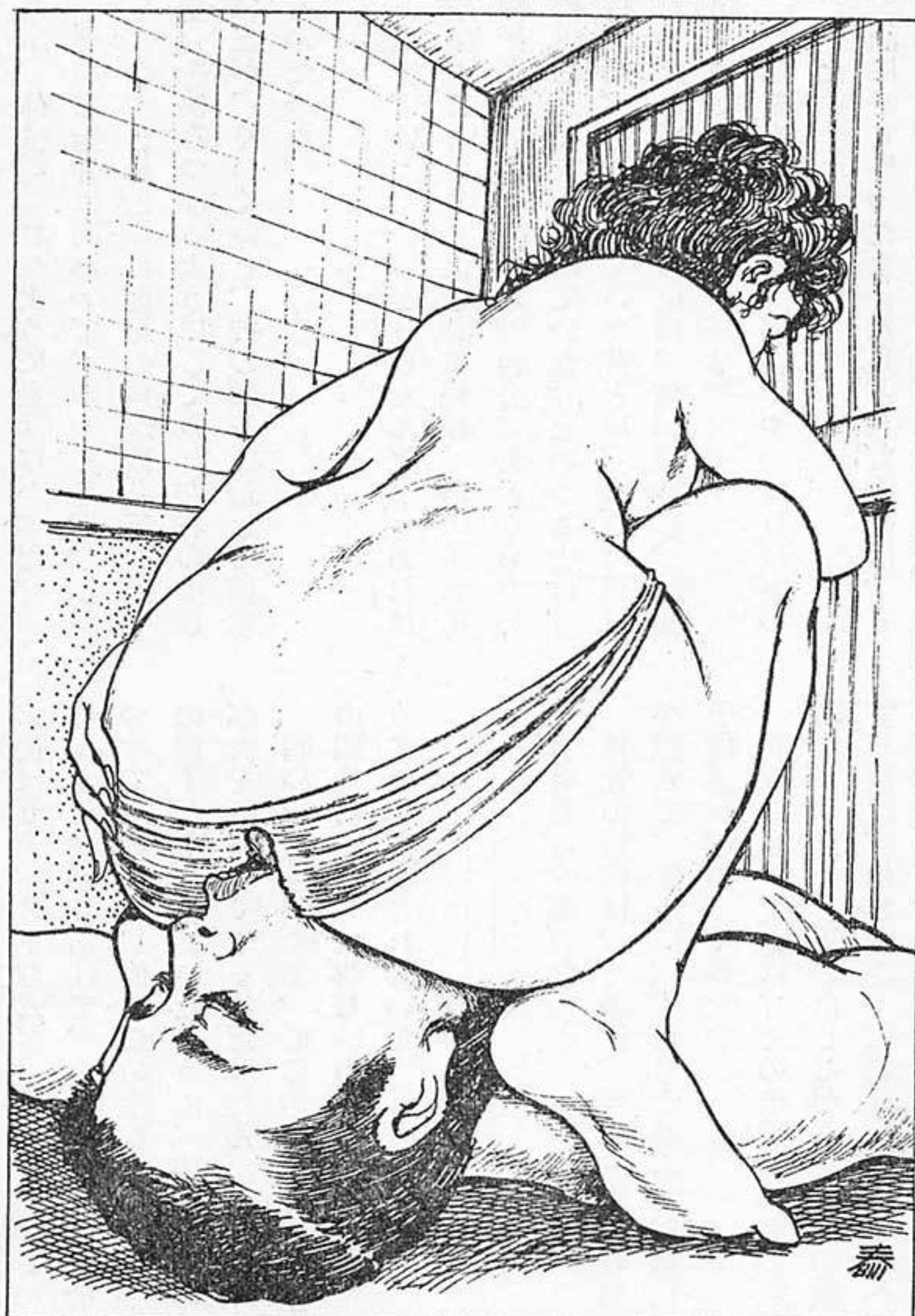
うに思われた。

やがて、ゆっくりと、はい上がってきた亜紀の手が、胸をなぞって肩にあてられたかと思うと、ずっしりと体重をかけられた圭介は身動きも出来ぬ思いで押し倒された。そして

胸の上に跨がられた豊かな双丘で、息苦しい重圧を覚えたのだった。

……と、その重圧がスッと消えた。

はっとして見上げる圭介の目に、初めて会った日以来、昼となく夜となく頭に描いてい



……ナミオM画廊……

『幸せな苦しみ』

……春川ナミオ……

たヴィーナス像が、今や何に、さえぎられることもなく、厳然とした輝きを帯びて映ったのだった。

彼の胸の両側に、すらりと伸びている二本の美柱は艶やかさに満ち、急にムッチリと盛り上がった豊かな腰に溶けこみ、なだらかな起伏を描く美線を創り上げている。はるかに高く見える熟れた洋梨のような乳房は大きく息づいて、更に、その上から見降ろす、勝ち誇ったような亜紀の大きな瞳だけが、異様にキラキラとした光を放っている。

亜紀の声が、文字通り降ってきた。

「きれいに流したげるわ。フフフ……」

彼は信じられないように、二本の美柱に支えられた、この麗わしいヴィーナスの生々しい一面に、視線を釘づけにされていた。

と突然に、叩きつけるような湯滝が降ってきて、圭介は思わず、むせた。だが胸、肩から首、そして口にも鼻にも、突き刺さるように注がれる温かいシャワーの刺激が、今の圭介には快かった。全身、熱いものに浸されて横たわる圭介の腹に、勢いを失った最後の、なごりが感じられて滝は止まった。

「圭介！ お前は今、私の奴隷としての洗礼を受けたのよ」

(ちがう。これでは、まるで立場が違う)

圭介の心の中で、そんな叫びが起こり始めたが、体は縛られたように動けなかった。

そんな圭介に向かって、ゆっくりと、しかし、はっきりとした亜紀の声が落ちてきて、圭介を挟みつけるようにしていた左右の美しい足が、ぐいぐいと、彼の顔を圧迫して揺するのだった。

(俺は、いったい、どうしたんだ？ あれは現実のことか？ たしかに俺は、あの柔肌に翻弄されて酔っていた。自分でもわからない何ものかに支配されていた。ということは、長い間、抱き続けていた夢とは、まるで正反對ではないか。女の肌は、俺が翻弄し、征服する筈ではなかったのか？)

ほほを抓ってみた。痛い。やっぱり現実のことだ。

酒にでも酔ったような足どりで圭介は、また歩き始めた。

まだ生々しく亜紀の柔肌の感触が残っている圭介の身体の中に、遠い子供の頃から、静かに、ゆっくりと、絶え間なく湧き上がり、そして長い間に、すっかり根を下ろしてしまつた異常な熱い血潮が、今、その流れる道に

迷つたような戸惑いで渦を巻きながら、身体の間々で、はっきりと息づいていた。

(俺はサディストなんだ。女を征服するのは俺なんだ。縛りあげて、白い肌に赤い鞭痕をつけてやるのは、俺のこの手なんだ！……あの慶子がやられていたように、俺が、この俺が女を征服してやる筈だったんだ！)

暗い夜空を睨んで、心の中で絶叫する圭介の脳裡には、忘れ得ない数年前のことが、ありありと再現されていた。

(三)

日曜日の夕暮れだった。

神社の境内は、その夜、年に一度の秋祭りを迎えて、参道に、ずらりと並んだ露店には子供達が群がっていた。

高校二年の圭介は、その子供達の姿に数年前までの自分を思い出しながら、境内の横をすり抜け、崩れかかった石段を裏山の方へ登っていった。雑木林を抜けると戦没者慰霊碑の立っている小さな台地があり、そこが圭介の、いこいの場所だった。巨大な石碑に、もたれながら、圭介の秘密の空想は、果てしなく広がるのだった。

田舎町の書店の次男坊である圭介は、まず

世間並みの、おとなしい少年だった。勉強は嫌いだったが、店先の目につく本は片っ端から、読みあさった。その結果、恋とか愛とかは元より、性についても、同じ年頃の少年より、はるかに早く多くの知識を得た。

数々の大人の娯楽雑誌の中で、ひととき圭介の心を捕えたもの。それは江戸川乱歩の怪奇な世界にも似た妖しい雰囲気満載な雑誌であった。それらの中に圭介が見たものは、縛られ、吊るされた裸女の苦悶の姿と、それを責めることによって、恥かしめることによつてのみ、快感を得る男達の存在であった。そして彼の内の、秘められた本能に目ざめた血潮は、若い正義感との闘いを始め、赤く沸きあがる度に自ら封じこめ、体内深く閉ざされたそれは、やがて異常にくすぶり始めた。

中学の頃、すでに圭介は自分の中に拡がりつつある、この異常な欲望に気づいていたのだ。

少年雑誌や映画を観ている時でさえ、美女が悪者に捕えられて、縛られたり、拷問されたりするシーンに惹かれ、自分がその悪者になったように、あれこれと責めを考えたり、クラスの女の子や近所の女の子等をヒロインにあてはめて、一人、空想の世界に閉じこも

るようになった。……と同時に、その行動があくまでも虚構の世界だけで許されるものだということを認めてしまった。

近所に、二つ年上の慶子がいた。町では並ぶものがないと、うわさされる、その美しさ

は年と共に一段と輝きを加えていった。

内気な圭介は中学に入って以来、道で会っても、あいさつすら、できなくなった。

ただ、彼一人の空想の世界でのみ、慶子に接する機会を得た。日頃、口もきけない慶子



……イメージギャラリー……『縄と面のもてなし』……志羽利也……

を、彼は実に綿密な計画で、山小屋に誘拐する。そのための作戦行動表や、図面、山小屋の見取図まで用意していた。

中学一年の時、嫁いできた彼の義姉は元看護婦だが、彼は、この義姉を助手として、この小屋に待機させることにしていた。

後手に縛られ、猿ぐつわをかまされ、タオルで目かくしされた慶子が、圭介に縄尻を握られてヨロヨロと小屋の中央に進む。

たった一つ、身につけた純白のパンティが暗い小屋の中で、まぶしい。白衣の義姉、信子が無表情のまま、小さなハサミを使って、その小さな布さえも切り取ってしまうのだ。

時には衣服をすべて着けたまままで縛られることもある。彼の設計した鉄パイプの手術台に慶子は四肢をつなぎ留められ、背に当てられた枕で腰のあたりを天井に向けて突き上げている。信子は相変わらず石像のように冷たい表情を、ピクリとも動かさず、切長な目を吊り上げて、彼女のスカートの中に手を差し込み、スリとパンティを引き抜く。

素顔で慶子の目差しに対するのが怖い圭介は、般若の面をつけ、これも自作の革製の口かせをかませ、大きく割られた慶子の両足の間に立っている。恐怖にひきつった目が大き

く見開かれ、又、固く閉ざされるたびに、慶子の頬に、大粒の涙がポロポロと流れる。

こうして、二人がかりで責められ、弄ばれた慶子は、最後には必ず排泄を強要されるのが、常だった。

セーラー服の時もあり、又ある時は、生花のけいこの帰りを襲われ、和服姿のまま縛られ、湯文字一つにされて、彼女自身が花器をつとめることもあった。

圭介が高校一年の春、この空想の世界に、実像の面影が加わって、一段と進歩した。

慶子の家の裏口を通りかかって、ふと見た風呂場の窓の、上の二枚のガラスが透明になっていることに気づいた彼は、二、三度、往き来して、ある作戦を練り、夜を待った。

(これなら、絶対、成功だ)

夕食もそこそこに、友達と勉強することを口実に家を出た圭介は、小走りに柳田家の裏口に向かった。

(しめた！)

窓が、あかあかと闇に浮き出している。時折、やけに大きく湯の音が聞こえる。

(誰かな？)

慶子でありますように……という願いをこ

めて聞き耳を立てる。

圭介は昼間、考えた計画を、もう一度、確かめながら、ゴミ箱のふたを立てかけ、グツと体重をのせ、ゆっくりと目をガラス窓に寄せていった。

(見えた！)

アップにした髪が、ほつれて、濡れた首筋に幾筋も幾筋も、まとわりついているのに続いて、流れるような滑らかな背中。次第にくびれていって、やがて豊かに盛りあがって、腰のあたりまで、向こう向きに、身体をふいている慶子の姿が、窓の中、一メートルも離れずにあった。上気したピンクの肌に、弾けるように湯玉が光る。

(本物だ。とうとう見たんだ)

圭介の、早鐘のように鳴る血潮の流れにも慶子は気づくはずはなく、こちらを向くと足を拭いた。圭介の眼下に、その裸身をあますところなく、さらしているとも知らず……。

その麗わしい裸身は、圭介の頭の中で、たちまち縛り上げられた。

「ぱちっ」

浴室の明りが消えた。

圭介の幻想の世界に、柳田家の浴室での責めシーンが組み込まれたのは、その夜、以後

のことである。

それは、一部が現実の記憶であるために、より鮮烈なものとなって、圭介の血を沸き立たせた。

(四)

寒気に、ハッと目覚めた圭介は、思わずブルツと身ぶるいした。いつの間にか石碑に、もたれて眠ってしまったらしい。見回すと、あたりは、すっかり夜の闇に包まれようとしていた。

立ち上がろうとした彼の耳に、枯葉を踏む乱れた足音と共に、数人の男の、言い争うような声が聞こえた。

(けんかな？)

圭介は声の方角に忍び寄ってみたい衝動にかられ、足音をたてないように、そろりと身体を動かした。

「いや！……放して……ア……」

低く、抑えたような女の悲鳴が、切迫した恐怖を含んで耳を打つ。

圭介は胸を躍らせた。

「今さら、じたばたしても、もう遅いぜ」

「声をたてると……このナイフが、きれいな顔にキズをつけるぜ」

「ヘッ……いいかげんに、あきらめろ」
男の声と共に、時折、ピシャと肉の、ぶつ
かる湿った音がする。

圭介は、大きな檜の木の根元に坐り、一心

に目と耳を、こらした。
(この異様な物音は……)
彼の全身の血が脈打つのが、自分でも息苦
しかった。



……イメージギャラリー……『強(ごうだつ)奪』……岡 たかし……

直感的な異常な期待に、彼の心は急激に慄え始めた。

次第に闇に慣れた圭介の眼前に、いくつかの黒い影が動いて、はつきりと、その姿が現われてきた。

若い女が大きな木を背にして、動き回る三人の男の間で、もがいていた。

むき出しの白い腕が二本、宙におどったかと思うと、髪が乱れ、大きくゆれ動き、太い腕が巻きついて、それをおさえつける。

枯葉を踏む足音が一層、騒がしくなった。

「おい、足をおさえろ！」

一人の男の影が、しゃがみこんで暴れる細い両足首をつかんだのか……「ヒッ」という声と共に足音が止まり、太モモの中程まで露わになっているその女の足が、急に白さを増したように思われた。

「兄貴、これだ。縛っちまえ」

もう一人の男が、荒縄でも拾ってきたらしく、まん中で女の腕を押えている一番、大きな男に差し出した。

「おっ、こりゃいい。へへ……、おい姉ちゃん、暴れられねえように吊ってやるぜ」

兄貴株の男が、す早く、女の両手首を合わせて、縄をぐるぐると巻きつけると、その端

を、一番下の技に掛け、ぐっと吊るようにして、そのまま縛りつけてしまった。

女は両手を頭の上で一つにされ、身体は棒のように伸び切ってしまう。残る二人の男が木の後に回って坐りこんだかと思うと、女の細い足首を片方ずつ握り、両方に捻げようとする。

「いや……助けて……いや……いやーっ」

必死に合わせようとするヒザは、二人の男の力には勝てず、両足首は幹の殆ど後にまで引き裂かれ、大木を、両足で背中に抱くような形になってしまった。

「どうだい、もう動けまい。へへ……」

「さあ、兄貴、早いとこ、たのむぜ」

「ホレ……いい身体をしてるぜ」

セーターが、くると首までまくれ上がった、あとに白い薄物に包まれた胸が露わにされた。一ぱいに引きあげられ、伸び切った両腕がブルブルと震えていた。スカートが簡単に落ち、チャートチャッと、軽い音をたてて裂けたスリッパは、もう、ただの布きれと化していた。

「あっ」……と叫ぶ女の口に、その布きれが押し込められ、ちぎられたブラジャーで、その上から、縛られてしまうと、女はもう声を

あげることもできず、涙の浮いた目を、ぐっと閉じて黒髪を、弱々しく、左右に振っていた。

枯葉の上に、音をたてないようにヒザをついて、圭介はその場から動けなかった。飛び出せば、助けることもできるかもしれない。だが、今の彼には、そんな考えは毛頭なかった。

（こんなチャンスは二度とないぞ。お前の夢にまで見ていたことだろう。奴らは、お前の代りだ。自分でやろうと思って、とうてい出来る事じゃない。よく目に、焼きつけておけ。さあ、チンピラ共、もっと縄を持ってこい。足も縛れ。下着も全部、取れ。股縄をかける）

圭介は、めまぐるしく胸の奥で叫びつつ、次第に秘められた柔肌が薄闇の中に露わにされてゆくのを、凝視していた。

彼女の足から抜き取られた白い布を、
「いい匂いだ、うーむ」と、一人がつかみあげて唸るような声を出した時、ゴクッと、つばをのんだ圭介は、その匂いを自分も、かいだように思った。

いつだったか、雨の日だった。例によって

慶子の入浴をのぞきに行き、あいにくタイミングが合わず、がっかりして帰ろうとした時ふと、軒下の物干竿に目を止めたことがあった。明らかに慶子のもものと思われる真っ白な下着が、一列に並んで風にゆれていた。圭介は、ためらうこともなく、その下に忍び寄ると、端の方の、小さなフリルのついた可愛いやつを一枚、選んで抜きとった。少し湿ってシュッシュッと手の平で滑る細い繊維の手ざわりを楽しみ、鼻にくっつけて深く息を吸いこむと、強い洗剤の香りが頭のシンに突き抜けた。だが、圭介には、それが、ただの洗剤だけでは、ないように思えて、持つ手が、ふるえた。

（今日のは、洗剤の匂いじゃない）
圭介は、とび出して行きたい衝動を辛うじて抑えていた。

三人の内の兄貴株の男と、太い幹のザラザラの樹肌に、はさみつけられた丸い胸や尻は奇妙にゆがんで痛々しく、乱れた髪が、汗と涙に濡れた顔に、べったりと、まといいついている美しい、その顔。

（あっ！）

圭介はもう少しで声をあげそうになるのを

やっと思えた。

(慶子だ！)

目を開く気力もない、ブラジャーで半分お
おわれたその顔は、正しくあの慶子に違いな
かったのだ。血が全部、頭が上がってしまっ
たように、耳がガンガンと鳴った。

(まさか！……)

だが、目の前の光景は疑いもなく現実のも
のであった。

全身の力が抜け切った慶子は、ぐったりと
両手に全体重をかけ、幹の後に回された両足
はヒザまで地にスレスレになっていた。両手
を吊った枝は、今にも折れそうだ。無残であ
った。地獄図であった。だが、圭介の目には
それが、ひどく美しく映った。

「健、もう降ろしてやれ」

「おっと、そうだった。痛かっただろう。ヒ
ヒヒ……こんなに血が、にじんで」

健と呼ばれた男に抱き下ろされるままに枯
葉の上に横たえられた慶子は、上半身をよじ
り、枯葉に顔を埋め、声もなく、肩をふるわ
せている。両足は、まだ許されていない。
「おめえがおとなしくしねえから、見ろ、ボ
ロボロで使い物にもならねえ」

男は、ちぎれた下着を拾ってきて、楽しそ

うに彼女の身体を拭っている。

(さあ、これからだ。お前たちが汚したその
肉体を洗い清めるほど汗をかかせる。今度は
後手の高手小手に縛れ。両脚で吊るして鞭打
ち責めにしろ)

圭介は、胸の内で男達をけしかけた。だが
「そろそろ引揚げようぜ」

兄貴株の大男の声で、我に返った。彼の思
うようには動かない男達だった。

男達が去った後、慶子は、のろのろと起き
あがり、足元に落ちている白い布切れを見て
「ワーツ」と声をあげて、泣き伏した。枯葉
を、両手いっぱい握りしめ、指が地面を引
っかき、背中が波打っている。

慶子の声が小さくなり、尚も、すすりあげ
ながらスカートを着け始めたのを見て、圭介
は思い切って、立ちあがった。

うつむいたまま歩き始めた慶子の前方に圭
介は仁王のように、黙って立っていた。どう
してそんなことをしたのか、自分でもわから
なかった。

ハッとして、涙の目を向けた慶子は、しか
しそれ以上、驚いた様子もなく、圭介の横を
すり抜けて走りだした。一切れの白い布を残
して……。

それ以来、圭介は慶子の姿を見ることはな
かった。

(ぜったいに、女の奴隷なんかに、なるもの
か！)

圭介は、亜紀の白い柔肌を思い出しながら
胸を張った。自分本来のものを取り戻そうと
して、カッと眼に力をこめて見開いてみた。
その眼に、今、通り過ぎようとしていた店
先に、並べて吊り下げられているロープの束
が、とびこんできた。圭介は、なんのためら
いもなく、その店に入った。

ナイロンと綿のロープを買った圭介は、胸
の内で自分に、いい聞かせるように呟いた。
(今度、亜紀と会う時には、このロープで縛
り上げてやれ。あの、生意気で素晴らしい女の
肌をな……)

思わずニヤッと笑った。だが次の瞬間、別
の自分の声を聞いた思いがして、ドキッと
して立ち止まった。

(このロープで縛られるのは、きつと、おま
えのほうだろうよ)
……と。

妊婦狂崇症の由来

水 木 宏 二



私が妊婦に興味を持ちはじめたのは、一体いつ頃だったろうか。奇クに児玉昌子さんの分譲フォトが始めて出た頃だったから、余程以前のことになる。

マーケットの近くに佇んでいると、市場通りの主婦たちの中に、時折、お腹の大きい、婦人を見かけると、そのあとをついて行って、どこまでも、どこまでも

ついてゆく。といって、何も手出しするわけでもなく、ただ、妊婦の、お腹を見たいだけだった。

妊婦特有の、あの大きくふくらんだお腹は、私にとっては限りない魅力であったが、私が何故、そんなに妊婦にひかれるのかは、本人の私にとっても、その原因や理由は、さっぱり、わからない。

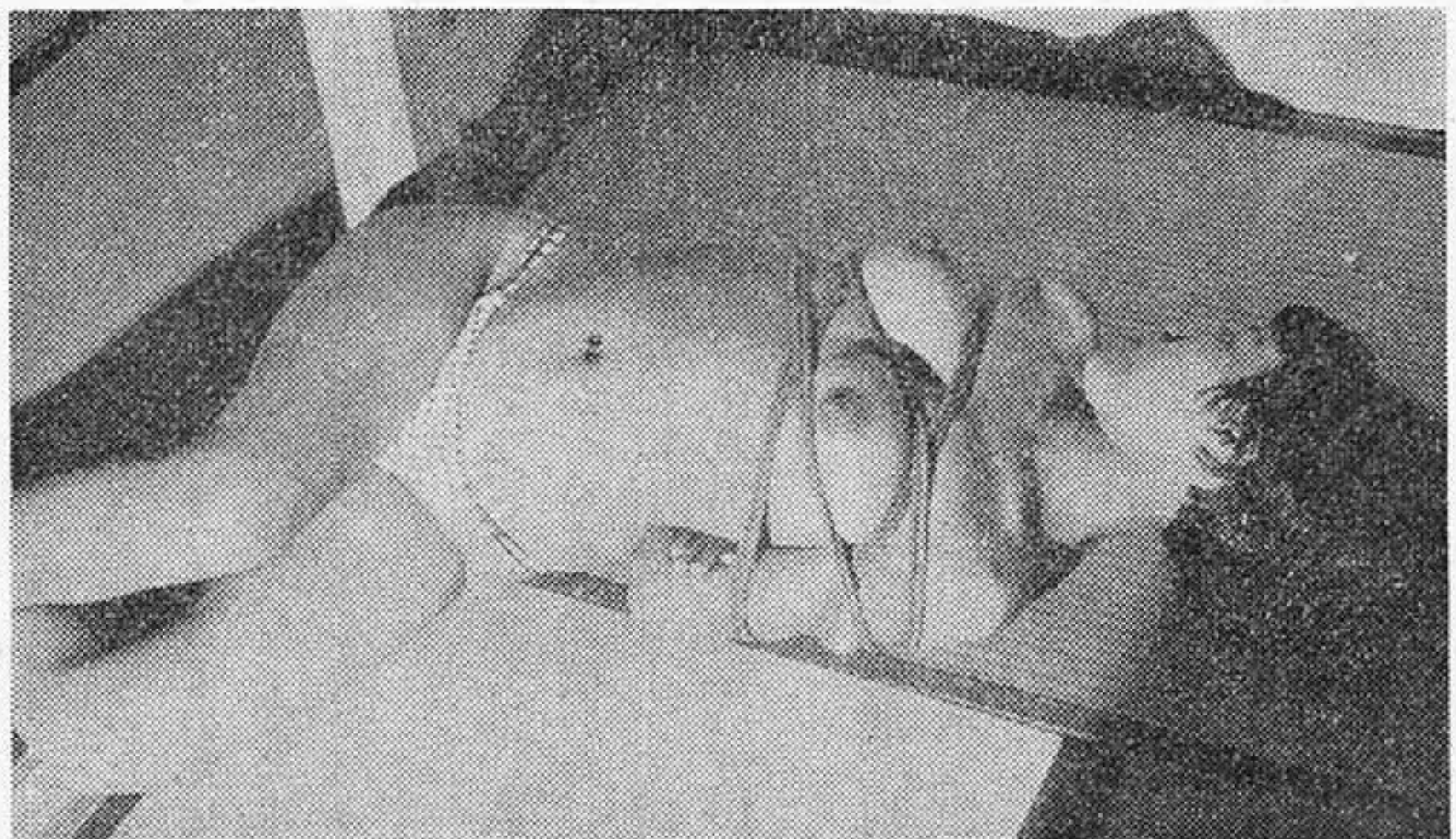
産み月近く、垂れ下がったような妊婦のお腹を街で見かけたときは通行人の背後にかくれながら私はわくわくした気持で、その婦人に熱い視線を送り、買物などで立ち止まったときは、私も近くで用ありげに佇んで、じっと目をこら

すのであったが、そんなときの私の心の楽しさは、言葉では言い現わすことが出来ない。

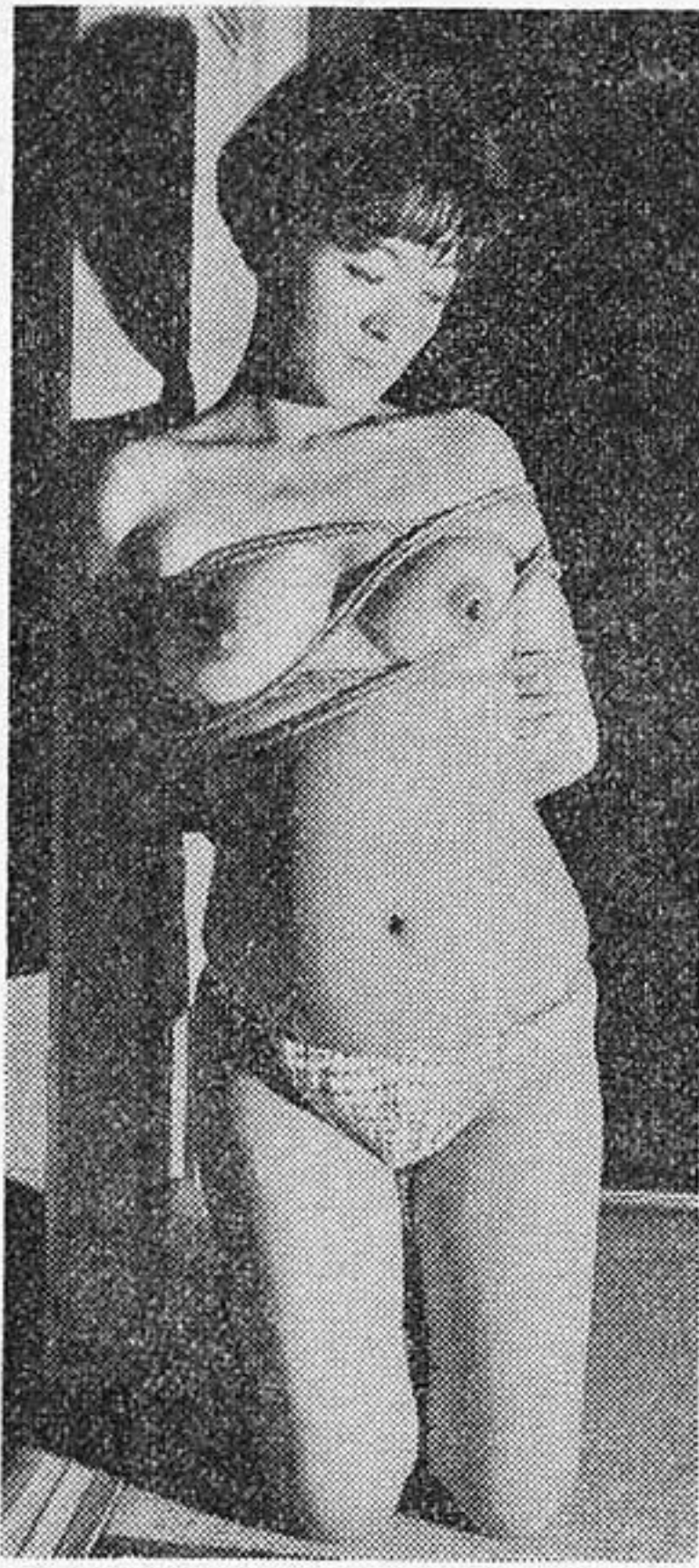
一度、パチンコをしているお客の中に、妊娠している人がいて、そのときは、私もその婦人の近くの台でパチンコをするふりをしながら、長い間、じっと眺めることが出来た。

妊婦のヌードを見たいという気持が強いが、未だにその機会はない。ただ、奇クの写真で、満足し、本物は、どんなかなと、胸をワクワクさせながら、眺めている。

最近では福井桃子さんの妊婦フォトは、素晴しかった。あの、まんまるい西瓜を二つにしたようなお腹はたまらない。印象に残っているのは、中河恵子さんに木戸悦子さん。奇クでは、私達マニアのために、本当に労を惜しまず、金原奈加子さんとか増田みゆきさんとか富田由美子さんとかの妊婦フォトを撮って下さって本当に有難かったと思っています。私達マニアは、渴した魚が水を



求めるように、むさぼり、見たり読んだりしました。妊婦は普通のヌードと違って、機会が、ごく短いのですから本当に貴重なものです。これからも読者の女性の方、どうか、妊娠したら、誌上に姿を見せ下さい。お願いします。



中河恵子、を責める幻想

秋 野 美 水



アランドロン主演の「あの胸にもう一度」という映画がありました。相手役の女性の名は忘れましたが、全編を通じてその女性が、オートバイを、ぶっ飛ばす場面が出て来ます。黒いブーツに上下いっしょの真っ黒の皮ジャンパーを素肌に着け、ドロンに会いに行くのです。私はこの映画を見てその女性を中河恵子さんに置き替

えたいと思いました。

素裸にした中河恵子さんを、太さが3センチ近くもあるロープで縛ります。乳房の上と下にロープを掛け、乳房が倍になるぐらいに飛び出す程強く。そして、胴がくびれて、蜂のようになってしまう程、胴絞りをするので。

左の肩から降りてきたロープが乳房の上下を挟んでいるロープに

縛りつけられ、右の肩から降りるロープと一緒に、乳房の間で大きな瘤が作られて更に下がり、胴を締めつけているロープと交わってそこで一つに、ねじり合わされ、尚も太くなったロープは両腿の間を割って背後にまわりこみ、真っ直ぐに立っていられない程に思いきり締め上げられて、背中のロープに結びつけられます。

そうしておいて、映画と同じように、身体にぴったり合った真っ黒の皮ジャンパーを着せ、黒のブーツを履かせるのです。恵子を600ccのオートバイに乗せ、私はギャランで彼女の後を着いて行きます。名神高速に入った私達は、恵子を先にして西へ突走ります。

恵子が苦しうでも、私は後ろからスピードを出すように強要し決して70キロ以下には、させません。走るに従ってロープが音をたてて恵子の肌に食い込んでくるでしょうし、大きすぎるオートバイに足を一杯に広げさせられている恵子の体重は振動につれて太いロープで締め上げられている一点に、かかってくるでしょう。それでも私は許してやらず、彼女をからかいながら走らすのです。やっと京都市内に入り、ホテル

へ着く頃には、彼女はもう一人で立つ事も出来ない程でしょう。部屋に入ると私は彼女の服とブーツを脱がしてやりロープを解いてやるのですが、ロープが強く締まって食い込んでいるので、ロープが柔肌を離れる毎に、彼女は苦しうな声を出すことでしょう。ロープを取り終わった恵子の身体は、くっきりと紫色の跡が残り、あちこち、血が流れているかも知れません。特に身体を支えてきた太くよじり合わせたロープの痕は、見るも無残な有り様で、腫上がっているに違いないのです。

無理矢理、彼女をバスに連れて行ってシャワーを浴びせると彼女は、ロープ痕に滲みる痛さに泣きながら部屋へ逃げ戻ることでしょう。夕食の後、バスに入らなかつた罰に、恵子の手足を縛って床に転がし、ロープで出来た傷にブランドーを塗り込んでやるのです。

そして私は、泣き叫びながら転げまわる恵子を抱き上げ、八分目まで水を入れたバスに彼女を投げこみ、蓋をした上に、どっかりと坐って、明日はミニスカートを穿かせ、下着は着けさせないで、知恩院の、あの急な階段を昇らせてやろう、などと考えるのです。

／＼誌上通信／＼早坂信治様へ

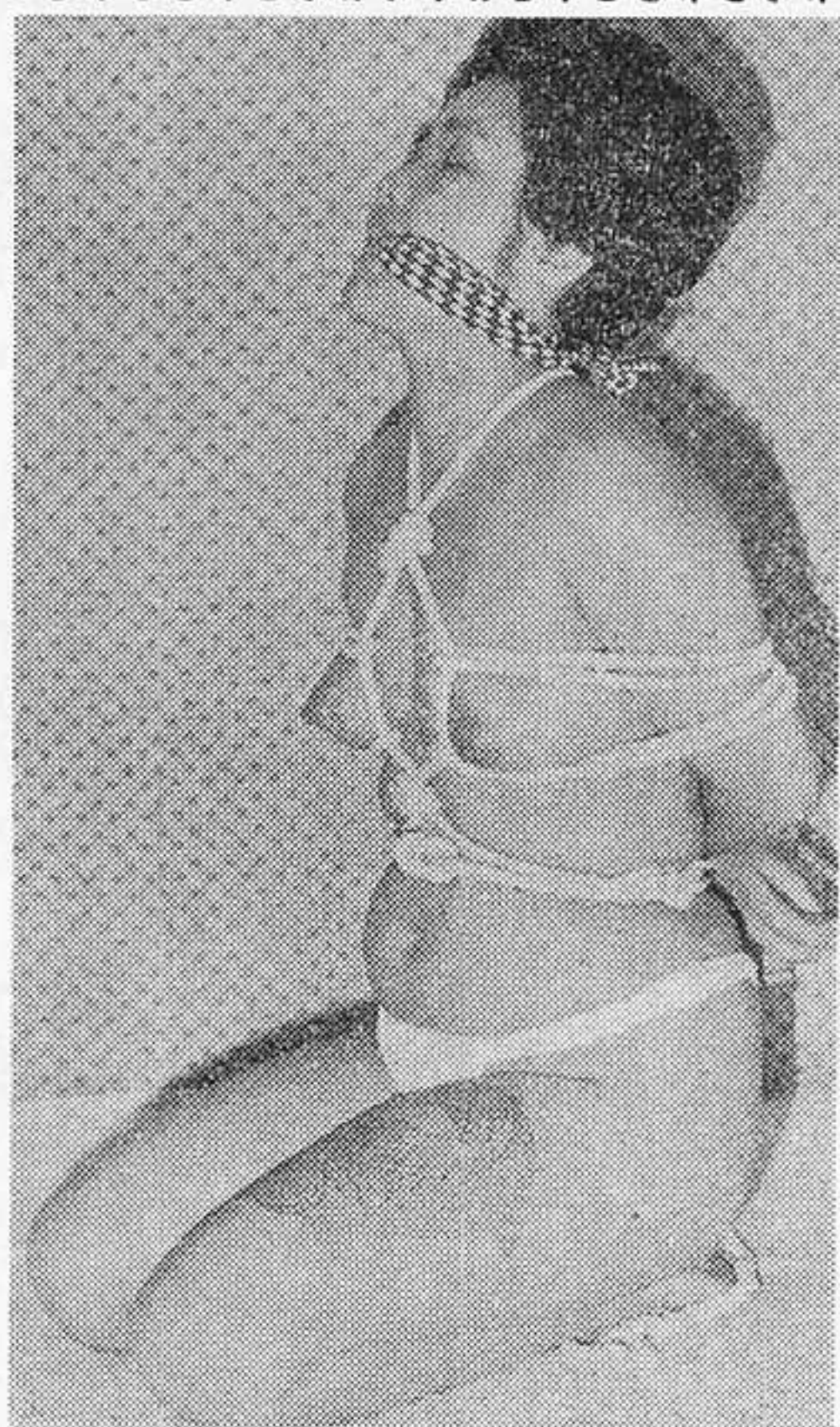
「SM夫婦」を責めてみたい私

松 木 並 夫

奇ク4月号掲載の、貴方の豊満な妻女の羽根針責め、乳首重り責め等は全く垂涎の作品でした。

あれまで試された貴方の事ですから恐らくは誌上に公表出来ぬ秘所の重り責めも当然、行なわれている事であろうと想像をめぐらせるのです。より新たな刺激的な着想に挑戦される過程の手段として複数プレイを呼びかけられた文章には大いに共賛する次第です。

貴方が様々な嗜虐の考案を苦心され、それを試すとき、その苦悦に歓喜し乍ら、それ等を次々と吸収し尽してしまう妻女の、どん欲なまでに底しれぬ悦虐の深淵を察するにつけて、無駄な抵抗の疲れや、ふと空虚を感じる場面もあるのではなからうかと思ひ、その意味に於いても複数演戯は、おすすめしたいと存じます。



もし、ご縁があつて、お逢いする事がかなえられれば、私は次のように考えます。お二人とお逢いする晩は、極細のテグス糸の両端にクリップを結びつけものを準備してゆきます。

どこかの場所で、貴方のチャックと妻女のコートの中に両端を入れて、それぞれのものに噛みつかせ、お二人を連結して、さ程遠くはない、ささやかなバーへご案内しましょう。お二人の淫悦の電流はテグス糸に流れ合つて、それが始まるプレイの期待に胸はずむ事でしょう。

夜の暗さにまぎれて見えぬお二人の間のテグスに、道ゆく人が引っかかりでもしようものなら、お二人のどちらかが、思わず悲鳴をあげる事にもなりかねませんね。そうならない為にも、当然、お二人は寄り添つてお歩き頂く事になるでしょうね。

歩行も思ひなしか、ぎこちないお二人と共に、僅かな距離をやつとの思ひで、バーに到達し、みんなグラスを合わせるとき、お二人はそれぞれの苦悦の個所を想像なつて、それぞれの思ひが、愛のきづなのテグスに火花を散らせて交流する事でしょう。

ほろ酔いの貴方は妻女のことを妻女は貴方のものを外して、一幕が終わつたバーをあとにプレイのためのホテルに向かいます。

ホテルでは2間続きの一室で、貴方は妻女を他の男に責めさせる準備のため、私を次の間に待せて全裸に剥いた妻女の豊満な肉体に羞恥の縄を絡ませてゆくのです。妻女の着衣を脱ぐかすかな物音や縄捌きの音。それに呟くような貴方のいたぶりの声を聞き洩らすまいとして耳を傾け乍ら、咽喉につかえるビールを飲んで待つ私は、鼻先にちらつくカツオブシのおあづけを食つて、じれ抜いている猫のようなものです。

やつと貴方のOKを受け、そそくさと、はずむ心を押えて隣室に入った私の視線は、目前に露呈された濡れ光る強烈な深刻に思はずかたずを飲んで途まどうのです。夫以外の男性の淫らな視線に花芯を晒した妻女は、さるぐつわの顔をややそむけて、悲しみの欲びをすくめる事を許されぬ裸身に漲らせ、裂かれた絹の肉股を打ちふるわせるのです。

「さあ、存分に始めて下さい」と言う貴方の声も思ひなしか上ずって聞こえるのです。私を取り揃え

プレイの記録 早坂信治



た淫具のどれから使うか、どんないたぶりから始めるのか興味津々の貴方に向かって私は、提案します。承諾した貴方を全裸のまま、椅子縛りした私は、いよいよプレイの開始です。

貴方が女体につけた僅かな傷唇にも想像を働かせ乍ら妻女の肉体の隅々にまで、観賞の視線のいたぶりと、暫くはオーソドックスなバイブの振動で女体を欲ばせておいて、いきなり彼女の縄を解いてしまうのです。

いぶかる貴方の目前で、腹部と亀裂に食い込む丁字縄を掛けた彼女に、ワイングラスに、たっぷり浸した体温計を持たせ、それを貴方の先の小穴に、ゆっくりと挿入して体温を計らせるのです。体温の報告が終われば、それをそのまま脈動の中に埋没するまで徐々に挿入させます。

作業を完全に果たした妻女への褒美としてカラフルな羽根針を豊臀に刺し与えると、先刻の貴方の刺戟の快感で発した夫の呻きに、

下腹部をかき回されるような肉の疼きを味わっている妻女は、更に悦虐の陶醉を深める嬌声を発して身悶える事でしょう。

体温計の抜け落ち防止のためにテープ止めの作業を命令通りやり終えたところで、右の乳房にも褒賞の羽根針が飾られるのです。

「ああー」妻女の呻きを聞かせ乍ら私は、かつて貴方がそうしたようにに彼女の股縄をつらせて濡れそぼる花中にリモコン玉を没入させるのです。そして4本の羽根針を妻女に持たせ2米離れたところから、貴方を狙って投げさせます。妻女は、夫のどこを狙うのでしょうか？

今まさに投げようとする直前に私はリモコンのスイッチを入れます。女股に垂れ下がるコードに弱電流が流れ、忽ち肉襲の中で振動が始まり「アー……」と小さな叫びをあげる妻女の手許が大きく狂って、狙った的はおろか、貴方の巨体さえ、かすらず、あらぬ方向へキリキリと矢羽を回し乍らポイと落ちてしまうのです。

当らなかつた当然の罰は50ccのお酒の浣腸で、当ればザンバラ鞭で豊臀を愛打して、差上げるのです。もしも下腹部の振動に負けて

4本とも当らなければ200ccのお酒を注入される勘定となりますが、あらぬ口から飲まされるお酒に妻女は酔っぱらってしまうのではないのでしょうか？

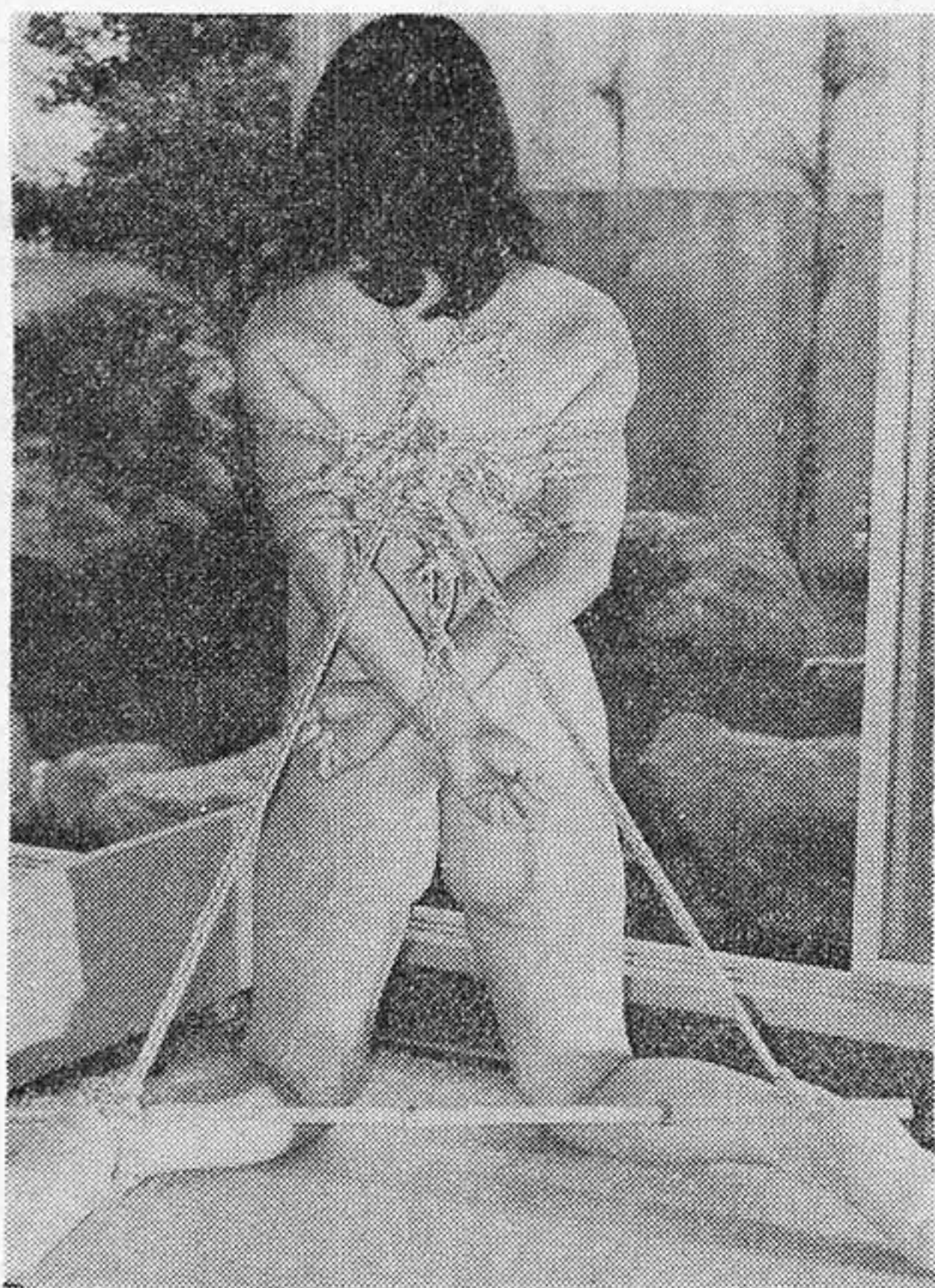
リモコン、酒の注入、鞭の愛打による悦虐、豊臀をグラインドさせ乍ら、羽根針を投げる艶姿は、きつと貴方の官能を揺さぶる事でしょう。

万一、体温計をのんだ標的に当りでもしたら、貴方の呻きに彼女は矢羽を刺された豊乳をかき抱いて、その場に坐り込んでしまうのではないのでしょうか？

貴方の張り裂けんばかりの苦痛の快感の処理や、このSM前戯のプレイの結末は、お二人の想像にお任せするとして、ともあれ、そのあとは手足を拡げてハンモック吊りされた妻女の腹の上に、オツマミをのせてビールの乾杯でもやろうではありませんか。

女体燭台等は勿論のこと、コブ抜きゲームや女体楽器も複数プレイの享樂を満足させてくれる事でしょう。

お二人に是非お逢いしたいものです。私の住所氏名、電話番号などは編集部にお届けしてありますので、どうぞよろしく。



サ
ロ
ン
落
穂
抄
(二)

塚 本 鉄 三

縛りもまた楽し

この世の中は適当に暇があれば結構、楽しいものである。目の回るような忙しさの中に、少しの暇を見つけたすの、また楽しい。

時間に追われながら、カメラ・ルポを書いているお蔭で、いろん

な読者の方々から、いろんな便りを、よく貰う。

返事を書くかと思いついた時は先ず封筒の宛名だけを書いておいて、文面から手紙の主の顔を思い浮かべながら、一気にペンを走らせていってしまう。

雑誌なんかの活字の文章を読むのと違って、便箋にじかに書かれた手紙というものは、ボールペンあり、万年筆あり、サインペンあり鉛筆あり、中には毛筆ありで、その文と文字を見ていると、初対面でも、自らその人柄が忍ばれてくる。

殊に、それが女性からの手紙であって、内容がSMに関したことであると、思わず胸がドキドキとしてしまう。水茎のあとも麗しくというような惚れ惚れとする美しい文字で酔わされたのは、関谷富佐子さんに、最近では荒尾慶子さんである。大塚啓子さんは帳簿なんかをつけたら、と、思うような手馴れた、しっかりした字であった。

SM的な内容でドキキさせられたのは、深田菊子、鈴木鶴子、高村浩子の三嬢を筆頭に挙げねばなるまい。とても、そのままでは誌上に載せられそうにもない文章を、手紙だからというので堂々と書いていく。

人柄がその便箋いっぱい、にじみ出ている、実際に、彼女たちを縛っている時よりも一段と興奮させられるから不思議だ。

実際、いろんな女性と接してみ

ると、その反応も、一人一人、まちまちだから面白い。

もう大分以前のことになるので姓は忘れてしまったのだが、和子と呼ぶ女性を、写したことがあった。整ったノーブルな顔立ちで、色が抜けるように白かった。私は一遍に気にいって、早くヌードを見たいと気は、はやった。言葉つきも上品で落着いていた。

私は和子を部外へ伴っていった写真撮ろうと思った。片方が池で一方が樹立という細道を歩いてくるところを、何枚も何枚もスナップした。まだ朝露が、しっとりと下草を濡らしている頃で、逆光気味に全身が浮かび上がったところ、をこちらからストロボ一発デライトフラッシュしたのが、まことに美しい写真になっていた。私は和子のヌードを見たかったし、写真にも撮りたかった。若し写真がいけなければ、見るだけでも、いいと思った。

やっと口説き落として灌木に囲まれた、ちょっとした空地へ辿りついた時は、すでに陽は頭上高く昇っていて、撮影の条件は決してよくなかった。

真夏の陽は、じりじりと頭上に輝いていて樹に囲まれた空地は暑

くて仕方なかった。藪の中を私に従いて歩きまわったので、彼女のストッキングは破れ、黒のパンプスには、白い擦れキズが、いくつも、ついていった。

草を敷いて、彼女がヌードになる場所を作ってから、私は彼女が裸になるのを待った。

私の目の前で和子は洋服を脱いでいった。人前で裸になるような女には見えなかったのだが、ここでは、かくれて脱衣するような場所とて、なかった。

私はカメラを構えたまま、彼女の服を脱いでゆく様子を、じっと眺めていた。

最後のパンツを完全に脱ぎ去ってしまった後も、彼女は私に前を少しも見せなかった。

真昼の陽に照らしだされた全裸の肌の白さは、私の目を思わず、くらくらとさせた程、強烈であった。美しい肌の白さであった。

なだらかな肩、ふつくらとした乳房、ぽこんと可愛い窪んだお臍、適度に肉のついたお尻、まんまるい膝小僧。私の想像していた通りの均斉のとんだ素晴らしい肢体だった。

私はポーズを指示するのも忘れて、シャッターを切りまくって

た。それから、いろんなポーズをさせたが、彼女は私の目に一度だって、前の黒いところを見せたことはなかった。洋服を着終わってしまいうまで、決して私に前を見せなかった。なんとか一枚でも、と、私は狙いをつけていたが、正面を向く時は、左右いずれかの掌で巧みに前をかくした。

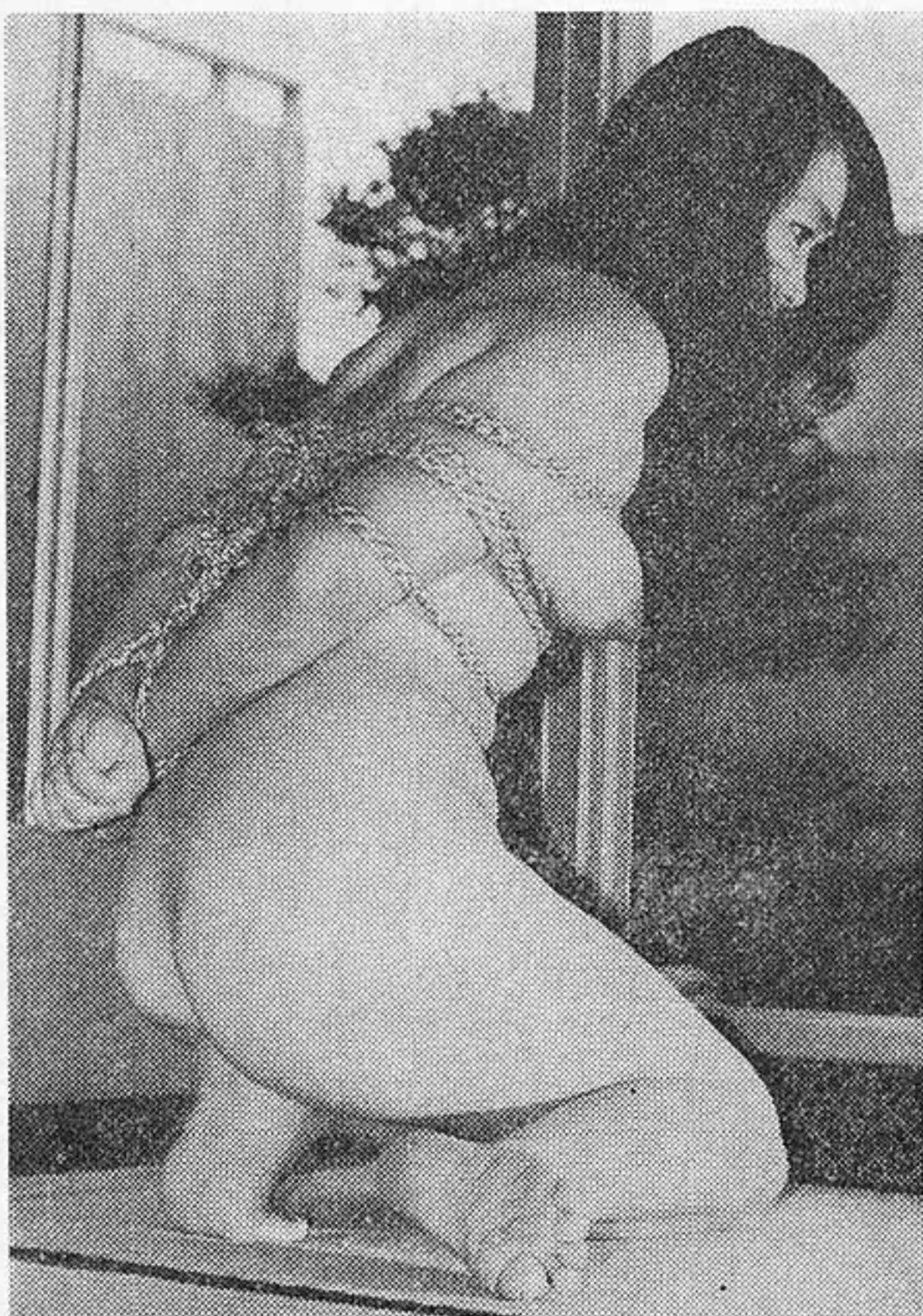
それから、数回、彼女の写真を撮る機会があったので、なんとか後手だけでも縛りたいと、いろいろ画策してみたけれど、遂に、私の不遜な企ては彼女に関する

限り成功しなかった。

空想もまた楽し

近頃は街を歩いていても、ハッと目を瞠るような女性に逢うことが多い。道で行き違う超ミニのお嬢さんのむきだしの太股など、思わずしらず、そちらの方へ視線が行ってしまう。そんな時、眺めているのが女性に対する礼儀だと言っている人もあったが、とにかく超ミニ、ノースリーブともなれば、掩っている身体の部分の方が少ないくらいだ。

電車やバスで向かいあって坐っ



た人の中に、そんな女性がいようものなら、忽ち衣服を剥ぎとってしまつて、高手小手に縛り上げているといった空想に、耽ってしまふ。現実には、目の前に相手の女性がいるのだから、空想もまた生々しく現実味を帯びて楽しい。いや、実際に、女性を縛っているよりも、空想の方が楽しいくらいだ。

よく、読者の方で、空想ばかりしているの、一度でいいから、実際に若い女性を自分の手で縛ってみたい、と、言われる方がありますが、私は空想の方が楽しいと思うのだが、如何なものだろうか。

我田引水になるが、緊縛写真を眺めて、ああだったろうか、こうだったろうか、と、空想に思いをめぐらしている方が、より楽しいのじゃないかと思う。いわば、緊縛フォトは、そうした空想の、よすがにもなると思えば、その存在価値があるというものだ。

妖しい影絵

最近ではポルノでも、マンネリを打破する狙いの一つとして、縛りや責めを加味したものが多く、その多くは数人の暴漢が小娘を襲うといった設定のようだ。

先年、クアラルンプールへ行っ

た時にも、私はカンポンでSMがかったショーを見たことがある。街のメインストリートから車で三十分ばかり走ってからゴムの小道を十分ほど歩いた所に、アタックプ葺きの小屋があった。入った途端、中は真暗だったが、目が馴れてくるに従って、踏み固められた土間の廊下のような所に立っているのが、わかった。

小さな穴を指さして、「見てみよ」と、中年の案内の女が言うので、覗いてみると、アンペラを敷いた粗末な台の上に、サロン一つの若い女が寝ていた。明りといったら、向こう側にある窓一つだけだから完全に逆行である。

ワヤンといってマライ人は影絵の芝居をやるのが上手であるが、この見世物も妖しい影絵の魅力を持ったポルノショーである。

そのうち、これもサロン一枚の若い男が一人、窓から侵入しようとする。スローモーションの動作で、やっとのことで部屋へ入った男は、女の寝息をうかがいながら近づこうとするが、女が寝返りを打ったびに、大仰に退いてみせるので、女のサロンに手をかけるまでは中々時間がかかった。やっとのことで、胸に巻いたサ

ロンを下にずり下げようとするのだが、女がムニヤムニヤ言いつつ手で押えるので、中々ことが運ばない。お臍のあたりにまで、下げろのにも、大分時間がかかった。すっかりサロンを取ってしまうと小麦色の肌の肉づきのよい肢体が影絵となって浮かび上がった。

それから男は、左右の足の拇指を握って、足を開こうとするのだが、これがまた、大変時間がかかって、見ていて、いらいらさせら

れる。そのうち、女の方が目が覚めて、激しい取っ組み合いとなるが、終始無言のマントマイムである。いつの間にか男の方もサロンを脱ぎすてて、二人共、全裸になっっている。

初めのうちは激しく抵抗していた若い女も、いつしか大人しくなると、おきまりのポルノシーンが展開される……そして、お腕を伏せたような褐色の双丘が、妖しく息づいて、さて、これから、いよ

いよ、クライマックス・シーンが……というところで、私は耳もとで熱い吐息を感じた。

「トアン、マイン」

むちむちとした肌のマライ娘が私の身近に立って、私に呼びかけていた。私の手をとった女の手はねっとり汗ばんでいた。

終わりまでショーを見ていたいという気持よりも、この女の誘いの方に引かれた。導かれるままに廊下を通って別棟の小部屋へ通された。ベッドに腰を下ろした私を押し倒すようにして私に抱擁し唇を合わせてきた。

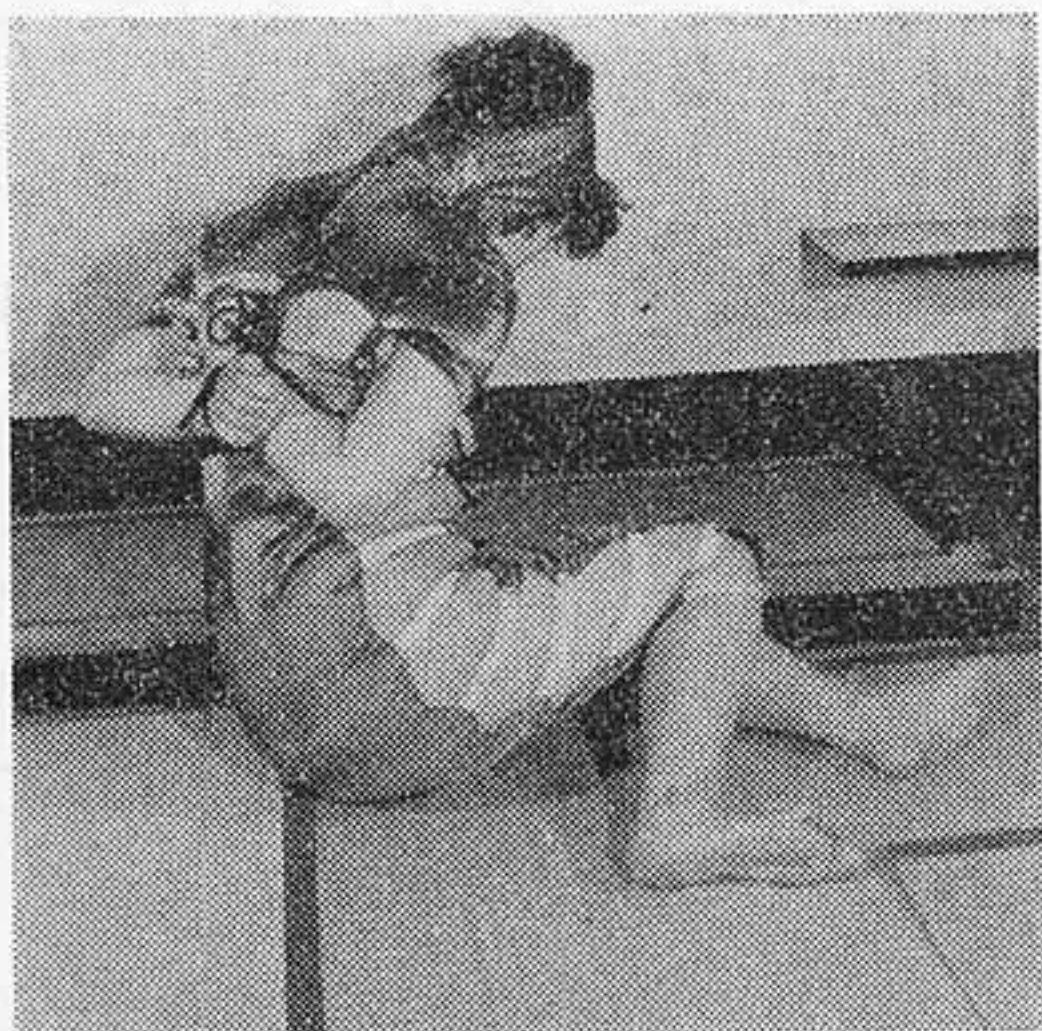
小麦色の肌が汗で、ぎらぎらと光り、暗さに慣れていた私の目にはまぶしい位だった。

南国の娘の濃厚な激情が、身体毎、まともにぶつかってくるような彼女の動きであった。それでも私は、部屋の造りや女の身体を観察する冷静さを持っていた。

「アパ・ナマ？」名前は何？ と聞くと、「マタイタム」と答えた。

黒い瞳か、馬鹿にしてやがる。日本人はすぐ、名前と年を聞いたがるが、名前や年なんか、どうでもよい、現実をお互いに楽しめば、それでいい、と、というのが彼等の考えかもしれない。





私は女の両手をうしろへ回させておいて、胸のポケットに挟んであったハンカチで、素早く手首を縛った。

「アパ・マチャン？」女は抗議の言葉を口にしたが、私はすかさずサロンを剥がすと、彼女の全身に視線を走らせるなり、掌で若々し

く逞しい肌の感触を味わった。女は、すぐに大人しくなり、媚を含んで全身を、なまめかしく、くねらせ「マイン、マイン、ナンギス」と叫んでいた。

私は心の中で、「さっきのポルノショーなんか問題じゃないよ」と呟きながら、彼女の乳房に対し

て執拗な攻撃を加えていった。カモシカのような細い足が、私を蹴ろうとして、ボタンボタンと激しく乱舞したので、私は、また格好の攻撃目標を掴むことが出来たのであった。

昼下がりだというのに、ゴム林に囲まれた、この一帯は至って静

かであった。チ、チ、チ、という小鳥の声だけが、窓を通して私の耳に聞こえていた。

私は、やおらズボンのベルトを抜いていた。

(挿入写真は塚本鉄三氏提供のものでモデルは近麻里子です)

告白 ゴムマニアの花嫁を求む

——ゴム衣着奴——

私は前年、通信欄に載せて頂きましたゴム衣着奴です。

私の願いをかなえて下さる方は誰もいず、なぜ私だけが一人ぼっ

ちなのかと、胸が痛む思いです。ゴムマニアの女性は、もうおられないでしょうか。また、ゴム責めに下さる方、ゴム責めを願う方は、いないのでしょうか。まことに淋しい限りです。

衣被虐小説の「雨の昼下り」「女の城」などのような責めにあったり、奥さんを交えた色々なゴムプレイもできたらと願望する次第です。

弾六夫様。あなたがゴム責めにされたOLの方に、私のようなゴム衣マニアがいるということをも、伝えていただけたら幸いです。また、あなたの「ゴムの部屋」は、まだ完成しないのでしょうか。完成できましたらぜひ一度、私も呼んで下さいませんか。あなた様よりゴム衣責めの極意を私の身にしっかりと教え込んで下さい。

本舗、女子サイクル用コート、レインダッシュ。女子高、大学生用、及び婦人集金人等、雨の日に自転車を利用する時、前面より吹きつける雨を防ぎ快適な行動ができるよう考案された、軽くて丈夫なサイクル用ゴム引コートです。

また、通勤、通学等、普通のコートとしても御使用できます(素肌に着け、ゴムズボンをはき、太股まである農業用ゴム長をはき、完成ゴム装束姿で汗でベトベトになりながら、ゴム特有の匂いにつつまれて今日も一人で眠るのです。この時のゴムの感触は、ゴムマニアでなければわからない恍惚境の味わいです。早くゴムの匂いが染み込んだ身体になりたいたいと思っています。

御夫妻方から見れば、まだ子供のような私ですが、赤ん坊が一人ふえたかと思つて、ぜひお呼びかけ願えないでしょうか。

以前、掲載されたゴム

ゴム夫婦の呉無真仁夫妻、青木順一郎御夫妻の場合、どのようにお知り合いになり、ご一緒になられたのですか？

御夫妻方から見れば、まだ子供のような私ですが、赤ん坊が一人ふえたかと思つて、ぜひお呼びかけ願えないでしょうか。

以前、掲載されたゴム

お教え願いませんか。

私は今までのゴムコート、合羽の他に、購入したばかりのゴム引コート(商品名、サヨランコート

『読者通信』 齊藤香根雄氏に答えて

「花麻尼会」結成要領

久 保 房 夫



奇譚クラブ三月号二七一頁記載の齊藤香根雄氏の御提案に、鼻マニヤの一員として賛成の意を表します。就いては、クラブ当局の御支援を得て、会組織を結成願いたく、クラブ担当者の絶大なる御幹旋をお願い致します。全国の鼻マニヤの方々、急いで会を作りましょう。次の案では、如何でしょうか。

会 則 (案)

一、本会は——会と称す。
一、会長は奇ク編集長とし、副

会長は会員の互選による。

一、入会希望の男女は奇ク編集長宛申込みクラブ誌上に氏名発表を以て正会員となる(尚七月号誌上に名前リストを記載し本会発足の宣誓を行う)

一、本会は会員相互の情報経験の連絡を高め、会員の情感の昂揚に努める。

一、他分野の会(夫々早急結成を望む)との連絡を緊密にとり、奇ク誌の主旨の強調徹底滲透をはかる。

一、全国を次の二地区に分けてブロック会を設ける。

東京新潟以東——東部会
静岡長野以西——西部会

一、東部会員は偶数月、西部会員は奇数月に、必ずクラブ当局へ投稿し、誌上発表により会員相互の啓発と本会の意義をクラブ誌愛好者への滲透に努める。

一、クラブ当局は会員に会員証を附与し、地区別或はグループ活動の際の相互理解に協力する。

尚、会名は「花麻尼会」としてはどうでしょうか。花は鼻で、こ



の活字をみると、もうゾクゾクします。麻は麻薬で、鼻マニヤの行動中は麻薬患者みたいになることから……。尼は、美しい妖尼の鼻責めは会員の夢であろうと、思いますので……。

会員として投稿の義務をもつという条項を厳守することは、是非お願い致します。誌上に鼻の記事がないとガッカリしますので、毎月鼻コーナーが作れるようにするためです。

鼻プレイが出来程の仲になることは、ポルノプレイ以上に、SとMの交錯がなければならず、心情素晴らしい境地があります。

鼻プレイは、すべてのSMプレイを可能にします。「鼻に始まり鼻に終る」と云うことは、鮎釣りのことわざと同じように吾々斯界マニヤの至言だと思ふのです。

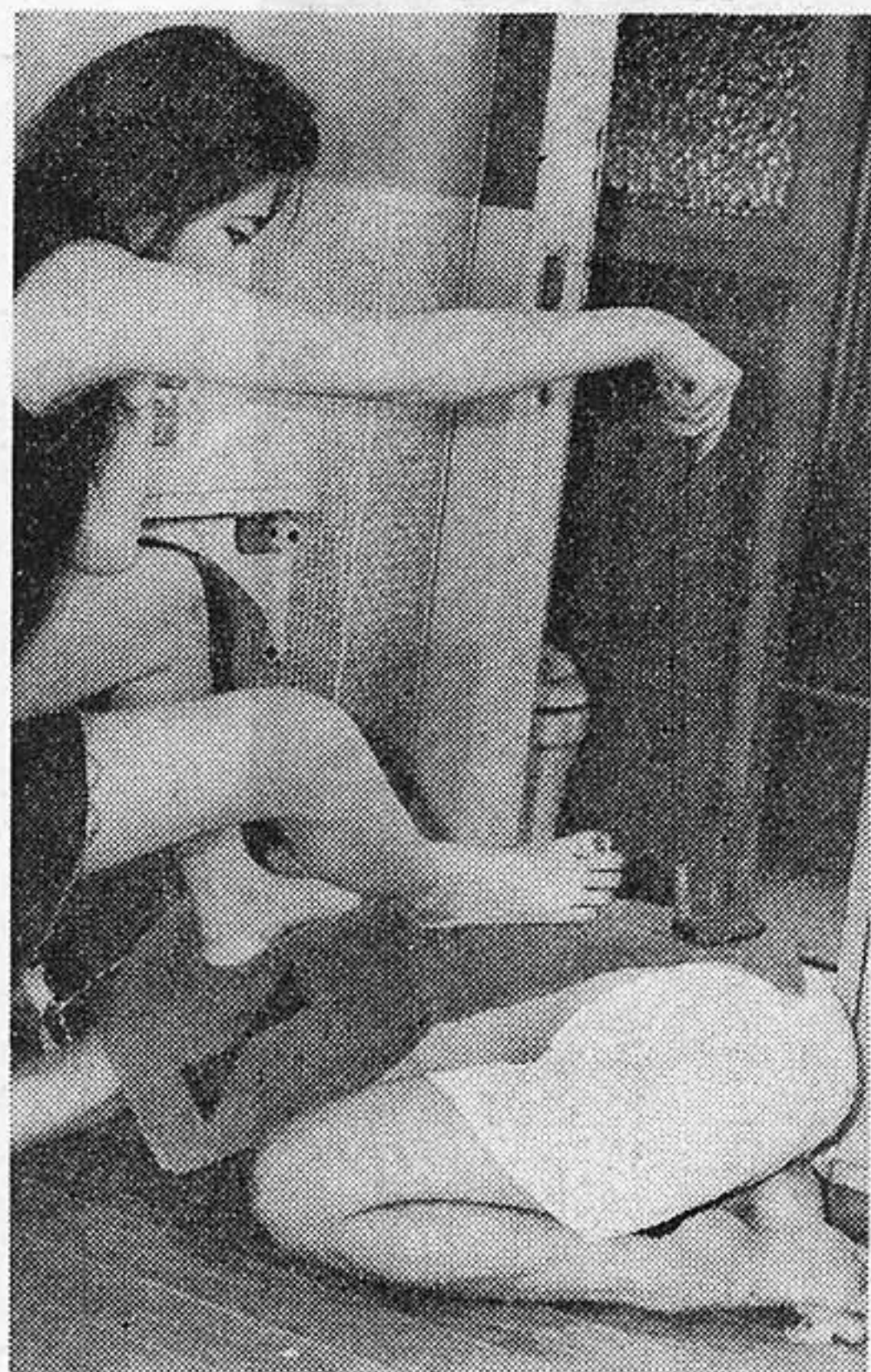
(東京・久保房夫)

告白 不思議な縄の魅力

下 村 セイヤ

私は今、七才上の子と暮しています。もう少しで二年になります。今年二十七才の私は、生涯の伴侶にするつもりは、ありません。しかし彼女は、もう夫婦のつもりらしいので、別れる時には、ひと騒動するか、私が蒸発するか、しかし、それはないと思っています。この彼女と私が同棲し始めたのは、因縁みたいなものとSMが

からんでいます。私が彼女のSに捕えられたといえるからです。現在、どちらかというと私が彼女を縛ってやる回数の方が多いくらいですが、当時は、必ず私が縛られて弄ばれていたのです。私が小学校の三、四年頃、近所に夫婦が病院勤めの歯医者さんで私と同級の子供と、その妹を、お手伝いさんに任せきりという家が



あり、私は毎日のようにその家へ遊びに行っていたものでした。

そのお手伝いさんの姉ちゃんは今十七か八だったと思いますが、私たちと一緒に遊んでくれるのはよいのですが、すぐに探偵ごっこだとか、スパイごっこだとかいって私たち二人を縛るのでした。一番、印象深いのは、スパイの取調べだといって後手に縛られた私が、そのお手伝いさんに押入れに連れこまれてズボンと脱がされて、さんざんへんなことをされて「おネエさんのオッパイはお母さんより大きい」ことを知って、妙な気持ちになった事です。

その一家とは私の家の引っ越しで交際は途絶えましたが、私が長じて会社の同僚と時々飲みに行くようになった頃、即ち二年余り前に、あるスナックで、しげしげと私の顔を眺める店の女が、いたのです。それが、あのお手伝いさんだったわけで、私には分かりませんでした。彼女が、十数年前の私の面影を見出したそうです。

二十五才のチョンガーは、熟れた素ハダも露わな夜の美女に、すり寄られてイチコロでした。ましてあの「押入れでのごと、覚えていて？」と頬すり寄せて囁かれて

は、だらしない話ですが、もうメロメロになってしまったのです。

そして、その後二時間も経たぬうちに、場末の安ホテルでいつの間にか狂おしい程に昂ぶりを覚える遠い思い出となった甘美な妖夢が、大人の男女の戯れとして再現していたのでした。

それは全く素晴らしいとしかいえないような一夜でした。

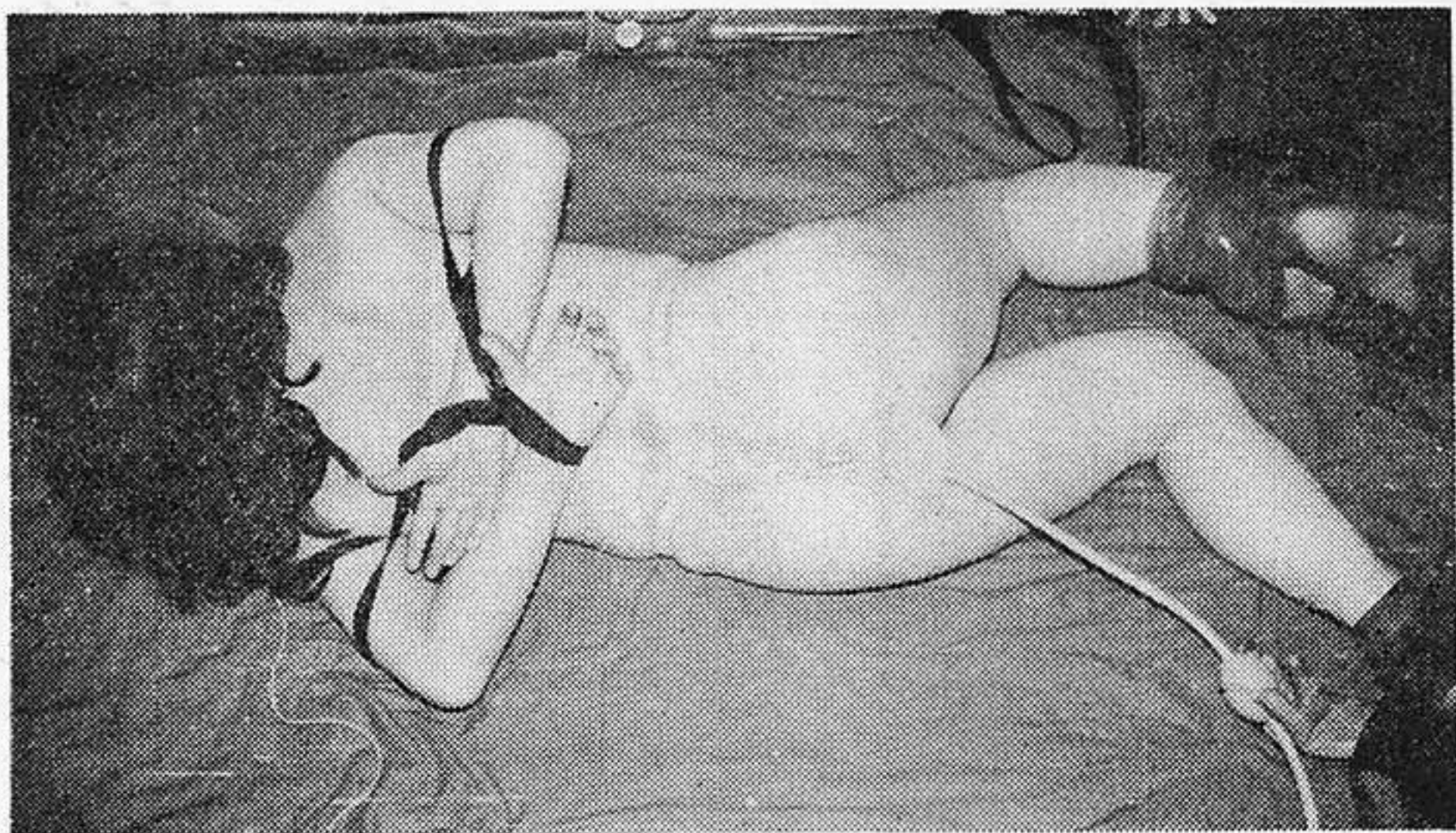
私も、それまで女と交渉が全くなかったという訳ではありませんでしたが、寝巻用の短い腰紐ながら、後手にキリッと縛られて受ける柔ハダの攻撃という、文字通りの、めくるめく狂宴に初めて陶酔するというものを知ったのです。

それから私は、彼女のアパートに通いつめました。毎夜々々、縛って弄んで貰うために……。

幸か不幸か、彼女が二度目の彼氏と別れた直後だったことが、私が誘いこまれる結果になったのですが、同棲を始めて一年も経たぬ内にマンネリとなり、縛られ専門だった私が、逆に彼女を縛ってやるようにもなりました。今では随性で同居している形ですが、それでもセックスには必ず、どちらかが縛られているのですから、縄の魅力は不思議だと思います。

百合子のアナル調教記

望月 百合子



奇譚クラブ、毎月、欠かさず楽しみに読んでおります。発行日が近づくにつれて私のむねが、さわぎ、今月の本には、どのような物が出てくるかたのしみに待っております。

実に彼と私のSMプレイは、奇譚クラブの内容によって、今月はこの縛り、この責めでプレイをしようと思ったてしまいます。ですから、発行日が待ちどおしくて、しかたがありません。

なぜ私がM女性になったかと言いますと、高校二年生の夏休みの夜、彼の下宿に遊びに行った時の事が、きっかけです。ウイスキーを飲まされてダウンしちゃって、彼のベッドで酔いをさましていると、いつのまにか眠ってしまったのです。

どのくらい時間がたったでしょう。異様なふんいきに気がつき目を開いて見ると何と着ていた物は全部ぬがされ、下半身に枕を当てられ、ベッドに大の字で、うつぶせて縛られているではありませんか。

私は、びっくりして彼に「いやめてよ」と言っているのに、いきなり私のアナルにコールドクリームを塗って彼の指でマッサージされました。

そのうち、彼の指が私のアナルに入ってきて、私はその時、初めて、こんな世界のあることを知ったのです。それ以来、一カ月に三、四回の割でアナルの調教が始まり、今でしたら、かなりの物まで、そう入可能になり、それにつれて、ますます彼とは別れられなくなりました。

高校を卒業して今は津市の会社に勤めておりますが、彼とのプレイは土曜日の午後、モーターで行なっています。いつも午後二時頃に彼は車で国道で待っていてくれます。その国道まで私の家から歩いて五分ぐらいで出ます。そこで待ち合わせてモーターへ行くのです。

私は四つんばいのかっこうにさ

れますが、あばれたらいけないといって手だけ縛られます。彼とのプレイの時は初めからパンティはかかないで行きます。アナルにワセリンを塗られ、彼のマッサージが初まります。もう私は何とも言えない気持です。

そうしておいて、今度は、アヌスバンドを改造したというバンドの輪の中に直径4センチ、長さ10センチぐらいの、ローで出来た栓を、はめこまれます。

そんな状況が20分ぐらい続きモーターに入ります。モーターに入るとアヌスバンドのために、下半身は、もうしっとりと、濡れています。もう外して、いいでしょうと、彼に甘えても、外してくれません。

今度は全裸にされ、両手を軽くねじまげるように、うしろに回され、ゴムロープで縛られます。浴室へつれて行かれ、浣腸される前になつて、やっとバンドが外されます。

そして、お尻を高々と持ち上げられた、かっこうで、手首と足首をロープで縛られます。まず、あの赤色をしたエネマシリンジで空気が浣腸をされます。ゴム球を五回十回、二十回、三十回。見る内に

私のおなかがゴム風船みたいに、パンパンになります。

それでもシュシュと空気が送られます。四十回で、もう、げんかいです。「もうダメ、やめて！」とお願いして、黒いしかが外され、今度はアナルに彼がコンドームを当てがい、おなかの空気、どのぐらい入ったかな、と見ては楽しんでおります。

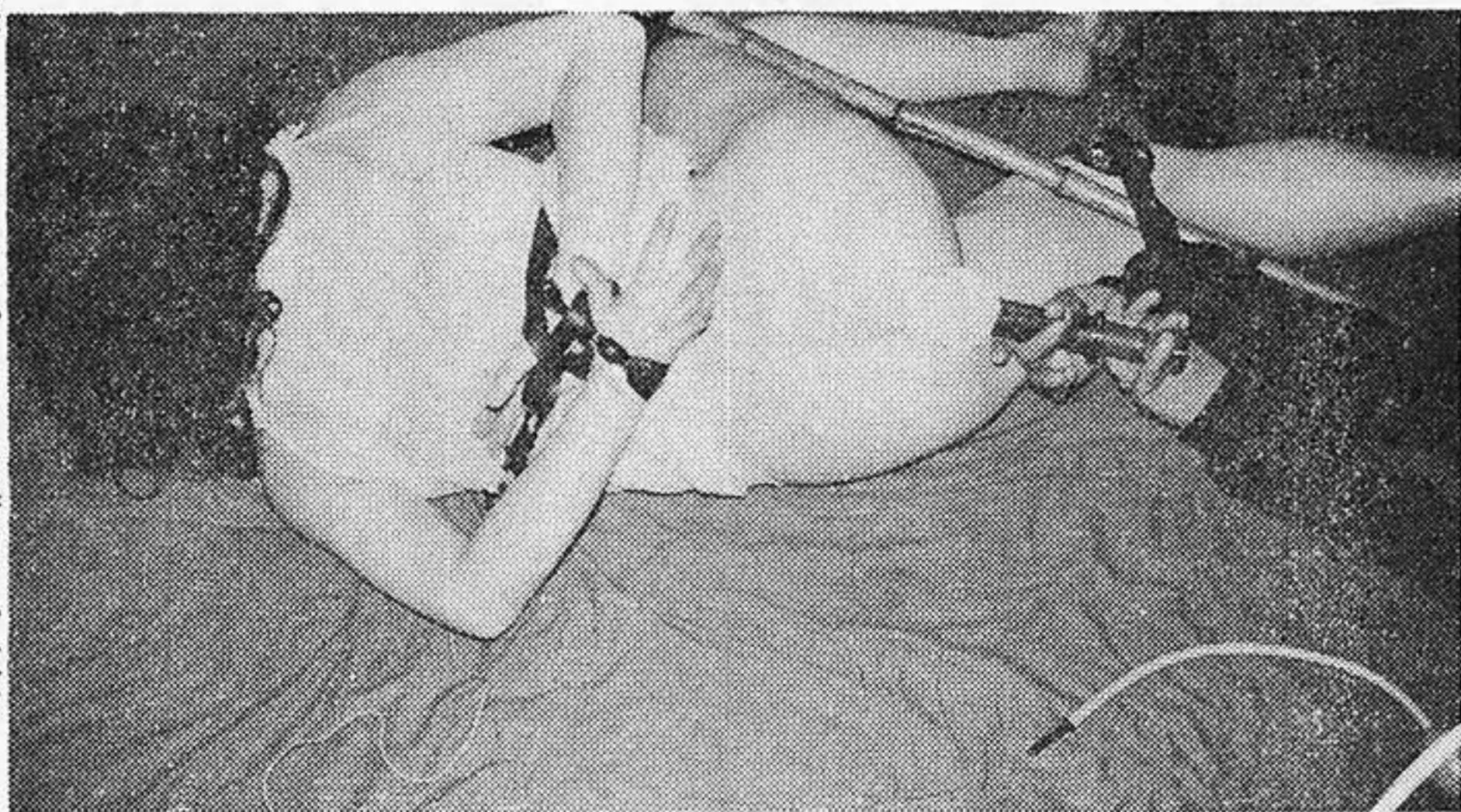
おなかの空気が出てしまいますといよいよ薬液による浣腸です。まず一〇〇CCの注射器型浣腸器が二本、用意されます。一本はサイダーを一〇〇CC、前にシリンドー部分まで、そう入され、残りは一〇〇CCをアナルにシリンドー部分まで、そう入され一気に注入されてしまいます。時間は十五分ですけど、7分ぐらいすると、もう、げんかにきます。

吐き気はするし、おなかは痛くなってくるし、やっとの事でおトイレを許されます。あとしまつをやっていたで再び浴室につれていかれ、私のおなかが、きれいになったかと言って、検査されます。彼は再びワセリンを塗り、今度はアナルにクスコ中型が、はめこまれます。アナルは浣腸の

ために開ききっていますのでクスコも楽に入ります。

そこで検査と調教が始まります。この間はこここのネジまで開いたんだから、今日は、このネジまでやって見ようと言って、彼はネジを、しめにかかります。カチカチと、そのたびに私のアナルは拡張されていきます。今日はここまで行っただかと、彼は鏡を持って来て私に見てみると言います。私も見て、びっくりしました。直径6センチぐらいまで開いております。今日は、これでよしと言ってクスコを外されます。

今度は部屋に來まして牛乳一五〇〇CC、グリセリン五〇〇CC、合計二〇〇〇CCのイルリガートル責めです。アナルに、黒のゴム管の先についている、しかが、そう入され、二〇〇、五〇〇、一〇〇〇CCと液は下がってきます。一〇〇〇CCを、すぎますと、おなかが痛くなって來ます。それをがまんすると、いつの間にか二〇〇〇CC全部、入ってしまいます。今度は車の中で使



なければなりません。それは非常に羞かしいのですが、私にとりまして、欲びなんです。

こういうプレイを一カ月に3回、行なっています。よろしければプレイの写真、参考にお使い下さい。まだまだ、たくさんありますので次回にでも送らしてもらいます。写真は彼が現像から焼付までやってくれます。

私でよければ奇譚クラブのモデルになってみたいと思っていますが、使ってもらえるでしょうか。彼も出てみたらと言っていますので、よろしくお願いします。

鈴木千鶴子様は、私の大好きな人の一人です。千鶴子様のアナルと、どちらがうか浣腸写真、送ってもらえないでしょうか。

それから、10月号で使用されていた二〇〇CCの浣腸器プレゼントしていただけないかしら。今度は、二〇〇CCのシリンドーに挑戦してみようと思っておりますので、お願いできませんか。

にアンネナプキンを巻いて、再び栓をさせられますと、十五分もたつと、額から汗が、にじみ出て來ます。

いよいよ、彼の目の前で排泄し

「公開私信」

SMライターと
しての塚本氏へ

宮本雅夫

塚本鉄三様——

毎号毎号、カメラルポ、楽しく
拝見させて頂いて居ります。

二月号のルポルタージュの文中
一五三頁の「責めの趣向で希望が
あれば、遠慮なく……」を読みま
して、早速ですが、私の希望を、
ここに書かせて戴きます。

私のこの希望は、必ずしも玉木
章子さんに限ってということでは
ありませんが、一・五インチから
二インチ前後の太い縄を使用して
戴きたいという事です。

細い縄で縛った時の緊縛感も素
晴しいもので、私も好きですが、
太い縄での一重か、二重の縛りも
痛々しさのない、ムードだけとい
う意味で良いのではないかと思ひ
ます。

太目の自転車のチューブ（空気
を充填したもの）を使用すれば女
体に与える苦痛も少なく、細い縄
では不可能な、例えば片足吊りな

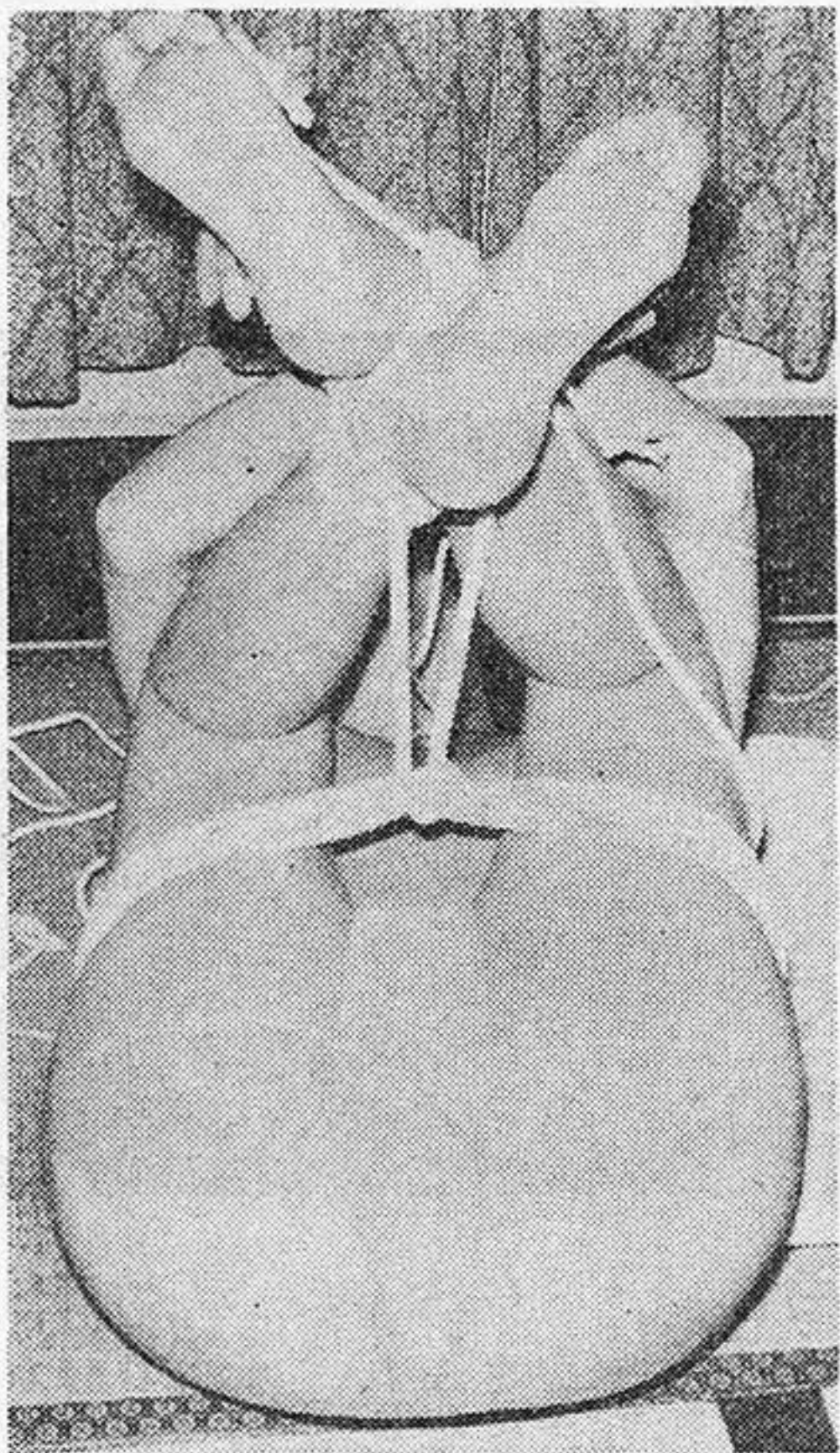
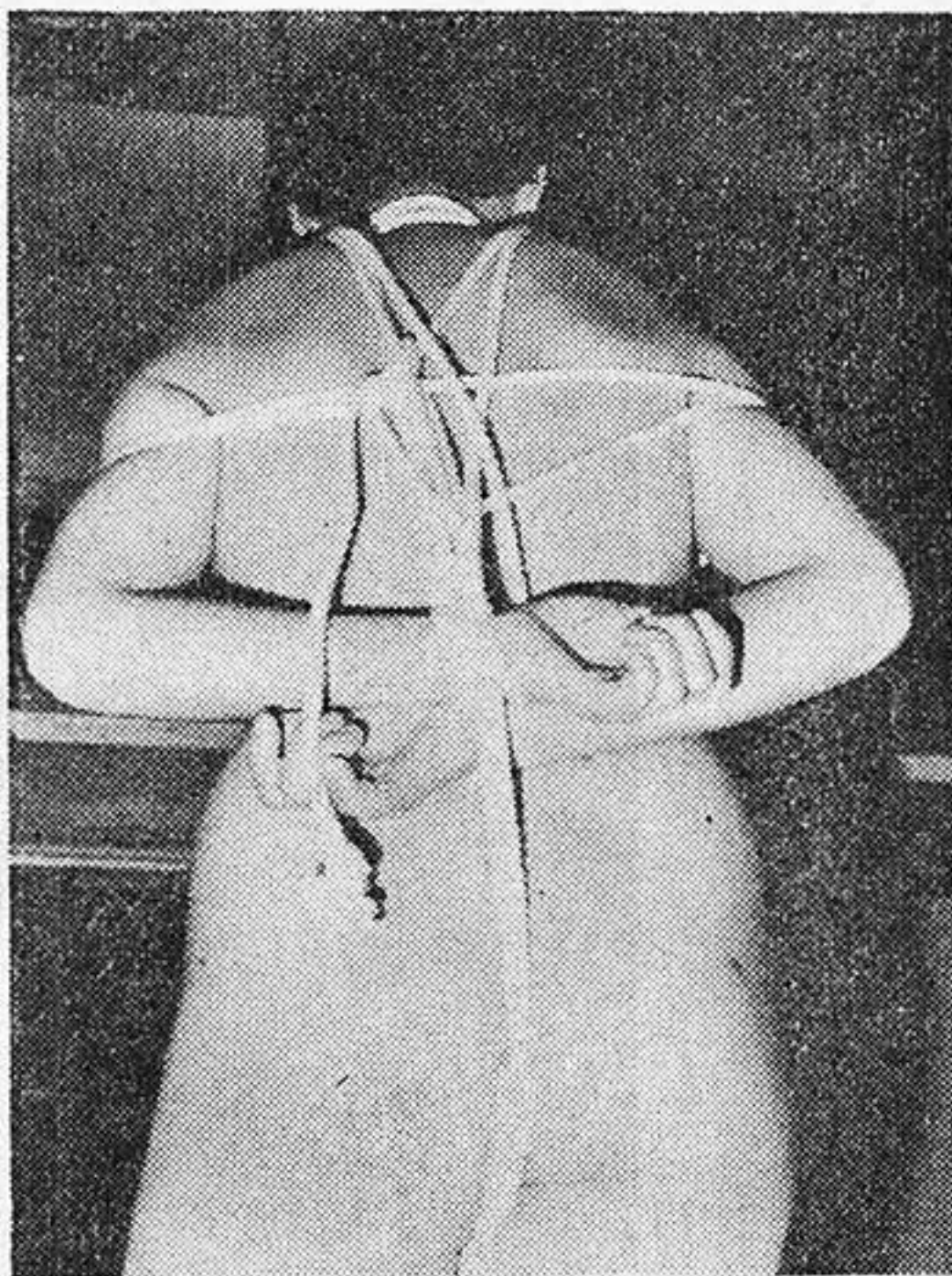
SM夫婦プレイのことなど

歯がゆい思い

田尻長州

鳥取の松井寛様、大牟田の野村
忠様、お元気で、お過ごしでしょ
うか。昨今、神

戸の井上浩様の
「奇ク」誌上で
の、ご活躍を拝
見するにつけ、
当時、私に対し
て、お呼びかけ
下さいましたこ
とを懐かしく思
い出しております。
長年に亘って
「奇ク」を愛読
して、大切に保



と考えて、保管場所に困った末に
最近、一部を除いて二年位前まで
の分を、全部、整理致しました。
整理してしまってから三月号で沢
田路夫様の告白「見せたい妻の寝
乱れ姿」を拝見した訳でしたが、
沢田様は、気に入った記事のみを
集めて数カ月分を一冊に製本、し
直しておられるとのこと、
「しまった！」と思い、残念無念シャ
クのタネ、の気持でした。
整理の段階で、もちろんスクラ
ップ・ブックは使用していましたが
が製本とまでは気がつかず、早速
未整理の三年分位をバラして真似
をしようとしたのですが、あれも
これもと欲が出て随分、部厚いも
のになってしまひ
ました。しかし私
の貴重品となった
この数冊を前にし
て、沢田様に感謝
すること、しきり
です。

その沢田様が、
SMに関心のない
奥様の故に淋しい
思いをなさってお
られるとの事。私
などが申すのは誠
に口はばったいの

ど、かなり大胆なポーズのものも行なえるのではないのでしょうか。縄が太いために失われるであろう緊縛感をポーズで補って余りあると思います。私には縛りの経験や知識はありませんので、一人よがりの勝手な希望や意見である事は言うまでもありません。噴飯的であるとお考えでしたら、どうかお聞き捨て下さい。

次に、もう一つ。これはお願いですが、鈴木千鶴子さんの、その後の様子を、お知らせ願えませんでしょうか。カメラロボの文章の終わりの方でも、お報らせ戴ければ幸いです。

私は鈴木千鶴子さんが大好きです。美貌でもあるし、御本人が言っておられるように、プロポーションも抜群の、SMファンだったら、誰でも好きになる女性です。私以外にも、他の読者の方々や特に千鶴子ファンの方々でしたらきっと私と同じ希望を抱くだろうと思います。

乱文乱筆での失礼、御容赦願います。単な私信に匿名で書き失礼しました。誌上に御掲載戴ければ又の機会に、お手紙、出したく思っておりますので、宜敷く。

(千葉県習志野市・宮本雅夫)

ですが、もし現像処理を、ご自分でなされるようなら、まず「ホー

ムポルノ写真」を、ご夫婦でお楽しみになつては……と思います。

目で見える楽しさ、体で感じる楽しさがSMプレイに移行する、きっかけを生むのではないかと考えます。もし私で、およろしければ、撮影など協力させて頂き

何かしら淋しい気持ち致します。最近の同好の方たちが発表されるプレイフォートの素晴らしさも、辻村様のカメラハントの影響によるのではないかと考えています。もっとも、私は私なりに羞恥心溢れた写真を……と思って努力しているつもりですが、どうしても顔の表情をとり入れてしまう関係で発表することが、ためらわれるのですが、これが何より私を満足させてくれるのです。



辻村隆様。「SMカメラ・ハント」、「サロン楽我記」を終わられたとのこと長い長い間、ほんとうに、ご苦労様でした。今後は気楽な、ご活躍だそうです。

「夫婦交換プレイ」を提唱される方の多いのを見るにつけ、奇クが堅持しておられる「読者間の手紙転送をしない方針」がうらめしくむつかしい問題を含んでいるから……と分かりながらも、実に歯がゆい思いです。

——悦虐のうた——

『縛られて』

——北川まりこ——

縛られて鞭もて追わる奴隷妻

真冬の庭に一糸纏わず

縛られて引き廻される奴隷妻

素足に沁みる霜の冷たさ

縛られて霜の地面にひざまずき
奴隷を誓う声も震えて

縛られて主人の靴に口づけて
素肌に賜う鞭打ちを待つ

縛られて鞭打ちを受けて足蹴され
マゾの炎に雪も解けゆく

縛られて開股の姿強いられて

酒の肴の屈辱の芸

縛られて剃毛されて佇めり
童女の姿を鑑賞されて

縛られて徹夜で受けし翻弄の
マゾに悶えるわが性かなし

縛られて冷たき床に転がされ
被虐の余情独りかみしむ

絹川文代の白い足の下に

中野靖二



私は、絹川文代って名前
は、江戸川乱歩が命名した
ものだ、勝手に思い込ん
でいる。

☆

少女時代のアルバムも見
たいものです。
絹川文代の魅力の中で、
特に眼が気に入ってしま
うがない。

☆

私は、彼女の声には、絶
対に期待してはならぬと、
感じ始めている。

☆

絹川文代の脚の美しさは
抜群で有名だが、そういう女性
はガバガバだなんて、私は絶対、信
じない。

☆

彼女の女性自身に、死ぬまでに
一度でも、私の熱烈なキスを捧げ
て、彼女を、なかせてみたい。
喝。

例によって、絹川文代のことに

ついて、私は述べます。

できません。

奇クを読むと、古いナという気

もしています。

彼女の下着は欲しいのだけど、

その前にソツと年を教えてよ。

☆

フォトをながめながら、彼女の
ことを書いています。

藤野陽子さんの「浣腸告白」に寄せて

上 条

直

奇ク三月号に掲載されました藤

深い感銘を受けました。

野陽子さんの浣腸告白「私にとっ

まことに滑らかな、そして気取

て素敵な浣腸」を読んで、非常に

りのない文章の行間に、藤野さん

の奥深く秘められた心情を汲み取

ることが出来、一語一語が私の胸
に強く喰い込んで参ります。

メモ用紙に他の薬品と共に「い

ちじく浣腸」と書いて薬屋さんに

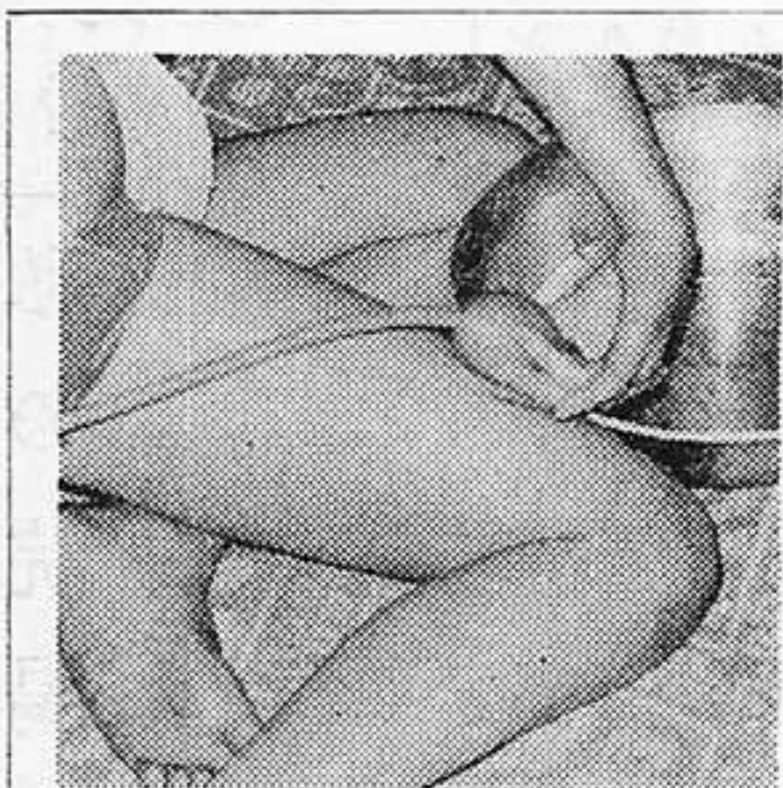
持って行く事は、私も中学時代に

編集部だより

○辻村隆氏が「カメラハント」と
違って、ハントの相手に制約され
ずに、のびのびと自由に書けるか
ら楽しいと言っておられる。『耽奇
房我楽多控』は今月号で第二回目
を迎えますが如何ですか。やはり
何と言っても緊縛写真の少ないこ
とは淋しい限りですが、次号あた
りには、何とか関連性のあるフォ
トを幾らか挿入出来るでしょう。

○その代りに、といつては叱られ
るかも知れませんが、塚本鉄三氏
の『カメラルポ』の方で、努めて
新しい緊縛女性を発掘して貰い、
華麗なフォトを盛沢山に提供して
頂きたいと思っています。

○それと関連して、必ずしも継続
的でなくてもよいのですが、八女
体緊縛探訪記Ⅴとか、『緊縛女性
撮影体験談』といった写真と文章
のレポーターの登場を大いに期待
しています。今まで志願された方
の殆どは、誌上の連作に耐えるほ
どの実力の持ち合わせがなかった
ようで残念でした。是非、これこ
そ、という取っておきの素材で誌
上に、その腕前のほどを問うて見



計画したことですし、「大人用ですか、子供用ですか」と問われ、とっさに「子供用」としか、答えられず、悲しかったことも、全くその通りです。藤野さんの場合のお母さんが、病院の看護婦さんとは変わっても浣腸を受ける際の心の動きは同様でした。

藤野さんの感じ方の中で私が特に強く共鳴しますのは、彼女の快感のメカニズムです。これは彼女の言葉をそのまま借れば「アーンヌスから、からだ中に拡がってくるような気」と「しぼるような下腹の痛さを感じた時、私は、なんとも言えない天国へ行ったような気持ちよさを味わう」に集約されています。さきの方はA感覚を、あとの方は腸管が薬液によって強く刺

戟され、激しく蠕動した時、最高の感覚を得て居られることを物語っています。

このことから、藤野さんは、男女の相違こそあれ、私と同様、腸に於ける快感の持主」と推察するのです。私は自分の体験から腸で感ずる人があることを信じ、腸のドイツ語ダラムの頭文字を取って勝手にD感覚と名付け、奇クに掲載して頂きました私の拙文にも記しました。

奇ク、或は他の雑誌に最近、浣腸の登場は、まことに多く、一つのブームともいえそうで、大人の玩具を売る店にも大たい五〇cc、一〇〇ccの浣腸器が並べられています。けれども、雑誌を繰って、浣腸の文字が目飛び込んで来ますと、期待をこめて急いで読んでしまう私ですが、失望するところが殆どです。取り上げられた浣腸は十中八九、SM、又はA感覚の手段としてのものだからです。責めとA感覚の組み合わせとしての浣腸も大いに意義のあることですが、私が求めておられますのはD感覚とA感覚を組み合わせた浣腸なのです。その意味で、藤野さんの存在を、この上なく心強く感じ、彼女こそ浣腸そのものの愛好

者、真の浣腸マニアと、確信します。

腸での感覚の正体は何なのか、独り頭をひねっておりますが、まだまだ雲を掴むようなものです。性器に近い場所に位置しているもので、腸の運動がそちらの方に伝わるのではないか。その場合、その辺りの構造に微妙な個性の差があり、敏感に伝わる人もいるというのが、以前に申し述べました考え方です。

今一つは、人類進化の過程で、未だ人間とも言えない下等な頃、消化器と生殖器が、はっきり分化していない、ある段階で、腸で快感を覚えた時代があり、それが僅かながら奥深く秘められて今日に至り、ある人の健康状態、環境、遺伝的素質等が、たまたま一致して、ある条件を作り出した時、再び開花するのではないかという考え方です。

まことに突飛な推理で恐縮ですが、目下、私はD感覚の理論づけと応用、それに、切腹と浣腸の組み合わせも頭に画いております。藤野さんの更に詳しい御意見、その他、浣腸愛好の方々の御体験をお考えを、奇ク誌上で拝見することを切望して居ります。

て下さい。読者の眼が正直に判断して呉れることでしよう。

○△告白、手記、体験Vの原稿が今ほど高く要望されている時期はありません。長篇のフィクションを書かれるよりも、短くてもよいですから、是非、身近な告白とか体験、それに感想などをお書き下さい。これは、と思うものは絶対に見逃がさないように熱心に拝見していますから、どうか、どしどし力作をお寄せ下さい。

○本誌の女性読者の方で通信を寄せられ、中にはモデルになつてみたいという積極的な方々も多いのに、意を強くしております。距離的に遠方だったりして、急に御希望に、そえなかつたりしたこともありましたが、出来るだけ沢山の方々の麗姿で誌上を飾って頂きたいと思しますので、遠近に拘らずお便りを、お寄せ願います。

○夫婦プレイをお楽しみの方も、お差し支えなければ取材させて頂ければ幸いです。長谷田亀治氏製作にかかる「夫婦プレイ」の8ミリを一夕、拝見しましたが、誠に見事な作品で、発色もよく、迫力溢れる素晴らしい記録でした。飼育もここまでくれば完璧だという感を深くしたものでした。

「私の浣腸結婚観」

——浣腸こそ現代の愛の昇華だ——

竹 迫 誠 也

小生は女でいえば結婚適令らしく、両親や会社の上役達が、しきりに結婚をすすめる。しかし小生は、かねてから心に決めている結婚観が満たされない限り結婚しないつもりだ。いや、結婚観を満たさずすれば、今日スグに結婚してもいいと思っている。

それは小生が、かねがね主張して来た浣腸生活が出来ることが小生の結婚観である。たしかに五体満足（身長一八一センチ、体重六六キロ）容ぼうも人並み以上（と自負している）仕事もバリバリやっているつもりで、ハタから見ると小生が結婚しないのが不思議のようだ。しかし、「小生の妻は浣腸生活が出来ると」とは、まさか言えないし、ただ「中々よい人がいなくてね」と、ごまかしているのが関の山である。

たしかに、今日まで数人の女性とは関係して来た。しかし、セックスの最中に、それとなく人差指で、その女性のアヌスに挨拶すると殆どが「そんな真似はイヤッ」

と拒まれるのがオチであった。なにかには色々口説いて、ようやく浣腸までもってゆけた女性もいたが結婚の対象ではなかったりで、妻と毎日、浣腸生活をとという小生の結婚観は中々実現する余地がなかったというのが、偽らない事実であった。

小生はセックスなんて、どうでもよく、二の次と考えている。結婚初夜は、なんとしても百CC硝子浣腸器で「それだけはイヤヨ、かんにんして、イヤッイヤッ」と、もだえ泣く新妻を帯で手足を縛り、うつぶせにして彼女の腰の下に枕を敷き、彼女の臀部が高く突き上げられ、アヌスが蛍光灯の下で露わになった中心部に、浣腸器を突き差し、いわゆる貫通式を終わりたい。

いわゆる前門についての大体の事は、婦人雑誌や友人等から見聞して、おおよその認識というか、覚悟は出来ているであろう彼女でも、まさか後門、即ちアヌスを貫通されるとは夢にだに考えず、し



イメージ画『無題』小川茂正

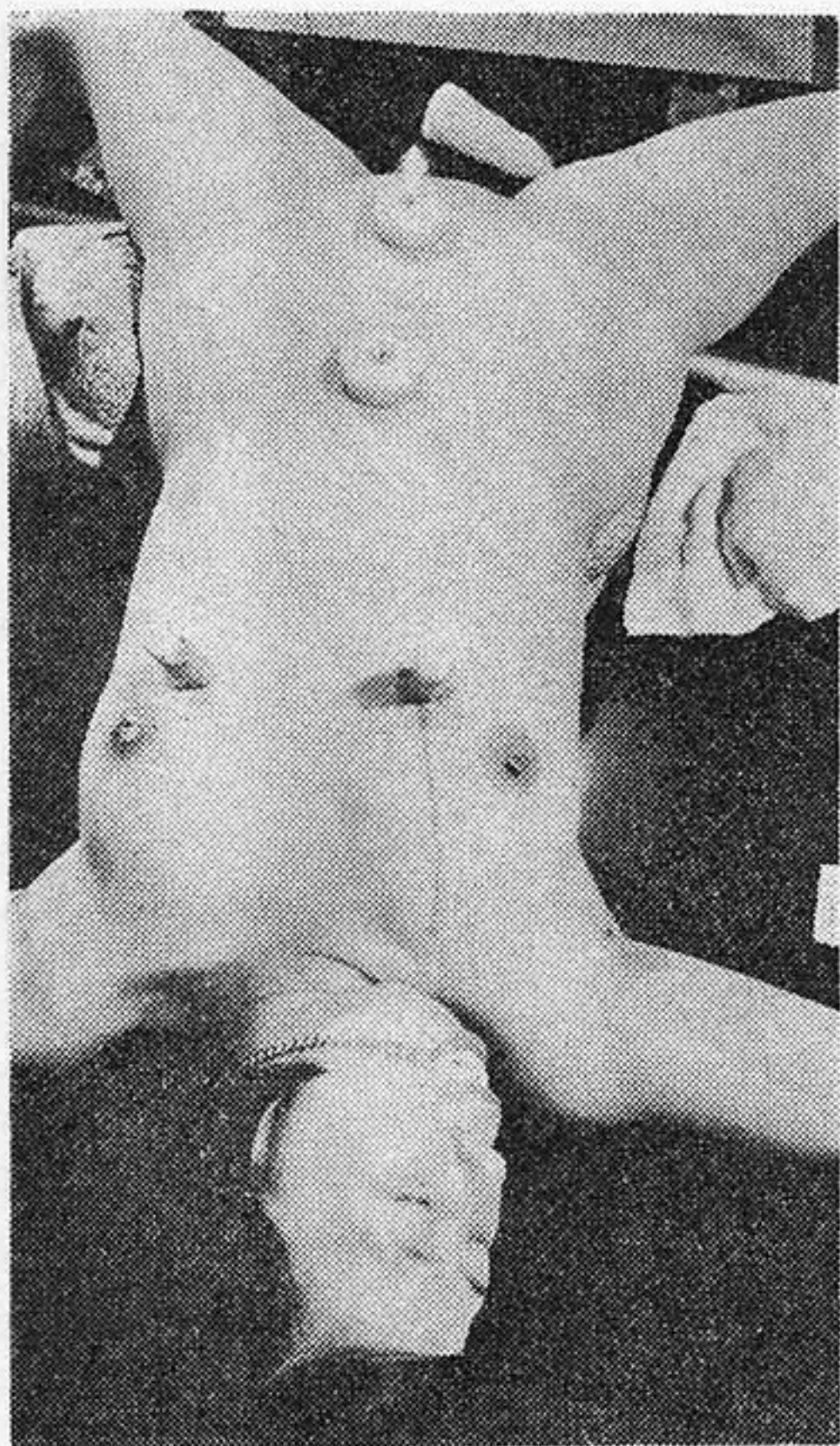
かもアヌスは母親にだって見せた事のない女にとって最大の羞恥の個所ゆえ、彼女の驚きというか恥かしさは、正に死にたい位の思いであろう。しかも、襲い来る排泄感にも、小生は冷たく見ているだけである。

「イヤッ、イヤッ、ヤメテ。アレ、ドウシヨウ。ネエお願い、トイレへ行かせて。アラッ、駄目だワ。もう、イヤッ……」と、美しい顔をゆがめて哀願する彼女だが、小生は「もう少し我慢するんだ。折角の結婚初夜ではないか。この大事な初夜を忘れ得ないため

にも、もっと我慢するんだ」と都合のよい言葉で冷たく、つき放すのである。

「ダッテ、ダッテ、ヒドイ、ヒドイワ。コンナコトをスルナンテ。アア、もうダメ。キライツ。アアドウシヨウ」と、彼女の腸内は百CCのグリセリンと大便が混ざりあって、あたかも踊り狂っているよう。キリキリと腸をしぼり込むような排泄感で彼女のひたいにはあぶら汗が、じっとり、にじみでている。

もはや、これが限界とみた小生は、持参のビニールを彼女の臀部



伊勢国男様へ 妻交換の申込み

佐野 正

の下に敷き、最後の断末魔を待つ「アーレ、モウ、モウ、ヒドイワドウシヨウ。アレ、モウ、ダメーッ」との悲鳴を最後に、彼女の菊薔が二、三度ヒクヒクと動いたかと思うと、グッと盛り上がり、ブチャッ、ブチャ、ブチャ、ビチッビチッとの排泄音と同時に、鮮かな茶色をした便がグリセリンとよく混ざって、アヌスから迸り出る。

これで小生の結婚初夜の第一回目は終わる。少なくとも初夜なので三回ぐらいは流腸をしたい。か

くして小生の流腸結婚生活は始まるわけだが、出勤前に流腸をして夜、再び流腸というのが、小生の結婚生活の、しきたりだ。なにしろ毎日二回、流腸するのだから、一カ月もたてば、彼女がヤセてくるのは当然だ。だから、小生の結婚相手は、少なくとも五十五キロ以上ないと、いかん。

当初はあれ程、いやがり、泣き別れるとまで叫んでいた彼女も、日がたつにつれ、だんだん流腸馴れして、嘴管を彼女に見せただけでも、アヌスがヒクヒクと数度、

息づくようになる。こうなれば、もうしめたもので、時がたつのを待てば、アヌスの快感を覚え、流腸が好きになり、はては、アヌスにこけしや鎌倉ハム、或いは、コーラ瓶を挿入することに欲びを感じ、いわゆるアヌス快感で、クライマックスを覚えるようになるだろう。

色々述べてきたが、小生が多年胸に抱いて来た結婚観は、以上のようなものだ。

この流腸結婚が果たせれば、小生は彼女を一層、しあわせにする

伊勢国男様。

私の妻みさ子をベストテンに入れているだけで、誠にありがとうございます。

もし貴方が東京にお住いでしたら、夫婦交換SMプレイをやりたいですね。ペンネームから考えて伊勢——関西の方のようにも思えるのですが……。

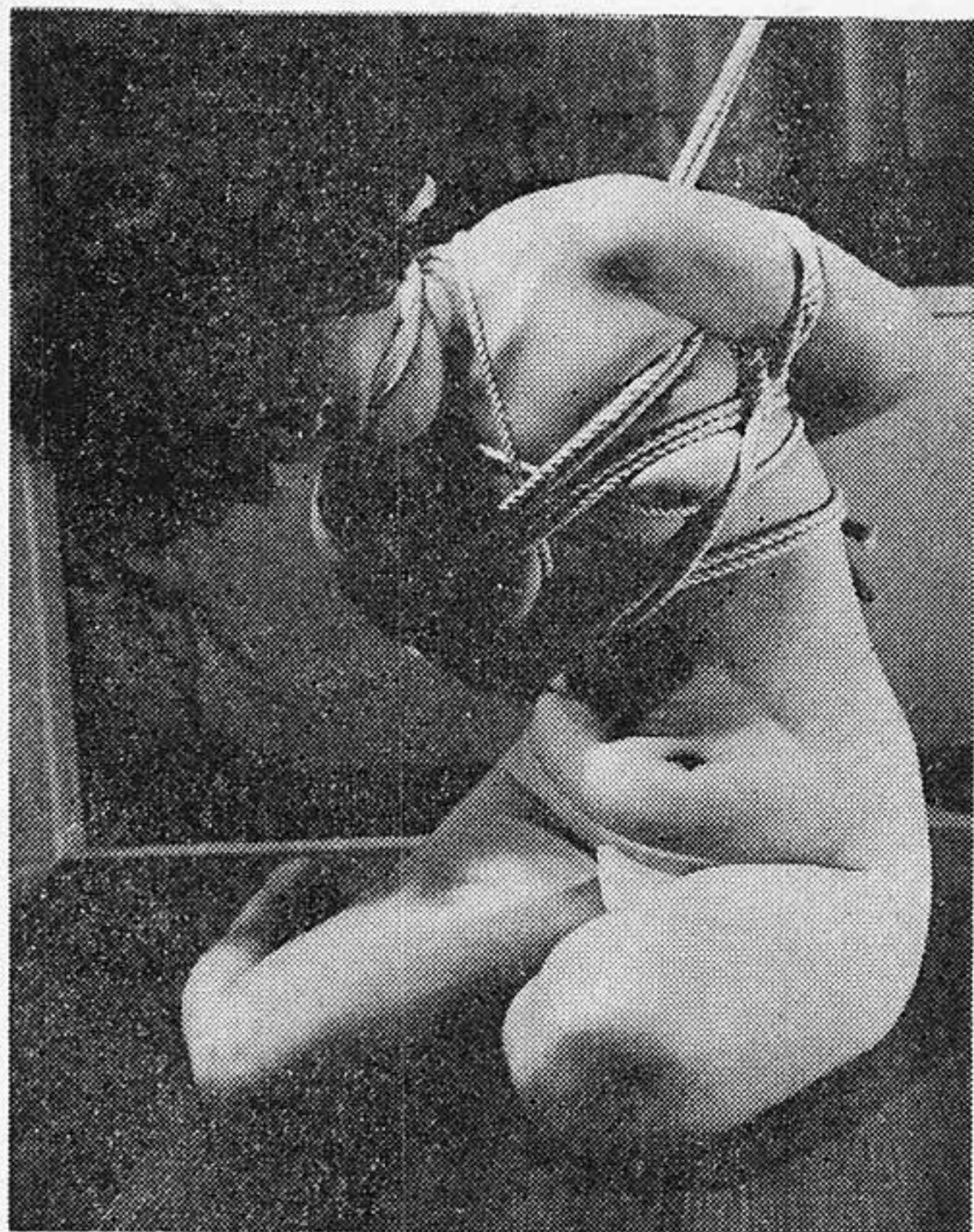
もし、妻の交換をやるとすれば手始めとして、第一回は交換セックスぐらいにしておいて、二回目から、少しずつSMの度を加えてだんだんと慣らせてゆくのが一番

自信がある。男女同志のセックスはアダムとイヴが勝手に求めたものであって、現代の吾々は、これを必ずしも踏襲する必要はない。むしろ自分に合った、自分にそむかない、ありのままの男女関係が存在してもよいハズ。それは流腸でも男女の愛が昇華し、しあわせになれば、流腸でもよいハズ。只、前門は子孫を増やすためのものと割り切り、夫婦の真の喜びをもたらすのが流腸であれば、この方がより合理的で、現代的ではなからうか。

永つづきするのでは、ないでしょうか。

伊勢さんの奥様は、お写真から見て、相当の美人のようですが、みさ子との交換をOKして下さいますか？ みさ子は美人ではありませんが、ボリニームは十分で、縛りには、もってこいの肉体をしております。

近ければ、お互いの家へ子供連れで遊びに行き（泊まりがけ）子供達が寝た時点で、お互いに妻を交換して、交代で風呂に入り、その夜は、たっぷりとスワッピングを楽しみたいものです。よい返事をお待ちしております。



西条紀代さんの魅力に思う

感想

小池 明 男

私が毎月、大いに期待しています「カメラとペンのルポルタージュ」の3月号と4月号に、新人の西条紀代さんが登場しました。

塚本鉄三氏の読みごたえのある流暢な文章と緊縛写真とで、私は胸をおどらせながら楽しく拝見致しました。

西条紀代という女性には世間一般に、どこにでもいる様な、ありふれた人ながら、3月号で誌上に始めて登場した時は、どことなく引き付けられる魅力を持った女性だと思いました。

それは、若さの魅力というのでしょうか。身体つきが稚さを感じ

ふんどし、腋毛

焼津市

鈴木ゆり子

e t c

この間、私、東南アジアを旅行して来ました。タイ国では本番をやらせるトルコ風呂が有名ですが私は、バンコックやチェンマイで女だてらにトルコ風呂を歴訪しました。こちらからだけ、むこうが見えるガラス張りの部屋に、セミヌードの女性が並んでいます。その中から指名して入場料を支払って、二人で個室に入り、その後の取り引きは、ねだんも含めて、二人で相談するわけです。

私は、男の本番の場合と同じお金を払って、トルコ嬢にも全裸になってもらい、お互いに楽しみました。私には夫がありますが、これは不貞にならないと思うのがどうでしょう？

さて、タイ国の女性は、小柄ながらグラマーで、きめがこまかくそして、乳房からお尻まで美しいマホガニ色です。精いっぱい陽に灼いた私の肌と、よく似た色なのです。味は、やや酢っぱく、色黒女に共通した匂いがあり、同性ながらすっきり惚れ込みました。

ちなみにタイ国には「二色の美女」ということばがあります。真

っ白でも真っ黒でもない色が、美女の条件になっているのです。

私がふんどしを外しますと、灼き残ったふんどしの跡がクッキリとあらわれ、白いふんどしを締めたようです。そこで、ひとわたりつたないタイ語をあやつって、キヤッキヤッと打ちとけることになりませんが、トルコ嬢の腰に、ふんどしを締めてやりまると、全裸が平気のトルコ嬢が腿をすばめ、身によじらせて恥ずかしがるのです。

英語で、「ツー・スキニー」(肌をあらわしすぎるわ)と、叫んだ子もいます。タイくんだりまで来て、ふんどしは、全裸を上まわる何物かだ、ということに改めて痛感しました。

さて、ところでタイ女性には、その限らない魅力に拘らず、ふたつの欠陥があります。ひとつは、腋毛ゼロということです。黒い肌のしわが、一見、腋毛のように見えますが、実はないのです。

もう一つは、腋臭ゼロということとです。人ごみを歩くと、猫耳臭が鼻につきますが、腋臭、裾臭、共に、まったくないのです。



させるためだということが、4月号のグラビアと塚本鉄三氏のルポの文章で、わかりました。

4月号誌上で、塚本氏が「紀代の、この乳房は、まだ誰にも、さわられたことはないのだね」と言う所と、「ピンク色の稚い乳首がライトに照らされて、その頂点が琥珀のように輝いているのが可愛い」という文を読んで、一層、その感を深くしました。

ぼくは乳房については、外人に多い、あの大きなダブダブしたものより、小さ目でも、キリッとし

まった乳房が大好きですので、前田真知子さんと、今度の西条紀代さんのような、如何にも初々しい乳房に魅力を感じます。

塚本氏も西条紀代さんの写真、たくさん写しておられるようですから、グラビア分譲写真で活躍して下さるよう、お願いします。

ぼくらとしては、誌上、或は映画紙焼付の緊縛写真によって、未知のM女性に触れることが出来るのですから、そうしたファンのためにも西条紀代さんのような新鮮な女性を登場させて下さい。

インドネシアも略々同様でした南方系の華僑の女性は、腋臭はあきませんが、腋毛は私たち日本人なみです。フィリピンも、そのようでした。けれども、華僑の肌は黄色く、フィリピン女性の肌はドス黄色いのが多く、この点、タイ女性に、かないません。

マレーシアの女には、インド人の血が混じった人が多いのか、深呼吸してクリトリスがムズムズするような腋臭の持ち主がいます。タイ女性のつや、明けっぴろげな人間性、華僑の腋毛、マレー人の腋臭、それに、やまとなでこのふんどし美、これが揃ったら、言う事はないと思います。

そんな基準に照らして、ポルノ映画等を鑑賞してみましよう。まずふんどし女から。アオイ・プロダクション「密室の艶技」。三角ふんどしを締めたトルコ嬢がふんだんに出て来ました。主演杉村久美。こんなトルコ風呂が本当にあれば、無給で良いから勤めたいと思います。このふんどしは横紐がゴム入りテープで「ティコ」という商品と似ていました。「ティコ」は、一九七一年ごろ、新宿の小田急デパートなどで、男女兼用の下着として売っていたので、

赤、白、買いためておき、東南アジアでも、腰からはずして、プレゼントするのに使いました。少しむれるところが難ですが、チャームングな女の、むれた匂いは、同性ながらウットリするものです。

日活「弁天御開帳」新人女優、潤まり子がピンクの越中ふんどし一本の姿で、大の字に縛られて、くすぐり責めに合います。良いテーマなのに、肌が白く、腋毛もなく、しかも、ゆるふんで、監督のセンスを疑いました。

東映「エロ將軍と21人の愛妻」鼠の頭がついた、ふんどし女が出るのですが、やっぱり、ゆるふんなんです。杉本美樹の黒い背は、息をのむほどの思いでした。

田中真理は「戦国ロック、疾風の女たち」では、房々とした腋毛を誇っていました。が、「女子大生セックス方程式」では、剃ってしまっていたようです。

みごとだったのは「奪われた夜」の宮下順子、「花吹雪おんな事始め」の名倉美里の腋毛でした。

とんでもないと思われたSMがいつの間にか市民権を、かち取ってしまいました。ふんどし、腋毛、腋臭、裾臭、黒肌（もちろん女性の）党、がんばりましょう。

☆四十八年新版SM蒐集品資料写真☆

本誌のカメララルポに登場した数々の魅惑のマジック女性たちが、その奔放なSMに喘ぐ姿態をマニアの方々の手で開陳して、その目を楽しませて参りました。今回更に、その強い要望にこたえて、この華麗で若々しいアブ肢体を捧げて御機嫌を伺うことにしました。

イルリガートル責め

大手札三枚一組 五〇〇円
前田真知子 略号八たふ
一〇〇〇Cのイルリの微温湯が白い嘴管を通じて、どくどくと美女のアヌスへ注ぎ込まれる。

変った浣腸の姿態

大手札三枚一組 五〇〇円
前田真知子 略号八たほ
二〇〇C硝子製浣腸器とエネマシリンジ、イルリの三種の浣腸器でそれぞれ変った姿態の浣腸

漏斗で温湯を注ぐ

大手札三枚一組 五〇〇円
前田真知子 略号八たて
お尻を高々と天に向けて差し込んだ漏斗に次々と温湯を注いで、お腹の中は今やポンポコポン。

二〇〇C圧入す

大手札三枚一組 五〇〇円
前田真知子 略号八たち
グリセリン溶液が二〇〇Cのポンプから一挙に圧入されて直腸にしみ渡る浣腸液の凄じい感触。

三種の神器活躍す

大手札三枚一組 五〇〇円
前田真知子 略号八たわ
浣腸の三種の神器、エネマとイルリとポンプ。中でも二〇〇C硝子製浣腸器が大活躍をする。

浣腸液充分に入る

大手札三枚一組 五〇〇円
前田真知子 略号八たゆ
今や浣腸液は思い切り直腸に入り襲いくる強烈な便意と戦いつつ全裸の肢体を余すことなく晒す。

責めの味に泣く女

大手札三枚一組 五〇〇円
玉木 章子 略号八れり
激しい責めを受けてじっと耐えながら、裸身に流れる電流のようなショックを噛みしめる。

憂愁の麗人を縛る

大手札三枚一組 五〇〇円
玉木 章子 略号八れお
責められて責められて、尚その良さに燃えあがる裸身のなかに、ベテラン女性の片鱗が見える。

激情に悶える全裸

大手札三枚一組 五〇〇円
玉木 章子 略号八れか
一糸まとわぬ裸身を晒して強烈な縛り地獄の中で、のたうちまわる此のひとときの激情は何にか。

エビ責めと足縛り

大手札三枚一組 五〇〇円
西条 紀代 略号八たひ
柔軟な肢体に加えられたエビ責めに若さに漲る肌は激しい反応を示して微妙に蠢動を続けてゆく。

手足縛りと後手吊

大手札三枚一組 五〇〇円
西条 紀代 略号八たえ
猪吊りの準備に手足を揃えて縛られると淫ましい臀部がきわだつて強調され淫らにさえ見える。

逆手になった手首

大手札三枚一組 五〇〇円
西条 紀代 略号八たよ
後手に縛り上げると両手首のよく上る娘の拳を逆手にして高々と吊った絶妙の高手小手後手縛り。

片足吊り羞恥責め

大手札三枚一組 五〇〇円
西条 紀代 略号八たつ
嫌嫌というのも構わず片足だけ頭上よりも高くあげてゆけば、あられもない姿が展開される。

逆エビ責めの苦悶

大手札三枚一組 五〇〇円
西条 紀代 略号八たと
若さと肢体の柔らかさを利用して情容赦なく逆エビに吊ってみれば流石の紀代も悲鳴を挙げた。

強烈な全裸の開股

大手札三枚一組 五〇〇円
西条 紀代 略号八たみ
強烈な全裸の開股

全裸に剥れた彼女は今や観念して諦めきつたように命ぜられるままに開股のポーズをとった。

蛇のような縛り女

大手札三枚一組 五〇〇円
西条 紀代 略号八たま
縛られながらも、うねうねと全裸の姿態を妖しくも淫らにくねらせて縄付きのまま悶えてゆく。

飼育されゆく裸女

大手札三枚一組 五〇〇円
西条 紀代 略号八たせ
股間縛りで引き回すと、次第に縄の快感にむせびながら、にじみ出るような媚態を展開するのだ。

マニア好みの緊縛

大手札三枚一組 五〇〇円
西条 紀代 略号八たも
縛りマニアこそ、こうした後手の高々と首筋近くまで上った縛り方の良さを心から知ってくれる。

菱縄に身を委ねる

大手札三枚一組 五〇〇円
西条 紀代 略号八ため
菱縄で裸身に喰い込む縄目の痛さに転々としてころげながら、やがてマゾの心境にひたってゆく。

◎送料はすべて当方にて負担いたします。故、御希望品の略号をお書きの上、前金にて、大阪市阿倍野局私書箱第14号、天星社へお申込み願います。

天然色(カラー) S M 資料

極彩色印画紙焼付プリント

柱縛り女体強烈ムチ打ち

カラー三枚一組一〇〇〇円
関谷富佐子 略号△みあ△
臀部に炸烈する激しいムチカラー三枚一組一〇〇〇円
関谷富佐子 略号△みこ△
ムチにのけぞる豊満女体カラー三枚一組一〇〇〇円
関谷富佐子 略号△みけ△
悦虐に悶える妖艶な女体カラー三枚一組一〇〇〇円
関谷富佐子 略号△みて△
鞭打ちに泣く美貌の女カラー三枚一組一〇〇〇円
関谷富佐子 略号△みも△
転り回って悦虐に泣く女カラー三枚一組一〇〇〇円
関谷富佐子 略号△みひ△
鞭に喘ぐ美女の全裸全身カラー三枚一組一〇〇〇円
関谷富佐子 略号△みの△
双胎の臨月蛙腹の写真カラー六枚一組二五〇〇円
増田みゆき 略号△れや△
双胎の臨月腹強烈縛りカラー六枚一組二五〇〇円
増田みゆき 略号△れゆ△
双胎の臨月太鼓腹の媚態カラー六枚一組二五〇〇円
増田みゆき 略号△れえ△
股間縛りの開股羞恥責めカラー三枚一組一〇〇〇円
中河 恵子 略号△れよ△
中河 恵子

股間縛りに羞らうM女の生態

カラー三枚一組一〇〇〇円
中河 恵子 略号△れに△
黒縄縦縛りの羞恥媚態カラー三枚一組一〇〇〇円
中河 恵子 略号△れぬ△
立縛りにあう全裸の女体カラー三枚一組一〇〇〇円
木村 洋子 略号△れね△
開股された股間縛りカラー三枚一組一〇〇〇円
木村 洋子 略号△れの△
豆絞りの猿轡で強烈責めカラー三枚一組一〇〇〇円
木村 洋子 略号△れむ△
独りで遊ぶ浣腸プレイカラー三枚一組一〇〇〇円
大塚 啓子 略号△るむ△
美少女に淫らな開股縛りカラー三枚一組一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るの△
責めぬかれた美少女の諦観カラー三枚一組一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るお△
高手小手後手縛りの裸女カラー三枚一組一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るや△
真紅の腰巻姿での緊縛姿態カラー三枚一組一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るま△
羞らしいの裸女正面縛りカラー三枚一組一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るけ△
若肌に喰い込む無惨な縄カラー三枚一組一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るふ△
一宮百合子

美しき緊縛の裸女立姿

カラー三枚一組一〇〇〇円
左近麻里子 略号△なひ△
転落寸前の緊縛された裸女カラー三枚一組一〇〇〇円
左近麻里子 略号△なも△
羞恥の椅子責にあう裸女カラー三枚一組一〇〇〇円
左近麻里子 略号△なす△
緊縛の裸身を長々と横たえるカラー三枚一組一〇〇〇円
左近麻里子 略号△なえ△
女相撲迫力投業の連続動作カラー三枚一組一〇〇〇円
大塚・東浦 略号△なる△
高手小手の全裸の美しき肢体カラー三枚一組一〇〇〇円
中河 恵子 略号△なゆ△
豆絞りの猿轡での全裸緊縛カラー三枚一組一〇〇〇円
中河 恵子 略号△なめ△
赤い絨氈に悶える緊縛裸女カラー三枚一組一〇〇〇円
中河 恵子 略号△なさ△
豊満な臀部を晒して悶えるカラー三枚一組一〇〇〇円
中河 恵子 略号△なし△
真赤な腰巻姿での緊縛カラー四枚一組一二〇〇円
大塚 啓子 略号△うこ△
真赤な腰巻着用フェチ写真カラー二枚一組八〇〇円
大塚 啓子 略号△うお△
悶える二女の緊縛色模様カラー二枚一組八〇〇円
大塚・東浦 略号△うて△
大塚・東浦

柱宙縛りにあえく裸女

カラー三枚一組一〇〇〇円
山原 清子 略号△やか△
高手小手縛りに悶える全裸カラー三枚一組一〇〇〇円
山原 清子 略号△やき△
緊縛に喘ぐ刺青の美女カラー三枚一組一〇〇〇円
山原 清子 略号△やく△
脱された着物の中で悶える女カラー三枚一組一〇〇〇円
山原 清子 略号△やも△
縄にのたうつ全裸の妖女カラー三枚一組一〇〇〇円
山原 清子 略号△やし△
腰巻一つで縛られる刺青女カラー三枚一組一〇〇〇円
山原 清子 略号△やみ△
ポリウムの女体を縛るカラー三枚一組一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△てん△
猿ぐつわに呻く強烈縛りカラー三枚一組一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△てめ△
後手高手小手縛りの裸像カラー三枚一組一〇〇〇円
大塚 啓子 略号△てま△
豊麗な裸身に縄目がむこいカラー四枚一組一二〇〇円
大塚 啓子 略号△てこ△
全裸後手柱縛りの構図カラー四枚一組一二〇〇円
大塚 啓子 略号△てか△
刑罰足枷開股縛りの責めカラー三枚一組一〇〇〇円
愛知 葉子 略号△ゆな△
愛知 葉子

Mフォト決定版と画集

思わずMファンをワクワクさせる迫力溢れたマゾの素晴らしい写真と絵とを特集しました。お申込み次第即刻焼付けてお送りします。

二人の女の餌食になる男

大手札36枚一組 六〇〇〇円
山原清子外 略号△はや▽

M男が屈伏するまで

大手札12枚一組 三〇〇〇円
山原清子外 略号△ふそ▽

女の臀の下に呻吟する男

大手札12枚一組 三〇〇〇円
山原清子外 略号△ふれ▽

二人の女になぶられる男

大手札12枚一組 三〇〇〇円
山原清子外 略号△ふた▽

二女の股責地獄に泣く男

大手札12枚一組 三〇〇〇円
山原清子外 略号△ふぬ▽

逆エビとムチ打ちで責める女

大手札12枚一組 三〇〇〇円
山原清子外 略号△ふち▽

鞭の強打で男を責める女

大手札10枚一組 二五〇〇円
山原清子外 略号△ふよ▽

口中の汚水処理器(唾吐き)

大手札9枚一組 二三〇〇円
山原清子外 略号△ふり▽

M男の顔を玩弄する美女

大手札8枚一組 二〇〇〇円
山原清子外 略号△ふわ▽

二人の女の馬になるM男

大手札7枚一組 一八〇〇円
山原清子外 略号△ふる▽

女の臀臭をかかされる男

大手札6枚一組 一六〇〇円
山原清子外 略号△ふお▽

男の口中に痰唾を吐く女

大手札6枚一組 一六〇〇円
山原清子外 略号△ふね▽

縛り人形を踏むサジスチン

大手札5枚一組 一四〇〇円
山原清子外 略号△ふつ▽

男の顔を踏みつけるS女

大手札3枚一組 一〇〇〇円
山原清子外 略号△ふな▽

股責め地獄に狂う女

大手札4枚一組 八〇〇〇円
大塚啓子 略号△まそ▽

牛男をのりこなす女

大手札10枚一組 二〇〇〇円
増田みゆき 略号△はま▽

夫を責める新妻

大手札10枚一組 二〇〇〇円
増田みゆき 略号△はや▽

肩車の下にうごめく男

大手札5枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号△らと▽

奴隷の誓いを契る男の生態

大手札5枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号△らき▽

ハイヒールの足下に呻く男

大手札5枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号△らろ▽

女に縛られるM青年

大手札5枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号△らに▽

M青年をいたぶる女王様

大手札5枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号△らへ▽

女が女に責められるまで

大手札10枚一組 二〇〇〇円
山原・鈴木 略号△さる▽

女が女を縛りあげる

大手札10枚一組 二〇〇〇円
山原・鈴木 略号△さあ▽

女が屈伏させられるまで

大手札20枚一組 三〇〇〇円
鈴木・山原 略号△さや▽

啓子をいじめ抜く清子

大手札8枚一組 一八〇〇円
山原・大塚 略号△うの▽

啓子を厳しく縛る清子

大手札8枚一組 一八〇〇円
山原・大塚 略号△うな▽

清子を責める華麗なブレイ

大手札8枚一組 一八〇〇円
大塚・山原 略号△うね▽

二女の馬にされるM青年

大手札8枚一組 一八〇〇円
清子・啓子 略号△うま▽

二女のなぶりものになる男

大手札3枚一組 八〇〇〇円
清子・啓子 略号△うろ▽

女を縛り上げて責める女

大手札12枚一組 二〇〇〇円
大塚・東浦 略号△えの▽

強烈くすぐり責め

大手札4枚一組 六〇〇〇円
大塚・東浦 略号△えぬ▽

くすぐり責め地獄の女

大手札3枚一組 五〇〇〇円
大塚・東浦 略号△えな▽

手吊り股間縛り責め

大手札5枚一組 七〇〇〇円
大塚・東浦 略号△えお▽

豊臀の下に喘ぐ(マゾ画)

大中判五枚一組 一五〇〇円
春川ナミオ 略号△こね▽

女体下敷力作M画決定版

大中判七枚一組 二〇〇〇円
春川ナミオ 略号△ぬけ▽

女学生のだん腸悦虐姿態

大中判二枚一組 六〇〇〇円
四馬孝画 略号△せか2▽

女体だん腸美の媚態

大中判三枚一組 一〇〇〇円
四馬孝画 略号△のゆ▽

全裸妊婦の媚態画集

大中判三枚一組 九〇〇〇円
四馬孝画 略号△にん3▽

強制だん腸に泣く責め図絵

大中判五枚一組 一五〇〇円
四馬孝画 略号△しき▽

緊縛女体のだん腸責め図絵

大中判五枚一組 一五〇〇円
四馬孝画 略号△しえ▽

凄絶妊婦の切腹図絵

大中判四枚一組 一二〇〇円
四馬孝画 略号△せつ4▽

女体だん腸と排泄画集

大中判五枚一組 一五〇〇円
四馬孝画 略号△えい▽

女体吊り責め特集画録

大中判五枚一組 一五〇〇円
四馬孝画 略号△えほ▽

女性の鼻責めと美貌汚辱

大中判五枚一組 一五〇〇円
四馬孝画 略号△えは▽

女体だん腸嗜虐場面図絵

大中判八枚一組 二〇〇〇円
四馬孝画 略号△かき8▽

【秘蔵版SM資料一覧表】

従前一時的に分譲中止しておりましたSM資料の中で特に好評だった左記の写真は特に御希望の方々に限り焼増し致します故、前金にて天星社宛お申込み願います。

レインコートの拘束

大手札四枚一組 略号△いろ▽
大塚 啓子

猪吊りの美女

大手札三枚一組 略号△いの▽
梨花悠紀子

色禪の開股縛り

大手札三枚一組 略号△いふ▽
長野 良子

椅子責めの果て

大手札三枚一組 略号△いす▽
大塚 啓子

マニヤの全裸緊縛フォト

大手札三枚一組 略号△いな▽
栗本 ミチ

日本髪全裸強烈縛り

大手札三枚一組 略号△いら▽
山原 清子

洋髪全裸強烈縛り

大手札三枚一組 略号△いこ▽
山原 清子

日本髪全裸股間縛り

大手札三枚一組 略号△いさ▽
山原 清子

可憐島田髷全裸縛り

大手札三枚一組 略号△いみ▽
山原 清子

メンスバンド責め

大手札五枚一組 略号△はん▽
東浦ひかる

ハリツケ

大手札三枚一組 略号△はみ▽
新宮 夫人

鼻責めのアップ

大手札三枚一組 略号△はす▽
大塚 啓子

メンスバンド足挙げ

大手札三枚一組 略号△はそ▽
東浦ひかる

鼻責め万華鏡

大手札八枚一組 略号△はた▽
鈴木 晃子

鼻いじめ三態

大手札三枚一組 略号△はね▽
山原 清子

浴後の剃玉子縛り

大手札三枚一組 略号△はゆ▽
中河 恵子

投げたす緊縛裸身

大手札四枚一組 略号△はよ▽
中河 恵子

待望の脚挙げ姿態

大手札四枚一組 略号△はて▽
中河 恵子

二ツ折女体エビ責め

大手札三枚一組 略号△はお▽
中河 恵子

開股縛りにて喜ぶ女

大手札四枚一組 略号△はわ▽
中河 恵子

全裸の女体立ち縛り

大手札三枚一組 略号△はふ▽
中河 恵子

診察を受ける妊婦

大手札四枚一組 略号△にし▽
田中美佐子

臨月腹開陳(座位)

大手札四枚一組 略号△にり▽
田中美佐子

臨月腹開陳(立位)

大手札三枚一組 略号△にす▽
田中美佐子

突き出した臨月腹

大手札三枚一組 略号△にい▽
田中美佐子

臨月の裸身像(座位)

大手札三枚一組 略号△にぬ▽
田中美佐子

柱縛りの妊産婦

大手札二枚一組 略号△にや▽
田中美佐子

臨月の妊婦緊縛

大手札三枚一組 略号△にち▽
田中美佐子

膨隆七カ月腹鑑賞

大手札五枚一組 略号△にひ▽
増田みゆき

縛られた妊婦の裸身

大手札二枚一組 略号△にる▽
田中美佐子

九カ月の妊娠腹

大手札三枚一組 略号△にん▽
安原さゆり

八カ月の妊娠腹

大手札三枚一組 略号△にへ▽
安原さゆり

乳房強調妊婦菱縄縛り

大手札四枚一組 略号△にめ▽
増田みゆき

双胎八カ月腹大寫し

大手札四枚一組 略号△ほり▽
増田みゆき

双胎妊娠線の出た蛙腹

大手札四枚一組 略号△ほぬ▽
増田みゆき

後手縛りの双胎妊婦

大手札四枚一組 略号△ほか▽
増田みゆき

八カ月の双胎の猿轡と緊縛

大手札四枚一組 略号△ほよ▽
増田みゆき

股間縛りに喘ぐ妊婦

大手札四枚一組 略号△ほつ▽
増田みゆき

初産双胎妊婦開股縛り

大手札四枚一組 略号△ほえ▽
増田みゆき

双胎妊娠腹の凄愴切腹

大手札四枚一組 略号△ほら▽
増田みゆき

八カ月の双胎革具責め

大手札四枚一組 略号△へね▽
増田みゆき

九カ月の双胎首枷責め

大手札四枚一組 略号△への▽
増田みゆき

逆さ吊りの正面と背面

大手札二枚一組 略号△つる▽
増田みゆき

手と足の宙吊り

大手札三枚一組 略号△つた▽
梨花悠紀子

弓吊り責め

大手札二枚一組 略号△つき▽
梨花悠紀子

パイプ責めに呻めく女

大手札三枚一組 五〇〇円
松本 たえ 略号△きわV

両足挙げ柱宙縛り

大手札三枚一組 五〇〇円
松本 たえ 略号△きろV

強烈黒縄縛り悦虐地獄

大手札三枚一組 五〇〇円
松本 たえ 略号△きるV

羞恥責めに陶醉する女

大手札三枚一組 五〇〇円
松本 たえ 略号△きはV

猿轡と縄に涕泣する瞬間

大手札三枚一組 五〇〇円
松本 たえ 略号△きへV

柱宙縛りと逆さ縛り責め

大手札三枚一組 五〇〇円
松本 たえ 略号△きたV

足を吊られた悦虐に泣く

大手札三枚一組 五〇〇円
松本 たえ 略号△きはV

浣腸溶液を圧入される

大手札三枚一組 五〇〇円
深田 菊子 略号△みはV

全裸で受ける三種の浣腸

大手札三枚一組 五〇〇円
深田 菊子 略号△みふV

イルリの嘴管挿入浣腸

大手札三枚一組 五〇〇円
深田 菊子 略号△みほV

突き刺さる浣腸器の恐怖

大手札三枚一組 五〇〇円
深田 菊子 略号△みちV

自ら施す浣腸の悦楽

大手札三枚一組 五〇〇円
深田 菊子 略号△みそV

体内に奔流する浣腸溶液

大手札三枚一組 五〇〇円
深田 菊子 略号△みやV

浣腸プレイを楽しむ美女

大手札三枚一組 五〇〇円
深田 菊子 略号△みぬV

オシメから生ゴムカバーへ

大手札三枚一組 二〇〇円
深田 菊子 略号△みめV

おムツに排便する乙女

大手札三枚一組 二〇〇円
深田 菊子 略号△みしV

生ゴム製のオムツカバー着用

大手札三枚一組 一八〇円
深田 菊子 略号△みせV

メロン腹白縄縛り

大手札三枚一組 五〇〇円
福井 桃子 略号△えすV

正面柱縛りの蛙腹

大手札三枚一組 五〇〇円
福井 桃子 略号△えきV

開脚縛り妊娠腹

大手札三枚一組 五〇〇円
福井 桃子 略号△えけV

蛙腹を晒す開股責め

大手札三枚一組 五〇〇円
福井 桃子 略号△えこV

太鼓腹強調片足吊り

大手札三枚一組 五〇〇円
福井 桃子 略号△えさV

妊孕緊縛美の極致

大手札三枚一組 五〇〇円
福井 桃子 略号△えあV

美しき妊孕腹緊縛

大手札三枚一組 五〇〇円
福井 桃子 略号△えかV

八カ月の妊婦裸身開陳

大手札三枚一組 五〇〇円
福井 桃子 略号△えせV

柱縛りの九カ月腹妊婦

大手札三枚一組 五〇〇円
福井 桃子 略号△さてV

引き回された妊婦腹

大手札三枚一組 五〇〇円
福井 桃子 略号△さりV

膨隆妊婦腹の股間縛り

大手札三枚一組 五〇〇円
福井 桃子 略号△されV

鏡に映る太鼓腹縛り

大手札三枚一組 五〇〇円
福井 桃子 略号△さえV

蛙腹誇張の緊縛美

大手札三枚一組 五〇〇円
福井 桃子 略号△さうV

足挙げ縛り蛙腹妊婦

大手札三枚一組 五〇〇円
福井 桃子 略号△さたV

卓の脚に縛った蛙腹妊婦

大手札三枚一組 五〇〇円
福井 桃子 略号△さつV

九カ月妊娠腹の緊縛美

大手札三枚一組 五〇〇円
福井 桃子 略号△さゆV

豆絞りの猿ぐつわ哀情

大手札三枚一組 五〇〇円
前田真知子 略号△ぬもV

逆エビ地獄の美女

大手札三枚一組 五〇〇円
前田真知子 略号△ぬやV

麻縄亀甲菱縄縛り

大手札三枚一組 五〇〇円
前田真知子 略号△ぬむV

後手高手小手縛り三態

大手札三枚一組 五〇〇円
鈴木千鶴子 略号△ぬみV

卓上の緊縛悦虐姿態

大手札三枚一組 五〇〇円
鈴木千鶴子 略号△ぬろV

全裸浴室での股間縛り

大手札三枚一組 五〇〇円
鈴木千鶴子 略号△ぬひV

悶える踊子の欲情処理

大手札三枚一組 五〇〇円
鈴木千鶴子 略号△ぬまV

美しき全裸の縛り

大手札三枚一組 五〇〇円
鈴木千鶴子 略号△ぬふV

柱縛りと脚挙げ縛り

カラ一三枚一組 一〇〇円
前田真知子 略号△すきV

麻縄高手小手首縄縛り

カラ一三枚一組 一〇〇円
前田真知子 略号△すめV

荒縄強烈エビ縛り

カラ一三枚一組 一〇〇円
前田真知子 略号△すけV

荒縄悦虐羞恥責め

カラ一三枚一組 一〇〇円
前田真知子 略号△すらV

悶える強烈海老責め

カラ一三枚一組 一〇〇円
前田真知子 略号△すへV

柔肌をくびる厳しき縄目

カラ一三枚一組 一〇〇円
前田真知子 略号△すれV

緊縛の全裸女体をいびる

カラ一三枚一組 一〇〇円
前田真知子 略号△すろV

若妻初妊娠の哀歓

大手札三枚一組 五〇〇円
略号△さい▽

妊娠腹の緊縛ヌード側面

大手札三枚一組 五〇〇円
略号△さみ▽

若妻の緊縛妊孕美

大手札三枚一組 五〇〇円
略号△さま▽

膨満腹妊婦の乳房責め

大手札三枚一組 五〇〇円
略号△さむ▽

臨月腹若妻全裸晒人形

大手札三枚一組 五〇〇円
略号△さち▽

躍動する妊婦の裸像

大手札三枚一組 五〇〇円
略号△さほ▽

妊娠という異常美

大手札三枚一組 五〇〇円
略号△さへ▽

金原奈加子

大手札三枚一組 五〇〇円
略号△さよ▽

若妻妊婦の全裸全身肢体

大手札三枚一組 五〇〇円
略号△ささ▽

八カ月の妊孕腹鑑賞

大手札四枚一組 六〇〇円
略号△ほち▽

双胎妊婦の乳房と腹部

大手札四枚一組 六〇〇円
略号△ほる▽

八カ月の双胎腹菱縄縛り

大手札四枚一組 六〇〇円
略号△ほわ▽

岩田帯をする双胎妊婦

大手札四枚一組 六〇〇円
略号△ほた▽

双胎懐妊の生態を探る

大手札四枚一組 六〇〇円
略号△ほれ▽

全裸の双胎妊婦を見せる

大手札四枚一組 六〇〇円
略号△ほそ▽

便々たる双胎初産妊娠

大手札四枚一組 六〇〇円
略号△ほま▽

臨月の妊婦ヌード

大手札三枚一組 五〇〇円
略号△にわ▽

臨月妊婦の裸身立腹

大手札二枚一組 四〇〇円
略号△にた▽

九カ月の妊娠腹

大手札三枚一組 五〇〇円
略号△にの▽

安原さゆり

大手札三枚一組 五〇〇円
略号△にゆ▽

首枷手枷で責められる妊婦

大手札三枚一組 五〇〇円
略号△にき▽

双胎妊婦腹強調縛り

大手札四枚一組 六〇〇円
略号△にけ▽

緊縛と猿轡双胎妊婦虐待

大手札五枚一組 七〇〇円
略号△にさ▽

後手縛りの双胎妊産婦

大手札四枚一組 六〇〇円
略号△にな▽

白肌に喰い込む縄目

大手札三枚一組 五〇〇円
略号△とわ▽

松山真樹子

大手札三枚一組 五〇〇円
略号△とら▽

一糸まとわぬ白い柔肌

松山真樹子 略号△とら▽

開陳した華麗な肢体

大手札三枚一組 五〇〇円
略号△とゆ▽

松山真樹子

大手札三枚一組 五〇〇円
略号△とえ▽

縛られた美女二人

大手札三枚一組 五〇〇円
略号△とそ▽

全裸の美女二人の連縛

小池・松山 略号△とれ▽

SとMの美女の甘い一瞬

大手札三枚一組 五〇〇円
略号△とさ▽

小池・松山

大手札三枚一組 五〇〇円
略号△とけ▽

縄に通うSM愛情の焰

小池・松山 略号△とけ▽

全裸の豊満な女体にムチ

大手札四枚一組 六〇〇円
略号△もた▽

関谷富佐子

大手札三枚一組 五〇〇円
略号△もえ▽

完全逆さ吊り責め

大手札三枚一組 五〇〇円
略号△さつり▽

木村 洋子

少女全裸アゲラ縛り 略号△てへ▽

少女全裸屈伸縛り

大手札三枚一組 五〇〇円
略号△てほ▽

長野 良子

鬼面と接吻する少女 略号△てち▽

緊縛女体撮影風景

大手札四枚一組 六〇〇円
略号△むら▽

柱縛り宙吊り晒し

大手札二枚一組 四〇〇円
略号△つめ▽

柱縛り全裸臀部晒し

大手札五枚一組 七〇〇円
略号△つま▽

大塚 啓子

柱正面縛り折檻 略号△つも▽

大塚 啓子

豊満な双乳の強調縛り 略号△そう▽

長野 良子

八の字開股縛り羞恥責 略号△そか▽

菱縄縛りの全裸を晒す

大手札四枚一組 六〇〇円
略号△そえ▽

中河 恵子

全裸二つ折り縛りの苦悶 略号△そむ▽

木馬責めにあう三態

大手札三枚一組 略号五〇〇円
大塚 啓子 略号八もく

乳房責めの苦悶表情

大手札二枚一組 略号四〇〇円
関谷富佐子 略号八もろ

強烈なエビ縛り

大手札三枚一組 略号五〇〇円
関谷富佐子 略号八もい

乳枷と貞操帯着用

大手札三枚一組 略号五〇〇円
山原 清子 略号八もや

檻に入れられた捕われ女

大手札二枚一組 略号四〇〇円
山原 清子 略号八もの

黒フンドシ高手小手縛り

大手札八枚一組 略号一二〇〇円
山原 清子 略号八ひろ

入墨女体の全裸姿態

大手札十枚一組 略号一五〇〇円
山原 清子 略号八ひへ

黒フンドシの刺青女体

大手札十枚一組 略号一五〇〇円
山原 清子 略号八ひね

刺青姐御晒の腹巻脇差姿

大手札十枚一組 略号一五〇〇円
山原 清子 略号八ひほ

刺青姐御晒の腹巻短刀姿

大手札十枚一組 略号一五〇〇円
山原 清子 略号八ひり

両手吊りにあえぐ女

大手札三枚一組 略号五〇〇円
東浦ひかる 略号八ひお

ポリウムをくびる妖蛇の縄

大手札三枚一組 略号五〇〇円
東浦ひかる 略号八ひか

後手垂直強烈しぼり

大手札三枚一組 略号五〇〇円
東浦ひかる 略号八ひけ

一糸まとわぬ柔肌緊縛

大手札三枚一組 略号五〇〇円
大塚 啓子 略号八ひく

豊胸をくびるむこき縄目

大手札三枚一組 略号五〇〇円
大塚 啓子 略号八ひき

開股羞恥責めの恥態

大手札四枚一組 略号六〇〇円
安井喜久子 略号八しう

尻立て鞭打ちの艶姿

大手札四枚一組 略号六〇〇円
安井喜久子 略号八しつ

あぐら縛りの羞恥責め

大手札四枚一組 略号六〇〇円
安井喜久子 略号八しよ

片足引きつけ縛り

大手札四枚一組 略号六〇〇円
安井喜久子 略号八しち

髪吊り責め強烈ムチ打ち

大手札四枚一組 略号六〇〇円
安井喜久子 略号八した

柔肌に炸裂するムゴい答

大手札四枚一組 略号六〇〇円
安井喜久子 略号八して

貞操帯着用にて鞭打ち

大手札四枚一組 略号六〇〇円
安井喜久子 略号八しや

ムチの痛打にもかく女体

大手札四枚一組 略号六〇〇円
安井喜久子 略号八しゆ

前開きゴム製オシメカバー

大手札12枚一組 略号一八〇〇円
大塚 啓子 略号八しま

前開き布製防水オシメカバー

大手札12枚一組 略号一八〇〇円
大塚 啓子 略号八しな

妊娠したお腹を見て

大手札四枚一組 略号六〇〇円
中河 恵子 略号八ゆわ

縛られた妊婦横臥姿態

大手札四枚一組 略号六〇〇円
中河 恵子 略号八ゆよ

被虐に燃える若き妊婦

大手札四枚一組 略号六〇〇円
中河 恵子 略号八ゆぬ

縛られて尚見せたい妊娠腹

大手札四枚一組 略号六〇〇円
中河 恵子 略号八ゆる

くすぐり責め地獄

大手札三枚一組 略号五〇〇円
大塚・東浦 略号八きす

奴隷の捨札開股縛り

大手札三枚一組 略号五〇〇円
木村 洋子 略号八きむ

菱縄強烈開股縛り

大手札三枚一組 略号五〇〇円
木村 洋子 略号八きま

竹柱立縛り正面晒しもの

大手札三枚一組 略号五〇〇円
木村 洋子 略号八きみ

柱宙縛り苦悶表情

大手札三枚一組 略号五〇〇円
木村 洋子 略号八きめ

猿ぐつわ股間縛り引回し

大手札三枚一組 略号五〇〇円
木村 洋子 略号八きも

マソ女のMの生態

大手札三枚一組 略号五〇〇円
木村 洋子 略号八きに

奴隷女のマソの生態

大手札三枚一組 略号五〇〇円
木村 洋子 略号八きね

私はあなたの奴隷です

大手札三枚一組 略号五〇〇円
木村 洋子 略号八きふ

美貌の裸身に鮮やかな縄目

大手札三枚一組 略号五〇〇円
絹川 文代 略号八きん

激痛！逆エビ責めの惨美

大手札四枚一組 略号六〇〇円
大塚 啓子 略号八きえ

女奴隷を弄ぶ三人プレイ

大手札八枚一組 略号一二〇〇円
大塚・東浦・木村 略号八きあ

二女をいじめめる啓子

大手札十枚一組 略号一五〇〇円
大塚・東浦・木村 略号八きい

股裂き責めと逆さ吊り

大手札三枚一組 略号五〇〇円
大塚・東浦・木村 略号八きう

口中の詰物で汚辱する

大手札三枚一組 略号五〇〇円
大塚・東浦・木村 略号八きお

猿ぐつわのいたぶり

大手札三枚一組 略号五〇〇円
大塚・東浦・木村 略号八きさ

抓ねりと擦ぐり責め

大手札三枚一組 略号五〇〇円
大塚・東浦・木村 略号八きし

灼熱の蠟涙責め

大手札四枚一組 略号六〇〇円
大塚・東浦 略号八きせ

豊満な乳房を責める

大手札五枚一組 略号八〇〇円
大塚・東浦 略号八きそ

最近撮影の新人新趣向緊縛責め写真集

SM組百態 大手札印画紙 (9×13 糎) 極鮮明焼付写真

各組 一組一枚 (送料共)

五組五枚 八〇〇〇円
十組十枚 一五〇〇〇円
二十組二十枚 二八〇〇〇円
五十組五十枚 五〇〇〇〇円
百組全部百枚 八〇〇〇〇円

(郵便番号 545-91) 天星社
大阪市阿倍野局 私書箱14号

奇クの誌上を賑わしている新し
いマゾ女性の方が、清純に或は妖
艶に、それぞれその個性にマツチ
した縛られ方責められ方をされて
甘い吐息を洩しています。マニア
の方の蒐集帖の一頁に更に新鮮な
資料を加えて頂きたく、ここにS
Mの香ぐわしい魅力に溢れるニュ
ーフォトを提供いたします。

☆

1 片足吊りに喘ぐ(玉木 章子)
2 柱に晒す全裸女(玉木 章子)
3 猿轡に呻く縛女(玉木 章子)
4 開股縛りの片足(玉木 章子)
5 菱縄縛りに泣く(玉木 章子)
6 右足挙げ柱縛り(玉木 章子)
7 日陰の女の羞恥(玉木 章子)
8 開股責めの正面(玉木 章子)
9 八の字開脚責め(玉木 章子)

10 乳房縛り真正面(玉木 章子)
11 開股縛りの強要(玉木 章子)
12 正座正面晒縛り(玉木 章子)
13 バイブ責め姿態(玉木 章子)
14 絶叫！開脚責め(玉木 章子)
15 手吊り足吊り責(玉木 章子)
16 臀部からの苛虐(玉木 章子)
17 正面で足を開く(玉木 章子)
18 卓上の開股痴態(玉木 章子)
19 縄は女を泣かす(玉木 章子)
20 強烈縛りに開脚(玉木 章子)
21 強烈海老責縛り(江口 淑子)
22 鞭打ちにもがく(江口 淑子)
23 強制する開股責(江口 淑子)
24 辱恥をさらける(江口 淑子)
25 奴隷の誓を開陳(江口 淑子)
26 排泄姿態の強制(江口 淑子)
27 耐久力ガシ責め(江口 淑子)
28 排便姿態で縛る(江口 淑子)
29 欄間に晒す開股(江口 淑子)
30 答で強要の汚辱(江口 淑子)
31 縄の痛さに泣く(鈴木千鶴子)
32 浣腸にのけぞる(鈴木千鶴子)
33 凄絶海老なぶり(鈴木千鶴子)
34 大の字開脚晒し(鈴木千鶴子)
35 棒責め裸女失神(鈴木千鶴子)
36 両足首開脚吊り(鈴木千鶴子)

37 全裸手吊り正面(鈴木千鶴子)
38 エビ責にあえぐ(鈴木千鶴子)
39 艶美椅子に悶ゆ(鈴木千鶴子)
40 全裸緊縛浣腸責(鈴木千鶴子)
41 足の裏の温い女(深田 菊子)
42 亀甲縛乳房責め(深田 菊子)
43 足を吊るのは嫌(深田 菊子)
44 強制開股椅子責(深田 菊子)
45 交叉した手首結(深田 菊子)
46 伸びやかな肢体(深田 菊子)
47 のけぞる両の足(深田 菊子)
48 開股で見ないで(深田 菊子)
49 縄猿轡海老責め(三浦 純子)
50 令夫人緊縛横顔(三浦 純子)
51 引回された裸女(福井 桃子)
52 色気発散の脚線(福井 桃子)
53 さあどうするの(福井 桃子)
54 寝乱れたマダム(福井 桃子)
55 臀部晒し柱縛り(福井 桃子)
56 高手小手臀部晒(福井 桃子)
57 長髪的美女緊縛(福井 桃子)
58 縛られてお喋り(福井 桃子)
59 縄が痛いんだよ(福井 桃子)
60 高々と上る手首(福井 桃子)
61 ポリウムを括る(笠井奈保子)
62 逞ましき臀部責(笠井奈保子)
63 太股に喰込む縄(笠井奈保子)
64 飛出す乳房責め(笠井奈保子)
65 柔肌に喰込む縄(笠井奈保子)
66 豊満臀部鞭打ち(笠井奈保子)
67 首縄高手小手縛(笠井奈保子)
68 縄の束に埋れる(笠井奈保子)

69 開股強制を拒む(笠井奈保子)
70 喰い込む股間責(笠井奈保子)
71 美少女逆エビ責(前田真知子)
72 足吊りくの字指(前田真知子)
73 股間縛りで開脚(前田真知子)
74 交差した後手首(前田真知子)
75 強烈股間縄涕泣(三浦 純子)
76 バイブ責で悶絶(松本 たえ)
77 高々と後手縛り(松本 たえ)
78 強烈海老開股責(松本 たえ)
79 柱縛り正面晒し(松本 たえ)
80 後手両手逆吊り(松本 たえ)
81 責められた乱髪(大塚 啓子)
82 後手縛片足吊り(大塚 啓子)
83 全裸柱抱き縛り(大塚 啓子)
84 太ロープ首縄責(大塚 啓子)
85 麻縄亀甲絞縛り(荒尾 慶子)
86 喰込む縄股間縛(荒尾 慶子)
87 首縄縦縛り正面(荒尾 慶子)
88 強烈緊縛で絶頂(荒尾 慶子)
89 美体乳房強調縛(荒尾 慶子)
90 股間縛りの麗姿(荒尾 慶子)
91 海老責浣腸地獄(長井葉津子)
92 後手吊りの全裸晒(長井葉津子)
93 迫るイルリ嘴管(長井葉津子)
94 素人娘緊縛全裸(長井葉津子)
95 浣腸責めの恐怖(長井葉津子)
96 半減した浣腸液(長井葉津子)
97 稚き臀部を開く(長井葉津子)
98 麻縄縛りの正面(長井葉津子)
99 注ぎ込まれる液(長井葉津子)
100 洋裁生のM姿態(長井葉津子)

奇ク活躍若手人気五人娘緊縛写真集

K組 百態 大手札印画紙 (9×13 糎) 極鮮明焼付写真

各組 一組一枚 (送料共)

五組五枚 八〇〇円
十組十枚 一五〇〇円
二十組二十枚 二八〇〇円
五十組五十枚 五〇〇〇円
百組百枚 八〇〇〇円

(郵便番号545-91) 天星社
大阪市阿倍野局 私書箱14号

最近の奇ク誌上に於て口絵或は本文の写真や告白手記などで大活躍している若くて美しいM女たちの印画紙に焼付けたフォトを女体緊縛コレクトマニアの方々の為に譲りします。この素晴らしく迫力に満ちた奇ク独特の華麗な蒐集品を、どうかファンの皆様のお手元で愛して下さい願います。

☆

1 正面から狙う眼(鈴木千鶴子)
2 引回し股間縛り(深田 菊子)
3 ポリウムを縛る(笠井奈保子)
4 M女なればこそ(高村 浩子)
5 柔肌にむごき縄(深田 菊子)
6 後手足首後吊り(高村 浩子)
7 縄で開股を強要(深田 菊子)
8 臀部と後手縛り(前田真知子)
9 排泄を耐える女(笠井奈保子)

10 椅子開股両足吊(鈴木千鶴子)
11 屋上のいたぶり(前田真知子)
12 臀部を晒す緊縛(笠井奈保子)
13 高々と後手縛り(鈴木千鶴子)
14 首縄に泣く屋上(前田真知子)
15 美女両脚柱縛り(深田 菊子)
16 豊満な尻部責め(深田 菊子)
17 惨美貌の羞らい(深田 菊子)
18 猪宙吊りの浩子(高村 浩子)
19 棒責めにあえぐ(鈴木千鶴子)
20 美へ与える汚辱(前田真知子)
21 縦縄に呻く女体(深田 菊子)
22 白き裸身の縄目(笠井奈保子)
23 両足吊流腸姿態(鈴木千鶴子)
24 閨での羞恥責め(深田 菊子)
25 正座しての懇願(前田真知子)
26 仕置と折檻の果(高村 浩子)
27 奴隷の誓い宣言(笠井奈保子)
28 菱縄縛りに喘ぐ(笠井奈保子)
29 強烈な股間縛り(鈴木千鶴子)
30 総てをさらして(前田真知子)
31 片足挙げ柱縛り(深田 菊子)
32 全身に喰込む縄(高村 浩子)
33 宙に浮いた苦痛(鈴木千鶴子)
34 もっと股を開け(笠井奈保子)
35 転がされた女体(笠井奈保子)
36 形よきお脐悦情(深田 菊子)

37 そんなのはイヤ(前田真知子)
38 喰込む股間縛り(高村 浩子)
39 菱縄正面髪掴み(鈴木千鶴子)
40 両足吊り逆エビ(高村 浩子)
41 縄束の中の折檻(深田 菊子)
42 乳房強調の猿轡(笠井奈保子)
43 責め抜かれた果(鈴木千鶴子)
44 全裸の緊縛正坐(笠井奈保子)
45 階段に呻く女体(深田 菊子)
46 後手縛りの模範(深田 菊子)
47 両足首逆さ緊縛(深田 菊子)
48 階段で逆立縛り(深田 菊子)
49 責めに反る指(前田真知子)
50 豊満な全裸縛り(笠井奈保子)
51 プロポーズ(鈴木千鶴子)
52 羞恥を晒す女体(深田 菊子)
53 海老責二つ折り(高村 浩子)
54 正面開股菱縄縛(深田 菊子)
55 白肌に喰入る縄(前田真知子)
56 尻立てアヌス責(深田 菊子)
57 竹と棒責め地獄(前田真知子)
58 豊隆乳房へ責め(高村 浩子)
59 海老棒責めの惨(鈴木千鶴子)
60 羞恥股裂き責め(前田真知子)
61 高々棒吊り両足(深田 菊子)
62 正面片足引上げ(前田真知子)
63 強烈麻縄の魔力(笠井奈保子)
64 ニツ折りの仕置(鈴木千鶴子)
65 猿ぐつわの表情(笠井奈保子)
66 逆片足エビ責め(前田真知子)
67 嚴重な後手縛り(笠井奈保子)
68 反り返った女体(鈴木千鶴子)

69 縛りに放心状態(笠井奈保子)
70 美を汚辱する時(前田真知子)
71 片足吊りの正面(深田 菊子)
72 乳房強調の縛り(深田 菊子)
73 片足吊りの序曲(笠井奈保子)
74 縄で攻める開股(深田 菊子)
75 縄痕むごし柔肌(前田真知子)
76 淫らな羞恥責め(鈴木千鶴子)
77 開股を攻める縄(高村 浩子)
78 放置された縛体(笠井奈保子)
79 憂愁の美女緊縛(深田 菊子)
80 足挙げ開股責め(深田 菊子)
81 猿轡苦痛の表情(笠井奈保子)
82 悦虐に泣く乳房(高村 浩子)
83 責められた悦楽(鈴木千鶴子)
84 屋上の引き回し(前田真知子)
85 写真マニアの顔(笠井奈保子)
86 臀部突出足縛り(深田 菊子)
87 気懶るき責の宴(鈴木千鶴子)
88 さあ立たないか(前田真知子)
89 棒縛り開脚責め(深田 菊子)
90 人身御供の裸身(笠井奈保子)
91 悶えに悶えた末(鈴木千鶴子)
92 痛いから許して(前田真知子)
93 乳房責と股間縛(高村 浩子)
94 諦観の晒しもの(笠井奈保子)
95 階段で開く両脚(深田 菊子)
96 強制された開股(笠井奈保子)
97 顔を向けないか(前田真知子)
98 大の字開股責め(深田 菊子)
99 美しき縛り表情(深田 菊子)
100 豊かさを縛る縄(笠井奈保子)

浣腸責め地獄の妊産婦 大手札四枚一組 六〇〇円 増田みゆき 略号△ほな▽	浣腸責めの甘い恐怖 大手札三枚一組 五〇〇円 中河 恵子 略号△とか▽	浣腸液注入直後の状況 大手札三枚一組 五〇〇円 中河 恵子 略号△とま▽	強制浣腸の各美姿態 大手札三枚一組 五〇〇円 中河 恵子 略号△とみ▽	浣腸責めの美態開陳 大手札三枚一組 五〇〇円 中河 恵子 略号△とめ▽	浣腸を待つポーズ 大手札三枚一組 五〇〇円 中河 恵子 略号△とも▽	エネマと縛りの恐怖 大手札三枚一組 五〇〇円 長井葉津子 略号△よて▽	エネマ責めの恐怖 大手札三枚一組 五〇〇円 長井葉津子 略号△よる▽	浣腸器を弄び愛撫する女 大手札三枚一組 五〇〇円 長井葉津子 略号△よる▽	イルリガートルの浣腸責め 大手札三枚一組 五〇〇円 長井葉津子 略号△よた▽	浣腸にむせび泣く女 大手札四枚一組 六〇〇円 大島 照代 略号△つゆ▽	身動き出来ぬ浣腸地獄 大手札四枚一組 六〇〇円 大島 照代 略号△つえ▽
浣腸とオシメ装着 大手札四枚一組 六〇〇円 大塚 啓子 略号△ひそ▽	強制浣腸責めの序曲 大手札三枚一組 五〇〇円 長井葉津子 略号△よか▽	襲いくる浣腸器嘴管の先 大手札三枚一組 五〇〇円 長井葉津子 略号△より▽	鼻孔の奥を探る魔手 大手札三枚一組 五〇〇円 中河 恵子 略号△はむ▽	開孔器にてひらく鼻孔 大手札三枚一組 五〇〇円 中河 恵子 略号△はら▽	なぶられる拘束裸身の鼻 大手札三枚一組 五〇〇円 中河 恵子 略号△はれ▽	仰臥した緊縛女体の鼻なぶり 大手札三枚一組 五〇〇円 中河 恵子 略号△はに▽	美女の鼻をもてあそぶ 大手札三枚一組 五〇〇円 左近麻里子 略号△ちる▽	美女の鼻孔を觀賞する 大手札三枚一組 五〇〇円 左近麻里子 略号△ちれ▽	開孔器で検査する鼻孔 大手札三枚一組 五〇〇円 左近麻里子 略号△ちき▽	鼻孔に煙草挿し込み責め 大手札三枚一組 五〇〇円 美木乃々子 略号△ぬと▽	可愛い鼻責めのアップ 大手札五枚一組 七〇〇円 美木乃々子 略号△ぬは▽
強烈縛りで顔面翻弄 大手札八枚一組 一二〇〇円 美木乃々子 略号△ぬほ▽	可憐乙女の鼻をいたぶる 大手札四枚一組 六〇〇円 一宮百合子 略号△るえ▽	鼻責めと鼻孔のアップ 大手札三枚一組 五〇〇円 中河 恵子 略号△ねけ▽	鼻責めの陶醉境 大手札三枚一組 五〇〇円 大塚 啓子 略号△なは▽	淫虐鼻なぶりの形相 大手札三枚一組 五〇〇円 大塚 啓子 略号△ない▽	鼻の穴を責める 大手札三枚一組 五〇〇円 大塚 啓子 略号△なく▽	夫婦連縛にて鼻責め 大手札十枚一組 一五〇〇円 増田みゆき 略号△らか▽	鼻責めに悶える女 大手札七枚一組 九〇〇円 木村 洋子 略号△むる▽	顔面を凌辱される女 大手札四枚一組 六〇〇円 木村 洋子 略号△むよ▽	鼻責めと緊縛 大手札五枚一組 七〇〇円 大塚 啓子 略号△うい▽	鼻責めによる悦楽 大手札二枚一組 四〇〇円 東浦・大塚 略号△きな▽	美しき鼻をいたぶる 大手札三枚一組 五〇〇円 遠藤百合子 略号△ゆは▽
乳房いじめの責め 大手札二枚一組 四〇〇円 大塚 啓子 略号△とお▽	豊かな乳房を責める 大手札三枚一組 五〇〇円 東浦ひかる 略号△とき▽	逆エビ吊り責め 大手札六枚一組 一〇〇〇円 梨花悠紀子 略号△りつ1▽	逆胴吊り責め 大手札六枚一組 一〇〇〇円 梨花悠紀子 略号△りつ2▽	大の字逆さ吊り 大手札二枚一組 四〇〇円 増田みゆき 略号△むの▽	豊満乳房しばり責め 大手札三枚一組 五〇〇円 長野 良子 略号△うは▽	吊り打ち責め 大手札三枚一組 五〇〇円 関谷富佐子 略号△やり▽	腰元の吊り責め 大手札二枚一組 四〇〇円 村井知可子 略号△こり▽	乳房強調膨隆責め 大手札三枚一組 五〇〇円 佐々木真弓 略号△こわ▽	エネマシンリンジ挿入責め 大手札三枚一組 五〇〇円 大塚 啓子 略号△えね▽	ワシづかみ責めの乳房 大手札三枚一組 五〇〇円 大塚・東浦 略号△えう▽	強烈乳房責め五態 大手札五枚一組 七〇〇円 山原 清子 略号△てら▽



柏木眞佐男・画

○ 私は三十二才の会社員、妻は二十七才です。私達は恋愛結婚して七年になります。私は十五年近く奇クを愛読しているSMマニアです。結婚以来、徐々に妻を教育して、なんとか一人前の奴隷女に仕上げました。今では私の命令通りどんな羞恥的行為も受けます。先日私の会社の取引先の部長にセックスプレイの好きな人妻という名目で(私の妻ということとは秘密に)人身御供にしました。待合わせ場所で紹介して引き渡し、私は帰って来ました。奴隷女として人身御供にされた妻がプレイ上手な部長に、どんな方法で料理されているか、想像するだけで胸が痛く

なるほどわくわくしました。そして役目を果たして帰ってくると、いよいよ私の出番です。頬を赤くして俯向きながら室に入ってきた妻を「お帰り」と迎え、あごに手をやって顔を起こします。そして、「役目を果たして来たか？」と訊問します。目を閉じて答えない妻を二、三度、ぴんたします。そして恥かしげに、「はい、ご命令通りお勤めました」と聞いたとき、興奮の極に達しました。そのあとは着ているものを剥ぎとり、部長の行為を一つ一つ、再現させ、たっぷり時間をかけて、羞恥責めを楽しみました。先輩の諸氏に、私の性癖をご理解の上、ご協力をいただきましたらと念願し筆をとりました。

年輩の方で、羞恥責めのベテランに、私の目の前で、プレイして見せていただけたらと、望んでいます。当方、子供もおりますので東京で平日の昼間が最適です。よろしく、お願いいたします。

(東京都・品川良伸)

○ 二月号の沼田敦子さん。初めてお便り差し上げます。私は貴女のお便りを拝見し、無性にペンを取

りたくなりました。今のむなし生活、いやしてくる人が現われたような気がします。私は奇クを愛読し、五年になります。まだS空想の域を脱していない、二十三才の会社員です。貴女との出会いにより、脱出できると思っています。貴女のM性を、より引き出す助けとなれば幸いです。私は羞恥責め乳房責めなどが好きです。二人でSMの世界を歩んで行こうではありませんか。何事も経験だと思えます。お気に召しましたらお便り下さい。

(東京・竜見文雄)

○ 初めてお便りいたします。私は二十二才になる大学生です。四十七年十二月号から買い始めて現在三冊目の四十八年二月号を手にしこれほどまでに私の欲望を満足させてくれる本があったのかと、嬉しさで、いっぱいです。最近のありきたりのヌード雑誌などでは満足できなくなっていた私が、この奇クを初めて手にした時の何とも言えぬ感動は、とても言葉では、いいあらわせません。過去一時、自分の性癖の異常さに悩んだこともありました。今では他にも多勢、似た方がいらっしゃるのを知

って、非常に安心している次第です。私は、この本を読み、いくらか自分にはS的要素があるように思えます。現在、キックボクシングと柔術をやっていますが、相手をおすことに無上の喜びを感じるところなど、そうではないでしょうか。しかし、一人で考えていても、しょうがありません。もし女性の方で、自分はMではないかしら、とお思いの方がおられましたらお便り頂けないでしょうか。文通から次第にSMプレイと発展させてゆきたいと考えています。私も、すべてにおいて初めてです。ので真剣です。ご一緒にSMについて研究して下さる女性の方がおられましたらお手紙下さい。

(東京都・齊藤美範)

○ 三百冊目の奇ク誕生を心からお喜び申し上げます。陰花植物の如きSMを共に語りあえる友のなきをかこつ誌友のため、今後とも地味ながら着実な発展を祈る次第です。さて、最近の貴誌のご努力は美しいM女の発掘に、また新しいアイデアにと、まことに喜ばしい限りです。特に一月号の「女子トイレ考現学」や二月号の井上雅人夫妻のSMプレイフォトなど読

(神戸市・乃美対造)

||御送金についてのお願い||

現金を普通郵便物に封入する
 ことは、郵便法によって禁止さ
 れています。現金での御送金の
 場合には必ず「現金書留」でお
 願ひ致します。他に「振替」定
 額小為替、普通小為替等の方
 法もあり、ますのでご利用下さ
 い。も、切手代用」にも結構
 便宜が、その場合は必ず一割増
 です。が、お願い致します。

（静岡・志羽利也）

町はずれで、ふと見つけた雑誌から見知らぬ人との出会いが始まる。それは気まぐれでしょうか。ぼくは正直に言って、未だそれほど豊富なSMプレイの経験の持ち主ではありませんが、どなたかぼくとSMフレンドになっていただける女性の方はおられないでしょうか。貴女の年令や容姿は問いません。ぼくは三十六才で身長一七二センチ、体重六二キロ、着やせするタイプです。ぼくは縛ったり浣腸や器具で責めたりすることは好きですが、鞭を使ったり殴ったり蹴ったりして、女性の身体に傷

○

奇ク三月号拝見、いつに変わらぬ充実ぶりうれしく存じます。今月号ではまたまた緊縛女性の新人が現われました。塚本鉄三氏の麗筆によって西条紀代という可愛い女性の緊縛ポーズを数多く拝見出来てよかったです。私はもう十数年来の愛読者で、奇ク一本にしぼって買い求めてきました。性来の緊縛女性マニアですが、残念なことに私の家内は大のSMぎらいで私がそのような話でも持ちかけようものなら、氣狂いのように反対しますので、家ではSMは禁物になっています。誌上でSM夫婦プレイを楽しんでおられる方の記事を見するにつけ、うらやましくなれません。早坂信二氏ご夫婦や渡部光雄氏ご夫妻など、誌上で

(愛媛県・東野鋭二)

毎号、楽しく読ませていただいております。最近は巻頭写真も益々充実して大喜びしております。

鈴木千鶴子さん、前田真知子さん、深田菊子さん等々若い女性の方が活躍しておられるところへ、さらに玉木章子さんや西条紀代さんあたりが参加されて楽しみです。私も少し写真の趣味があるので一度緊縛写真を撮ってみたいと、常々思っているのですが、何分にも相手がみつからないので奇クの写真を見て慰めにしております。名古屋近辺の二十代の女性の方、私とプレイしてみませんか。当方二十六才の男性で、羞恥責めを好みます。勇気ある女性のお便りを待っています。

(名古屋市緑区・鷺津令児)

○ 最近のカメラルポ、塚本先生の
流暢な文章と巧みなカメラワーク
で私達を魅了してくれています。

特に三月号と四月号の前田真知子さんのフォトは素晴しかったし、海老責めのフォトは絶品でした。4月号の告白の中で前田さんが海老縛りで転がされているシーenna

◎最新版優秀分譲品一覽表◎

(略号明記の上、前金にて大阪市阿倍野局私書箱第14号天星社へ)

豊満な臀部の晒し責め

大手札三枚一組 五〇〇円

笠井奈保子 略号△るる▽

猿轡に悶える全裸の肢体

大手札三枚一組 五〇〇円

笠井奈保子 略号△るる▽

エビ縛りのグラマー娘

大手札三枚一組 五〇〇円

笠井奈保子 略号△るる▽

羞恥に泣く魅力の女体を縛る

大手札三枚一組 五〇〇円

笠井奈保子 略号△るる▽

緊縛羞恥の表情各種

大手札三枚一組 五〇〇円

笠井奈保子 略号△るる▽

柱縛りの悦虐肢体開陳

大手札三枚一組 五〇〇円

松本 たえ 略号△るる▽

羞恥責めの極致悦表情

大手札三枚一組 五〇〇円

松本 たえ 略号△るる▽

強烈責めに泣くマゾ女

大手札三枚一組 五〇〇円

松本 たえ 略号△るる▽

エビ縛りの開股責め

大手札三枚一組 五〇〇円

松本 たえ 略号△るる▽

ど、思わず生ツバをのみました。読者通信から登場された玉木章子さんもSMのコツを心得た、よいモデルさんです。一回では惜しいです。是非これから取材し

片足吊りに悶える全裸女体

大手札二枚一組 四〇〇円

松本 たえ 略号△るる▽

両足吊りの宙縛り責め

大手札二枚一組 四〇〇円

松本 たえ 略号△るる▽

開股責めに痺れる女体

大手札三枚一組 五〇〇円

松本 たえ 略号△るる▽

縄に依る悶悦姿態の表情

大手札三枚一組 五〇〇円

笠井奈保子 略号△ぬゆ▽

縛りを耐える恍惚表情

大手札三枚一組 五〇〇円

笠井奈保子 略号△ぬき▽

若い女の肢体美を縛る

大手札三枚一組 五〇〇円

笠井奈保子 略号△ぬさ▽

羞恥縛りの全裸種々相

大手札三枚一組 五〇〇円

笠井奈保子 略号△ぬあ▽

女体神秘の悦虐を抉る

大手札三枚一組 五〇〇円

笠井奈保子 略号△ぬな▽

女体の若さを縄でくびる

大手札三枚一組 五〇〇円

笠井奈保子 略号△ぬた▽

緊縛の姿態に類染める女

大手札三枚一組 五〇〇円

笠井奈保子 略号△ぬて▽

て下さい。都会的なセンスと如何にも享樂的といった風貌がとても好きでした。それから、頽廢的な感じの中に、近代的な味がにじみ出ているような深田菊子さんに対

乙女の女体秘奥を曝く

大手札三枚一組 五〇〇円

笠井奈保子 略号△ぬら▽

開股縛り羞恥の決定版

大手札三枚一組 五〇〇円

笠井奈保子 略号△ぬつ▽

出産直前の臨月緊縛美

大手札三枚一組 五〇〇円

福井 桃子 略号△ぬせ▽

臨月腹の苛酷な開股縛り

大手札三枚一組 五〇〇円

福井 桃子 略号△ぬく▽

堂々たる臨月蛙腹縛り

大手札三枚一組 五〇〇円

福井 桃子 略号△ぬよ▽

両手吊り臨月腹の妊婦

大手札三枚一組 五〇〇円

福井 桃子 略号△ぬり▽

遅ましき臨月腹と臀部

大手札三枚一組 五〇〇円

福井 桃子 略号△ぬし▽

後手縛りの臨月太鼓腹

大手札三枚一組 五〇〇円

福井 桃子 略号△ぬぬ▽

全裸出産直前の臨月腹展示

大手札三枚一組 五〇〇円

福井 桃子 略号△ぬい▽

臨月腹の奴隷犬を調教する

大手札三枚一組 五〇〇円

福井 桃子 略号△ぬの▽

照的な素朴な田舎じみた西条紀代さんのとり合せは、共に奇妙な魅力で、共に七三年のSM風俗資料として貴重かつ興味あるものと思

(東京都北区・壬生順一)

○

私は男を責め上げること最大の欲びを感じるS度一〇〇%の女性です。この奇クを通じて、お前達男奴隷を集めて存分に調教してやりたいの。私は今年二十二才の学生で、身長一六三センチ、体重五二キロ。水泳と合気道(女性の部で初段)で鍛えた脚で思いきり男の顔を蹴とばしてみたいの。調教法は鞭なんていうちゃんなものではなく、すべて私の下半身で痛めつけるのが特長ね。窒息寸前の顔面騎乗、合気道仕込みの回し蹴りなど、容赦しないつもりよ。これらのリンチに耐えられたら、人間トイレットペーパー、人便器の奉仕もさせて上げるわ。また複数の奴隷を集め、私の友達にも女王様になってもらしてする集団プレイも計画中よ。その時には奴隷の舌の長さを測る遊び(想像で遊ぶでしょ。お前たちが一番好きな遊びよ)をさせてやるわ。きつと

よ。数多い奇ク愛読のS女性も影をひそめてしまった昨今、図々しいようだけど、私が女王様ナンバーワンのようなね。

(大阪市旭区・高橋千寿代)

私は夫婦の愛情を高めるのにSMプレイが一番だと思っております。みさ子は子供達がねむるのを待っていて、ねむるとすぐに、ネグリジェとパンツを取りさり全裸となつて、夫のそばへ寄りそつて「貴男、始めましょう」といって手をうしろへ回します。夫はすぐみさ子を後手にきつく縛り上げると、バイブやこけしやすりこ木等で、たっぷり時間をかけ、ねちねちと責め上げたところで本番となります。このようにして、みさ子は完全なM女に仕立て上げられ、ロマン派生さんや辻村さんに責めてもらいました。お二人にオシャブリのサービスやセックスプレイまでしたことを夫に報告し、大きな比較なんかも寝物語にいたしますと、夫は大へん興奮して、また私を凄く責めるのです。みさ子の肉体を他の男性の自由にさせるというのも、あとになって、その模様を私の口から聞き出したいためのようです。私も喋らされると

その時の責められている有様を思い出して、最高のよろこびを感じ自分の方から積極的に求めてゆくようになります。

(横浜市・佐野みさ子)

私は奇クの数年来の読者です。これは緊縛写真についての希望です。股間縛りの出来上りの姿態だけでなく、縄をくぐらせたときやひきしめたときの表情や姿態もご発表をお願いします。それから、4月号にのっていた前田真知子さんの縛られ方が素晴しかったのでこの方をモデルにして、上記の趣向をやってみて下さい。

(栃木県・曾川勉)

独身に限らず世の母親、未亡人など広く誌上の女性の皆様、私は二十八才の堅実その物の男です。健全なる人間である以上、心身共に人並に成熟してくれば人間としての当然な充足を求め、またそれを享受するのは自然なことだと思ふのです。俗にSM等といった如何にもあざけつたり卑下したりする傾向がありますが、この当然なる人間の欲求は、素晴しき人生の一瞬ではないかと信ずるのです。理屈ばくなくなったかもしれませんが

KK誌に載っている皆様の欲びの表現は人と人との、また異性同志の星がきらめく様な、いわばイチヤツキであると感じます。どうか深刻にならず同感して戴ける方、お便り下さい。以上の様な理解と前提がある以上、精神的にも肉体的にも苦痛が伴う様では何の意味もありません。お互いが欲び合い満足し合つてこそ、健全なおつき合いが出来ると思っています。

(東京都渋谷区・長谷部満)

余寒なおきびしき折柄、皆さまにはご清適のこととお喜び申し上げます。私は奇クを愛読しております。二十一年才になる縫製女子見習生として毎日ミシンを掛けている女性でございます。全国の女性の皆様、SMプレイなどでご交際下さいませんか。ふんどしの事もまたゴムマニアのことも、お話しあえば楽しいと思います。私は工場寮に住んでおります。いろいろなお話し合い致しましょう。試作品等お送りします。

(守口市大田町・小野みどり)

はじめてお便り差し上げます。私、本年二十四才の人妻でございます。夫の遠洋航海中に東京の友

だちの家に遊びに来、本棚から御誌を見つけました。ページをめくっている内に不思議な興奮に捉われました。以前から私が心の奥で望んでいた様な事が書いてあったからです。一年の三分の二近く不在の夫に、ある種の物たりなさや不満を感じていた私は、秘かに男性にいいじめられたいと思っておりました。御誌ならば、この私の望みをかなえて下さるのではと思ひペンを取りました。私は身長一五八センチ、体重五十二キロ、バスト八十六センチ、ウエスト六十三センチ、ヒップ八十八センチ、中肉中背です。乳房責め、バイブ責め、剃毛、股間縛りなどに興味があります。そこで思い切って、御誌のモデルとして応募させていただきます。遠方なので駄目でしょうか。そちらのご都合さえよろしければ京都でも大阪でもまいります。一週間ぐらい前にご連絡いただければ、いつでもまいります。毎月十日前後の四、五日を除けば支障ありません。お返事いただければ幸いです。表記のお友達の所にお願ひ致します。御誌のますますのご発展、お祈り申し上げます。かしこ。

(千葉県・水島並子)

○ K K誌を愛読し始めて十年になる今年三十才になる女性です。その間、貴誌のお蔭で数人の同好の方と知合いになり、色々なプレイをし、SMフォトもとりました。私はまだ独身ですが、昨年両親がなくなりましてので今一人で割合大きな家に住んでいます。用心のために、雑種の犬をメスとオスを一匹ずつ飼っています。庭が広いので放し飼いにしていますから、時には私の目のやり場のないような場合が起ることがあります。でも高い塀がありますので扉を閉めておいて、そんな時はゆっくり見ます。私は同好の方々とSMプレイは相当いろいろな事をやってきました。犬とのプレイは、まだ一度もしたことはありません。誰か犬の訓練方法をお教え願えません。なお、経験のある方で信用の出来る方でしたら、私と犬のプレイの時、お立会い載いても結構です。きつと素晴らしいだろうと思います。(尼崎市・南政子)

○ 二月号で塚本鉄三氏がルポした玉木章子さんは大変、気に入りました。角ばった顎の出た顔ということでしたが、洋服を着た姿など

作六鬼団



決定版

● 瞠目のサディズム小説総集篇遂に成る!!
昭和37年8月号に端を発してより絶讃を博し続ける「花と蛇」の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サディズム小説は、現在尚「奇譚クラブ」誌上に連載中であり、過去四回の集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発行となつた訳であります。八十年の集積を味読して下さい。

――内容主要見出し一覽――

第一章	発	第二章	恐	第三章	美	第四章	華	第五章	救	第六章	救	第七章	魔	第八章	魔	第九章	淫	第十章	淫	第十一章	淫	第十二章	淫	第十三章	淫	第十四章	淫	第十五章	淫	第十六章	淫	第十七章	淫	第十八章	淫	第十九章	淫	第二十章	淫	第二十一章	淫
第一章	一	第二章	二	第三章	三	第四章	四	第五章	五	第六章	六	第七章	七	第八章	八	第九章	九	第十章	十	第十一章	十一	第十二章	十二	第十三章	十三	第十四章	十四	第十五章	十五	第十六章	十六	第十七章	十七	第十八章	十八	第十九章	十九	第二十章	二十	第二十一章	二十一

第二十二章	身代金奪取の失敗	第二十三章	運命の逆転	第二十四章	奇妙な三々九度	第二十五章	飼育される白い動物	第二十六章	悪魔と悪女の悪業	第二十七章	屈辱の地獄	第二十八章	逃走の恐怖と失敗の結末	第二十九章	悪鬼連の残忍な所業	第三十章	淫らな美女の調教	第三十一章	汚水にまみれた宝石	第三十二章	華々しき美女の屈伏	第三十三章	対峙する美女と美女	第三十四章	あくどい陥	第三十五章	羞恥の令嬢の屈辱	第三十六章	清純な令嬢の屈辱	第三十七章	人身御供の令夫人	第三十八章	深窓の美少女とズベ公	第三十九章	小夜子への執拗な調教	第四十章	変性色事師の登場
-------	----------	-------	-------	-------	---------	-------	-----------	-------	----------	-------	-------	-------	-------------	-------	-----------	------	----------	-------	-----------	-------	-----------	-------	-----------	-------	-------	-------	----------	-------	----------	-------	----------	-------	------------	-------	------------	------	----------

第四十四章	生れかわるスター京子	第四十五章	激しいスターへの訓練	第四十六章	低脳男と令夫人の結婚	第四十七章	愛弟子を調教する静子夫人	第四十八章	羞恥と屈辱の日本舞踊	第四十九章	悪魔たちの哄笑	第五十章	地下室の羞恥と汚辱地獄	第五十一章	珍芸を開演する令夫人	第五十二章	淫靡な時代劇シヨ	第五十三章	華々しきシヨの展開	第五十四章	野卑な妾二人のいたぶり	第五十五章	ズベ公達の邪悪な責め	第五十六章	屈辱の中に泳ぐ奴隷たち	第五十七章	悪党の執拗ないたぶり	第五十八章	文夫と小夜子の屈辱的対面	第五十九章	勝ち誇る悪党一味	第六十章	中国伝来の秘法	第六十一章	緊縛された美女の泣泣	第六十二章	新しい餌食への触手	第六十三章	苦痛と屈辱の生地獄	第六十四章	恐怖の責め続く	第六十五章	結末なき責めの結末	第六十六章	甘美な拷問に悶える夫人	第六十七章	新しい儀の到来と静子の狂態	第六十八章	あくなき汚辱に泣く美女	第六十九章	ニューフェイスに飼育開始	第七十章	肉体の悪魔に魅せられた女	第七十一章	熱気を帯びたマソの競演	第七十二章	女盛りの妖美な肉体	第七十三章	優雅な木馬夫人の崩壊	第七十四章	美女と野獣の奇妙な闘争
-------	------------	-------	------------	-------	------------	-------	--------------	-------	------------	-------	---------	------	-------------	-------	------------	-------	----------	-------	-----------	-------	-------------	-------	------------	-------	-------------	-------	------------	-------	--------------	-------	----------	------	---------	-------	------------	-------	-----------	-------	-----------	-------	---------	-------	-----------	-------	-------------	-------	---------------	-------	-------------	-------	--------------	------	--------------	-------	-------------	-------	-----------	-------	------------	-------	-------------

お申込は大阪市住吉郵便局私書箱第41号
〒558 晩出版株式会社宛

哀愁を帯びていて、Mがかった、よい顔でした。それに最初から強烈な開股縛りに耐えたのも、さすが今まで飼育されたタマモノと思いません。プレイとまでは、いかなくても、一度お逢いして、SMについての、お話でも伺いたいのです。塚本氏のカメラの前で、

これほどのポーズをとられたのですから、一読者とはいえ、私の前でも相当なポーズをとってくれそうですね。玉木章子さんも、その方が、うれしいのと同じですか。二度も読者通信を出された章子さんのことですから一度、誌上に載ったからといって満足されること

はないと思います。ぜひ、これからは変わって責められ方で、誌上に姿を見せて下さい。私は楽しみに、これからの貴女の成長を見守っています。誌上で、お答え下さい。(福井市・鶴見広次)

僕は高校時代からの奇クの愛読者で、現在は都内のある国立大学の文科に在籍している23才の男性です。高校へ入学した頃から自分のS的性向を自覚して思い悩んでいた僕は、大学入試の間近かに迫った真冬のある日、本屋の片隅に積み上げられていた地味な装丁の奇クに遭遇しました。その日以来自分と同様の性向の人間がたくさんいることに励まされた僕は、いつの日にかMの女性に巡り会ってロマンティックでムードのあるSMプレイを楽しまんものと、そこはかとなない期待の灯をともし続けてきました。そんな時、2月号で御殿場市の沼田敦子さんの投稿に接しました。僕自身が御殿場からさして遠くない処で幼少の一時期を過ごし、雪化粧した富士を眺めながら、学校までの長い道程を歩き、黄瀬川の清流や鮎つぼの滝のあたりを遊び回ったことがあるだけに、余計あなたに親近感を抱いてしまいました。僕は真正銘のSですが、といって相手に肉体的苦痛を与えることを眼目としたような「責め」は好みません。SMプレイとはあくまで「羞恥責め」であるべきで、縄だけでなく言葉を有効に駆使した雰囲気のあるも

のが望ましいのではないのでしょうか。ロマンチストを自負している僕は、節度とかプレイの限度といったようなものもわきまえていたつもりです。沼田敦子さん。勝手なことを書きつらねてきましたがよくよく考えてみれば、僕はあなたの事をほとんど言っただけでよいくらい知ってはいないのです。もし僕でよかったですら、あなた自身のことについて、MのつもりでもMになりきれない「あなたの様々な夢について、色々と聞かせてください。あなたの持っているSMプレイのイメージについて……」

(東京・SS生)

奇クを愛読しはじめてから、早いもので既に十数年過ぎてしまいました。最近では内容も充実し写真も多くなつて発行日が一段と楽しみになりました。4月号では女性の方の告白が沢山載っていて楽しみに読みました。玉木章子さんの身上話は、心をうずかせて拝見、私もこのような純情可憐な女性に一度でいいから逢いたいものだと思いました。まだ、お若いのですから、健康に注意されて立派なM女として大成されますように。M女というのは稀少価値があります

○

から、きっと大切にされますよ。書きたいことがありましたら、もつと誌上に投稿して下さいね。決して貴女は日蔭の女ではありません。奇クファン万人の渴仰の的です。久留木栄氏の作品は以前から私は注目していました。「九州旅行」もよかったです。本当のマニアが身体で書いたという作品ですねちねちと執拗な、タッチの責めをお願いします。辻村さんの「耽奇房」が愈々第1回の皮切りをした。大いに期待している。どこまで続くか、命のある限り続けてくれ。氏のバイタリティを期待している。

(北九州市・長坂生)

○

私は三年ほど前から奇クを愛読している青年です。カメラハントやルポを特に好んで読んでいました。私の身体の内面にうずまきS的傾向を満たすチャンスもなく、こうした記事や写真に強く引かれる自分を、どうすることも出来ませんでした。鈴木千鶴子さんを初め深田菊子さん、前田真知子さんそれに最近では玉木章子さんと西条紀代さんと憧れの女性が誌上を賑わしているのを見て、自分も辻村様や塚本様のようにSMプレイをしてレポートを書いてみたいと

いう気がします。若輩にて、とても無理かと思いますが、塚本様がある老人から随意筋の秘法を習われたように、私もプレイとルポの秘伝を教えて頂きたいものだと思います。

(東京都・松田高夫)

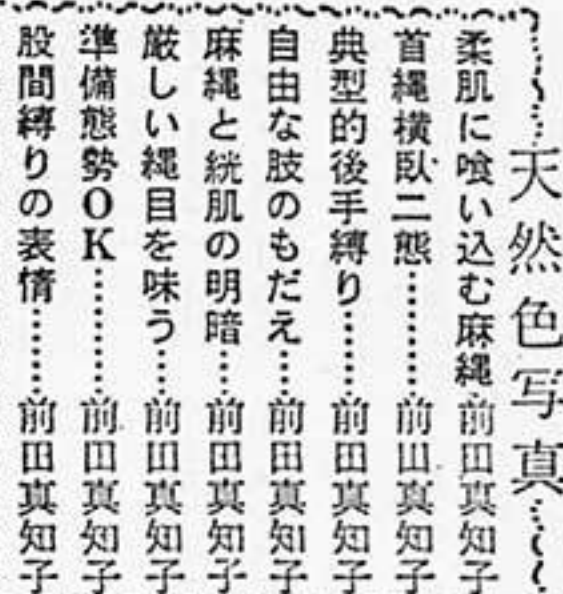
○

貴誌を愛読してから随分、長い年月が過ぎ去りましたが、今日まで実際の経験は全くなく、同好の女性にめぐり逢いたいと思っている中年の男性です。現在、秋田市に住んでおりますが、本来は盛岡市の住人です。三年との約束で出張勤務をしております。知らない土地で友人もなく、貴誌だけを唯一の友とする人間です。もちろん、妻子はありますが、妻は全くその気がなく、今はすでに妻に対しては全く、あきらめました。そこでお願いですが、秋田市近辺におられる方、または盛岡市に住んでおられるM性の若き女性と友人になつて頂ければ幸いです。ペンをとりました。読者欄を見ても東北の人は少ないようなので一寸無理とは思いますが、なにとぞよろしく願いいたします。

(秋田市・東北生)

○ 御殿場市の沼田敦子さん。私は

カメラ・ハント楽我記……辻村隆
女体緊縛の醍醐味を語る……塚本鉄三



金髪碧眼の美女……	シラ・ケ	金髪碧眼の美女……	シラ・ケ
答打ちの態勢……	関谷富佐子	答打ちの態勢……	関谷富佐子
鞭撻の痛苦……	関谷富佐子	鞭撻の痛苦……	関谷富佐子
洗脚の序曲……	長井葉津子	洗脚の序曲……	長井葉津子
亀甲縛りの美態……	左近麻里子	亀甲縛りの美態……	左近麻里子
麻縄と白肌の対照……	中河恵子	麻縄と白肌の対照……	中河恵子
湯を浴びた柔肌……	左近麻里子	湯を浴びた柔肌……	左近麻里子
猿くつわに嗜く……	中河恵子	猿くつわに嗜く……	中河恵子
素縛裸身の露り……	中河恵子	素縛裸身の露り……	中河恵子
責め疲れの放心……	梨花悠紀子	責め疲れの放心……	梨花悠紀子
没我の心境……	中河恵子	没我の心境……	中河恵子
痛打の末の悦虚……	関谷富佐子	痛打の末の悦虚……	関谷富佐子
沖縄美人の緊縛……	座間明子	沖縄美人の緊縛……	座間明子
剣玉子の縛り……	佐々木真弓	剣玉子の縛り……	佐々木真弓
狂交する裸女……	川路叢子	狂交する裸女……	川路叢子
責めくたびれて……	佐々木真弓	責めくたびれて……	佐々木真弓
紅毛碧眼の白人を責める……	シラ・ケ	紅毛碧眼の白人を責める……	シラ・ケ
海老責の狂態……	川路叢子	海老責の狂態……	川路叢子
ポリウムに挑戦……	座間明子	ポリウムに挑戦……	座間明子
鞭打の下に……	関谷富佐子	鞭打の下に……	関谷富佐子
祭壇の人身御供……	渡部好美	祭壇の人身御供……	渡部好美
稚妻は縄を知りぬ……	金原加奈子	稚妻は縄を知りぬ……	金原加奈子
開股の正面と背面……	中河恵子	開股の正面と背面……	中河恵子
華麗な開股責め……	中河恵子	華麗な開股責め……	中河恵子
イルリガートルを前に……	長井葉津子	イルリガートルを前に……	長井葉津子
非情な責めの終末……	長井葉津子	非情な責めの終末……	長井葉津子
両手吊りの晒し……	中河恵子	両手吊りの晒し……	中河恵子
柱縛りの完了……	川路叢子	柱縛りの完了……	川路叢子
処女縛にとまどう……	三浦純子	処女縛にとまどう……	三浦純子
麻縄に身をゆだね……	中河恵子	麻縄に身をゆだね……	中河恵子
盗視するSMの目……	佐々木真弓	盗視するSMの目……	佐々木真弓

両手挙げ棒實め……川路 叢子	柱を挟んだ通符……波部 恵子	花と蛇の静子です……中河 恵子	針責めをして頂戴……波部 好美	二つ折りの女体……長井 葉津子	猿ぐつわの哀飲……中河 恵子	日本式縛りの白人……シラ・ケイ	マソの女王に答……関谷 富佐子	柱しばりに恥らう……金原 奈加子	夫婦プレイの慈味……波部 好美	長襦袢の艶姿……花坂 道子	豊満ポインを誇る……愛川 悦子	美女今縛られる……梨花 悠紀子	受入態勢充分……関谷 富佐子	折檻にも汚れず……前田 真知子	海老責への展開……佐々木 真弓	責めてみたい碧眼の女……シラ・ケイ	日本式高小手縛……シラ・ケイ	猫の目のような女……絹川 文代	足吊りのある風景……中河 恵子	亀甲縛り媚態……中河 恵子	M女二輪の花……波部 恵子	苛責に乱れた黒髪……中河 恵子	開股縛りの幻想……前田 真知子	鏡の前での放恣……前田 真知子	愉悅のひととき……川路 叢子	ハリツケ晒し……左近 麻里子			
これから、どうするの？	美しき吊り……前田 真知子	苦痛が悦楽か……関谷 富佐子	一筋の縄の魔術……中河 恵子	逆エビ縛りに入る……波部 好美	受難の責め……前田 真知子	黒縄と白肌……中河 恵子	身動きできぬ境地……関谷 富佐子	浮上りした女体……中河 恵子	麗しき背面……中河 恵子	汚辱の縄……金原 奈加子	高小手本縛り……佐々木 真弓	實めの陶酔境……川路 叢子	失神したマソ女……関谷 富佐子	前手縛り悶悦……関谷 富佐子	柱の彼方の天国……中河 恵子	荒縄の海老責……三浦 純子	美と縛の女神……前田 真知子	はずれた猿轡……梨花 悠紀子	可憐な置物……長井 葉津子	ながし目の天使……佐々木 真弓	酒の肴になる……川路 叢子	妖蛇の洗礼……関谷 富佐子	奔弄されるまに……前田 真知子	海老縛りの妙味……川路 叢子	柱につながれた女……長井 葉津子	痛さをこらえる異国……シラ・ケイ	責の果の諦観……前田 真知子	痛打の一瞬……関谷 富佐子	ホステス裸人生……佐々木 真弓

つもりです。写真の技術もあります。私の撮影したフォトが奇ク誌上に載ることにでもなれば、どんなに素晴らしいことか……。

○（焼津市・浣腸マン）

先日、徳島市内の、ある古書店にて本誌購入の折、その店主よ

り本誌について「男性読者が多いのは、もちろん、女性読者だって割合、おりますよ」との話を聞き、ペンをとる気になった次第です。私は徳島在住の自称、好青年？年令二十三才で、ちっぽけですが町工場をやっており、以前より、自分を奪われた女性に強く心がひかれ、その羞恥心を責めさいなみたいと思いつけている者です。浣腸にも興味があります。ほとんど先輩読者が、そうであったように、私も随分と自分のS的性向に苦しみられ、悩んだものです。自分で自分を日陰者、社会の異端者、変質者などと思ひ込み、ノイローゼのような状態に陥ったこともありました。しかし今は、こんな自分だけでも、私を必要としている女性だって、少なからず、いるはずである、と信じています。そしてこれからの自分や、人生を明かすものにしたいのです。徳島、香川、その他、近県の隠れたるM女性のお便りをお待ちしています。

(徳島・四国三郎)

葛城昌子様。私は貴女と同じ大阪府の住人で、今年二十五才になる男です。上背は百八センチほどあり、大柄な貴女が高目のハイ

ヒールを履かれても、十分に釣り合いのとれる体格をしています。実を申し上げますと、二月号の貴女のお便りを拝読して、すぐにでも、お便りを差し上げようと思ったのですが何となく気遅れして、なかなか決心がつかなかったのです。ところが三月号が発売されて、読者通信欄を胸を締めつけられるような気持ちで見たところ、幸いにも貴女宛の便りがなく（編集の都合で遅れたり、締め切りに間に合わなかったのかも知れませんが）意を決して勇躍、このお便りを差し上げる次第です。私は自分ではノーマルな男だと自負しています。しかし、S的要素を多分に持っているのも、わかっています。特に羞恥責めに非常に興味を抱いていて実際に少し経験があります。私は、人間は誰でもS、またはM的な要素を持っていると信じています。しかし、プレイの相手に、跡の残るような傷をつけたり、生死の境まで責めるといった、いわゆるアブノーマルな暴力的行為をやらない、といった常識的な線までなら、楽しみのために大変、よいことだと思うのです。私は貴女を優しく力強く縛り上げ、責めてみたいのです。そして、貴女の中

にあるM性に光を当て、可愛い女に飼育してやりたいと考えています。お互いに、もう立派な大人です。お互いに、もう立派な大人です。すから、プライバシーを尊重し合う、おつき合いをするのは言うまでもありません。もしかして、これと同時に、また続いて多数のS的男性が貴女のプレイメイトの名乗りをあげるかとも思いますが、私の名前を、ぜひ貴女のプレイメイトにリストアップして下さるよう、お願いいたします。

（大阪府・杉本弘）

三月号の加藤明美さんの文中に出てくるような「表が黒で、裏が赤」の総ゴム合羽は、業者の言葉で「手貼り合羽」と言います。これと同材の前掛けが、今でも魚屋などで使われていますが、青や白のビニール前掛けと比較して、しわを生じないこと、汚れないこと濡れて美しいことなどの点で、ビニールの比ではありません。昔の登山の本で、ゴム合羽は重いので携帯に不便だが、風雨の時に裾が安定して具合が良いと書いてあったのを読んだ記憶があります。この頃、ゴム長靴が昔と違って、本ことに、お気づきでしょうか。本来のゴム長靴は、今のよう紳士

用でなくて、作業用として細々と生きています。それは表面に光沢がなく、手貼りの線が見え、内面もゴム貼りになっています。内部が濡れたら拭けば良く、汚れが完全にとれるので衛生的です。けれども見栄が悪くて高価なので、売りにくいばかりに、一般には見かけなくなりました。私は紳士用を履く気がしないので、作業用を探し歩き、東京都北区で二店、見つけました。一つは志茂五丁目一番地、小林雨衣店、一つは王子の飛鳥山公園前の生沢洋服店です。両店とも、合羽のことを、くわしく話してくれました。ゴムが値上がりしそうなので、今のうちに購入しようと思っています。

（東京都杉並区・岩手信夫）

塚本鉄三氏の「カメラとペンのポルターージュ」を毎月、楽しみにしています。再登場のモデルのときもありますが、それもまた、いいものですし、次々と新しいモデルの登場は楽しみであり、期待しています。カメラアングルと文章は、自分もその責めと撮影現場にいるような気持ちにさせ、本当に素晴らしいと思います。「前田真知子さんを讃える」という、ぼくの

感想を昨年の本誌に掲載して頂きましたが、十五年以上、愛読して初めて投稿させて頂いたほど素晴らしいモデルだと思います。それに続いて最近では玉木章子さん、西条紀代さんと、それぞれ違った味を持ったモデルさんの登場は一層、ぼくを、塚本氏のファンにしてみました。玉木章子さんは、Mのモデルとしては、すでに飼育された人ですが、誌上に登場したとき新鮮さを感じさせました。塚本氏のルポとグラビアで玉木章子さんの写真を見て、直ぐに分譲写真を注文したくらいです。西条紀代さんは、塚本氏もタイトルに書いておられるように、顔は美人とは思いませんが、ぼくが魅かれたのは稚さを感じさせる乳房でした。文中で塚本氏が言う「おられるように、十九才という年の割に未熟な乳房だと思えますが、何ともいえない色気がただよっているように感じさせられました。処女の検身というところで、素直にそれを受け持っている西条紀代さんのいじらしさ。「本当に紀代はバージンなんだナ」と言われた塚本氏の言葉とともに、西条紀代さんは初めての責めで早くもMに目覚めたのかと思われた。彼女の分譲写真は、

次号(六月号)は四月二十五日に発売いたします

まだ発売されていないようですが彼女の稚さを感じさせる体を鮮明に焼きつけられた写真を早く見たいものだど期待しています。

(長崎市・小池明男)

三月号を開いて私は軽いショックを感じた。かつ、大いなる落胆を感じた。いうまでもなくSM

カメラハントおよび楽我記の作者辻村隆氏の引退である。この場合引退という表現は、あるいは妥当でないかもしれない。何故ならば氏は、その最終回の弁の末尾に、今後はリラックスして、ハント記事やエッセイを随時、発表していくつもり……と述べておられるからである。しかし、とにかく約九年間も奇クのパカ一的存在であり私を含めた多くの読者を魅了し切ったSMカメラハントの閉幕であることは事実であり、否定できない。惜しい、全く惜しいの一語につきると思う。いつかこの欄にも半永久的に、それこそ奇クの存する限り、ハントを続けて欲しい旨の投書を私は書いたことがあるが健康上の理由とあらば、われわれ

辻村ファンも了承せねばならないと、やっと諦めの結論に達した心境である。私はここに改めて奇クの象徴的存在だったともいえる名ルポライターにして、名作家、そして名随筆家にして、名カメラマンである辻村隆氏に、大いなる讃辞と惜別の拍手を送りたい。

(宮城県・K生)

東京荒川の中村恵美子様にお呼びかけします。昨年十月号読者通信を拝見して、すぐ手紙を書いたのですが、この欄でお呼びかけした女性で返事があった例がなく、ついそのままだになっていました。

しかし恵美子様は、小田原氏の呼びかけに対して、二月号でちゃんと答えられており、その誠意に惚れ、ここにお手紙した次第です。最近、女性の投書も多く目につくようになり、その点で大へん喜ばしいのですが、呼びかけに対して極めて慎重で、何の反応もないのが多いようです。この種の交際は相手方が全く未知であり、したがって女性は、どうしても慎重にならざるをえないかもしれません。

私も恵美子さんと、今すぐでもお会いして、色々とお話をお聞かせ載きたいのですが、現状では誌上を通じてお話するしか、すべがありませんが、よろしくお願いいたします。私は恵美子さんより十三才も歳上ですが、プレイの経験は多少あります。羞恥責めを中心としたVA責め、および尿道責めが好きです。もちろん、写真もやりますので、もし許されるなら恵美子さんの責め写真を奇ク誌上に発表したいと夢見ております。まだ一度もお逢いしていない方に勝手な事ばかり書き、ご無礼の段、お許し下さい。なお、私の作品が奇ク十二月号二四〇頁に載っていますので参考までに、ご笑覧下さい。

(相模原市・喜怒写楽)

告白体験記等もふえ、また写真の増加など愛読者として嬉しい限りです。それに読者通信欄にも女性がふえて来た事、とても勇気のいる事とは言え、奇クならではと思えます。小生もSMプレイの経験が一、二度、ありましたが、今、考えても、ひどく興奮致します。温泉地勤務でフロントを担当している小生の素願を知っている人はおりません。毎日違ったお客様と

にこやかに接している表情からはまさか小生がSMなどに関心を持っているなど想像もしないでしょう。小生のSMは、相当に広く浅くと言った風で、何一つ、徹し切れません。勿論、比較的、求め易いものは、女性が想像しただけで顔の赤くなるような姿態での羞恥責めや、ロープ、紐などによる緊縛、小道具による愛虐などです。それに浣腸とかアヌス等にも多大の関心を持っております。劣等感の固まり、劣等感の裏返しとも思える小生の性向は、女性をSM的に恥かしめ跪かせて、奉仕させるような点にあります。いわば、有無を言わせぬ征服欲とでも言いましょうか。絶対的な主導権を握って、相手(女性)を、思うがままにしたいという欲望に近い訳です。昔風の略奪婚のように、好きなものは暴力的(SM的)にでも奪いたいというような……。それが小生の根源にあるような気がします。本性は本性として置き、現在ではSMプレイがしたく思っております。プレイともなれば、相手の気持を尊重する事も大切です、己の本性をオブラートで包まなくてはなりません。その点、小生は小生の理性を信じております。楽し

編集後記

☆本号では、連載中の『M派交友録』／鬼山
絢策／のほかに、『亜矢様をめぐる不思議な
夜』／沢井和雄／、『悦鈴記』／梅越泰三／
『マゾプレイの妄想と現実』／丸目忠／の三
篇を本文中に収載、M男性に気を吐いて頂く
ことが出来ました。この内、沢井氏の『亜矢
様……』は百八十枚を越す力作で、三号に亘
って『沢井マゾ』を語ってもらうことになり
まして、ここ暫く低調気味であったことは否
めないM畑に、花が咲いた感じですよ。
☆少なからざるM愛好者のご要望と共に、投
稿もかなり戴いていきますので、掲載を前提と
して拝見しているのですが、どういう訳か、
体験か願望か、告白か創作か、はたまた単な

る呼びかけか……？と首をひねられるもの
が多く、べつに形式に拘われる必要はない
とは思いますが、全読者にご紹介するた
めの活字化には、つい二の足を踏んでしま
うというものが、正直なところなのです。
☆先日、M標示の整理棚をひっかき回して
いる時、校正のE嬢曰く「女のSがMで、M
がSってヘンだわ。こんなのまで未だに男性
中心なのね……」と。その由来はともかく、
若い彼女にはどうも「男を基点にしている」
と受けとれるらしいのです。この愛くるしく
大人しいコが……と、その顔を見直したら、
ペロッと可愛い舌が出ました。この現代娘が
果たしてSかMかは知りませんが、その言に
は、一理あるような気がします。ともあれ、
一貫したM者の主張をお待ちすることや切。

懸賞原稿募集

体験、告白、手記

読者の皆さまが自分で親し
く体験されたことや、かくさ
れた性癖や性向について語っ
てみたいと思われたこと、或
はこれだけ、どうしても書
き残しておきたいと考えられ
た事を大胆にお寄せ下さい。
採用しました原稿には三千円
以上の賞金を贈呈します。

創作、小説、物語

本誌の編集内容に適した特
異な素材を駆使した力作をお
待ちします。すべて自作の未

発表作品に限ります。これは
と思う作品は必ず誌上に取り
上げます。腕試しの意味で奮
って御投稿願います。採用篇
には賞金十万円迄贈呈。
△感想、論評、批判
本誌に関連したものでした
ら話題の内容は問いません。
忌弾なき皆さまの御意見を
待ちします。採用篇には二
千円以上の賞金を贈呈します。

△(映画、雑誌)通信
映画、雑誌、演劇、新聞、
単行本或はその他見聞などで
特に興味をお持ちになった事
項の通信をお待ちします。出

処は詳しく明記願います。採
用篇には本誌三月分以上又は
二千元以上の賞金贈呈。
◎御送付下さいました原稿は
原則として返却の求めに応じ
ないことになっております。故
悪しからず御諒承願います。
◎本文記事中に各種の「懸賞
原稿募集」を致してあります
故、御応募の方は項目を御明
記の上御送稿下さい。

読者通信原稿

巻末の通信欄は読者の皆さ
ま方のための公共の広場とし
て開放してあります。御遠慮な
くお寄せ下さい。

☆本誌御購読の榮☆

予約に限り

一月分(1冊)四〇〇円／送32円
三月分(3冊)一二〇〇円／送共
半年分(6冊)二四〇〇円／送共

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書
店にて一斉に発売いたしますが、御予約下され
ば、方は直接代金御送付の上、御予約下され
る方は毎月二十日前後、印刷完成と同時に局
重包装して確実に発送申し上げます。局留
の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 四〇〇円

五月号

(第二十七巻第五号)

昭和四十八年四月二十日 印刷
昭和四十八年五月一日 発行

編集人 杉原 虹児
発行人 吉田 俊夫
印刷人 北村 俊夫

郵便番号558 大阪市住吉郵便局私書函第四十一号
発行所 暁出版株式会社
△振替口座大阪四二七八三番
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
(昭和四十二年四月二二日)
国鉄大局特別扱承認雑誌第二一〇号

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビア写真の検討、挿絵
の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の
健全なる育成に努める各条に指定されて
います。本誌は充分に注意して編集いたし
ますが、本誌は成人向けとして発行を企
図しております。十八才未満の方には絶対
売下されません。十八才未満の方には絶対
い申し上げます。